KAIZO

改造

七月號

1926

Langerin

糖尿病内服治療劑
ランゲリンに就て

糖尿病に對しては從來的確なる藥劑なく、その療法としては單に食餌中より糖分を減ずるか又は全然これを除くの外なかりき。

糖分なき食餌は言ふまでもなく苦痛にして、身體構成の重要成分にして精力の源泉たるこの物質の缺乏は延ひて肉體的并びに精神的障害の續出を免るゝ能はざりき。

五年以前加奈陀の**バンチング**氏により**インシユリン**の發見せられたることは糖尿病の療法に對し大なる福音を與へ、醫學界に於ける聲價は梅毒に對する**サルバルサン**發見の當時にも劣らざるものありき。

されどこの天來の福音たる**インシユリン**は内服するも全く無効にして毎日一乃至三回づゝ一定時刻に注射しこれを久しく繼續するの要あるを遺憾とせり。

然るに過般獨逸のフオルネツト博士はこの藥物に一種の抗トリプシン性物質を加へて與ふる時は内服するも良く奏効することを看出せり。

これ乃ち**ランゲリン**にしてその効果は世界各地二百數十の臨床家諸氏により確認せられ特に輕症及中等症に對しては用法簡便にして安全、糖尿病療法の一大進歩なりと報告されたり。

詳細は『糖尿病の**ランゲリン**療法に就て』と題する小册子にあり總代理店宛御申越次第送呈す

其一丸は尿中の糖約四瓦を補償す

三〇丸入……四圓五十錢
一〇〇丸入……十二圓五十錢

著名藥店にあり

獨逸 ザールブルッケン微生物研究所

日本總代理店　東京日本橋區本町　株式會社 田邊元三郎商店

L 29



越
御中元大賣出し
御贈答用には三越の品
御中元の御贈答品は何方様にも喜ばれる三越の品を御用ひ遊ばすに限ります。三越では御選擇の御便宜の爲め『中元賣出し』を開催致します。何卒御用命の程御願ひ申上ます
三越の商品券は贈るに御便利、受けて御重寶で御座います。商品券は本店初め各分店で販賣致して居ります
七月の贈物としては格安反物賣出し、中形浴衣地陳列、團扇扇子陳列等、其の流行品と實用品を澤山に取揃へます
三越吳服店
東京市駿河町
三越新宿分店……新宿驛前
三越青山分店……青山學院前

Langerin

糖尿病内服治療劑
ランゲリンに就て

糖尿病に對しては從來的確なる藥劑なく、その療法としては單に食餌中より糖分を減ずるか又は全然これを除くの外なかりき。

糖分なき食餌は言ふまでもなく苦痛にして、身體構成の重要成分にして精力の源泉たるこの物質の缺乏は延ひて肉體的幷びに精神的障害の續出を免るゝ能はざりき。

五年以前加奈陀の**バンチング**氏により**インシユリン**の發見せられたることは糖尿病の療法に對し大なる福音を與へ、醫學界に於ける聲價は梅毒に對する**サルバルサン**發見の當時にも劣らざるものありき。

されどこの天來の福音たる**インシユリン**は内服するも全く無効にして毎日一乃至三回づゝ一定時刻に注射しこれを久しく繼續するの要あるを遺憾とせり。

然るに過般獨逸のフオルネツト博士はこの藥物に一種の抗トリプシン性物質を加へて與ふる時は内服するも良く奏効することを看出せり。

これ乃ち**ランゲリン**にしてその効果は世界各地二百數十の臨床家諸氏により確認せられ特に輕症及中等症に對しては用法簡便にして安全、糖尿病療法の一大進歩なりと報告されたり。

詳細は『糖尿病の**ランゲリン**療法に就て』と題する小册子にあり總代理店宛御申越次第送呈す

其一丸は尿中の糖約四瓦を補償す

三〇丸入……四圓五十錢
一〇〇丸入……十二圓五十錢
著名藥店にあり

獨逸 ザールブルッケン微生物研究所

日本總代理店 東京日本橋區本町 株式會社 田邊元三郎商店

L 29

KAIZO

改造

七月號

1926

御中元大賣出し

……御贈答用には三越の品……

御中元の御贈答品は何方様にも喜ばれる三越の品を御用ひ遊ばすに限ります。三越では御選擇の御便宜の爲め『中元賣出し』を開催致します。何卒御用命の程御願ひ申上ます

三越の商品券は贈答に御便利、受けて御重寶で御座います。商品券は本店初め各分店で販賣致して居ります

七月の贈物としては格安反物賣出し、中形浴衣地陳列、團扇扇子陳列等、其の流行品と實用品を澤山に取揃へます

三越呉服店

◆東京市駿河町◆

三越新宿分店……新宿驛前

三越青山分店……青山學院前

Langerin

糖尿病内服治療劑
ランゲリンに就て

糖尿病に對しては從來的確なる藥劑なく、その療法としては單に食餌中より糖分を減ずるか又は全然これを除くの外なかりき。

糖分なき食餌は言ふまでもなく苦痛にして、身體構成の重要成分にして精力の源泉たるこの物質の缺乏は延ひて肉體的幷びに精神的障害の續出を免るゝ能はざりき。

五年以前加奈陀の**バンチング**氏により**インシユリン**の發見せられたることは糖尿病の療法に對し大なる福音を與へ、醫學界に於ける聲價は梅毒に對する**サルバルサン**發見の當時にも劣らざるものありき。

されどこの天來の福音たる**インシユリン**は内服するも全く無効にして毎日一乃至三回づゝ一定時刻に注射しこれを久しく繼續するの要あるを遺憾とせり。

然るに過般獨逸の**フォルネット**博士はこの藥物に一種の抗トリプシン性物質を加へて與ふる時は内服するも良く奏効することを看出せり。

これ乃ち**ランゲリン**にしてその効果は世界各地二百數十の臨床家諸氏により確認せられ特に輕症及中等症に對しては用法簡便にして安全、糖尿病療法の一大進歩なりと報告されたり。

詳細は『糖尿病の**ランゲリン**療法に就て』と題する小册子にあり總代理店宛御申越次第送呈す

其一丸は膵中の島約四瓦を補償す

三〇丸入……四圓五十錢
一〇〇丸入……十二圓五十錢
著名藥店にあり

獨逸 ザールブルッケン微生物研究所

日本總代理店 東京日本橋區本町 株式會社 田邊元三郎商店

I. 29

福本和夫著

經濟學批判の方法論

菊判箱入五百頁
布表紙背皮頗美裝

■定價金參圓八拾錢（送料金廿七錢）

嘗ては正統派經濟學が眞實の科學的經濟學であつた如く、今やマルクス主義經濟學が唯一の科學的經濟學である事は、日々の事實と對照して證明されつゝある。然し何故マルクス主義經濟學は今日の唯一の科學的經濟學であるか、それは批判的、辯證法的、無產者的であるからである。然して批判的、辯證法的、無產者的とは何であるか、これこそ更に深き研究を要する問題であらねばならぬ。本書は此の問題、即ちマルクス主義經濟學の方法論を取扱ひ、或は其の構成を理論的に分析し、或は其の發展を歷史的に展開し、或は近時の我が小ブルヂョア的經濟學の方法を駁擊し、以てマルクス主義經濟學の根本立脚地を闡明したものであつて、正に資本論研究に於ける世界的一大收獲である。少壯學徒の再讀參論を望む。

ローザ・ルクセンブルグ著　橫田千元譯

資本蓄積論（第一卷）

定價二圓三十錢　送料金廿一錢

エム・ベーア著　西雅雄譯

社會主義史

定價七圓五十錢　送料金卅三錢

京市神田美土代町二丁目一番地

白揚社

振替東京二五四〇〇番

岸田國士著

言葉・言葉・言葉

價壹圓八十錢
送料金二十錢

最新刊

近代的感覺とラテン流のユウモアスと、之れに加ふるに纖細微妙な筆致を以て、新鋭文壇に耀ける著者が、過去數年間に物されたる隨感隨錄二十八篇を蒐めたものである。旅の憂欝では、あの頃あの聲の追憶に耽り、言はでものこと丶言ひながら、藝術論に言葉言葉言葉を重ね、或は幕間に演劇を論じ、或は生活を語り、廣汎多岐に亘つてゐるが、全篇悉く珠玉の如く滑かにそして華かである。新人の若々しさ、鮮かさに充ち充ちてゐる。

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二　改造社

福本和夫著

經濟學批判の方法論

菊判箱入五百頁
布表紙背皮頗美裝

■定價金參圓八拾錢（送料金廿七錢）

嘗ては正統派經濟學が眞實の科學的經濟學であつた如く、今やマルクス主義經濟學が唯一の科學的經濟學である事は、日々の事實と對照して證明されつゝある。然し何故マルクス主義經濟學は今日の唯一の科學的經濟學であるか、それは批判的、辯證法的、無產者的であるからである。然して批判的、辯證法的、無產者的とは何であるか、これこそ更に深き研究を要する問題であらねばならぬ。本書は此の問題、即ちマルクス主義經濟學の方法論を取扱ひ、或は其の構成を理論的に分析し、或は其の發展を歷史的に展開し、或は近時の我が小ブルヂョア的經濟學の方法を駁擊し、以てマルクス主義經濟學の根本立脚地を闡明したものであつて、正に資本論研究に於ける世界的一大收獲である。少壯學徒の再讀參論を望む。

ローザ・ルクセンブルグ著
横田千元譯
資本蓄積論（第一卷）
定價二圓三十錢
送料金廿一錢

エム・ベーア著
西雅雄譯
社會主義史
定價七圓五十錢
送料金卅三錢

東京市神田美土代町二丁目一番地
白揚社
振替東京二五四〇〇番

岸田國士著

言葉・言葉・言葉

價壹圓八十錢
送料金二十錢

最新刊

近代的感覺とラテン流のユウモアスと、之れに加ふるに纖細微妙な筆致を以て、新銳文壇に耀ける著者が、過去數年間に物されたる隨感隨錄二十八篇を蒐めたものである。旅の憂鬱では、あの頃あの聲の追憶に耽り、言はでものこと、言ひながら、藝術論に言葉言葉を重ね、或は幕間に演劇を論じ、或は生活を語り、廣汎多岐に亙つてゐるが、全篇悉く珠玉の如く滑かにそして華かである。新人の若々しさ、鮮かさに充ち充ちておる。

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二　改造社



藤森成吉著

惱み笑ふ

定價一圓三十錢
郵送料十六錢

忽五版

惱みは暗く笑ひは明るい。藤森氏の此の作品集は實に明暗の接面、其處に綾なすユウモアの空氣色（エリアルチント）である。視點の角度によつて爆發の哄笑ともなり傷ましい生の惱みともなる。著者は曰ふ「現實の人生はあまりに不合理と悲哀を含む。笑ひでもするほか一日も過されないが、その笑ひは苦痛を母胎とする。惱みの影を伴はぬには世は矛盾に滿ちすぎてゐる。」と、讀め！老幼男女、惱める者、笑を欲する者、本書は吾人生くる日の淨化作用、寔に尊い藝術である。

藤森成吉著

東京へ

定價二圓三十錢
送料二十錢

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社



菊池寛著

文藝當座帳

定價金壹圓五十錢
送料金二十錢

本書は、番町に虎嘯して文壇を席捲しつゝある菊池氏が、廣き讀書と、多くの勞作のあひまく〳〵に物された隨感隨錄を聚められたもので、讀史餘錄あり、演劇論あり、人物月旦あり、文藝批評あり、著作權論あり、將棋の話あり、その多趣多面的なること、眞に應接に遑なからしむ。玆には藝術を通じては見られない氏の眞面目が、裸形の儘、その本然の姿に於てよく窺はれ、一讀卷を掩ふことが出來ない。

新刊

菊池寛著 第二の接吻（四十六版）
定價貳圓 送料二十錢

菊池寛著 啓吉物語（十三版）
定價貳圓 送料廿二錢

菊池寛著 戀愛病患者（十四版）
定價壹圓五十錢 送料十八錢

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二 改造社

佐藤春夫著

窓展く

定價金貳圓
送料金貳拾錢

佐藤氏の藝術には初戀のやうな明るさと平和と、そして雨日和のやうな憂欝とが多分に盛られてある。殊にその詩味豐かな文章は、氏の藝術境に遊ぶ者の隨喜措かざる所である。久しく單行本の形でその作を發表しなかつたが、今回名什のみを嚴選して玆に此の一書を得た。

（目次）賣笑婦マリ。窓展く。時計のいたずら。砧。哀れ。アダム・ルックスが遺書。霧社。秋立つ。FOU（おれはさう思ふ）（以上）

忽六版

佐藤春夫著 童話 ピノチオ （六版）
定價壹圓八拾錢
送料拾八錢

佐藤春夫著 佗しすぎる （五版）
定價壹圓六拾錢
送料拾八錢

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二 改造社



（七月號）

青年訓練につき

政本黨もから意久地なしであれば、水議會も案外無事であらう――との輿測が政界の玄人筋に可なり囁されてゐる。

もし現内閣が一年も、二年も持續したら――そして岡田氏が依然文相の地位を去らないならば――大學、高等學校學生等と思想的闘爭――といふよりも、頭本もつれにもつれつつある社會科學紛爭事件はどう成行くだろう、すべての學生が文相の意に反する場合、文相は高等學校以上のすべてを悉く閉鎖するだろうか――と云ふ豫想までさせる――軍閥の裡にある岡田氏、乃至は憲政會――は、普選の斷行、財政緊縮の成功によりて財閥と青年の間に相當の共鳴者を得、その支持によりて今日に至った。しかるに彼等現内閣員は過去に於ける苦節十年の痛ましい記憶もいつしか打忘れ、清浦の草履取りであった政本と通じ、特權階級としていつでも國民より指彈さるる研究會と野合し、首相は所謂綱紀肅正の手前をも打忘れ、日夜紅燈の影に出沒して好きな二すぢ道とかにいそしみたまふ狀態である。

それはそれとして、殊に我々が遺憾にたへないのは七月一日より實施さるる青年訓練の一事にある。十六歳から二十歳までの働きざかりの彼等を、國家產業の中堅勢力たる彼等青年者を半ば強制して一年數百時間をムダにつぶすことが――それが軍閥、閥府、上院の年寄等――即ち背後の支持者に對する迎合策でないと誰が云へやう。殊にその名は青年訓練といふも、事實軍事教練なるに於ておや、彼等青年者は徵兵に對する或るささやかなる特典のために、すべての產業を拋擲せねばならぬ苦しい立場にある。貧しき一家の柱石であってそれがためにどうにも動きのとれぬやうになろうと思はれるものさへ數多い。我々は現内閣の行政するところ、財政するところのかずかずが、すべて我々大衆の意思、利益と正反對のものが多いのを悲しむ。特に本問題に於て然りである。この點を篤と熟慮し、本計畫が國家產業の興隆と全然並行できぬものであるがゆえに、その強制を一日も早く撤去することを要望する。我々はこの問題が普選通過のある代償のごとく噂され、もしくは背後に軍閥ありなぞ取沙汰さるることに限りない反感と疑惑とをおぼゆる。

ベルンシュタイン原著

慶應義塾大學教授 金原賢之助譯

マルクシズム批判

▼四六判六一六頁
▼クロース裝函入
▼定價參圓貳拾錢
▼送料内地書留貳拾七錢

新刊發賣

本書は獨逸社會民主黨の領袖にして修正派社會主義の首領エドアルト・ベルンシュタインの名著「社會主義の諸前提と社會民主黨の任務」の全譯である。原著はマルクシストの著作中最も價値あるものの一つであつて、此書の目的は社會主義說に殘存する空想的思考法を一掃し以て社會主義運動上に於ける現實主義的要素と理想主義的要素とを强調するに在る。ベルンシュタインの思想は本書に盡され、所謂修正派社會主義の綱領とも云ふべきものである。『修正主義者を作るものは信仰でなくて檢討である。』著者は眞に社會主義者であり乍ら、それ故に又マルクシズムに臨むに冷靜公平なる批評的態度を以てする處、即社會理論をして眞理に近づかしめる爲には絕えず再吟味再檢討を必要とすと云ふ態度を以てする處其處に本書の最も高い價値の存在する處であつて、其批判修正はマルクシズムの重要な命題の總てに加へられて居り、今日までの處マルクシズム批評中最も有力なものとされてゐる。譯文亦嚴正適確マルクシズムの眞相を知り之を正しく批判するの途は蓋し本書をおいて他に求むべくもない。

發兌 東京神田南神保町 岩波書店 振替東京二六二四〇番 電話九段四 五七・八一・七六・〇七番



(七月號)

青年訓練につき

政本黨もから意久地なしであれば、來議會も案外無事であらう――との論調が政界の玄人筋に可なり囁されておる。

もし現内閣が一年も、二年も持續したら――そして岡田氏が依然文相の地位を去らないならば――大學、高等學校學生等と思想的闘爭――といふよりも、頭本もつれにもつれつつある社會科學緊爭事件はどう成行くだらう、すべての學生が文相の意に反する場合、文相は高等學校以上のすべてを悉く閉鎖するだらうか――と云ふ豫想までさせる――軍閥の裡にある岡田氏、乃至は政友會――は、普選の斷行、財政緊縮の成功によりて財閥と青年の間に相當の共鳴者を得、その支持によりて今日に至つた。しかるに彼等現内閣員は過去に於ける苦節十年の痛ましい記憶もいつしか打忘れ、清浦の草履取りであつた政本と通じ、特權階級としていつでも國民より指彈さるる研究會と桁合し、首相は所謂綱紀粛正の手前をも打忘れ、日夜紅燈の影に出沒して好きな二すぢ道とかにいそしみたまふ狀態である。

それはそれとして殊に我々が遺憾にたへないのは七月一日より實施さるる青年訓練の一事にある。十六歳から二十歳までの働きざかりの彼等を、國家産業の中樞勢力たる彼等青年者を半ば强制して一年數百時間をムダにつぶすことが――それが軍閥、樞府、上院の年寄等――即ち背後の支持者に對する迎合策でないと誰が云へやう。殊にその名は青年訓練といふも、事實軍事教練なるに於ておや、彼等青年者は徴兵に對する或るささやかなる特典のためにすべての産業を拋擲せねばならぬ苦しい立場にある。貧しき一家の柱石であつてそれがためにどうにも動きのとれぬやうになろうと思はれるものさへ數多い。我々は現内閣の行政するところ、財政するところのかずかずが、すべて我々大衆の意思、利益と正反對のものが多いのを悲しむ。特に本問題に於て然りである。この點を篤と熟慮し、本計畫が國家産業の興隆と全然並行できぬものであるがゆえに、その强制を一日も早く撤去することを要望する。我々はこの問題が普選通過のある代償のごとく囁され、もしくは背後に軍閥ありなぞ取沙汰さるることに限りない反感と疑惑とをおぼゆる。

帝國主義の支配下に於ける社會科學研究の『自由』

大山郁夫

序論　問題討究の基點

一　資本の攻勢に對する無産階級理論上の認識

『資本の攻勢』——これはたしかに、最近の無産階級的社會評論の上での、一の流行語となつてゐるものである。

それはしかし、一の流行語だと言つても、それの使用者たちの各々の個人的素質の産物としての、氣分とか、感じとか、思ひ附きとか、といつたやうなものから出た單なる一片の主觀的表象の範疇に屬するものではない。さうした種類

の主觀的表象の無拘束的な使用は、末梢神經的遊戯なしには生きて行けないやうに見えるところの、小市民階級の或る特殊圏内の住民の精神生活に必要な——若しくはそれに相應した——頭腦の演習であるには相違ないが、しかし無産階級的社會評論は、少くともそれが嚴格に無産階級理論に立脚せしめられたるものである限り、さうしたものを、それの思惟過程のどの部分の構成要素ともする譯に行かないものだといふことは、自明の事柄である。

否！　眞の意味に於ける無産階級理論は、現實の社會生活上の現實的諸事象の客觀的認識から出發する。若しくは今少し精細に言ふならば、それは、現實の社會生活の全面をそれら自身の活躍舞臺として多種多樣の關係に於て生動(abspielen)するところの、そしてそれら自身ふたたび社會生活の全面的動きの中に包攝され綜合されて行くところの、現實の諸事象の客觀的認識を以て、それの基礎的立場とする。それはそれ故に、個々の部分的諸事象をそれの觀察の對象とする場合でも、それらを社會生活の全面的動きとの聯繫に於て把握することを忘れないのである。

註。——社會生活の全面的動きを觀察の出發點として、個々の部分的諸事象をも、それとの聯繫に於て把握する、といふ一點に於て、そして唯この一點に於てのみ、無産階級理論は、純粹の形で提示される本來の支配階級理論と、その揆を一にする。尤も支配階級の社會理論は、最も多くの場合に於て、多少の程度に變裝され粉飾されて提示されるのが普通であつて、滅多にその本來の赤裸々の姿で押し出されることがないから、その關係が常に一般世人の注視から蔽ひ隱されがちである。けれども、精細なる科學的檢討は、それの眞相を摘發することを困難としない。殊に、主權絶對説などの下に社會と國家とを同一視することから出發する一元的國家論、及びそれに基礎づけられた各種の法律上、政治上、及び社會上の諸學説などの上には、それの最も代表的な見本が比較的明確に示されてゐる。が、小市民階級的社會理論はこれに反して、全社會生活のこの一面とか、あの一面とか、といつた風

に、それ自身の視野を局所的に限つて、そこに夢のやうな童話的安易を求めようとするのを常とする。かうした關係は、全體的に現狀肯定の上に立ちながら、部分的に現狀否定を強調するやうな、各種の小市民階級的改革運動の基底におかれてあるところの各種の社會理論の上に於て、いくらでもその實例が示されてある。

然し、無產階級理論と支配階級理論とは、ただ社會生活の全面的動きに着眼するといふ一點の上に於て一致してゐるだけであつて、それ以外のすべての點に於ては、無論、兩者は全然反對の側に立つてゐるばかりでなく、社會生活の全面的動きといふ一點に向つて、正反對の兩側から動き掛けてゐるのである。そこに社會生活の全面を舞臺としての兩者の正面衝突の運命を不可避的にする素因が準備されてある。かくして、理論鬪爭は、必然的に階級鬪爭の一つのモメントとなるのである。

『資本の攻勢』といふのは、右に述べたやうな無產階級理論の認識方法によつて、現實的に把握された現實の一社會事象である。それはその根本に於て、資本階級の指令の下に動く各種各樣の公私の機關を通じて、無產階級運動及び無產階級運動に多少とも關係あるあらゆる運動、乃至學術、思想的活動などに向つて投げ掛けられる一切の積極的及び消極的防遏手段の働きを綜合的に呼んだものである。この意味に於ける資本の攻勢は、まづ第一に、最も直接にそれの矢面に立つて來たことによつて、最も多くそれの壓力を感じさせられて來た無產階級の年來の經驗から歸納的に確認されたものであるが、殊に最近に來るに從つて、それは一方に於て益々激甚化して來たと同時に、他方に於て益々巧妙に陰險に行はれるやうにもなつて來た觀があるものである。たとへば最近になればなるほど、各處に起る勞働及び小作爭議が、官憲や暴力團から來る壓迫若しくは威嚇の下に、層一層と深刻に血戰的外觀を呈するやうになつて來たこととか、或ひはまた、各種の社會運動及び無產階級的言論集會などの上に言語に絕するほどの嚴酷を極めた當局の壓迫が益々激しく

加へられるやうになつて來たこととかなどは、資本の攻勢の激甚化の徴證としてのみ見られるべきものである。尙、それと同時に、無產階級運動に對するかうした正面的威脅の外に、尙ほ、誘惑、懷柔、買收、離間などの術策が黑幕の陰で手を替へ品を替へて行はれ、それらを通じて無產階級の陣營內の分裂と攪亂とが絕えず惹き起されがちになつた傾向が、現在に於ては勞働運動家たちによつて、より痛切に感じられだしたことも注意されるが、これなどはたしかに資本の攻勢の手が、時と共に益々巧妙且つ陰險になつて來たことを物語るものに外ならないのである。

しかしながら、無產階級運動の上に向けられる彈壓的活動の加重的傾向は、資本階級から來る攻勢の縱の深さの增進を物語るものであるが、しかし我々はまだそれ以外に、それが如何に橫に四方に向つて急速に擴がつて行きつつある攻勢を示してゐるかを注意しなければならない。私は既に或る他の場處で、我國の政界の現狀を觀察して、資本階級の攻勢が、如何に政治的に、經濟的に、社會的に、全線的に延長して行く傾向を示しつつあるかを、幾多の實例に依つて實證的に說述し（『中央公論』五月號所載『無產階級的政治運動上に於ける理論鬪爭の諸條件の形成過程』、『我等』五月號所載『我國の現政界とドイッチエ・イデオロギー』、『大衆』六月號所載『ブルジョア諸政黨側の政治的革新運動の諸相』等參照）しておいたから、茲では同じ問題を再論しないことにする。が、いづれにしても、現在に於て刻々無產階級生活の上に極度の强壓を加へつつある社會的諸事象が一齊に、資本の攻勢の深化及び普遍化の傾向を指さしてゐるものだといふことは、銳い觀察眼を具へた若干の無產階級理論家たちによつて既に充分に認識されてゐることである。そして尙この傾向が、資本主義の最近の——そして最高の、及び最後の——發達段階として、金融資本の支配を代表する帝國主義の世界的流れの上に不可分的に附隨して生じたものであることも、彼等によつて既に明瞭に把握されてゐることであつて、私自身もまた、上掲の諸論文中で、その點を解說しておいた。

に、それ自身の視野を局所的に限つて、そこに夢のやうな童話的安易を求めようとするのを常とする。かうした關係は、全體的に現狀肯定の上に立ちながら、部分的に現狀否定を強調するやうな、各種の小市民階級的改革運動の基底におかれてあるところの各種の社會理論の上に於て、いくらでもその實例が示されてある。

然し、無產階級理論と支配階級理論とは、ただ社會生活の全面的動きに着眼するといふ一點の上に於て一致してゐるだけであつて、それ以外のすべての點に於ては、無論、兩者は全然反對の側に立つてゐるばかりでなく、社會生活の全面的動きといふ一點に向つて、正反對の兩側から動き掛けてゐるのである。そこに社會生活の全面を舞臺としての兩者の正面衝突の運命を不可避的にする素因が準備されてある。かくして、理論鬪爭は、必然的に階級鬪爭の一つのモメントとなるのである。

「資本の攻勢」といふのは、右に述べたやうな無產階級理論の認識方法によつて、現實的に把握された現實の一社會事象である。それはその根本に於て、資本階級の指令の下に動く各種各樣の公私の機關を通じて、無產階級運動及び無產階級運動に多少とも關係あるあらゆる運動、乃至學術、思想的活動などに向つて投げ掛けられる一切の積極的及び消極的防遏手段の働きを綜合的に呼んだものである。この意味に於ける資本の攻勢は、まづ第一に、最も直接にその矢面に立つて來たことによつて、最も多くそれの壓力を感じさせられて來た無產階級の年來の經驗から歸納的に確認されたものであるが、殊に最近に來るに從つて、それは一方に於て益々激甚化して來たと同時に、他方に於て益々巧妙に陰險に行はれるやうにもなつて來た觀があるものである。たとへば最近になればなるほど、各處に起る勞働及び小作爭議が、官憲や暴力團から來る壓迫若しくは威嚇の下に、層一層と深刻に血戰的外觀を呈するやうになつて來たこととか、或ひはまた、各種の社會運動及び無產階級的言論集會などの上に言語に絕するほどの嚴酷を極めた當局の壓迫が益々激しく

加へられるやうになつて來たこととかなどは、資本の攻勢の激化の徵證としてのみ見られるべきものである。な、それと同時に、無產階級運動に對するかうした正面的威壓の外に尚ほ、誘惑、懷柔、買收、離間などの術策が黑幕の陰で手を替へ品を替へて行はれ、それらを通じて無產階級の陣營內の分裂と攪亂とが絕えず惹き起されがちになつた傾向が、現在に於ては勞働運動家たちによつて、より痛切に感じられだしたことも注意されるが、これなどはたしかに資本の攻勢の手が、時と共に益々巧妙且つ陰險になつて來たことを物語るものに外ならないのである。

しかしながら、無產階級運動の上に向けられる彈壓的活動の加重的傾向は、資本階級から來る攻勢の縱の深さの增進を物語るものであるが、しかし我々はまだそれ以外に、それが如何に橫に四方に向つて急速に擴がつて行きつつある趨勢を示してゐるかを注意しなければならない。私は既に或る他の場處で、我國の政界の現狀を觀察して、資本階級の攻勢が、如何に政治的に、經濟的に、社會的に、全線的に延長して行く傾向を示しつつあるかを、幾多の實例に依つて實證的に說述し(『中央公論』五月號所載『無產階級的政治運動上に於ける理論鬪爭の諸條件の形成過程』、『我等』五月號所載『我國の現政界とドイッチエ・イデオロギー』、『大衆』六月號所載『ブルジョア諸政黨側の政治的革新運動の諸相』等參照)しておいたから、茲では同じ問題を再論しないことにする。が、いづれにしても、現在に於て刻々無產階級生活の上に極度の强壓を加へつつある社會的諸事象が一齊に、資本の攻勢の深化及び普遍化の傾向を指さしてゐるものだといふことは、鋭い觀察眼を具へた若干の無產階級理論家たちによつて既に充分に認識されてゐることである。そして尚この傾向が、資本主義の最近の――そして最高の、及び最後の――發達段階として、金融資本の支配を代表する帝國主義の世界的流れの上に不可分的に附隨して生じたものであることも、彼等によつて既に明確に把握されてゐることであつて、私自身もまた、上揭の諸論文中で、その點を解說しておいた。

二　帝國主義の支配下に於ける教育

政黨者流や小市民階級的政論家たちは、彼等が昨春第五十議會で普選法が制定されたのを見て、そこに我國の政治の民衆化の新らたな出發點が劃されかのやう騷がしく囃やし立てて居た間に、我國の政治がいつしか躍進的に帝國主義的傾向に深入りしつつあつた事實を閑却しようとしてゐたやうに見える。或ひは彼等の間には、自らそれを閑却しようとして居ただけではなく、同時に世人の注意をもそれから外らさうとする意圖から、無闇矢鱈に普選の大皷をうち鳴らしてゐたものがあつたかも知れない。少くとも政黨者流に關しては、さういふことが何の無理もなしに想像し得られる。だが、始終平和主義への渇仰を標榜することを怠らない善意の小市民階級的政論家たちとなると、寧ろ普選の上にあらゆる政治上の希望を托した餘りに、帝國主義的傾向の崩壞さへもが、それから期待し得られるもの位に考へて居たのかも知れない。でなければ、普選に對する彼等の不思議なほどの盲目的禮讃の動機が理解できかねるのである。

けれども、普選そのもののうちに、さうした魔力の潜んでゐるものでないことを見拔くことは、決して困難な仕事ではない。といふのは單に、我國の新選擧法が表向き不當に普選法と呼ばれてゐながら、その實質は如何なる意味に於てもその名に値ひしないものだ、といふ點だけに關聯してゐるものではない。それもたしかにさうであるには相違ないが、しかし我々は、それよりももつと一般的な見地から、帝國主義は必ずしも民衆政治と兩立しないものでないといふことを、實證的に確說することができるのである。早い話が、現代の世界に於て帝國主義に沒入してゐる諸強國のうち、國內政治の分野に於て普選を實施してゐない國が何處にあらう！　それらの諸強國の傳統的政治機關の保管の任務を托せられてゐる政治家たちは、或る盲目的な力に依つてかのやうに運命的に彼等の手中に置かれてゐる帝國主義政策

を、幾分なりとも成功の見込みを以て導いて行くためには、彼等が必然的に民衆の支持の上に立たなければならないことを知つてゐる。曾て小ナポレオンが帝位への通路として庶民投票の潮の上に乘つた折りに、今日の帝國主義政治家たちもまた、彼等の目的達成の方向へ民衆政治の舵を向けてゆく技術を學んでゐる。そしてまた民衆は、若しくは少くとも漠然とした意味に於ける單なる『民衆』は、その政治的意識若しくはその政治的無意識に於て、決して本質的に帝國主義政策の反對者でないどころではなく、屢々風向次第では、容易にそれの無條件的謳歌者とならしめられることが出來るものである。といふことは、遠き上代のローマの凱旋將軍を熱狂的に歡迎した無數の市民の團塊を記憶に甦へらせるまでもなく、現代の世界の諸國民の間に絶えず起つて來る多くの生々しき實例に依つても、我々に明確に認知されるのである。しかもこの點に關しては、例の第二インターナショナルの歷史さへも、ショーヴィニズムへの脆き降服によつて汚されてゐることは、今日では周知の事實となつて來てゐるものである。

といつて、帝國主義は決して、現代世界に於て無敵の野を橫行してゐるジャイアントではない。今や、それの前途には、その勢力の測り知られない敵對者が、どこからか現はれて來てゐる。それは、無產階級——精確にいへば純然たる無產階級意識に眼ざめた大衆——そのものである。如何にも、この無產階級意識に眼ざめた大衆の實力は、今日のところ、國際的に尚ほ未知數であるには相違ない。がしかし、これは支配階級の眼から見ても、決して侮るべからざる未知數である。否、單にそれだけでなく、それは今後に於て益々不可抗的に增大することが豫測されて居る未知數でもある。といふのは、無產階級意識の眼ざめの進展の趨勢が、現在豫見し得られる限りの將來に於て、何かの機會に何物かによつて有效に阻止されるやうなことがあらうなどとは、誰れにも眞面目に考へ得られないことだからである。

ところで、その無產階級意識は、本來帝國主義に向つて正面的反對の立場にある運命におかれてある。その上、世界

大戰の刺激によつて、帝國主義戰爭の本質が無產階級理論の立場から精細に闡明されるやうになつてからは、眼ざめたる無產階級意識の上に於ける反帝國主義的志向が、益々根本的にもなり、且つまた益々積極的にもなつて來た。かくて今日の無產階級意識に於ては、將來の再度の世界戰爭の禍根を胚胎してゐる現代の帝國主義競爭の潮流の全世界的激變は、資本主義の最高の發達段階を標識してゐるものであると同時に、それの全般的崩壞の前徵を掲げてゐるものでもある。そこには、既成秩序への弔鐘が鳴り響いてゐると同時に、新社會の黎明が四邊から迫まつてゐる。そこにはまた、無產階級の苦悶と希望とが相反襯し合つてゐることも見られる。かういふ事態の下に、無產階級意識は、今後益々強硬に帝國主義の上に進擊的に働き掛けるべく、警戒の眼を見張つてゐるのである。

帝國主義政治家たちの支配的本能は、もとよりそれを充分に見拔いてゐる。それ故に、一方に於て彼等の目的達成の必要上から民衆政治を引き入れた彼等は、他方に於てその民衆政治が彼等に自由使用を許す限りの教育機關や宣傳機關やを通じて、帝國主義の進轉を滑かにするための、工夫し得られる限りの樣々のイデオロギーやイルージョンやを、彼等の親愛なる『民衆』の間に頒布することに死力を盡くしてゐる。が、彼等はまだそれだけで安心が出來ないで、その上更らに民衆政治のサンクションの下に、彼等によつて最も『危險』だと考へられる——そして彼等の秘藏の帝國主義政策には實際上たしかに危險である——無產階級意識の眼ざめの進みを阻止するために、並に彼等の釀造機から間斷なく作り出される各種のイデオロギーやイルージョンやを無遠慮に破壞しようとしてゐるやうな樣々の運動や思想や學說の傳播を防遏するために、民衆政治の『神聖』なる殿堂としての立法府を通じて、時代錯誤的などと一部から口喧しく批難されたやうなことなどには一切無頓着に、次から次へと、樣々の抑壓的法律を作り上げて行く。かくして、陰慘極まる反動時代が再來して、善意の自由主義者たちの徒らなる溜息を促す。これは今や、一の世界の資本主義的諸國家に共

通ずる全般的傾向の一つとなつて來てゐるものである。否、それだけでなく、それは同時にまた、我々が刻々我々の眼前に展開して行くのをまざまざと見せつけられてゐるところの間近の活事實でもある。

我々は既に、第五十議會に於ける普選法の通過を前にして民衆が無中に歡喜してゐた瞬間を縫うて、如何に無産階級運動を眼の敵にしてゐる治安維持法が咄嗟の間に制定されたかを見た。我々はまたそれ以來、如何に無産政黨運動が幾多の血の滲じみ出るやうな經驗を潜つて來なければならなかつたと見た。我々はまた、さうした苦境を切り拔けて來て最後にやつと產まれ出た勞働農民黨が、現在に於て如何に支配階級から出て來る分裂政策の下に、しどろもどろの步みを步み續けつつあるかを見て居る。我々はまた、無產階級運動上の言論集會が、最近に及んで殊に、如何に辛辣な監視及び干涉の下におかれてあるを見てゐる。更らにまた他の方面では、我々には教育の分野への帝國主義の侵入を具體的に示現するものとしか認定しようのない中等以上の諸學校に於ける軍事教練、及び制度上それと脈絡を通ずる全國青少年の軍事教練が、如何に全社會的に廣く傳播され扶植されて來た反動的氣勢と相呼應して設定されるに至つたかの經緯を見て來た。等、等。最後に我々は遂に、文政の當局者に依つて學生の社會科學研究の上に加へられるに至つた高壓手段が、如何に右の軍事教練の實施と相纏綿交錯しつつ、教育界の中へ引き入れられる に至つたかの次第をも實見して來た。

私はこれから先き、文部當局の手による學生の社會科學研究の壓迫の問題を、私の論究の主題としようとしてゐるものであるが、私は本文の執筆にさしかゝつた當初から、それを現下の社會生活の全面の上に渦卷いてゐる帝國主義及び反帝國主義の衝突交流によつて惹き起された波動の上に現はれてゐる一現象として觀察すべきものだ、と考へてゐたのである。教育の帝國主義化、及びそれへの反作用。そこに、社會科學研究の壓迫の問題の本質を解釋するための一切の

大戰の刺激によつて、帝國主義戰爭の本質が無産階級理論の立場から精細に闡明されるやうになつてからは、眼ざめたる無産階級意識の上に於ける反帝國主義的志向が、益々根本的にもなり、且つまた益々積極的にもなつて來た。かくて今日の無産階級意識に於ては、將來の再度の世界戰爭の禍根を胚胎してゐる現代の帝國主義競爭の潮流の全世界的瀰漫は、資本主義の最高の發達段階を標識してゐるものであると同時に、それの全般的崩壞の前徴を掲げてゐるものでもある。そこには、既成秩序への弔鐘が鳴り響いてゐると同時に、新社會の黎明が四邊から迫まつてゐる。そこにはまた、無産階級の苦悶と希望とが相反襯し合つてゐることも見られる。かういふ事態の下に、無産階級意識は、今後益々強硬に帝國主義の上に進撃的に働き掛けるべく、警戒の眼を見張つてゐるのである。

帝國主義政治家たちの支配的本能は、もとよりそれを充分に見拔いてゐる。それ故に、一方に於て彼等の目的達成の必要上から民衆政治を引き入れた彼等は、他方に於てその民衆政治が彼等に自由使用を許す限りの教育機關や宣傳機關やを通じて、帝國主義の進轉を滑かにするための、工夫し得られる限りの樣々のイデオロギーやイルージョンやを、彼等の親愛なる『民衆』の間に頒布することに死力を盡くしてゐる。が、彼等はまだそれだけで安心が出來ないで、その上更らに民衆政治のサンクションの下に、彼等によつて最も『危險』だと考へられる――そして彼等の秘藏の帝國主義政策には實際上たしかに危險である――無産階級意識の眼ざめの進みを阻止するために、並に彼等の醸造機から間斷なく作り出される各種のイデオロギーやイルージョンやを無遠慮に破壞しようとしてゐるやうな樣々の運動や思想や學說の傳播を防遏するために、民衆政治の『神聖』なる殿堂としての立法府を通じて、時代錯誤的などと一部から口喧しく批難されたやうなことなどには一切無頓着に、次から次へと、樣々の抑壓的法律を作り上げて行く。かくして、陰慘極まる反動時代が再來して、善意の自由主義者たちの徒らなる溜息を促す。これは今や、一の世界の資本主義的諸國家に共

通する全般的傾向の一つとなつて來てゐるものである。否、それだけでなく、それは同時にまた、我々が刻々我々の眼前に展開して行くのをまざまざと見せつけられてゐるところの間近の活事實でもある。

我々は既に、第五十議會に於ける普選法の通過を前にして民衆が無中に歡喜してゐた瞬間を縫うて、如何に無產階級運動を眼の敵にしてゐる治安維持法が咄嗟の間に制定されたかを見た。我々はまたそれ以來、如何に無產政黨運動が幾多の血の滲じみ出るやうな經驗を潛つて來なければならなかつたと見た。我々はまた、さうした苦境を切り拔けて來て最後にやつと產まれ出た勞働農民黨が、現在に於て如何に支配階級から出て來る分裂政策の下に、しどろもどろの歩みを歩み續けつつあるかを見て居る。我々はまた、無產階級運動上の言論集會が、最近に及んで殊に、如何に辛辣な監視及び干涉の下におかれてあるを見てゐる。更らにまた他の方面では、我々には教育の分野への帝國主義の侵入を具體的に示現するものとしか認定しようのない中等以上の諸學校に於ける軍事教練、及び制度上それと脈絡を通ずる全國青少年の軍事教練が、如何に全社會的に廣く傳播され扶植されて來た反動的氣勢と相呼應して設定されるに至つたかの經緯を見て來た。等、等。最後に我々は遂に、文政の當局者に依つて學生の社會科學研究の上に加へられるに至つた高壓手段が、如何に右の軍事教練の實施と相纏綿交錯しつつ、教育界の中へ引き入れられるに至つたかの次第をも實見して來た。

私はこれから先き、文部當局の手による學生の社會科學研究の壓迫の問題を、私の論究の主題としようとしてゐるものであるが、私は本文の執筆にさしかゝつた當初から、それを現下の社會生活の全面の上に渦卷いてゐる帝國主義及び反帝國主義の衝突交流によつて惹き起された波動の上に現はれてゐる一現象として觀察すべきものだ、と考へてゐたのである。教育の帝國主義化、及びそれへの反作用。そこに、社會科學研究の壓迫の問題の本質を解釋するための一切の

關鍵が隱くされてゐる。そしてそのことが、私のこれまでの稍々長過ぎた感じの伴ふ序論を餘儀なくしたのである。

本論　社會科學研究壓迫問題の諸考察

一　近年の我國に於ける社會思想の一般的傾向

我國の青年學生の間に社會問題及び社會思想の研究熱が勃興して、一の顯著な傾向を形成するやうになつたのは、深く詮索するまでもなく、世界大戰の繼續期間の頃からのことであつた。そしてそれは大體上その初期から、一般社會に於ける同傾向と相響應しつつ、略ぼ同一歩調を以て進んで來たものである。それ故に、一般社會に於けるその傾向の推移を討究することは、同時に青年學生の間に於けるそれの沿革を知ることにもなるのである。

世界大戰開始後間もなく、政治的デモクラシーの主張に基礎づけられた政論が俄然として擡頭して、當時の世界的大動亂の狀勢の下に異常の力と速度とを以つて進展しつつあつた國内及び國外の政治過程に對する知識階級者たちの興味を盛に喚びさましたことは、今日では最早昔語りになつてゐることだが、しかしその風潮の促進に直接の交渉を持つた人々の記憶の上には、今尚ほ新たな印刻を殘してゐる事實である。そしてその頃のデモクラシー論は、他の諸點では兎も角、少くとも或る一つの注意すべき點で、非常に永續的な影響をそのあとに留まらしめたことによつて、それ自身の内容價値以上の重要意義のある働きをなし遂げたものだ、といふとが出來るのである。といふのは、それは、當時それに接觸した多くの知識階級者たちの思想上の視野を、個人生活の領域の上から社會生活のそれの上へと、自動的に次第に擴がつて行かしめるやうに導いた誘因となつたものだからである。それ以來、一旦デモクラシーの思潮によつて啓發さ

れた彼等は、彼等の觀察、研究、思索の進むに從つて、單に現實社會的諸關係の上層で淺く動いてゐる政治現象の知識を得ただけでは最早滿足してゐられなくなつて、そこから更らに一歩を進めて、その政治現象の根柢に深く横はつてゐてそれを現實的に動かしてゐる現實社會的諸關係そのものの秘密を探らうとする努力の方へまで、段々と追ひ遣られて行つたのである。無論、かうした事情がすッかり明確な形で表面に現はれ盡くすに至つたまでの途上に於ては、様々の補助的諸要素が多種多様の關係に於いて働いたものであつたことは事實であるが、しかし私が今それらに一々立ち入つて拘はつてゐる必要はあるまい。私は茲では寧ろ、近年に於て社會問題及び社會思想の研究熱の傾向の發生の概觀を與へようとしたまでであるが、その限られた目的のためには、以上の記述で事が足りるであらう。

けれども、右の傾向は單にそれの促進者たちや追隨者たちの知的追求の成果にすぎないものだ、と思推するやうな人人があらばそれは餘りに明白な見當違ひである。さうした考へ方は、例の『外來思想の危險』などを眞顔で叫ぶやうに習慣づけられてゐる官僚的老政治家や老教育家連に通有なものだといふだけのものであつて、些かでも思想問題の正しい取り扱ひ方を理解してゐる人々に取つては、それは本氣で掛り合つて居られるやうな代物ではないのである。で、若し我々が、世界大戰勃發後の數個年間に亘つて次から次へと起つた大小の變動の連續を回想するならば、我々はそこに先づ政治的デモクラシー論が勃興して、それが間もなく社會問題及び社會思想の研究乃至宣傳、及び社會運動の實行の方へと轉換して行つたやうな事情が、すべて皆その現實的の基礎を缺いてゐたものでなかつた、といふ點を認めない譯には行かないのである。即ちこの全期間は、一言でいふならば、我國の舊來の社會的諸關係及びこれらに纏綿して成長して來たあらゆる傳統、觀念、慣行、等等が、當時俄かに海外からひた押しに押し寄せて來た世界的大動亂の强壓的影響の下に急に活氣づけられだした新鋭の社會的諸勢力からの襲撃を受けて、始めて意外に重大な脅威の下に立たしめられるやう

關鍵が隱くされてゐる。そしてそのことが、私のこれまでの稍々長過ぎた感じの伴ふ序論を餘儀なくしたのである。

本論　社會科學研究壓迫問題の諸考察

一　近年の我國に於ける社會思想の一般的傾向

我國の青年學生の間に社會問題及び社會思想の研究熱が勃興して、一の顯著な傾向を形成するやうになつたのは、深く詮索するまでもなく、世界大戰の繼續期間の頃からのことであつた。そしてそれは大體上その初期から、一般社會に於ける同傾向と相響應しつつ、略ぼ同一步調を以て進んで來たものである。それ故に、一般社會に於けるその傾向の推移を討究することは、同時に青年學生の間に於けるそれの沿革を知ることにもなるのである。

世界大戰開始後間もなく、政治的デモクラシーの主張に基礎づけられた政論が俄然として擡頭して、當時の世界的大動亂の狀勢の下に異常の力と速度とを以つて進展しつつあつた國內及び國外の政治過程に對する知識階級者たちの興味を盛に喚びさましたことは、今日では最早昔語りになつてゐることだが、しかしその風潮の促進に直接の交渉を持つた人々の記憶の上には、今尙ほ新たな印刻を殘してゐる事實である。そしてその頃のデモクラシー論は、他の諸點では兎も角、少くとも或る一つの注意すべき點で、非常に永續的な影響をそのあとに留まらしめたことによつて、それ自身の內容價値以上の重要意義のある働きをなし遂げたものだ、といふとが出來るのである。といふのは、それは、當時それに接觸した多くの知識階級者たちの思想上の視野を、個人生活の領域の上から社會生活のそれの上へと、自動的に次第に擴がつて行かしめるやうに導いた誘因となつたものだからである。それ以來、一旦デモクラシーの思潮によつて啓發さ

れた彼等は、彼等の觀察、研究、思索の進むに從つて、單に現實社會的諸關係の上層で淺く動いてゐる政治現象の知識を得ただけでは最早滿足してゐられなくなつて、そこから更らに一歩を進めて、その政治現象の根柢に深く横はつてゐてそれを現實的に動かしてゐる現實社會的諸關係そのものの秘密を探らうとする努力の方へまで、段々と追ひ遣られて行つたのである。無論、かうした事情がすツかり明確な形で表面に現はれ盡くすに至つたまでの途上に於ては、種々の幇助的諸要素が多種多樣の關係に於いて働いたものであつたことは事實であるが、しかし私が今それらに一々立ち入つて拘はつてゐる必要はあるまい。私は玆では寧ろ、近年に於て社會問題及び社會思想の研究熱の傾向の發生の概觀を與へようとしたまでであるが、その限られた目的のためには、以上の記述で事が足りるであらう。

けれども、右の傾向は單にそれの促進者たちや追隨者たちの知的追求の成果にすぎないものだ、と思推するやうな人人があらばそれは餘りに明白な見當違ひである。さうした考へ方は、例の『外來思想の危險』などを眞顔で叫ぶやうに習慣づけられてゐる官僚的老政治家や老教育家連に通有なものだといふだけのものであつて、些かでも思想問題の正しい取り扱ひ方を理解してゐる人々に取つては、それは本氣で掛り合つて居られるやうな代物ではないのである。で、若し我々が、世界大戰勃發後の數個年間に亘つて次から次へと起つた大小の變動の連續を回想するならば、我々はそこに先づ政治的デモクラシー論が勃興して、それが間もなく社會問題及び社會思想の研究乃至宣傳、及び社會運動の實行の方へと轉換して行つたやうな事情が、すべて皆その現實的の基礎を缺いてゐたものでなかつた、といふ點を認めない譯には行かないのである。即ちこの全期間は、一言でいふならば、我國の舊來の社會的諸關係及びこれらに纒綿して成長して來たあらゆる傳統、觀念、慣行、等等が、當時俄かに海外からひた押しに押し寄せて來た世界的大動亂の強壓的影響の下に急に活氣づけられだした新銳の社會的諸勢力からの襲擊を受けて、始めて意外に重大な脅威の下に立たしめられるやう

になつた時代であつた。それ以來のあらゆる種類の社會的動搖は、實にそこから端を發したものである。で、先づ第一に、各方面の傳統的權威が、新生の諸要求や諸主張からの挑戰に直面しなければならなかつた。この關係は就中最も早く、政治の分野の上に現はれた。そしてデモクラシーの呼び聲が、各社會層に於て敏感的に反響された。そしてかうした趨勢は、逸早く政黨者流によつて、彼等の官僚との最後の政權爭奪戰のために利用された。しかし、その戰ひがまだ徹底的に戰ひつくされたまでに至らなかつた間に、これらの相爭ひつつあつた兩勢力は一樣に、俄かに足許から鳥が立つたやうに擡頭して來た勞働階級の行動開始によつて、したたかに喫驚せしめられた。が、彼等はしかし、やがて漸くその驚きから醒めたとき、再び相提携してこの新來の共同の敵に向つて警戒する必要を意識し始めた。

兎も角、この勞働階級が大戰勃發後の數年間に於ける社會的經濟的變局に促されて、社會上の一新勢力として、猛然と表面に打つて出たとは、あらゆる意味に於て、我國の社會史の上に一新紀元を畫したものであつた。當時大戰の直接影響として我國を見舞つた所謂『戰爭景氣』は、我國の資本階級に對しても坐ながら異常の暴利にありつく機會を提供したと同時に、それはまた我國の勞働大衆に向つても、新たに勞資戰に出立するための實力增進の基礎を置いた。それらの勞働大衆が一般に階級としての組織を獲得するやうになつたのは、嚴密にいふと、その頃から始まつたとであつた。かうした變動の間に於て、我國の社會生活上に於ても、資本と勞働との階級的對立が、一つの活きた現實として、日常觀察の對象となるやうにもなつたのである。殊に大正六年前後を境として、我國の勞働爭議及び各種の形式に於ける勞働運動が、如何に一擧にして躍進的に昂騰しだしたかは、事實及び數字が誤りなく我々に告げてゐる通りである。

かうした社會上の諸事實の眼まぐろしき刻々の展開は　我國の思想界の忙しき旋轉的進行を方向づけたものであつた。殊にそれは、デモクラシーから社會問題及び社會思想の研究への轉換の傾向の現實的基礎となつたものであつた。

この場合に於ても矢張り、社會的存在が社會的意識を決定したのだ、と言ひ得られることには變はりがないのである。

かくてその頃から勞働運動の本質とか戰術とかに關するある限りの術語の使用が次第に一般化され、それの組織形態とか運用方法とかに關する或る程度の理解が順次に促進され、また、それの實際上の進行過程上の各段階が參加者もしくは觀察者としての各人の社會意識に相應して、それぞれの心的態度で跡づけられるやうになつた。と同時に、他方に於てはまた、さうした趨勢と相互的に因果關係をなして、社會思想への或る程度の理解が諸方面に於て熱烈に要求される傾向が現はれるやうになり、從つてまた、その要求を充たすための著書、飜譯、論文の類が引切りなしに續出して、一時は出版界の洪水を惹き起さんばかりの盛況を見せたりしたことさへあつた。かうした情況の下に於て、社會主義系統の様々の思想の流れが、しばらくその深淺を問はず、兎も角各方面に向つて急調子に浸潤して行つたことだけは、疑ふべくもない事實である。從つて、マルキシズムとか、アナーキズムとか、コンミユニズムとか、サンデイカリズムとか、ギルド・ソーシアリズムとか、ボルシエヴイズムとか、といつたやうな言葉は、それらの各々のものの意味に關する理解の程度の如何に拘らず、その範圍の次第に擴がつて行つた讀書人圏内の常用語となるやうになつた。そして、それらの言葉の各々のものの流行り廢たりの上にも、國內及び國外に於ける社會的變動及び勞働運動の刻々に於ける狀況が反映されてゐたことは、我々の多少の注意に値することである。

二　思想の現實的基礎

以上私は、最近の約十個年に亘つての我國の社會思想の研究及び傳播の過程の上に慌ただしく去來した諸現象の推移に關する走り書き的のスケッチを試みた。これは、現在我國の青年學生界の諸方面を風靡しつつある社會問題及び社

思想の研究熱の趨勢の論研に際しては、我々はまづ、それの背景をなすところの、一般社會に於ける同じ傾向の概觀から出發しなければならないといふ考察から來たものである。そして若し上に與へられたその概觀に大した誤謬がないものとするならば、我々がそれから直接に引き出し得る最初の――そして最も中心的の――結論は、最近約十年間に亙つて我國で實見されて來た社會問題及び社會思想の研究熱の勃興及びその急速度の進捗は、世界を通じて何處でも一般的にさうである通りに、何よりまづ、現實の社會的諸關係の上に現實的に起つた深刻な不安動搖の諸相を如實に反映して來たものでもあり、またそれと略々同一歩調を保ちながら展開して來たものでもある。さうした現實的基礎なしに如何なる種類から思想傾向が社會的に擡頭し得るもののやうに考へることが、一の無省察的な謬見であることは無論である。と同時に、さうした現實的基礎が既に準備されてゐるも拘らず、それに相應する如何なる種類かの思想傾向が社會的に擡頭し得ない――若しくは擡頭し得ないやうに誘導し得られる――もののやうに決めて掛ることもまた、その根本に於て前者と同一系統に屬する他愛もない空想である。

　曾てかうした點に理解を缺いてゐた多くの批評家たちは、彼等が日常の呪文のやうに唱へ慣れてゐたところの、例の、『旦にオイツケンに走り、夕にベルグソンに赴き……』式の紋切型の文句をデモクラシーから社會主義への急轉直下的傾向の上に移して、一律にその罪を『輕薄』な社會思想家たちやその聽衆たちに塗りつけて、安價な揶揄や嘲罵に耽つて好い氣持ちになつてゐたのが、甚だ多く見受けられた時期もあつた。(今でもさうした連中が跡を絶つてゐる譯ではないが。……) 更らに多くの政治家連や老教育連となると、まだそれに輪を掛けた態度に出て、『野に叫べる豫言者』といつた調子で、高聲で『外來思想の危險』を頻りと警告し、『唯物的功利的』の『惡思想』や『危險運動』への抑壓と善導とを勸說して、且つそれを實際政策の上に移入することにも努力して來たものである。だから、假りに若し

さうした抑壓及び善導の手段や政策に、或る『必然の力に驅られて進んでゐる思想や運動の流れを堰き止め得る摩訶不可思議の魔力が潜んでゐるものとしたならば、今頃では彼等が目の敵にするすべての思想や運動が奇麗さツぱりと跡方もなく一掃し盡されてゐて、諸公の夢を安からしめてゐる筈であらねばならぬ。ところが事實は全然これに反して、彼等の抑壓善導の手段政策が嚴酷になり辛辣になればなるほど、『惡思想』や『危險運動』が層一層と益々底力を加へて行つて結局行き着くところまで進まないでは已まない氣勢を示すやうになつて來たのである。だとして見れば萬一諸公が眞面目に爲政者たちや教育者たちの腦漿を絞つて案出した政策や施設の力によつて、時代を貫いて流れて行く思想や運動の流れの方向を自由に左右し得られるものと考へてゐるのだとすると、彼等はその方面での彼等の多年の諸實驗に於ける全然の失敗の跡に鑑みて、彼等が當然持つてゐるべき筈だと思惟してゐる能力を持つてゐないものだといふことを自覺して、この上は自發的に速かに、思想や運動の取締りに諦めをつけるとか、或ひはまたその取締りの任務を辭退するとかに決心するのが、最も賢明でもあれば、また最も當然でもある處置ではないか？　だが實は彼等は安心するがいい。彼等が思想取締りの諸實驗に徹底的に失敗したのは、決して彼等の能力の缺乏のためではない。『必然』の理法の働きを阻止することは『超人』——彼等の支配意識は畢竟『超人』思想で支持されてゐるものである——の力にも餘る仕事である。それ故に、若し飽くまで彼等に或る責任が歸着せしめられなければならないものとすると、それは、彼等が不可能を可能と誤認したことの一點の上にのみ置かれなければならないのである。即ち彼等は、思想や運動もそれらの現實的基礎から引離して、その上に彼等の取締政策を行はうとするやうな無謀を企てて來たものでもあり、また現に企ててゐるものでもある。無論彼等は、豫定の筋書通りに、その企ては失敗する。と、彼等はその責任を自ら負擔する代りに、それを取締られるものの側の上に轉嫁して、その中から恰好な犠牲者たちを撰び出す。その結果は、言ふまでも

なく、取締られるものの側に於ける反抗心の熾烈化であるが、それはまた改めて、取締りの嚴酷化の素因ともなる。かうして、取締るものの側と取締られるものの側との間に、極まりなき相互追跡の循環が、そこに繰り返されることになるのである。否、事態は單にそこだけに止まらないで、さうした狀況の裡から屢々苛酷極まる法令が醸もし出されて、それが更に社會的不安を一層濃厚にする媒介物となり、果てはそこから全社會の上に一種の恐怖時代が現出しないとも限らないのである。我々は既に治安維持法や暴威取締法の如きものが、如何に重苦しき强迫感を以て、無產大衆を中心としての非常に廣き社會層の上に臨んでゐるかを見て來た。かういふ狀態の下に、今日では殆んど全社會が一種の無氣味な雰圍氣に包まれてゐるもののやうにさへ見られるのである。そして最後に、嘗て永い間社會の靜隱な一隅に安置されてゐたやうに見えた教育界や青年學生たちの學窓も、今日では最早その例外でなくなつて來てゐるのである。現在の世界の平和を不斷に脅威してゐる帝國主義の魔手は、決して教育界や學窓への侵入を遠慮などしてゐるものではない。

三　學生生活の社會生活に於ける地位

我々は既に、大戰勃發以後の我國に於ける社會問題及び社會思想の研究の趨勢が、その頃から殊に頻繁に現はれかけた全社會生活上の不安動搖のうちにその現實的基礎を持つたものでもあり、またそれと相呼應しつつ展開して來たものでもあつた、といふ一點に觸れて來た。で、當初からその渦中に自分たちを見出した青年學生たちの多くが、早くからその趨勢の中に卷き込まれたのは、如何なる點から見ても當然至極のことであつた。この現象を、例の『暗示』や『被暗示』や『傳染』やの原理を基調とする群衆心理學との定式一天張りで解釋しやうなどと試みる人々も少くはないが、さういふのは大抵、アブノーマルな心理作用を以てノーマルな心理作用を推論しようとしたり、刹那的行動と永續的行

動反復とを強いて同一範疇に入れて説明しやうとしたりするやうな、一種の偏屈な認識態度から出て來てゐるもののやうに考へられる。だが、實際上に於ては、青年學生たちの多くが社會問題や社會思想の研究に立ち向つたり、また屢々その研究と共に實行運動に投入して行つたりなどした態度は、一片の粗雜な群衆心理學的定式を以て説明し去られるには、最初から餘りに眞劍でもあり、餘りに批判的でもあり、殊に餘りに永續的でもあり來つた。無論、最初彼等を驅つてそこに向はしめた動機のうちには、彼等の知識慾や好奇心が手傳つてゐたといふことも、否めない事實である。實際彼等が始めて彼等の周圍の社會的不安動搖に直面したとき、その原因の奧底まで掘り下げて見たいといつたやうな、已むに已まれぬ衝動に驅られたものとするのは、けだし當然の推測だといはねばならぬ。青年の心は、一般に外界からの印象に敏感である。それはまた、さうでなければならない。青年が早くからその敏感性を失つて老成して行くやうな社會は、頽廢の過程の上にある社會だといはなければならぬ。當局の對青年抑壓乃至指導的諸政策は、若しそれらが豫期の効果を擧げるやうなことがあらうものならば、常に青年を不當に早く老成せしめる危險を含んでゐるものである。といふのは、それは過去をして何時までも現在及び將來を導かしめる結果に終るべき筈のものだからである。だが幸にも、――さうだ！我々から見れば幸にも、――現今の青年學生界の狀況を通觀すれば、さうしたことは大體上に於て杞憂にすぎないもののやうに見える。我々はそれを、我々の社會の前途のために欣ぶ。尤も我々の社會は、×××――××××××バックにある支配階級の――描いてゐる社會とは、必ずしも同義語でないことは、玆で率直に言つておいても好いことだらう。

けれども、假りに青年學生たちが最初社會問題や社會思想の研究の方向へ驅り立てられたのは、單に彼等の知識慾や好奇心だけから來たものだとするにもせよ、――――それらだけから來たものでないことは、我々から見れば無論のこと

だが。――彼等は次第に彼等の生活上からさういふ研究が必要だといふことを學ぶやうになつたのである。學窓が現實社會と隔絶したものだとか、學生生活が社會的動搖と無關係のものだとか、といふやうなことが信ぜられたのは、最早過去の夢となつて來てゐるものである。今日では、たとへば、一般社會の景氣不景氣といふやうな經濟界の現象が、直ちに數量的にも就學狀態の上に反應するやうにもなつてゐれば、また內閣の交迭といふやうな政界の葛藤までが、教育政策とか教育行政上の方針とかの上に於けるその時々の變動を通じて、直接的に學術的活動上の便不便に影響するやうにもなつて來てゐる。殊に最近の青年學生界は、軍事教育實施の下に、その點を痛切に――餘りに痛切に――體驗させられて來た。當局者らは努めて、さういふことを學生たちに解らさまいと試みてゐるやうに見えるが、しかしそれにはもう時がおくれてゐる。殊に學生たちの壓倒的大多數は、學窓生活に於て少くとも一度は、――それは卒業期間近になればなるほど、――就職もしくは不就職の問題が彼等に肉薄してゐることの意識から、彼等の生活と一般社會生活との接觸交錯の密接な關係を、しみじみと骨に徹するまでも考へさせられる。この關係を通して見れば、學生生活は、現實社會の不可分的一部である。從つて、現實社會に於ける一つ一つの動搖は、そのままの强度で學生生活に應へて來るのである。それ故に、學生が社會を研究することは、同時に自己を研究することにもなるのである。かくて彼等の社會問題及び社會思想の研究は、最早彼等の生活上の贅澤物ではなく、それの必要物となつて來てゐるのである。今日の青年學生たちの間には、各自の社會意識上の差異だとか、社會的行動意志の有無もしくは厚薄だとかに拘らず、多少の程度に於て社會問題及び社會思想に關する知識を求めてゐないものが殆んど絶無の姿だといふことは、多少とも彼等に接觸する機會を持つものの、一樣に承認しない譯に行かないことである

資本社會に於ける生産と消費との關係の根柢に潜む最も深刻な矛盾の最も露骨な表象であるところの恐慌、及びそれ

と不可分的交渉を持つ失業問題は、現在の世界の各部を通じて、資本主義の最後の總體的崩壞を不可避的なものに描き出してゐるところの、あらゆる諸現象中の最も顯著な現象である。我々の眼に觸れる資本主義の末期の陰慘な諸形相は、すべてみな、結局皆そこを通じて、我々の前に現はれてゐるのである。それは全社會の一般的問題ではあるが、特に最も直接に無産階級の問題であり、またそれと殆んど同程度に、若しくは少くともそれに次いで、知識階級の問題でもあり、更らにまたそれが知識階級の問題であることを通じて、稍々間接的にはなつて來るが、同時に青年學生たちの問題でもある。彼等は今や、それを痛切に意識せずには居られない境遇におかれてゐるのである。しかも彼等のこの意識は、彼等の卒業期に近づけば近づくほど、そして就職問題からの脅威が具體的に感じられるやうになればなるほど、益々尖銳化させられて來るのである。この點だけから考へても、今日の青年學生たちが社會問題や社會思想の研究に無關心でゐられないことの理由が、誰れにでも容易に看取されなければならない筈である。

四、就職問題と社會思想

けれども、若し學生たちが單に就職問題の視角だけから社會を見ようとしてゐるものだとするならば、それには個々の學生の純個人的立場が甚だ多分に含まれてゐるものだとしなければならないことになるのは、當然のことである。もとより就職問題は失業問題と相互に表裏をなしてゐるものとして、客觀的には一の極めて重大なる社會問題を構成するものには相違ないが、しかし個々の學生が主として個人的動機からそれに對立するとき、それに主體的には、——もしくは現實にそれに對立する個々の學生たちに取つては、——著るしく彼等の各々の個人的立場によつて色づけられた問題となるのである。

思想の研究熱の趨勢の論研に際しては、我々はまづ、それの背景をなすところの、一般社會に於ける同じ傾向の概觀から出發しなければならないといふ考察から來たものである。そして若し上に與へられたその概觀に大した誤謬がないものとするならば、我々がそれから直接に引き出し得る最初の――そして最も中心的の――結論は、最近約十年間に亘つて我國で實見されて來た社會問題及び社會思想の研究熱の勃興及びその急速度の進捗は、世界を通じて何處でも一般的にさうである通りに、何よりまづ、現實の社會的諸關係の上に現實的に起つた深刻な不安動搖の諸相を如實に反映して來たものでもあり、またそれと略々同一歩調を保ちながら展開して來たものでもある。さうした現實的基礎なしに如何なる種類から思想傾向が社會的に擡頭し得るもののやうに考へることが、一の無省察的な謬見であることは無論である。と同時に、さうした現實的基礎が既に準備されてゐるも拘らず、それに相應する如何なる種類かの思想傾向が社會的に擡頭し得ない――若しくは擡頭し得ないやうに誘導し得られる――もののやうに決めて掛ることもまた、その根本に於て前者と同一系統に屬する他愛もない空想である。

曾てかうした點に理解を缺いてゐた多くの批評家たちは、彼等が日常の呪文のやうに唱へ慣れてゐたところの、例の、『旦にオイツケンに走り、夕にベルグソンに赴き……』式の紋切型の文句をデモクラシーから社會主義への急轉直下的傾向の上に移して、一律にその罪を『輕薄』な社會思想家たちやその聽衆たちに塗りつけて、安價な揶揄や嘲罵に耽つて好い氣持ちになつてゐたのが、甚だ多く見受けられた時期もあつた。（今でもさうした連中が跡を絕つてゐる譯ではないが。……）更らに多くの政治家連や老教育連となると、またそれに輪を掛けた態度に出て、『對に叫べる豫言者』といつた調子で、高聲で『外來思想の危險』を頻りと警告し、『唯物的功利的』の『惡思想』や『危險運動』への抑壓と善導とを勸說して、且つそれを實際政策の上に移入することにも努力して來たものである。だから、假りに若し

さうした抑壓及び善導の手段や政策に、或る『必然の力に驅られて進んでゐる思想や運動の流れを堰き止め得る摩訶不可思議の魔力が潜んでゐるものとしたならば、今頃では彼等が目の敵にするすべての思想や運動が奇麗さッぱりと跡方もなく一掃し盡されてゐて、諸公の夢を安からしめてゐる筈であらねばならぬ。ところが事實は全然これに反して、彼等の抑壓善導の手段政策が嚴酷になり辛辣になればなるほど、『惡思想』や『危險運動』が層一層と益々底力を加へて行つて結局行き着くところまで進まないでは已まない氣勢を示すやうになつて來たのである。だとして見れば萬一諸公が眞面目に爲政者たちや教育者たちの腦漿を絞つて案出した政策や施設の力によつて、時代を貫いて流れて行く思想や運動の流れの方向を自由に左右し得られるものと考へてゐるのだとすると、彼等はその方面での彼等の多年の諸實驗に於ける全然の失敗の跡に鑑みて、彼等が當然持つてゐるべき筈だと思惟してゐる能力を持つてゐないものだといふことを自覺して、この上は自發的に速かに、思想や運動の取締りに諦めをつけるとか、或ひはまたその取締りの任務を辭退するとかに決心するのが、最も賢明でもあれば、また最も當然でもある處置ではないか？　だが實は彼等は安心するがいい。彼等が思想取締りの諸實驗に徹底的に失敗したのは、決して彼等の能力の缺乏のためではない。『必然』の理法の働きを阻止することは、『超人』——彼等の支配意識は畢竟『超人』思想で支持されてゐるものである——の力にも餘る仕事である。それ故に、若し飽くまで彼等に或る責任が歸着せしめられなければならないものとすると、それは、彼等が不可能を可能と誤認したことの一點の上にのみ置かれなければならないのである。即ち彼等は、思想や運動もそれらの現實的基礎から引離して、その上に彼等の取締政策を行はうとするやうな無謀を企てて來たものでもあり、また現に企ててゐるものでもある。無論彼等は、豫定の筋書通りに、その企ては失敗する。と、彼等はその責任を自ら負擔する代りに、それを取締られるものの側の上に轉嫁して、その中から恰好な犧牲者たちを撰び出す。その結果は、言ふまでも

なく、取締られるものの側に於ける反抗心の熾烈化であるが、それはまた改めて、取締りの嚴酷化の素因ともなる。かうして、取締るものの側と取締られるものの側との間に、極まりなき相互追跡の循環が、そこに繰り返されることになるのである。否、事態は單にそこだけに止まらないで、さうした狀況の裡から愈々苛酷極まる法令が醸もし出されて、それが更に社會的不安を一層濃厚にする媒介物となり、果てはそこから全社會の上に一種の恐怖時代が現出しないとも限らないのである。我々は既に治安維持法や暴威取締法の如きものが、如何に重苦しき强迫感を以て、無產大衆を中心としての非常に廣き社會層の上に臨んでゐるかを見て來た。かういふ狀態の下に、今日では殆んど全社會が一種の無氣味な雰圍氣に包まれてゐるもののやうにさへ見られるのである。そして最後に、曾て永い間社會の靜隱な一偶に安置されてゐたやうに見えた教育界や青年學生たちの學窓も、今日では最早その例外でなくなつて來てゐるのである。現在の世界の平和を不斷に脅威してゐる帝國主義の魔手は、決して教育界や學窓への侵入を遠慮などしてゐるものではない。

三　學生生活の社會生活に於ける地位

我々は既に、大戰勃發以後の我國に於ける社會問題及び社會思想の研究の趨勢が、その頃から殊に頻繁に現はれかけた全社會生活上の不安動搖のうちにその現實的基礎を持つたものでもあり、またそれと相呼應しつつ展開して來たものでもあつた、といふ一點に觸れて來た。で、當初からその渦中に自分たちを見出した青年學生たちの多くが、早くからその趨勢の中に卷き込まれたのは、如何なる點から見ても當然至極のことであつた。この現象を、例の『暗示』や『被暗示』や『傳染』やの原理を基調とする群衆心理學との定式一天張りで解釋しやうなどと試みる人々も少くはないが、さういふのは大抵、アブノーマルな心理作用を以てノーマルな心理作用を推論しようとしたり、刹那的行動と永續的行

動反復とを強いて同一範疇に入れて説明しやうとしたりするやうな、一種の偏屈な認識態度から出て來てゐるもののやうに考へられる。だが、實際上に於ては、青年學生たちの多くが社會問題や社會思想の研究に立ち向つたり、また屢々その研究と共に實行運動に投入して行つたりなどした態度は、一片の粗雑な群衆心理學的定式を以て説明し去られるには、最初から餘りに眞劍でもあり、餘りに批判的でもあり、殊に餘りに永續的でもあり來つた。無論、最初彼等を驅つてそこに向はしめた動機のうちには、彼等の知識慾や好奇心が手傳つてゐたといふことも、否めない事實である。實際彼等が始めて彼等の周圍の社會的不安動揺に直面したとき、その原因の奥底まで掘り下げて見たいといつたやうな、已むに已まれぬ衝動に驅られたものとするのは、けだし當然の推測だといはねばならぬ。青年の心は、一般に外界からの印象に敏感である。それはまた、さうでなければならない。青年が早くからその敏感性を失つて老成して行くやうな社會は、頽廢の過程の上にある社會だといはなければならぬ。當局の對青年抑壓乃至指導的諸政策は、若しそれらが豫期の効果を擧げるやうなことがあらうものならば、常に青年を不當に早く老成せしめる危險を含んでゐるものである。といふのは、それは過去をして何時までも現在及び將來を導かしめる結果に終るべき筈のものだからである。だが幸にも、——さうだ！　我々から見れば幸にも、——現今の青年學生界の狀況を通觀すれば、さうしたことは大體上に於て杞憂にすぎないもののやうに見える。我々はそれを、我々の社會の前途のために欣ぶ。尤も我々の社會は、×××——××××××バッタにある支配階級の——描いてゐる社會とは、必ずしも同義語でないことは、玆で率直に言つておいても好いことだらう。

けれども、假りに青年學生たちが最初社會問題や社會思想の研究の方向へ驅り立てられたのは、單に彼等の知識慾や好奇心だけから來たものだとするにもせよ、——それらだけから來たものでないことは、我々から見れば無論のこと

なく、取締られるものの側に於ける反抗心の熾烈化であるが、それはまた改めて、取締りの嚴酷化の素因ともなる。かうして、取締るものの側と取締られるものの側との間に、極まりなき相互追跡の循環が、そこに繰り返されることになるのである。否、事態は單にそこだけに止まらないで、さうした狀況の裡から應々苛酷極まる法令が醸もし出されて、それが更に社會的不安を一層濃厚にする媒介物となり、果てはそこから全社會の上に一種の恐怖時代が現出しないとも限らないのである。我々は既に治安維持法や暴威取締法の如きものが、如何に重苦しき强迫感を以て、無產大衆を中心としての非常に廣き社會層の上に臨んでゐるかを見て來た。かういふ狀態の下に、今日では殆んど全社會が一種の無氣味な雰圍氣に包まれてゐるもののやうにさへ見られるのである。そして最後に、嘗て永い間社會の靜隱な一偶に安置されてゐたやうに見えた敎育界や靑年學生たちの學窓も、今日では最早その例外でなくなつて來てゐるのである。現在の世界の平和を不斷に脅威してゐる帝國主義の魔手は、決して敎育界や學窓への侵入を遠慮などしてゐるものではない。

三　學生生活の社會生活に於ける地位

我々は既に、大戰勃發以後の我國に於ける社會問題及び社會思想の研究の趨勢が、その頃から殊に頻繁に現はれかけた全社會生活上の不安動搖のうちにその現實的基礎を持つたものでもあり、またそれと相呼應しつつ展開して來たものでもあつた、といふ一點に觸れて來た。で、當初からその渦中に自分たちを見出した靑年學生たちの多くが、早くからその趨勢の中に卷き込まれたのは、如何なる點から見ても當然至極のことであつた。この現象を、例の『暗示』や『被暗示』や『傳染』やの原理を基調とする群衆心理學との定式一天張りで解釋しやうなどと試みる人々も少くはないが、さういふのは大抵、アブノーマルな心理作用を以てノーマルな心理作用を推論しようとしたり、刹那的行動と永續的行

動反復とを強いて同一範疇に入れて說明しやうとしたりするやうな、一種の偏屈な認識態度から出て來てゐるもののやうに考へられる。だが、實際上に於ては、青年學生たちの多くが社會問題や社會思想の研究に立ち向つたり、また屢々その研究と共に實行運動に投入して行つたりなどした態度は、一片の粗雜な群衆心理學的定式を以て說明し去られるには、最初から餘りに眞劍でもあり、餘りに批判的でもあり、殊に餘りに永續的でもあり來つた。無論、最初彼等を驅つてそこに向はしめた動機のうちには、彼等の知識慾や好奇心が手傳つてゐたといふことも、否めない事實である。實際彼等が始めて彼等の周圍の社會的不安動搖に直面したとき、その原因の奧底まで掘り下げて見たいといつたやうな、已むに已まれぬ衝動に驅られたものとするのは、けだし當然の推測だといはねばならぬ。青年の心は、一般に外界からの印象に敏感である。それはまた、さうでなければならない。青年が早くからその敏感性を失つて老成して行くやうな社會は、頽廢の過程の上にある社會だといはなければならぬ。當局の對青年抑壓乃至指導的諸政策は、若しそれらが豫期の効果を擧げるやうなことがあらうものならば、常に青年を不當に早く老成せしめる危險を含んでゐるものである。といふのは、それは過去をして何時までも現在及び將來を導かしめる結果に終るべき筈のものだからである。だが幸にも、——さうだ！　我々から見れば幸にも、——現今の青年學生界の狀況を通觀すれば、さうしたことは大體上に於て杞憂にすぎないもののやうに見える。我々はそれを、我々の社會の前途のために欣ぶ。尤も我々の社會は、×××——××××××××バックにある支配階級の——描いてゐる社會とは、必ずしも同義語でないことは、玆で率直に言つておいても好いことだらう。

けれども、假りに青年學生たちが最初社會問題や社會思想の研究の方向へ驅り立てられたのは、單に彼等の知識慾や好奇心だけから來たものだとするにもせよ、——それらだけから來たものでないことは、我々から見れば無論のこと

だが、――彼等は次第に彼等の生活上からさういふ研究が必要だといふことを學ぶやうになつたのである。學窓が現實社會と隔絶したものだとか、學生生活が社會的動搖と無關係のものだとか、といふやうなことが信ぜられたのは、最早過去の夢となつて來てゐるものである。今日では、たとへば、一般社會の景氣不景氣といふやうな經濟界の現象が、直ちに數量的にも就學狀態の上に反應するやうにもなつてゐれば、また內閣の交迭といふやうな政界の葛藤までが、敎育政策とか敎育行政上の方針とかの上に於けるその時々の變動を通じて、直接的に學術的活動上の便不便に影響するやうにもなつて來てゐる。殊に最近の青年學生界は、軍事敎育實施の下に、その點を痛切に――餘りに痛切に――體驗させられて來た。當局者らは努めて、さういふことを學生たちに解らさまいと試みてゐるやうに見えるが、しかしそれにはもう時がおくれてゐる。殊に學生たちの壓倒的大多數は、學窓生活に於て少くとも一度は、――それは卒業期間近になればなるほど、――就職もしくは不就職の問題が彼等に肉薄してゐることの意識から、彼等の生活と一般社會生活との接觸交錯の密接な關係を、しみじみと骨に徹するまでも考へさせられる。この關係を通して見れば、學生生活は、現實社會の不可分的一部である。從つて、現實社會に於ける一つ一つの動搖は、そのままの强度で學生生活に應へて來るのである。それ故に、學生が社會を研究することは、同時に自己を研究することにもなるのである。かくて彼等の社會問題及び社會思想の研究は、最早彼等の生活上の贅澤物ではなく、それの必要物となつて來てゐるのである。今日の青年學生たちの間には、各自の社會意識上の差異だとか、社會的行動意志の有無もしくは厚薄だとかに拘らず、多少の程度に於て社會問題及び社會思想に關する知識を求めてゐないものが殆んど絶無の姿だといふことは、多少とも彼等に接觸する機會を持つものの、一樣に承認しない譯に行かないことである

資本社會に於ける生産と消費との關係の根柢に潜む最も深刻な矛盾の最も露骨な表象であるところの恐慌、及びそれ

と不可分的交渉を持つ失業問題は、現在の世界の各部を通じて、資本主義の最後の總體的崩壊を不可避的なものに描き出してゐるところの、あらゆる諸現象中の最も顯著な現象である。我々の眼に觸れる資本主義の末期の陰慘な諸形相は、すべてみな、結局皆そこを通じて、我々の前に現はれてゐるのである。それは全社會の一般的問題ではあるが、特に最も直接に無産階級の問題であり、またそれと殆んど同程度に、若しくは少くともそれに次いで、知識階級の問題でもあり、更らにまたそれが知識階級の問題であることを通じて、稍々間接的にはなつて來るが、同時に青年學生たちの問題でもある。彼等は今や、それを痛切に意識せずには居られない境遇におかれてゐるのである。しかも彼等のこの意識は、彼等の卒業期に近づけば近づくほど、そして就職問題からの脅威が具體的に感じられるやうになればなるほど、益々尖銳化させられて來るのである。この點だけから考へても、今日の青年學生たちが社會問題や社會思想の研究に無關心でゐられないことの理由が、誰れにでも容易に看取されなければならない筈である。

四、就職問題と社會思想

けれども、若し學生たちが單に就職問題の視角だけから社會を見ようとしてゐるものだとするならば、それには個々の學生の純個人的立場が甚だ多分に含まれてゐるものだとしなければならないことになるのは、當然のことである。もとより就職問題は失業問題と相互に表裏をなしてゐるものとして、客觀的には一の極めて重大なる社會問題を構成するものには相違ないが、しかし個々の學生が主として個人的動機からそれに對立するとき、それに主體的には、――もしくは現實にそれに對立する個々の學生たちに取つては、――著るしく彼等の各々の個人的立場によつて色づけられた問題となるのである。

だが、——彼等は次第に彼等の生活上からさういふ研究が必要だといふことを學ぶやうになつたのである。學窓が現實社會と隔絶したものだとか、學生生活が社會的動搖と無關係のものだとか、といふやうなことが信ぜられたのは、最早過去の夢となつて來てゐるものである。今日では、たとへば、一般社會の景氣不景氣といふやうな經濟界の現象が、直ちに數量的にも就學狀態の上に反應するやうにもなつてゐれば、また內閣の交迭といふやうな政界の葛藤までが、教育政策とか教育行政上の方針とかの上に於けるその時々の變動を通じて、直接的に學術的活動上の便不便に影響するやうにもなつて來てゐる。殊に最近の青年學生界は、軍事教育實施の下に、その點を痛切に——餘りに痛切に——體驗させられて來た。當局者らは努めて、さういふことを學生たちに解らさまいと試みてゐるやうに見えるが、しかしそれにはもう時がおくれてゐる。殊に學生たちの壓倒的大多數は、學窓生活に於て少くとも一度は、——それは卒業期間近になればなるほど、——就職もしくは不就職の問題が彼等に肉薄してゐることの意識から、彼等の生活と一般社會生活との接觸交錯の密接な關係を、しみじみと骨に徹するまでも考へさせられる。この關係を通して見れば、學生生活は、現實社會の不可分的一部である。從つて、現實社會に於ける一つ一つの動搖は、そのままの強度で學生生活に應へて來るのである。それ故に、學生が社會を研究することは、同時に自己を研究することにもなるのである。かくて彼等の社會問題及び社會思想の研究は、最早彼等の生活上の贅澤物ではなく、それの必要物となつて來てゐるのである。今日の青年學生たちの間には、各自の社會意識上の差異だとか、社會的行動意志の有無もしくは厚薄だとかに拘らず、多少の程度に於て社會問題及び社會思想に關する知識を求めてゐないものが殆んど絶無の姿だといふことは、多少とも彼等に接觸する機會を持つものの、一樣に承認しない譯に行かないことであ

資本社會に於ける生産と消費との關係の根柢に潜む最も深刻な矛盾の最も露骨な表象であるところの恐慌、及びそれ

と不可分的交渉を持つ失業問題は、現在の世界の各部を通じて、資本主義の最後の總體的崩壞を不可避的なものに描き出してゐるところの、あらゆる諸現象中の最も顯著な現象である。我々の眼に觸れる資本主義の末期の陰慘な諸形相は、すべてみな、結局皆そこを通じて、我々の前に現はれてゐるのである。それは全社會の一般的問題ではあるが、特に最も直接に無産階級の問題であり、またそれと殆んど同程度に、若しくは少くともそれに次いで、知識階級の問題でもあり、更らにまたそれが知識階級の問題であることを通じて、稍々間接的にはなつて來るが、同時に青年學生たちの問題でもある。彼等は今や、それを痛切に意識せずには居られない境遇におかれてゐるのである。しかも彼等のこの意識は、彼等の卒業期に近づけば近づくほど、そして就職問題からの脅威が具體的に感じられるやうになればなるほど、益々尖銳化させられて來るのである。この點だけから考へても、今日の青年學生たちが社會問題や社會思想の研究に無關心でゐられないことの理由が、誰れにでも容易に看取されなければならない筈である。

四、就職問題と社會思想

けれども、若し學生たちが單に就職問題の視角だけから社會を見ようとしてゐるものだとするならば、それには個々の學生の純個人的立場が甚だ多分に含まれてゐるものだとしなければならないことになるのは、當然のことである。もとより就職問題は失業問題と相互に表裏をなしてゐるものとして、客觀的には一の極めて重大なる社會問題を構成するものには相違ないが、しかし個々の學生が主として個人的動機からそれに對立するとき、それに主體的には、——もしくは現實にそれに對立する個々の學生たちに取つては、——著るしく彼等の各々の個人的立場によつて色づけられた問題となるのである。

ところで、實際問題として一般學生たちの社會研究の態度を見るとき、そこに右の意味に於ける個人的立場が相當の程度に混入してゐるといふことは、公平に認識されなければならないことである。先づ第一に、彼等の間には意識的にか無意識的にか、主として右の意味に於ける個人的立場から出た動機によつて、彼等の社會研究に赴いたものも、決して少くないとはいへまい。更らにまたその中には、何時までもその個人的立場に終始して、それから離れ切らないままで學生生活を過ごしてしまふものも相當に多くあることも、少くとも外部的狀況からは判斷し得られる。だが、それかと言つて、今日の青年學生たちの社會研究の態度が全部さうだと決めて掛るやうなことは、事實を無視した無鐵砲な臆斷だといはなければならぬ。大體上からいへば、社會研究に身心を捧げてゐる多數の學生たちは、決して單に個人的立場だけから、——若しくは少くとも就職問題の視角だけから、——さうしてゐるのではない。否、彼等はもつと廣い社會的立場から、彼等の對象を見つめてゐるのである。もとより、その個人的立場と社會的立場とは、實際上、分明にけじめが附けられないやうに密接に緊聯されてゐるものではあるが、しかし後者が時と共にだんだんと現實的に主導的地位を占めるやうになつて來てゐることだけは、全體としての彼等の行動の傾向を注視してゐるものには、明細に認識し得られることでもあり、また事實上多くの人々に依つて認識されてゐることでもある。——支配階級の彼等に對する攻勢も、實はその認識から出てゐるものであるが、しかしそれは茲では後の問題として保留しておく。——もつとも、かういふことは、一の傾向としては、極めて初期に屬する頃から可なり明かに見られたことだが、しかし最近年になるほど、加速度的に昂進して來たものである。それには、一般の社會的變動が最も多く働きかけたといふことも、無論のこととして承認され得る。

この問題の考察に際しても我々に、いはゆる個人的立場と社會的立場とが、殆どすべての點で、相互的に多の程度

に密接に連結し合つてゐて、そこに純粹の個人的立場といふものもなければ、そこにまた純粹に社會的立場といふものもなく、しかも我々がそれらの二つのものを我々の思惟の下で別々に把握することが出來るのは、それらの各々の極端な例に屬するものの場合の外は、すべて皆、單なる抽象化の手段によるものに外ならないことを、泌々と感じさせられるのである。たとへば、學生たちが彼等の卒業後の生活問題を考慮するとしても、彼等は彼等の各自の一身上の處置といふことを中心として、その問題に近づくことも出來れば、また智識階級の前途といふやうな、もつと廣い見地から、さうすることも出來るのである。しかし彼等がその一方のことをしてゐれば、それは必ずどの點かで他方のことに引ツ懸りが出て來て、そしてその逆を行つても、矢張り同じことになるのである。のみならず彼等は、彼等がどちらの方面から思惟を進めて行つても、今言つた通りに途中で兩方の見地が獨りでに交錯し合つてしまふばかりでなく、それらがさういふ風に交錯し合つたままで、結極は社會生活全面の動きに對する綜合的觀察の中に吸收されてしまふやうにならなければ已まないことを、間もなく發見しないでは居られなくなるのである。しかも彼等の觀察や研究や思索が着實であればあるほど、益々さうした結果が一層避けられないものになつて來るのである。

右の點を今少しく例示的に説明すると、次のやうなことも言へる。即ち、假りに學生たちが卒業後の就職問題の難關を故障なく通過する見込を立て得た場合を想定するにしても、それから先きの彼等の生活の展望は、大低の場合、決して晴れやかなものではない。それは、單に物質的に甚だ僅かしか酬ひられないばかりではなく、精神的にも何等の感興を喚びさまさないやうな、寧ろ陰慘な生活の展望である。何よりも殊に、それは、彼等に彼等の全職能を硬化し機械化することを要求する、といつたやうな種類の生活の展望である。彼等が學校生活に在つた間に尊重することを學んだ獨創的能力の如きものは、そこでは彼等の生活には何の足しにもならないどころか、却てそれに有害に働くであらうことさ

ところで、實際問題として一般學生たちの社會研究の態度を見るとき、そこに右の意味に於ける個人的立場が相當の程度に混入してゐるといふことは、公平に認識されなければならないことである。先づ第一に、彼等の間には意識的にか無意識的にか、主として右の意味に於ける個人的立場から出た動機によつて、彼等の社會研究に赴いたものも、決して少くないとはいへまい。更らにまたその中には、何時までもその個人的立場に終始して、それから離れ切らないままで學生生活を過ごしてしまふものも相當に多くあることも、少くとも外部的狀況からは判斷し得られる。だが、それかと言つて、今日の青年學生たちの社會研究の態度が全部さうだと決めて掛るやうなことは、事實を無視した無鐵砲な臆斷だといはなければならぬ。大體上からいへば、社會研究に身心を捧げてゐる多數の學生たちは、決して單に個人的立場だけから、——若しくは少くとも就職問題の視角だけから、——さうしてゐるのではない。否、彼等はもつと廣い社會的立場から、彼等の對象を見つめてゐるのである。もとより、その個人的立場と社會的立場とは、實際上、分明にけじめが附けられないやうに密接に聯繫されてゐるものではあるが、しかし後者が時と共にだんだんと現實的に主導的地位を占めるやうになつて來てゐることだけは、全體としての彼等の行動の傾向を注視してゐるものには、明細に認識し得られることでもあり、また事實上多くの人々に依つて認識されてゐることでもある。——支配階級の彼等に對する攻勢も、實はその認識から出てゐるものであるが、しかしそれは茲では後の問題として保留しておく。——もつとも、かういふことは、一の傾向としては、極めて初期に屬する頃から可なり明かに見られたことだが、しかし最近年になるほど、加速度的に昂進して來たものである。それには、一般の社會的變動が最も多く働きかけたといふことも、無論のこととして承認され得る。

この問題の考察に際しても我々は、いはゆる個人的立場と社會的立場とが、殆どすべての點で、相互的に多の程度

に密接に連結し合つてゐて、そこに純粹の個人的立場といふものもなければ、そこにまた純粹に社會的立場といふものもなく、しかも我々がそれらの二つのものを我々の思惟の下で別々に把握することが出來るのは、それらの各々の極端な例に屬するものの場合の外は、すべて皆、單なる抽象化の手段によるものに外ならないことを、沁々と感じさせられるのである。たとへば、學生たちが彼等の卒業後の生活問題を考慮するとしても、彼等は彼等の各自の一身上の處置といふことを中心として、その問題に近づくことも出來れば、また智識階級の前途といふやうな、もつと廣い見地から、さうすることも出來るのである。しかし彼等がその一方のことをしてゐれば、それは必ずどの點かで他方のことに引ツ懸りが出て來て、そしてその逆を行つても、矢張り同じことになるのである。のみならず彼等は、彼等がどちらの方面から思惟を進めて行つても、今言つた通りに途中で兩方の見地が獨りでに交錯し合つてしまふばかりでなく、それらがさういふ風に交錯し合つたままで、結極は社會生活全面の動きに對する綜合的觀察の中に吸收されてしまふやうにならなければ已まないことを、間もなく發見しないでは居られなくなるのである。しかも彼等の觀察や研究や思索が有機的であればあるほど、益々さうした結果が一層避けられないものになつて來るのである。

右の點を今少しく例示的に説明すると、次のやうなことも言へる。即ち、假りに學生たちが卒業後の就職問題の難關を故障なく通過する見込を立て得た場合を想定するにしても、それから先きの彼等の生活の展望は、大低の場合、決して晴れやかなものではない。それは、單に物質的に甚だ僅かしか酬ひられないばかりではなく、精神的にも何等の感興を喚びさまさないやうな、寧ろ陰慘な生活の展望である。何よりも殊に、それは、彼等に彼等の全職能を硬化し機械化することを要求する、といつたやうな種類の生活の展望である。彼等が學校生活に在つた間に尊重することを學んだ獨創的能力の如きものは、そこでは彼等の生活には何の足しにもならないどころか、却てそれに有害に働くであらうことさ

へが豫見される。のみならず、彼等が異常の努力を拂つて漸く手に入れた職業が、殆んど例外なく支配階級への奉仕を意味するものであるところから、屢々無產階級側から『ブルジョアの走狗』の名で呼ばれる地位へ彼等を導かうとしてゐるものであることも考へられる。その癖それは、支配階級側からも、また一般社會からも、一向に重要視されさうにもないものであるところから、彼等の自尊心を傷けるにちがいないやうなものである可能性が最も多い。が、最初は兎に角さういふ地位から出發するにしても、行く行くは自由手腕が振へるやうな地位へ昇進し得る見込みでもあればまだしもだが、それは寧ろ一片の空頼みだといふ方が、事實に近い。ブルジョア社會の職業若しくは地位の段階體系は、ピラミッドのやうに、上ほど狹ばまつてゐて、且つ各階段が多分滿員になつてゐる。それに、彼等が彼等自身のために得る行ひ職業選擇の範圍は年々狹ばめられて行く一方だから、彼等が偶まあり附いた職業は、彼等が現在到達してゐる彼等の社會意識を通じて、彼等の對社會的良心を鋭く刺すやうなものであることが、決して稀れではない。しかし、最も重要なことは、さういつた職業すら、段々と彼等に向つて閉鎖される傾向になつて來てゐる、といふ一點である。即ち今日では、失業——若しくは缺業の問題が、全知識階級を——從つて彼等學生たちをも——最も力強く壓迫してゐるのである。ここに於て、彼等自身の問題は、直接に全知識階級の問題でもあり、またそれと同時に、全社會の問題でもある。といふことになるのである。

かういふことは、今日の多くの學生達が彼等の各自の生活の前途を考慮する際に、極めて普通に、彼等の意識の上に浮ばせる思惟の連鎖を構成するものである。もとよりそこには卑俗な意味に於ける功利的若しくは現實主義的考へ方も、また小市民階級的考へ方も、多分に混入されている。否最も多くの場合に於ては、彼等は始めはさういふ考へ方を主位に置いて彼等の思惟を進めることから出發したといふ方が、寧ろ正しいかもしれない。けれども、彼等のすべては、いつま

でもさうした心境に止まつてゐる者ではない。縱し彼等の或る部分が最後までそこから一歩も先きに進み得ないにもせよ、彼等の或る他の部分は、率先してそこを脫却して、前方へ突き進んで行くのである。併し彼等がさうして前方へ突き進んで行き着く所は、如何なる立場であらうか？　これを我々は、次の問題としなければならない。

五　小市民階級的立場から無產階級立場へ

最後に舉げたグループに屬する學生たちは、彼等の生活の行詰まりは、――從つて知識階級全體の生活の行詰まりは、――結局全社會生活の行詰まりを打開しなければ、どうにもなるものでない、といふ見解の方へ漸次に導かれて行くのである。彼等が彼等自身の生活上の問題を眞劍に考へれば考へるほど、彼等はそれが全社會生活の問題と不可分的に結びついてゐることを洞察するやうになる。そしてそこへ來ると彼等は、單に宗教家が說くやうな個人的救ひとか、道學者が教へるやうな獨善主義といふやうな生活原理の空虛性を知るやうになるばかりでなく、更らに彼等自身が屬する小市民階級内の社會改革家たちが熱心に倡道する各種の改良主義的諸提案の如きものにしてからが、畢竟するに、全社會生活をそれらの對象とするものでなくて、たかだか全社會生活の或る限られたる個々の小局面の上に繕くり細工を加へようとするほどの中途半端のものにすぎないから、それらも到底彼等の問題の最後に解決を與へ得るものでないどころか、寧ろ却てそれを永びかせるものである、といふことを看取するやうになるのである。手短かにいへば、彼等は彼等の問題が、結局社會改造の問題に歸着するといふ結論に到着するのである。かういふ理由によつて、『社會改造』といふ言葉は、社會問題及び社會思想研究の趨勢の初期時代から盛んに使用されて、今日では寧ろ幾分陳腐の響きをさへ與へるやうになつて來てゐるものであるが、しかしそれに含まれてゐる指導原理は、今日でも依然として、その趨勢の主

へが豫見される。のみならず、彼等が異常の努力を拂つて漸く手に入れた職業が、殆んど例外なく支配階級への奉仕を意味するものであるところから、屡々無産階級側から『ブルジョアの走狗』の名で呼ばれる地位へ彼等を導かうとしてゐるものであることも考へられる。その癖それは、支配階級側からも、また一般社會からも、一向に重要視されさうにもないものであるところから、彼等の自尊心を傷けるにちがいないやうなものである可能性が最も多い。が、最初は兎に角さういふ地位から出發するにしても、行く行くは自由手腕が振へるやうな地位へ昇進し得る見込みでもあればまだしもだが、それは寧ろ一片の空頼みだといふ方が、事實に近い。ブルジョア社會の職業若しくは地位の段階體系は、ピラミッドのやうに、上ほど狹ばまつてゐて、且つ各階段が多分滿員になつてゐる。それに、彼等が彼等自身のために得る行ひ職業選擇の範圍は年々狹ばめられて行く一方だから、彼等が偶まあり附いた職業は、彼等が現在到達してゐる彼等の社會意識を通じて、彼等の對社會的良心を鋭く刺すやうなものであることが、決して稀れではない。しかし、最も重要なことは、さういつた職業すら、段々と彼等に向つて閉鎖される傾向になつて來てゐる、といふ一點である。即ち今日では、失業――若しくは缺業の問題が、全知識階級を――從つて彼等學生たちをも――最も力強く壓迫してゐるのである。ここに於て、彼等自身の問題は、直接に全知識階級の問題でもあり、またそれと同時に、全社會の問題でもある。といふことになるのである。

かういふことは、今日の多くの學生達が彼等の各自の生活の前途を考慮する際に、極めて普通に、彼等の意識の上に浮ばせる思惟の連鎖を構成するものである。もとよりそこには卑俗な意味に於ける功利的若しくは現實主義的考へ方も、また小市民階級的考へ方も、多分に混入されている。否最も多くの場合に於ては、彼等は始めはさういふ考へ方を主位に置いて彼等の思惟を進めることから出發したといふ方が、寧ろ正しいかもしれない。けれども、彼等のすべては、いつま

でもさうした心境に止まつてゐる者ではない。縱し彼等の或る部分が最後までここから一歩も先きに進み得ないにもせよ、彼等の或る他の部分は、率先してそこを脱却して、前方へ突き進んで行くのである。併し彼等がさうして前方へ突き進んで行き着く所は、如何なる立場であらうか？　それを我々は、次の問題としなければならない。

五　小市民階級的立場から無産階級立場へ

最後に舉げたグループに屬する學生たちは、彼等の生活の行詰まりは、——從つて知識階級全體の生活の行詰まりは、——結局全社會生活の行詰まりを打開しなければ、どうにもなるものでない、といふ見解の方へ漸次に導かれて行くのである。彼等が彼等自身の生活上の問題を眞劍に考へれば考へるほど、彼等はそれが全社會生活の問題と不可分的に結びついてゐることを洞察するやうになる。そしてそこへ來ると彼等は、單に宗教家が說くやうな個人的救ひとか、道學者が教へるやうな獨善主義といふやうな生活原理の空虛性を知るやうになるばかりでなく、更らに彼等自身が屬する小市民階級内の社會改革家たちが熱心に唱道する各種の改良主義的諸提案の如きものにしてからが、畢竟するに、全社會生活をそれらの對象とするものでなくて、たかだか全社會生活の或る限られたる個々の小局面の上に繕くり細工を加へようとするほどの中途半端のものにすぎないから、それらも到底彼等の問題の最後に解決を與へ得るものでないどころか、寧ろ却てそれを永びかせるものである、といふことを看取するやうになるのである。手短かにいへば、彼等は彼等の問題が、結局社會改造の問題に歸着するといふ結論に到着するのである。かういふ理由によつて、『社會改造』といふ言葉は、社會問題及び社會思想研究の趨勢の初期時代から盛んに使用されて、今日では寧ろ幾分陳腐の響きをさへ與へるやうになつて來てゐるものであるが、しかしそれに含まれてゐる指導原理は、今日でも依然として、その趨勢の主

潮として續いて來てゐるのである。かう考へて來るとき始めて、今日の學生たちの社會研究の趨勢の中堅をなしてゐる部分が到達した境地は、畢竟無產階級的立場そのものに外ならない、といふことが動かせない最後の斷案となるのである。現代社會の行詰まりといふやうなことは誰れにでも考へられることであり、また社會改造といふやうなことは誰れにでもいへることである。がしかし、それの實行意志を現實的に持つて居るものは、現實の社會的諸關係の上に占めてゐるその現實の地位からそこに就かないで居られなくなつて來てゐる無產階級に外ならないのである。若しくは、更らに精確にいへば、それは、無產階級の現實的地位から生じた無產階級意識に眼ざめた大衆に外ならないのである。それ故に、眞の社會改造の中心問題は、無產階級意識の問題である。そして無產階級的立場に來るといふことは、直接に無產階級意識から出る指導原理を各自の生活規範とするといふことである。

今日の學生の社會研究の中堅分子が、この無產階級的立場に來るまでの過程は、決して直線的最短距離に沿うてあるものではなかつた。彼等が小市民階級意識と絕緣するといふことは、彼等の生活習慣への反逆を意味するものであり、同時にまた、彼等の本來の階級としての自滅を暗示するものであつた。しかしそれは彼等の最後の問題の解決のためには、必然の道程であつた。そして彼等は、最後にそこの通りを越して、漸く現在の境地に辿りついたのである。

我々がかうして彼等の步んで來た道を跡づけて來るときには、我々は一方に於ては、彼等がそこへ到着するまでに、或る程度の意識的努力を費して來たものであることを認めないで居れないと同時に、他方に於てはまた、彼等の意識から獨立した或る『必然』の力が彼等をそこまで驅り立て來たものであることを無視することも出來ないのである。そしてこの最後の點は、さきに、思想とその現實的基礎との關係を闡明したときに、既に一瞥を與へておいたものである。我々は、彼等が彼等と共に同じ道程に出發した彼等の多くの仲間をあとに見殘して前進して來た點に於て、彼等の意識的努

力の尋常以上であつたことを認めるが、しかし彼等より遙かに後れて歩んで居る彼等の仲間も、段々と不可抗的に着々彼等と同じ目標に向つて追ひ詰められつつあるといふ點に於て、そこに彼等の各自の意識的努力でどうにもすることの出來ない或る推進力の存してゐることを見ない譯にはゆかないのである。しかし同様のことは、彼等に向つて壓迫の手を加へようとしてゐる側に就てもまた言ひ得られる。かくして、壓迫側と被壓迫側との衝突は必然不可避的のもののやうにも見えるが、ただしかし、その衝突の結果を緩和するか激成化するかの自由選擇の鍵がいづれかの側に與へられてゐるものとすれば、それは無論事柄の性質上、壓迫側に與へられてゐるものとしなければならぬ。けれども、壓迫側は常に被壓迫側に向つて、あらゆる責任を――屢々彼等自身の責任をも――負擔せしめることを通則としてゐるといふことも、若し我々が過去の永き經驗に信頼することが出來るならば、必ずしも見當外づれでないやうに思はれる。で、萬一さういふことすらも『必然』の部類の中へ入れられなければならないものとすると、我々はただ、現在當局が採用してゐる對學生思想取締政策が戰慄すべき結果を齎さないにも限らないとの豫想の下に、ひそかに警戒してゐる外はないのである。

六　社會科學と方法論としてのマルキシズム

私は既に前節に於て、學生の社會研究の傾向の中心が漸次に無産階級的立場へ移動して來た過程を述べたが、茲では私は、それに附帶して、さうした傾向が社會科學研究の名で呼ばれるやうになつた理由を、極めて簡短にでも附け加へておかうと思ふ。

沿革的にいへば、學生の社會研究の傾向の上に『社會科學』の名稱が始めて與へられたのは、今から約三年前に、所謂共産黨秘密結社事件が起つた年であつた。その頃は、その事件を契機として、勞働運動及びそれ以外の一般の社會運

潮として横いで來てゐるのである。かう考へて來るとき始めて、今日の學生たちの社會研究の趨勢の中堅をなしてゐる部分が到達した境地は、畢竟無產階級的立場そのものに外ならない、といふことが動かせない最後の斷案となるのである。現代社會の行詰まりといふやうなことは誰れにでも考へられることであり、また社會改造といふやうなことは誰れにでもいへることである。がしかし、それの實行意志を現實的に持つて居るものは、現實の社會的諸關係の上に占めてゐるその現實の地位からそこに就かないで居られなくなつて來てゐる無產階級に外ならないのである。若しくは、更らに精確にいへば、それは、無產階級の現實的地位から生じた無產階級意識に眼ざめた大衆に外ならないのである。それ故に、眞の社會改造の中心問題は、無產階級意識の問題である。そして無產階級的立場に來るといふことは、直接に無產階級意識から出る指導原理を各自の生活規範とするといふことである。

今日の學生の社會研究の中堅分子が、この無產階級的立場に來るまでの過程は、決して直線的最短距離に沿うてゐるものではなかつた。彼等が小市民階級意識と絕緣するといふことは、彼等の生活習慣への反逆を意味するものでもあり、同時にまた、彼等の本來の階級としての自滅を暗示するものであつた。しかしそれは彼等の最後の問題の解決のためには、必然の道程であつた。そして彼等は、最後にそこの通りを越して、漸く現在の境地に辿りついたのである。

我々がかうして彼等の歩んで來た道を跡づけて來るときには、我々は一方に於ては、彼等がそこへ到着するまでに、或る程度の意識的努力を費して來たものであることを認めないで居れないと同時に、他方に於てはまた、彼等の意識から獨立した或る『必然』の力が彼等をそこまで驅り立て來たものであることを無視することも出來ないのである。そしてこの最後の點は、さきに、思想とその現實的基礎との關係を闡明したときに、既に一瞥を與へておいたものである。我々は、彼等が彼等と共に同じ道程に出發した彼等の多くの仲間をあとに見殘して前進して來た點に於て、彼等の意識的努

力の尋常以上であつたことを認めるが、しかし彼等より遙かに後れて歩んで居る彼等の仲間も、段々と不可抗的に着々彼等と同じ目標に向つて追ひ詰められつつあるといふ點に於て、そこに彼等の各自の意識的努力でどうにもすることの出來ない或る推進力の存してゐることを見ない譯にはゆかないのである。しかし同樣のことは、彼等に向つて壓迫の手を加へようとしてゐる側に就てもまた言ひ得られる。かくして、壓迫側と被壓迫側との衝突は必然不可避的のもののやうにも見えるが、ただしかし、その衝突の結果を緩和するか激化するかの自由選擇の鍵がいづれかの側に與へられてゐるものとすれば、それは無論事柄の性質上、壓迫側に與へられてゐるものとしなければならぬ。けれども、壓迫側は常に被壓迫側に向つて、あらゆる責任を――屢々彼等自身の責任をも――負擔せしめることを通則としてゐるといふことも、若し我々が過去の永き經驗に信頼することが出來るならば、必ずしも見當外づれでないやうに思はれる。で、萬一さういふことすらも『必然』の部類の中へ入れられなければならないものとすると、我々はただ、現在當局が採用してゐる對學生思想取締政策が戰慄すべき結果を産まないにも限らないとの豫想の下に、ひそかに警戒してゐる外はないのである。

六　社會科學と方法論としてのマルキシズム

私は既に前節に於て、學生の社會研究の傾向の中心が漸次に無產階級的立場へ移動して來た過程を述べたが、茲では私は、それに附帶して、さうした傾向が社會科學研究の名で呼ばれるやうになつた理由を、極めて簡短にでも附け加へておかうと思ふ。

沿革的にいへば、學生の社會研究の傾向の上に『社會科學』の名稱が始めて與へられたのは、今から約三年前に、所謂共產黨秘密結社事件が起つた年であつた。その頃は、その事件を楔機として、勞働運動及びそれ以外の一般の社會運

動の上に、主として戰術上の考慮から、所謂『方向轉換』の必要が各方面で意識されかけてゐた時であつた。さういふ事情が一般世間で注目されかけてゐた際に當つて、社會問題及び社會思想の研究に熱中してゐた一團の學生たちは、『社會科學』の名稱を彼等の研究事業の上に用ひ始め、續いて彼等の奔走盡力の結果、諸學校の學生間に社會科學研究會が新に興され、更らにそれらの研究會を基礎とした學生社會科學聯合會が組織される運びとなつたのであつた。

かういふ關係から、世間の一部には、それらの學生たちが、單に社會科學の名を彼等の保護色としようといふ動機から、さういふことをやり出したのだ、とのやうな解釋を下したものも少くはなかつた。しかしながら、この解釋は、決して事實の眞相を得てゐたものではなかつた。だが同時にそれは、必ずしも徹頭徹尾虚妄の言といふ譯のものでもなかつた。といふのは、それよりさき、社會研究に熱中してゐた學生たちの中には、段々と單なる研究だけでは滿足がしきれなくなつて、何時となく實行運動の方面へ飛び出し、しかもさうした傾向の初期に見られがちな極端な小兒病的熱狂行動に導かれて行つたものが少からず出て來たところから、當局がそれを口實としてかのやうに、社會研究に携はつてゐた學生たちの全部に向つて堪へ難き壓迫を加へてゐたので、學生側にはこの形勢を幾分でも緩和したいといふ希望が現はれたことは、たしかに事實だつたのだからである。無論彼等は、社會科學の名稱を單にその目的だけから擇んだものではなかつたが、しかしそれが彼等のその希望と全然無關係だつたといふやうなことも、恐らく幾分か言ひ過ぎになるであらう。

が、さういふこともあつたにはあつたが、しかしそれは決して、社會科學研究會の名稱を帶びた學生の研究團體が起されるに至つた主要動機でなかつたといふことだけは確かである。しからばその所謂主要動機は何であつたかと言ふと、私が關知する限りでは、まづ第一にそれは、關係學生たちが、從前に於ける彼等の研究の不足の意識から起つたことで

あつた。彼等は知識階級が社會運動に對して貢獻し得る最大のものは、それに必要な學術上の知識を通じてであることを意識したところから、更により多くの研究への要求を痛感するやうになつたのである。第二にそれは、彼等の研究上に於ける、より多くの方法論的統一の必要の意識から起つたことであつた。そのことは『社會科學』の名に依つて示唆されてゐる。即ち彼等は、彼等の社會研究を科學的基礎の上に持つて來ることに依つて、そこに方法論的統一を實現しようと企てるやうになつたのである。それに、從前に於ては、彼等の研究上に於ける方法論的統一の缺乏が、單に研究上の効果を妨げたばかりでなく、實際上彼等の立場の上に不必要の障碍までを持ち來たしてゐたのであつたが、彼等は彼等のこの新計畫によつて、さうして不便を取り除かうと圖るやうになつたのであつた。第三にそれは、彼等の團體研究の必要への意識から起つたことであつた。それは特に、彼等の研究の對象の性質にも關係のあることでもあつた。もとより、如何なる題材の研究の場合でも、團體研究と個人研究とが相互補償的に並用されることが、少くとも研究上有効であることは一般に承認されなければならない筈のことである。がしかし、殊に社會科學の場合に在つては、研究資料であるところの事實や、統計や、實驗などの蒐集上、及び研究發表とその相互批判との便宜上から、適當に導かれる團體研究は非常な偉大なる効力を發揮するものである。學生たちはそこに着眼して、それから期待し得られる限りの利益を極度に收めようと圖つたのである。尤も彼等が諸學校の學生間の聯絡機關としての學生社會科學聯合を組織したのは、當局と世間から來る無理解な壓迫に對する防衛上の意味も含まれてゐたものとすることは、必ずしも不當な推測ではあるまいと思はれるが、しかし大體上に於て、それとても社會科學研究會と同樣に、主として名實共に社會科學が研究團體として企てられたものに外ならないのである。もとより、自然科學の場合と同樣に、社會科學の場合に於ても、科學が人生に對して持つその本質的價値は、それが現實生活に密接の交渉を持つてゐる點に在るものだといふことは、

動の上に、主として戰術上の考慮から、所謂『方向轉換』の必要が各方面で意識されかけてゐた時であつた。さういふ事情が一般世間で注目されかけてゐた際に當つて、社會問題及び社會思想の研究に熱中してゐた一團の學生たちは、『社會科學』の名稱を彼等の研究事業の上に用ひ始め、續いて彼等の奔走盡力の結果、諸學校の學生間に社會科學研究會が簇に興され、更にそれらの研究會を基礎とした學生社會科學聯合會が組織される運びとなつたのであつた。

かういふ關係から、世間の一部には、それらの學生たちが、單に社會科學の名を彼等の保護色としようといふ動機から、さういふことをやり出したのだ、とのやうな解釋を下したものも少くはなかつた。しかしながら、この解釋は、決して事實の眞相を得てゐたものではなかつた。だが同時にそれは、必ずしも徹頭徹尾虛妄の言といふ譯のものでもなかつた。といふのは、それよりさき、社會研究に熱中してゐた學生たちの中には、段々と單なる研究だけでは滿足がしきれなくなつて、何時となく實行運動の方面へ飛び出し、しかもさうした傾向の初期に見られがちな極端な小兒病的熱狂行動に導かれて行つたものが少からず出て來たところから、當局がそれを口實としてかのやうに、社會研究に携はつてゐた學生たちの全部に向つて堪へ難き壓迫を加へてゐたので、學生側にはこの形勢を幾分でも緩和したいといふ希望が現はれたことは、たしかに事實だつたのだからである。無論彼等は、社會科學の名稱を單にその目的だけから採んだものではなかつたが、しかしそれが彼等のその希望と全然無關係だつたといふやうなことも、恐らく幾分か言ひ過ぎになるであらう。

が、さういふこともあつたにはあつたが、しかしそれは決して、社會科學研究會の名稱を帶びた學生の研究團體が起されるに至つた主要動機でなかつたといふことだけは確かである。しからばその所謂主要動機は何であつたかと言ふと、私が關知する限りでは、まづ第一にそれは、關係學生たちが、從前に於ける彼等の研究の不足の意識から起つたことで

あつた。彼等は知識階級が社會運動に對して貢獻し得る最大のものは、それに必要な學術上の知識を通じてであることを意識したところから、更により多くの研究への要求を痛感するやうになつたのである。第二にそれは、彼等の研究上に於ける、より多くの方法論的統一の必要の意識から起つたことであつた。そのことは『社會科學』の名に依つて示唆されてゐる。即ち彼等は、彼等の社會研究を科學的基礎の上に持つて來ることに依つて、そこに方法論的統一を實現しようと企てるやうになつたのである。それに、從前に於ては、彼等の研究上に於ける方法論的統一の缺乏が、單に研究上の効果を妨げたばかりでなく、實際上彼等の立場の上に不必要の障碍までを持ち來たしてゐたのであつたが、彼等は彼等のこの新計畫によつて、さうして不便を取り除かうと圖るやうになつたのであつた。第三にそれは、彼等の團體研究の必要への意識から起つたことであつた。それは特に、彼等の研究の對象の性質にも關係のあることでもあつた。もとより、如何なる題材の研究の場合でも、團體研究と個人研究とが相互補償的に並用されることが、少くとも研究上有効であることは一般に承認されなければならない筈のことである。がしかし、殊に社會科學の場合に在つては、研究資料であるところの事實や、統計や、實驗などの蒐集上、及び研究發表とその相互批判との便宜上から、適當に導かれる團體研究は非常な偉大なる効力を發揮するものである。學生たちはそこに着眼して、それから期待し得られる限りの利益を極度に收めようと圖つたのである。尤も彼等が諸學校の學生間の聯絡機關としての學生社會科學聯合を組織したのは、當局と世間から來る無理解な壓迫に對する防衛上の意味も含まれてゐたものとすることは、必ずしも不當な推測ではあるまいと思はれるが、しかし大體上に於て、それとても社會科學研究會と同様に、主として名實共に社會科學が研究團體として企てられたものに外ならないのである。もとより、自然科學の場合と同様に、社會科學の場合に於ても、科學が人生に對して持つその本質的價値は、それが現實生活に密接の交渉を持つてゐる點に在るものだといふことは、

一般によく知られて居る通りに、彼等にも充分理解されてゐたばかりでなく、彼等が社會科學に求めてゐたものは畢竟行動の科學であつたことも、且つまた現にそれであることも、そのまま認められなければならないことである。しかしそれは、彼等の社會科學研究團體がどこまでも研究團體として企てられたものであつたといふことを毫も妨げないのである。そして私の信ずる所に依れば、それらの社會科學研究團體は、その間に一二の些細な例外はあつたかは知らないが、しかし大體上に於ては今日まで『社會科學』の研究團體としての領域を超えたやうなことはなかつたのである。

それに關聯して、私は玆で一應、學生の社會科學研究が、方法論的には、段々とマルキシズムによつて統一されてゆく傾向を示してゐる事實を顧みなければならぬ。それは、社會科學研究の中堅分子が、前に言つたやうに、段々と無產階級的立場に立つやうになつて來てゐるといふ事實に、直接に關聯してゐるものである。彼等はさうした關係上、何よりも先づ、資本社會をあるがまゝに認識しようとする欲求を、當然のこととして懷いてゐるものであるが、彼等のこの欲求を最も完全に滿たし得るものは、現在のところ、どの方面を見渡しても、マルキシズム以外にあらうとは考へられないのである。私は玆で社會科學上の方法論としてのマルキシズムに論及しようとしてゐるものではないが、しかしこれだけのことは言ひ得ると確信する。即ち、社會科學的研究方法としてのマルキシズムは、他の如何なる研究方法よりも、少くとも資本社會の實相の解剖及び描出に於て、最も多くの——そして最も優ぐれた——實績を擧げてゐるものである。しかもそれは單に、資本社會の或る一定の發達段階の認識に於てさうした實績を擧げてゐるばかりでなく、それの過去に於ける發生及び成長の過程の敍述に於ても、またそれの將來の傾向の豫測に於ても、到底すべての他の研究方法の及びもつかない實績を擧げて居るものであつて、かうした具體的な實績が、資本社會を對象とする場合の研究方法としてのマルキシズムの價値のテストとなつてゐるものである。無論、社會科學的方法としてのマルキシズムが、既に資

本社會の研究に充分の實績を擧げたものだとすると、それは資本社會以前の社會生活の研究上に適用しても、また資本社會以後のものとして豫想し得られる社會生活の研究上に適用しても、共に正しい方法でなければならないとするのは當然であるが、しかしそれと同時に、研究對象の發展は、同時に研究方法の發展をも促すものであるといふこともまた眞である。それ故に、或る意味からいへば、マルキシズムを不用にするものはマルキシズムだといふことのうちにも、多少の眞理が含まれてゐるものとすることができるのである。が、いづれにしても、マルキシズムは、その根本に於ては、それの現在の形のままで、資本社會の研究に於て多くの優ぐれた實績を擧げた唯一の研究方法だとは、我々から見れば實證的に確認し得られることである。そうしてまた、資本社會に關する活きた實際的知識を切實に要求する學生たちが期せずして、その研究方法としてマルキシズムに就くやうに誘はれて行つたのは、そこにも誰れの力でどうすることも出來ない『必然』の力が働いてゐるものとするより外はないのである。從つてこの傾向は、最も苛酷を極める權力の壓迫を以てしても、徹底的には阻止し得られるものでない。ましてそれは猶更、マルキシズムに對する淺薄な理解——多くの場合には全然の無理解——から出た擬似學術的攻撃に依つては、微動すらも與へられ得るものでない。マルキシズムがそれ自身を不用なものにするに先つて、それを不用なものにする道は、ただ一つある。それは即ち、マルキシズムよりも優ぐれた資本社會に關する新研究方法を案出して、それをその實績と共に、公衆の前に提出することである。但し、そのことの可能不可能は全然別問題である。

七　社會科學に對する攻勢とその歸結

社會科學研究學生たちが、彼等の所要の資本社會に關する知識の獲得に際して、研究方法としてマルキシズムを主位

一般によく知られて居る通りに、彼等にも充分理解されてゐたばかりでなく、彼等が社會科學に求めてゐたものは畢竟行動の科學であつたことも、且つまた現にそれであることも、そのまま認められなければならないことである。しかしそれは、彼等の社會科學研究團體がどこまでも研究團體として企てられたものであつたといふことを毫も妨げないのである。そして私の信ずる所に依れば、それらの社會科學研究團體は、その間に一二の些細な例外はあつたかは知らないがしかし大體上に於ては今日まで『社會科學』の研究團體としての領域を超えたやうなことはなかつたのである。

それに關聯して、私は玆で一應、學生の社會科學研究が、方法論的には、段々とマルキシズムによつて統一されてゆく傾向を示してゐる事實を顧みなければならぬ。それは、社會科學研究の中堅分子が、前に言つたやうに、段々と無產階級的立場に立つやうになつて來てゐるといふ事實に、直接に關聯してゐるものである。彼等はさうした關係上、何よりも先づ、資本社會をあるがまゝに認識しようとする欲求を、當然のこととして懷いてゐるものであるが、彼等のこの欲求を最も完全に滿たし得るものは、現在のところ、どの方面を見渡しても、マルキシズム以外にあらうとは考へられないのである。私は玆で社會科學上の方法論としてのマルキシズムに論及しようとしてゐるものではないが、しかしこれだけのことは言ひ得ると確信する。即ち、社會科學的研究方法としてのマルキシズムは、他の如何なる研究方法よりも、少くとも資本社會の實相の解剖及び描出に於て、最も多くの――そして最も優ぐれた――實績を擧げてゐるものである。しかもそれは單に、資本社會の或る一定の發達段階の認識に於てさうした實績を擧げてゐるばかりでなく、それの過去に於ける發生及び成長の過程の敍述に於ても、またその將來の傾向の豫測に於ても、到底すべての他の研究方法の及びもつかない實績を擧げて居るものであつて、かうした具體的な實績が、資本社會を對象とする場合の研究方法としてのマルキシズムの價値のテストとなつてゐるものである。無論、社會科學的方法としてのマルキシズムが、既に資

本社會の研究に充分の實績を擧げたものだとすると、それは資本社會以前の社會生活の研究上に適用しても、また資本社會以後のものとして豫想し得られる社會生活の研究上に適用しても、共に正しい方法でなければならないとするのは當然であるが、しかしそれと同時に、研究對象の發展は、同時に研究方法の發展をも促すものであるといふこともまた眞である。それ故に、或る意味からいへば、マルキシズムを不用にするものはマルキシズムだといふことのうちにも、多少の眞理が含まれてゐるものとすることができるのである。が、いづれにしても、マルキシズムは、その根本に於ては、それの現在の形のままで、資本社會の研究に於て多くの優ぐれた實績を擧げた唯一の研究方法だとは、我々から見れば實證的に確認し得られることである。そうしてまた、資本社會に關する活きた實際的知識を切實に要求する學生たちが期せずして、その研究方法としてマルキシズムに就くやうに誘はれて行つたのは、そこにも誰れの力でどうすることも出來ない『必然』の力が働いてゐるものとするより外はないのである。從つてこの傾向は、最も苛酷を極める權力の壓迫を以てしても、徹底的には阻止し得られるものでない。ましてそれは猶更、マルキシズムに對する淺薄な理解——多くの場合には全然の無理解———から出た擬似學術的攻撃に依つては、微動すらも與へられ得るものでない。マルキシズムがそれ自身を不用なものにするに先つて、それを不用なものにする道は、ただ一つある。それは即ち、マルキシズムよりも優ぐれた資本社會に關する新研究方法を案出して、それをその實績と共に、公衆の前に提出することである。但し、そのことの可能不可能は全然別問題である。

七　社會科學に對する攻勢とその歸結

社會科學研究學生たちが、彼等の所要の資本社會に關する知識の獲得に際して、研究方法としてマルキシズムを主位

におくやうになつてから、彼等の研究の『自由』の上に、始めて嚴重な限界が畫せられるやうになつた。もとより研究當事者である學生としては、彼等が最も重要視する研究の對象に最もよく適應したものと思惟した研究方法を採用したことは 已むを得ないことであつた。そして文部當局としても、若し彼等が眞に如何なる階級的立場をも離れて、名實共に『國民』敎育の管理者として終始しようとしてゐる——そして終始し得る——ものならば 彼等はそのために社會科學の研究を壓迫する必要と理由とを持たないことはいふまでもないことである。だが、資本主義全盛の社會に於て、彼等が全然階級的立場を離れたところの、名實共に『國民的』な敎育政策を行はうなどといふやうなことは 誰れにも期待が出來ないことである。殊に現在のやうな帝國主義時代に於て、——しかも立法部では 單に上院の白頭議員のみならず、下院に於ける野黨議員までが、文部當局の對學生思想取締の間緩るさを理由として、口やかましく政府攻擊の演說に耽るやうなことすらが怪まれない帝國主義時代に於て、——さういふことを期待するのは、童話を現實生活の記錄と考へるにもました善良さだといはなければならぬ。それ故に、我々は昨今世上で傳へられてゐる通りの社會科學壓迫政策を文部當局が採用することに決心したとしても、一應はそれを當然だといふより外に途を知らない。我々は今や、尋常一樣の自由主義者に做つて、研究の自由の蹂躪に對して抗議する『勇氣』をさへも失つてゐる。——だがしかし、それと同時に我々は、當局の階級的敎育政策の犧牲者として擇び出されて、その研究方法の選擇が當局の氣に入らないといふこと以外の何等の理由もなくその學術的活動の上にもまで 極度の壓迫を加へられようとしてゐる學生たちが、それを當然だと言つて默つて引つ込めるものでないといふことを、ここに一言附け加へておかねばならぬ。

前に言つた通りに、今日の學生たちの生活は、一般社會と隔絕された地位に置かれてゐるものではない。それは文字

通りに、一般社會生活の不可分的一部をなしてゐるものである。從つて、一般社會生活の上に波打つてゐる刻々の脈博は、一々學生たちの神經に響いて來る。殊に現在に於て見られるやうに一般社會生活の各部の上に現出する救ひ難き行詰まり狀態が彼等の生活の前途の展望を非常に暗憺たるものとならしめてゐる時代に於ては、彼等の周圍に去來する一切の社會的激動乃至微動が、一層鋭く彼等によつて感受されるやうになつて來てゐるのである。

それ故に、彼等に取つては、社會を研究することは、或る重要なる意味に於て自己を研究することに當るのである。彼等は今や、安心して自己の生活に無知であることが出來ない程度にまで切迫した地位に追ひつめられてゐる。で彼等は、不可抗的に社會の研究に向はなければならぬ衝動に驅られる。と、何物かが高い處から『それはならない』といふ。若し彼等に唯々諾々としてその聲に從ふことを期待するものがあるならば、それは彼等の現實の生活に對する無理解から來るものであらねばならない。昔の專政政治家は、縱し一時的にもせよ、黔首を愚にすることが出來たかも知れない！がしかし、今日の學生に向つて『自己の生活に無知であれ』とは、唯れが有效に命令することが出來よう。

曾て非常に長期に亘つて、爲政者や教育者から學生に向つて、所謂『實學』なるものが奬勵されたものであつた。それは實際に役立つ學問であり、活きた學問である、とされてゐた。『活眼を以つて活書を讀む』といつたやうな言葉が研學のモットーとして、一般教育者によつて、如何に際限もなく繰返されてゐたことであらう！ところが、我々の周圍の社會の現實を科學的に——あるがままに——研究することは、他の何物であるよりも、先づ第一に『實學』であり、『活きた學問』である。そしてそれは、たしかに實際に役立ちもする。それは一部少數の支配階級には有害であるかも知れないが、『人類社會もしくは社會に構成されてゐる人類』から見れば、絕對的に有用なものである。が、文政の當局者が一部少數の支持階級の利害關係の視角だけから、さうした『實學』の研究を學生たちに禁ずるとき、それが彼等の上に如何なる反應を起すべきかは、深く問ふまでもないことである。

學生の生活の重要な一面が研究の生活であることは、誰れもが承認しなければならないことである。が、當局者は歷

におくやうになつてから、彼等の研究の『自由』の上に、始めて嚴重な限界が畫せられるやうになつた。もとより研究當事者である學生としては、彼等が最も重要視する研究の對象に最もよく適應したものと思惟した研究方法を採用したことは　已むを得ないことであつた。そして文部當局としても、若し彼等が眞に如何なる階級的立場をも離れて、名實共に『國民』教育の管理者として終始しようとしてゐる——そして終始し得る——ものならば　彼等はそのために社會科學の研究を壓迫する必要と理由とを持たないことはいふまでもないことである。だが、資本主義全盛の社會に於て、彼等が全然階級的立場を離れたところの、名實共に『國民的』な教育政策を行はうなどといふやうなことは　誰れにも期待が出來ないことである。殊に現在のやうな帝國主義時代に於て、——しかも立法部では　單に上院の白頭議員のみならず、下院に於ける野黨議員までが、文部當局の對學生思想取締の開緩るさを理由として、口やかましく政府攻撃の演說に耽るやうなことすらが怪まれない帝國主義時代に於て、——さういふことを期待するのは、童話を現實生活の記錄と考へるにもまして善良さだといはなければならぬ。それ故に、我々は昨今世上で傳へられてゐる通りの社會科學會壓迫政策を文部當局が採用することに決心したとしても、一應はそれを當然だといふより外に途を知らない。我々は今や、尋常一樣の自由主義者に倣つて、研究の自由の蹂躙に對して抗議する『勇氣』をさへも失つてゐる。——だがしかし、それと同時に我々は、當局の階級的教育政策の犧牲者として擇び出されて、その研究方法の選擇が當局の氣に入らないといふこと以外の何等の理由もなくその學術的活動の上にもまで極度の壓迫を加へられようとしてゐる學生たちが、それを當然だと言つて默つて引つ込めるものでないといふことを、ここに一言附け加へておかねばならぬ。

前に言つた通りに、今日の學生たちの生活は、一般社會と隔絶された地位に置かれてゐるものではない。それは文字

通りに、一般社會生活の不可分的一部をなしてゐるものである。從つて、一般社會生活の上に波打つてゐる刻々の脈博は、一々學生たちの神經に響いて來る。殊に現在に於て見られるやうに一般社會生活の各部の上に現出する救ひ難き行詰まり狀態が彼等の生活の前途の展望を非常に暗憺たるものとならしめてゐる時代に於ては、彼等の周圍に去來する一切の社會的激動乃至微動が、一層鋭く彼等によつて感受されるやうになつて來てゐるのである。

それ故に、彼等に取つては、社會を研究することゝは、或る重要なる意味に於て自己を研究することに當るのである。彼等は今や、安心して自己の生活に無知であることが出來ない程度にまで切迫した地位に追ひつめられてゐる。で彼等は、不可抗的に社會の研究に向はなければならぬ衝動に驅られる。と、何物かが高い處から『それはならない』といふ。若し彼等に唯々諾々としてその聲に從ふことを期待するものがあるならば、それは彼等の現實の生活に對する無理解から來るものであらねばならない。昔の專政政治家は、縱し一時的にもせよ、黔首を愚にすることが出來たかも知れない！がしかし、今日の學生に向つて『自己の生活に無知であれ』とは、唯れが有効に命令することが出來よう。

曾て非常に長期に亘つて、爲政者や教育者から學生に向つて、所謂『實學』なるものが獎勵されたものであつた。それは實際に役立つ學問であり、活きた學問である、とされてゐた。『活眼を以つて活書を讀む』といつたやうな言葉が研學のモツトーとして、一般教育者によつて、如何に際限もなく繰返されてゐたことであらう！ところが、我々の周圍の社會の現實を科學的に――あるがまゝに――研究することは、他の何物であるよりも、先づ第一に『實學』であり、『活きた學問』である。そしてそれは、たしかに實際に役立ちもする。それは一部少數の支配階級には有害であるかも知れないが、『人類社會もしくは社會に構成されてゐる人類』から見れば、絶對的に有用なものである。が、文政の當局者が一部少數の支持階級の利害關係の視角だけから、さうした『實學』の研究を學生たちに禁ずるとき、それが彼等の上に如何なる反應を起すべきかは、深く問ふまでもないことである。

學生の生活の重要な一面が研究の生活であることは、誰れもが承認しなければならないことである。が、當局者は屢

々、間違つた學問や惡思想を研究してはならないといふ。ところが、如何なる學問が間違つた學問であり、如何なる思想が惡思想であるかは、研究した後で始めて判ることである。それ故に若し學生が研究を始める前から、當局の間違つた學問として、及び惡思想として指定したものを、一概にさうと斷定してかかるやうなことがあらうものならば、それは明らかに輕信と盲從とである。ところが、輕信と盲從が研究とは正反對の方向を指すものであることは、言ふだけ野暮である。從つて、眞に研究を尊重する學生は、輕信と盲從との强要を甘受し得るものでない。

當局者はまた屢々、中學を出たばかりの學生には社會科學の研究の準備が出來てゐない、といふ樣なことを言ふが、彼等は何故に特に社會科學の場合だけに限つてそれを言ふのであるか？　が、假りに若し、學生が貴重な長い年月を小學及び中學に於ける普通教育の課程に費した後に至つて尙ほ、社會科學の研究に着手する準備さへもできてゐないといふ事が眞ならば、それは學生自身の罪であるよりは、寧ろ我國の教育制度の責任である。その場合には、學生が、何故に我國の教育制度の責任をまで、自己の弱い肩上に負擔しなければならないかを訝かるやうになつたにしても、我々はそれを不當だといふことはできないのである。

當局者はまた屢々、學生の社會科學研究は、動々もすれば彼等を煽つて國法に觸れる行動に赴かしめる危險がある。といふやうな事をいふ。が若し彼等が果して眞にさう考へてゐるものならば、彼等は當然、學生をしてさうした危險に陷ることなしに、研究が續行し得られる樣に指導すべきではないか？　彼等は彼等が日頃の誇りにしてゐる指導者の手前だけでも、それだけの親切氣を出すべき義務があるものと言はなければならない。それにも拘らず、若し彼等が指導に代へるに權力の行使を以てし、新たに思想取締の法令を出して、學生の前に二重の陷穽を設けようとしてゐるものとすれば彼等は學生を敵視した行動に出てゐるものと見られても、そこに何の辯解の言葉があるか？　しかし、若し彼等が、これらのすべてのことは皆教育の帝國主義化の産物だと正直にいふならば、一切の押問題が無益になつて、そしてこの問題が別途から考へ直さなければならないことになるのである。

大山郁夫著

（四六判上製）

定價二圓五十錢
送料二十二錢

現代日本の政治過程

（一）現代に於ける社會思想及び政治事實の進展

（二）現代日本の政治過程

（三）多元的國家觀の法理

改造社發行

々、間違つた學問や惡思想を研究してはならないといふ。ところが、如何なる學問が間違つた學問であり、如何なる思想が惡思想であるかは、研究した後で始めて判ることである。それ故に若し學生が研究を始める前から、當局の間違つた學問として、及び惡思想として指定したものを、一概にさうと斷定してかかるやうなことがあらうものならば、それは明らかに輕信と盲從とである。ところが、輕信と盲從が研究とは正反對の方向を指すものであることは、言ふだけ野暮である。從つて、眞に研究を尊重する學生は、輕信と盲從との强要を甘受し得るものでない。

當局者はまた屢々、中學を出たばかりの學生には社會科學の研究の準備が出來てゐない、といふ樣なことを言ふが、彼等は何故に特に社會科學の場合だけに限つてそれを言ふのであるか？　が、假りに若し、學生が貴重な長い年月を小學及び中學に於ける普通教育の課程に費した後に至つて尙ほ、社會科學の研究に着手する準備さへもできてゐないといふ事が眞ならば、それは學生自身の罪であるよりは、寧ろ我國の教育制度の責任である。その場合には、學生が、何故に我國の教育制度の責任をまで、自己の弱い肩上に負擔しなければならないかを訝かるやうになつたにしても、我々はそれを不當だといふことはできないのである。

當局者はまた屢々、學生の社會科學研究は、動々もすれば彼等を驅つて國法に觸れる行動に赴かしめる危險がある。といふやうな事をいふ。が若し彼等が果して眞にさう考へてゐるものならば、彼等は當然、學生をしてさうした危險に陷ることなしに、研究が續行し得られる樣に指導すべきではないか？　彼等は彼等が日頃の誇りにしてゐる指導癖の手前だけでも、それだけの親切氣を出すべき義務があるものと言はなければならない。それにも拘らず、若し彼等が指導に代へるに權力の行使を以てし、新たに思想取締の法令を出して、學生の前に二重の陷穽を設けようとしてゐるものとすれば彼等は學生を敵視した行動に出てゐるものと見られても、そこに何の辯解の言葉があるか？　しかし、若し彼等が、これらのすべてのことは皆教育の帝國主義化の產物だと正直にいふならば、一切の押問題が無益になつて、そしてこの問題が別途から考へ直さなければならないことになるのである。

農業社會化運動

河田嗣郎

一

近頃農業に對する社會主義者の注意はよほど深くされて來た。即ち農業及農村問題の研究に於ても、又その改善及改革運動に關しても、社會主義者の態度は頗る熱心なるものあるに至つた。特に露西亞に於て革命が行はれ勞農主義が樹てられ、又中歐諸國に於て社會主義若くは社會政策の旗幟の下に農業改革が行はれるに至つてからは、社會主義者の農業に對する接近は甚だ著明なものとなつて來た。惟ふに之は一面に於ては農業及農村問題それ自身が近頃段々喧しい問題となつて來て、世界大戰以來殊に問題の意義と重要さとを増して來て、經濟問題として又社會問題として是非とも十分に講究せられる必要が生じ、その解決もまた一日も忽にすべからざるに至つたに依つて促された現象であると同時に、一面に於ては又社會主義としても農業方面を閑却して居ては、理論として又實際運動として共に完全なるを得ないことが、切實に感じられるに至つたが爲めとしなければならぬ。

従來の狀況に於ては、社會主義は工業勞働問題を地盤としたと見ても大過ない。その理論の構成に於て主として材料を此方面から採つて來たばかりでなく、實際運動の勢力も此の方面に依て支持せられ發展せしめられた。前に述べた樣に、最近には大分樣子が變つて來たけれども、従來諸國の社會黨といはれるものは、多くは農業勞働者ならざる勞働者の政治

的結社であり、勞働組合といへば又多くは農業勞働者ならざる勞働者の組合であつた。即ち英國の勞働黨にしても、主として工業勞働者と礦業勞働者と交通業勞働者との造れる勞働組合を以て基礎と爲し、之に他の消費者團體その他のものが加盟して出來て居るものであつた。獨逸の社會民主黨亦然り、當初殆んど工業勞働者の黨派たる觀があつたのである。

けれども社會主義者の政治的結社は必ず工業勞働者の黨派でなければならぬといふ理論上の根據はなきことである。ただ從來は實際に於ける事情の發展上、工業特に現代的なる大工業に於て資本主義が育成せられ、從て勞働問題も此の方面に於て最も早く展開し、勞働運動も最も多く又最も活潑に此方面に於て行はれたものだから、現代的なる一種の勞働哲學としての社會主義も亦この方面に於てその地盤の上に發育することゝなつたものに過ぎぬ。その事情以外には社會主義及社會主義運動が農業を排除すべき理由もなく、又これを無視すべき原因もなかつたのである。

元來社會主義は一般的なる世界觀に立脚し、社會生活の一般的原理に關する一體系である。社會主義運動は從てまた社會全體ひいては人類一般の福祉の增進を以てその最高の目標とする。社會主義運動は決して一部類の者の利益を代表するものではないのである。たとへそれが勞働問題の解決の爲にする運動であらうとも、それは決して工業勞働者のみの利益の爲めに行はれるものではない。否更に廣く之を見て勞働者といふ部類の人々の利益の爲めにのみ行はれる運動でもない。又たとへそれが無產階級の解放運動であらうとも、それはたゞ無產階級の利益をさへ增進しその福祉を十分ならしむれば足れりとするものではない。勞働者に關する問題を解決し無產階級を解放することに依て全社會の調和を圖り社會一般の發達を齎し、社會の各人をして平等に生存上の機會に霑ふを得せしめ、人格の完成と能力の發揮とに關して、均等なる社會的待遇を得せしむることも亦、社會主義運動の目的とする所である。社會主義は實に斯かる社會の實現を以て最も合理的なりとする主張である。

農業社會化運動

河田嗣郎

一

近頃農業に對する社會主義者の注意はよほど深くされて來た。即ち農業及農村問題の研究に於ても、又その改善及改革運動に關しても、社會主義者の態度は頗る熱心なるものあるに至つた。特に露西亞に於て革命が行はれ勞農主義が樹てられ、又中歐諸國に於て社會主義若くは社會政策の旗幟の下に農業改革が行はれるに至つてからは、社會主義者の農業に對する接近は甚だ著明なものとなつて來た。惟ふに之は一面に於ては農業及農村問題それ自身が近頃段々喧しい問題となつて來て、世界大戰以來殊に問題の意義と重要さとを増して來て、經濟問題として又社會問題として是非とも十分に講究せられる必要が生じ、その解決もまた一日も忽にすべからざるに至つたに依つて促された現象であると同時に、一面に於ては又社會主義としても農業方面を閑却して居ては、理論として又實際運動として共に完全なるを得ないことが、切實に感じられるに至つたが爲めとしなければならぬ。

從來の狀況に於ては、社會主義は工業勞働問題を地盤としたと見ても大過ない。その理論の構成に於て主として材料を此方面から採つて來たばかりでなく、實際運動の勢力も此の方面に依て支持せられ發展せしめられた。前に述べた樣に、最近には大分樣子が變つて來たけれども、從來諸國の社會黨といはれるものは、多くは農業勞働者ならざる勞働者の政治

的結社であり、勞働組合といへば又多くは農業勞働者ならざる勞働者の組合であつた。即ち英國の勞働黨にしても、主として工業勞働者と礦業勞働者と交通業勞働者との造れる勞働組合を以て基礎と爲し、之に他の消費者團體その他のものが加盟して出來て居るものであつた。獨逸の社會民主黨亦然り、當初殆んど工業勞働者の黨派たる觀があつたのである。

けれども社會主義者の政治的結社は必ず工業勞働者の黨派でなければならぬといふ理論上の根據はなきことである。ただ從來は實際に於ける事情の發展上、工業特に現代的なる大工業に於て資本主義が育成せられ、從て勞働問題も此の方面に於て最も早く展開し、勞働運動も最も多く又最も活潑に此方面に於て行はれたものだから、現代的なる一種の勞働哲學としての社會主義も亦この方面に於てその地盤の上に發育することゝなつたものに過ぎぬ。その事情以外には社會主義及社會主義運動が農業を排除すべき理由もなく、又これを無視すべき原因もなかつたのである。

元來社會主義は一般的なる世界觀に立脚し、社會生活の一般的原理に關する一體系である。社會主義運動は從てまた社會全體ひいては人類一般の福祉の增進を以てその最高の目標とする。社會主義運動は決して一部類の者の利益を代表するものではないのである。たとへそれが勞働問題の解決の爲にする運動であらうとも、それは決して工業勞働者のみの利益の爲めに行はれるものではない。否更に廣く之を見て勞働者といふ部類の人々の利益の爲めにのみ行はれる運動でもない。又たとへそれが無產階級の解放運動であらうとも、それはたゞ無產階級の利益をさへ增進しその福祉を十分ならしむれば足れりとするものではない。勞働者に關する問題を解決し無產階級を解放することに依て全社會の調和を圖り社會一般の發達を齎し、社會の各人をして平等に生存上の機會に與ふを得せしめ、人格の完成と能力の發揮とに關して、均等なる社會的待遇を得せしむることが、社會主義運動の目的とする所である。社會主義は實に斯かる社會の實現を以て最も合理的なりとする主張である。

農業社會化運動

河田嗣郎

一

近頃農業に對する社會主義者の注意はよほど深くされて來た。即ち農業及農村問題の研究に於ても、又その改善及改革運動に關しても、社會主義者の態度は頗る熱心なるものあるに至つた。特に露西亞に於て革命が行はれ勞農主義が樹てられ、又中歐諸國に於て社會主義若くは社會政黨の旗幟の下に農業改革が行はれるに至つてからは、社會主義者の農業に對する接近は甚だ著明なものとなつて來た。惟ふに之は一面に於ては農業及農村問題それ自身が近頃段々喧しい問題となつて來て、世界大戰以來殊に問題の意義と重要さとを增して來て、經濟問題として又社會問題として是非とも十分に講究せられる必要が生じ、その解決もまた一日も忽にすべからざるに至つたに依つて促された現象であると同時に、一面に於ては又社會主義としても農業方面を閑却して居ては、理論として又實際運動として共に完全なるを得ないことが、切實に感じられるに至つたが爲めとしなければならぬ。

從來の狀況に於ては、社會主義は工業勞働問題を地盤としたと見ても大過ない。その理論の構成に於て主として材料を此方面から採つて來たばかりでなく、實際運動の勢力も此の方面に依て支持せられ發展せしめられた。前に述べた樣に、最近には大分樣子が變つて來たけれども、從來諸國の社會黨といはれるものは、多くは農業勞働者ならざる勞働者の政治

的結社であり、勞働組合といへば又多くは農業勞働者たらざる勞働者の組合であつた。社會主義政黨の如き黨派に於ても、主として工業勞働者と鑛業勞働者と交通業勞働者との選れた勞働組合を以て其母體と爲し、之に他の消費者團體その他のものが加盟して出來て居るものであつた。獨逸の社會民主黨亦然り、當初殆んど工業勞働者の黨派たる觀があつたのである。

けれども社會主義者の政治的結社は必ず工業勞働者の黨派でなければならぬといふ理論上の根據はなきことである。たゞ從來は實際に於ける事情の發展上、工業特に現代的なる大工業に於て資本主義が育成せられ、從て勞働問題も此の方面に於て最も早く展開し、勞働運動も最も多く又最も活潑に此方面に於て行はれたものだから、現代的なる一種の勞働哲學としての社會主義も亦この方面に於てその地盤の上に發育することゝなつたものに過ぎぬ。その事情以外には社會主義及社會主義運動が農業を排除すべき理由もなく、又これを無視すべき原因もなかつたのである。

元來社會主義は一般的なる世界觀に立脚し、社會生活の一般的原理に關する一體系である。社會主義運動は從てまた社會全體ひいては人類一般の福祉の增進を以てその最高の目標とする。社會主義運動は決して一部類の者の利益を代表するものではないのである。たとへそれが勞働問題の解決の爲にする運動であらうとも、それは決して工業勞働者のみの利益の爲めに行はれるものではない。否更に廣く之を見て勞働者といふ部類の人々の利益の爲めにのみ行はれる運動でもない。又たとへそれが無產階級の解放運動であらうとも、それはたゞ無產階級の利益をさへ增進しその福祉を十分ならしむれば足れりとするものではない。勞働者に關する問題を解決し無產階級を解放することに依て全社會の調和を圖り社會一般の發達を齎し、社會の各人をして平等に生存上の機會に浴ふを得せしめ、人格の完成と能力の發揮とに關して、均等なる社會的待遇を得せしむることが、社會主義運動の目的とする所である。社會主義は實に斯かる社會の實現を以て最も合理的なりとする主張である。

今一度これをいへば、社會主義運動の目的とする所は、一般的なる新經濟主義を樹立するに在る。即ち一般全部としての社會の改造と、一般としての文化一般の向上とに在る。此事は苟も社會主義たるものゝ齊しく目的とする所であり、社會主義的黨派の一樣に目標とする所であつて、その運動はこの最高目的に向つて進む外はなきものである。

されば今社會主義にして農業と農村方面とを閑却するが如きことあり、その研究はたゞ工業勞働問題に關してのみ行はれたり、礦業乃至は交通業勞働問題を併せ研究するのみで自ら足れりとし、その運動はまた農業問題の解決を度外視するやうなことがあつては、それは社會主義理論としても甚だ不完全なるものたるを免れ難く、社會主義運動としては甚だ片手落たる譏を避くる由がない。所が從來の實狀に於ては、この非難を招くことの如何ともし難きものがあつた。特に社會主義運動の初期に於て農業方面の忘れられたる嫌があつた。

よし農村問題は全然閑却せられないにしても、大抵の社會主義者の所見と、社會主義運動の政綱とは、工業勞働狀態の觀察に依て得られたる材料に據り、又之が研究に依て獲されたる結論をば、直ちに其儘に農業に當篏めんとしたのであつて、この事は之を社會主義運動の歴史に照し見れば、掩ふに由なきものがある。

けれども今や事情は變化して來た。啻に社會主義運動に於て農業方面を等閑に附することを許さない實狀が生じて來たばかりでなく、社會主義理論を構成するに就いては、農業方面に關しては、よく農業そのものゝ性質を明かにし、その生産の實狀から勞働の實狀に至るまで、十分詳細な研究を遂げた上で、よく之に適合するやうな理論を立てなくては、社會主義と農業とは遂に緣なき衆生たる外はなきことが、社會主義者に依ても段々自覺せざるべからざるに立至つたのである。この農業の特性研究の必要といふことは彼の修正派の社會主義者の主張に依て高調せられて以來、大いに一般の注意を喚起するには至つたが、露西亞に於ける共産主義建設の實際運動が、農村の事情の爲めに當初の計畫

を失敗に歸せしめ、革命事業の跡始末としては、殆んど根抵から計畫を變更して、殆んど新らしい主義と、方針の下に建設の功を收むる外なきに至らしめた實物教育は、更に一層深刻に一般の反省を促すに至つた。

然らば社會主義者が初めて農業に對して積極的の態度を示し、農業の改造に關する纏つた意見を公するに至つたのは、何時頃からのことであるか。又その當初の改造意見なるものが、よく農業の實狀に適合し農民の眞實之を要求し又援助するを喜ぶものであつたか、それともそれは工業勞働や工業生産について得られたる智識と改造計畫とを直ちに其儘に農業に當箝めんとするものに過ぎないで、農業に關する特殊研究の行はれる結果として成れるものでなく、從て農業生産の眞の性狀にも適合せず、又農民の要求する所にも適中せず、更には廣く農民心理にも合致しないものであつたか。其後又引續いて表はれたる社會主義者の農業改造の意見はどの位變調を呈して來たか。以下少しく其の意見と運動とを述べてみやう。

二

農業に對する社會主義運動の見地は、一八六四年に倫敦に設けられたる國際勞働協會 The International Labourers Association に依て初めて大體決定されたのである。然るに一八六七年に瑞西のローザンヌに開かれた協議會に於ては佛蘭西から出席したプルードン派の社會主義者等とマルキシストとの間に土地問題に關して甚しき意見の相違を見るに至つた。即ち土地所有制に就いて前者は小農地所有制を支持し、之を以て個人的自由の保障さるゝ基礎を爲すものだと主張したのである。然るにマルキシストは土地の公有制を主張し、大農地たると小農地たるとを問はず、土地私有制の行はるゝことを以て、農村にも資本的搾取の行はれる道を存せしむるものと考へた。そしてマルキシストが土地公有制なら

今一度これをいへば、社會主義運動の目的とする所は、一般的なる新經濟主義を樹立するに在る。即ち一部全部としての社會の改造と、一部分としての文化一般の向上とに在る。此事は何も社會主義たるものゝ齊しく目的とする所であり、社會主義的黨派の一樣に目標とする所であつて、その運動はこの最高目的に向つて進む外はなきものである。

されば今社會主義にして農業と農村方面とを閑却するが如きことあり、その研究はたゞ工業勞働問題に關してのみ行はれたり、礦業乃至は交通業勞働問題を併せ研究するのみで自ら足れりとし、その運動はまた農業問題の解決を度外視するやうなことがあつては、それは社會主義理論としても甚だ不完全なものたるを免れ難く、社會主義運動としては甚だ片手落たる譏を避くる由がない。所が從來の實狀に於ては、この非難を招くことの如何ともし難きものがあつた。特に社會主義運動の初期に於て農業方面の忘れられたる嫌があつた。

よし農村問題は全然閑却せられないにしても、大抵の社會主義者の所見と、社會主義運動の政綱とは、工業勞働狀態の觀察に依て得られたる材料に據り、又之が研究に依て係されたる結論を、直ちに其儘に農業に當嵌めんとしたのであつて、この事は之を社會主義運動の歷史に照し見れば、掩ふに由なきものがある。

けれども今や事情は變化して來た。啻に社會主義運動に於て農業方面を等閑に附することを許さない實狀が生じて來たばかりでなく、社會主義理論を構成するに就いては、農業方面に關しては、よく農業そのものゝ性質を明かにし、その生產の實狀から勞働の實狀に至るまで、十分精細な研究を遂げた上で、よく之に適合するやうな理論を立てなくては、社會主義と農業とは遂に緣なき衆生となる外はなきことが、社會主義者に依ても段々自覺されざるべからざるに至つたのである。この農業の特性研究の必要といふことは彼の修正派の社會主義者の主張に依て高調せられて以來、大いに一般の注意を喚起するには至つたが、露西亞に於ける共產主義建設の實際運動が、農村の事情の爲めに當初の計畫

を失敗に歸せしめ、革命事業の跡始末としては、殆んど根抵から計畫を變更して、殆んど新らしい主義と、方針の下に設建の功を收むる外なきに至らしめた實物教育は、更に一層深刻に一般の反省を促すに至つた。

然らば社會主義者が初めて農業に對して積極的の態度を示し、農業の改造に關する纏つた意見を公にするに至つたのは、何時頃からのことであるか。又その當初の改造意見なるものが、よく農業の實狀に適合し農民の眞實之を要求し又援助するを喜ぶものであつたか、それともそれは工業勞働や工業生産について得られたる智識と改造計畫とを直ちに其儘に農業に當篏めんとするものに過ぎないで、農業に關する特殊研究の行はれる結果として成れるものでなく、從て農業生産の眞の性狀にも適合せず、又農民の要求する所にも適中せず、更には廣く農民心理にも合致しないものであつたか。其後又引續いて表はれたる社會主義者の農業改造の意見はどの位變調を呈して來たか。以下少しく其の意見と運動とを述べてみやう。

二

農業に對する社會主義運動の見地は、一八六四年に倫敦に設けられたる國際勞働協會 The International Labourers Association に依て初めて大體決定されたのである。然るに一八六七年に瑞西のローザンヌに開かれた協議會に於ては佛蘭西から出席したプルードン派の社會主義者等とマルキシストとの間に土地問題に關して甚しき意見の相違を見るに至つた。即ち土地所有制に就いて前者は小農地所有制を支持し、之を以て個人的自由の保障さるゝ基礎を爲すものだと主張したのである。然るにマルキシストは土地の公有制を主張し、大農地たると小農地たるとを問はず、土地私有制の行はるゝことを以て、農村にも資本的搾取の行はれる道を存せしむるものと考へた。そしてマルキシストが土地公有制なら

ざるべからずとする理由に至つては其翌年白耳義のブラッセルに催されたる協議會に提示され、大多數を以て議決せられた。その理由とする所は大體次のやうである。

一、生産上の要求と科學的なる土地耕作法則の適用とは、農業經營を大規模にし機械を使用し、多數勞働者の共同作業を必要とする。

一、農業に於ける勞働と占有とは恰も鑛山や鐵道に於けるが如くに取扱はれねばならぬ。

一、土地の生産力はあらゆる生産物に原料を提供し、あらゆる生産手段と總ての富との源を爲すものであるが、然かもこの生産力は元來勞働に依て造られたものではない。

此等諸點の顧慮からして協議會は、近代社會の經濟的發展は土地をば社會の共有物と爲すことを以て社會的に必要缺くべからざる所としたものだと見るといふのである。そして土地は鑛山や鐵道など丶同様に、國家からして勞働者の農業共同組合に給付すべきものとする。即ち技術と科學とは農業經營を大規模のものと爲すことを要求するのであつて、近代經濟の發達は事實上この要求に向つて進めるものである。其所からして實に土地の社會的共有制の必要は生れるのである。而して此の共有制の下に於ける農業經營の最も適當なる形式は農業生産組合の外に存しないといふのである。

このブラッセル協議會の決議は盛なる討議の結果行はれたのであるが、その討議に對して最も働いたのはエッカリウスJ. George Eccarius であつた。彼は謂ふ迄もなく大農主義の熱心なる主張を爲したのであつて、小農主義に關して佛蘭西と英吉利との實狀を比較し、小農制の廣く行はれて居る佛蘭西の小農民が如何に過度負債に苦み、其の生産能率低きかを示した。即ち英國流の大規模經營では、農民は一人が一年間に生産する價格は平均七百十五フランに及ぶに反して佛蘭西の小規模經營に在つては僅かに二百十五フランの生産能率しか表はれ得ない。されば彼の見る所を以てすれ

ば、小農制は之を現代の大農制に比較すれば、恰も手工的組織や小資本が大組織や大資本組織に對するのと同様な關係に在るとしたのである。

彼は謂ふやう、大農業に於て百人の勞働者が蒸汽力や機械力の助を藉り共同作業を爲して行けば三百人の小農民が個々別々に人間力以上の勞働をして生産する所のものと同様の生産を爲し能ふのである。果して然らば現代の經濟はかゝる小農制の存する所では之を抑制し廢除することを要求し事情は之を命ずる筈である。現今小農制は政治的にも社會的にも經濟的にも裁判せられて居る、其の判決は既に下つて居る。それは到底現代産業と社會的進歩とに伴つて歩調を一にして進み得る伴侶ではないのである。小農制は實に現代の政治的並びに社會的進歩の車輛に於ける第五の車輪である。それは佛蘭西にしろ他の何れの國にしろ勞働運動を妨げる鉛錘たるに外ならぬ。されば勞働者たる者は小農主義を普及せんとするあらゆる努力に對しては、之を萠芽の中に摘み取つてしまはねばならぬのであつて、之を摘取るべき直接の利害を有つて居ることを忘れてはならぬ。未墾地や公有地の如きは之を小農地に分割する代りに大農地として農民共同組合に給付すべきである。王領地や寺領地の如きも斯くすべきである。尤もそれは永久の所有地としてではなく、社會をして食料品の源泉たる土地に對する支配を爲すを得せしめん爲に、小作契約の下に給付すべきであると。

此エツカリウスの主張はブラツセル協議會に於て大いに優勢を得、協議會は土地の所有を社會公共の手に移すことは正當なりとして之を決議した。然し其土地を耕作經營する方法に關しては意見の一致を見なかつた。此點に關する意見の相違は翌一八六九年のバーゼル協議會の折にも依然として一致を見なかつたのである。即ち社會公有のものとせる土地は之を國家又は地方自治體が自ら耕作經營すべきか、それとも之を個人又は農業組合に委ねて耕作せしむべきかについて爭はれたのである。

ざるべからずとする理由に在つては其翌年白耳義のブラッセルに催されたる協議會に提示され、大多數を以て議決せられた。その理由とする所は大體次のやうである。

一、生産上の要求と科學的なる土地耕作法則の適用とは、農業經營を大規模にし機械を使用し、多數勞働者の共同作業を必要とする。

一、農業に於ける勞働と占有とは恰も鑛山や鐵道に於けるが如くに取扱はれねばならぬ。

一、土地の生産力はあらゆる生産物に原料を提供し、あらゆる生産手段と總ての富との源を爲すものであるが、然かもこの生産力は元來勞働に依て造られたものではない。

此等諸點の顧慮からして協議會は、近代社會の經濟的發展は土地をば社會の共有物と爲すことを以て社會的に必要缺くべからざる所としたものだと見るといふのである。そして土地は鑛山や鐵道などゝ同樣に、國家からして勞働者の農業共同組合に給付すべきものとする。即ち技術と科學とは農業經營を大規模のものと爲すことを要求するのであつて、近代經濟の發達は事實上この要求に向つて進めるものである。其所からして實に土地の社會的共有制の必要は生れるのである、而して此の共有制の下に於ける農業經營の最も適當なる形式は農業生産組合の外に存しないといふのである。

このブラッセル協議會の決議は盛なる討議の結果行はれたのであるが、その討議に對して最も働いたのはエッカリウス J. George Eccarius であつた。彼は謂ふ迄もなく大農主義の熱心なる主張を爲したのであつて、小農主義に關して佛蘭西と英吉利との實狀を比較し、小農制の廣く行はれて居る佛蘭西の小農民が如何に過度負債に苦み、其の生産能率低きかを示した。即ち英國流の大規模經營では、農民は一人が一年間に生産する價格は平均七百十五フランに及ぶに反して佛蘭西の小規模經營に在つては僅かに二百十五フランの生産能率しか表はれ得ない。されば彼の見る所を以てすれ

ば、小農制は之を現代の大農制に比較すれば、恰も手紡績や手織織か機械紡績や機械織に對するのと同様な關係に在るとしたのである。

彼は謂ふやう、大農業に於て百人の勞働者が蒸汽力や機械力の助を藉り共同作業を爲して行けば三百人の小農民が個々別々に人間力以上の勞働をして生産する所のものと同樣の生産を爲し能ふのである。果して然らば現代の經濟はかゝる小農制の存する所では之を抑制し廢除することを要求し事情は之を命ずる筈である。現今小農制は政治的にも社會的にも經濟的にも裁判せられて居る。其の判決は既に下つて居る。それは到底現代産業と社會的進歩とに伴つて歩調を一にして進み得る倡伴ではないのである。小農制は實に現代の政治的並びに社會的進歩の車輛に於ける第五の車輪である。それは佛蘭西にしろ他の何れの國にしろ勞働運動を妨げる錯鎖たるに外ならぬ。されば勞働者たる者は小農主義を普及せんとするあらゆる努力に對しては、之を萠芽の中に摘み取つてしまはねばならぬのであつて、之を摘取るべき直接の利害を有つて居ることを忘れてはならぬ。未墾地や公有地の如きは之を小農地に分割する代りに大農地として農民共同組合に給付すべきである。王領地や寺領地の如きも斯くすべきである。尤もそれは永久の所有地としてではなく、社會をして食料品の源泉たる土地に對する支配を爲すを得せしめん爲に、小作契約の下に給付すべきであると。

此エッカリウスの主張はブラッセル協議會に於て大いに優勢を得、協議會は土地の所有を社會公共の手に移すことは正當なりとして之を決議した。然し其土地を耕作經營する方法に關しては意見の一致を見なかつた。此點に關する意見の相違は翌一八六九年のバーゼル協議會の折にも依然として一致を見なかつたのである。即ち社會公有のものとせる土地は之を國家又は地方自治體が自ら耕作經營すべきか、それとも之を個人又は農業組合に委ねて耕作せしむべきかについて爭はれたのである。

そこで協議會としては、土地の私有制を廢止し之を社會の公有と爲すべきことだけは、決定的に決議するが、その耕作經營の組織方法に關しては、各分會に於て十分に調査研究すべきものとし、之を布告する旨を明かにしたのである。この調査研究に關しては瑞西ゼネバの分會が先づ宣言書を發して實行計畫を示した。同分會は當時最も會員も多く又精神的に活潑なインターナショナルの團體だつたのであつて、社會の公有となれる土地が如何にして社會的に管理せられ耕作せらるべきかの計畫を公にしたのである。その分會の見る所では、大資本は抵當貸付の手段に依ていつも自作小農民から其の所有地を奪ふものであるが、然し大資本のみならず科學と技術とに依て獲得せられたる手段も亦大農經營に用ゐられて小規模經營の有するあらゆる競爭能力を亡ぼしてしまうものである。大經營は小經營の用ゐる高き人間勞働をば安き動物や蒸汽力と入替らしめる。例へば英國では一八五一年から一八六一年に至る十年間に農業從業者の數は八萬八千百四十七人を減じたるに拘らず土地の方では十萬モルゲンの公有荒蕪地が私有地となり又私的に經營せられるに至つた。加之大經營は酒精釀造、麥酒釀造、製粉其他之に類する工業と結び付くことが出來、又その廢物は家畜を増殖せしめ、從て厩肥の生産を増加せしめる。尚又灌漑排水を組織的にするを得、合理的にして良く目的に叶へる輪作式の播種や栽培が行はれる。又小農が隔れる住家と農民との間を往復したり荷物を運搬したりすることから生ずる徒勞と費とを省くことが出來る。更には又小農地に伴ふ畦畔や溝渠や步道などの冗を省いて總べて之を耕作に用ゐるを得せしめる。又大經營は其生産物が多量なる爲に現代の交易機關を十分に利用するを得、生産物市場に對して力を獲て有利の販賣を爲すことが出來る。つまり安く生産して然かもより好く又多量に生産するを得るから、第一には土地は經營上から之を見てより多くの價値を發揮するを得ることゝなり、然かも大經營は土地をその所有者の死亡移住等の事故が生じたり其他販賣に付せられる機會ある毎に購入合併するを得せしめる。第二には更に大規模經營は社會の一般利益に合致

し一般の公共的な福利を増すから其點から見て欠ぐことの出來ぬ必要なものとなつてしまうのである。かるが故に小農民的な農業經營は、資本の優越力により、又經濟の勢力により、又事實の過程と社會の利害とに依つて、漸次沒落すべく終審的に無慈悲に判決せられてある。そしてそれは諸國の統計の實證する所である。

宣言書の示す所は大體右の如くであつた。然らば此の事情に對して如何なることをしたらばよいかに就いては、宣言書は、歐大陸の人々は英國の人々のやうに、たゞ資本主義の發展を自然のまゝ放任して依て生ずる色々な結果をば天命として諦めるやうな風であつてはならない。事情に先つて、十分なる洞察と先見とを以て、土地の私有制を變へ、收用すべきものは收用して、運命が來つて之を餘儀なくしない前に、社會國家的な施設をなさねばならぬ。問題解決の道は農業勞働者諸君が結合して、其結合の力を以て當然主張すべき權利を主張し、土地に就いては諸君が之を有效に使用すべき共同組合を組織すべき團結を整ふるに在る。土地は地内に包藏されたるあらゆるもの及地上に存在するあらゆるものと共に天の賜物である。そして全人類の不可分的なる共有物である。此の本性に從て土地が全社會の共同所有物となるならば、土地は猥りに分割されることもなく、賣却されることもなく、たゞ全社會の利便の爲に耕作共同組合の借用物として給與されることゝなると聲明した。

この原理的な考察に應じて宣言書は更に左の實行計畫を公示したのである。宣言書はいふやう

此の當面の目的を達する爲に既に早くより總べての國々の都市勞働者は、結合して居るのであつて、今や彼等は農業勞働者即ち全世界が其の食糧を與へて貰つて居る所の農業勞働者諸君の前に出て來た。それは諸君に左の七項を含み込んで貰ひ又實行して貰はん爲めに兄弟分としての握手を求めん爲である。

一、一村落又は一部落の小自作農者は其の土地と家畜と業務用建物と農具と勞力とを又は科學と技術とのあらゆる手段

そこで協議會としては、土地の私有制を廢止し之を社會の公有と爲すべきことだけは、決定的に決議するが、その耕作經營の組織方法に關しては、各分會に於て十分に調査研究すべきものとし、之を希望する旨を明かにしたのである。この調査研究に關しては瑞西ゼネヴァの分會が先づ實行方法を發見して實行計畫を示した。同分會は當時最も會員も多く又精神的に活潑なインターナショナルの團體だつたのであつて、社會の公有となれる土地が如何にして社會的に管理せられ耕作せらるべきかの計畫を公にしたのである。その分會の見る所では、大資本は抵當貸付の手段に依ていつも自作小農民から其の所有地を奪ふものであるが、然し大資本のみならず科學と技術とに依て獲得せられたる手段も亦大農經營に用ゐられて小規模經營の有するあらゆる競爭能力を亡ぼしてしまうものである。大經營は小經營の用ゐる高き人間勞働をば安き動物や蒸汽力と入替らしめる。例へば英國では一八五一年から一八六一年に至る十年間に農業從業者の數は八萬八千百四十七人を減じたるに拘らず土地の方では十萬モルゲンの公有荒無地が私有地となり又私的に經營せられるに至つた。加之大經營は酒精醸造、麥酒醸造、製粉其他之に類する工業と結び付くことが出來、又その廢物は家畜を增殖せしめ、從て廐肥の生産を增加せしめる。尚又灌漑排水を組織的にするを得、合理的にして良く目的に叶へる輪作式の播種や栽培が行はれる。又小農が隔れる住家と農民との間を往復したり荷物を運搬したりすることから生ずる徒勞と費とを省くことが出來る。更には又小農地に伴ふ畦畔や溝渠や步道などの冗を省いて總べて之を耕作に用ゐるを得せしめる。又大經營は其生産物が多量なる爲に現代の交易機關を十分に利用するを得、生産物市場に對して力を獲て有利の販賣を爲すことが出來る。つまり安く生産して然かもより好く又多量に生産するを得るから、第一には土地は經營上から之を見てより多くの價値を發揮するを得ることゝなり、然かも大經營は土地をその所有者の死亡移住等の事故が生じたり其他販賣に付せられる機會ある每に購入合併するを得せしめる。第二には更に大規模經營は社會の一般利益に合致

し一般の公共的な福利を害すから其點から見て欠くことの出來ぬ必要なるものとなつてしまうのである。

かるが故に小農民的な農業經營は、資本の優越力により又經濟の勢力により、又事實の過程と社會の利害とに依つて、漸次沒落すべく終案的に無慈悲に判決せられてある。そしてこれは諸國の統計の實證する所である。

宣言書の示す所は大體右の如くであつた。然らば此の事情に對して如何なることをしたらばよいかに就いては、宣言書は、歐大陸の人々は英國の人々のやうに、たゞ資本主義の發展を自然のまゝ放任して依て生ずる色々な結果をば天命として諦めるやうな風であつてはならない。事情に先つて、十分なる洞察と先見とを以て、土地の私有制を替へ、收用すべきものは收用して、運命が來つて之を餘儀なくしない前に、社會國家的な施設をなさねばならぬ。問題解決の道は農業勞働者諸君が結合して、其結合の力を以て當然主張すべき權利を主張し、土地に就いては諸君が之を有效に使用すべき共同組合を組織すべき團結を整ふるに在る。土地は地内に包藏されたるあらゆるもの及地上に存在するあらゆるものと共に天の賜物である。そして全人類の不可分的なる共有物である。此の本性に從て土地が全社會の共同所有物となるならば、土地は猥りに分割されることもなく、賣却されることもなく、たゞ全社會の利便の爲に耕作共同組合の借用物として給與されることゝなると聲明した。

この原理的な考察に應じて宣言書は更に左の實行計畫を公示したのである。宣言書はいふやう

此の當面の目的を達する爲に既に早くより總べての國々の都市勞働者は、結合して居るのであつて、今や彼等は農業勞働者即ち全世界が其の食糧を與へて貰つて居る所の農業勞働者諸君の前に出て來た。それは諸君に左の七項を申込んで貰ひ又實行して貰はん爲めに兄弟分としての握手を求めん爲である。

一、一村落又は一部落の小自作農者は其の土地と家畜と業務用建物と器具と勞力と又は經驗と技術とのあらゆる手段

の使用に於て共同の經營を且して結合せる爲に一の生產組合を作ること

二、從來日傭勞働者として又は作男作女として働いて來た所の總べての無所有勞働者は同一の權利を有する組合員として加入せしめられ、特別の規約に依て定められる所に從ひ、その生活手段を與へられること

三、小自作者は後日事物に適合したる規定の爲される迄は其提供せる土地と建物と家畜と器具と種子と食料及び飼料貯藏とに對して、其爲に共同に選出したる委員會に依て評價したる價格に從ひ、組合から一定の利子支給を受くる事

四、總べての純收益は共同所有とせられ、その用益に關しては定款規約を造り、それに從て各組合員平等の權利を有すること

五、此等の共同組合は相互に密接な關係を有すべきのみならず、工業勞働者の生產及消費組合其他すべての勞働者組合と密接な有機的な結合關係に立つべきものとする。蓋し之に依て、ソリダリチーの原則に從ひ、道德的に又物資的に、同胞として併存共立し、あらゆる資本主義的なる又政治的なる抑壓をば共同的に克服せんが爲めである。

六、小自作農民が未だ共同組合的耕作經營の必要を十分理解するに至らないか、又は怠惰な習慣と狹量な利己心とから免れることの出來ないやうな村落に在つては、無所有者のみが自分共の間に於て先づ農業作業組合を組織し、その自然權に立脚して、地方自治體や國家や寺院やに屬する土地か、然らざれば他の方法に依て獲られたる土地をば、共同耕作の爲めに全力を盡して要求すべきである。

七、大農地に於て働く無所有者等は十分緊密に結合して其の日々の賃金以外に年々の純收益に對して適當なる步合の分配を要求せねばならぬ。そして此分配にあづかることに依て業務の指導と管理とに責任を負ふこととし、若し事情の一般的なる變革に依り地主の獨裁的支配が廢滅に歸するに至るならば、其時には、其農事經營をば民主的なる

共同組合方法に依て自ら實行し得るやう用意を整へて置かねばならぬ。

斯く實行計畫を掲げたる上宣言書は、農業に於ける同胞勞働者に對して熱情に充ち滿ちたる揚言を爲した。曰く、諸君の中何人にまれこの揚言の精神を理解せる者は、家々村々を訪問せよ。そして諸君の同僚をば、其の古き軛に慣れて眠れる夢より喚起せよ。彼等に解放の手段を說き聞かす爲めに、同胞團結を組織する爲に、そして社會民主黨の新しき使徒を造る爲めに。かくて農村の住民が都市勞働者の團結に結合すること速かなれば速かなるほど、又多數なれば多數なるほど、總べての惡から解放せられる大いなる日は速かに到達するであらう。

此の大宣言はおされたのであるが、併し其結果は殆んど零であつた。瑞西や南獨逸に於ては無所有農業勞働者は有機的なる大團結を組成するに足るほどの數には存しなかつた。小所有自作農民は社會的土地共有制と共同的耕作經營に關する此の新福音に對しては何等の好意的反應を示さなかつた。バーゼル協議會の決議は、彼等小農民がそれに向つて年久しく又熱心に努力せる所のものに對する否定であつた。謂ふ迄もなく小農民は土地が欲しかつたのである。益々多くの土地を獲之を自己のものとして保ち、又それを自分の手で獨立に耕作經營することを誇りともし、喜びともし、又安神にもしたのである。彼等はその境遇の現狀が決して十分快適のものにあらざるは、よく之を知つて居つた。けれどもそれは祖父の時代や父の時代に比較すれば大分進むだものであつた。彼等の社會民主的運動に對する態度は從來は冷淡なものであつたが、たゞ冷淡なるに過ぎなかつたのが、今やこの決議と宣言とを見るに至つてからは、一步を進めて明かに敵對的のものとなつてしまつた（Ed. David. Socialismus und Landwirtschaft. 1. Bd. Berlin 1903 に據る）

右に示すが如く一八六四年以來社會主義者は積極的に農業に向つて働きかけ、農業問題に對する態度を明かにし、農業

の使用に於て共同の經營を爲し之を組合せん爲に一つの生産組合を作ること

二、從來日傭勞働者として又は作男作女として働いて來た所の總べての無所有勞働者は同一の權利を有する組合員として加入せしめられ、特別の規約に依て定められる所に從ひ、その生活手段を與へられること

三、小自作者は後日事物に適合したる規定の爲される迄は其提供せる土地と建物と家畜と器具と種子と食料及び飼料貯藏とに對して、其爲に共同に選出したる委員會に依て評價したる價格に從ひ、組合から一定の利子支給を受くる事

四、總べての純收益は共同所有とせられ、その用益に關しては定款規約を造り、それに從て各組合員平等の權利を有すること

五、此等の共同組合は相互に密接な關係を有すべきのみならず、工業勞働者の生産及消費組合其他すべての勞働者組合と密接な有機的な結合關係に立つべきものとする。蓋し之に依て、ソリダリチーの原則に從ひ、道徳的に又物質的に、同胞として併存共立し、あらゆる資本主義的なる又政治的なる抑壓をば共同的に克服せんが爲めである。

六、小自作農民が未だ共同組合的耕作經營の必要を十分理解するに至らないか、又は怠惰な習慣と狭量な利己心とから免れることの出來ないやうな村落に在つては、無所有者のみが自分共の間に於て先づ農業作業組合を組織し、その自然權に立脚して、地方自治體や國家や寺院やに屬する土地か、然らざれば他の方法に依て獲られたる土地をば、共同耕作の爲めに全力を盡して要求すべきである。

七、大農地に於て働く無所有者等は十分緊密に結合して其の日々の賃金以外に年々の純收益に對して適當なる歩合の分配を要求せねばならぬ。そして此分配にあづかることに依て業務の指導と管理とに責任を負ふことゝし、若し事情の一般的なる變革に依り地主の獨裁的支配が廢滅に歸するに至るならば、其時には、其農事經營をば民主的なる

共同組合方法に依て自ら實行し得るやう用意を整へて置かねばならぬ

斯く實行計畫を掲げたる上宣言書は、農業に於ける同胞勞働者に對して熱情に充ち滿ちたる提言を爲した。曰く、『諸君の中何人にまれこの揚言の精神を理解せる者は、家々村々を訪問せよ。そして諸君の同僚をば、其の古き慣に慣れて眠れる夢より喚起せよ。彼等に解放の手段を說き聞かす爲めに、同胞團結を組織する爲に、そして社會民主黨の新しき使徒を造る爲めに。かくて農村の住民が都市勞働者の團結に結合すること速かなれば速かなるほど、又多數なれば多數なるほど、總べての惡から解放せられる大いなる日は速かに到達するであらう。』

此の大宣言はおされたのであるが、併し其結果は殆んど零であつた。瑞西や南獨逸に於ては無所有農業勞働者は有機的なる大團結を組成するに足るほど多數には存しなかつた。小所有自作農民は社會的土地共有制と共同的耕作經營に關する此の新福音に對しては何等の好意的反應を示さなかつた。バーゼル協議會の決議は、彼等小農民がそれに向つて年久しく又熱心に努力せる所のものに對する否定であつた。謂ふ迄もなく小農民は土地が欲しかつたのである。益々多くの土地を獲之を自己のものとして保ち、又これを自分の手で獨立に耕作經營することを誇りともし、喜びともし、又安神にもしたのである。彼等はその境遇の現狀が決して十分快適のものにあらざるは、よく之を知つて居つた。けれどもこれは祖父の時代や父の時代に比較すれば大分進むだものであつた。彼等の社會民主的運動に對する態度は從來は冷淡なものであつたが、たゞ冷淡なるに過ぎなかつたのが、今やこの決議と宣言とを見るに至つてからは、一步を進めて明かに敵對的のものとなつてしまつた（Ed. David. Socialismus und Landwirtschaft. I. Bd. Berlin 1903 に據る）

右に示すが如く一八六四年以來社會主義者は積極的に農業に向つて働きかけ、農業問題に對する態度を明かにし、農業、

改造方針についても具體的計畫を指示したのだつたが、それは殆んど農業に關する十分なる研究と農民心理に對する同情ある理解とを以て爲されたるものでなかつた。一班を見て全豹を察し、それに依て一般的方策を立てんとするものであつた。即ち彼等は工業勞働者の喜ぶコレクチヴイズムの計畫を以て直ちに農民の心を捕へんとしたのである。けれども元來農業生産の實狀は從來示されたる社會主義敎理の根本命題と矛盾する所が少くなかつたものだから、その事が農業と社會主義との連絡の妨を爲す所が些少でなかつた。

この事情に鑑みて修正派社會主義者の修正說の如きは表はれるに至つたものであつて、他の諸多の方面と共に農業方面に關する社會主義學說特にマルキシズムの修正を要する所あるを唱ふるに至つた次第である。(Ed. Bernstein, Die Voraussetzungen des Socialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie, 13, Taus. Stuttgart 1909, S. 61 ff. 參照)元來マルクスも、エンゲルスも都會の人であつて、後者は暫く田舍に在つて農民に接觸する機會を得たことはあつたけれど農民に對しては寧ろ輕蔑を禁じ得ざる有樣であつた。所謂マルキシストの敎義が本來農業に對する十分の理解と農民に對する溫き同情とを以て出來上つたものにあらざるは、事情止むを得ざる所と謂はねばならぬ。(W. Sombart, Der proletorische Socialismus, Aufl.I. Bd. S. 257 ff. 參照)

とにかく上に述べるやうなわけだつたが、其後農業方面の問題が社會主義に於ても漸次重要視されねばならぬ實狀の熟するにつれて、社會主義的なる農業改造意見も新に公にさるゝものあるを見るに至つたが、意見そのものに於てはまだ多くの變化を見ないでゐる。即ち依然として土地の公有制と公共的な大農組織による經營を推奬して居るのであるが、中間に於ける色々な人々の意見や協議會の決議などは省略することにして茲にはずつと下つてカウツキーの此問題に關する所見を叩いてみやう。

三

カウツキーの見る所を以つてするも、資本主義に決してよく農業の實狀と調和し得るものでなく、資本主義が發達するにつれて農業は却つて悲境に陷らざるを得ない。されば農業の立場を堅固にし其の發達を期せん爲には資本主義は制限されねばならぬ。そして土地に對する私有制と賃傭勞働と植民的搾取政策とは廢除されなければならぬ。けれどもカウツキーは、我々は決して直ちに農民の所有する土地を沒收するといふのではないのであつて、其點について誤解して貰つては困ると述べて居る。彼の觀る所では、土地沒收は無産階級の利害に一致しないばかりでなく、多くの場合之れに反する。即ち農民の所有地を沒收するに於ては食料生産狀態は之が爲に混亂に陷れられ、それは全社會の困惑を齎す次第なれば、無産者は自分共の天下が出來たにしても農民を助け其の生産方法の改善を敎へ生産力の增加を圖らねばならぬ。そして一方に於て社會主義的生産組織を整へ新經營方法を用ゐ、生産能率の十分なる發揮と生産從事者の狀態と境遇との大いなる改善が行はれて、範を天下に垂ることゝになれば、農民は必ず從來の經營方法を捨てゝ新經濟組織に入つて來るに相違ないのである。之を爲すことが實に無産階級支配の下に於ける新經濟時代の農業に對する任務といはなければならぬ。

由來農民は土地を熱愛するものと信ぜられて居る。彼等は如何なる事ありとも土地を益々多く得ることをこそ欲すれ、土地を捨てゝ新たなる社會主義的組織に加入して來るものではないとも考へられる。それも成程事實であつて、一概に否認することは出來ない。けれども同時に又事實に於ては、農民の中には土地を所有するを以つて却つて其の境遇を束縛され經濟上にても不利を被る所以と見て居る者のあることも否み難い所で、その傾向は現在既に著しく又益々著明

改造方針についても具體的計畫を指示したのだつたが、それは殆んど農業に關する十分なる研究と農民心理に對する同情ある理解とを以て爲されたるものでなかつた。一班を見て全豹を察し、それに依て一般的方策を立てんとするものであつた。即ち彼等は工業勞働者の喜ぶコレクチヴイズムの計畫を以て直ちに農民の心を捕へんとしたのである。けれども元來農業生産の實狀は從來示されたる社會主義敎理の根本命題と矛盾する所が少くなかつたものだから、その事が農業と社會主義との連絡の妨を爲す所が些少でなかつた。

この事情に鑑みて修正派社會主義者の修正說の如きは表はれるに至つたものであつて、他の諸多の方面と共に農業方面に關する社會主義學說特にマルキシズムの修正を要する所あるを唱ふるに至つた次第である。（Ed. Bernstein, Die Voraussetzungen des Socialismus und die Aufgaben der Socialdemokratie, 13, Taus. Stuttgart 1909, S. 61 等參照）元來マルクスも、エンゲルスも都會の人であつて、後者は暫く田舍に在つて農民に接觸する機會を得たことはあつたけれど農民に對しては寧ろ輕蔑を禁じ得ざる有樣であつた。所謂マルキシストの敎義が本來農業に對する十分の理解と農民に對する溫き同情とを以て出來上つたものにあらざるは、事情止むを得ざる所と謂はねばならぬ。（W. Sombart, Der proletarische Socialismus, Aufl. I. Bd. S. 257 ff. 參照）

とにかく上に述べるやうなわけだつたが、其後農業方面の問題が社會主義に於ても漸次重要視されねばならぬ實狀の熟するにつれて、社會主義的なる農業改造意見も新に公にさるゝものあるを見るに至つたが、意見そのものに於てはまだ多くの變化を見ないでゐる。即ち依然として土地の公有制と公共的な大農組織による經營を推奬して居るのであるが、中間に於ける色々な人々の意見や協議會の決議などは省略することにして玆には一寸と下つてカウツキーの此問題に關する所見を叩いてみやう。

三

カウツキーの見る所を以つてするも、資本主義に決してよく農業の實狀と調和し得るものでなく、資本主義が發達するにつれて農業は却つて悲境に陷らざるを得ない。されば農業の立場を堅固にし其の發達を期せん爲には資本主義は克服されねばならぬ。そして土地に對する私有制と賃傭勞働と植民的搾取政策とは廢除されなければならぬ。けれどもカウツキーは、我々は決して直ちに農民の所有する土地を沒收するといふのではないのであつて、此點について誤解して貰つては困ると述べて居る。彼の觀る所では、土地沒收は無產階級の利害に一致しないばかりでなく、多くの場合之れに反する。即ち農民の所有地を沒收するに於ては食料生產狀態は之が爲に混亂に陷れられ、それは全社會の困惑を齎す次第なれば、無產者は自分共の天下が出來たにしても農民を助け其の生產方法の改善を敎へ生產力の增加を圖らねばならぬ。そして一方に於て社會主義的生產組織を整へ、新經濟方法を用ゐ、生產能率の十分なる發揮と生產從事者の狀態と境遇との大いなる改善が行はれて、範を天下に垂ることになれば、農民は必ず從來の經濟方法を捨てゝ新經濟組織に入つて來るに相違ないのである。之を爲すことが實に無產階級支配の下に於ける新經濟時代の農業に對する任務といはなければならぬ。

由來農民は土地を熱愛するものと信ぜられて居る。彼等は如何なる事ありとも土地を益々多く得ることをこそ欲すれ、土地を捨てゝ新たなる社會主義的組織に加入して來るものではないとも考へられる。それも成程事實であつて、一概に否認することは出來ない。けれども同時に又事實に於ては、農民の中には土地を所有するを以つて却つて其の境遇を束縛され經濟上にも不利を被る所以と見て居る者のあることも否み難い所で、その傾向は現在既に著しく又益々著し

になつて行くものと見て差支ない。

惟ふに現在の勞働者階級は一般的に之を觀て、たゞ衣食住の充實のみを希ふものではない。それよりもより多く『暇』と『自由』とを希ふものである。然るに今若し社會主義生産組織に於て勞働時間が短縮され、暇が出來て、自由が與へられることになれば、農村の住民も亦從來の經濟を捨てゝ新産業には入つて來るやうになるのは當然の次第である。農村の無産者にたゞ土地を與へたからとて現今の離村の傾向が止むのではない。社會主義は直ちに農村を化して誘引力に充ちたものとは爲し得ないが、農民離村の結果いやでもさうしなければならなくなるだらう。即ち農業を改造して、より好き生産組織を與へ、より高き地位に上ぼす必要が生じるのである。

然し此の事業を爲すに就いては農村方面に在つては、資本主義は社會主義の爲めに十分な準備をして置いて吳れないから、社會主義は科學的智識の利用に依て、技術的改良の道を自ら開拓しなければならぬ。所が之を爲すには、工業方面に於ける經驗がよく社會主義をして其業を成さしめて吳れる筈である

然らば農業を如何にすべきかといふに、農業をして其の生産力を十分に發揮せしめん爲に先づ第一に必要なことは、個々の經營に、其の用ゐ得べき手段をば全幅に用ゐ得せしめん爲めに、最大限の大さを與ふることである。尤も此の最大限は時代により異り又地方により相違すべき筈のものであつて、時處を無視して同一樣ではあり得ない。マルキシズムは決して、如何なる場合にも大規模經營が有利だとは主張して居ないのである。マルキシズムは資本については常に大資本の優越を信じて居るが、經營の大さについてはそんな事は謂つて居ない。けれども又同樣に、何時如何なる處にでも、比較的大きな生産部門に於て、夫婦で之を行ふやうな自己經營が最も適當な經營の大さだと謂ふことは出來ない。又一般的にそれが最も能率の高い經營の大さと見ることも出來ないのである。現今農民にそんな考即ち自作農的小經營

を以て最も適當有利な經營と見る者のあることは事實だが、それは農民が一の勞働動物であつて、たゞ自己の勞働のみに依つて生きて行く狀態に在るからのことだ。小農的家庭經濟は、農民が『暇』といふものを以て人間生存上欠ぐべからざるものと考ふるに至るに連れて、其瞬間から存在力を失ふべきものである。

即ち玆に從來の小農業と肩を並べて新たな農業生產組合が出來上り、それは春と夏と秋とに渉つては勞働者を三班に分けて勞働せしめ、各々一日五時間宛働くことゝなり、然かも冬期に於ては其の三ケ月間勞働は二班に區分せられ、各月とも一組は休暇を得るといふやうな狀態が出來たならば、それを見た從來の小農經營者が、それでも尙ほ小農的自家經營を以て最上の經營方式と考へて之を固執するだらうか。恐らくそんな頑迷不靈な者は居ないだらう。農民は何はさて措いても競つて斯樣な生產組合に加入することであらう。

斯くて土地私有制は自ら廢滅に歸せざるを得ないのであつて、それは先づ大所有地に於て衰亡し、次に自作的小所有地に於て滅亡に歸するであらう。

併し斯かる生產組合が作られて、勞働時間が減少せられただけではまだ甚だ不十分である。尙ほ其上に智識あり科學的に教育されたる勞働力が農業に注がれ、農業勞働が活潑にせられ、又教養ある人士の農業に從事することを堪へ得られるやうな狀態が造り出されねばならぬ。即ち更には學校や圖書館や讀書室や共同に藝術的享樂を爲すべき場所やが設けられねばならぬ。さうすれば寺院や宗教に對する要求はなくなつて來るであらう。

然るに更に考ふれば、農村人士の勞働力を十分に發揮せしめやうと欲するならば、農業と工業との結合の道を造ることを必要とする。即ち一方には田舍の小工業を復活すると同時に、他方には都會の大工業を田舍に分布する必要がある。現今のやうに農村には農業を主とし其他僅かばかりの家庭作業が殘つて居るばかりで、昔からの小工業は亡ぼされ

になつて行くものと見て差支ない。

惟ふに現在の勞働者階級は一般的に之を觀て、たゞ衣食住の充實のみを希ふものではない。それよりもより多く「暇」と「自由」とを希ふものである。然るに今若し社會主義生産組織に於て勞働時間が短縮され、暇が出來て、自由が與へられることになれば、農村の住民も亦從來の經濟を捨てゝ新産業には入つて來るやうになるのは當然の次第である。農村の無産者にたゞ土地を與へたからとて現今の離村の傾向が止むのではない。社會主義は直ちに農村を化して誘引力に充ちたものとは爲し得ないが、農民離村の結果いやでもさうしなければならなくなるだらう。即ち農業を改造して、より好き生産組織を與へ、より高き地位に上ぼす必要が生じるのである。

然し此の事業を爲すに就いては農村方面に在つては、資本主義は社會主義の爲めに十分な準備をして置いて呉れないから、社會主義は科學的智識の利用に依て、技術的改良の道を自ら開拓しなければならぬ。所が之を爲すには、工業方面に於ける經驗がよく社會主義をして其業を成さしめて呉れる筈である

然らば農業を如何にすべきかといふに、農業をして其の生産力を十分に發揮せしめん爲に先づ第一に必要なことは、個々の經營に、其の用ゐ得べき手段をば全幅に用ゐ得せしめん爲めに、最大限の大さを與ふることである。尤も此の最大限は時代により異り又地方により相違すべき筈のものであつて、時處を無視して同一樣ではあり得ない。マルキシズムは決して、如何なる場合にも大規模經營が有利だとは主張して居ないのである。マルキシズムは資本については常に大資本の優越を信じて居るが、經營の大さについてはそんな事は謂つて居ない。けれども又同樣に、何時如何なる處にでも、比較的大きな生産部門に於て、夫婦で之を行ふやうな自己經營が最も適當な經營の大さだと謂ふことは出來ない。又一般的にそれが最も能率の高い經營の大さと見ることも出來ないのである。現今農民にそんな考即ち自作農的小經營

を以て最も適當有利な經營と見る考のあることは事實だが、それは農民が一の勞働動物であつて、たゞ自己の勞働のみに依つて生きて行く狀態に在るからのことだ。小農的家庭經濟は、農民が『暇』といふものを以て人間生存上欠ぐべからざるものと考ふるに至るに連れて、其瞬間から存在力を失ふべきものである。

即ち玆に從來の小農業と肩を並べて新たな農業生產組合が出來上り、それは春と夏と秋とに渉つては勞働者を三班に分けて勞働せしめ、各々一日五時間宛働くことゝなり、然かも冬期に於ては其の三ケ月間勞働は二班に區分せられ、各月とも一組は休暇を得るといふやうな狀態が出來たならば、それを見た從來の小農經營者が、それでも尙ほ小農的自家經營を以て最上の經營方式と考へて之を固執するだらうか。恐らくそんな頑迷不靈な者は居ないだらう。農民は何はさて措いても競つて斯樣な生產組合に加入することであらう。

斯くて土地私有制は自ら廢滅に歸せざるを得ないのであつて、それは先づ大所有地に於て廢亡し、次に自作的小所有地に於て滅亡に歸するであらう。

併し斯かる生產組合が作られて、勞働時間が減少せられただけではまだ甚だ不十分である。尙ほ其上に智識あり科學的に敎育されたる勞働力が農業に注がれ、農業勞働が活潑にせられ、又敎養ある人士の農事に從事することが期し得られるやうな狀態が造り出されねばならぬ。即ち更には學校や圖書館や讀書室や其間に藝術的享樂を爲すべき場所やが設けられねばならぬ。そうすれば寺院や宗敎に對する要求はなくなつて來るであらう。

然るに更に考ふれば、農村人士の勞働力を十分に發揮せしめやうと欲するならば、農業と工業との結合の道を講ずることを必要とする。即ち一方には田舍の小工業を復活すると同時に、他方には都會の大工業を田舍に分布する必要がある。現今のやうに農村には農業を主とし其他僅かばかりの原始産業が殘つて居るばかりで、昔からの小工業は亡ぼされ

てしまい、新しい工業といふ工業は悉く都會に集められて居るやうでは、田舍の勞働力は年中を通じて十分に利用されることが出來ないし、又勞働の轉換も出來なくて、其の力を十二分に發揮する餘地はない。

要するにすべて斯かる道筋に依て行はれる社會主義の改造事業は、農業に取つては一大變革である。それはたゞ單に農業生産を增加することのみを目的としない。農村の人々をして單なる勞働動物たる現狀から解放して、自由な人間たる地位に上ぼさんとする事業である。彼等から資本主義的搾取を取除き、農業に新生命を注入し、彼等をして現代的智識と現代的完成とに到達せしめんとするものである。資本主義は十九世紀に於て主として專ら工業と交通業とを改革した。二十世紀の殘りの大部分を支配すべき社會主義は工業よりもより多く農業を變改したければならないのである。

（K. Kautsky, Die Socialisierung der Landwirtschaft, Berlin 1919 に據る）

四

カウツキーの農業改造意見は從來社會主義者の團體に依て公にされたる意見又は計畫と根本に於て相違はなく、土地は之を社會の公有と爲すべきもので、其上に行はるゝ耕作經營は之を農民の共同生産組合の手に依てすべきものと見るのである。たゞカウツキーは斯かる農業の社會化を强制的に一擧の下に行はんとはせず、模範的なる共同生産組合を組織し其手に依て模範的なる作業を行ひ、範を天下に示すことに依て農民を誘つて新生産組織に入らしめ、その道による自然の發展が法則的に事情を導いて、農民は結局躊躇なしに新組織に入らざるを得ざるに至り、茲に全般的なる社會化が行はれるものとしたのである。そして彼は其の以外に尚ほ農村文化の方面に着眼し農民をば從來の勞働動物たる境遇から上ぼして、自由なる人間たらしめんとすることを以て、改造の大眼目と爲すべしとしたのである。

そこで今從來社會主義者に依て唱道せられたる農業社會化の實際運動について見れば、それは伊太利の如きに於ては既に早く多少づゝ部分的に其の實行を見る所があつたけれども全般的に一大計畫の下に改造運動を見たのは、露西亞に於ける革命であつた。そのやゝ詳細なる說明は私は既に之を公にして置いたから（拙著「農業社會主義と組合社會主義」一八九―一一三頁「勞農露國の農業」參照）茲にたゞその要點だけを示してみやう。

露西亞に於て共產主義革命が成就して土地に關する最初の政令の公にされたるは一九一七年十一月七日のことであつた。それによれば、從來大地主に依て所有されたる一切の土地は無償にて徵收するとせられ、其の收用地は總て全露國民會議による決定の行はれる迄地方土地委員會及び農民代議會の自由處分に委せられたのである。斯くて翌年に及び九一八年一月二十七日の政令は土地の社會有制に關する根本原則を明かにし、公に收用されたる土地及自作農民の手に殘れる土地は、各人民の所有に屬し、其土地の上に現實に勞働する人々に依てのみ使用さるべきものとせられた。そして何人でも自己及び家族の手に依て之を爲し得る限りは土地の上に働き之を用ゐるを得る權利を有すとせられ、如何なる形式を以てするも雇傭勞働は禁止せられた。そして又土地の分配は地方の狀況に應じ勞働人口に對して均等に行はるべきものとし、其土地の使用は個人的に行つてもよければ、組合又は村落團體に依て經營使用してもよいとした。

茲に於てか農民等は自作地ならざる大地主の所有地を分割してしまい、土地所有の社會化といふことは、あらゆる農地を自作農民の間に分割し各自が之を所有する意味だと解して、各自喜んでその分割所有を行つたのである。然るにボルシエヴイズムの政治家の思ふ所は固より斯くの如きではなかつたから、都會の無產者をば多數に農村に移住せしめ、此等は農村在來の無產者と合して農村貧民階級を形造り、自作農民に對して土地を要望し、兩者の間に大なる階級的反目と激しき階級戰との行はれざるべからざる狀勢を造り成さしめた。（その結果農村は混亂に陷り農業生產は著しく衰退す

てしまい、新しい工業といふ工業は悉く都會に集められて居るやうでは、田舍の勞働力は年中を通じて十分に利用されることが出來ないし、又勞働の轉換も出來なくて、其の力を十二分に發揮する餘地はない。

要するにすべて斯かる前提に依て行はれる社會主義の改造事業は、農業に取つては一大變革であつて、それはたゞ單に農業生産を増加することのみを目的としない。農村の人々をして單なる勞働動物たる現状から解放して、自由な人間たる地位に上ぼさんとする事業である。彼等から資本主義的搾取を取除き、農業に新生命を注入し、彼等をして現代的智識と現代的完成とに到達せしめんとするものである。資本主義は十九世紀に於て主として專ら工業と交通業とを改革した。二十世紀の殘りの大部分を支配すべき社會主義は工業よりもより多く農業を變改しなければならないのである。

（K. Kautsky, Die Socialisierung der Landwirtschaft, Beorin 9191 に據る）

四

カウツキーの農業改造意見は從來社會主義者の團體に依て公にされたる意見又は計畫と根本に於て相違はなく、土地は之を社會の公有とし有すべきもので、其上に行はるゝ耕作經營は之を農民の共同生産組合の手に依てすべきものと見るのである。たゞカウツキーは斯かる農業の社會化を強制的に一聲の下に行はんとはせず、模範的なる共同生産組合を組織し其手に依て模範的なる作業を行ひ、範を天下に示すことに依て農民を誘つて新生産組織に入らしめ、その道による自然の發展が法則的に事情を導いて、農民は結局躊躇なしに新組織に入らざるを得ざるに至り、茲に全般的なる社會化が行はれるものとしたのである。そして彼は其の以外に尚ほ農村文化の方面に着眼し農民をば從來の勞働動物たる地位から上ぼして、自由なる人間たらしめんとすることを以て、改造の大眼目と爲すべしとしたのである。

そこで今從來社會主義者に依て唱道せられたる農業社會化の實際運動について見れば、之れは伊太利の如きに於ては既に早く多少づゝ部分的に其の實行を見る所があつたけれども全般的に一大計畫の下に改造運動を見たのは、露西亞に於ける革命であつた。そのやゝ詳細なる說明は私は既に之を公にして置いたから(拙著「農業社會主義と組合社會主義」八九―一二三頁「勞農露國の農業」參照)茲にたゞその要點だけを示してみやう。

露西亞に於て共產主義革命が成就して土地に關する最初の政令の公にされたるは一九一七年十一月七日のことであつた。それによれば、從來大地主に依て所有されたる一切の土地は無償にて徵收するとせられ、其の收用地は總て全露國民會議による決定の行はれる迄地方土地委員會及び農民代議會の自由處分に委せられたのである。斯くて翌年に及び一九一八年一月二十七日の政令は土地の社會有制に關する根本原則を明かにし、公に收用されたる土地及自作農民の手に殘れる土地は、全人民の所有に屬し、其土地の上に現實に勞働する人々に依てのみ使用さるべきものとせられた。そして何人でも自己及び家族の手に依て之を爲し得る限りは土地の上に働き之を用ゐるを得る權利を有すとせられ、如何なる形式を以てするも雇傭勞働は禁止せられた。そして又土地の分配は地方の狀況に應じ勞働人口に對して均等に行はるべきものとし、其土地の使用は個人的に行つてもよければ、組合又は村落團體に依て經營使用してもよいとした。

茲に於てか農民等は自作地ならざる大地主の所有地を分割してしまい、土地所有の社會化といふことは、あらゆる農地を自作農民の間に分割し各自が之を所有する意味だと解して、各自喜んでその分割所有を行つたのである。然るにボルシエヴイズムの政治家の思ふ所は固より斯くの如きではなかつたから、都會の無產者をば多數に農村に移住せしめ、此等は農村在來の無產者と合して農村貧民階級を形造り、自作農民に對して土地を要望し、兩者の間に大なる階級的反目と激しき階級戰との行はれざるべからざる狀勢を造り成さしめた。(その結果農村は混亂に陷り農業生產は著しく衰退す

ることゝなつた。)そして此等貧民階級の者は共産團體を造り、政府は一方その共産團體に對して種々の特典を與ふると同時に、自作農民をば業務經營上困難に陷らしめ、漸次彼等を誘引して共産團體に加入せしむる爲に、種子や農用機械の政府監理に依り、彼等を繼子扱にせんとした。即ちボルシエヴイズムの政治家等は、上にカウツキーの示したる政略と同一のことを行はんとしたのである。然し乍ら實狀に於ては農村共産團體は所期の如く發展せず、自作農民は却つて益々其の地位を堅固にするに至つた。

然る間に中央政府は、自作農民等の積極的なる若くは消極的なる抵抗により、食料問題に行詰るに至つた結果、其年の終りには早くも態度を緩和し、農村貧民が自作農民を征伐するは決して中央政府の意にあらざる旨を聲明し、同時に眞の社會主義の建設は、勞働者と農民との連衡に依てのみ行はれ得ることは中央政府の本來確信する所なる旨を揚言し自作農民と農村貧民とを合して一大無産階級的勢力として農業生産の復活を圖ることゝした。そして一九一九年二月十四日の政令が公にさるゝに至つたが、之は社會主義的農業組織に關する規定及び社會主義的基礎の上に農業を組成することに關する方策として知られたるものであつて、革命露西亞内の耕種し得べき土地全體は單一なる土地基本を形造り、其上に行はるべき農事經營は行政機關の手中に屬すべきものとした。而して農業を社會化する道としては、人々が共同團結して業を爲すを以て最も有效の道と見るが故に、政府の直接監理の下に在る國營農場、農村共産團體、組合團體等に依る耕種經營を以て、社會化の目的を達する最良方法とし、個人的個別農業はたゞ過渡的狀態として暫時之を許すに過ぎずとした。(この三種團體に依る經營については前揭拙著參照)

此の規定はまことによく農業の根本改造を行ふに適する立派な規定であつたが、實際に於てはそれは殆んど紙上の空文たるに過ぎなかつた。即ち右三種團體による農業經營は國内の一小部分に於て行はるゝに過ぎないで露西亞農業の中

堅たるものは自作農民階級であり農業上の實權は彼等の掌握する所であつた。そして農業の共産主義化に對しては此等自作農民は飽迄反對し、漸次自給經濟に歸つて消極的抵抗を續けて來たので、政府は食料問題の爲に愈々困却し一九二〇年に入つてからは。その生産に對して軍隊的組織の下に強制を行ふの餘儀なきに立至つた。けれども幾ら強制しても農民はたゞ徴發に應ずべきために自家の必要以上の生産をしやうとはせなかつたので、終に政府は膝を折つてしまうことになつた。即ち一九二一年に於ける共産主義より國家資本主義への大轉回をせざるを得なくなつてしまつたのである。

斯くて即ち革命露西亞に於ける農業社會化運動は、共産組織の實行としては失敗の跡の掩ふべからざるものとなつた。共産的農業團體は發達しないで自作農主義が確立し、たゞ暫時の過渡的狀態として許されたるものが、却つて農業組織の地盤を爲すに至り、革命は舊來の大地主制を亡ぼすには貢獻したが、完全なる農業社會化には達し得なかつたのである。蓋し農奴解放以來露西亞の農民は土地に飢えて居たのである。ストリピンの改革も彼等の渴を醫するに足らなかつた。共産主義革命も亦この饑餓の前には道を譲る外はなかつたのである。現在尚ほソヴイエート政策の根本に於ては土地公有制は拋棄されたとはいへぬけれど、農耕の自由と農作物處分の自由とが農民に與へられて、事實に於ては自作農制の行はれて居るものと見る外はない狀態に在る。

五

露西亞に於て斯かる經驗の進行して居る間に、獨逸に於ても亦革命に伴ふ事情の變化は、農業社會化の問題を實行策として考へて見る必要を感ぜしめた。上に示したカウツキーの意見も其當時更めて公にされたのだが、それは既に一九一

ることゝなつた。）そして此等貧民階級の者は共産團體を造り、政府は一方その共産團體に對して種々の特典を與ふると同時に、自作農民をば業務經營上困難に陷らしめ、漸次彼等を誘引して共産團體に加入せしむる爲に、種子や農用機械の政府監理に依り、彼等を繼子扱にせんとした。即ちボルシエヴイズムの政治家等は、上にカウツキーの示したる政略と同一のことを行はんとしたのである。然し乍ら實状に於ては農村共産團體は所期の如く發展せず、自作農民は却つて益々其の地位を堅固にするに至つた。

然る間に中央政府は、自作農民等の積極的なる若くは消極的なる抵抗により、食料問題に行詰るに至つた結果、其年の終りには早くも態度を緩和し、農村貧民が自作農民を征伐するは決して中央政府の意にあらざる旨を聲明し、同時に眞の社會主義の建設は、勞働者と農民との連衡に依てのみ行はれ得ることは中央政府の本來確信する所なる旨を揚言し自作農民と農村貧民とを合して一大無産階級的勢力として農業生産の復活を圖ることゝした。そして一九一九年二月十四日の政令が公にさるゝに至つたが、之は社會主義的農業組織に關する規定及び社會主義的基礎の上に農業を組成することに關する方策として知られたるものであつて、革命露西亞內の耕種し得べき土地全體は單一なる土地共本を形造り、其上に行はるべき農事經營は行政機關の手中に屬するものとした。而して農業を社會化する道としては、人々が共同團結して業を爲すを以て最も有效の道と見るが故に、政府の直接監理の下に在る國營農場、農村共産團體、組合團體等に依る耕種經營を以て、社會化の目的を達する最良方法とし、個人的個別農業はたゞ過渡的狀態として暫時之を許すに過ぎずとした。（この三種團體に依る經營については前揭拙著參照）

此の規定はまことによく農業の根本改造を行ふに適する立派な規定であつたが、實際に於てはそれは殆んど紙上の空**文たるに過ぎなかつた。即ち右三種團體による**農業經營は國內の一小部分に於て行はるゝに過ぎないで露西亞農業の中

堅たるものは自作農民階級であり農業上の實權は彼等の掌握する所であつた。そして農業の共產主義化に對しては此等自作農民は飽迄反對し、漸次自給經濟に歸つて消極的抵抗を續けて來たので、政府は食料問題の爲に愈々困却し一九二〇年に入つてからは。その生產に對して軍隊的組織の下に强制を行ふの餘儀なきに立至つた。けれども幾ら强制しても農民はたゞ徵發に應ずべきために自家の必要以上の生產をしやうとはせなかつたので、終に政府は膝を折つてしまうことになつた。即ち一九二一年に於ける共產主義より國家資本主義への大轉回をせざるを得なくなつてしまつたのである。

斯くて即ち革命露西亞に於ける農業社會化運動は、共產組織の實行としては失敗の跡の掩ふべからざるものとなつた。共產的農業團體は發達しないで自作農主義が確立し、たゞ暫時の過渡的狀態として許されたるものが、却つて農業組織の地盤を爲すに至り、革命は從來の大地主制を亡ぼすには貢獻したが、完全なる農業社會化には達し得なかつたのである。蓋し農奴解放以來露西亞の農民は土地に飢えて居たのである。ストリピンの改革も彼等の渴を醫するに足らなかつた。共產主義革命も亦この飢餓の前には道を讓る外はなかつたのである。現在尙ほソヴイエート政策の根本に於ては土地公有制は拋棄されたとはいへぬけれど、農耕の自由と農作物處分の自由とが農民に與へられて、事實に於ては自作農制の行はれて居るものと見る外はない狀態に在る。

五

露西亞に於て斯かる經綸の進行して居る間に、獨逸に於ても亦革命に伴ふ事情の變化は、農業社會化の問題を實行策として考へて見る必要を感ぜしめた。上に示したカウツキーの意見も其當時更めて公にされたのだが、それは既に一九一

てしまひ、新しい工業といふ工業は悉く都會に集められて居るやうでは、田舍の勞働力は年中を通じて十分に利用されることが出來ないし、又勞働の轉換も出來なくて、其の力を十二分に發揮する餘地はない。

要するにすべて斯かる道筋に依て行はれる社會主義の改造事業は、農業に取つては一大變革である。それはたゞ單に農業生産を增加さすることのみを目的としない。農村の人々をして單なる勞働動物たる現狀から解放して、自由な人間たる地位に上ぼさんとする事業である。彼等から資本主義的搾取を取除き、農業に新生命を注入し、彼等をして現代的智識と現代的完成とに到達せしめんとするものである。資本主義は十九世紀に於て主として專ら工業と交通業とを改革した。二十世紀の殘りの大部分を支配すべき社會主義は工業よりもより多く農業を變改しなければならないのである。

（K. Kautsky, Die Socialisierung der Landwirtschaft, Beorin 9191 に據る）

四

カウツキーの農業改造意見は從來社會主義者の間に依て公にされたる意見又は計畫と根本に於て相違はなく、土地は之を社會の公有と爲すべきもので、其上に行はるゝ耕作經營は之を農民の共同生産組合の手に依てすべきものと見るのである。たゞカウツキーは斯かる農業の社會化を强制的に一擧の下に行はんとはせず、模範的なる共同生産組合を組織し其手に依て模範的なる作業を行ひ、範を天下に示すことに依て農民を誘つて新生産組織に入らしめ、その道による自然の發展が法則的に事情を導いて、農民は結局厭應なしに新組織に入らざるを得ざるに至り、玆に全般的なる社會化が行はれるものとしたのである。そして彼は其の以外に尙ほ農村文化の方面に着眼し農民をば從來の勞働動物たる境遇から上ぼして、自由なる人間たらしめんとすることを以て、改造の大眼目と爲すべしとしたのである。

そこで今從來社會主義者に依て唱道せられたる農業社會化の實際運動について見れば、これを大体次の如きに於ては既に早く多少づゝ部分的に其の實行を見る所があつたけれども全般的に一大計畫の下に改造運動を見たのは、露西亞に於ける革命であつた。そのやゝ詳細なる説明は私は既に之を公にして置いたから（拙著「農業社會主義と組合社會主義」一八九―一二三頁「勞農露國の農業」參照）茲にはたゞその要點だけを示してみやう。

露西亞に於て共産主義革命が成就して土地に關する最初の政令の公にされたるは一九一七年十一月七日のことであつた。それによれば、從來大地主に依て所有されたる一切の土地は無償にて徴收するとせられ、其の收用地は總て全露國民會議による決定の行はれる迄地方土地委員會及び農民代議會の自由處分に委せられたのである。斯くて翌年に及び一九一八年一月二十七日の政令は土地の社會有制に關する根本原則を明かにし、公に收用されたる土地及自作農民の手に殘れる土地は、全人民の所有に屬し、其土地の上に現實に勞働する人々に依てのみ使用さるべきものとせられた。そして何人でも自己及び家族の手に依て之を爲し得る限りは土地の上に働き之を用ゐるを得る權利を有すとせられ、如何なる形式を以てするも雇傭勞働は禁止せられた。そして又土地の分配は地方の狀況に應じ勞働人口に對して均等に行はるべきものとし、其土地の使用は個人的に行つてもよければ、組合又は村落團體に依て經營使用してもよいとした。

茲に於てか農民等は自作地ならざる大地主の所有地を分割してしまい、土地所有の社會化といふことは、あらゆる農地を自作農民の間に分割し各自が之を所有する意味だと解して、各自喜んでその分割所有を行つたのである。然るにボルシェヴィズムの政治家の思ふ所は固より斯くの如きではなかつたから、都會の無産者をば多數に農村に移住せしめ、此等は農村在來の無産者と合して農村貧民階級を形造り、自作農民に對して土地を要望し、兩者の間に大なる階級的反目と激しき階級戰との行はれざるべからざる狀勢を造り成さしめた。（その結果農村は混亂に陷り農業生産は著しく衰退す

ること、なつた。)そして此等貧民階級の者は共産團體を造り、政府は一方その共産團體に對して種々の特典を與ふると同時に、自作農民をば業務經營上困難に陷らしめ、漸次彼等を誘引して共産團體に加入せしむる爲に、種子や農用機械の政府監理に依り、彼等を繼子扱にせんとした。即ちボルシエヴイズムの政治家等は、上にカウツキーの示したる政略と同一のことを行はんとしたのである。然し乍ら實狀に於ては農村共産團體は所期の如く發展せず、自作農民は却つて益々其の地位を堅固にするに至つた。

然る間に中央政府は、自作農民等の積極的なる若くは消極的なる抵抗により、食料問題に行詰るに至つた結果、其年の終りには早くも態度を緩和し、農村貧民が自作農民を征伐するは決して中央政府の意にあらざる者を聲明し、同時に眞の社會主義の建設は、勞働者と農民との連衡に依てのみ行はれ得ることは中央政府の本來確信する所なる旨を揚言し自作農民と農村貧民とを合して一大無産階級的勢力として農業生産の復活を圖ること、した。そして一九一九年二月十四日の政令が公にさる、に至つたが、之は社會主義的農業組織に關する規定及び社會主義的基礎の上に農業を組成することに關する方策として知られたるものであつて、革命露西亞内の耕種し得べき土地全體は單一なる土地共本を形造り、其上に行はるべき農事經營は行政機關の手中に屬するものとした。而して農業を社會化する道としては、人々が共同團結して業を爲すを以て最も有效の道と見るが故に、政府の直接監理の下に在る國營農場、農村共産團體、組合團體等に依る耕種經營を以て、社會化の目的を達する最良方法とし、個人的個別農業はたゞ過渡的狀態として暫時之を許すに過ぎずとした。(この三種團體に依る經營については前掲拙著參照)

此の規定はまことによく農業の根本改造を行ふに適する立派な規定であつたが、實際に於てはそれは殆んど紙上の空文たるに過ぎなかつた。即ち右三種團體による農業經營は國内の一小部分に於て行はるゝに過ぎないで露西亞農業の中

堅たるものは自作農民階級であり農業上の實權は彼等の掌握する所であつた。そして農業の共産主義化に對しては此等自作農民は飽迄反對し、漸次自給經濟に歸つて消極的抵抗を續けて來たので、政府は食料問題の爲に愈々困却し一九二〇年に入つてからは。その生産に對して軍隊的組織の下に強制を行ふの餘儀なきに立至つた。けれども幾ら強制しても農民はたゞ徴發に應ずべきために自家の必要以上の生産をしやうとはせなかつたので、終に政府は膝を折つてしまうことになつた。即ち一九二一年に於ける共産主義より國家資本主義への大轉回をせざるを得なくなつてしまつたのである。

斯くて即ち革命露西亞に於ける農業社會化運動は、共産組織の實行としては失敗の跡の掩ふべからざるものとなつた。共産的農業團體は發達しないで自作農主義が確立し、たゞ暫時の過渡的狀態として許されたるものが、却つて農業組織の地盤を爲すに至り、革命は在來の大地主制を亡ぼすには貢獻したが、完全なる農業社會化には達し得なかつたのである。蓋し農奴解放以來露西亞の農民は土地に餓えて居たのである。ストリピンの改革も彼等の渴を醫するに足らなかつた。共産主義革命も亦この饑餓の前には道を讓る外はなかつたのである。現在尙ほソヴイエート政策の根本に於ては土地公有制は抛棄されたとはいへぬけれど、農耕の自由と農作物處分の自由とが農民に與へられて、事實に於ては自作農制の行はれて居るものと見る外はない狀態に在る。

五

露西亞に於て斯かる經綸の進行して居る間に、獨逸に於ても亦革命に伴ふ事情の變化は、農業社會化の問題を實行黨として考へて見る必要を感ぜしめた。上に示したカウツキーの意見も其當時更めて公にされたのだが、それは既に一九一

〇年に一度公にされたるものであつた。然るに之と大同小異ではあるが、一の新たなる農業社會化の意見は、ウイルブラントに依て公にされた。茲に其の大要を摘錄するは問題研究上また止むを得ざる所である。（Robert Wilbrandt, So-cialismus, 1-5 Tans, Jena 1919, S.283 fg.）

エルベ河以東の（大地主側の廣く行はれて居る地方）或大地主がウイルブラント氏に宛てゝよこした手紙だといふので氏が著書中に引用して居る所によれば、現今獨逸の農業の困却して居る事情は色々あるが、其中で土地の過度負債といふ事實は見逃し難い所のものである。即ち土地は其の存在量の一定したものであるのに、之に對する需要は多大なる爲めに、需給の自由なる適合に依つて其の價格の正當的なる決定を見難く、常に其の收益より計算せられる所の價格に比して之に超過する賣買價格を示し勝ちなものである。又土地は其の評價に於ては常に實際價値以上に見積られ易いものである。之が爲めに土地を抵當として資金貸借の行はれるに當つては、其の收益が利拂に於て堪え能ふ所以上の負債の爲さるゝを例とし、とかく農業者は其の負擔に堪え難きほどの困難の狀態に陷るを免れ難い。然るに農家は經營上其他種々の事情から借金の必要に迫らるゝは免れ難き所なれば、過度負債の事實は農業一般の困難を招致することゝならざるを得ない。然かも同時に又一方には農業に於ける資金欠乏の實狀あるを見る次第であつて、其欠乏の爲に農業生産の伸張を見得ざる所實に鮮少なりとしない。

此困難を救ふ道は、所謂農業社會化の道に沿ふて之に潤澤な資金を注入することに存しなければならぬ。けれども之に依て生ずる利益は個々の土地所有者の懐に歸すべきものではなく、社會一般の利便として扱はれなければならぬ筈のものである。所が之をして然かせしむる爲めには、土地に關する利用經營を社會公共のものたらしむる外はないのであつて、土地の占使者は從來の如く他人の資本の奴隷とせらるゝことなく、國家公共の爲に働くものとなり、從來の所得に

等しいものが給料として與へられる狀態が出來て來なければならぬ。尚又彼等は普通勞働者、殊に於けるが如く純收益に對しても一定額の分配に與づかることの出來るものとなされ得べきである。現狀に於ては、一面には土地の獨占的なる性質の結果として、不健全なる地價の騰貴を見、然かも其勢は時代錯誤的なマーキャンチリズムの保護政策に依て促進せられ、敏捷なる投機者流の懐を肥やすに過ぎざるに加へて、他方には斯かる事情を顧慮することに依つて負債は之を債權者の側よりは解約告知することの出來ないものとし、然かも一定額を限りて其範圍內に行はるゝものとし、其の償還は適當の年賦辨濟を以てすべきことに關する立法が欠けて居る。之が爲めに農業經濟は漸次行詰りつゝあるのである。

そこで其の東部地方の一地主といはれる人は、農業の社會化に關する一計畫を立てゝ之を示したとせられて居る。その計畫といふのは

一、一定の大さの經營に屬する農業をば先づ社會化すること

二、小經營農業も申出あらば社會化すること

三、社會化は農業及林業の爲に用ゐらるゝあらゆる土地に之を附屬せる建物に及ぶこと

四、土地賠償價格は最後の三平時年に於ける平均收益と其土地に對して登記せられたる土地臺帳面負債額の中庸を得た利率とを顧慮して之を定むべきものとし、若し地主が一時に現金賠償を必要としないならば半年の告知期間を以て、賠償價格に對して右の中庸利率に依る利子支拂をなすべきこと

五、土地の利用經營は之を國營に移し、從來の農場役員や勞働者は總て國家の使用者と爲し、其給料と利潤分配率とに關しては別に規定を設くべきこと。

六、收用されたる土地の從來の占有者は、其地の實地經營上の指揮が依然として其の手中に在り公の役人に引渡さ

かつた限りは、經營指揮者としての其地位を保持し適當の給料を受くる。

七、經營が收用された土地の占有者の手に存して居なかつた場合には彼又は彼の最親近者は一定の智能を備へたる限り其地の經營指揮者としての地位を要求することが出來る。この要請權は之を男系子孫へ相續せしむるを得るが、經營宜しきを得ざる場合には消滅せしめられる。

八、町村には農事評議員を置き、之は三名農業勞働者と經營指揮者とやはり經營指揮者たる一名の議長とより成る。

九、町村農事評議員の任務は出來得る限り生産手段を完全にして農業生産を振興すること及生産物を消費者に配給する道を整へることであつて、其の爲に必要の資金は國家が調達する。

十、縣農事評議會は國家選擧法の規定により全縣内より選出され、勞働者と經營指揮者と同數より成立ち 議長は經營指揮者中より別に選定される。

十一、縣農事參議會の任務は町村參議會のそれと同一だがたゞ各町村間の利害について特別に顧慮すべきものとする。

十二、中央農事參議會は勞働者と經營者と半數宛選出せる二十四名を以て組織し、議長は獨逸國當該中央官省の次官之に當る。

といふのである。かゝる計畫が適當なりや否やは別問題とするも、エルベ河以東の地主といへば頑迷固陋の者とのみ思はれて居たのに、其の中にも斯かる農業社會化の考を懷いて居る人のあるといふことは、如何に其必要が實際的に痛感せられて居るかを示すに足る一兆候といはねばならぬ。ともかくかゝる道筋に依て農業に資本と勞働とを注入し、其の振興を圖ることが必要とせられ、特に戰後經營の爲に必要と考へられたのである。

次に勞働に關しては、たゞに農村に於ける賃金が低安なることのみならず、勞働者の取扱や、地主と勞働者間の階級的區別や、時には封建的なる關係の殘存や、大地主制が行はれて、農業勞働者は到底自立の農民となる見込なきことやが、從來農民をして農村を離脫せしむる源因を爲すものとせられた。それはまことに其通りである。然るに之を緩和し農業勞働力を農村に安定せしむる道として國內移住の事業や自作農創定政策が行はれてゐるのだが、此等は果して問題解決を齎らすに足るものであらうか。之を永い眼で觀又之を大局から見れば、斯かる施設を以てしては問題は解決せられ得るものでない。小農的自作主義を以てしては到底現今の時勢の要求に應じ得られないのであつて大規模經營は欠くことの出來ぬものである。大農經營は集約經營を行つて然かも勞働力を節約することが出來、同時に勞働能率を十分に發揮せしむるを得る。

けれども彼の大地主制を以て行はれる所の大農經營であつてはならぬ。大地主制に伴ふ私的支配權と、第一及第四階級間の階級的對立と、地主の命令と無產者の屈從とは是非排除されねばならぬのであつて、之を排除して然かもよく大規模經營に伴ふ技術上並びに經濟上の利點は之を發揮せしむることが出來る。それは國營を實行するに依て得られるのであつて、農業に從事すべき役員を農業科學と近代技術とに依て十分に教育し又訓練し、同時に又農業高等學校や農事試驗場やを改善して行けば、階級的對立なくして好く勞働能率を增し生產を振興するを得べき筈である。そして新時代の人々は農業高等學校と工業高等學校とに於て十分に科學的に又技術的に教育せられねばならないが、それが十分に行はるれば、國家の農事經營を實行するに適する役員を得るに困難はなく、事業は有效に行はれ得べきである。斯くて農業は恰も國營鐵道の如く大規模に經營され、之を行ふ人々は地主の爲に働くのではなく、社會一般の利益即ち農業共同社會としての一般利益の爲に其の委託を受けて働くことゝなる譯である。

斯くすれば生産と運搬とに關しては大いに經費が節約せられ、土地の生産能力は現代的利用方法の下に増大せられ、然かも農産物の價格は勞働者の生計を脅迫しない程度のものとして決定され得ることゝなる。そして此の事業を行ふについては、社會主義的農業は現時の私的農業に比して遙かに優れたる又全然異れる經濟主義の上に立つて、よく其の目的を果し得べき筈である。經濟主義の下に於ては、現今のやうに農産物の價格は、最も不利益なる條件を以て生産を行ふ所の限界生産者の業務を立行かしむるに足るものとして定まるのではなく、又それよりも有利なる條件の下に農業を行ふ者には地代所得を獲せしむるに足るものとして決定せられるのではなくなる。さうではなくて社會に行はれる農業の全體としての生産費の平均額を標準として定まることゝなり、地代と名づけられる所の差益的利得は發生するに餘地なきことゝなつてしまうのである。成程自作農創設の事業は、獨立なる農民を創定する意味に於ては社會的に歡迎すべきものなるに相違ないが然しそれは勞働力といふ最も大切なるものを浪費する結果とならざるを得ない。現今農業に於て漸次勞働の不足を告ぐること大ならんとするの際、勞働力の節約てふことは、實に大切なことたるを忘れてはならぬのである。

要するに農業振興の爲めには、資本に集約なる經營と勞働に集約なる經營と社會的軋轢なき經營とが實行されねばならないが、資本を集約にして機械や建物や肥料などに十分なる資本投下の行はれん爲めにも、又勞働を集約にし、勞働を節約し乍ら然かも必要缺ぐべからざる勞働だけは十分に之を用ゐ得る爲めにも、更には又地主と勞働者、地主と小作人といふやうな階級的區別により其間に大いなる社會的軋轢の行はれるやうなことの無い經營狀態を造り出す爲めにも、必要なのは、社會の農業を集めて一體と爲し、化して社會的事業と爲すことである。現時の私的土地所有制を以てしては農業に十分なる資本は注がれない。生きて有効に働くべき資本は注がれない。現時の小規模農業や地主農業を以

てしては、十分なる勞働の節約と有効なる使用とは行はれない。又現時の地主農業や小作農業の下に於ては、地主と勞働者及び地主と小作人との軋轢なくして、よく共同一致的な作業の行はれんことを望むわけには行かない。どうしても土地は之を社會の有と爲し、農業經營は社會的事業として行はれる狀態を造り出さねばならぬ。之を造り出して社會一般が全般的利益の爲に農業を行ふことにして、始めてよく十分なる資本投下と勞働節約と軋轢なき農業社會狀態とは作り出されるのである。農業の社會化は斯くの如くにして農業を振興する。農業の復活と發展とを圖らんが爲には社會化は避くべからざる所たらざるを得ないのである。

* * * * *

右ウイルブラントの說く所は戰後直面の問題として當時の獨逸の事情に即して考へられたものであつて、平時の普通の場合を基礎としての說明とは聊か趣を異にする所あり、彼れの著書は其第二版に於ては社會化に關する右等の議論を社會主義に關する理論的說明の部分と切離すことにして抜いてしまつたが（R. Wilbrandt, Socialismus, 6. Aus. Jena 1921）農業社會化に關するその根本見地は社會主義者として普通に抱かれて居る所のものと、甚しく異る所はない。前に掲げたカウツキーの意見や國際協議會の決議やなどに比ぶれば、農地所有を社會化するのみならず農事經營をまで出來得る限り社會化して社會的直營を行はんとする點に於てやゝ異れる所あるを見るに過ぎぬ。併し今それ等の詳細について比較研究する必要はないことで、その農業社會化に關する根本見地が社會主義者の間に凡そ一貫せるものあることが、吾等に取つて研究上最も興味ある所たらざるを得ないのである。尙ほ近時英國のギルド社會主義者の間にも農業社會化に關する意見と計畫が立てられ、所謂農村ギルドの提唱せらるゝものあることも、見逃すべからざる所であつて、ギルドとしての自主勞働團體に依て農事經營を行ひ農產物については正當價格なるものを決定せんとする所に其

斯くすれば生産と運搬とに關しては大いに經費が節約せられ、土地の生産能力は現代的利用方法の下に増大せられ、然かも農産物の價格は勞働者の生計を脅迫しない程度のものとして決定され得ることゝなる。そして此の事業を行ふについては、社會主義的農業は現時の私的農業に比して遙かに優れたる又全然異れる經濟主義の下に立つて、よく其の目的を果し得べき筈である。經濟主義の下に於ては、現今のやうに農産物の價格は、最も不利益なる條件を以て生産を行ふ所の限界生産者の業務を立行かしむるに足るものとして定まるのではなく、又それよりも有利なる條件の下に農業を行ふ者には地代所得を獲せしむるに足るものとして決定せられるのではなくなる。さうではなくて社會に行はれる農業の全體としての生産費の平均額を標準として定まることゝなり、地代と名づけられる所の差益的利得は發生するに餘地なきことゝなつてしまふのである。成程自作農創設の事業は、獨立なる農民を創定する意味に於ては社會的に歡迎すべきものなるに相違ないが然しそれは勞働力といふ最も大切なるものを浪費する結果とならざるを得ない。現今農業に於て漸次勞働の不足を告ぐること大ならんとするの際、勞働力の節約てふことは、實に大切なことたるを忘れてはならぬのである。

要するに農業振興の爲めには、資本に集約なる經營と勞働に集約なる經營と社會的軋轢なき經營とが實行されねばならないが、資本を集約にして機械や建物や肥料などに十分なる資本投下の行はれん爲めにも、又勞働を集約にし、勞働を節約し乍ら然かも必要缺ぐべからざる勞働だけは十分に之を用ゐ得る爲めにも、更には又地主と勞働者、地主と小作人といふやうな階級的區別により其間に大いなる社會的軋轢の行はれるやうなことの無い經營状態を造り出す爲めにも、必要なのは、社會の農業を集めて一體と爲し、化して社會的事業と爲すことである。現時の私的土地所有制を以てしては農業に十分なる資本は注がれない。生きて有效に働くべき資本は注がれない。現時の小規模農業や地主農業を以

てしては、十分なる勞働の節約と有效なる使用とは行はれない。又現時の地主農業や小作農業の下に於ては、地主と勞働者及び地主と小作人との軋轢なくして、よく共同・致的な作業の行はれんことを望むわけには行かない。どうしても土地は之を社會の有と爲し、農業經營は社會的事業として行はれる狀態を造り出さねばならぬ。之を造り出して社會一體が全般的利益の爲に農業を行ふことにして、而めてよく十分なる資本投下と勞働節約と輕快なる農業社會狀態とは作り出されるのである。農業の社會化は斯くの如くにして農業を振興する。農業の復活と發展とを圖らんが爲には社會化は避くべからざる所たらざるを得ないのである。

* * * * *

右ウイルブラントの說く所は戰後直面の問題として當時の獨逸の事情に即して考へられたものであつて、平時の普通の場合を基礎としての說明とは聊か趣を異にする所あり、彼れの著書は其第二版に於ては社會化に關する右等の議論を社會主義に關する理論的說明の部分と切離すことにして拔いてしまつたが（R. Wilbrandt, Socialismus, G. A. Tans. Jena 1921）農業社會化に關するその根本見地は社會主義者として普通に抱かれて居る所のものと、甚しく異る所はない。前に掲げたカウツキーの意見や國際協議會の決議やなどに比ぶれば、農地所有を社會化するのみならず農事經營をまで出來得る限り社會化して社會的直營を行はんとする點に於てやゝ異れる所あるを見るに過ぎぬ。併し今それ等の詳細について比較研究する必要はないことで、その農業社會化に關する根本見地が社會主義者の間に凡そ一貫せるものあることが、吾等に取つて研究上最も興味ある所たらざるを得ないのである。尙ほ近時英國のギルド社會主義者の間にも農業社會化に關する意見と計畫が立てられ、所謂農村ギルドの提唱せらるゝものあることも、見逃すべからざる所であつて、ギルドとしての自主勞働團體に依て農事經營を行ひ農產物については正當價格なるものを決定せんとする所に其

の主張の眼目は存する。玆にその大様を併せ記すは、適當のことであるかも知れぬが、拙著『農業社會主義と組合社會主義』中にかなり、詳かに叙して置いたから（同書二四九――二八四頁參照）本論文の餘りに長くなるを恐れ、之で筆を擱くことにする。最後に一言斷つて置かねばならぬことは、本論文はたゞ農業社會化の意見と運動とに關する事實上の說明たるに止まり、之に對する批評は何等加へられてないことである。此の問題に關する贊否だとか、可否適不適の判斷だとか、意見や計畫に關する修正の必要の有無だとかに至つては、それは又自ら別の研究に屬することであつて、說明と批判とを混同してはならないのである。尙又農業社會化の實際運動については、伊太利に於ける其の部分的な試みが面白い事實として研究に値する。私自身としても折があつたら、少し調べてみたいと思つて居る。そして今一つ言つて置かなければならぬことは、土地所有關係を主として立てられた所の農業社會化の運動に至つては、スペンスやオー・ブライエン以來中々盛に行はれて居り、彼のヘンリー・ジョージ一派の土地制度改革運動の如き亦一種の社會化運動たるを失はないこと之である。併しその人々の意見は前揭拙著中に農業社會主義論として揭げて置いたから、本文はそれ等へは觸れなかつたのである。（終）

現代常識の根本概念　百

杉森孝次郎

十七　結社

現代は結社時代だ。結社發達の時代だ。現代を特徴づける主要現象の一は結社熱だ。

現代との比較に於ては、すべての前代は無結社時代であつた。

產業革命は同時に結社革命であつた。

現代との比較に於ては、すべての前代は、結社の發達に於て、產業革命以前のすべての時代が、產業の發達に於て、產業革命以後の時代との比較に於て示すが如き著差を示す。

結社を條件としない社會行爲は、機械を方法としない生產と似てゐる。結社行動のかたちを缺いた社會行動は、手を方法とし、道具を方法とした生產行動と似てゐる。兩者ともに、いちじるしく一人式だ。それの始終に於て、またすべての規模に於てだ。

結社を條件としない社會行爲は、幅に於て、また時間に於て、どんなに遠く達しても、一人の獨裁英雄の覇業以上には達しない。

の主張の眼目は存する。玆にその大様を併せ記すは、適當のことであるかも知れぬが、拙著『農業社會主義と組合社會主義』中にかなり、詳かに叙して置いたから（同書二四九——二八四頁參照）本論文の餘りに長くなるを恐れ、之で筆を擱くことにする。最後に一言斷つて置かねばならぬことは、本論文はたゞ農業社會化の意見と運動とに關する事實上の說明たるに止まり、之に對する批評は何等加へられてないことである。此の問題に關する贊否だとか、可否適不適の判斷だとか、意見や計畫に關する修正の必要の有無だとかに至つては、それは又自ら別の研究に屬することであつて、說明と批判とを混同してはならないのである。尙又農業社會化の實際運動については、伊太利に於ける其の部分的な試みが面白い事實として研究に値する。私自身としても折があつたら、少し調べてみたいと思つて居る。そして今一つ言つて置かなければならぬことは、土地所有關係を主として立てられた所の農業社會化の運動に至つては、スペンスやオー・ブライエン以來中々盛に行はれて居り、彼のヘンリー・ジョージ一派の土地制度改革運動の如き亦一種の社會化運動たるを失はないこと之である。併しその人々の意見は前掲拙著中に農業社會主義論として掲げて置いたから、本文はそれ等へは觸れなかつたのである。（終）

現代常識の根本概念　百

杉森孝次郎

十七　結社

現代は結社時代だ。結社發達の時代だ。現代を特徴づける主要現象の一は結社熱だ。

現代との比較に於ては、すべての前代は無結社時代であつた。

産業革命は同時に結社革命であつた。

現代との比較に於ては、すべての前代は、結社の發達に於て、産業革命以前のすべての時代が、産業の發達に於て、産業革命以後の時代との比較に於て示すが如き著差を示す。

結社を條件としない社會行爲は、機械を方法としない生産と似てゐる。結社行動のかたちを缺いた社會行動は、手を方法とし、道具を方法とした生産行動と似てゐる。兩者ともに、いちじるしく一人式だ。それの始終に於て、またすべての規模に於てだ。

結社を條件としない社會行爲は、幅に於て、また時間に於て、どんなに遠く達しても、一人の獨裁英雄の覇業以上には達しない。

産業革命は結社の新土壌であつた。それは機械を使用することを意味した。その機械は、それの全き各個形に於て、巨大なる一物であつた。それを使用するためには、數知れぬばかり多くの人の分業的及び同職的協力從事が必要であつた。例へば衣物にしても、それの生産過程に於ける始點から終點までは、容易に想像することさへできない複雜な長距離だが、この長距離は、複雜巨大な單一機械の組織的行動による運轉から成り立つものにほかならないと見られる。産業革命が結社の新土壌たる意味はここに充分に帶ばれてゐた。産業革命は、無數の新結社の發育場であつたのだ。

先づ現れたものは勞働組合であつた。及び、交通機關を一要素とする革命的産業によつて革命的に助成された民族結社としての近代式國家であつた。

勞働組合と國家、その二たつが現代結社熱の酵母だ。

しかし、その二たつのものの間柄は、仲わると仲よしとの各種形だ。

國家は、現代に於て、民族結社だ。それは、しかしながら、同時に政治結社だ。現代に於ける政治結社は、勿論、國家によつて代表される。

政治結社としての國家は、完全不完全は別の問題として、ともかくも、現代に於ける綜合結社だ。政治結社と綜合結社とは異名同物だから、これはあたり前だ。

政治結社としての國家は、即ち綜合結社としての國家だから、單なる民族結社ならばと同様の分限を必ずしも自己の分限とはしない。單なる民族結社は、多くの、あるひは一とつたりとも、異なる民族との間に自民族が社會關係を發達させて持つ時代に於ては、自民族に特有な性質だけを內容として自認するだらう。それは、したがつて、例へば言語、身體、歷史、習俗、土地に屬する自民族特有の諸性質だけを綜合的に組織する結社として自任するだらう。それ

は、したがつてまた、民族的性質以外の性質、精確にいふならば民族としての一民族に特有の性質以外の諸性質に對しては、政治結社が取るよりも無關心的な態度を取るだらう。政治結社が取るよりも間接的な關心的態度を取るだらう。それは、かくして、例へば勞働組合の如きに對しても、その社會の政治結社が取るほど直接的な關心的態度をば取らないだらう。

國家は、しかるに、現代に於て、民族結社たると同時に政治結社だ。そして、その政治結社としての國家は、勞働組合に對しても、單なる民族結社が或時代——多少近い將來にさうした時代が來るかも知れん——に取るだらうと推想されるやうな非直接的な關心的態度をば勿論取らない。さらにしかるに、現代の政治結社のほとんどすべては、いな單純にすべては、政治結社が期待しえられる限りの、正當に期待しえられる限りの獨立をば保有しない。どのまたはいかなる將來に屬する時代の政治結社にしても、その時代の或内容からのかたちに於て、多少さうであることをまぬかれないにきまつてゐるが、現代の政治結社は、民族意識と資本主義的經濟意識との兩者から、純否政治結社としてはあるまじき程度の支配と專制を受けつつある。現代の政治結社が、いかに民族意識から不獨立であるかは、政治結社が、現代に於ては、取りもなほさず民族結社そのものであるといふ露骨な現實によつて明示されてゐる。例へばロシヤにしても、決して共產主義結社ではない。その證據としては、英國にも、米國にも共產主義者はある。ロシヤにも反共產主義者は數に於て稀有でない。しかし、ロシヤの國民は、共產主義者であると反共產主義者であるとにかかはらず、遙かに一般的にロシヤ民族だ。現代の政治結社が、いかに資本主義的經濟意識から不獨立であるかは、民族意識からの不獨立に次いで著甚だ。

勞働組合は反資本主義的經濟意識の所有者だから、それの關心的位置にある政治結社即ち國家が資本主義的經濟意識

産業革命は結社の新土壌であつた。それは機械を使用することを意味した。その機械は、それの全き各個形に於て、巨大なる一物であつた。それを使用するためには、数知れぬばかり多くの人の分業的及び同職的協力従事が必要であつた。例へば衣物にしても、それの生産過程に於ける始點から終點までは、容易に想像することさへできない複雑な長距離だが、その長距離は、複雑巨大な單一機械の組織的行動による運轉から成り立つものにほかならないと見られる。産業革命が結社の新土壌たる意味はここに充分に帶ばれてゐた。産業革命は、無數の新結社の發育場であつたのだ。

先づ現れたものは勞働組合であつた。及び、交通機關を一要素とする革命的産業によつて革命的に助成された民族結社としての近代式國家であつた。

勞働組合と國家、その二たつが現代結社熱の酵母だ。

しかし、その二たつのものの間柄は、仲わると仲よしとの各種形だ。

國家は、現代に於て、民族結社だ。それは、しかしながら、同時に政治結社だ。現代に於ける政治結社は、勿論、國家によつて代表される。

政治結社としての國家は、完全不完全は別の問題として、ともかくも、現代に於ける綜合結社だ。政治結社と綜合結社とは異名同物だから、これはあたり前だ。

政治結社としての國家は、即ち綜合結社としての國家だから、單なる民族結社ならばと同様の分限を必ずしも自己の分限とはしない。單なる民族結社は、多くの、あるひは一とつたりとも、異なる民族との間に自民族が社會關係を發達させて持つ時代に於ては、自民族に特有な性質だけを内容として自認するだらう。それは、したがつて、例へば言語、身體、歴史、慣俗、土地に屬する自民族特有の諸性質だけを綜合的に維持する結社として自作するだらう。それ

は、したがつてまた、民族的性質以外の性質、精確にいふならば自民族としての一民族に特有の性質以外の性質に對しては、政治結社が取るよりも無關心的な態度を取るだらう。政治結社が取るよりも間接的な關心的態度を取るだらう。それは、かくして、例へば勞働組合の如きに對しても、その社會の政治結社が取るほど直接的な關心的態度をば取らないだらう。

國家は、しかるに、現代に於て、民族結社たると同時に政治結社だ。そして、その政治結社としての國家は、勞働組合に對しても、單なる民族結社が或時代――多少近い將來にさうした時代が來るかも知れん――に取るだらうと推想されるやうな非直接的な關心的態度をば勿論取らない。さらにしかるに、現代の政治結社のほとんどすべては、いな單純にすべては、政治結社が期待しえられる限りの、正當に期待しえられる限りの獨立をば保有しない。どのまたはいかなる將來に屬する時代の政治結社にしても、その時代の或内容からのかたちに於て、多少さうであることを免かれないにきまつてゐるが、現代の政治結社は、民族意識と資本主義的經濟意識との兩者から、純全政治結社としてはあるまじき程度の支配と專制を受けつつある。現代の政治結社が、いかに民族意識から不獨立であるかは、政治結社が、現代に於ては、取りもなほさず民族結社そのものであるといふ露骨な事實によつて明示されてゐる。例へばロシヤにしても、決して共産主義結社ではない。その證據としては、英國にも、米國にも共産主義者はある。ロシヤにも反共産主義者は數に於て稀有でない。しかし、ロシヤの國民は、共産主義者であると反共産主義者であるとにかかはらず、遙かに一般的にロシヤ民族だ。現代の政治結社が、いかに資本主義的經濟意識から不獨立であるかは、民族意識からの不獨立に次いで著甚だ。

勞働組合は反資本主義的經濟意識の所有者だから、それの關心的位置にある政治結社即ち國家が資本主義的經濟意識

の機關たる概を具ふる場合に於ては、その勞働組合とその國家とは生存競爭的關係を相互間に構成するほかない。現代に於ける代表的二結社が伸わるの間柄に立つ場合が通則的に夥多であることは、一とつの條だけについていふならば、現代に於ける政治結社即ち國家が通則的に資本主義的經濟意識の機關であることだ。

しかしながら、勞働組合が反資本主義的經濟意識の所有者であることはほとんど概念的自明事だが、即ち勞働組合といふ概念に固有の性質だが、國家が資本主義的經濟意識の機關であることは決してそれほどに必然ではない。國家社會主義、社會主義國家の學說形及び現實形に於ける多少の過去及び現實はすでにこれを證說する。これは、しかし、國家は政治結社を專ら意味すべきものだといふ見地からいふならば、勿論の事だといふほかない。

國家は政治結社を專ら意味すべきものだと見、政治結社は、一とつの社會全を、それの內在力によつて統營することを目的とする結社だと見るならば、その內在力そのものに時代的推移と社會的異別とが多少とも存する限りに於て、その推移と異別は必然その政治結社に反映する。いな、實に、その政治結社の在りかたを、それは、その社會全に於ける自身の位置と力相當に決定する。

ところで、資本主義的經濟意識が反資本主義的經濟意識に多少とも推移しつつあることは現代の一般的特徵だ。政治結社としての國家は、それゆゑに、現代に於て、勞働組合との不兩立的關係から次第に兩立的及び一致的關係へ變遷しつつある。兩者間には最初の官、賊的位置の漸進的交換がある。結社の發達が有敵意識に負ふ部分を有する限り、そして兩者の各一方が各他方の有敵意識を構成する條件である限りに於て、現代に於ける二たつの代表的結社、すべての他の結社に對する解特的位置にある國家、勞働二結社は、多少づつ自身の發達と存在を無意識的に制限しつつある部分的過程を、その反對の過程と共に持つ。

國家は、現代の事實として、綜合的には民族主義的政治結社であり、分析的には資本主義的政治結社だ。國家が綜合的に民族主義的政治結社である位置は比較的に保守的だ。一九一七年を紀元とする新制度のロシヤさへもが、舊制時の國富をば、土地、鐵道等のかたちに於てのそれをば、舊制時から生存し續けてゐる一定人及びかれらの子孫有として、即ち傳統的露國民有として公然自認したことはそれの一例證だ。また、國際聯盟が民族自決を一要點としたこともそれの一例證だ。既成、未成の帝國主義も、洗つて見れば皆な民族主義にほかならない。現代國家が、それの第一特質に於て民族主義的政治結社であることは疑ふ餘地がない。

しかし、民族主義的政治結社といふ概念は、いひかへるならば事實は、不安定だ。政治結社と民族主義とは、全體と部分とのあひだの關係を、その兩者が最も合理的に一致する場合に於てさへも、本質的には相互間に構成するほかないからだ。民族主義的政治結社としての現代國家は、それによつて專制される人性的、文化的諸要素に、その諸要素自身の結社を持つ必要を、それが專制化することによつて、それの、その專制化の、發達にしたがつていよ〳〵、敎へる。正當防衛の武器を、被專制的諸要素は、先づその敵の專制裝置からして學ぶのだ。

結社を定義すれば、それは、或共通目的及びそれの方法の意識に於て協力關係を構成してゐる複數人だと定義される。結社は、さうした性質のものだから、單的意義に於て超個人的に有力だ。團結は力だ。組織は力だと正當にいはれるわけがここにある。

現代の事實として、國家は、綜合的には民族主義的政治結社であり、分析的には資本主義的政治結社だと私は先刻いうた。綜合的にとは全體的にといふことだ。いひかへれば對外的にといふことだ。そして、分析的にとは內部組織に協する特徵に於てといふと同意義だ。

現代の一國家は、それの一層大きな社會的全體に於ける性質に於ては、即ちそれの全體的位置に於ては、一民族がすべての他民族、外在諸民族に對して專制することを目的とする結社だ。

同じ國家は、それ自身の内部組織に屬する性質に於ては、一民族内の資本家的部分が、殘餘部分に對して專制することを目的とする結社だ。

一民族が外在諸民族に對して專制することを目的として、したがつてそれが可能である限り現實として、現實とすべく常に用意して、自民族を組織するならば、外在諸民族が、それぞれに、必要な對策として同樣に自己を組織することは極めて自然だ。

現代諸國家は、それの起原に於て、多少皆なそれであつた。ナポレオン第一の佛からの專制に刺戟されて近代ドイツの國家組織が發生したことは、通則の一例にすぎない。

大戰以來の現象に屬する民族自決の主義及び運動も、同じ通則内の一新例だ。實に、帝國主義は、民族專制主義にほかならない。そして、帝國または强大國は、比較的に成功した民族專制主義以外のものではない。さらにそして、民族自決は、帝國主義、帝國、强大國に對する全的否定を意味するが如くにして、實は、勿論、民族專制主義の普及、即ち平等分配を意味するものにほかならない。民族專制を、自民族のみにでなく、すべての民族に同時に必要視する立ち場が、即ちその言葉の最も良心的な意義に於ての主義として承認する立ち場が、民族自決といふ國際憲法的一新規範だ。

自決は讀んで字の通り自民族だけを目的とするものであつて、他民族の在りかたを決定する意味を多分に持つ專制とは全然別質だと見ることは、心理の本質に徹底しない淺見だ。自決または自治は、社會的に、あるひは社會力によつて、社會力といふ外在力によつて、專制が制限されたかたちにほかならない。その制限を見越して、最初から考慮のう

ちに入れて、しかるのちに成り立たせられたもので、自決または自治はあるのだ。

自決または自治は、本能ではなく反省だ。それは意思たりうるが衝動たりえない。

人類が、個人として、したがつて團體としても、專制的傾向の持ちぬしであることは、幸か不幸かは別の問題として、事實だ。實は人類のみでなく、各のものに專制的傾向がある。それは多少あると見られると同時に、各物のすべてだと見られる。專制といふ言葉を淺く、狹く限つて理解する立ち場と、できるだけ深く、できるだけ廣く解放して理解する立ち場とを、自由に使ひわける綜合的見地からすればだ。

されば、人類としては、積極的に、他を專制することを極度に厭ふ場合にも、消極的に、自身が他から專制されることをすこしでも悦ぶならば、結社を持つ必要があると、略說的には立則することができる。

現代國家は、それが民族的專制を目的とする結社たる意味を有するがゆゑに、自己の國家を持たざる民族にそれを持たす運びに必然到着したことは民族自決現象が明示する通りだが、同じ現代國家は、それが資本家的專制を目的とする結社たる意味を、綜合的にでなく分析的に有するがゆゑに、自己の結社を持たざる國內的部分にそれを持たす運びに必然到着しつゝあることが、勞働組合の位置だ。これを、自己の國家を持たざる階級にそれを持たす運びに必然到着しつつあることが、いはゞ無產結社の位置だと、多少の理解と聰明を別に條件として換說することができる。

民族主義的專制を目的とする結社としての國家をば愛し、資本主義的專制を目的とする國家をば憎む立ち場が、現代の多くの勞働者及び無產者の立ち場だ。かれらの或ものは、民族主義的專制を目的とする結社としての國家をも憎む。しかし、勿論これはその憎む人々自身が屬する民族の場合についての話だが、かれらといへども、外部から民族主義的專制を甘受する立ち場にはゐない。過般の歐洲大戰に於ける主要交戰國內の勞働者の立ち場は概してはこの部類に屬す

るものであつた。

民族主義的專制を目的とする結社としての國家をも愛し、資本主義的專制を目的とする結社としての國家をも愛する立ち場が、しかしながら、勿論、現代に別にある。多くの資本家の立ち場が即ちそれだ。

右の事情だけが關する限り、苦しい立場は勞働者のそれだ。すくなくとも當人の自覺に於ては、自民族の民族的專制を悔むかれらも、外在民族が自民族にむかつて民族的專制を加へる現實または可能を否定しえない場合がある。しかるに、それに備へる方法としては、自民族の民族主義的結社が必要だ。さらにしかるに、自民族の民族主義的結社は、自民族内の資本家的部分の資本主義的專制結社と結合して、結合したかたちに於て、そうした具體形に於て確設されてゐる。されば、現代の勞働者が完全に理性的に思慮し、行動しうる場合を假定しても、かれらは、外在民族からの民族主義的專制の現實または可能が、自民族内の資本家的部分からの資本主義的專制の現實または可能に比して、一層關心的だと判斷しうる限り、背に腹はかへられぬ態度を取るほかない。かれらは、民族結社員としての意識に於ては自民族内の資本家的部分と共同戰線に立ち、勞働組合員としての意識に於てはかれらと對陣するほかない。

選擇的及び象徵的に勞働組合という て置くが、勞働組合の現代に於けるかくの如き位置が、國家の現代に於ける位置を漸進的に不安定に導きつつある。そして、國家の本質的進化は、實に、ここにそれの第一促進力を持つてゐると明視される。

國家は現代に於ける最も綜合的な、そして現實力に於て最も强大な結社だが、その國家の本質的進化は、實に、對外的には、民族主義的、あるひは民族意識的結社以外の結社が、勿論充分にまじめな人性的、文化的、社會的目的を有するそれが、あらゆる種類に於て國内に發達することをそのための最も必要な方法とする。そして、それは、實に、對内

的には、最も一般的にいふならば政府以外の結社が、勿論前と同樣のそれが、前と同樣にあらゆる種類に於ていはば民間に發達することをそのための最も必要な方法とする。いふところの前の場合の諸結社、即ち民族主義的あるひは民族意識的結社以外の諸結社の發達は、その內容の性質のゆゑに、自然に國境を超越し、民族線を橫斷し、國際的、諸民族的、諸人種的、人類的社會を單一の舞台とするにきまつてゐる。さうすること、さうなることは、その諸結社の自由發達の必然だ。

政府以外の結社の代はりに、資本主義的政治結社以外の結社といふことは、現代の多くの場合に妥當するが、精確にすべての場合には妥當しない。政府は、また政治結社は、あるひは國家は、反資本主義的意思のものでもありうる。現代は、例外的稀有にではあるが、すでにその場合を經驗した。しかし、その如き場合に於ても、國家の本質的進化は、矢張り民間に於ける政府以外的諸結社の、勿論充分にまじめな人性的、文化的、社會的目的を有するそれらの、自由發達、完全發達をそのための最も必要な方法とする。

民族意識的結社以外の諸結社が、まじめな存在理由を有するそれらが、自由發達、完全發達を享樂することは、民族意識的結社の專制を制する效果を持つ。同樣に、政府以外の諸結社がさうすることは、勿論、まじめな存在理由を有するそれらがさうすることは、例へばその政府が資本主義的傾向のものであるならばそのかたちに於ての專制を、また例へばその政府が反資本主義的傾向のものであるにしてもそのかたちに於ての可能的專制を、最も有意義に制する效果を持つ。

結社は組織だ。組織は力だ。力は專制する。それゆゑに結社は專制する。されば、すでに民族主義結社あり、そして、それは、それの專制的傾向にまかせて帝國主義結社化する必然ありとすれば、民族にして自己の結社を持たざるも

のが、自民族の生存に內在するすべての意思を保全する方法は、自民族の結社化を除外したものではありえない。同樣に、すでに資本主義結社あり、かくして例へば株式會社あり、商店あり、銀行あり、すべてのかたちに於ける資本主義的企業、營利結社あり、そして、それらは、それらの專制的傾向にまかせて資本主義國家化する必然ありとすれば、その統制下に立つほかない位置にあるすべての非資本主義的及び殊に反資本主義的要素としては、自要素同志の結社を持つことを自己保存のための必要事とする。實に、さうしないならば、その統制下に立つほかない自然的位置にそれらの要素、意思、生命はあるからだ。

結社は專制する。それゆゑに結社は單數であつてはならん。それはできるだけすべての生活的特殊內容に於ける各の共通世界を表現するかたちに於て複數、多數であることを社會的見地、全人性的及び全文化的見地としての綜合的見地からして最も望ましい事とする。

結社は專制する。しかし、それは、すべての生命に對してではない。結社が專制するのは、その結社の存在理由である特殊の生命以外のすべての生命に對してだ。

さきに、私は、結社を定義して、結社は　或共通目的及びそれの方法の意識に於て協力關係を構成してゐる複數人だといふた。結社は、その共通目的に對しては專制しない。それをば助成する。結社は、その共通目的以外のすべての目的に對して專制する多少の必然があるのだ。

結社專制は、それゆゑに、或目的が外在諸目的に對して專制することであるのだ。

例へば民族主義結社の場合について見るに、もしもここに、外在民族に屬する或一人または多數人と協力するでなければ達成しえられない人類救濟的事業があるならば、そしてそれは科學的、道德的及びその他のかたちのものでありう

るが、その民族主義結社が總殺的國交斷絕を採用する事情下には、その事業は專制される。即ち自由を奪はれる。勿論、その場合、その協力を必要とする當方者はその民族內の一人または權力に於ける決定量以下のものであることを條件とする。

結社は專制する。それは、實に、外在世界を專制するのみでなく結社員そのものをも、或意味に於て、專制する。その或意味とは、結社員に於ける結社目的以外の目的が關する限りといふことだ。

結社員といふ事實を分析すれば、それの背景はその一全人だが、それの前景はその結社の存在理由としての觀念、目的觀念、即ち意思だけだ。

例へば治水結社員を見るに、精確に結社員たる部分は、勿論實に於ての話だが、治水目的だけだ。同じ水害區域または水利區域に生活するすべての人は、治水目的に於ては共通だから、その目的の意識、及びそれの方法の意識に於て、結社を構成する。しかし、かれらは、政見、社會組織觀、哲學等に於ては種々たりうる。もしも、治水結社員たるの理由にもとづいて、政見、社會組織觀等をも一律化する強制があるとするならば、それは治水結社がそれ自身の成員に對する部分的專制だ。

しかるに、このかたちの專制が、現代の國家に、殊にそれに、すでに大いに發達してゐる。勿論、それは、國家以外の結社にも、例へば勞働、無產方面のそれにも、多少發達してゐる。

結社員といふ事實に對する抽象的及び具體的分析が現代に於て未發達であるのだ。それに原因する專制と服從が現代に於て發達してゐるのだ。

結社は、實に、量的關係に於ては超個人的だが、質的關係に於ては個人以下的、個人以內的、個人以に於ける有限部

のが、自民族の生存に内在するすべての意思を保全する方法は、自民族の結社化を除外したものではありえない。同様に、すでに資本主義結社あり、かくして例へば株式會社あり、商店あり、銀行あり、すべてのかたちに於ける資本主義的企業、營利結社あり、そして、それらは、それらの專制的傾向にまかせて資本主義國家化する必然ありとすれば、その統制下に立つほかない位置にあるすべての非資本主義的及び殊に反資本主義的要素としては、自要素同志の結社を持つことを自己保存のための必要事とする。實に、さうしないならば、その統制下に立つほかない自然的位置にそれらの要素、意思、生命はあるからだ。

結社は專制する。それゆゑに結社は單數であつてはならん。それはできるだけすべての生活的特殊內容に於ける各の共通世界を表現するかたちに於て複數、多數であることを社會的見地、全人性的及で全文化的見地としての綜合的見地からして最も望ましい事とする。

結社は專制する。しかし、それは、すべての生命に對してではない。結社が專制するのは、その結社の存在理由である特殊の生命以外のすべての生命に對してだ。

さきに、私は、結社を定義して、結社は　或共通目的及びそれの方法の意識に於て協力關係を構成してゐる複數人だといふた。結社は、その共通目的に對しては專制しない。それをば助成する。結社は、その共通目的以外のすべての目的に對して專制する多少の必然があるのだ。

結社專制は、それゆゑに、或目的が外在諸目的に對して專制することであるのだ。

例へば民族主義結社の場合について見るに、もしもここに、外在民族に屬する或一人または多數人と協力するでなければ達成しえられない人類救濟的事業があるならば、そしてそれは科學的、道德的及びその他のかたちのものでありう

るが、その民族主義結社が總殺的國交斷絕を採用する事情下には、その事業は專制される。即ち自由を奪はれる。勿論、その場合、その協力を必要とする當方者はその民族内の一人または權力に於ける決定量以下のものであることを條件とする。

結社は專制する。それは、實に、外在世界を專制するのみでなく　結社員そのものをも、或意味に於て、專制する。その或意味とは、結社員に於ける結社目的以外の目的が關する限りといふことだ。

結社員といふ事實を分析すれば、それの背景はその一全人だが、それの前景はその結社の存在理由としての觀念、目的觀念、即ち意思だけだ。

例へば治水結社員を見るに、精確に結社員たる部分は、勿論質に於ての話だが、治水目的だけだ。同じ水害區域または水利區域に生活するすべての人は、治水目的に於ては共通だから、その目的の意識、及びそれの方法の意識に於て、結社を構成する。しかし、かれらは、政見、社會組織觀、哲學等に於ては種々たりうる。もしも、治水結社員たるの理由にもとづいて、政見、社會組織觀等をも一律化する強制があるとするならば、それは治水結社がそれ自身の成員に對する部分的專制だ。

しかるに、このかたちの專制が、現代の國家に、殊にそれに、すでに大いに發達してゐる。勿論、それは、國家以外の結社にも、例へば勞働、無産方面のそれにも、多少發達してゐる。

結社員といふ事實に對する抽象的及び具體的分析が現代に於て未發達であるのだ。それに原因する專制と服從が現代に於て發達してゐるのだ。

結社は、實に、量的關係に於ては超個人的だが、質的關係に於ては個人以下的、個人以内的、個人以に於ける有限部

分的であるのだ。

例へば治水結社員が一萬人だとすれば、量的關係に於ては、その結社は、それの一成員の一萬倍だと概算される。しかし、質的關係に於ては、その結社は治水目的だけから成り立つものであるのに、それの各成員は、治水目的及び數知れぬ他の種類の目的から成り立つ綜合的一全體だ。

政治結社即ち現代ならば國家の如き、多くまたはすべての共通目的の綜合全と見られる性質の結社にしても、それの內容は、共通目的以外のものではない。しかるに、それの一成員は、一全人としての資格に於ては、かれに特有の目的をも種々持つ。即ち、質的資格に於ては、一人は、かれが關係する政治結社または國家よりさへも遙かに餘計に全體的存在物であるのだ。

一人には多くの目的がある。そのうちの或る目的は他の多くの人と共通だ。しかる場合に、かれは、その目的を達成するための最も有効な方法として他の多くの人々と協力する。結社は、それゆゑに、一人の全體的目的ではなく、かれの部分的目的を達成するための方法だけのものであるのだ。

產業革命以後、即ち民族主義的、資本主義的、及びまた反資本主義的結社發達の最近代に於ては、質的資格に於て全體的なものが、質的資格に於て部分的なものの前に、たゞ前者自身は量的資格に於て部分的であり、後者はそれに於て全體的であるだけの事情に支配されて、屈服、拜跪する新現象が、新形式に於て發達した。

民族結社も、資本結社も、勞働結社も、產業革命に觸發された部分を、あるひは著大に、あるひは代表的に持つ。それだけに、それらのどれもが、機械に對する、即ち組織された道具に對する偶像崇拜を多少いちじるしく示す。

結社は組織だ。組織された道具だ。たゞその組織の方法と、道具の性質が、文字通りの機械に比して物質的でないだ

けだ。

結社を發達させないこと、使用しないことは、機械を發達させないこと、使用しないことと同一傾向の愚だ。しかし、結社あるがゆゑに、結社なき場合に於けるよりも、全體の自由が制限される可能がある。ちやうど、機械あるがゆゑに、機械なき場合に於けるよりも、全體の筋勞が餘計にされる可能があるやうにだ。いづれも、結社または機械に對する、それの人間世界に於ける存在理由に對する明確なる認識の缺乏に原因する現象だ。結社そのものの固有質でそれがないことは、機械そのものの固有質でそれがないと同じやうな事實だ。

勞働を省除するためのものである筈の機械が、世界を勞働化せんとする現實を構成するやうに、人間によつて位置づけられた眼前の活きた歴史がある位だから、自由を增し、專制を討つためのものである筈の結社についても油斷はならん。

結社は專制を制することをそれの存在理由の一とする。專制を制することは、さうしないならば專制される位置にある生命からいふ限り、それだけ自由を獲得することだ。しかしながら、その自由も只では獲得されない。結社の成員には、成員であるがゆゑに生ずる義務と責任がある。義務と責任は、それを負ふものにとつていくらかの自由を制限することを意味する。たゞ、一とつの結社が、それの成員に與へる自由が、それの成員から奪ふ自由よりも餘計でないならば、その結社には存在權がない。

外來の專制を制することが意味する自由が、その方法としての結社を創造し、保存するために失ふ自由よりも大でないならば、それは收益が生產費よりも大でない營利事業同然だ。それは消費によつて酬いられない生產、即ち存在理由なきものに屬する。

產業革命以來日なほ淺き現代に於ては、大多數者は消費によつて酬いられない生產に從事する。產業革命と殊緣ある

結社の場合に於て、それの存在理由に對して無關心でないことは、革命された産業そのものに於ける生産の理由に對して無關心でないことが當然であるが如くに當然だ。

産業革命以來日なほ淺き現代のことゝて、大多數者は、無反省的に、消費によつて酬いられない生産に從事する。生産を運命視し、その範圍内に於ての改良に、多少の改良も始終する。現代の代表的諸結社の位置は、現代の生産の位置に酷似してゐる。國家、組合、組織、實に社會そのものまでもが、次第に偶像化しつつある。迷信の對象化しつつある。ただ、國家だけは、起原が比較的に古るいゆゑに、反省の焦點に移され始めた。しかしながら、國家の存在理由に根本的反省を與へる主役を演じつゝある新興諸結社も、自己の存在理由に對して根本的反省を加ふべき必要を次第に増して來た。新興諸結社の現象的發達と共に本質的進化の餘地が現代に於て意識される。例へば、勞働組合の存在理由は、社會に於ける勞働の全然的傭用に、傭用化に、そのために必要な制度の確設に存するほかないではないか。同樣に、無産結社の存在理由は、社會に於ける無産階級の非存在に存するほかないではないか。勞働結社、無産結社、これらは皆な、民族結社同樣に、外來專制を制し終へないあひだだけそれの存在理由を持つものにほかならない。もしも、勞働、無産の結社目的が、現に勞働者であり、無産者であるものはいつまでも、いよいよ完全にそれであること、及び現にそれでないすべての人を早く完全にそれにすることにあるとするならば、一言にして、現在の勞働者及び無産者が全社會を永久に同化すること、そのための酵母組織にあるとするならば、それは、結社の目的は結社にあるとする立ち場の一形だ。しかし、この立ち場は、一層深い反省によつて否定される。

社會の勞働化、全衆の無産化は、勿論、勞働、無産の結社目的ではない。その正反對がそれだ。しかし、このやうな最も自明的な公理が、かへつてしばしば忘れられすぎる。そして、さうした觀念組織が、極めて有意義な行動に無力化

を與へる作用は決して輕視することができない。

國家の存在は、それの目的が超國家的存在にある限りに於て健全だ。同樣の原則は、勞働、無產の結社にも例外を形成しない。勞働者でなければ、無產者でなければ人でないといふ眞理は、國民でなければ人でないといふ眞理同樣に、極めて條件つきのものとしてのみ成り立つ。かりに、現代に於て、國境の目的は國境に、軍備の目的は軍備にあると誰れかが主張したなら、他のほとんどなに人もがかれに敎ふべき或ものを意識するだらう。すべての人を勞働者でなく、無產者でなく、一刻も早くすることが、勞働、無產の運動、組織的運動、結社の目的であることは、その當事者が第一に知り拔いてゐる筈の事だ。その方法として、一時、すべての人を勞働者にし、無產者にする必要があるか、ないかは、技術に屬する第二問題だ。

結社の存在理由を時々に反省することは、結社發達のための第一要件だ。

使ふべき機械をして、產業革命以後の社會は、好んで自身を使はしめた。消費すべき富、そのための生產をして、現代は自身を消費せしめつつある。人類は、利己にかけては拔け目なきが如くにして、實は必ずしも決して然らず。進んだ時代から見た過去は、不思議なほどすべて拔かつてゐたではないか。結社の存在理由に關して、現代も多少拔かつてゐるにきまつてゐる。

十八　現代國家

一例として英を見る。それは一つの民族主義結社だ。それは一つの資本主義結社ではない。その證據には、それのなかには澤山の反資本主義者がゐる。それは一つの反資本主義結社でもない。その證據には、それのなかには澤山の

結社の場合に於て、それの存在理由に對して無關心でないことは、革命された產業そのものに於ける生產の理由に對して無關心でないことが當然であるが如くに當然だ。

產業革命以來日なほ淺き現代のこととて、大多數者は、無反省的に、消費によつて酬いられない生產に從事する。生產を運命視し、その範圍内に於ての改良に、多少の改良も始終する。現代の代表的諸結社の位置は、現代の生產の位置に酷似してゐる。國家、組合、組織、實に社會そのものまでもが、次第に偶像化しつつある。迷信の對象化しつつある。ただ、國家だけは、起原が比較的に古るいゆゑに、反省の焦點に移され始めた。しかしながら、國家の存在理由に根本的反省を與へる主役を演じつゝある新興諸結社も、自己の存在理由に對して根本的反省を加ふべき必要を次第に增して來た。新興諸結社の現象的發達と共に本質的進化の餘地が現代に於て意識される。例へば、勞働組合の存在理由は、社會に於ける勞働の全然的廢用に、廢用化に、そのために必要な制度の確設に存するほかないではないか。同樣に、無產結社の存在理由は、社會に於ける無產階級の非存在に存するほかないではないか。勞働結社、無產結社、これらは皆な、民族結社同樣に、外來專制を制し終へないあひだだけそれの存在理由を持つものにほかならない。もしも、勞働、無產の結社目的が、現に勞働者であり、無產者であるものはいつまでも、いよいよ完全にそれであること、及び現にそれでないすべての人を早く完全にそれにすることにあるとするならば、一言にして、現在の勞働者及び無產者が全社會を永久に同化すること、そのための酵母組織にあるとするならば、それは、結社の目的は結社にあるとする立ち場の一形だ。しかし、この立ち場は、一層深い反省によつて否定される。

社會の勞働化、全衆の無產化は、勿論、勞働、無產の結社目的ではない。その正反對がそれだ。しかし、このやうな最も自明的な公理が、かへつてしばしば忘れられすぎる。そして、さうした觀念組織が、極めて有意義な行動に無力化

を與へる作用は決して輕視することができない。

國家の存在は、それの目的が超國家的存在にある限りに於て健全だ。同樣の原則は、勞働、無産の結社にも例外を形成しない。勞働者でなければ、無産者でなければ人でないといふ眞理は、國民でなければ人でないといふ眞理同樣に、極めて條件つきのものとしてのみ成り立つ。かりに、現代に於て、國境の目的は國境に、軍備の目的は軍備にあると誰れかが主張したなら、他のほとんどなに人もがかれに教ふべき或ものを意識するだらう。すべての人を勞働者でなく、無産者でなく、一刻も早くすることが、勞働、無産の運動、組織的運動、結社の目的であることは、その當事者が第一に知り拔いてゐる筈の事だ。その方法として、一時、すべての人を勞働者にし、無産者にする必要があるか、ないかは、技術に屬する第二問題だ。

結社の存在理由を時々に反省することは、結社發達のための第一要件だ。

使ふべき機械をして、産業革命以後の社會は、好んで自身を使はしめた。消費すべき富、そのための生産をして、現代は自身を消費せしめつつある。人類は、利己にかけては拔け目なきが如くにして、實は必ずしも決して然らず。進んだ時代から見た過去は、不思議なほどすべて拔かつてゐたではないか。結社の存在理由に關して、現代も多少拔かつてゐるにきまつてゐる。

十八　現代國家

一例として英を見る。それは一とつの民族主義結社だ。それは一とつの資本主義結社ではない。その證據には、それのなかには澤山の反資本主義者がゐる。それは一とつの反資本主義結社でもない。その證據には、それのなかには澤山の

資本主義者がゐる。もしも英といふ一つの現代國家が資本主義結社であるならば、なぜ多くの資本主義者が米にも、獨にも、その他の英以外の部分にもゐるか。英が唯一の資本主義結社ではなく、一とつの資本主義結社だからだといふならば、なぜ唯一の資本主義結社を、世界中のすべての資本主義者は、明白に有益だと見て構成しないか。それをしないには、よく〳〵の事情があると見られる。

英といふ一とつの現代國家は、澤山資本主義者と澤山の反資本主義者を成員即ち國民として持つてゐるが、民族的には比較的に單一だ。

印度を忘れたかといふかも知れんが、あの狹い英本國あるひは英本土だけのなかにさへ、澤山の資本主義者と澤山の反資本主義者とが英國民、正統英國民族として生存してゐる。

なぜ國家が現代に於て複數に存在するかといふ問ひを設けて見ると、答へは民族が複數に存在するからだといふところに落ち着く。それではいはゆる帝國及び或强大國はどう說明されるかと問ひ進められるかも知れん。それに對する答へは容易にできる。かれらは、おの〳〵、一とつの民族主義結社が、民族主義結社として成長した一形にほかならない。一民族が、一または多くの他民族を、民族的利己心にもとづいて、力まかせに生けどつたかたちが即ちかれらのおの〳〵だ。かれらのおの〳〵はそれ以外のものではない。

なぜ世界中の資本主義者と反資本主義者とは、それぞれに早く自分たち同志の結社を造らないか。同主義者が結社しないわけがないでないか。資本主義者は、すくなくとも手近かの國家を自分たちの結社同然のものにし終へたから、一と先づ小康を享樂してゐるのだといふならば、反資本主義者だけは、もつとかれら自身の世界結社を斷行して然るべきではないか。それをしないには、よく〳〵の事情があると見られる。

そのよく〳〵の事情は、民族別としてのみつひに確認される。

民族別とや。それは土地、慣俗、歴史、傳統、血緣、言語等に於ける多少の別を客觀的條件とする多少の主觀的心理にほかならないではないか。いかにもさうだ。しかし、それだけのものが、現代に於て、現に持つ通りの引力と威力を持つてゐることは、あらためていふまでもなく事實だ。

現代國家の政府は、また憲法は、概ね資本主義的だが、たまには反資本主義的だ。英にも、露にも、その例があつた。しかし、國家の成員は、國民は、相變らず同一民族だ。この事實は、現代國家の本質は民族主義であること、そしてそれの偶然質は資本主義であつたり、いな概ねそれであり、たまには反資本主義であることを證明する。

もしも現代國家の本質が、あるひは現代と限らず、國家そのものの本質が資本主義だとするならばなほさら、現代國家及び殊にも國家そのものの生滅々起は不思議な話となる。

現代は、まだ、實力に於て、民族主義時代か。想像は燕よりも飛ぶが、實力は庭鳥ほどにも舞はない。

十九　今世紀

今世紀も二十五年あまりを經過した。殘る七十五年足らずのあひだに、どんな運命が藏されてゐるだらうか。それはなに人にもわからない。九月一日午時の東京の大震を、誰れがその五分間前にさへ豫報したか。一九一四年六月二十八日の前日に、伯林街上を、その都外の、多くの人の目に、當時世界に威を張つたかの、張るかの概あつた一人の住むあたりを訪察した人のなかに、その翌日のセライェヴの出來事及びそれの發展を夢想だにしえたものがあつたか。一七八八年の佛京は、大變をまぢかに豫期したなんらの兆候をも示さなかつたといふ。人は將來に對してこんなに

資本主義者がゐる。もしも英といふ一つの現代國家が資本主義結社であるならば、なぜ多くの資本主義者が米にも、獨にも、その他の英以外の部分にもゐるか。英が唯一の資本主義結社ではなく、一とつの資本主義結社だからだといふならば、なぜ唯一の資本主義結社を、世界中のすべての資本主義者は、明白に有益だと見て構成しないか。それをしないには、よく／＼の事情があると見られる。

英といふ一とつの現代國家は、澤山資本主義者と澤山の反資本主義者を成員即ち國民として持つてゐるが、民族的には比較的に單一だ。

印度を忘れたかといふかも知れんが、あの狹い英本國あるひは英本土だけのなかにさへ、澤山の資本主義者と澤山の反資本主義者とが英國民、正統英國民族として生存してゐる。

なぜ國家が現代に於て複數に存在するかといふ問ひを設けて見ると、答へは民族が複數に存在するからだといふところに落ち着く。それではいはゆる帝國及び或强大國はどう說明されるかと問ひ進められるかも知れん。それに對する答へは容易にできる。かれらは、おの／＼、一とつの民族主義結社が、民族主義結社として成長した一形にほかならない。一民族が、一または多くの他民族を、民族的利己心にもとづいて、力まかせに生けどつたかたちが即ちかれらのおの／＼だ。かれらのおの／＼はそれ以外のものではない。

なぜ世界中の資本主義者と反資本主義者とは、それぞれに早く自分たち同志の結社を造らないか。同主義者が結社しないわけがないでないか。資本主義者は、すくなくとも手近かの國家を自分たちの結社同然のものにし終へたから、一と先づ小康を享樂してゐるのだといふならば、反資本主義者だけは、もつとかれら自身の世界結社を斷行して然るべきではないか。それをしないには、よく／＼の事情があると見られる。

そのよく／＼の事情は、民族別としてのみつひに確認される。民族別とや。それは土地、慣俗、歷史、傳統、血緣、言語等に於ける多少の別を客觀的條件とする多少の主觀的心理にほかならないではないか。いかにもさうだ。しかし、それだけのものが、現代に於て、現に持つ通りの引力と威力を持つてゐることは、あらためていふまでもなく事實だ。

現代國家の政府は、また憲法は、概ね資本主義的だが、たまには反資本主義的だ。英にも、露にも、その例があつた。しかし、國家の成員は、國民は、相變らず同一民族だ。この事實は、現代國家の本質は民族主義であること、そしてそれの偶然質は資本主義であつたり、いな概ねそれであり、たまには反資本主義であることを證明する。もしも現代國家の本質が、あるひは現代と限らず、國家そのものの本質が資本主義だとするならばなほさら、現代國家及び殊にも國家そのものの生滅々起は不思議な話となる。

現代は、まだ、實力に於て、民族主義時代か。想像は燕よりも飛ぶが、實力は庭鳥ほどにも鋒はない。

十九 今世紀

今世紀も二十五年あまりを經過した。殘る七十五年足らずのあひだに、どんな運命が藏されてゐるだらうか。

それはなに人にもわからない。九月一日午時の東京の大震を、誰れがその五分間前にさへ豫報したか。一九一四年六月二十八日の前日に、伯林街上を、その都外の、多くの人の目に、當時世界に威を張つたかの、張るかの概あつた一人の住むあたりを訪察した人のなかに、その翌日のセライェヲの出來事及びそれの發展を夢想だにしえたものがあつたか。一七八八年の佛京は、大變をまぢかに豫期したなんらの兆候をも示さなかつたといふ。人は將來に對してこんなに

資本主義者がゐる。もしも英といふ一つの現代國家が資本主義結社であるならば、なぜ多くの資本主義者が米にも、獨にも、その他の英以外の部分にもゐるか。英が唯一の資本主義結社ではなく、一とつの資本主義結社だからだといふならば、なぜ唯一の資本主義結社を、世界中のすべての資本主義者は、明白に有益だと見て構成しないか。それをしないには、よく〳〵の事情があると見られる。

英といふ一とつの現代國家は、澤山資本主義者と澤山の反資本主義者を成員即ち國民として持つてゐるが、民族的には比較的に單一だ。

印度を忘れたかといふかも知れんが、あの狹い英本國あるひは英本土だけのなかにさへ、澤山の資本主義者と澤山の反資本主義者とが英國民、正統英國民族として生存してゐる。

なぜ國家が現代に於て複數に存在するかといふ問ひを設けて見ると、答へは民族が複數に存在するからだといふところに落ち着く。それではいはゆる帝國及び或强大國はどう説明されるかと問ひ進められるかも知れん。それに對する答へは容易にできる。かれらは、おの〳〵、一とつの民族主義結社が、民族主義結社として成長した一形にほかならない。一民族が、一または多くの他民族を、民族的利己心にもとづいて、力まかせに生けどつたかたちが即ちかれらのおの〳〵だ。かれらのおの〳〵はそれ以外のものではない。

なぜ世界中の資本主義者と反資本主義者とは、それぞれに早く自分たち同志の結社を造らないか。同主義者が結社しないわけがないでないか。資本主義者は、すくなくとも手近かの國家を自分たちの結社同然のものにし終へたから、一と先づ小康を享樂してゐるのだといふならば、反資本主義者だけは、もつとかれら自身の世界結社を斷行して然るべきではないか。それをしないには、よく〳〵の事情があると見られる。

そのよく〳〵の事情は、民族別としてのみつひに確認される。

民族別とや。それは土地、慣俗、歴史、傳統、血緣、言語等に於ける多少の別を客觀的條件とする多少の主觀的心理にほかならないではないか。いかにもさうだ。しかし、それだけのものが、現代に於て、現に持つ通りの引力と威力を持つてゐることは、あらためていふまでもなく事實だ。

現代國家の政府は、また憲法は、概れ資本主義的だが、たまには反資本主義的だ。英にも、露にも、その例があつた。しかし、國家の成員は、國民は、相變らず同一民族だ。この事實は、現代國家の本質は民族主義であること、そしてそれの偶然質は資本主義であつたり、いな概ねそれであり、たまには反資本主義であることを證明する。

もしも現代國家の本質が、あるひは現代と限らず、國家そのものの本質が資本主義だとするならばなほさら、現代國家及び殊にも國家そのものの生滅々起は不思議な話となる。

現代は、まだ、實力に於て、民族主義時代か。想像は燕よりも飛ぶが、實力は庭鳥ほどにも翔はない。

十九　今世紀

今世紀も二十五年あまりを經過した。殘る七十五年足らずのあひだに、どんな運命が藏されてゐるだらうか。それはなに人にもわからない。九月一日午時の東京の大震を、誰れがその五分間前にさへ豫報したか。一九一四年六月二十八日の前日に、伯林街上を、その都外の、多くの人の目に、當時世界に威を張つたかの、張るかの概あつた一人の住むあたりを訪察した人のなかに、その翌日のセライェヴの出來事及びそれの發展を夢想だにしえたものがあつたか。一七八八年の佛京は、大變をまぢかに豫期したなんらの兆候をも示さなかつたといふ。人は將來に對してこんなに

資本主義者がゐる。もしも英といふ一つの現代國家が資本主義結社であるならば、なぜ多くの資本主義者が米にも、獨にも、その他の英以外の部分にもゐるか。英が唯一の資本主義結社ではなく、一とつの資本主義結社だからだといふならば、なぜ唯一の資本主義結社を、世界中のすべての資本主義者は、明白に有益だと見て構成しないか。それをしないには、よく〳〵の事情があると見られる。

英といふ一とつの現代國家は、澤山資本主義者と澤山の反資本主義者を成員即ち國民として持つてゐるが、民族的には比較的に單一だ。

印度を忘れたかといふかも知れんが、あの狹い英本國あるひは英本土だけのなかにさへ、澤山の資本主義者と澤山の反資本主義者とが英國民、正統英國民族として生存してゐる。

なぜ國家が現代に於て複數に存在するかといふ問ひを設けて見ると、答へは民族が複數に存在するからだといふところに落ち着く。それではいはゆる帝國及び或强大國はどう說明されるかと問ひ進められるかも知れん。それに對する答へは容易にできる。かれらは、おの〳〵、一とつの民族主義結社が、民族主義結社として成長した一形にほかならない。一民族が、一または多くの他民族を、民族的利己心にもとづいて、力まかせに生けどつたかたちが卽ちかれらのおの〳〵だ。かれらのおの〳〵はそれ以外のものではない。

なぜ世界中の資本主義者と反資本主義者とは、それぞれに早く自分たち同志の結社を造らないか。同主義者が結社しないわけがないでないか。資本主義者は、すくなくとも手近かの國家を自分たちの結社同然のものにし終へたから、一と先づ小康を享樂してゐるのだといふならば、反資本主義者だけは、もつとかれら自身の世界結社を斷行して然るべきではないか。それをしないには、よく〳〵の事情があると見られる。

そのよく〳〵の事情は、民族別としてのみつひに確認される。

民族別とや。それは土地、慣俗、歴史、傳統、血縁、言語等に於ける多少の別を客觀的條件とする多少の主觀的心理にほかならないではないか。いかにもさうだ。しかし、それだけのものが、現代に於て、現に持つ通りの引力と威力を持つてゐることは、あらためていふまでもなく事實だ。

現代國家の政府は、また憲法は、概ね資本主義的だが、たまには反資本主義的だ。英にも、露にも、その例があつた。しかし、國家の成員は、國民は、相變らず同一民族だ。この事實は、現代國家の本質は民族主義であること、そしてそれの偶然質は資本主義であつたり、いな概ねそれであり、たまには反資本主義であることを證明する。

もしも現代國家の本質が、あるひは現代と限らず、國家そのものの本質が資本主義だとするならばなほさら、現代國家及び殊にも國家そのものの生滅々起は不思議な話となる。

現代は、まだ、實力に於て、民族主義時代か。想像は燕よりも飛ぶが、實力は庭鳥ほどにも飛はない。

十九　今世紀

今世紀も二十五年あまりを經過した。殘る七十五年足らずのあひだに、どんな運命が藏されてゐるだらうか。

それはなに人にもわからない。九月一日午時の東京の大震を、誰れがその五分間前にさへ豫報したか。一九一四年六月二十八日の前日に、伯林街上を、その都外の、多くの人の目に、當時世界に威を張つたかの、張るかの概あつた一人の住むあたりを訪察した人のなかに、その翌日のセライェヴの出來事及びそれの發展を夢想だにしえたものがあつたか。一七八八年の佛京は、大變をまぢかに豫期したなんらの兆候をも示さなかつたといふ。人は將來に對してこんなに

資本主義者がゐる。もしも英といふ一つの現代國家が資本主義結社であるならば、なぜ多くの資本主義者が米にも、獨にも、その他の英以外の部分にもゐるか。英が唯一の資本主義結社ではなく、一とつの資本主義結社だからだといふならば、なぜ唯一の資本主義結社を、世界中のすべての資本主義者は、明白に有益だと見て構成しないか。それをしないには、よく／＼の事情があると見られる。

英といふ一とつの現代國家は、澤山資本主義者と澤山の反資本主義者を成員即ち國民として持つてゐるが、民族的には比較的に單一だ。

印度を忘れたかといふかも知れんが、あの狹い英本國あるひは英本土だけのなかにさへ、澤山の資本主義者と澤山の反資本主義者とが英國民、正統英國民族として生存してゐる。

なぜ國家が現代に於て複數に存在するかといふ問ひを設けて見ると、答へは民族が複數に存在するからだといふところに落ち着く。それではいはゆる帝國及び或强大國はどう説明されるかと問ひ進められるかも知れん。それに對する答へは容易にできる。かれらは、おの／＼、一とつの民族主義結社が、民族主義結社として成長した一形にほかならない。一民族が、一または多くの他民族を、民族的利己心にもとづいて、力まかせに生けどつたかたちが即ちかれらのおの／＼だ。かれらのおの／＼はそれ以外のものではない。

なぜ世界中の資本主義者と反資本主義者とは、それぞれに早く自分たち同志の結社を造らないか。同主義者が結社しないわけがないでないか。資本主義者は、すくなくとも手近かの國家を自分たちの結社同然のものにし終へたから、一と先づ小康を享樂してゐるのだといふならば、反資本主義者だけは、もつとかれら自身の世界結社を斷行して然るべきではないか。それをしないには、よく／＼の事情があると見られる。

そのよく〳〵の事情は、民族別としてのみつひに確認される。

民族別とや。それは土地、慣俗、歷史、傳統、血緣、言語等に於ける多少の別を客觀的條件とする多少の主觀的心理にほかならないではないか。いかにもさうだ。しかし、それだけのものが、現代に於て、現に持つ通りの引力と威力を持つてゐることは、あらためていふまでもなく事實だ。

現代國家の政府は、また憲法は、概ね資本主義的だが、たまには反資本主義的だ。英にも、露にも、その例があつた。しかし、國家の成員は、國民は、相變らず同一民族だ。この事實は、現代國家の本質は民族主義であること、そしてそれの偶然質は資本主義であつたり、いな概ねそれであり、たまには反資本主義であることを證明する。もしも現代國家の本質が、あるひは現代と限らず、國家そのものの本質が資本主義だとするならばなほさら、現代國家及び殊にも國家そのものの生滅々起は不思議な話となる。

現代は、まだ、實力に於て、民族主義時代か。想像は燕よりも飛ぶが、實力は庭鳥ほどにも舞はない。

十九　今世紀

今世紀も二十五年あまりを經過した。殘る七十五年足らずのあひだに、どんな運命が藏されてゐるだらうか。それはなに人にもわからない。九月一日午時の東京の大震を、誰れがその五分間前にさへ警報したか。一九一四年六月二十八日の前日に、伯林街上を、その都外の、多くの人の目に、當時世界に威を張つたかの、張るかの概あつた一人の住むあたりを訪察した人のなかに、その翌日のセライェヴの出來事及びそれの發展を夢想だにしえたものがあつたか。一七八八年の佛京は、大變をまぢかに豫期したなんらの兆候をも示さなかつたといふ。人は將來に對してこんなに

も無智、不知でありうる。

しかし、右の三件の場合にも、早くから大體の見當をつけたものは、具體的個人のかたちに於てさへあつた。勿論、うらない者でない人のなかにだ。

あてる、あてぬの話でなく、成れ、成るだらうの話として、現代人には、現代人相當に、近い將來に對しての豫測と構想が種々ありうる。

先づ考へられる一事は、多少いひ古るされた事だが、機械の奴隷化だ。

人は自由を欲する。その自由は是非とも人をして奴隷を持たしめる。

奴隷とは、必要な、しかしいやな仕事を、それを必要とする、しかしいやがる人のために、いやでもなんでもさせられるものをいふ。

その奴隷がまた人である場合がある。いくさでまけた人とか、かれの子孫として生まれ合はせた人が、例へば古代ギリシヤなどではそれとされた。

産業革命以來の社會に於ては、勞働者がそれだ。

しかし、奴隷が人である場合には、かれもまた自由を欲する。事情さへ許せば、實は、かれも、奴隷を持たずには自分がすまぬ性質の持ちぬしだ。

目的としての奴隷所有者では、現に奴隷である人でさへも、多少みづから氣づかないながら例外なしにある。

事情さへ許せばなに人も奴隷を持つとほか考へられないその事情とはなにか。それは力だ。知識も力、數も力、組織も力と見ての力だ。

人が人を奴隷として所有する、使用することは、右にいふた事情が許される程度に相當する不安定狀態だ。陰險な敵を持つ位置の、それは、或かたちだ。

それはまた、すこし大きな、氣の利いた立ち場からいへば、想ひやりがなすさぎて、苦痛に感ぜられるほかない位置または狀態でもある。

人としての奴隷を條件とする自由には不自由のかげがつきまとふ。それは生きた怨靈となつて早晩その自由を悶死させる。

奴隷なしでは自由は成り立たない。しかし、人を奴隷として成り立つ自由は、淺い、また束の間だけのものだ。深い、また永い自由を享樂する方法はないだらうか。

産業革命こそは、實はその方法そのものだ。

時計に一週間まきといふがある。

人の手を極度にはぶき、大體は自働する。しかも人の目的にむかつて忠實に、有効に自働することが、機械の天才だ。

眞夏の船底の火夫、社會はかれを必要とする。しかし、社會は、聰明な社會、良心ある社會は、いな、實に、人ごころある社會は、かれを無くすることを、そしていま以上の航行を享樂することを、それに超す必要とする。

制度を變へ、心置きなく機械を、機械の發明を、發明された機械の使用を萬人が萬人愛しうる、愛せずにはゐられない社會事情をさへ準備したなら、さうした必要は、すべての種類にわたつて滿足させられる見込がある。

炭坑夫の生活も、紡織工の生活も、意義に於て火夫の生活だ。

いまの制度では、人が機械と、機械に得意な、人には極めて不得意な仕事で競爭をもさせられる。兩者間に、眞の人道主義なら泣かずにゐられない、あさましい限りの嫉妬關係さへ發達しつつある。

百人前の仕事を樂になしうる機械は珍らしくあるまい。その機械を、一人が、かれの財力にまかせて買つてわがものとする。社會からは、百人の失業者が生ずる概略關係だ。その百人が、どうして機械を愛することができやう。

機械を造るにも、造られた機械を運轉するにも、人の手が多少は必要だ。しかし、現制下では、その手の働らきばえがしない。利益即ち生産は、生産結果は、ほとんど全然、割合に於てほとんど全然、その機械の所有者、單なる財力的所有者でさへもの、懷に落ちる運命を持つてゐるがゆゑにだ。

利益が自分の手に歸るとあれば、機械を愛する氣持ちにそれだけまたなれる。

機械を愛する、社會が社會としてさうすることができるためには、機械が社會のものとされることだけが必要だ。

機械がわがものとなれば、社會は機械を愛し足らないことはなくなる。愛されるものが、豊かに美しく成長しないことはありえない。

社會は、機械をわがものとさへすれば、いやな、しかし必要な勞働的作業をば、機械によつて、壯健に成長した、なほ壯健に成長してやまぬ機械によつて、全部熱請されてしまふ。機械にとつては、勞働が唯一の、無上の本能滿足的方法だからだ。

人は、機械がわがものとさへなれば、勞働を機械に取られてしまふことをすこしも嫉視せず、専ら歡迎する。勞働以上の作業、即ち創造的作業が、それとしての消費が、またそれが必要とする消費が、及び單なる消費が、人の本能を滿足させうる唯一方法だからだ。

機械が社會のものでなく、部分のものだから、その部分自身は、生産結果をも、自分が使ひきらない場合に於てさへ、使ひきれないほどそれが過多である場合に於てさへ、他に使はせない。他に使はせることが、勿體ないやうに、不正なやうに、自分のねうちをさげるやうに、その部分自身は自然思ふ。單なる外在價即ち物質財に對する吝、貪、誇、恥、榮、辱、妬といつたたぐひの百態心理がそこに發達する。始末に終へぬ社會關係がその心理に根を張つて繁茂する。

人の誇りは、それが不可避である場合を假定して、またそれが有意義である場合を假定して、かれに內在する特別價値のゆゑでありたい。例へばそれは學、藝、德といつた部類のものでありたい。

機械を社會のものとさへすれば、いまだけの發達でさへ、機械は社會をほとんど遊食させる資力を持つてゐることを示すだらう。いはんや、それの發達に對する制度的邪魔を除き去つた曉には、人は、すべて、富には極めて淡泊になるだらう。ちやうど、ラヂオが安價に普及して、人は名人の音樂にさへも、歌唄にさへも、あまりに飽いた、安心した、見くびつた、なれきつたかたちになつたやうにだ。かへつてそれを聽いた顏を隱すやうにさへなつたやうにだ。

機械が社會のものでないゆゑに、現代は富の所有と使用を珍らしがりすぎる。

人の最善啓發は、かれが富に飽足し、倦怠した瞬間から始まる。社會としての人の最善啓發はだ。即ち文化または文明の高級發達はだ。

社會が機械を完全奴隸化することが、身身を完全自由人化する唯一の方法だ。そしてここに、この可能に對する注意及び盡力の發達に、今世紀內の殘餘の一特徵は形成される理由が明視される。

革命された產業は、すべての點に於て大ほ仕掛だ。すべての企業は、それが酬いられるまでに、長い犧牲の旅を續け

いまの制度では、人が機械と、機械に得意な、人には極めて不得意な仕事で競爭をもさせられる。兩者間に、眞の人道主義なら泣かずにゐられない、あさましい限りの嫉妬關係さへ發達しつつある。

百人前の仕事を樂になしうる機械は珍らしくあるまい。その機械を、一人が、かれの財力にまかせて買つてわがものとする。社會からは、百人の失業者が生ずる概略關係だ。その百人が、どうして機械を愛することができやう。

機械を造るにも、造られた機械を運轉するにも、人の手が多少は必要だ。しかし、現制下では、その手の働らきばえがしない。利益即ち生産は、生産結果は、ほとんど全然、割合に於てほとんど全然、その機械の所有者、單なる財力的所有者でさへもの、懷に落ちる運命を持つてゐるがゆゑにだ。

利益が自分の手に歸るとあれば、機械を愛する氣持ちにそれだけまたなれる。

機械を愛する、社會が社會としてさうすることができるためには、機械が社會のものとされることだけが必要だ。

機械がわがものとなれば、社會は機械を愛し足らないことはなくなる。愛されるものが、豐かに美しく成長しないことはありえない。

社會は、機械をわがものとさへすれば、いやな、しかし必要な勞働的作業をば、機械によつて、壯健に成長した、なほ壯健に成長してやまぬ機械によつて、全部祭請されてしまふ。機械にとつては、勞働が唯一の、無上の本能滿足的方法だからだ。

人は、機械がわがものとさへなれば、勞働を機械に取られてしまふことをすこしも嫉視せず、專ら歡迎する。勞働以上の作業、即ち創造的作業が、それとしての消費が、またそれが必要とする消費が、及び單なる消費が、人の本能を滿足させうる唯一方法だからだ。

機械が社會のものでなく、部分のものだから、その部分自身は、生産結果をも、自分が使ひきらない場合に於てさへ、使ひきれないほどそれが過多である場合に於てさへ、他に使はせない。他に使はせることが、勿體ないやうに、不正なやうに、自分のねうちをさげるやうに、その部分自身は自然思ふ。單なる外在價即ち物質財に對する斉、貪、誇、恥、榮、辱、妬といつたたぐひの百態心理がそこに發達する。始末に終へぬ社會關係がその心理に根を張つて繁茂する。

人の誇りは、それが不可避である場合を假定して、またそれが有意義である場合を假定して、かれに内在する特別價値のゆゑでありたい。例へばそれは學、藝、德といつた部類のものでありたい。

機械を社會のものとさへすれば、いまだけの發達でさへ、機械は社會をほとんど遊食させる實力を持つてゐることを示すだらう。いはんや、それの發達に對する制度的邪魔を除き去つた曉には、人は、すべて、富には極めて淡泊になるだらう。ちやうど、ラヂオが安價に普及して、人は名人の音樂にさへも、歌唄にさへも、あまりに飽いた、安心した、見くびつた、なれきつたかたちになつたやうにだ。かへつてそれを聽いた顏を隱すやうにさへなつたやうにだ。

機械が社會のものでないゆゑに、現代は富の所有と使用を珍らしがりすぎる。

人の最善奮發は、かれが富に飽足し、倦怠した瞬間から始まる。社會としての人の最善奮發はだ。即ち文化または文明の高級發達はだ。

社會が機械を完全奴隷化することが、身身を完全自由人化する唯一の方法だ。そしてここに、この可能に對する注意及び盡力の發達に、今世紀内の殘餘の一特徴は形成される理由が明視される。

革命された產業は、すべての點に於て大ほ仕掛だ。すべての企業は、それが酬いられるまでに、長い犧牲の旅を續け

る。土木、鑛山、すべてこれを例證する。年内に種をおろして年内に、日の内に綸を垂れて日の内に、箸をつけるといふ寸法には概ね行かない。後世の史家から見たら、現代から見て堪へられない社會對機械の關係も、犠牲の旅にほかなるまい。

しかし、現代としては、飽くまでそれを堪へられないものとして意識し、行動することを結論的必要とする。

今世紀内の殘餘は、政治結社が、文字通りに社會統營のための結社、したがつて多少とも超民族的規模の大結社に進化することをそれの一特徴とする見込をも刺戟する。自然物、したがつて土地、したがつて原料等の位置が、またこれと關聯してそれの多少の變化を期待させる。そして、これらは、ことごとく、機械の奴隷化と切り離して考へることのできない性質の事柄でも勿論ある。

その他にも、今世紀の殘餘は、いはくなに、いはくなにと聯想され、また獨立に注意を呼ぶかたちに於て勿論限りもない。

二十　忠義

これを英語に、例へば英語に、翻譯させるならば、或意味のロイアルチともなるべき原語として、私はここにこの支那起原の一全的二字を問題とする。

封建時代に、すぐれた忠義の人があつた。どの社會の封建時代にもだ。

かれはその封建制に對して驚嘆すべく忠義であつた。かれの人格、品性はわれらをして畏、敬、崇、拜措く能はさらしめる。

かれは永くわれらの師だ。かれは、われらのほとんど神だ。

しかし、かれが、封建制そのものが、いかに人間の本性、社會の眞目的、文化または文明の根本必要に對して忠義であるか、ないかを、考へて見なかつた場合がある。われらから見て、いかにも考へて見足らなかつたと思はれる場合がある。

かかる場合に、忠義の不忠義がありうる。

われらは、道徳そのものに對して忠義であるべきだ。そして、眞の道徳は、人間性の本質的全體に對して忠義であるもののほかにない。

すべての制度に對して忠義である前に、その制度が眞の道徳、人間性的本質全そのものに對して忠義であることをたしかめることが、いつの時代のなに人にとつても必要な事だ。

現存の制度が眞實の道徳に不忠義であるならば、いかなる人も、それを眞實の道徳に忠義なものに作り變へる責任がある。眞の道徳に忠義である制度を作る責任をかれは持つ。

知識なき忠義は、最も悲しむべき一とつのものだ。

勞働爭議調停法解說

末弘嚴太郎

はしがき

一、第五十一回の帝國議會は政治的に言へば頗る平凡にして而かも極めて醜劣な議會であつた。專ら衆議院に於て行はれた醜い「泥試合」は職業政治家と政黨と衆議院との信用を失墜せしむるに充分であつた。如何に政治的に鈍感な一般民衆と雖も其所に何となくブルジョア議會政治の斷末魔が迫り來つたと言ふ感じを抱かざるを得ないであらう。又專ら貴族院に於て行はれた三百代言的法律論は如何に現在の議會政治が民衆一般の生活需要から遠ざかつて居るかを明か

に教へてくれた。眞に大日本帝國の將來を憂ふる人々は最早現在の議會に多くの望みをかけざるに至つた。議會を根本的に改革すべき機運を促進し得たるの點より言へば此醜い議會も亦或は大に功績ありたるものと言ふことが出來るのかも知れない。

しかし、我國の勞働運動乃至勞働法制發達の歷史にとつては、此醜い議會も亦永く記念に値すべき一の議會であつたと言ふことが出來る、蓋し、此議會は多年の懸案たりし治安警察法第十七條廢止の問題を解決した。そうして今や漸く勞働爭議を罪惡視する時代は過ぎ去つて、爭議の自由は原則として勞働者の爲めに保護確立せらるるに至つたからである。

二　元來、賃金其他の勞働條件が原則として契約の自由に放任せられ、何等國家的に規律されて居ない國に於ては、勞働諸條件はすべて勞資兩當事者の自由協定に任されて居るのを原則とする。其結果、勞働者に團結組織なき國々に於ては、自由協定の名の下に實は資本家命令して勞働者唯之に服從するに過ぎない關係が成り立つ。所が、勞働者が一度其勞働の獨占者たる地位に目醒めて團結を組織するとき　玆に初めて資本獨占者としての資本家と勞働獨占者としての勞働者集團との間に眞に平等な取引が行はれ眞に自由な協定が成り立ち得るのである。從つて、自由主義經濟組織の下に於ける勞資兩分子の結合協力は、勞働者の團結及び之による取引が行はるゝによつてのみ眞に自由主義の理想に合致した公正のものとなり得るものである。

然るに、從來の個人的自由主義は同時に個人の自由平等を假想して居る。萬人は自由平等ならざるべからずと言ふ彼等の理想は同時に萬人はすべて自由平等なりとの假説を意味して居る。其結果、事實不平等なる人々の間に自由の契約を許しても其所に當事者双方を滿足せしめ得べき公正な取引が成り立ち得るものと考へ、之に因つて事實上發生する强者命令し弱者服從する關係の不公正にすら氣付かないのが世上多數の例である。それが爲め、勞働者が團結の力によつ

て資本家に對立し之に事實的壓力を加へて右の不公正を是正し、之によつて眞に自由にして平等なる公正の取引を實現せしめむと努力するとき、個人的自由主義者たる彼等は團結による事實的壓力の中に一種の「惡」を感じ「不正」を見出し、之に向つて非難を加へやうとするのである。それは彼等の個人主義的根本思想よりすれば恐らく當然の結論に違ひないけれども、其同じ彼等が强者たる資本家と弱者たる――團結せざる――個々の勞働者との間に行はれる「自由協定が結局命令服從の關係に終ると言ふ現實に氣付かず、又假りに氣付いても其所に何等の「惡」をも感得しない點に、彼等思想の根本的矛盾が存在する。

三　我國現在の法制は一般勞働者の勞働條件について殆ど何等の國家的規律をも與へて居ない。最近施行せらるべき改正工場法及び鑛夫勞役扶助規則すら、其主として規定する所は幼年工女工等所謂「保護職工」の保護であつて、一般勞働者については扶助に關する規定を除く外殆ど何等の保護規定をも設けて居ない。賃銀額はもとより勞働時間の如き主要なる諸條件は何等の規律を受けずしてすべて自由の協定に放任されて居る。此故に、勞働者にして團結せざる限り、此等諸條件の決定は專ら資本家の一方的に決定する所となつて、勞働者は唯々諾々之を受け入るゝの外なき立場に置かるゝに至ること、蓋し當然なりと言はねばならない。從つて、勞働者が團結して勞働の獨占者たる威力を發揮し、之によつて資本家と平等の協定を行ひ、以て公正なる勞働條件を獲得せむと企てるのは極めて當然の態度であつて、勞働條件の決定を勞資の自由協定に放任して居る自由主義的國家としては、必然此種勞働者の態度を肯定して相當なる保護を與へて然るべきである。然るに、團結の事實的壓力に「不正」を感ずる人々は、或は公安維持の名目により、或は國家產業の保護を名とし、其他各種の方策を盡して勞働者の團結を妨げやうとする。而して從來屢々非難の標的になつた治安警察法第十七條は實にかくの如き國家的諸法策中其中心を成す所のものであつた。

然るに、今や此惡法は徹廢されて爭議上の戰術は一般刑法に觸れざる限りすべて當事者の自由たるを原則とするに至つた。從來とても治警第十七條を擁護する人々は、同法は決して爭議夫れ自身を違法視し又之を禁止せむとするものにあらずして、唯爭議上の戰術中特に不當なるものを禁止したに過ぎない。と主張した。しかしながら、「同盟罷業ヲ遂行スルガ爲」め單に「他人ヲ誘惑若ハ煽動スルコト」に對してすら「一月以上六月以下ノ重禁錮」を課した同法は、若し之を無遠慮に適用するならば、事實上同盟罷業そのものを禁止すると同一の結果を生じ得べきこと廣く識者の認むる所であつて、我國の法制上同盟罷業を不法視し犯罪視する思想の法律的基礎は實に玆に存したのである。

此故に、今日此法律の廢止されたことは實質上正に罷業を違法視する原則が撤廢されて、新に爭議自由の原則が確立されたことを意味するのであつて、我國勞働法の發達史上正に一新紀元を劃すべき重要事件なりと言はねばならない。即ち、一八七一年の英國勞働法 The Trade Union Act 1871 同じく一八七五年の謀議並財産保護法 Conspiracy anb Protection of Property Act, 1875 が勞働組合其他の勞働者團結の適法性と宣言し、又一八八四年のフランス職業組合法 Loi du 21 mars 1884 relative à la création des syndicats professionnels が勞働組合關係の諸刑罰法令を廢止する者を宣言したると同一の時代が我國にも現はれ來つたのであつて、勞資の問題は今や全く平等にして自由なる對立取引の關係となつたのである。

四　かくの如くにして、今や爭議の自由は勞資の双方にとつて原則として平等に保護せらるゝに至つた。今後は勞働者も亦刑罰法令の脅威を受けずして自由に勞働賣買の取引を行ふことが出來る。けれども、かくして爭議の自由を保障せられ互に對等の地位に立つて、自由に相爭ひ得るに至つた。當事者は動もすれば、此自由を利用して濫に無用の實力的爭鬪に陷る虞れがある。而してそれは一面當事者をして無用の損失を蒙らしめ不必要なる犧牲を拂はしむるに至る虞れ

あるのみならず、惹いては一般公衆に對して直接間接の損失を與へるものである。而かも、當事者双方の自發的努力に放任して置いても、到底自ら迅速に爭議を解決し得ない場合が甚だ多い。此故に、政府が一面治安警察法第十七條の撤廢斷行すると同時に、爭議調停の爲めにする國家的機關の樹立に努力したのは蓋し當然であつて、今議會が治安警察法第十七條を廢止すると同時に、「勞働爭議調停法」を制定したことは決して偶然の出來事ではない。

五　私は以下新に制定せられたる調停法の精神及び梗概を說明して、勞資の兩當事者が同法を利用するについての手引を作り示したいと思ふ。しかし、それにはどうしても先づ治警第十七條廢止の問題を考へる必要がある。此故に叙說は先づ此問題から出發して漸次調停法夫れ自身の內容に及ばねばならぬ。

第一　治安警察法第十七條の撤廢と罷業權の確認

一　勞働爭議調停の制度を理解せむとするものは必ず先づ其前提として同盟罷業權の問題を考へる必要がある。蓋し「調停制度は當事者双方の和解的精神乃至は利害打算の念慮に訴へて心から互讓妥協するの決意を促し、此によつて實力的鬪爭に因る無用の損失を抑止減少せしむることを目的とする制度だからである。從つて、制度上當事者双方に平等なる鬪爭手段を許すによつてのみ能く其目的を達し得る制度である。成程、當事者双方の事實力には自ら事實的差等の存すべきこと素より言ふを俟たない。而して事實的强者は調停交涉の上に於ても自ら優越的地位を占めて自己に有利な結果を導き出し得べきこと勿論である、けれども、若しも法律がかくの如き事實的差等の外更に法律的差等までをも設けて當事者相互間の不平等を增大せしめるならば、强者は飽くまでも力を恃んで弱者を壓迫すべく、其結果到底心から弱者を納得させるだけの調停條件が成り立ち得る筈がない。從つて、調停をして眞に其目的を達せしめむとする人々は、

同時に勞資双方の當事者に向つて極力法律的平等を保障すべく努力せねばならないのであつて、今回政府と議會とが勞働爭議調停法制定の前提として治安警察法第十七條を撤廢し、以て勞働者の爲めに爭議の自由を保障したことは實際上大に意義あるものと言はねばならない。

二　從來の治安警察法中には左の如き規定が存在した。

第十七條　左ノ各號ノ目的ヲ以テ他人ニ對シテ暴行、脅迫シ若ハ公然誹毀シ又ハ第二號ノ目的ヲ以テ他人ヲ誘惑若ハ煽動スルコトヲ得ズ

一　勞務ノ條件又ハ報酬ニ關シ協同ノ行動ヲ爲スベキ團結ニ加入セシメ又ハ其ノ加入ヲ妨グルコト

二　同盟解雇若ハ同盟罷業ヲ遂行スルガ爲使用者ヲシテ勞働者ヲ解雇セシメ若ハ勞務ニ從事スルノ申込ヲ拒絶セシメ又ハ勞務者ヲシテ勞務ヲ停廢セシメ若ハ勞務者ヲシテ雇傭スルノ申込ヲ拒絶セシムルコト

三　勞務ノ條件又ハ報酬ニ關シ相手方ノ承諾ヲ强ユルコト

耕作ノ目的ニ出ツル土地賃貸借ノ條件ニ關シ承諾ヲ强ユルガ爲相手方ニ對シ暴行、脅迫シ若ハ公然誹毀スルコトヲ得ズ

第三十條　第十七條ニ違背シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス、使用者ノ同盟解雇又ハ勞務者ノ同盟罷業ニ加盟セザル者ニ對シテ暴行、脅迫シ若ハ公然誹毀スル者亦同ジ

然るに、今回勞働爭議調停法制定の前提として、此等の規定は廢止されたのである。此等の規定は必ずしも直接同盟罷業を犯罪として處罰することを目的とするものではなかつた。けれども、單なる「誘惑煽動」すら犯罪として處罰を加へたるが故に、實質的には同盟罷業の成立及び活動を阻害し得べき偉大な力をもつて居たのである。勿論警察當局者は近年世上の非難漸く盛なるに鑑み、成すべき此等の規定の適用を愼んで居たやうに思はれる。けれども、此等の規定が嚴存して居る以上、其中に內在する――罷業を違法視する――精神は實質上警察司法の官憲を指導して罷業取締の行動をとらしむるに充分であつた。此故に、近年治警第十七條は實際上多く適用されないけれども、騷擾罪其他一般刑法の規定其他直接爭議の取締を目的とする警察命令等の適用によつて爭議團に不當の壓迫を加へた事例は枚擧に暇がないの

である。

從つて、今回治警第十七條が廢止されたことは、形式上必ずしも大なる意味をもたないやうに思はれるけれども、實質上精神的には頗る深い意味を有するものと言はねばならぬ。即ち、先づ第一に政府は治警第十七條と同樣乃至類似の主旨を有する諸府縣の警察命令はすべて之を廢止せねばならない。何故なられば、此等の諸規定を存置せしめることは治警第十七條廢止の精神と相容れないからである。傳ふる所によれば、此點は政府に於ても既に態度を決定して府縣命令の改廢を企てゝあると言ふことである。次に又、警察司法の官憲は今後一般刑法の適用を名として治警第十七條廢止の精神を沒却すべき行動を執つてはならない。何故なれば、治警第十七條廢止の重んずべきは其形式に存せずして實は其精神にある。之によつて罷業の自由を確認し罷業者に向つて不當の干渉を加へざらむとするもの即ち同規定廢止窮極の目的なるが故に若しも他の一般刑法適用の形を借りて罷業の目的を蹂躙するならば、同規定廢止の根本精神は全く無視せられたと言はねばならないからである。

三　治警第十七條の廢止は實にかくの如き實質的な意義を有するものである。此意味に於て私は、自由主義經濟組織の下に於て必然勞働者の爲めに認められねばならない「取引の自由」「罷業の自由」乃至は「罷業權」が、今や我國勞働者の爲めにも法律的に確認されたものと解したいのである。

「罷業の自由」が「權利」であるか否かは、從來學者間に議論の存する所であつて、殊にドイツの學者の好んで論議する問題である。現に、第五十一議會に於ても山口政二代議士は此點を質問して居る。而して若槻首相は之に答へて、勞働者が「同盟罷業ト云フ力ニ依テ其主張ヲ貫徹セントスルコトハ抑壓スベキ事柄デハナイ」、しかし今茲に治警第十七條を廢止したからと云ふて必ずしも罷業權を認めるのではない、唯今後罷業も亦一種の「放任行爲」として認めらるゝに

至るのである、と言ふて居る（衆議院速記錄第十四號三六五頁參照）。

しかし、此問題を決定する爲には、先づ論者の所謂「權利」とは何を意味するかを考へる必要があるのであつて、私は今茲に此問題に深入りをしたくない。成程、私法上の權利としての意味に於ては、罷業權即ち權利なりと解することは確に不當であらう。けれども、法律上確認せられて、警察司法の官憲亦濫に之を犯すべからざることが明かにされた以上、公法上乃至政治上の意味に於ては尚一種の權利なりと言ふことが出來るのであつて、私は以下此意義に於て「罷業權」の文字を借用したいと思ふ。

第二 罷業權の限界と公益企業

一 罷業權は契約自由の原則當然の隨伴物である。制度上勞資の關係が契約自由の原則に放任されて居る以上、勞資の双方は各其取引上最大の利益を自己の手中に收めんが爲に、あらゆる實力を利用して相戰ふに決つて居る。而して、同盟罷業は實に勞働者が其威力を發揮し得る最大の武器であるから、勞働者より此の武器を奪ひ又は此の武器の使用について甚しき制限を加へることは、畢竟彼等から契約の自由を奪ふものであつて、かくの如きは自由主義經濟組織を基礎とする現代我國の根本組織に背反するものと言はねばならない。

しかし、すべての權利に一定の限界あるが如く、罷業權にも亦一定の限界がなければならない。愈々法律を以て罷業を確認した以上、次いで充分の考究を要すべき問題は正に之れでなければならない。

即ち先づ第一に罷業權は罷業の目的如何に關係なくすべて平等に認めらるべきものであるか？又第二に、罷業權は法律上原則として保證されて居るとしても、之を行使する手段については尚何等かの制限が存在するのではないか？尚綜

に、罷業權は企業の種類如何によつても何等かの差等を付けらるゝものではあるまいか？此等はすべて今後の立法上乃至司法上大に考究を要すべき問題であつて、英國其他の國々に於て罷業權確認以來主として問題となつたのは實に此等の諸點である。

此等の諸問題中、今回の調停法が多少の解決を與へたものは、企業の種類による罷業權の限界であつて、後に述ぶるが如き所謂「公益企業」については一面强制調停の主義をとると同時に、調停手續の進行中は第十九條に違背して「誘惑煽動」を爲し得ざることとし、以て罷業權行使の方法を制限することゝしたのである。

公益企業の休止は直接一般民衆の日常生活を脅かすこと甚しきが故に、力めて此を防止せねばならないことは素より言ふを俟たない。從つて、法律が此等の企業に於ける罷業權の行使を制限して居ることには大に意義の認むべきものがある。乍併、公益企業の休止が如何に一般民衆の日常生活を脅かすとしても、此故を以て直に勞働者から取引の自由を奪はむとするが如きは甚しい謬りである。何故なれば、同盟罷業の責任は決して常に勞働者にのみ存するのではない、直接企業夫れ自身を休止せしめるものは勞働者であつても、事を玆に至らしめた責任は常に必ずしも勞働者にあるのではない、而して公益企業に於ける勞働條件の決定も原則としてすべて契約の自由に放任されて居る以上、公益企業の勞働者に向つても又充分に罷業權の保護を與へねばならないからである。此故に、世人若し公益企業に於ける勞働爭議を防止せむとするならば、平素より從業勞働者に向つて完全なる企業參加を許すか又は使用者勞働者及び一般需要者の三者を包含する委員會を設けて勞働賃金、料金率其他企業の根本問題を決定せしむるが如き制度を樹立することが必要であつて、此を與へずして漫に罷業權を制限せしむとするが如きは、勞働者中特に公益企業の從業員に向つてのみ不當の取扱を與へむとするものであつて、契約自由根本の精神に背馳するものと言はねばならない。從つて今後裁判所が第十九條を適

用するについても、常に此點を腦裡に置いて公益企業の從業員に對してのみ特に不當の取扱を與へざるやう注意せねばならない。

尚、此問題に關聯して考究を要すべきは官公吏の罷業權である。若槻首相は官吏服務規律の適用を受ける者は同盟罷業を爲し得ざる旨を言明して居るけれども（衆議院速記錄第十四號二七一頁）、私は下級官吏の如き經濟上殆ど雇員其他勞働者と區別なき者に向つて特にかくの如き制限を附する根據を疑ふのである。成程現行の官吏服務規律によれば罷業に參加した官吏の如きはすべて服務規律上の制裁を受けねばならないであらう。けれども、立法論としては之に向つても亦根本的改正を加へる必要があると思ふ。又現行法のまゝでも、例へば官營鐵道に同盟罷業の起つた場合に官吏の資格を有する一從業員が第十九條に所謂「誘惑煽動」を試みたとしても、其結果服務規律上の制裁を受くることとあるは格別、第二十二條によつて處罰を受くることは絕對にあり得ないものと解せねばならない。

二　調停法が公益企業と認めてゐる企業は左の通りである。

一　蒸氣、電氣其ノ他ノ動力ヲ使用スル鐵道、軌道又ハ船舶ニ依リ公衆ノ需要ニ應ズル運輸事業
二　公衆ノ用ニ供スル郵便電信又ハ電話ノ事業
三　公衆ノ需要ニ應ズル水道電氣又ハ瓦斯供給ノ事業
四　第一號乃至第三號ノ事業ニ電氣ヲ供給スル事業ニシテ其ノ休止ガ第一號乃至第三號ノ事業ノ進行ヲ著シク阻害スルモノ
五　其ノ他公衆ノ日常生活ニ直接關係アル事業ニシテ勅令ヲ以テ定ムルモノ
六　陸軍又ハ海軍ノ直營ニ係ル兵器艦船ノ製造修理ノ事業ニシテ勅令ヲ以テ定ムルモノ

即ち、大體に於て交通機關其他「公衆ノ日常生活ニ直接關係アル事業」及び軍事工場を公益企業とする趣旨である。此中第五號は行政當局者の解釋如何によつては公益企業の範圍を不當に擴大せしむるの因を爲す規定であるけれども、現に若槻首相が衆議院に於て答辯して居る通り、同號の適用を受ける企業は單に「吾々國民ノ日常ノ生活ニ直接ニ關係

アルモノ、即チ瓦斯ヲ止メレバ現ニ此毎日ノ食事ノ用意モ出來ヌト云フコトニナル、電氣ガ止マツタトスルト直ニ電車ハ動カナクナルト云フヤウナノト似寄ツタ、所謂獨占的ノヤウナ性質ヲ持ツタモノデ、國民ノ日常生活ニ關係アルモノ」のみを言ふのであつて、「總テノ工業品製造シタルモノガ吾々日常用ヒル物デアルナラバ、ソレヲ製造スルモノハ日常生活ニ關係アル、左樣ナ意味ハ全然持タナイ」ものと解せねばなるまい。（衆議院速記錄第十四號三六三頁參照）即ち、企業の休止が直接我々の日常生活に向つて著しい障害を與へるもののみを意味するのであるから、當局者勅令を以て其範圍を定むるについては充分愼重の態度をとることが必要である。

尙、軍事工場を除くの外、縱令官公營の事業と雖も上記列擧の一に該當せざるものは公益企業ではない。即ち、專賣局の煙草工場、印刷局の諸工場の如きすべて公益企業ではないのである。

三　以上の公益企業に於ける勞働爭議については、一方後に述ぶるが如く强制調停の主義が採用されて居るの外、調停手續の進行中は成るべく爭議の進行擴大を助長すべき行爲を禁止する方針がとられて居る。即ち、

第十九條　第一條第一項ニ掲グル事業ニ於ケル勞働爭議ニ關シ第二條ノ規定ニ依ル――調停委員會開設ノ――通知アリタルトキハ、現ニ其ノ爭議ニ關係アル使用者及勞働者並其ノ屬スル使用者團體及勞働者團體ノ役員及事務員以外ノ者ハ第九條ニ規定スル調停手續ノ結了ニ至ル迄左ニ掲グル目的ヲ以テ其ノ爭議ニ關係アル使用者又ハ勞働者ヲ誘惑若ハ煽動スルコトヲ得ズ

一　使用者ヲシテ勞働爭議ニ關シ作業所ヲ閉鎖シ、作業ヲ中止シ、雇傭關係ヲ破毀シ又ハ勞務繼續ノ申込ヲ拒絶セシムルコト

二　勞働者ノ集團ヲシテ勞働爭議ニ關シ勞務ヲ中止シ、作業ノ進行ヲ阻害シ、雇傭關係ヲ破毀シ又ハ雇傭繼續ノ申込ヲ拒絶セシムルコト

第二十二條　第十九條ノ規定ニ違反シタル者ハ三月以下ノ禁錮又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

此等の規定大體の趣旨は爭議の直接關係者ならざる第三者が爭議を助長すべき行動を爲すことを禁止せむとするにある。而して規定の外形より言へば勞資兩當事者共平等に其制限を受けるのであるが、實際上主として其適用を受けるも

のが勞働者であること素より言ふを俟たない。又同じく此等の規定の適用を受けるとしても、罰金刑の如き主として之によつて苦しめられるものは勞働者であつて、使用者側にとつては「二百圓以下ノ罰金」の如き殆んど何等の苦痛を與へるものでないから、裁判所此等の規定を活用するについては充分此點に留意することが必要である。

尙、第十九條中「現ニ其ノ爭議ニ關係アル使用者及勞働者」の意義如何については大に疑ひがある。即ち、例へば東京市の電氣事業中電車從業員のみが爭議に參加し、其同一事業の修理工場職工、電力發生所の職工等が參加しない場合に法律に所謂「現ニ其ノ爭議ニ關係アル勞働者」とは獨り電車從業員のみを意味するのであるか又は修理工場職工等をも包含する意味であるか、解釋上大に疑はしいのである。若し前者なりとすれば修理工場職工等は自ら爭議の戰士となつて「誘惑煽動」することは出來ないけれども、其代はり此等のものに向つて「誘惑煽動」を爲しても法律に所謂「爭議ニ關係アル勞働者ヲ誘惑又ハ煽動」したことに當らないから、第二十二條の處罰を免れ得ることになる。之に反して若し後者の意義であるとすれば、適法に「誘惑煽動」を爲し得るものゝ範圍は擴まる代はり「誘惑煽動」を禁ぜられた相手方の範圍も亦擴まるが故に、爭議を修理工場其他にまで擴大することを防止する効能があるに違ひない。傳ふる所によると、社會局に於ても此點については確定的の解釋意見がないとのことであるが、本條に所謂「現ニ其ノ爭議ニ關係アル使用者及勞働者」云々の文句は、本來單に「第三者」なる文字によつて言ひ現されて居たものであり、而して衆議院に提出された確定案に於ては「其ノ爭議ニ關係ナキ者」なる文字を以て言ひ現はされて居たのである。此故に苟も同一企業に從事し從つて爭議についても經濟上直接的關係を有する勞働者である以上、現に爭議の起つて居る企業部分の勞働者に非らずと雖もすべて法律に所謂「現ニ其ノ爭議ニ關係アル勞働者」であると解するのが至當の解釋であると考へる。

アルモノ、即チ瓦斯ヲ止メレバ現ニ此毎日ノ食事ノ用意モ出來ヌト云フコトニナル、電氣ガ止マツタトスルト直ニ電車ハ動カナクナルト云フヤウナノト似寄ツタ、所謂獨占的ノヤウナ性質ヲ持ツタモノデ、國民ノ日常生活ニ關係アルモノ」のみを言ふのであつて、「總テノ工業品製造シタルモノガ吾々日常用ヒル物デアルナラバ、ソレヲ製造スルモノハ日常生活ニ關係アル、左樣ナ意味ハ全然持タナイ」ものと解せねばなるまい。(衆議院速記錄第十四號三六三頁參照) 即ち、企業の休止が直接我々の日常生活に向つて著しい障害を與へるもののみを意味するのであるから、當局者勅令を以て其範圍を定むるについては充分愼重の態度をとることが必要である。

尙、軍事工場を除くの外、縱令官公營の事業と雖も上記列擧の一に該當せざるものは公益企業ではない。即ち、專賣局の煙草工場、印刷局の諸工場の如きすべて公益企業ではないのである。

三　以上の公益企業に於ける勞働爭議については、一方後に述ぶるが如く強制調停の主義が採用されて居るの外、調停手續の進行中は成るべく爭議の進行擴大を助長すべき行爲を禁止する方針がとられて居る。即ち、

第十九條　第一條第一項ニ揭グル事業ニ於ケル勞働爭議ニ關シ第二條ノ規定ニ依ル――調停委員會開設ノ――通知アリタルトキハ、現ニ其ノ爭議ニ關係アル使用者及勞働者並其ノ屬スル使用者團體及勞働者團體ノ役員及事務員以外ノ者ハ第九條ニ規定スル調停手續ノ結了ニ至ル迄左ニ揭グル目的ヲ以テ其ノ爭議ニ關係アル使用者又ハ勞働者ヲ誘惑若ハ煽動スルコトヲ得ズ

一　使用者ヲシテ勞働爭議ニ關シ作業所ヲ閉鎖シ、作業ヲ中止シ、雇傭關係ヲ破毀シ又ハ勞務繼續ノ申込ヲ拒絕セシムルコト

二　勞働者ノ集團ヲシテ勞働爭議ニ關シ勞務ヲ中止シ、作業ノ進行ヲ阻害シ、雇傭關係ヲ破毀シ又ハ雇傭繼續ノ申込ヲ拒絕セシムルコト

第二十二條　第十九條ノ規定ニ違反シタル者ハ三月以下ノ禁錮又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

此等の規定大體の趣旨は爭議の直接關係者ならざる第三者が爭議を助長すべき行動を爲すことを禁止せむとするにある。而して規定の外形より言へば勞資兩當事者共平等に其制限を受けるのであるが、實際上主として其適用を受けるも

のが勞働者であること素より言ふを俟たない。又同じく此等の規定の適用を受けるとしても、罰金刑の如き主として之によつて苦しめられるものは勞働者であつて、使用者側にとつては「二百圓以下ノ罰金」の如き殆んど何等の苦痛を與へるものでないから、裁判所此等の規定を活用するについては充分此點に留意することが必要である。

尙、第十九條中「現ニ其ノ爭議ニ關係アル使用者及勞働者」の意義如何については大に疑ひがある。即ち、例へば東京市の電氣事業中電車從業員のみが爭議に參加し、其同一事業の修理工場職工、電力發生所の職工等が參加しない場合に法律に所謂「現ニ其ノ爭議ニ關係アル勞働者」とは獨り電車從業員のみを意味するのであるか又は修理工場職工等をも包含する意味であるか、解釋上大に疑はしいのである。若し前者なりとすれば修理工場職工等は自ら爭議の戰士となつて「誘惑煽動」することは出來ないけれども、其代はり此等のものに向つて「誘惑煽動」を爲しても法律に所謂「爭議ニ關係アル勞働者ヲ誘惑又ハ煽動」したことに當らないから、第二十二條の處罰を免れ得ることになる。之に反して若しも後者の意義であるとすれば、適法に「誘惑煽動」を爲し得るもの丶範圍は擴まる代はり「誘惑煽動」を禁ぜられた相手方の範圍も亦擴まるが故に、爭議を修理工場其他にまで擴大することを防止する効能があるに違ひない。傳ふる所によると、社會局に於ても此點については確定的の解釋意見がないとのことであるが、本條に所謂「現ニ其ノ爭議ニ關係アル使用者及勞働者」云々の文句は、本來單に「第三者」なる文字によつて言ひ現されて居たものであり、而して衆議院に提出された確定案に於ては「其ノ爭議ニ關係ナキ者」なる文字を以て言ひ現はされて居たのである。此故に苟も同一企業に從事し從つて爭議についても經濟上直接的關係を有する勞働者である以上、現に爭議の起つて居る企業部分の勞働者に非らずと雖もすべて法律に所謂「現ニ其ノ爭議ニ關係アル勞働者」であると解するのが至當の解釋であると考へる。

尙、第十九條に所謂「誘惑煽動」の文字は、原案に「勸誘」とあつたものを政友本黨側の發議によつて改めたものである。而して其の改正の主旨は藏園三四郞代議士の說明して居る通り「犯罪率ヲ減少セシメン爲ノ老婆深切ニ基クモノデ」あるから、「誘惑煽動」は「勸誘」に比すれば一層狹い概念であつて、特に何等か違法視すべき「勸誘」に限つて「誘惑煽動」になるものと解せねばならない（衆議院速記錄第十四號九二三頁參照）從來大審院は治警第十七條の適用上「誘惑煽動」を以て單なる「勸誘」と同一義に解して居るけれども、今後第十九條の適用については裁判所も亦以上改正の趣旨に鑑みて廣義の解釋を愼まねばならないのである。

第三　調停の目的たる勞働爭議と調停の開始

一　勞働爭議調停法は公益企業と其他の企業とを區別し、後者については罷業權の行使に對しても極めて寬大な態度を示して居るに反し、前者については尙相當嚴重な制限を設けて居ること上述の通りである。而して此區別は國家が爭議の調停上如何なる態度を取るべきかについても亦、極めて重要な影響を與へて居る。

即ち、私益企業に於ける勞働爭議は主として使用者勞働者間の私事であつて、直接一般公衆の日常生活に關係する所がない。從つて、爭議の解決も亦專ら之を當事者相互間の私事として其任意決定に放任して置くことが出來る。之に反して、公益企業に於ける爭議は直に一般公衆の日常生活に影響を與へる。從つて一般公衆が一日も速に之を解決落着せしめやうと希望するのは當然であつて、國家も亦私益企業の場合の如く純粹に中立的な放任的な態度をとつて居ることが出來ない。是れ調停法に於ても、私益企業については所謂「任意調停」の主義を採用して、「當事者雙方ノ請求」ある場合にのみ調停手續を開始することゝなせるに反し、公益企業については「强制調停」主義を採用して、「當事者雙方ノ

請求」なしと雖も、其中何れか一方の請求あらば即ち調停手續を開始し得るものとし、更に進みては「當事者ノ請求ナキ場合ト雖行政官廳ニ於テ必要アリト認メタルトキ」は調停手續を開始し得るものとして居る所以である（第一條）

二　かくの如く當事者雙方又は其一方の請求があると、行政官廳は調停手續を開始するのである。適法の請求があれば行政官廳は必ず之を開始せねばならないけれども、それについては特に次の諸點に注意する必要がある。

第一に、請求は適法のものでなければならぬ。即ち、私益企業にあつては爭議當事者の双方から爲されたことを必要とし、公益企業にあつては其一方から爲されたことを必要とする。而して請求を爲し得るものは「當事者」であるから、例へば勞働者側にあつては當該爭議團の事實的代表者のみが請求を爲し得るのであつて、其以外の者の請求は之を受理する必要がない。

第二に、當事者が請求を爲し得るのは「勞働爭議發生シタルトキ」でなければならぬ。何が「勞働爭議」であるかに付いては法律に於ても何等之を明かにして居ない。しかし、個々の勞働契約の解釋履行に關して起る個人的爭議の如きは素より之を含まないものと解すべきであらう。又當事者相互間に近代的意義に於ける使用者勞働者の關係が存在する以上、其企業の商工業なると漁業なると又農業なるとを區別しない。しかし、小作人地主の間には、廣義に於ける勞資の關係は存在するけれども、使用者勞働者の關係は存在しないから、小作爭議は茲に所謂「勞働爭議」の中に含まないと解すべきであらう（衆議院速記錄第十四號三七四頁所載若槻首相の答辯參照）。

尚、法律は廣く「勞働爭議」と言ふて居るけれども、性質上本來調停に適せざるものは素より之を含まないものと解するの外ない。何故なれば、元來調停法は調停を目的とするものであるから、當事者双方を互讓せしめ和解せしむるによつて解決し得べき爭議は其適用を受け得るけれども、例へば同情罷業、政治罷業等の如く何等使用者に向つて具體的

に要求する所なく、從つて使用者の讓歩によつて爭議を終熄させる見込のない場合には、縱令當事者の請求ありと雖も調停手續を開始すべきではない。上述の如く、公益企業については調停手續の開始と同時に第十九條の適用が始まるから、使用者側は單に此利益を得るだけの目的から、本來調停に適せざる爭議についてまで調停の請求を爲すことがあり得るであらう。けれどもかくの如き場合には行政官廳は決して之を受理すべきではない。

次に又、何時を以て「勞働爭議發生シタルトキ」と見るべきかについても相當疑問を容れる餘地がある。必ずしも同盟罷業、怠業の如き戰鬪手段の開始されたことを必要としないけれども、同時に又單に爭議の發生する虞れがあるのみでは足りない。結局は勞働條件其他に關して當事者相互の間に意見の一致を見ること能はず、實力的手段に訴へて爭議を解決するの外なき事態に立ち至つた場合に於て、「爭議發生シタル」ものと見るの外ないであらう。從つて行政官廳が當事者の請求を受理して調停手段を開始するについては、事態がかくの如き狀況に立ち至つて居るや否やを愼重に判斷することが必要である。無論其以前と雖も、調停官其他の手を通して調停法外の調停を行ふことは素より差支ないけれども、調停法上の調停は「爭議發生シタルトキ」にのみ之を開始し得るのである。

三　公益企業に於て勞働爭議發生したるときは、「當事者ノ請求ナキ場合ト雖行政官廳ニ於テ必要アリト認メタルトキ」は、何時にても自由に調停手段を開始し得る。勿論此場合にも、上述の意義に於て「爭議發生シタル」こと、爭議が性質上調停に適するものなること等を要するは當然であつて、官廳が單に爭議團を抑壓する爲め第十九條を適用するのみの目的を以て調停手續を開始することは素より之を許し難い。從つて「行政官廳ニ於テ必要アリト認メタルトキ」と言ふのも、調停の必要ありとの意味であつて、單に第十九條を適用するの必要ありと認めたことを意味するのではない。

四　然らば、官廳が違法に調停手續を開始すべき要件備はらざるに拘らず、當に之を開始したる場合に於ても、尚ほ第十九條の規定は其適用を開始するものであらうか？　此點については、兎も角調停手續が開始されて「第二條ノ規定ニ依ル——調停委員會開設の——通知アリタル」以上、其通知を發すに至つた官廳の處置判斷に如何なる缺點があらうとも、形式上第十九條の適用は開始せねばならぬとする說、及び、調停手續開始の要件欠缺せるに拘らず開始した手續は違法であるから第十九條の規定も亦其適用を見るべきではないとする說の二說を想像し得る。調停手續を開始するや否やを決するについて官廳は素より相當の自由裁量を許されねばならない。從つて、官廳の決定が單に不穩當なりとの理由を以て其責任を問ふことは素より出來ないけれども、調停開始の要件が全く缺けて居るにも拘らず、苟も官廳が調停手續を開始しさへすれば、すべて當然に第十九條の適用が始まるものだとすれば、當事者の之によつて受ける損失は到底之を看過することが出來ない。此故に私は、かくの如き場合第十九條違犯の故を以て起訴された人々は、調停開始の違法を理由として其の無罪を主張し得るものと解したいのである。

第四　調停機關

一　勞働爭議調停法の規定する調停機關は調停委員會である。政府は此外本法運用の必要上調停官の制度を新設するに至つたけれども、調停官は制度上直接調停法上の調停を行ふものではない。無論、調停官が調停法外の調停を行ふ例は少なくないであらう。又調停の準備其他調停法運用上の實務をとつたり、第十二條第二項によつて「會議ニ臨席」する「當該官吏」となるものは主として調停官であらう。けれども、其地位は借地借家調停法に於ける調停主任のそれとは全く異なつて、自ら直接調停法上の調停を行ふものではない。制度上は殆ど小作官と同様の働きを爲すものと解

すべきであらう。

尚、調停法によると、調停委員會開設の決定を爲し、其通知を爲し、又其招集開會を爲すが如き職務はすべて「行政官廳」の爲す所である。借地借家及び小作の調停に於けるが如く裁判所を以て主任官廳となさざりし所以のものは、勞働爭議に於て爭はるゝものは主として法律的解決に適せざるの事項であつて、寧ろ爭議の實情に鑑み具體的情勢に應じて適宜に之を解決するの外ないからである。尚後に述ぶるが如く、勞働爭議の調停にあつては毫も之によつて民法上乃至訴訟上の意義に於ける法律的「和解」を成立せしめることを目的としないことも、主任官廳を裁判所たらしむるの必要なき他の一理由と考へることが出來やう。而してこれは從來各國に於ける勞働爭議調停の實績に鑑みても亦適當の處置であると言ふことが出來る。

尚、「行政官廳」の何たるかは頓て施行令を以て決らるゝに違ひなひけれども、新聞紙によると「一般勞働にありては地方長官たること、海員勞働にありては遞信省遞信局長たること、勞働爭議が二府縣以上に亙る場合の行政官廳は其發生地の行政官廳たること」に內定されたと傳られて居る。

二　勞働爭議調停法による調停委員會は、從來行はれた借地借家乃至小作の調停委員會と異なつて、次の如き三の特色をもつて居る。

第一に、借地借家等の調停委員會は常設的委員會であつて、委員の顏觸れも「毎年豫メ地方裁判所長」之を選任し置くを原則とする。之に反し、勞働爭議調停委員會の組織は各爭議の發生した場合其都度新に定められるのであつて、全く常設的性質をもつて居ない。

第二に、借地借家等の調停委員會には「判事ノ中ヨリ毎年豫メ地方裁判所長」の「指定」する「調停主任」があつて

調停事務の指揮を行ふに反し、爭議調停委員會には全くかくの如き主任者がない。委員會の開設招集其他の事務は行政官廳に於て之を司るけれども、調停官其他の官吏が委員會の主任者其他その構成員となることは絕對にない。

第三に、借地借家等の調停法によると、調停委員は「特別ノ知識經驗アル者」又は「調停ニ適當ナル者」の中から地方裁判所長任意に之を選任したるに反し、勞働爭議の調停委員會には必ず勞資双方の代表者各同數を加へねばならぬことになつて居る。

而して、此等三個の特色は主として勞働爭議が其本質上借地借家に關する爭議等と異なつて法律的爭議たるよりは寧ろ實力的爭議たる性質をもつて居ることゝ密接の關係を有するのであつて、現に相爭つて居る當事者に向つて相當の勢力を有するか又は相當の信用を受けうべき者をして委員會を構成せしむるにあらざれば、到底當事者双方を納得和解せしめて調停の目的を達することが出來ないと言ふ考に主たる根據を有するのである。若しも將來我國に於ける勞働組合の組織が充分に發達して豫め組合幹部の中有力者をして調停委員たらしめて置けば、大體すべての爭議について調停をさせることが出來るやうになれば格別、さもない限り一々個々の爭議について調停の適任者を選ぶの外ない。又借地借家の爭議は爭議それ自身が法律的且個人的であり從つて法律的手段を以て之を解決し得るに反し、勞働爭議は本質上實力的且集團的爭議であるから、之を法律的に解決することも出來ず又解決の結果を强行する爲め强制執行其他法律的手段を用ゐることも出來ない。此故に裁判官を主任者とする常設的委員會をして調停の任に當らしめるよりは、個々の爭議について直接具體的の利害關係を有する人々して調停の衝に當らしめる方が適當であつて、爭議調停法が委員會に向つて如上三個の特色を與へたことは大體之を妥當視することが出來る。

唯此點より言へば、現行の小作調停法が大體借地借家調停法の例に倣つて、略同樣の組織性質を有する委員會を作つ

て居ることは、相當批評に値すべき事柄であつた。現在の如く小作爭議が殆どすべて團體的であり且つ實力的爭議性質を顯著にして來た以上、寧ろ地主小作人双方の代表者を同數で加へた委員會をして調停の任に當らせる方が能く當事者双方を納得させて速に平和的解決に到達し得るやうに思はれる。此の意味に於て現行小作調停法には大に改正を加へる必要があるやうに思はれる

三　先づ第一に調停委員會は常設的委員會ではない。個々の具體的爭議について一々組織される特別の委員會であつて、當該爭議の調停手續を結了すれば又當然に消滅するものである。

委員會組織の段取は左の通りである。

第一　委員會開設の通知　委員會開設の要件は常設事業の公益企業なると否とによつて同一ならざること既に之を述べた。しかし兎も角其要件が備つて、行政官廳「調停委員會ヲ開設セムトスルトキ（中略）當事者雙方ニ之ヲ通知」せねばならぬ（第二條）而して其通知は同時に以下に述ぶるが如き委員の選定を促す趣旨を含まねばならぬこと素より言ふを俟たない。

而して通知は各爭議當事者の事務所に向つて之を爲すべきであるから、勞働者に對しては當該勞働組合の事務所其他爭議本部に向つて之を爲すべく、資本家に對しては直接當該爭議に關係ある事業場の事務所に向つて之を爲さねばならぬ。從つて、例へば東京市に本店を有し各地方に多數の工場を有する會社にあつては、其工場は神奈川縣下の一工場に爭議が起つた場合、右の通知を爲すべき場所は右神奈川縣下の工場の事務所であつて、態々東京の本店に通知する必要なきものと解すべきであらう。

第二　各當事者の委員選定　勞資双方の當事者が上記「第二條ノ規定ニ依ル通知ヲ受ケタルトキハ三日内ニ」各三名

宛の委員を選定して之を「行政官廳ニ屆出ヅルコトヲ要ス」る（第四條第一項）。而して右三日の期間は通知が各當事者に到達した翌日から各別に之を起算するのである。

各當事者が右三日の期間內に委員の選定を爲し且其「屆出ヲ爲サザルトキハ行政官廳ハ當事者ニ代リ委員ヲ選定ス」る。而して「此ノ委員ハ當事者ノ選定シタルモノト看做」されるのである（第四條第二項）。かくの如く法律が三日の期間を限つて屆出を要求する理由は、當事者の懈怠によつて委員會の成立を遲延せざらしめむとするにある。從つて、期間內に屆出がなければ、官廳は直に代理委員を選定して規定の通り委員會の構成を急ぐべきであつて、當事者何れかの要求によつて期間の猶豫を與へることは出來ない。しかし、調査委員は成るべく當事者の意志に適つたものをして之に當らしめる方がよいから、例へば官廳が代理委員を選定した後でも、當事者自ら委員を選定して其交替を乞ふならば、官廳は勿論之を許して然るべきである。唯それが爲め委員會の期間其他には何等の變更を生ぜざるべきこと勿論である。

第三　中立委員の選定　各當事者の委員——又は官廳の選定による委員——三名宛が選定されたならば、彼等の合議によつて四日內に「爭議ニ直接利害關係ヲ有セザル者」の中から三名の中立委員を選定して之を行政官廳に屆出でねばならない。（第三條、第四條第三項）而して合議の不成功其他の理由によつて期間內に委員の選定屆出がなければ、「行政官廳ハ——直ニ——當事者ノ選定シタル委員ニ代」つて右中立「委員ヲ選定ス」る。而して「此ノ委員ハ當事者ノ選定シタル委員ニ於テ選定シタルモノト看做」されるのである（第四條第四項）。

此故に、委員會が完全に成立するまでには如何に長くとも一週間以上の時日を要することはないのであつて、實際上より言へば一週間既に長きに失するのであるが、現在の如く勞働組合の組織未だ完全ならず各當事者とも調停に慣れて

居ない事情の下に於ては今の所先づ此位は已むを得ないのであらう。

尙かくして選定された中立委員が正式に調停委員となるには　行政官廳が其届出を受けたると更に「囑託」の手續をとることが必要であつて、かくして「囑託セラレタル委員ハ正當ノ理由ナクシテ之ヲ辭スルコトヲ得」ないのである（第三條第二項）。

第四　委員の補充　一旦委員が選定された後に於て、辭任其他の理由によつて「委員中ニ缺員ヲ生ジタルトキ」は、以上に說明した第三條及び第四條の「手續ニ準ジ之ヲ補充ス」る手續をとらねばならない（第五條）。從つて　補充が終るまでには再び相當の期日を要することがあり得る。けれども、後に述ぶるが如く「調停委員會ハ開會ノ日ヨリ十五日内ニ調停手續ヲ結了スルコトヲ要ス」る（第九條第一項）。而して此期間は後に說明する第十九條との關係上極めて重要であるから　一旦委員の選定を終り且委員會の招集開會ありたる以後に於て、缺員を生ずるやうなことがあつても之が補充手續を行ふ爲め右十五日の期間を延長するが如きことは絕對にあり得ないものと解せねばならない。然らざる限り、調停期間の延長を希望し之によつて相手方に第十九條所定の制限を加へやうと希望する當事者は、委員會の中途濫に代表委員をして辭任せしめ、補充手續に名をかりて無限に調停期間を延長せしむるが如き不都合を生じ得るからである。

四　尙、勞働爭議調停委員會は混合委員會たる性質をもつて居る。「調停委員會ハ九人ノ委員ヲ以テ之ヲ組織ス」る。而して先に說明したるが如く「委員ノ中六人ハ勞働爭議ノ當時者ヲシテ各同數ヲ選定セシメ、他ノ三人ハ當時者ノ選定シタル委員ヲシテ爭議ニ直接利害關係ヲ有セサル者ニ就キ選定セシメ行政官廳之ヲ囑託ス」るのである（第三條第一項）

而して各當事者の選定する委員は當事者各其希望する任意の人々の中より之を選定せしむるのであつて、必ずしも彼等と直接利害關係を同じうするもの丶中から之を選定する必要はないけれども、實際上例へば勞働者側に於ては爭議團中の何人かを代表者として委員に選び、又は彼等の屬する組合の幹部を選んで委員たらしめるのが通常の例であらう。又資本家側に於ては當該會社の重役乃至社員中より之を選び又は同業者其他一般資本家中より之を選ぶのが普通の例であらう。其結果「當事者ノ選定シタル委員」は爭議當事者双方の中間に立つて純粹なる調停者の役目をつとめるよりは、寧ろ各々當事者双方の利益を代表して折衝妥協の役をつとめ、而して「爭議ニ直接利害關係ヲ有セザル」中立委員が兩者の中間に立つて居中調停の仕事をするのであつて、調停委員の全部が純粹に中立的資格をもつて居る借地借家乃至小作調停の委員會とは此點に於て著しく異なつた性質をもつて居るものと言ふことが出來る。

第五　調停手續

一　調停委員會の任務は爭議者當事者双方の間に立つて居中調停を行ふにある。當事者双方の委託によつて彼等を約束すべき中裁判斷を下すことを任務とするものではない。

二　扨て上記の方法によつて「委員定リタルトキハ行政官廳ハ直ニ調停委員會ヲ招集シ之ヲ開會」せねばならぬ。(第六條)

而して開會し後先づ第一に「議長及其ノ代理者」の選擧を行はねばならないが、其方法は「當事者ノ選定ニ係ル委員ニ於テ選定シタル委員」――即ち中立委員三人――「ノ互選ニ依リ投票ノ多數ヲ得タル者ヲ以テ之ニ充ツ」るのであり、「多數ヲ得タル者ナキトキハ抽籤ニ依ル」のである(第七條)

三　「調停委員會ハ議長又ハ其ノ代理者及各當事者ノ選定シタル委員各二名以上出席スルニ非サレバ會議ヲ開クコトヲ得」ない（第十條）。而して其議事は第九條第二項、第十七條に於けるが如く「別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外——出席委員ノ——過半數ヲ以テ決ス」べく、若し「可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル」のである（第十一條。）此故に、委員全部が出席して居る場合に、勞働者側の委員は全部議案に贊成し、使用者側の委員は全部之に反對して居る場合に、議長以外の中立委員が二名共議案に贊成すれば、議案は可決成立を見るべく、之に反して中立委員二名の意見が分れゝば結局贊成四名反對四名となるが故に、「議長ノ決スル所ニ依」らねばならない。從つて又、例へば中立委員としては議長一人のみが出席し、其以外には勞働者側の委員三名、使用者側代表委員二名のみが出席して居るやうな場合には、上記第十條の規定によつて尚有効に會議を開きうるけれども、議事は結局議長以外の委員の多數決によつて決定せらるゝが故に、勞働者側三名が贊成し使用者側一名が反對すれば議案は可決成立すべきである。此場合議長は先づ平委員として使用者側委員と共に反對意見に一票を投じた上、贊否の意見各三名づゝなることを理由として、更に議長たる資格に於て決定を與へ得るものではない。

尚、「調停委員會ノ議事ハ之ヲ公開」しない。但し「行政官廳ハ調停委員會ノ承認ヲ得テ——例へば調停官の如きは——當該官吏ヲシテ會議ニ臨席セシムルコトヲ得」る（第十二條）從つて各調停委員は補助者書記等として委員以外の人々を帶同し得ない。委員會の記錄其他の雜務は結局調停委員會の承認を得て臨席した「當該官吏」に於て之を行ふことゝなるのであらう。

四　「調停委員會ハ勞働爭議ノ解決ニ必要ナル調査整理ヲ爲シ其ノ調停ヲ爲ス」を以て其職務とする（第八條）從つて「調停ニ必要ナル範圍ニ於テ當事者又ハ其ノ代表者其ノ他利害關係人又ハ參考人ニ對シ出席說明ヲ求メ又ハ說

明書類ノ提示ヲ求ムルコトヲ得」べく（第十三條、）又「調停ニ必要ナル範圍ニ於テ委員ヲシテ作業所其ノ他爭議ノ關係——例へば當該工場——ニ立入リ、作業若ハ設備ヲ視察シ又ハ關係者ニ質問セシムルコトヲ得」る。「但シ軍事上秘密ヲ要スル場所ニ付テハ此ノ限」りでない（第十四號。）而して右第十三條によつて出席說明又は說明書類の提示を求められた者が「故ナク」之に應ぜざるときは「五十圓以下ノ過料ニ處」せらるべく、（第二十條）又出席したるも「虛僞ノ說明ヲ爲シ」又は「故ナク」第十四條ノ規定ニ依ル立入、視察ヲ促シ若ハ之ヲ妨ゲ又ハ質問ニ對シ答辯ヲ爲サズ若ハ虛僞ノ陳述ヲ爲シタル」ときは「二百圓以下ノ罰金ニ處」せられる（第二十一條。）勿論此等の制裁を加へるについては、調停委員會の要求其他が「調停ニ必要ナル範圍」を超えざること（第十三條、第十四條參照）及び違反行爲が「故ナク」爲されたることを必要とするが故に、例へば病氣の故を以て出席說明を爲し得ざりし者は勿論過料の制裁を免れ得べく、又罰金の訴追を受けた節は委員會の要求が「調停ニ必要ナル範圍」を超えて居ることを以て抗辯の理由とすることが出來るのである。

尙玆に注意すべきは過料と罰金との區別である。罰金は一般刑法及び刑事訴訟法の適用を受ける刑罰であつて、之を課刑するものも亦一般の刑事裁判所である。之に反して過料は刑罰ではない。唯法律の命ずる所を強行する爲めの秩序罰に過ぎないのであつて、其取扱も非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條の準用によつて爲されることになつて居る（第二十條第二項。）即ち其事件は「過料ニ處セラルベキ者ノ住所地ノ地方裁判所」の非訟事件として取扱はれるのであつて（非訟事件手續法第二百六條、）罰金の如く區裁判所の刑事々件として取扱はれるのではない。

尙調停委員會はかくの如き廣大なる權限を有し、之によつて爭議關係者の秘密を知り得るが故に、法律は特に「委員又ハ委員タリシ者ハ故ナク前二條——即チ第十三條及び第十四條——ノ場合ニ知得タル秘密ヲ漏洩スルコトヲ得ズ」（第

十五條）との規定を設け、之に違反したる者は之を二百圓以下の罰金に處することゝして居る（第二十一條第三號）

之に反し、小作調停法第四十九條「調停委員又ハ調停委員タリシ者故ナク評議ノ顛末又ハ調停主任、調停委員ノ意見若ハ其ノ多少ノ數ヲ漏泄シタルトキハ千圓以下ノ罰金ニ處ス」と言ふが如き制裁規定は、勞働爭議調停法中には全く存在しない。蓋し先にも一言したるが如く小作調停委員會は爭議當事者双方の中間に位する中立的分子を以て組織せらるゝに反し、勞働爭議調停委員會は始めより當事者双方を代表する委員を三名づゝ參加せしめて居り、中立委員の調停斡旋によつて互讓和解を成立せしめやうとするものであるから、會議の内容が自ら當事者双方に漏れるのは當然であつて、特に之を秘密とすべき理由はないからである。

五　調停委員會は以上の諸方法其他によりて知り得た調停資料を利用して調停和解の原案を立て、之によつて爭議當事者双方に向つて互讓和解を求め、以て爭議の解決を計らねばならぬ。

調停手續は或は和解成立によつて終了し、或は妥協不成立によつて結了する。しかし、何れにせよ「開會ノ日ヨリ十五日内ニ調停手續ヲ結了スルコトヲ要ス」るのであつて、唯「當事者ノ選定シタル——六名の——委員全員ノ同意アリタルトキ」に限つて「之ヲ延長スルコトヲ得」るに過ぎない（第九條）。即ち、行政官廳、中立委員乃至は勞資代表委員中何れか一方のみの意見によつて濫りに調停期間を延長し得ないのである。蓋し、上述の如く、調停繼續中は爭議當事者双方共第十九條によつて著しく爭議戰術の制限を受くるが故に、例へば使用者側委員一方の希望によつて濫に調停期間の延長を許すときは、彼等一方の意志によつて勞働者側の爭議戰術を制限し得るが如き結果を生ずるからである。

尙調停手續が結了したならば、調停の成否如何に關係なく「調停委員會ハ其ノ顛末ヲ行政官廳ニ報告スルコトヲ要ス」る。而して其報告内容は委員會任意に之を定め得るを原則とするけれども　調停效を奏せずして「勞働爭議解決ス

ル＝至ラザリシトキハ調停委員會ハ其ノ報告ニ委員會ノ決議セル爭議調停案及之ニ關スル少數意見ヲ表示スルコトヲ要ス」る（第十六條）。而して、行政官廳が右の報告を受けたならば、其の「要旨ヲ公表」し、以て一般公衆をして爭議及び調停の顚末を知らしめねばならぬ。「但勞働爭議解決シタル場合ニ於テ當事者一方ノ選定シタル委員全員ガ豫メ反對ノ意思ヲ表示シタルトキハ此ノ限」でない（第十七條）。蓋し、勞働爭議最後の審判者は公衆であり、殊に公益企業については其特色が著しい、從つて調停の結果勞働爭議が解決した場合ならば格別、未解決のまゝ委員會結了したる場合の如きは調停の顚末を公表して之を公衆の批判に訴へ、輿論の力によつて爭議を解決するの外如何ともし難いからである。

六　終に、調停委員として選定せられ又は囑託せられたる者及び上記第十三條によつて委員會に出席說明し又は說明書類の提示を爲したる人々は「勅令ノ定ムル所ニ依リ費用ノ辨償ヲ受クルコトヲ得」る（第十八條）。

第六　調停の效果

一　調停其效を奏して爭議の解決を見たるときは、爭議當事者相互間に一種の勞働協約が成立するのである。即ち、以後勞働條件其他に關して當該使用者及び勞働者團體並に其團體員を羈束すべき勞働規範が成立するのである。勞働協約夫れ自身は明かに一種の契約に違ひない。しかし、因つて成立するものは單なる債務的拘束力にあらずして規範的拘束力である。此點先に拙稿「勞働協約と法律」（改造大正十五年一月號所載）中に於て詳說した通りである。從つて、借地借家乃至小作調停の場合の如く、當事者双方を債務的に拘束する法律的和解を成立せしめるのとは、事態が根本的に異なつて居る。借地借家調停の場合にあつては、當事者相互の間に民法第六百九十五條に依る債務的和解が成立するのである。從つて當事者の一方之に違反すれば相手方は債務不履行を理由として民法所定の制裁を求め得るは勿

十五條）との規定を設け、之に違反したる者は之を二百圓以下の罰金に處することゝして居る（第二十一條第三號）

之に反し、小作調停法第四十九條「調停委員又ハ調停委員タリシ者故ナク評議ノ顛末又ハ調停主任、調停委員ノ意見若ハ其ノ多少ノ數ヲ漏泄シタルトキハ千圓以下ノ罰金ニ處ス」と言ふが如き制裁規定は、勞働爭議調停法中には全く存在しない。蓋し先にも一言したるが如く小作調停委員會は爭議當事者双方の中間に位する中立的分子を以て組織せらるゝに反し、勞働爭議調停委員會は始めより當事者双方を代表する委員を三名づゝ參加せしめて居り、中立委員の調停斡旋によつて互讓和解を成立せしめやうとするものであるから、會議の内容が自ら當事者双方に漏れるのは當然であつて、特に之を秘密とすべき理由はないからである。

五　調停委員會は以上の諸方法其他によりて知り得た調停資料を利用して調停和解の原案を立て、之によつて爭議當事者双方に向つて互讓和解を求め、以て爭議の解決を計らねばならぬ。

調停手續は或は和解成立によつて終了し、或は妥協不成立によつて結了する。しかし、何れにせよ「開會ノ日ヨリ十五日内ニ調停手續ヲ結了スルコトヲ要ス」るのであつて、唯「當事者ノ選定シタル――六名の――委員全員ノ同意アリタルトキ」に限つて「之ヲ延長スルコトヲ得」るに過ぎない（第九條）。即ち、行政官廳、中立委員乃至は勞資代表委員中何れか一方のみの意見によつて濫りに調停期間を延長し得ないのである。蓋し、上述の如く、調停繼續中は爭議當事者双方共第十九條によつて著しく爭議戰術の制限を受くるが故に、例へば使用者側委員一方の希望によつて濫に調停期間の延長を許すときは、彼等一方の意志によつて勞働者側の爭議戰術を制限し得るが如き結果を生ずるからである。

尚調停手續が結了したならば、調停の成否如何に關係なく、「調停委員會ハ其ノ顛末ヲ行政官廳ニ報告スルコトヲ要ス」る。而して其報告内容は委員會任意に之を定め得るを原則とするけれども　調停效を奏せずして「勞働爭議解決ス

ル＝至ラザリシトキハ調停委員會ハ其ノ報告ニ委員會ノ決議セル爭議調停案及之ニ關スル少數意見ヲ表示スルコトヲ得ス」る（第十六條）。而して、行政官廳が右の報告を受けたならば、其の「要旨ヲ公表」し、以て一般公衆をして爭議及び調停の顛末を知らしめねばならぬ。「但勞働爭議解決シタル場合ニ於テ當事者一方ノ選定シタル委員全員ガ豫メ反對ノ意思ヲ表示シタルトキハ此ノ限」でない（第十七條）。蓋し、勞働爭議最後の審判者は公衆であり、殊に公益企業については其特色が著しい、從つて調停の結果勞働爭議が解決した場合ならば格別、未解決のまゝ委員會終了したる場合の如きは調停の顛末を公表して之を公衆の批判に訴へ、輿論の力によつて爭議を解決するの外如何ともし難いからである。

六　終に、調停委員として選定せられ又は囑託せられたる者及び上記第十三條によつて委員會に出席說明し又は說明書類の提示を爲したる人々は「勅令ノ定ムル所ニ依リ費用ノ辨償ヲ受タルコトヲ得」る（第十八條）。

第六　調停の効果

一　調停其效を奏して爭議の解決を見たるときは、爭議當事者相互間に一種の勞働協約が成立するのである。即ち、以後勞働條件其他に關して當該使用者及び勞働者團體並に其團體員を羈束すべき勞働規範が成立するのである。勞働協約夫れ自身は明かに一種の契約に違ひない。しかし、因つて成立するものは單なる債務的拘束力にあらずして規範的拘束力である。此點先に拙稿「勞働協約と法律」（改造大正十五年一月號所載）中に於て詳說した通りである。從つて、借地借家乃至小作調停の場合の如く、當事者双方を債務的に拘束する法律的和解を成立せしめるのとは、事態が根本的に異なつて居る。借地借家調停の場合にあつては、當事者相互の間に民法第六百九十五條に依る債務的和解が成立するのである。從つて當事者の一方之に違反すれば相手方は債務不履行を理由として民法所定の制裁を求め得るは勿

論、調停委員會の調停が裁判所の認可決定を受けたならば以後「裁判上ノ和解ト同一ノ效力ヲ有ス」るに至り（借地借家調停法第二十八條）、從つて當事者は之を債務名義として何時にても直に强制執行を爲し得るのである（民事訴訟法第五百五十九條）。之に反し、勞働協約は單に當事者双方を羈束すべき社會的規範を成立せしめるに過ぎない。而して其規範の拘束力を保障する最後の力は、契約夫れ自身に內在する社會的拘束力と協約當事者双方の固有する社會的實力とに外ならない。從つて當事者中何れか一方が協約に違反するときは、相手方は再び同盟罷業其他の方法によつて、實力的に相手方を壓迫するの外ないのである。

是れ勞働爭議調停法に於ても調停の効果に關して何等の規定を設けざる所以であつて、若槻首相が衆議院に於て、「委員會ノ決定ニハ强制力ガナイノデアル。サウ云フモノナラバ、何モ委員會ヲ行政廳ガ進ンデ開ク必要ハナイヂヤナイカト云フ御考モアルヤウデアリマス。併シ玆ニ委員會ヲ開イテ一種ノ決議ガ出タト云フコトハ、是ハ縱シ强制力ガアリマセヌデモ、爭議ノ場合ニ於テハ大變有力ナルモノデアリマス。兎ニ角此問題ニ當ツテ双方カラノ代表者並ニ利害關係ノ無イ第三者ガ集ツテ、ドウシタラバ宜イカト云フ意見ガ玆ニ出來タト云フコトニナレバ、其意見ニハ强制力ガナクトモ尙必要デアルノデアリマス云々」と云ふて居るのも蓋し其意此處に存するものと解せねばならない。（衆議院速記錄第十四號三五九頁參照）。

二　尙、先にも一言した通り調停は仲裁判斷ではないから、委員會が調停案を決議して之を當事者に申渡しただけでは何等調停の成立を來たすものではない。委員會は單に調停案を決定して當事者双方の同意を、求めるだけのことであつて、調停は結局當事者双方の同意あるによつてのみ成立するのである。從つて、若槻首相も述べて居る通り（衆議院速記錄第十四號三五九頁參照）、委員會が調停案を決定するに付いても第十一條によつて多數決の方法をとつて差支へな

いのであつて、例へば勞働者側委員の反對あるにも拘らず使用者側委員及び中立委員のみの同意により多數決を以て調停案を成立せしめても、其結果勞働者を拘束する强制力は少しも發生しないのである。唯かゝる場合には、實際上爭議團か其調停案に同意せず、從つて調停不成功に終ることが多いだけのことである。而してかくして未解決に終つた爭議は、一般輿論の批判を受けて頓て自ら社會的に解決することとなるのである。

(附錄) 勞働爭議調停法

(大正十五年四月法律第五七號)

第一條 左ニ掲クル事業ニ於テ勞働爭議發生シタルトキハ行政官廳ハ當事者ノ請求ニヨリ調停委員會ヲ開設スルコトヲ得當事者ノ請求ナキ場合ト雖モ行政官廳ニ於テ必要アリト認メタルトキ亦同シ

一 蒸氣、電氣其ノ他ノ動力ヲ使用スル鐵道、軌道又ハ船舶ニ依リ公衆ノ需要ニ應ズル運輸事業

二 公衆ノ用ニ供スル郵便電信又ハ電話ノ事業

三 公衆ノ需要ニ應ズル水道電氣又ハ瓦斯供給ノ事業

四 第一號乃至第三號ノ事業ニ電氣ヲ供給スル事業ニシテ其ノ休止カ第一號乃至第三號ノ事業ノ遂行ヲ著シク阻害スルモノ

五 其ノ他公衆ノ日常生活ニ直接關係アル事業ニシテ勅令ヲ以テ定ムルモノ

六 陸軍又ハ海軍ノ直營ニ係ル兵器艦船ノ製造修理ノ事業ニシテ勅令ヲ以テ定ムルモノ

前項ニ掲クル以外ノ事業ニ於テ勞働爭議發生シタルトキハ行政官廳ハ當事者双方ノ請求ニ依リ調停委員會ヲ開設スルコトヲ得

第二條 調停委員會ヲ開設セントスルトキハ行政官廳ハ當事者双方ニ之ヲ通知スベシ

第三條 調停委員會ハ九人ノ委員ヲ以テ之ヲ組織ス委員ノ中六人ハ勞働爭議當事者ヲシテ各同數ヲ選定セシメ他ノ三人ハ當事者ノ選定シタル委員ヲシテ爭議ニ直接利害關係ヲ有セザル者ニ就キ選定セシメ行政官廳之ヲ囑託ス

前項ノ規定ニ依リ囑託セラレタル委員ハ正當ノ理由ナクシテ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第四條 勞働爭議ノ當事者第二條ノ規定ニ依ル通知ヲ受ケタルトキハ三日內ニ前條第一項ノ規定ニ依リ其ノ選定シタル委員ヲ行政官廳ニ屆出ツルコトヲ要ス

當事者前項ノ規定ニ依ル屆出ヲ爲サザルトキハ行政官廳ハ當事者ニ代リ委員ヲ選定ス此ノ委員ハ當事者ノ選定シタルモノト看做ス

前二項ノ規定ニ依ル手續終リタルトキハ行政官廳ハ直ニ前條第一項ノ規定ニ依リ當事者ノ選定シタル委員ニ於テ選定スベキ委員ノ選定ヲ要求スベシ此場合ニ於テハ當事者ノ選定シタル委員ハ四日內ニ之ヲ選定シ行政官廳ニ屆出ツルコトヲ要ス

前項ノ規定ニ依ル屆出ナキトキハ行政官廳ハ當事者ノ選定シタル委員ニ代リ前項ノ規定ニ依リ選定スベキ委員ヲ選定ス此ノ委員ハ當事者ノ選定シタル委員ニ於テ選定シタルモノト看做ス

第五條　委員中缺員ヲ生シタルトキハ前二條ノ手續ニ準ジ之ヲ補充ス

第六條　委員定リタルトキハ行政官廳ハ直ニ調停委員會ヲ招集シ之ヲ開會スヘシ

第七條　調停委員會ニ議長及ヒ其ノ代理者ヲ置ク議長及其ノ代理者ハ當事者ノ選定ニ係ル委員ニ於テ選定シタル委員ノ互選ニ依リ投票ノ多數ヲ得タル者ヲ以テ之ニ充ツ多數ヲ得タル者ナキトキハ抽籤ニ依ル

第八條　調停委員會ハ勞働爭議ノ解決ニ必要ナル調査審理ヲ爲シ其調停ヲナスモノトス

第九條　調停委員會ハ開會ノ日ヨリ十五日內ニ調停手續ヲ結了スルコトヲ要ス

前項ノ期間ハ當事者ノ選定シタル委員全員ノ同意アリタルトキハ之ヲ延長スルコトヲ得

第十條　調停委員ハ議長又ハ其代理者及各當事者ノ選定シタル委員各二名以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開クコトヲ得ス

第十一條　調停委員會ノ議事ハ本法中別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外過半數ヲ以テ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スルトコロニ依ル

第十二條　調停委員會ノ議事ハ之ヲ公開セス行政官廳ハ調停委員會ノ承認ヲ得テ當該官吏ヲシテ會議ニ臨席セシムルコトヲ得

第十三條　調停委員會ハ調停ニ必要ナル範圍ニ於テ當事者又ハ其ノ代表者其ノ他利害關係人又ハ參考人ニ對シ出席說明ヲ求メ又ハ說明書類ノ提示ヲ求ムルコトヲ得

第十四條　調停委員會ハ調停ニ必要ナル範圍ニ於テ委員ヲシテ作業所其ノ他爭議ノ關係場所ニ立入リ作業者ハ設備ヲ視察シ又ハ關係者ニ質問セシムルコトヲ得但シ軍事上秘密ヲ要スル場合ニ付テハ此限リニ在ラス

第十五條　委員又ハ委員タリシモノハ故ナク前二條ノ場合ニ知得タル秘密ヲ漏洩スルコトヲ得ス

第十六條　第九條ニ規定スル調停手續ノ結了ノ場合ニ於テハ調停委員會ハ其顚末ヲ行政官廳ニ報告スルコトヲ要ス

前項ノ場合ニ於テ勞働爭議解決スルニ至ラサルトキハ調停委員會ハ其ノ報告ニ委員會ノ決議セル爭議調停案及ビ之ニ關スル少數意見ヲ表示スルコトヲ要ス

第十七條　行政官廳ハ前條ノ規定ニ依ル報告ノ要旨ヲ公表スヘシ但シ勞働爭議解決シタル場合ニ於テ當事者一方ノ選定シタル委員全員カ勸メ反對ノ意思ヲ表示シタルトキハ此限リニ在ラス

第十八條　委員及ヒ第十三條ニ規定スルモノハ勅令ノ定ムルトコロニ依リ費用ノ辨償ヲ受クルコトヲ得

第十九條　第一條第一項ニ揭ゲル事業ニ於ケル勞働爭議ニ關シ第二條ノ規定ニ依ル通知アリタルトキハ現ニ其ノ爭議ニ關係アル使用者及ヒ勞働者竝其ノ屬スル使用者團體及勞働者團體ノ役員及事務員以外ノ者ハ第九條ニ規定スル調停手續ノ結了ニ至ル迄左ニ揭クル目的ヲ以テ其ノ爭議ニ關係アル使用者又ハ勞働者ヲ誘惑又ハ煽動スルコトヲ得ス

一　使用者ヲシテ勞働爭議ニ關シ作業所ヲ閉鎖シ作業ヲ中止シ雇傭關係ヲ破毀シ又ハ勞務繼續ノ申込ヲ拒絕セシムルコト

二　勞働者ノ集團ヲシテ勞働爭議ニ關シ勞務ヲ中止シ作業ノ進行ヲ阻害シ雇傭關係ヲ破毀シ又ハ雇傭繼續ノ申込ヲ拒絕セシムルコト

第二十條　故ナク第十三條ニ規定スル出席說明又說明書類ノ提示ヲ爲サザル者ハ五十圓以下ノ過料ニ處ス

非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ハ前項ノ過料ニ之ヲ準用ス

第二十一條　左ノ各號ノ一ニ該當スルモノハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

一　第十三號ノ場合ニ於テ虛僞ノ說明ヲ爲シタル者

二　故ナク第十四條ノ規定ニ依ル立入視察ヲ拒ミ若ハ之ヲ妨ケ又ハ質問ニ對シ答辯ヲ爲サス若ハ虛僞ノ陳述ヲ爲シタル者

三　第十五條ノ規定ニ違反シタル者

第二十二條　第十九條ノ規定ニ違反シタル者ハ三月以下ノ禁錮又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

研究會の地位とその態度

清瀨一郎

一　微妙を極めたる個人入閣

大正十五年五月三日、赤坂東宮假御所に於て內閣大臣の親任式が行はれた。從前大藏大臣たりし濱口雄幸氏が內務大臣に任ぜられ、農林大臣たりし早速整爾氏が大藏大臣に任ぜられ、町田忠治氏が農林大臣に任ぜられた外、貴族院研究會の井上匡四郎子爵が鐵道大臣に親任せられたのであつた。

井上匡四郎子の入閣は個人たる資格に於ける入閣であつて、研究會自身とは何等の關係ないものであるとは、研究會方面よりも、亦、政府の側よりも繰り返し聲明せられつゝある所である。然るにこゝに不審議なことには、若槻首相は、憲政會の長老連が、聯立の動機に關する質問に答へて、政局安定のために必要であつたと言つて居る。其意味は言ふ迄もなく、憲政會は院內に三分の一の議席しか占めて居らぬ。他派の反噬に逢へば、政局は忽ち動搖する。そこで、他派との好意的關係を維持しつゝ進退する必要があるとの意味に外ならぬ。井上匡四郎一個人に此力があるのであらうか。曰く否。彼れにそれだけの力量は無論ない。然らば首相の政局安定といふ言葉の裏には何が隱されて居るのであるか。曰く井上を通して研究會。研究會を通じて政友本黨。是が即ち「政局安定」の意味でなくて何であらう。果して然らば井上の入閣は個人入閣にして個人入閣にあらず。それは代表入閣であり、政治的入閣である。往年、大木伯が原內閣に入つたのも、前田利定子が加藤友三郎內閣に入つたのも當時は、やはり個人入閣であると聲明せられつゝあつた。清浦內閣が研究會を基礎として組閣した場合でさへも、入閣者は個人の資格であると辯解しつゝあつたのである。彼等は何故に常に斯の如き辯解を必要とするのであるか。彼等は何等か、世に憚る所があるのであるか。

二　喬木にして風を避けんとす

研究會の幹部は、其乾兒を入閣せしめて置き乍ら、之を個人入閣であると言つて居る。獨りそれのみならず彼等は自ら局に當るを避ける。清浦内閣をつくつたのも青木、水野であつた。然るに兩名は閣班に列する事を避けた研究會と加藤(後に若槻)内閣とを結びつけたのも此兩人である。然るに兩人は入閣せぬ。水野は政務官の地位には就いたが、閣僚は固辭した。自らは次官を受けるが、大臣とならば乾兒を出す。實に微妙を極めた出所進退ではないか。其意奈邊に在るか。

我國の華族の制度は、後にも説く如く、貴族院の制度と相表裏して居る。貴族院の制度さへなければ、公、侯、伯、子、男は社會上の稱號たるに止まり、別に特權と言ふには當らぬ。華族を特權階級といふのは、彼等が立法の一院を殆んど獨占するからである。故に貴族院の占有は彼等に取つては實に重要なることである。貴族院の占有は特權維持を意味する。而して之を占有する機關は何であるかと言へばそれは研究會である。研究會の存續は實に華族が立法一院を占據する手段である。

然るに彼等も亦時勢を識る。風の吹きかたを察する。今日の時代に、風の表に屹然として立つては到底、中折せざるを得ぬ。なるべく、強風を避けて、而も此大木を保存し、成長せしめねばならぬ。これが彼等の苦慮する所である。個人入閣の聲明も、次官を受けて、大臣を辭するも、實は一種の保護色に過ぎぬ。彼等には一定の政治的主張がある譯ではない。固より具體的政策などはあらう筈がない。只だ同族の爲め、一日も長く斯の既得の特權を保持しやうといのが彼等の念願である。

世間或は研究會が護憲運動の攻勢主力たる憲政會と結んだのを怪む。憲政會の出所進退こそ奇怪千萬であるが、研究會としては毫も怪むに足らぬ。清浦内閣の組織に奔走したものも本來一定の主義に因つたのではない。始より主義や主張やからは來て居らぬ。目的は特權の維持である。政權に參與して居る事が同族の特權と威嚴を保持する所以である。されば清浦を殪した憲政會内閣に入つても別段主義や主張の矛盾を感ぜぬ。而して孰れと結ぶも威嚴の保持せられることは同一である。

東海の一孤島、日本は田舍だ。田舍にも普選が實施せられんとして居る。何時まで此老猾なる野狐に瞞されて濟すのであらうか。

三　新特權階級の發生

封建三百の候伯が特權階級であつた事は言ふに及ばぬ。明治

維新は此特權を一排したのであつた。明治四年の廢藩と共に、少くとも法制の上に於ては、政治上の特權を有つて居る人間は日本には無くなつたのである。華族はたゞ社會上の尊稱に過ぎなかつた。然るに憲法の發布に至つて突然此者が政治上の特殊階級となつたのであるから驚く。其次第は斯うである。

明治十四年十月十二日に「憲法は明治二十一年迄に制定し、國會は明治二十三年を期して東京に開設する」といふ詔勅が渙發せられ、伊藤は、憲法草案の事は臣に一任せられたしと上奏した。彼は十五年以來憲法取調のため外遊し、十七年歸朝後宮中に「憲法取調局」を新設し、伊藤は自ら其長官となつた。彼は在歐中我國にも、世襲貴族を中心としたる英國流の上院を造らんとの考を起した。然るに我國には英國のやうな貴族がない。たゞ明治維新の革命のため、失意の地位に沈淪して居る舊大名や公卿衆がある。これを取立て、一院を造らうと考へた。そこで十七年三月、突如「奉勅華族會なるものを發布したのである。「第一條、凡ソ爵ヲ授クルハ勅旨ヲ以テシ宮内卿之レヲ奉行ス。第二條、爵ヲ分ツテ公、侯、伯、子、男ノ五等トス。第三條、爵ハ男子嫡長ノ順席ニヨリ之レヲ襲カシム。」と謂ふのである。五爵の名稱は周禮の鄭元注に「爵謂、公、侯、伯、子、男、卿大夫子也」と在るに出でたものである。此「奉勅華族令」は翌十八年の「内閣官制」と共に憲法發布、國會開設の準備たりしことは言ふまでもない。此華族令に依り叙爵せられたる家門は舊武家大名衆二百八十四軒、公卿堂上衆百六十六軒、新勳功者百五十六軒、合計六百六軒であつた。之を各爵別に數ふれば公爵十一軒、侯爵三十軒、伯爵三十軒、子爵三百五十七軒男爵百十七軒、其他桑門及び婦人戸主等無爵のもの七軒、合計六百六軒であつて、之に憲法發布と同時に特別の參政權を授與せんとしたのである。（子爵が後に説明する如く研究會の本體となつたのである）。

記述が少しく冗漫になるが、當時如何なるものを特權貴族に叙したかを見て置く事は必ずしも無用ではあるまい。

前述の如く武家大名中より叙爵したものは二百八十四軒（三百諸侯といつたもの）であつて、德川宗家を中心とし　舊來の家格、祿高を本位とし、之に維新當時の勳功を參酌して等級を定めたものである。家格、祿高については元和元年の武家諸法度帳、元祿三年の藩翰譜、寛政二年の諸家譜、天保十年の武鑑が本となつたといはれて居る。此等を準繩として大體左の如くに定められた。

公爵　德川宗家（八百萬石）、外様筆頭、維新元勳、島津家（七十萬石）、毛利家（三十六萬石）

侯爵　尾州德川（六十一萬石）、紀州德川（五十五萬石）、水戸德川（三十五萬石）、其他譜代親藩、外樣國持大大名、帝鑑間詰（三十萬石以上）、十五家。
伯爵　松平十八家、國持大名（十五萬石以上）、四十五家。
子爵　國持格城持大名、拜謁以上旗本、七十一家。
男爵　駿河御譜代、大藩國家老（一萬石以上）、百五十三家。

此等の武家大名の内には鎌倉時代よりの豪族、北條、千葉、新田、島津の家筋の者もあり、足利時代の名家菊池、細川、上杉、大内の家筋の者もあれども要するに德川に忠勤を勵んだために存續したものであつて、必ずしも皇室に對する忠勤者でない事は世人の知る所である。

公卿堂上衆で叙爵せられた者は上述の如く、百六十六軒である。其序次を定めたものは近江令、撰叙令、大寶令、令義解、貞觀式目、律令考、三代格、職原抄等であつて武家の場合と同じく維新の際に於ける勳功も亦參酌せられた。

公爵　五攝家（近衞、鷹司、九條、二條、一條）、二功臣（三條、岩倉）。
侯爵　七淸華（德大寺、西園寺、大炊御門、菊亭、花山院、久我、中山）並に五功臣。
伯爵　三大臣家、日野四家、甘露寺六家。
子爵　羽林家、名家衆。
男爵　五位以上堂上衆、並に奈良堂上二十八家

公卿堂上衆は固より皇室に奉事したのではあるか、五攝家、七淸華其他僅少のものを除いては　毫も政治や、國事に參與した歷史を持たないのである、蹴鞠、膳羞、服制、相撲、挿花、伶優、陵司等に從事したものが大多數である。舊家ではあらうが政治上の特權を持つべき筋の家柄ではなかつた。

新勳功者として當時叙爵せられた者は百五十六。維新の運動に於ける地位と勳勞に依つたものと稱せられて居る。例へば、

侯爵　大久保利和（利通の子）、木戸孝正（孝允の子）、佝奏。
伯爵　伊藤博文、山縣有朋、黑田淸隆、西鄕從道等。
子爵　高島鞆之助、福岡孝悌、榎本武揚、鳥尾小彌太等。
男爵　井上良馨、黑川通軌、千家尊福、高崎正風等。

此頃の授爵は薩長藩閥者流の手盛であつた事はいふ迄もない。同じく維新の功勞者であつた大隈、板垣には何等の沙汰もなかつた。世論が喧しくなつたので、やうやく明治二十一年になつて此兩名及後藤象次郎を伯爵に追加授爵した。明治維新の大業を血を見ずして成就せしめた勝海舟には、はじめ伊藤、山縣よりも下位なる子爵を授くべしといふ事であつた。洒落な勝も此處置には少し癪にさわつたと見へ「今までは、一人前と思ひしに、五尺に足らぬ四尺（子爵）なりけり」と皮肉つた。僞政者其鼻息に怖れて、これも伯爵にしたといふ事は今に言ひ傳へられる逸話である。

四　貴族院の會派

貴族院は正式には明治二十三年七月一日に成立した。當時の貴族院の構成は

皇族　十一人
華族　百三十六人（内公爵十人、侯爵二十一人、伯爵十五人、子爵七十人、男爵二十人）
勅選　六十一人
多額　四十五人
合計　二百五十二人

であつた。其内皇族は事實議院に御出席にはならぬ。當時の多額納税議員は絶對に無力であつた。（今日でも有力ではないが）。百三十六名の華族議員は名實共に貴族院の中堅勢力であつた。

明治二十三年、貴族院が成立するや、直ちに其中堅たる華族議員の政治研究の機關として成立したものが此研究會である。當時は堀田正養、岡部長職、正親町實正が中心となつて、貴族院を左右して居つた。其後十數年間は彼の三島彌太郎の時代となり、大木遠吉の時代に移り、今日、水野、青木の全盛期となつて居る事は、初に陳へた通りである。

第二議會解散後（二十四年）、勅選議員團として茶話會なるものが成立し、三十年六月に至り無所屬團體組織せられ茶話會と共に幸倶樂部なる社交倶樂部を形成した。大正八年に至り院内の情勢漸次政黨的色彩を帶びんとするに對し至公至平なるべき貴族院の本分を全ふすと標榜し幸倶樂部中より脫して別に公正會なるものを組織した。之が爲め茶話會と無所屬は著しく其勢力を減じた。此情勢につれて同年十一月無所屬と土曜會（これは之より先、三十七年谷干城、曾我祐準氏等に依り組織せられたものである）と合して同成會なるものを組織した。同成會も社交倶樂部としては幸倶樂部に屬して居る。此外明治四十三年以來交友倶樂部なるものが組織せられて居る。一時親和會なるものが組織せられたがこれは其後研究會に投じた。故に今日では貴族院では

研究會
茶話會 ⎫
同成會 ⎬ 幸倶樂部
同成會 ⎭
交友倶樂部

の五派が成立して居るけれども、茶話會以下の四派は其實勢力に於て到底研究會の敵ではない。

五　研究會の地位

日本の華族制度は貴族院を構成する爲めに造成せられた（明治十七年）。有爵議員は果して院の中心となつた。院の中心たる有爵議員は研究會を其機關とした。如何なる政府も研究會を無視して存立する事が出來ぬ。我國の貴族院は衆議院と全然同一の權限を有つて居る上に、解散を受けぬ。此堅城に據つた研究會位い強いものはない。已に出づるものは已に還るとでもいふのか。貴族院乃至研究會に第一に手を燒いたのは伊藤博文其人であつた。七重の膝を八重に折つても、之を動かす事が出來なかつた。之に與ふるに利權を以てし、之に授くるに官職を以てした。彼の徹底なる原敬も、研究會を無視しては組閣する事は出來なかつた。貴族獨占の清浦內閣に對し護憲運動を起して成功した三派內閣も、此勢力を無視する事は出來ぬ。精悍無比なる横田千之助氏の起案にかゝる貴族院改革も、多く此勢力に抗ふ事は出來なかつた。毒にも藥にもならぬ學士院議員四名を加へ、無力な多額議員を殖したのが落であつた。護憲運動の中心たりし憲政會は早くも研究會より政務官を採り、今、復た個人資格を以て入閣を求めざるを得ざるに至つた。

六　貴族院の將來

佛國の「アベ、シエー」は「上院が常に下院と衝突するものなるときは、上院は有害物也。上院が常に下院と一致するものなるときは、上院は無用物也」と言つた。

英國の「サー、ウイリヤム、ハーコート」は「上院は一階級、殊に狹隘にして我利的なる階級の外、何物をも代表せざるものなり。故に國民の力に依りて此の私黨の私話を破らさるべからず」と言つた。

英國勞働黨議員「ヘンダーソン」は一九〇七年英國議會に「無責任なる團體たる上院は、國家の利益に背反したる利益を代表するものに過ぎず、實の國家の進歩を妨ぐるものなるを以て、之を廢せざるべからず」との動議を提出した。

其他英國には「上院は改造すべからず、廢止すべし」(Not to mend it, but to end it)「貴族政治か、平民政治か。孰れか正しき」（Peers or Peoples? Who shall rule?）等の「モットー」を生じて居る。

我國にも亦デモクラシーの風は吹いて來てゐる。我國人が自明の事と考へ來つて居つた資本主義にさへ疑義が生じて來た。況んや、同じく陛下の赤子であつて、立法の權能に差異を設くる事の不都合な事は既に論ぜられた。此理論の上に普選法は成立した。僅々千家に足らざる華族輩が、立法の一院を獨占する事は輿論の承認を受け難い。貴族院の諸公、研究會の幹部も亦、

夙に之を知つて居る。然し乍ら、既に獲得したる特權は容易に放棄しがたい。之を喪はさらんとするには如何なる方法と態度を必要とするか。茲に彼等は注意深くあらねばならぬ。彼等は此が爲めに種々なるカムフラージユを考案して居る。個人入閣の理論も其一。次官を受くるも大臣を受けさるも其一。春雨演說も其一。反對の法案は否決せずして握り潰すの慣例も亦カムフラージユの一である。然し乍ら、國民は此等の手段に欺かれてはならぬ。七千萬の國民が、多年の苦心にようやく一院に議員を送りつゝあるに拘らず、彼等は之と同等(又はそれ以上)の權力ある立法機關を僅々千家の團體を以て占領して居る事實を忘れてはならぬ。

世間往々、二院制度の理論を以て、貴族立法を辯護せんとする者がある。曰く、熟慮、堪久、愼重の要求の爲めに貴族院を要す。醉へる「フイリツプ」より醒めたる「フイリツプ」に訴ふるため To appeal from philip drunk to philip sober に貴族院を要すと。然れども、是れ甚だ擬似混濟の說である。―なる程、下院の黨爭苛烈なるの極、遂に狂亂千丈、常規を逸する事なきにしもあらず。之が爲め冷靜、熟慮の機關が必要であるとも言へやう。しかし此冷靜熟慮の機關が、貴族を以て中心とするものでなければならぬといふ理屈は何處に在るか。第二院は必要で、あらう。第二院は貴族主義のものでなければならぬといふ事はない。

我國には憲法三十四條といふものがある。「貴族院は貴族院令の定むる所に依り皇族、華族、及び勅任せられたる議員を以て組織す」といふ。何如なる者を勅任するやは院令の規定に依るべく、又其數の割合も院令次第で如何樣にも規定せられる。現在の憲法の下に於ても其の運用次第で第二院の改革は自由である。況んや憲法自體の改正も時期が來れば實行せなければならぬ。此民族が二院制度を持續するとするも其構成方法は將來は變つて行かなければならぬ。

然らば、其の變更の方向は何れにあるか。恐らくは貴族主義、に替ふるに職能主義を以て進むのではなからうか。職能主義の第二院は 世界に於て未だ完成の域には達して居らぬ。獨逸に於ける經濟會議 Reichswirtschaftrat は此の方向に進む第一步ではなからうか。「コール」の提案する「ギルド」職能會議も亦此方向に向ねつての一の暗示であらう。我國の多額議員は、農業工業商業の多額の納稅者より選ばしめて居る。之を許すならば同じく農業、商業、工業の勞働者の代表も亦第二院に列序せしむべき理由がある。貴族院の將來は此方針に向つて進むべきである。(五、六、五)。

汎太平洋勞働會議の諸問題

堤　隆

一、汎太平洋協會と勞働會議

人種的國際的勞資關係の復雜と困難とに直面した太平洋沿岸の勞働組合當事者は、現狀打開の唯一方法が沿岸各地方勞働者の隔意なき理解と、組織ある提携に存することを知つて以來、切に太平洋勞働會議の開催を冀望し、種々劃策したが、其都度資本家側の巧妙なる妨害によつて果し得なかつたのに、幸に今回濠州勞働組合の提議が汎太平洋協會に容れられて、明年（一九二七年）米領布哇に太平洋勞働會議の開催が發表されたことは注目すべき一快事である。

從來汎太平洋協會は各種の國際的會合を主催したが、同協會の性質上協議の結果に對する實行能力が極めて薄弱であり、且主要議題を學術的方面に求めた關係上、國際的學術協會以外には太平洋社交倶樂部として意義があるだらうと噂された位である。從つて本協會の名によつて開催される勞働會議の内容とその結果に對する考察と期待は、未だ世人の注意を惹いて居ないようであるが、太平洋勞働界の實情と主催者側の計劃は、所謂年中行事式の小田原評議たり得ないのである。

今試みに本年二月末汎太平洋協會常任幹事アレキサンダー・エチ・フォード氏の本會議に對する發表を見ると

明年十一月ホノルヽ市に於て濠州勞働組合が主催となり、太平洋に面する（カナダを含む）諸國の勞働大會を開く豫定である。

本會議には露西亞代表者數名參加、總出席者百餘名の豫定である。

本會議は太平洋上に開かれる最大の會議で相當の結果を齎すべく豫想される。

と、尚主催者たる濠州勞働組合の書記デー・エル・マックナマラ氏より同協會へ宛てた書狀には

本會議には太平洋沿岸諸國の勞働者代表、並びに諸組合代

維新は此特權を一排したのであつた。明治四年の廢藩と共に、少くとも法制の上に於ては、政治上の特權を有つて居る人間は日本には無くなつたのである。華族はたゞ社會上の尊稱に過ぎなかつた。然るに憲法の發布に至つて突然此者が政治上の特殊階級となつたのであるから驚く。其次第は斯うである。

明治十四年十月十二日に「憲法は明治二十三年を期して東京に開設する」といふ詔勅が煥發せられ、伊藤は、憲法草案の事は臣に一任せられたしと上奏した。彼は十五年以來憲法取調のため外遊し、十七年歸朝後宮中に「憲法取調局」を新設し、伊藤は自ら其長官となつた。彼は在歐中我國にも、世襲貴族を中心としたる英國流の上院を造らんとの考を起した。然るに我國には英國のやうな貴族がない。たゞ明治維新の革命のため、失意の地位に沈淪して居る舊大名や公卿衆がある。これを取立て、一院を造らうと考へた。そこで十七年三月、突如、「奉勅華族會なるものを發布したのである。「第一條、凡ソ爵ヲ授クルハ勅旨ヲ以テシ宮內卿之レヲ奉行ス。第二條、爵ヲ分ツテ公、侯、伯、子、男ノ五等トス。第三條、爵ハ男子嫡長ノ順席ニヨリ之レヲ襲カシム。」と謂ふのである。五爵の名稱は周禮の鄭元注に「爵謂、公、侯、伯、子、男、卿大夫子也」と在るに出でたものである。此「奉勅華族令」は翌十八年の「內閣官制」と共に憲法發布、國會開設の準備たりしことは言ふまでもない。此華族令に依り敍爵せられたる家門は舊武家大名衆二百八十四軒、公卿堂上衆百六十六軒、新勳功者百五十六軒、合計六百六軒であつた。之を各爵別に數ふれば公爵十一軒、侯爵三十軒、伯爵三十軒、子爵三百五十七軒男爵百十七軒、其他桑門及び婦人戸主等無爵のもの七軒、合計六百六軒であつて、之に憲法發布と同時に特別の參政權を授與せんとしたのである。(子爵が後に說明する如く研究會の本體となつたのである)。

記述が少しく冗漫になるが、當時如何なるものを特權貴族に敍したかを見て置く事は必すしも無用ではあるまい。

前述の如く武家大名中より敍爵したものは二百八十四軒(三百諸侯といつたもの)であつて、德川宗家を中心とし舊來の家格、祿高を本位とし、之に維新當時の勳功を參酌して等級を定めたものである。家格、祿高については元和元年の武家諸法度帳、元祿三年の藩翰譜、寬政二年の諸家譜、天保十年の武鑑が本となつたといはれて居る。此等を準繩として大體左の如くに定められた。

公爵　德川宗家(八百萬石)、外樣筆頭、維新元勳、島津家(七十萬石)、毛利家(三十六萬石)

侯爵　尾州徳川（六十一萬石）、紀州徳川（五十五萬石）、水戸徳川（三十五萬石）、其他譜代親藩、外樣國持大大名、帝鑑間詰（二十萬石以上）、十五家。
伯爵　松平十八家、國持大名（十五萬石以上）、四十五家。
子爵　國持格城持大名、拜謁以上旗本、七十一家。
男爵　駿河御譜代、大藩國家老（一萬石以上）、百五十三家。

此等の武家大名の内には鎌倉時代よりの豪族、北條、千葉、新田、島津の家筋の者もあり、足利時代の名家菊池、細川、上杉、大内の家筋の者もあれども要するに徳川に忠勤を勵んだために存續したものであつて、必ずしも皇室に對する忠勤者でない事は世人の知る所である。

公卿堂上衆で叙爵せられた者は上述の如く、百六十六軒である。其序次を定めたものは近江令、撰叙令、大寶令、令義解、貞觀式目、律令考、三代格、職原抄等であつて武家の場合と同じく維新の際に於ける勳功も亦參酌せられた。

公爵　五攝家（近衞、鷹司、九條、二條、一條）、二功臣（三條、岩倉）。
侯爵　七淸華（德大寺、西園寺、大炊御門、菊亭、花山院、久我、中山）並に五功臣。
伯爵　三大臣家、日野四家、甘露寺六家。
子爵　羽林家、名家衆。
男爵　五位以上堂上衆、並に奈良堂上二十八家

公卿堂上衆は固より皇室に奉事したのではあるか、五攝家、七淸華其他僅少のものを除いては毫も政治や國事に參與した歴史を持たないのである、蹴鞠、膳羞、服制、相撲、挿花、伶優、陵司等に從事したものが大多數である。舊家ではあらうが政治上の特權を持つべき筋の家柄ではなかつた。

新勳功者として當時叙爵せられた者は百五十六。維新の運動に於ける地位と勳勞に依つたものと稱せられて居る。例へば、

侯爵　大久保利和（利通の子）、木戸孝正（孝允の子）、何泰。
伯爵　伊藤博文、山縣有朋、黒田淸隆、西郷從道等。
子爵　高島鞆之助、福岡孝悌、榎本武揚、鳥尾小彌太等。
男爵　井上良馨、黒川通軌、千家尊福、高崎正風等。

此頃の授爵は薩長藩閥者流の手盛であつた事はいふ迄もない。同じく維新の功勞者であつた大隈、板垣には何等の沙汰もなかつた。世論が喧しくなつたので、やうやく明治二十一年になつて此兩名及後藤象次郎を伯爵に追加授爵した。明治維新の大業を血を見ずして成就せしめた勝海舟には、はじめ伊藤、山縣よりも下位なる子爵を授くべしといふ事であつた。洒落な勝も此處置には少し癪にさわつたと見へ「今までは、一人前と思ひしに、五尺に足らぬ四尺（子爵）なりけり」と皮肉つた。僞政者其鼻息に怖れて、これも伯爵にしたといふ事は今に言ひ傳へられる逸話である。

四　貴族院の會派

貴族院は正式には明治二十三年七月一日に成立した。當時の貴族院の構成は

皇族　十一人
華族　百三十六人（内公爵十人、侯爵二十一人、伯爵十五人、子爵七十人、男爵二十人）
勅選　六十一人
多額　四十五人
合計　二百五十二人

であつた。其内皇族は事實議院に御出席にはならぬ。當時の多額納税議員は絶對に無力であつた。（今日でも有力ではないが）。百三十六名の華族議員は名實共に貴族院の中堅勢力であつた。

明治二十三年、貴族院が成立するや、直ちに其中堅たる華族議員の政治研究の機關として成立したものが此研究會である。當時は堀田正養、岡部長職、正親町實正が中心となつて、貴族院を左右して居つた。其後十數年間は彼の三島彌太郎の時代となり、大木遠吉の時代に移り、今日、水野、青木の全盛期となつて居る事は、初に陳へた通りである。

第二議會解散後（二十四年）、勅選議員團として茶話會なるものが成立し、三十年六月に至り無所屬團體組織せられ茶話會と共に幸倶樂部なる社交倶樂部を形成した。大正八年に至り院内の情勢漸次政黨的色彩を帯びんとするに對し至公至平なるべき貴族院の本分を全ふすと標榜し幸倶樂部中より脱して別に公正會なるものを組織した。之が爲め茶話會と無所屬は著しく其勢力を減じた。此情勢につれて同年十一月無所屬と土曜會（これは之より先、三十七年谷干城、曾我祐準氏等に依り組織せられたものである）と合して同成會なるものを組織した。同成會も社交倶樂部としては幸倶樂部に屬して居る。此外明治四十三年以來交友倶樂部なるものが組織せられて居る。一時親和會なるものが組織せられたがこれは其後研究會に投じた。故に今日では貴族院では

研究會
茶話會 ┐
同成會 ├ 幸倶樂部
同成會 ┘
交友倶樂部

の五派が成立して居るけれども、茶話會以下の四派は其實勢力に於て到底研究會の敵ではない。

五　研究會の地位

日本の華族制度は貴族院を構成する爲めに造成せられた（明治十七年）。有爵議員は果して院の中心となつた。院の中心たる有爵議員は研究會を其機關とした。如何なる政府も研究會を無視して存立する事が出來ぬ。我國の貴族院は衆議院と全然同一の權限を有つて居る上に、解散を受けぬ。此堅城に據つた研究會位い強いものはない。已に出づるものは已に還るとでもいふのか。貴族院乃至研究會に第一に手を燒いたのは伊藤博文其人であつた。七重の膝を八重に折つても、之を動かす事が出來なかつた。之に與ふるに利權を以てし、之に授くるに官職を以てした。彼の傲岸なる原敬も、研究會を無視しては組閣する事は出來なかつた。貴族獨占の清浦內閣に對し護憲運動を起して成功した三派內閣も、此勢力を無視する事は出來ぬ。精悍無比なる横田千之助氏の起案にかゝる貴族院改革も、多く此勢力に扞ふ事は出來なかつた。毒にも藥にもならぬ學士院議員四名を加へ、無力な多額議員を殖したのが落であつた。護憲運動の中心たりし憲政會は早くも研究會より政務官を採り、今、復た個人資格を以て入閣を求めざるを得ざるに至つた。

六　貴族院の將來

佛國の「アベ、シエー」は「上院が常に下院と衝突するものなるときは、上院は有害物也。上院が常に下院と一致するものなるときは、上院は無用物也」と言つた。

英國の「サー、ウイリヤム、ハーコート」は「上院は一階級、殊に狹隘にして我利的なる階級の外、何物をも代表せざるものなり。故に國民の力に依りて此の私黨の私話を破らさるべからず」と言つた。

英國勞働黨議員「ヘンダーソン」は一九〇七年英國議會に「無責任なる團體たる上院は、國家の利益に背反したる利益を代表するものに過ぎず、實の國家の進歩を妨ぐるものなるを以て、之を廢せざるべからず」との動議を提出した。

其他英國には「上院は改造すべからず、廢止すべし」（Not to mend it, but to end it）「貴族政治か、平民政治か。孰れか正しき」（Peers or Peoples? Who shall rule?）等の「モットー」を生じて居る。

我國にも亦デモクラシーの風は吹いて來てゐる。我國人が自明の事と考へ來つて居つた資本主義にさへ疑義が生じて來た。況んや、同じく陛下の赤子であつて、立法の權能に差異を設くる事の不都合な事は既に論ぜられた。此理論の上に普選法は成立した。僅々千家に足らざる華族輩が、立法の一院を獨占する事は輿論の承認を受け難い。貴族院の諸公、研究會の幹部も亦、

四　貴族院の會派

貴族院は正式には明治二十三年七月一日に成立した。當時の貴族院の構成は

皇族　十一人
華族　百三十六人（内公爵十人、侯爵二十一人、伯爵十五人、子爵七十人、男爵二十人）
勅選　六十一人
多額　四十五人
合計　二百五十二人

であつた。其内皇族は事實議院に御出席にはならぬ。當時の多額納税議員は絶對に無力であつた。（今日でも有力ではないが）。百三十六名の華族議員は名實共に貴族院の中堅勢力であつた。

明治二十三年、貴族院が成立するや、直ちに其中堅たる華族議員の政治研究の機關として成立したものが此研究會である。當時は堀田正養、岡部長職、正親町實正が中心となつて、貴族院を左右して居つた。其後十數年間は彼の三島彌太郎の時代となり、大木遠吉の時代に移り、今日、水野、青木の全盛期となつて居る事は、初に陳へた通りである。

第二議會解散後（二十四年）、勅選議員團として茶話會なるものが成立し、三十年六月に至り無所屬團體組織せられ茶話會と共に幸倶樂部なる社交倶樂部を形成した。大正八年に至り[illegible]の情勢漸次政黨的色彩を帶びんとするに對し至公至平なるべき貴族院の本分を全ふすと標榜し幸倶樂部中より脱して別に公正會なるものを組織した。之が爲め茶話會と無所屬は著しく其勢力を減じた。此情勢につれて同年十一月無所屬と土曜會（これは之より先、三十七年谷干城、曾我祐準氏等に依り組織せられたものである）と合して同成會なるものを組織した。同成會も社交倶樂部としては幸倶樂部に屬して居る。此外明治四十三年以來交友倶樂部なるものが組織せられて居る。一時親和會なるものが組織せられたがこれは其後研究會に投じた。故に今日では貴族院では

研究會
茶話會 ┐
同成會 ├ 幸倶樂部
同成會 ┘
交友倶樂部

の五派が成立して居るけれども、茶話會以下の四派は其實勢力に於て到底研究會の敵ではない。

五　研究會の地位

日本の華族制度は貴族院を構成する爲めに造成せられた（明治十七年）。有爵議員は果して院の中心となつた。院の中心たる有爵議員は研究會を其機關とした。如何なる政府も研究會を無視して存立する事が出來ぬ。我國の貴族院は衆議院と全然同一の權限を有つて居る上に、解散を受けぬ。此堅城に據つた研究會位い強いものはない。已に出づるものは已に還るとでもいふのか。貴族院乃至研究會に第一に手を焼いたのは伊藤博文其人であつた。七重の膝を八重に折つても、之を動かす事が出來なかつた。之に與ふるに利權を以てし、之に授くるに官職を以てした。彼の傲岸なる原敬も、研究會を無視しては組閣する事は出來なかつた。貴族獨占の清浦内閣に對し護憲運動を起して成功した三派内閣も、此勢力を無視する事は出來ぬ。精悍無比なる横田千之助氏の起案にかゝる貴族院改革も、多く此勢力に扞ふ事は出來なかつた。毒にも藥にもならぬ學士院議員四名を加へ、無力な多額議員を殖したのが落であつた。護憲運動の中心たりし憲政會は早くも研究會より政務官を採り、今、復た個人資格を以て入閣を求めざるを得ざるに至つた。

六　貴族院の將來

佛國の「アベ、シエー」は「上院が常に下院と衝突するものなるときは、上院は有害物也。上院が常に下院と一致するものなるときは、上院は無用物也」と言つた。

英國の「サー、ウイリヤム、ハーコート」は「上院は一階級、殊に狹隘にして我利的なる階級の外、何物をも代表せざるものなり。故に國民の力に依りて此の私黨の私話を破らさるべからず」と言つた。

英國勞働黨議員「ヘンダーソン」は一九〇七年英國議會に「無責任なる團體たる上院は、國家の利益に背反したる利益を代表するものに過ぎず、眞の國家の進歩を妨ぐるものなるを以て、之を廢せざるべからず」との動議を提出した。

其他英國には「上院は改造すべからず、廢止すべし」（Not to mend it, but to end it）「貴族政治か、平民政治か。孰れか正しき」（Peers or Peoples? Who shall rule?）等の「モツトー」を生じて居る。

我國にも亦デモクラシーの風は吹いて來てゐる。我國人が自明の事と考へ來つて居つた資本主義にさへ疑義が生じて來た。況んや、同じく陛下の赤子であつて、立法の權能に差異を設くる事の不都合な事は既に論ぜられた。此理論の上に普選法は成立した。僅々千家に足らざる華族輩が、立法の一院を獨占する事は輿論の承認を受け難い。貴族院の諸公、研究會の幹部も亦、

夙に之を知つて居る。然し乍ら、既に獲得したる特權は容易に放棄しがたい。之を要はさらんとするには如何なる方法と態度を必要とするか。茲に彼等は注意深くあらねばならぬ。彼等は此が爲めに種々なるカムフラージュを考案して居る。個人入閣の理論も其一。次官を受くるも大臣を受けさるも其一。春雨演説も其一。反對の法案は否決せずして握り潰すの慣例も亦カムフラージュの一である。然し乍ら、國民は此等の手段に欺かれてはならぬ。七千萬の國民が、多年の苦心にようやく一院に議員を送りつゝあるに拘らず、彼等は之と同等（又はそれ以上）の權力ある立法機關を僅々千家の團體を以て占領して居る事實を忘れてはならぬ。

世間往々、二院制度の理論を以て、貴族立法を辯護せんとする者がある。曰く、熟慮、堪久、愼重の要求の爲めに貴族院を要す。醉へる「フイリップ」より醒めたる「フイリップ」に訴ふるため 'To appeal from philip drunk to philip sober' に貴族院を要すと。然れども、是れ甚だ擬似混濟の説である。——なる程、下院の黨爭苛烈なるの極、遂に狂亂千丈、常規を逸する事なきにしもあらず。之が爲め冷靜、熟慮の機關が必要であるとも言へやう。しかし此冷靜熟慮の機關が、貴族を以て中心とするものでなければならぬといふ理屈は何處に在るか。第二院は必要で、あらう。第二院は貴族主義のものでなければならぬといふ事はない。

我國には憲法三十四條といふものがある。「貴族院は貴族院令の定むる所に依り皇族、華族、及び勅任せられたる議員を以て組織す」といふ。何如なる者を勅任するやは院令の規定に依るべく、又其數の割合も院令次第で如何樣にも規定せられる。現在の憲法の下に於ても其の運用次第で第二院の改革は自由である。況んや憲法自體の改正も時期が來れば實行せなければならぬ。此民族が二院制度を持續するとするも其構成方法は將來は變つて行かなければならぬ。

然らば、其の變更の方向は何れにあるか。恐らくは貴族主義、に替ふるに職能主義を以て進むのではなからうか。職能主義の第二院は 世界に於て未だ完成の域には達して居らぬ。獨逸に於ける經濟會議 Reichswirtschaftrat は此の方向に進む第一步ではなからうか。「コール」の提案する「ギルド」職能會議も亦此方向に向ねつての一の暗示であらう。我國の多額議員は、農業工業商業の多額の能税者より選ばしめて居る。之を許すならば同じく農業、商業、工業の勞働者の代表も亦第二院に列序せしむべき理由がある。貴族院の將來は此方針に向つて進むべきである。（五、六、五）。

汎太平洋勞働會議の諸問題

堤 隆

一、汎太平洋協會と勞働會議

人種的國際的勞資關係の復雜と困難とに直面した太平洋沿岸の勞働組合當事者は、現狀打開の唯一方法が沿岸各地方勞働者の隔意なき理解と、組織ある提携に存することを知つて以來、切に太平洋勞働會議の開催を冀望し、種々劃策したが、其都度資本家側の巧妙なる妨害によつて果し得なかつたのに、幸に今回濠州勞働組合の提議が汎太平洋協會に容れられて、明年（一九二七年）米領布哇に太平洋勞働會議の開催が發表されたことは注目すべき一快事である。

從來汎太平洋協會は各種の國際的會合を主催したが、同協會の性質上協議の結果に對する實行能力が極めて薄弱であり、且主要議題を學術的方面に求めた關係上、國際的學術協會以外には太平洋社交倶樂部として意義があるだらうと評された位である。從つて本協會の名によつて開催される勞働會議の內容とその結果に對する考察と期待は、未だ世人の注意を惹いて居ないようであるが、太平洋勞働界の實情と主催者側の計劃は、所謂年中行事式の小田原評議たり得ないのである。

今試みに本年二月末汎太平洋協會常任幹事アレキサンダー・エチ・フォード氏の本會議に對する發表を見ると

明年十一月ホノル、市に於て濠州勞働組合が主催となり、太平洋に面する（カナダを含む）諸國の勞働大會を開く豫定である。

本會議には露西亞代表者數名參加、總出席者百餘名の豫定である。

本會議は太平洋上に開かれる最大の會議で相當の結果を齎すべく豫想される。

と、尚主催者たる濠州勞働組合の書記デー・エル・マックナマラ氏より同協會へ宛てた書狀には

本會議には太平洋沿岸諸國の勞働者代表、並びに諸組合代表

夙に之を知つて居る。然し乍ら、既に獲得したる特權は容易に放棄しがたい。之を喪はさらんとするには如何なる方法と態度を必要とするか。玆に彼等は注意深くあらねばならぬ。彼等は此が爲めに種々なるカムフラージユを考案して居る。個人入閣の理論も其一。次官を受くるも大臣を受けさるも其一。春雨演說も其一。反對の法案は否決せずして握り潰すの慣例も亦カムフラージユの一である。然し乍ら、國民は此等の手段に欺かれてはならぬ。七千萬の國民が、多年の苦心にようやく一院に議員を送りつゝあるに拘らず、彼等は之と同等（又はそれ以上）の權力ある立法機關を僅々千家の團體を以て占領して居る事實を忘れてはならぬ。

世間往々、二院制度の理論を以て、貴族立法を辯護せんとする者がある。曰く、熟慮、堪久、愼重の要求の爲めに貴族院を要す。醉へる「フイリツプ」より醒めたる「フイリツプ」に訴ふるため 'To appeal from philip drunk to philip sober' に貴族院を要すと、然れども、是れ甚だ擬似混濟の說である。—なる程、下院の黨爭苛烈なるの極、遂に狂亂千丈、常規を逸する事なきにしもあらず。之が爲め冷靜、熟慮の機關が必要であるとも言へやう。しかし此冷靜熟慮の機關が、貴族を以て中心とするものでなければならぬといふ理屈は何處に在るか。第二院は必要で、あらう。第二院は貴族主義のものでなければならぬといふ事はない。

我國には憲法三十四條といふものがある。「貴族院は貴族院令の定むる所に依り皇族、華族、及び勅任せられたる議員を以て組織す」といふ。何如なる者を勅任するやは院令の規定に依るべく、又其數の割合も院令次第で如何樣にも規定せられる。現在の憲法の下に於ても其の運用次第で第二院の改革は自由である。況んや憲法自體の改正も時期が來れば實行せなければならぬ。此民族が二院制度を持續するとするも其構成方法は將來は變つて行かなければならぬ。

然らば、其の變更の方向は何れにあるか。恐らくは貴族主義、に替ふるに職能主義を以て進むのではなからうか。職能主義の第二院は、世界に於て未だ完成の域には達して居らぬ。獨逸に於ける經濟會議 Reichswirtschaftrat は此の方向に進む第一歩ではなからうか。「コール」の提案する「ギルド」職能會議も亦此方向に向ねつての一の暗示であらう。我國の多額議員は、農業工業商業の多額の能稅者より選ばしめて居る。之を許すならば同じく農業、商業、工業の勞働者の代表も亦第二院に列序せしむべき理由がある。貴族院の將來は此方針に向つて進むべきである。（五、六、五）

汎太平洋勞働會議の諸問題

堤　隆

一、汎太平洋協會と勞働會議

人種的國際的勞資關係の復雜と困難とに直面した太平洋沿岸の勞働組合當事者は、現狀打開の唯一方法が沿岸各地方勞働者の隔意なき理解と、組織ある提携に存することを知つて以來、切に太平洋勞働會議の開催を冀望し、種々劃策したが、其都度資本家側の巧妙なる妨害によつて果し得なかつたのに、幸に今回濠州勞働組合の提議が汎太平洋協會に容れられて、明年（一九二七年）米領布哇に太平洋勞働會議の開催が發表されたことは注目すべき一快事である。

從來汎太平洋協會は各種の國際的會合を主催したが、同協會の性質上協議の結果に對する實行能力が極めて薄弱であり、且主要議題を學術的方面に求めた關係上、國際的學術協會以外には太平洋社交倶樂部として意義があるだらうと嘲された位である。從つて本協會の名によつて開催される勞働會議の内容とその結果に對する考察と期待は、未だ世人の注意を惹いて居ないようであるが、太平洋勞働界の實情と主催者側の計劃は、所謂年中行事式の小田原評議たり得ないのである。

今試みに本年二月末汎太平洋協會常任幹事アレキサンダー・エチ・フォード氏の本會議に對する發表を見ると

明年十一月ホノルヽ市に於て濠州勞働組合が主催となり、太平洋に面する（カナダを含む）諸國の勞働大會を開く豫定である。

本會議には露西亞代表者數名參加、總出席者百餘名の豫定である。

本會議は太平洋上に開かれる最大の會議で相當の結果を齎すべく豫想される。

と、尚主催者たる濠州勞働組合の書記デー・エル・マックナマラ氏より同協會へ宛てた書狀には

本會議には太平洋沿岸諸國の勞働者代表、並びに諸組合代表

者を參加せしむ。

重要協議事項は勞働問題、輸出入問題及び軍事問題等とす。

本會議に於て太平洋勞働聯盟を組織し、今後毎年一回宛會議を開くことを期待する

と。以て本會議の大綱を窺ふ事が出來る。

二、太平洋沿岸諸國の勞働界現狀

太平洋沿岸の諸國では土地、資本、勞力の分布が極端にまで不平均で、勞資問題を獨立に考察することの出來るのは僅かに日本一ヶ國に過ぎない。大體に於て日、鮮、支、印等の亞細亞諸國は人口の夥多と、產業の未發達な現狀から移植民と外資輸入を餘儀なくされ、之に反して濠洲及び米大陸は尨大なる土地開拓の爲めに勞力を他に求めなくてはならない現狀にあり、合衆國は稍人口的調節を得たが、その有する大資本を國內に消化し盡せないから海外投資の必要に迫られている。而もこれ等各地方は人種に於て言語に於て國情に於て非常な差異があるから、勞働問題は直ちに人種問題となり、又國際問題となる。從つて現代資本主義時代に於ける太平洋沿岸の勞働者は當然遭遇すべき階級的不安の外に、人種的壓迫と國際的責務を一身に引受けて、二重三重の負擔に苦しまさるを得ない狀態である。之に反して太平洋上に於ける資本主義の爛熟は巧みにこの人種關係と國際狀態を利用して二重三重の搾取を敢てする。

例へば玆に或種の事業を經營せんとする資本家は、先づその事業に對して最も恰好しい人種を選定して比較的高給で雇傭し他人種勞働者の蔑視迫害を挑發して、所屬勞働者を孤立せしめる。……世人は往々米國に於ける排日騷ぎの責も勞働者の無智に歸するが、その裏面に直接間接動いて居る資本主義の黑手を看破する必要がある……斯くて事業の進捗に從つて必ず異人種を雇傭し、力めて所屬勞働者の團結を阻止し、少くとも十年間の泰平を持續する、そのうちに言語人情等が漸く相通じて徐々に團結の機運を見るや、常に新來移民を招致するか、或は移入計劃を發表して勞働者を脅威するのが常套手段である。

國家は國策として頻りに移民問題を論議しのてゐるが、太平洋岸に日本を除いて果してその國策を責任以て實行し得る國家があるだらうか、人は米國の移入民國を嚴正だと言ふが船便毎に猶の目の如く變る實情と、米領土內からの轉航狀態を知る者は、唯々日本の正直な態度に對して敬意を表するばかりだらう。

更に移民招致よりも數十倍容易にして且有利な方法は、資本を攜帶して勞力の豐富低廉な所に企業することである。支那に

於ける各國の投資、比律賓に於ける米國資本家の事業、印度に於ける英國の資本等が如何に有利に開展しつゝあるかは絮説の必要がない。

斯く人種國際的勞働問題の渦中にある太平洋諸國に對して、日本は極めて少數の鮮人勞働者の移入あるのみで、直接此の種會議の必要に迫られて居ないやうであるが、移民問題が現下の重要事項であり、且幾十萬の同胞勞働者が米領土内に苦鬪を續け、近く支那に於て頻發する勞資爭議、且は資本主義米國と勞農露西亞の代表が太平洋上に協議せんとする本會議に對して、袖手傍觀することは出來まい。

三、國際勞働會議と太平洋會議

勞働問題の國際議場としては、既に歐洲で幾多の會合が催され、特に大戰以後國際聯盟の勞働會議が年々開催されているので、強いて太平洋會議を開く必要もなく、寧ろ關係各地から然るべき代表者を出して太平洋部會でも設けようとの意嚮もあつたが。種々の點に於て此の主張は實行され得ない狀態にある。

即ち歐洲に於て開かれた種々のインタナショナル會議は、大體に於て社會主義的思想を先行條件としているに對して、太平洋上には未だ思想上の錯綜がない。勿論各地方の首領は個人的に種々の思想を懐いては居るが、米濠二國は組合主義に於て終始し、其他の地方はまだ勞働者の團結すら半途にあるような實情で當事者は思想問題よりも實際の處理に忙殺されている。從つて歐洲に於ける社會主義的インターナショナルに此の實際を提議して、幾何の結果を齎らすかに就て躊躇したのである。

次に國際聯盟の勞働會議に對しては、同會議が國家を單位とし、各國の政府、資本家、勞働者三方面の代表を以て成立しつつある現狀上、日、米、濠、等の國家組織地方は參加して相當の結果を得ても、勞資各々國籍を異にする大部分の太平洋諸國は、唯出席したといふに止つて得る所の餘りに少ない事を虞れたのである。

歐洲に於ける各種の國際會議は、自國を基礎とし、自國を通じた理論的想像的のインターナショナルであるが、太平洋上では現實そのものがインターレシアルである。彼に於ては如何にして國際的に聯絡すべきかゞ問題であるが、是には人種國際的の現狀を如何に處理すべきかゞ問題である。理論よりも主義よりも事實の解決を急いで居るのである。折角十年の苦鬪で購ひ得た勞働者の生活が、一朝にして新移民の爲めに蹂躪され、半歳の罷工も移民船の入港によつて資本家の嘲笑に終る事實をどうしようかと言ふのである。此の點に於

者を參加せしむ。

重要協議事項は勞働問題、輸出入問題及び軍事問題等とす。

本會議に於て太平洋勞働聯盟を組織し、今後毎年一回宛會議を開くことを期待する

と。以て本會議の大綱を窺ふ事が出來る。

二、太平洋沿岸諸國の勞働界現狀

太平洋沿岸の諸國では土地、資本、勞力の分布が極端にまで不平均で、勞資問題を獨立に考察することの出來るのは僅かに日本一ヶ國に過ぎない。大體に於て日、鮮、支、印等の亞細亞諸國は人口の夥多と、産業の未發達な現狀から移植民と外資輸入を餘儀なくされ、之に反して濠洲及び米大陸は尨大なる土地開拓の爲めに勞力を他に求めなくてはならない現狀にあり、合衆國は稍人口的調節を得たが、その有する大資本を國内に消化し盡せないから海外投資の必要に迫られている。而もこれ等各地方は人種に於て言語に於て國情に於て非常な差異があるから、勞働問題は直ちに人種問題となり、又國際問題となる。從つて現代資本主義時代に於ける太平洋沿岸の勞働者は當然遭遇すべき階級的不安の外に、人種的壓迫と國際的責務を一身に引受けて、二重三重の負擔に苦しまさるを得ない狀態である。之に反して太平洋上に於ける資本主義の爛熟は巧みにこの人種關係と國際狀態を利用して二重三重の搾取を敢てする。

例へば茲に或種の事業を經營せんとする資本家は、先づその事業に對して最も恰好しい人種を選定して比較的高給で雇傭し他人種勞働者の嫉視迫害を挑發して、所屬勞働者を孤立せしめる。……世人は往々米國に於ける排日騷ぎの責も勞働者の無智に歸するが、その裏面に直接間接動いて居る資本主義の黑手を看破する必要がある……斯くて事業の進捗に從つて必ず異人種を雇傭し、力めて所屬勞働者の團結を阻止し、少くとも十年間の泰平を持續する、そのうちに言語人情等が漸く相通じて徐々に團結の機運を見るや、常に新來移民を招致するか、或は移入計劃を發表して勞働者を脅威するのが常套手段である。

國家は國策として頻りに移民問題を論議しのてゐるが、太平洋岸に日本を除いて果してその國策を責任以て實行し得る國家があるだらうか、人は米國の移入民國を嚴正だと言ふが船便毎に猫の目の如く變る實情と、米領土内からの轉航狀態を知る者は、唯々日本の正直な態度に對して敬意を表するばかりだらう。

更に移民招致よりも數十倍容易にして且有利な方法は、資本を携帶して勞力の豐富低廉な所に企業することである。支那に

於ける各國の投資、比律賓に於ける米國資本家の事業、印度に於ける英國の資本等が如何に有利に開展しつゝあるかは絮説の必要がない。

斯く人種國際的勞働問題の渦中にある太平洋諸國に對して、日本は極めて少數の鮮人勞働者の移入あるのみで、直接此の種會議の必要に迫られて居ないやうであるが、移民問題が現下の重要事項であり、且幾十萬の同胞勞働者が米領土内に苦闘を續け、近く支那に於て頻發する勞資爭議、且は資本主義米國と勞農露西亞の代表が太平洋上に協議せんとする本會議に對して、袖手傍觀することは出來まい。

三、國際勞働會議と太平洋會議

勞働問題の國際議場としては、既に歐洲で幾多の會合が催され、特に大戰以後國際聯盟の勞働會議が年々開催されているので、強いて太平洋會議を開く必要もなく、寧ろ關係各地から然るべき代表者を出して太平洋部會でも設けようとの意嚮もあつたが。種々の點に於て此の主張は實行され得ない狀態にある。

即ち歐洲に於て開かれた種々のインターナショナル會議は、大體に於て社會主義的思想を先行條件としているに對して、太平洋上には未だ思想上の錯綜がない。勿論各地方の首領は個人的に種々の思想を懷いては居るが、米濠二國は組合主義に於て終始し、其他の地方はまだ勞働者の團結すら半途にあるような實情で當事者は思想問題よりも實際の處理に忙殺されている。從つて歐洲に於ける社會主義的インターナショナルに此の實際を提議して、幾何の結果を齎らすかに就て躊躇したのである。

次に國際聯盟の勞働會議に對しては、同會議が國家を單位とし、各國の政府、資本家、勞働者三方面の代表を以て成立しつつある現狀上、日、米、濠、等の國家組織地方は參加して相當の結果を得ても、勞資各々國籍を異にする大部分の太平洋諸國は、唯出席したといふに止つて得る所の餘りに少ない事を虞れたのである。

歐洲に於ける各種の國際會議は、自國を基礎とし、自國を通じた理論的想像的のインターナショナルであるが、太平洋上では現實そのものがインターナショナルでインターレーシアルである。彼に於ては如何にして國際的に聯絡すべきかゞ問題であるが、是には人種國際的の現狀を如何に處理すべきかゞ問題である。理論よりも主義よりも事實の解決を急いで居るのである。折角十年の苦闘で贏ひ得た勞働者の生活が、一朝にして新移民の爲めに蹂躙され、半歳の罷工も移民船の入港によつて資本家の嘲笑に終る事實をどうしようかと言ふのである。此の點に於

て歐洲の諸會議が理論的に進行するに對して、今次の太平洋會議が實際的に終始することは豫想される。

四、勞働問題と移民問題

汎太平洋會議は一九二五年度に於て、特に人種移民問題を協議したばかりでなく、この問題は日米兩國に特殊の感じを與へる點に於て、勞働會議の主要議題とすることは躊躇されるだらう。而し事實に於て太平洋岸の勞働問題は移民問題を離れて論ずることが出來ないから勢い本問題に觸れなくてはならない。

移民問題を主義の上から論じ、人口論上から議する事は容易であり、且日米間の現狀に鑑みて日本國家の立場から論議することも左程困難ではない。而し太平洋上の勞働問題に則して之を考へる時は難中の至難事である。

恐らく本問題に對して最も自由に且大膽な議論をなし得る者はロシア代表だらう。而し資本主義全盛の太平洋に勞農ロシアの所說は到底首肯され得べくもないから或は「各國々際條約の現狀に於て」といふ制限が最初に前提されるかも知れない。而し資本家が常に新移民の招致を以て國內勞働者を脅威しつゝある事實に徵して、現行國際條約の承認は斯く單純に行はれ得べくもない。加之太平洋岸にはその居住國家に對して一票の權利をすら保有せず、且殆んど永久に保有し得ない狀態にあるものが多數ある。彼等は國家の名によつて締結される條約や、國家によつて行はれる國策に如何なる態度を持するか、彼等の求めつゝある移民問題の解決、之れは彼等が移民としての經驗と生活を有して居るだけに、從來の主張や論議よりも一層切實なものである。

移民問題に關する米濠勞働界の態度は既に明瞭である。彼等は斷乎として新來移民を排斥することがその地位を確保し向上せしめる所以であるから、現在の資本主義が倒壞されない以上この態度を變せないだらう。之に對して人口夥多の現狀にある日本勞働界の態度や如何？ 若し自由移民主義に徹底する時は移出よりも數倍容易なる鮮支勞働者の流入を如何にすべきか、さればとて閉鎖主義を固執せんか年々增加する人口問題を如何にすべきか、他に對して門戶の開放を迫り、自ら門を閉づるの態度が許さるべきであるか、太平洋勞働會議が理論よりも事實、主張よりも實際を協議せんとするに際し、我が國勞働界の移民問題に對する確說は必要にして且主要なものであらう。

五、非市民勞働者問題

婦人勞働者及び少年就働問題に就ては各國とも相當の注意を

動つているが、非市民勞働者に對する考慮は未だ一般的でないようである。所が太平洋勞働會議に於ては必ずこの問題が討議されるだらう。それは太平洋勞働界が移民によつて支持されつゝある現狀と、米、英、日、各國の資本が海外に投ぜられつゝある事實からの當然の歸結である。

移民初期の時代に於ては言語の相違と熟練の程度によつて、非市民勞働者の問題は比較的簡單に解決されるが、既に長きは半世紀、短かきも數年の時日を經過した現在に於ては、市民非市民の勞働界に於ける差別待遇は斯く單純なものではない。

日本の過去に於ては制限選擧制度の下に、殆んど凡ての無産階級が政治的に無關係な狀態に置かれたのと、維新以前の社會的習慣があつたので、勞働者と市民權の關係は皆無の有樣であり、曾々鮮人勞働者等が入國しても極めて自然的な人種的言語的疎隔と、雇傭者側の提供する勞働條件の差異位に止つたが、將來普通選擧制度の實施並にその擴張に伴つて必然的に、市民非市民勞働者の區別が明瞭になり、之が人種問題と錯綜して、勞働界に相當の波瀾を起すことは想像に難くない。

太平洋諸國に於ける排東洋人問題が、常に勞働界から起るのは、人種的親疎の感と既存勞働狀態の混亂にも基因するが、實は國家社會的生活に於ける協同の不可能、即ち市民たり得ないといふことが一大原因をなすものである。太西洋岸の米國各地は今尚多種多様の人種を混淆し、その間の人種的感情が常に融和狀態であるとは言ひ得ないのに、甚だしい人種的問題を見ないのは、等しく彼等が市民たり得る所以で、太平洋沿岸の米國に愈々益々人種問題が複雜化しつゝあるのは、東洋人に市民權を得る望みがないからである。

移民の人種的生活的差異は當然の事柄で、常に新入國者を迎えている太平洋岸では別に珍らしい出來事ではない、而し若し新來者が永久に過去の生活樣式を固執すると思へば、資本家に對しては非常に望ましい事であるだけ、勞働者に取つては耐え切れない苦痛である。資本家は所屬勞働者に對して自己の欲する教育を施すことが出來ようが、勞働者は同僚新來者に對して何等の影響を及ぼす事が出來ない。然らば市民教育即ち市民たらしめることのみが、新來者を同化し、勞働者として提携する唯一の方法である。而しこれすら出來ないとすれば最早提携協同の時機は殆んど絶望である。又新入國者に於ても市民たり得ないならば、寧ろ資本家に隷屬する方が安泰であると思ふのは當然である。從つて市民非市民勞働者の排擠は階級意識を超越するのも止むを得ない必然である。

人種問題に同化を云爲するのは口實である。苟くもその國に

て歐洲の諸會議が理論的に進行するに對して、今次の太平洋會議が實際的に終始することは豫想される。

四、勞働問題と移民問題

汎太平洋會議は一九二五年度に於て、特に人種移民問題を協議したばかりでなく、この問題は日米兩國に特殊の感じを與へる點に於て、勞働會議の主要議題とすることは躊躇されるだらう。而し事實に於て太平洋岸の勞働問題は移民問題を離れて論ずることが出來ないから勢い本問題に觸れなくてはならない。

移民問題を主義の上から論じ、人口論上から議する事は容易であり、且日米間の現狀に鑑みて日本國家の立場から論議することも左程困難ではない。而し太平洋上の勞働問題に則して之を考へる時は難中の至難事である。

恐らく本問題に對して最も自由に且大膽な議論をなし得る者はロシア代表だらう。而し資本主義全盛の太平洋に勞農ロシアの所說は到底首肯され得べくもないから或は「各國々際條約の現狀に於て」といふ制限が最初に前提されるかも知れない。而し資本家が常に新移民の招致を以て國內勞働者を脅威しつゝある事實に徵して、現行國際條約の承認は斯く單純に行はれ得べくもない。加之太平洋岸にはその居住國家に對して一票の權利をすら保有せず、且殆んど永久に保有し得ない狀態にあるものが多數ある。彼等は國家の名によつて締結される條約や、國家によつて行はれる國策に如何なる態度を持するか、彼等の求めつゝある移民問題の解決、之れは彼等が移民としての經驗と生活を有して居るだけに、從來の主張や論議よりも一層切實なものである。

移民問題に關する米濠勞働界の態度は既に明瞭である。彼等は斷乎として新來移民を排斥することがその地位を確保し向上せしめる所以であるから、現在の資本主義が倒壞されない以上この態度を變ぜないだらう。之に對して人口夥多の現狀にある日本勞働界の態度や如何？ 若し自由移民主義に徹底する時は移出よりも數倍容易なる鮮支勞働者の流入を如何にすべきか、さればとて閉鎖主義を固執せんか年々增加する人口問題を如何にすべきか、他に對して門戶の開放を迫り、自ら門を閉づるの態度が許さるべきであるか、太平洋勞働會議が理論よりも事實、主張よりも實際を協議せんとするに際し、我が國勞働界の移民問題に對する確說は必要にして且主要なものであらう。

五、非市民勞働者問題

婦人勞働者及び少年就働問題に就ては各國とも相當の注意を

持つているが、非市民勞働者に對する考慮は未だ一般的でないようである。所が太平洋勞働會議に於ては必ずこの問題が討議されるだらう。それは太平洋勞働界が移民によつて支持されつゝある現狀と、米、英、日、各國の資本が海外に投ぜられつゝある事實からの當然の歸結である。

移民初期の時代に於ては言語の相違と熟練の程度によつて、非市民勞働者の問題は比較的簡單に解決されるが、既に長きは半世紀、短かきも數年の時日を經過した現在に於ては、市民非市民の勞働界に於ける差別待遇は斯く單純なものではない。

日本の過去に於ては制限選擧制度の下に、殆んど凡ての無產階級が政治的に無關係な狀態に置かれたのと、維新以前の社會的習慣があつたので、勞働者と市民權の關係は皆無の有樣であり、偶々鮮人勞働者等が入國しても極めて自然的な人種的言語的疎隔と、雇傭者側の提供する勞働條件の差異位に止つたが、將來普通選擧制度の實施並にその擴張に伴つて必然的に、市民非市民勞働者の區別が明瞭になり、之が人種問題と錯綜して、勞働界に相當の波瀾を起すことは想像に難くない。

太平洋諸國に於ける排東洋人問題が、常に勞働界から起るのは、人種的親疎の感と既存勞働狀態の混亂にも基因するが、實は國家社會的生活に於ける協同の不可能、即ち市民たり得ないといふことが一大原因をなすものである。太西洋岸の米國各地は今尙多種多樣の人種を混淆し、その間の人種的感情が常に融和狀態であるとは言ひ得ないのに、甚だしい人種的問題を見ないのは、等しく彼等が市民たり得る所以で、太平洋沿岸の米國に愈々益々人種問題が複雜化しつゝあるのは、東洋人に市民權を得る望みがないからである。

移民の人種的生活的差異は當然の事柄で、常に新入國者を迎えている太平洋岸では別に珍らしい出來事ではない、而し若し新來者が永久に過去の生活樣式を固執すると思へば、資本家に對しては非常に望ましい事であるだけ、勞働者に取つては耐え切れない苦痛である。資本家は所屬勞働者に對して自己の欲する教育を施すことが出來ようが、勞働者は同僚新來者に對して何等の影響を及ぼす事が出來ない。然らば市民教育即ち市民たらしめることのみが、新來者を同化し、勞働者として提携する唯一の方法である。而しこれすら出來ないとすれば最早提携協同の時機は殆んど絕望である。又新入國者に於ても市民たり得ないならば、寧ろ資本家に隸屬する方が安泰であると思ふのは當然である。從つて市民非市民勞働者の排擠は階級意識を超越するのも止むを得ない必然である。

人種問題に同化を云爲するいは口實である。苟くもその國有

に生活する住民に共同責任を望むならば、市民としての待遇をなすべきである。その一例として彼の大戰當時の米國では凡ての住民男子を登錄し、喜んで非市民兵士を入營せしめ、勞働界に於ても市民非市民の區別を置かなかつた。これは我々移住民に取つては隨分迷惑な事ではあつたが、而し在米幾年中最も落ついた氣分と、心から米國及び米國人に親しい感じのあつたのはあの當時であつた。實際戰後東洋人從軍者の市民權を認めた時分には英語の一字一語に同じ血が通ふような思ひがし、完全に社會の一員たるの自覺と愉快とがあつた、其後日米間に種々の問題が起つたが、實を言へば例の移民制限の排日立法よりも、從軍者の市民權否認に次で米國生れの東洋人子弟に對する市民權許否問題が吾々の期待を裏切り、若しこの問題にして排日者流の意の儘となれば、絕對に非協調の態度に出でざるを得ないといふのが、僞らぬ現在の告白である。

日、米、濠、等有力な國家に、完全な市民權を有する勞働者は恐らく

「移民問題や市民權は別として、同じ勞働圈内に居住する無產階級は提携して行かう」

と言ふだらう。又事實に於て提携もし協調もして行くが、若し市民勞働者にして自己の既得權に固執して、この差別撤廢を承認しないような態度を示したら全勞働者の精神的融和は困難である。

太平洋勞働者は今更に先天的不可抗的な人種問題に執着せないだらう、而し優に議會を支配し得るの實勢力を有する同僚市民勞働者に對して、居住國の市民權問題を提議することの當然にして合理的なるを信じて居る。而もこの問題は太平洋岸凡てに共通するので米國に於ける同胞の市民權獲得は、直ちに日本に於ける鮮人勞働者の選擧權問題である事を覺悟しなければならぬ。

世人は往々移民及び市民權に關する事項を國際的政治的問題として、勞働問題の圈外に置かうとするが、太平洋沿岸の各地に於ては本問題を離れて勞働狀態を論じ得ないのが實際であり、又普通勞働問題として論議される就働時間制や待遇改善の内外表裏に常にこの問題がつきまとつていることが、特に太平洋勞働會議を開催する所以である。

六、農業勞働者問題

太平洋勞働會議の主要議題は農業問題である。日、支、印、方面からは工場勞働問題も提議されるだらうが、米、濠、兩大陸を始め布、比、鮮、各地方は農場に於ける種々の提案をする

に相違ない。大體に於て大農組織の農場問題であるから、日本の集團組織とは共通せない點もあらうが、太平洋沿岸に於ける農業勞働者として日本人は一大主要勢力であり、且小作制度等も相當實施されつゝあるから、此の方面に於ける日本側の意見は權威あるものとして傾聽されるだらう、之れと同時に農民組合として自作農問題、農業資金問題、農具改良、野外勞働時間、小作、受負、農業雇傭者婦人小兒就働等の諸方面には具體的結果を豫想することが出來る。特に開催地布哇には米濠の牧場及び大農組織を始め、太平洋沿岸各國の農園勞働者が種々の小企業を試み、各々自國の樣式によつて多種多樣の生產をしてゐるから、各代表は自國農園の見本を提示したと同樣で、實地に臨んでの研究協議も出來るだらう。

工場勞働に關しては日本、支那、印度方面から紡績其他に關係した多數の工場勞働代表が集まればだが、太平洋產業の現狀上歐洲の諸會議に比して特殊の結果を望む事は出來ない、唯外國資本或は異人種經營の諸事業に於ける勞働問題に就ては、太平洋特殊の色彩を見出すことが出來るだらう。

七、貿易及び軍事問題

太平洋沿岸の勞働者は生產消費の兩方面に於て輸出入を離れることが出來ない、所が沿岸各國は僅かに上海の自由港を除いて凡てが保護貿易制度に傾いている。この事は勞働者生活に於て二重の負擔となるので、生產上に與へられる保護は資本家の獨占となつて勞働者に及ぶ所は極めて薄く、斯くして供給せられる內地品は高價であり、且移民の當然として母國に仰ぐ多くの生活用品は關稅の爲めに高騰する。加之太平洋資本主義の專制は一大國際ツラストの現狀を呈しているから、何等かの打開策を講じない限り、彼等の生活は經濟的に行詰らざるを得ない。これ輸出入問題を本會議の主要議題とした所以である。

軍事問題に關しては、世界の三大强國の日英米の軍備が最近太平洋に集中されつゝある現狀に對して、關係列國民の大多數を代表する勞働會議が協議の步を進めることは當然である。加之太平洋の軍備問題は往々純なる國防的見地から研究されないで、一種の地方繁榮策に利用され、資本主義に乘ずる機會を與へるからである。

太平洋の國防問題に對して、直接深甚な理解を持ち注意を拂い得るのは、日本のみで、英本國は遙かに歐洲に偏在して太平洋を見る機會もなく、米國も又全國家としての利害は斯く緊急でない、然るに英米二國が頻りに又火急に太平洋軍備の擴充に腐心するのは議會心理を利用した一種の地方策と、一部政治家

に生活する住民に共同責任を望むならば、市民としての待遇をなすべきである。その一例として彼の大戰當時の米國では凡ての住民男子を登錄し、喜んで非市民兵士を入營せしめ、勞働界に於ても市民非市民の區別を置かなかつた。これは我々移住民に取つては隨分迷惑な事ではあつたが、而し在米幾年中最も落ついた氣分と、心から米國及び米國人に親しい感じのあつたのはあの當時であつた。實際戰後東洋人從軍者の市民權を認めた時分には英語の一字一語に同じ血が通ふような思ひがし、完全に社會の一員たるの自覺と愉快とがあつた、其後日米間に種々の問題が起つたが、實を言へば例の移民制限の排日立法よりも、從軍者の市民權否認に次で米國生れの東洋人子弟に對する市民權許否問題が吾々の期待を裏切り、若しこの問題にして排日者流の意の儘となれば、絕對に非協調の態度に出でざるを得ないといふのが、僞らぬ現在の告白である。

日、米、濠、等有力な國家に、完全な市民權を有する勞働者は恐らく

「移民問題や市民權は別として、同じ勞働圈内に居住する無産階級は提携して行かう」

と言ふだらう。又事實に於て提携もし協調もして行くが、若し市民勞働者にして自己の既得權に固執して、この差別撤廢を承認しないような態度を示したら全勞働者の精神的融和は困難である。

太平洋勞働者は今更に先天的不可抗的な人種問題に執着せないだらう、而し優に議會を支配し得るの實勢力を有する同僚市民勞働者に對して、居住國の市民權問題を提議することの當然にして合理的なるを信じて居る。而もこの問題は太平洋岸凡てに共通するので米國に於ける同胞の市民權獲得は、直ちに日本に於ける鮮人勞働者の選擧權問題である事を覺悟しなければならぬ。

世人は往々移民及び市民權に關する事項を國際的政治的問題として、勞働問題の圏外に置かうとするが、太平洋沿岸の各地に於ては本問題を離れて勞働狀態を論じ得ないのが實際であり、又普通勞働問題として論議される就働時間制や待遇改善の内外表裏に常にこの問題がつきまとつていることが、特に太平洋勞働會議を開催する所以である。

六、農業勞働者問題

太平洋勞働會議の主要議題は農業問題である。日、支、印、方面からは工場勞働問題も提議されるだらうが、米、濠、兩大陸を始め布、比、鮮、各地方は農場に於ける種々の提案をする

に相違ない。大體に於て大農組織の農業問題であるから、日本の集團組織とは共通せない點もあらうが、太平洋沿岸に於ける農業勞働者として日本人は一大主要勢力であり、且小作制度等も相當實施されつゝあるから、此の方面に於ける日本側の意見は權威あるものとして傾聽されるだらう。之れと同時に農民組合として自作農問題、農業資金問題、農具改良、野外勞働時間、小作、受負、農業雇傭者婦人小兒就働等の諸方面には具體的結果を豫想することが出來る。特に開催地布哇には米濠の牧場及び大農組織を始め、太平洋沿岸各國の農園勞働者が種々の小企業を試み、各々自國の樣式によつて多種多樣の生産をしてゐるから、各代表は自國農園の見本を提示したと同樣で、實地に臨んでの研究協議も出來るだらう。

工場勞働に關しては日本、支那、印度方面から紡績其他に關係した多數の工場勞働代表が集まればだが、太平洋產業の現狀上歐洲の諸會議に比して特殊の結果を望む事は出來ない、唯外國資本或は異人種經營の諸事業に於ける勞働問題に就ては、太平洋特殊の色彩を見出すことが出來るだらう。

七、貿易及び軍事問題

太平洋沿岸の勞働者は生產消費の兩方面に於て輸出入を離れることが出來ない、所が沿岸各國は僅かに英國の自由商業を除いて凡てが保護貿易制度に傾いている。この事は勞働者生活に於て一項の負擔となるので、生產上に與へられる保護は資本家の獨占となつて勞働者に及ぶ所は極めて薄く、斯くして供給せられる内地品は高價であり、且移民の當然として母國に仰ぐ多くの生活用品は關稅の爲めに高騰する。加之太平洋資本主義の専制は一大國際ツラストの現狀を呈しているから、何等かの打開策を講じない限り、彼等の生活は經濟的に行詰らざるを得ない。これ輸出入問題を本會議の主要議題とした所以である。

軍事問題に關しては、世界の三大强國の日英米の軍備が最近太平洋に集中されつゝある現狀に對して、關係列國民の大多數を代表する勞働會議が協議の步を進めることは當然である。加之太平洋の軍備問題は往々純なる國防的見地から研究されないで、一種の地方繁榮策に利用され、資本主義に乘ずる機會を與へるからである。

太平洋の國防問題に對して、直接深甚な理解を持ち注意を拂い得るのは、日本のみで、英本國は遥かに歐洲に偏在して太平洋を見る機會もなく、米國も又全國家としての利害は斯く緊急でない、然るに英米二國が頻りに又火急に太平洋軍備の擴充に腐心するのは議會心理を利用した一種の地方策と、一部政治

の野心に基く所が多い。而も政治家の野心は資本主義と進退を同じくする點に於て沿岸各國が同一の狀態にあるから、現在の軍備そのものはよし彼等のいふ如く國防上の必要程度であつても、何時如何なる變化を來すかも計られない。これ野心なき勞働者が眞面目に本問題を協議する所以である。

太平洋諸國の當事者は手に砲門を磨き乍ら口を極めて平和を叫んで居る。而し彼等の爲す所を直視している正直な勞働者は、もう平和や人道の聲を信じないだらう。海の兩岸に武裝嚴し幾百の砲門、其處には彼等の捧げた黃金と勞力とが燦然と光つているが、一度戰禍の襲來する時、其處には同僚の血と肉が犧牲とされ、異域に苦鬪幾十年漸く築き上げた自分達の生活は跡方もなく破壞されてしまふ。而も斯うして齎した戰ひの結果はより辛辣な資本主義の搾指のみ、華府で開かれた軍備縮小會議には老朽艦の犧牲が問題であつたが、今次の軍事協議は生命の犧牲を問題とするのである。

八、太平洋勞働聯盟

土地、資本、勞力の分布が極端にまで偏している太平洋沿岸の各地に於ては、當然にその相互補充をせなくてはならない、富裕にして自由な資本家は凡ゆる機會を利用して生産利得を專有している。之に反して國籍、言語、人種を異にする勞働者は、何等の聯絡統一がないばかりでなく、寧ろ相互に排擠して知らず凡てが窮地に陥つて居る現狀である。斯くの如くんば太平洋の勞働界は如何に一地方に於て努力するも到底向上進步の見込がないから、沿岸各地の勞働者が相互に聯絡提携して、太平洋を資本主義の專制から獨立せしめなくてはならない。

過般の歐洲大戰は一面にロシヤを産み、他面米國に帝國主義を植付け、折角東西文明の融合地として、又新文明の發祥地として永久に平和の波をたゝえて太平洋に不安の渦を卷起さうとする其處に資本主義專制の魔の手が軍備をかざして脅威を恣にする。

斯くの如き現狀に對して、太平洋岸に居住する多數の勞働者は、理解と團結を鍵として自己の生活を開拓し、國際間の平和を確保せんがために、此の機會に於て太平洋勞働聯盟を組織したいといふのが、人種國際的混亂の渦中に時代苦を體驗しつゝある勞働者の眞摯な叫びである。

彼等は人種的國家的抗爭が、精神的にも物質的にも何等の幸福を齎らさない事を知悉している。

彼等は理論的主義的疎隔が、遂に資本主義の乘ずる機會となることを幾度か經驗した。

彼等は急進的な自己飛躍よりも、理解と提携に基いた共同漸進が、確實にして且意義あることを信じて居る。

彼等は太平洋勞働界が世界の大勢に比して、遙かに後れてゐることを疑はない。然し必ずしも先進の模倣ばかりが勞働運動の道程であるとは思つて居ない。此の點に於て太平洋勞働聯盟は獨特の進路を開拓するかも知れぬ。

兎も角永年彼等が冀望して居つた。人種國際的勞働會議の開催期日が發表され、聯盟組織まで期待されつゝある事は、彼等に取つての一大喜悅であると同時に、關係諸國、特に當然本會議の主要位置を占むべく、又既に國際勞働會議に參加しつゝある我が國に、人種的勞働問題考慮の一機會を與へたものであらう。

の野心に基く所が多い。而も政治家の野心は資本主義と進退を同じくする點に於て沿岸各國が同一の狀態にあるから、現在の軍備そのものはよし彼等のいふ如く國防上の必要程度であつても、何時如何なる變化を來すかも計られない。これ野心なき勞働者が眞面目に本問題を協議する所以である。

太平洋諸國の當事者は手に砲門を磨き乍ら口を極めて平和を叫んで居る。而し彼等の爲す所を直視している正直な勞働者は、もう平和や人道の聲を信じないだらう。海の兩岸に武裝嚴し幾百の砲門、其處には彼等の捧げた黃金と勞力とが燦然と光つているが、一度戰禍の襲來する時、其處には同僚の血と肉が犧牲とされ、異域に苦鬪幾十年漸く築き上げた自分達の生活は跡方もなく破壞されてしまふ。而も斯うして齎した戰ひの結果はより辛辣な資本主義の搾搾のみ、華府で開かれた軍備縮小會議には老朽艦の犧牲が問題であつたが、今次の軍事協議は生命の犧牲を問題とするのである。

八、太平洋勞働聯盟

土地、資本、勞力の分布が極端にまで偏している太平洋沿岸の各地に於ては、當然にその相互補充をせなくてはならない、富裕にして自由な資本家は凡ゆる機會を利用して生產利得を專有している。之に反して國籍、言語、人種を異にする勞働者は、何等の聯絡統一がないばかりでなく、寧ろ相互に排擠して知らず凡てが窮地に陷つて居る現狀である。斯くの如くんば太平洋の勞働界は如何に一地方に於て努力するも到底向上進步の見込がないから、沿岸各地の勞働者が相互に聯絡提携して、太平洋を資本主義の專制から獨立せしめなくてはならない。

這般の歐洲大戰は一面にロシヤを産み、他面米國に帝國主義を植付け、折角東西文明の融合地として、又新文明の發祥地として永久に平和の波をたゝえて太平洋に不安の渦を卷起さうとする其處に資本主義專制の魔の手が軍備をかざして脅威を恣にする。

斯くの如き現狀に對して、太平洋岸に居住する多數の勞働者は、理解と團結を鍵として自己の生活を開拓し、國際間の平和を確保せんがために、此の機會に於て太平洋勞働聯盟を組織したいといふのが、人種國際的混亂の渦中に時代苦を體驗しつゝある勞働者の眞摯な叫びである。

彼等は人種的國家的抗爭が、精神的にも物質的にも何等の幸福を齎らさない事を知悉している。

彼等は理論的主義的疎隔が、遂に資本主義の乘ずる機會となることを幾度か經驗した。

彼等は急進的な自己飛躍よりも、理解と提携に基いた共同漸進が、確實にして且意義あることを信じて居る。

彼等は太平洋勞働界が世界の大勢に比して、遙かに後れてゐることを疑はない。然し必ずしも先進の模倣ばかりが勞働運動の道程であるとは思つて居ない。此の點に於て太平洋勞働聯盟は獨特の進路を開拓するかも知れぬ。

兎も角永年彼等が冀望して居つた。人種國際的勞働會議の開催期日が發表され、聯盟組織まで期待されつゝある事は、彼等に取つての一大喜悅であると同時に、關係諸國、特に當然本會議の主要位置を占むべく、又既に國際勞働會議に參加しつゝある我が國に、人種的勞働問題考慮の一機會を與へたものであらう。

文相の思想暴壓

山川均

□

かつて五十一議會において、政府反對黨の一代議士が『思想問題に關する緊急質問』なるものをしたことがある。岡田文相はさきに高等學校における學生の社會科學研究會に解散を命じて、『徹底的思想の善導』につとめたのは天晴れの手柄であるが、何故にもつと危險な大學内の學生の研究團體を禁止しないのか、いなそれよりももつと危險な各大學内にある『非常に多數に上ぼる』『共產主義教授』、大學内に潜在するこれ等の『不良教授』を何故に徹底的に處分しないのか……これが某代議士の質問の要旨であつた。そして某代議士は、もし文相にこれをやつて除ける意志がないならば、自分は『一身を賭して』自分でやつてのけるといふ、恐るべき決心のほどを聲明したのである。（尤もその後、多數の共產主義教授が處分せられた談もきかぬし、某代議士が一身を賭した噂も耳にせぬ）。

この國士的慷慨演說は、『質問』としてよりもむしろ『答案』として一層價値あるものと思はれた。即ちブルジョア議會に送られてゐる代議士といふものゝ智能の程度をはかるメンタルテストとして見れば、これほどよくその目的を達したものはない。某代議士が『徹底的の處分』を迫つた『不良教授』のブラックリストには、吉野作造博士、森本厚吉博士、高田保馬博士などゝいふお歷々の『共產主義教授』——恐らくは極左翼共產主義！——の芳名がづらりとならんでゐた。たしかに『非常に多數』である。レーニンとは何か？　毒藥の名前である。これは或る時の常識試驗に答へた一警官の答へであるが、ひとり警官ばかりでなく、かうした答案ができるようでなければ、今日、××機關に携はる資格はない。

當時多くの人々は、某代議士の『緊急質問』に、恐らくこれ

以上の意義を認めなかつたにちがひない。しかし支配者は、多くの場合に、支配せられる者よりも賢明である。多くの人々が某代議士の愚を笑つてゐる時に、支配者は、支配せられる者の愚を笑つてゐたのである。

當時、某代議士にこつそり質問演說の材料を渡したものは、誰あらう反對黨政府の×××であつた。かうして反對黨の議席から、今にも日本全國の大學から×××火の手が揚がるかのように警鐘を亂打させ、文相の思想取締りの手ぬるさを攻擊させ、文相にしてこの際徹底的な手段を取らぬなら、自ら一身を賭してこの問題の解決に當るなど〻大見榮を切らせておき、そのあとへ當の岡田文相が登場して事實その通り、御說御尤も、同感至極、ついては議會に代表せられた國民の輿論に從ひ、もつと手酷どく學問の獨立と思想の自由を××いたしませうといふことになつた。これは見え透いた芝居であるが、芝居はしば〱人をして眞實に泣かしめ笑はしめる。この猿芝居に近い芝居によつて、政府がこれから取らんとしてゐた反動政策を裏づける有力な反動的な雰圍氣が、みごとに釀成されたのであつた。

□

岡田文相はかねて學生の左傾思想を嚴重に警戒しつ〻あるが、第五十一議會における上下兩院で、文相の取締なほ不充分といふ聲があつたので、文相は最近、さらに取締を一層きびしくすることを決意し、八日の高等學校長會議に臨んで……と嚴重な訓示を與へた』。新聞は正直に、政府の發表のま〻を斯う傳へてゐる。上下兩院で要求の聲があがつたから、文相は最近、かう決意したのである！先づはたからけしかけさせておいて、××はもつと人を咬む決意をしたのである！　これは與黨と反對黨とを通じた擧國一致の輿論によつて掩護された狂犬である。吾々は第五十一議會において吉野作造博士以下、『非常に多數に上ぼる』共產主義教授を製造するための某代議士の質問が、如何に『緊急』であつたかを知ることができる。

□

しかしながら眞實に重要なことは、たま〱一頭の狂犬が街頭に現はれたことではなくて、その病毒が如何に根づよく蔓延してゐるかといふことである。言葉をかへていへば、眞實に重要なことは、日本の政界における封建的反動勢力の遺物たる貴族院の勢力を代表して憲政會內閣に列してゐる一岡田文相の政策が、如何に狂暴であるかといふことではなくて、その狂暴な政策が、憲政會內閣の反動政策の全體を構成する一部分をなして

文相の思想暴壓

山川均

□

かつて五十一議會において、政府反對黨の一代議士が『思想問題に關する緊急質問』なるものをしたことがある。岡田文相はさきに高等學校における學生の社會科學研究會に解散を命じて、『徹底的思想の善導』につとめたのは天晴れの手柄であるが、何故にもつと危險な大學內の學生の研究團體を禁止しないのか、いなそれよりももつと危險な各大學內にある『非常に多數に上ぼる』『共產主義教授』、大學內に潛在するこれ等の『不良教授』を何故に徹底的に處分しないのか……これが某代議士の質問の要旨であつた。そして某代議士は、もし文相にこれをやつて除ける意志がないならば、自分は『一身を賭して』自分でやつてのけるといふ、恐るべき決心のほどを聲明したのである。(尤もその後、多數の共產主義教授が處分せられた談もきかぬし、某代士議が一身を賭した噂も耳にせぬ)。

この國士的慷慨演說は、『質問』としてよりもむしろ『答案』として一層價値あるものと思はれた。即ちブルジョア議會に送られてゐる代議士といふものゝ智能の程度をはかるメンタルテストとして見れば、これほどよくその目的を達したものはない。某代議士が『徹底的の處分』を迫つた『不良教授』のブラックリストには、吉野作造博士、森本厚吉博士、高田保馬博士などゝいふお歷々の『共產主義教授』——恐らくは極左翼共產主義!——の芳名がづらりとならんでゐた。たしかに『非常に多數』である。レーニンとは何か? 毒藥の名前である。これは或る時の常識試驗に答へた一警官の答へであるが、ひとり警官ばかりでなく、かうした答案ができるやうでなければ、今日、××機關に携はる資格はない。

當時多くの人々は、某代議士の『緊急質問』に、恐らくこれ

以上の意義を認めなかつたにちがひない。しかし支配者は、多くの場合に、支配せられる者よりも賢明である。多くの人々が某代議士の愚を笑つてゐる時に、支配者は、支配せられる者の愚を笑つてゐたのである。

當時、某代議士にこつそり質問演説の材料を渡したものは、誰あらう反對黨政府の×××であつた。かうして反對黨の議席から、今にも日本全國の大學から×××火の手が揚がるかのように警鐘を亂打させ、文相の思想取締りの手ぬるさを攻撃させ、文相にしてこの際徹底的な手段を取らぬなら、自ら一身を賭してこの問題の解決に當るなど〻大見榮を切らせておき、そのあとへ當の岡田文相が登場して事實その通り、御説御尤も、同感至極、ついては議會に代表せられた國民の輿論に從ひ、もつと手酷どく學問の獨立と思想の自由を××いたしませうといふことになつた。これは見え透いた芝居であるが、芝居はしば〱人をして眞實に泣かしめ笑はしめる。この猿芝居に近い芝居によつて、政府がこれから取らんとしてゐた反動政策を裏づける有力な反動的な雰圍氣が、みごとに醸成されたのであつた。

□

『岡田文相はかねて學生の左傾思想を嚴重に警戒しつ〻あるが、第五十一議會に於ける上下兩院で、文相の取締なほ不充分といふ聲があつたので、文相は最近、さらに取締を一層きびしくすることを決意し、八日の高等學校長會議に臨んで……と嚴重な訓示を與へた』。新聞は正直に、政府の發表のま〻を斯う傳へてゐる。上下兩院で要求の聲があがつたから、文相は最近、かう決意したのである！先づはたからけしかけさせておいて、××はもつと人を咬む決意をしたのである！　これは與黨と反對黨とを通じた擧國一致の輿論によつて掩護された狂犬である。吾々は第五十一議會において吉野作造博士以下、『非常に多數に上ぼる』共産主義教授を製造するための某代議士の質問が、如何に『緊急』であつたかを知ることができる。

□

しかしながら眞實に重要なことは、たま〱一頭の狂犬が街頭に現はれたことではなくて、その病毒が如何に根づよく蔓延してゐるかといふことである。言葉をかへていへば、眞實に重要なことは、日本の政界における封建的反動勢力の遺物たる貴族院の勢力を代表して憲政會内閣に列してゐる一岡田文相の政策が、如何に狂暴であるかといふことではなくて、その狂暴な政策が、憲政會内閣の反動政策の全體を構成する一部分をなして

ゐるといふ事實である。かつては政友會が大地主の勢力を代表するものと目せられ、これに對して憲政會は、或る程度まで都會の商工階級と小ブルジョアとを代表し、少くともその程度だけは、政友會にくらべて幾分、進歩的自由主義的な黨派と認められてゐた。ところがこの憲政會が、偶然の僥倖で政權を握つて見ると、獨り歴代の政友會内閣ばかりでなく、過去における如何なる内閣よりも、——有名な桂内閣寺内内閣よりも——遙かに反動主義的な内閣となつて反動主義的な政策を實行したのである。

これは何事を意味するであらうか。これは憲政會を率ゐる指導者らの、政治的節操によつて説明されるであらうか。政治上の定見ないしは節操といふやうな、何者も初めから彼等に期待して居らぬものを彼等が持たぬといふことが曝露せられても、何等の興味をも引き起さぬ。吾々の興味をひくことは、第一には、今日いかなる政黨が政權を握つても、帝國主義的資本主義が必要とする反動主義の政策を、實行する道具とならぬかぎりは、一日もその政權を維持することは出來ぬといふこと、そしてそれほど完全に、帝國主義的資本主義が政治を支配してゐるといふことである。第二には、すべてのブルジョア政黨は、如何にその看板の彩色を異にしておつても、その神髓においては、均しく反動化した資本主義の支配の機關であり、如何にブルジョア的利害の範圍内ではしのぎを削つて爭ふてゐても、民衆を壓伏するための反動政策においては、明確な階級意識の上に立つて、一人の如くに一致するといふことである。ブルジョアジーはプロレタリアにくらべて、階級的の自覺が、はるかに進歩してゐるのである。

□

議會は輿論の反映するところ——特にブルジョアジーの輿論の反映するところ——であるとしたらば、最近の議會ほど、この『輿論』の明瞭に反映した議會はないといふことができる。試みに五十一議會の議事錄を開いて見よ。いたるところに『共產主義』といふ言葉の出てくることに、何人も驚くにちがいない。銀座街頭で十數名の暴行者が、商店のショウヰンドーを破壞した。すわこそ××××××である！（現に或る議員は、議場でかう叫んだ）。學生が三人集まつて、見なれぬ本を讀んでゐた。すわこそ共產主義の不穩文書である。天井で物音がした。すわこそ共產主義の陰謀である。等々々々。これが議會に反映した、ブルジョアジーを支配してゐる心理であつて、五十一議會は實に、共產主義の惡夢におそはれた議會であつた。

この赤色の惡鬼にとりつかれたブルジョアジーの目には、すべてのものが赤色の共産主義に見える。そこでブルジョアジーの指導者らは、ブルジョア大衆の間に漲つてゐるこの脅迫感を利用して一切のもの——一切の都合の惡るいもの——を『共産主義』にすることによつて、帝國主義的資本主義の必要とするあらゆる反動政策を遂行するために、最も適當な雰圍氣を造つてゆく。

『共産主義』に對する支配階級のかうした極度の恐怖といらだちとは、資本主義そのものゝ自壞作用に對する、無意識的な意識と懊惱との現はれに外ならぬ。そしてこれが憲政會内閣の反動政策の眞實の基礎であり、岡田文相のきちがいぢみた思想取締の眞實の背景である。上下兩院に現はれた國民の輿論によつて裏づけられてゐる氣でやつてゐる岡田文相を眞實に裏づけてゐるものは、このヒステリツリな、×××資本主義の精神狀態なのである。

□

けれどもそれ故に、岡田文相の狂暴な政策に對して（その他の一切の反動政策に對しても）憲政會にその責任がないと論ずべき少しの理由もない。狂犬をして人を咬ましめるものは病毒である。けれども警察は、人を咬んだ狂犬を撲殺するのである。反動政策をもつて民衆を咬ましめるものは、資本主義の自壞作用である。けれども民衆は自己を防衛するためには、この反動政策を實際に遂行した政黨の内閣を倒さねばならぬ。小作爭議調停法によつて、農民運動の去勢を企てたのは憲政會の内閣である。無産階級彈壓のために治安維持法をこしらへたのは、憲政會の内閣である。勞働組合法の名のもとに、組合破壞の法律を制定しようとしたのは、憲政會の内閣である。勞働爭議調停法を作つて、治安警察法を改惡し、一部勞働者の團結權と罷業權を剝奪したものは、憲政會の内閣である。無産階級に與へられた選擧權の行使を防げるために、反對黨と妥協したものは、憲政會である。無産階級の一致を破り、分割支配の政策を行ふために、その政黨を禁止したものは、憲政會の内閣である。勞働組合運動の一部を腐敗陷落せしめたものも、憲政會の内閣である。軍事教育と青年教練とによつて、青年と學生とを軍國主義の組織網に包んだものは、憲政會の内閣である。そしてこれ等の反動主義の政策を完了するために、學校と學生から、學問の自由を奪ひ、研究の自由を奪ひ、會合の自由を奪ひ、思想の自由を奪つたものは、憲政會の内閣である。民衆はこの事實を牢記しなければならぬ。民衆は少くともその選擧權

ゐるといふ事實である。かつては政友會が大地主の勢力を代表するものと目せられ、これに對して憲政會は、或る程度まで都會の商工階級と小ブルジョアとを代表し、少くともその程度だけは、政友會にくらべて幾分、進歩的自由主義的な黨派と認められてゐた。ところがこの憲政會が、偶然の僥倖で政權を握つて見ると、獨り歴代の政友會内閣ばかりでなく、過去における如何なる内閣よりも、——有名な桂内閣寺内内閣よりも——遙かに反動主義的な内閣となつて反動主義的な政策を實行したのである。

これは何事を意味するであらうか。これは憲政會を率ゐる指導者らの、政治的節操によつて説明されるであらうか。政治上の定見ないしは節操といふような、何者も初めから彼等に期待して居らぬものを彼等が持たぬといふことが曝露せられても、何等の興味をも引き起さぬ。吾々の興味をひくことは、第一には、今日いかなる政黨が政權を握つても、帝國主義的資本主義が必要とする反動主義の政策を、實行する道具とならぬかぎりは、一日もその政權を維持することは出來ぬといふこと、そしてそれほど完全に、帝國主義的資本主義が政治を支配してゐるといふことである。第二には、すべてのブルジョア政黨は、如何にその看板の彩色を異にしておつても、その神髓においては、均しく反動化した資本主義の支配の機關であり、如何にブルジョア的利害の範圍内ではしのぎを削つて爭ふてゐても、民衆を壓伏するための反動政策においては、明確な階級意識の上に立つて、一人の如くに一致するといふことである。ブルジョアジーはプロレタリアにくらべて、階級的の自覺が、はるかに進歩してゐるのである。

□

議會は輿論の反映するところ——特にブルジョアジーの輿論の反映するところ—であるとしたらば、最近の議會ほど、この『輿論』の明瞭に反映した議會はないといふことができる。試みに五十一議會の議事録を開いて見よ。いたるところに『共產主義』といふ言葉の出てくることに、何人も驚くにちがいない銀座街頭で十數名の暴行者が、商店のショウヰンドーを破壞した。すわこそ××××××××である！（現に或る議員は、議場でから呼んだ）。學生が三人集まつて、見なれぬ本を讀んでゐた。すわこそ共產主義の不穩文書である。天井で物音がした、すわこそ共產主義の陰謀である、等々々。これが議會に反映した、ブルジョアジーを支配してゐる心理であつて、五十一議會は實に、共產主義の惡夢におそはれた議會であつた。

この赤色の惡鬼にとりつかれたブルジョアジーの目には、すべてのものが赤色の共產主義に見える。そこでブルジョアジーの指導者らは、ブルジョア大衆の間に漲つてゐるこの脅迫感を利用して一切のもの――一切の都合の惡いもの――を『共產主義』にすることによつて、帝國主義的資本主義の必要とするあらゆる反動政策を遂行するために、最も適當な雰圍氣を造つてゆく。

『共產主義』に對する支配階級のかうした極度の恐怖といらだちとは、資本主義そのものゝ自壞作用に對する、無意識的な意識と煩惱との現はれに外ならぬ。そしてこれが憲政會內閣の反動政策の眞實の基礎であり、岡田文相のきちがいぢみた思想取締の眞實の背景である。上下兩院に現はれた國民の輿論によつて裏づけられてゐる氣でやつてゐる岡田文相を眞實に裏づけてゐるものは、このヒステリツリな、×××資本主義の精神狀態なのである。

□

けれどもそれ故に、岡田文相の狂暴な政策に對して(その他の一切の反動政策に對しても)憲政會にその責任がないと論ずべき少しの理由もない。狂犬をして人を咬ましめるものは飼主である。けれども警察は、人を咬んだ狂犬を撲殺するのである。反動政策をもつて民衆を咬ましめるものは、資本主義の自壞作用である。けれども民衆は自己を防衞するためには、この反動政策を實際に遂行した政黨の內閣を倒さねばならぬ。小作爭議調停法によつて、農民運動の去勢を企てたのは憲政會の內閣である。無產階級彈壓のために治安維持法をこしらへたのは、憲政會の內閣である。勞働組合法の名のもとに、組合破壞の法律を制定しようとしたのは、憲政會の內閣である。勞働爭議調停法を作つて、治安警察法を改惡し、一部勞働者の團結權と罷業權を剝奪したものは、憲政會の內閣である。無產階級に與へられた選擧權の行使を防げるために、反對黨と妥協したものは、憲政會である。無產階級の一致を破り、分割支配の政策を行ふために、その政黨を禁止したものは、憲政會の內閣である。勞働組合運動の一部を腐敗墮落せしめたものも、憲政會の內閣である。軍事教育と青年教練とによつて、青年と學生とを軍國主義の組織網に包んだものは、憲政會の內閣である。そしてこれ等の反動主義の政策を完了するために、學校と學生から、學問の自由を奪ひ、研究の自由を奪ひ、會合の自由を奪ひ、思想の自由を奪つたものは、憲政會の內閣である。民衆はこの事實を牢記しなければならぬ。民衆は少くともその謂

を行使する最初の機會において、憲政會内閣の挑戰に應じてその政治的罪惡に復報しなければならぬ。勞働者と農民とは、少くともその選擧權を行使する最初の機會において、この選擧權の行使を妨げたものへの復讐のために、この選擧權を行使しなければならぬ。そして苟めにも學問の獨立と思想の自由とを要求する青年と學徒は、その精神的の生命に加へられたこの危害に對して、有力に反應するにちがいない。

宗教法案を評す

安藤正純

宗教法案は六章、百二十五條の浩澣に亘り、私は頃日來夙夜非常に多忙で、その細目に至ては未だ詳く研究の餘暇がない、殊に本日は名古屋に旅行するに先ち、『改造社』の嚴促に辭するを得ず、大急ぎでこの一文を草す、詳しきことは他日改めて紙上を借りることにしたい。

◇

宗教は言ふまでもなく、思想の現象である。故に宗教の本來から言へば自由放任とすべきである、また宗教は人類が對機である以上、勿論世界的である、宗教そのものに國境のあるべき筈はない、故に此の意義より言へば、一個の國家が些々たる事項を羅列して、之を法律的に規定すべきものではない、たとへ歐羅巴の諸國に於て如何なる宗教法や宗教規定があらうとも、創めて宗教法なるものを造らんとするくらゐの地位にある我國では、此點に於て先づ第一に考へねばならぬ、今回の宗教法案は此の重大なる考察に於て、文部當局が十分の考慮と用意とを缺いたものと見られる。

◇

然し我國の現在は幾多の宗教が雜然として行はれ、殊に佛教の如き、次では神道の如き、古き歴史を有し、此間に於て國家と宗教との間に諸種の因緣關係を結び來つた事例に鑑み、又

基督教の如き、その他諸種の小宗教が新に宣布せられ來つた現狀に顧み、而して此等各宗教がその教義の宣傳に當て、國家の諸現象と種々なる關係を起し、また此等各宗教の物質的條件に於て、國家との間に諸種の作用を惹起するに於て、爰に國家として何等か此に對する政策を定めねばならぬと考ふるは、また國家の一面から見て棄て置き難きことであらう、故に私は政府が宗教法を制定せんとするは必ずしも不可とは言はぬ、たゞ之を制定するに當ては、前段の通り、宗教そのものゝ本質を忘れず、第一にこれを重要視する必要がある。

◇

偖ていよ／＼此の見地から宗教法を制定するといふ段になると、これは頗る大事業である。私は現在の日本に於ける立法中で最も重大なものは勞働立法と宗教立法であらうと思ふ。それは兩つながら我國始めての立法であると共に、勞働法は世界を通じての勞働政策とも關係あり、宗教法は人類的なる宗教の內容を表現する諸種の事項に就て、國家的に規定するものだからである。而して第五十一議會に提出された勞働法が、甚だ不徹底な法案であつたと同樣、否それよりも一層不完全なのは今回の宗教法だと言ひ得る。私をして無遠慮に言はしむれば、第五十一議會の勞働法は、政府が勞働及び勞働者並に勞働運動の本質を能く理解せずに立法した、それと同樣にこの宗教法は、宗教及び宗教者、並に宗教運動の本質が、能く理解せられずに立法されたものである。

◇

宗教を制定する第一要點は、國家が我國の宗教に對して、自由主義を取るか。保護主義を取るかにある、然るに政府提出の宗教法案は、此の最重要條件に就て、何とも主義が確定して居らぬ、而して宗教法案全部を通觀して、維新以來時に臨み機に應じ、必要に迫まられて發布した大政官布達や、勅令や、省令やらの斷片法規を、こゝに綜合してこれを整理したまでゝある。綜合も可い、整理も惡るしとは言はず、然かし從來の斷片法規には何等の主義があつたのではない、只傳統的に相承して來た方針のやうなものが、雜然として集まつたまでゞある。故にこの斷片法規はその中で前後矛盾のものさへも發見される、故に若し強いて主義と言へば、自由主義でも保護主義でもなく、便宜主義と言ふが適當だらう。

◇

私は六月一日の宗教法制度調査委員會の第一回に於て、次の如き質問を發した。苟くも宗教法といふからには、國家が宗教に對する主義或は根本對策があらねばならぬ。然るに此法案は從來の宗教法規を集めて之を編輯したに過ぎぬ。知らず政府は吾人の公平なる審議を容れて之を改竄するの雅量あるやと、又私は同會に於て次の如き言を爲した、文部大臣や宗教局長は我等委員の問に對して、それは既に國として定まつてゐる（神社と宗教との關係）との一本道で答へるが、從來未だ無き宗教に對する根本法を制定するに當り、その不完全たり不合理たるものは、これを改竄するが當然ではないか、予の見る所では重要意義の存在するものは凡て既定の範圍に入れ、枝葉末節の事項にのみ若干未定範圍を殘すといふが如きは、抑々此の審査會の性質を侮るものに非ざるかと、之に對しては政府當局は明瞭の答辯を爲し得なかつた、要するに此の法案は宗教法などゝいふ大きなものではない、宗教事項取締法と名けるが寧ろ適當の名題と思ふ。

◇

第五十二議會の勞働立法提案で、政府は勞働組合法と勞働爭議調停法とを出し、然かも調停法に力瘤を入れたが、今度の宗教立法でも政府は宗教法と宗教審議會とを制定する考である。而して宗教法は斷片零墨の編輯整理で、一つ新らしいのは宗教審議會である、然かもその目新らしい宗教審議會に就ては大に議論がある。

◇

宗教審議會の組織權限は、宗教法に規定するもの以外は勅令を以て定むとあるが、大體宗教の指定權、指定取消權、轉宗轉派判斷權、宗教爭議裁決權などが主要な權限であらう。而してその宗教審議會の組織は、私が第一回調査會の劈頭で文部大臣に質した答辯に依ると、大審院判事二人、行政裁判所評定官二人、宗教關係者五人、學識經驗ある者二人、文部官吏一人である。抑々宗教を指定する權限が世界何人にあるか、新宗教を創設せんとする程の智力人格を有し、その人に依て創造されたる宗教の善惡を判斷し、その指定非指定を爲すが如き潜上の行爲が何人に依て爲し得られると思ふか、何れの時に釋迦出で基督現はれずと定め得るか、かくの如き人力以外の問題を限られたる人力に依て判決せんとするの迂愚と無謀と、憫笑せざるを得ぬ。或は政府は之を指定するはその新宗教が國家と兩立し得るや否やを定めんとすると答ふるやも知れぬ、成る程その宗

教の表現する現象については、此の點に於て判斷するを得んも、その顯源する新宗教の教理について如何にして之が宗教なり非宗教なりを定め得べき。現在思想の問題に於てすら現文部大臣の政策が、現代を理解せず、反て思想の趨勢を沮み、國家の將來に取ても必ずしも有益なりとは斷じ得ぬ。況んや宗教の指定權を此等俗吏俗情に附與する如き、何としても大膽千萬でないか。

◇

更に指定取消權、轉宗轉派判斷權の如きもの亦然り。之を推論せば何うしても教義の問題に入り、信仰の問題に入る。教義や信仰が政府の機關たる審査會で裁かるるといふが如き、實際上不可能事であり、若し強いて之を爲すならば、現政府は餘りに宗教の何ものたるかを解せざるの甚だしきものである。

◇

次に教派（神道）、宗派（佛教）、と教團（基督教其他）とを區別し、其の兩者に對する取扱に差等を設けたのは何故であるか、苟も信教自由の憲法の大義に則り、宗教平等の原則を以て、國家が宗教に臨まんとするなら、其の間均等を保つ必要がある、是れ宗派に對する機會均等を破らんとするものである。例へば教派宗派には管長を置て、その就任を認可するに反し、教團には管長を置かず、從て管長規則を準用せざる如きは、不均等の最たるものである、況んや管長は届出主義に非ずして認可主義である、文部大臣に認可せられ、然かも勅任待遇を以て強いて遇せらるゝが如きは、是れ宗教の權威に關するものである、若し此の種の規定を爲すなら、寧ろ宗教界の代表として貴族院に數名の管長を送るが如き規定を、此に置くことが適當であらう、要するに教派宗派と教團との不平等規定の如き、是れ昔今日までの習慣に囚はれた卑俗狹小の考の致すところで、根本的に宗教法を制定せんとする宏博の氣葉を欠くの結果である。

◇

宗教事項の監督は、この宗教法に於て餘りに煩瑣である、抑も宗教は憲法廿八條の明文に背かざる限り自由なるべきものである、若し監督に過ぎて干渉に亘らば、反てその弊害を助長する嫌がある、今回の宗教法ではその檢査といひ、報告といひ、取消といひ、禁止といひ、必要處分といひ、其他必要なる命令といひ、又財産上の監督といひ、餘りに細かに刻み過ぎてゐる

勞働組合法の監督規定の如き、私はその無用の監督に過ぎ、勞働組合の助長を妨ぐると論じたが、この宗教法に至ては更により以上である、現岡田文相の性癖と思想とが、あり〳〵と描寫される嫌がある。

◇

尙國有寺院境内地還付問題は、積年の懸案だが、この宗教法の附則に於て、『其の境内地として必要なる部分を限り各々寺院境内地處分審査會の議を經て大藏大臣之を當該寺院に讓與す』と規定した。これは從來衆議院に於て既に數回通過し國論の所在は定つてゐる、要するに維新當時政府の誤りたる處分に依り寺院の所有地が不當沒收されて今日に及んだものである。今や之を解決するに當り『其の境内地として必要なる部分を限り』としたことは、全く不合理である、既に國論の歸するところに依り不當沒收を還付する以上、必要なる部分と然らざるとを問はず、當然全部を還付すべきが合理的である、既に行政裁判所の判決に於て明かとなつてゐる、而して岡田文相は調査會の劈頭に於て一場の挨拶中特に之に言及して、從來の主張に依つたものでなく、特に之を規定したと、何だか恩惠的な口吻を漏らした、これは必ずしも物質的問題ではない、當然權利の主張である、佛教徒がかゝる不合理の規定に盲從するや否や、佛教の氣力を試みに見たいと思ふ。(完)

山道

中里介山

大正十何年の五月、甲斐の國の鹽山の驛から大菩薩峠に向つて馬を進めて行く一人の旅人がありました。中折の帽子をかぶつて、脊廣の洋服に糸柄、草鞋脚半といふいでたちで頬かむりした馬子に馬の口を取らせて、鹽山から略、三里の大菩薩峠を目ざして行く時は前に云つた通り陽春の五月、日はまさしく端午の當日であります。沿道の谷々には桃李が笑つてゐる、村々には鯉幟がなびいてゐる。霞が村も山も谷も一たいに立てこめてゐる。行手にふさがる七千尺の大菩薩嶺そのものも春に目ざめて笑つてゐる。

大菩薩の山は溫かい山でありました。裂石の雲峰寺の石段の前に通りかゝつた時分、紳士もあれば商人も、學生もある一行が現はれて、いつか、その旅人の馬をからんで峠路を登りながら話なじみになる。

『あの中に、清澄の茂太郎といふのがゐるのを御存知ですか……般若(はんにや)の面(めん)をかゝえて絶えず出鱈目の歌をうたつてゐる子供』

『さう〳〵そんなのがありましたね』

勞働組合法の監督規定の如き、私はその無用の監督に過ぎ、勞働組合の助長を妨ぐると論じたが、この宗教法に至ては更により以上である、現岡田文相の性癖と思想とが、ありくと描寫される嫌がある。

◇

尙國有寺院境内地還付問題は、積年の懸案だが、この宗教法の附則に於て、『其の境内地として必要なる部分を限り各々寺院境内地處分審査會の議を經て大藏大臣之を當該寺院に讓與す』と規定した。これは從來衆議院に於て既に數回通過し國論の所在は定つてゐる、要するに維新當時政府の誤りたる處分に依り寺院の所有地が不當沒收されて今日に及んだものである。今や之を解決するに當り『其の境内地として必要なる部分を限り』としたことは、全く不合理である、既に國論の歸するところに依り不當沒收を還付する以上、必要なる部分と然らざるとを問はず、當然全部を還付すべきが合理的である、既に行政裁判所の判決に於て明かとなつてゐる、而して岡田文相は調査會の劈頭に於て一場の挨拶中特に之に言及して、從來の主張に依つたものでなく、特に之を規定したと、何だか恩惠的な口吻を漏らした、これは必ずしも物質的問題ではない、當然權利の主張である、佛教徒がかゝる不合理の規定に盲從するや否や、佛教の氣力を試みに見たいと思ふ。(完)

山道

中里介山

大正十何年の五月、甲斐の國の鹽山の驛から大菩薩峠に向つて馬を進めて行く一人の旅人がありました。

中折の帽子をかぶつて、脊廣の洋服に糸楯、草鞋脚半といふいでたちで頬かむりした馬子に馬の口を取らせて、鹽山から略、三里の大菩薩峠を目ざして行く時は前に云つた通り陽春の五月、日はまさしく端午の當日であります。沿道の谷々には桃李が笑つてゐる、村々には鯉幟がなびいてゐる。霞が村も山も谷も一たいに立てこめてゐる。行手にふさがる七千尺の大菩薩嶺そのものも春に目ざめて笑つてゐる。

大菩薩の山は溫かい山でありました。

裂石の雲峰寺の石段の前に通りかゝつた時分、紳士もあれば商人も、學生もある一行が現はれて、いつか、その旅人の馬をからんで峠路を登りながら話なじみになる。

『あの中に、淸澄の茂太郎といふのがゐるのを御存知ですか……般若（はんにゃ）の面（めん）をかゝえて絶えず出鱈目の歌をうたつてゐる子供』

『さう〳〵そんなのがありましたね』

勞働組合法の監督規定の如き、私はその無用の監督に過ぎ、勞働組合の助長を妨ぐると論じたが、この宗教法に至ては更により以上である、現岡田文相の性癖と思想とが、ありくと描寫される嫌がある。

◇

尙國有寺院境內地還付問題は、積年の懸案だが、この宗教法の附則に於て、『其の境內地として必要なる部分を限り各々寺院境內地處分審査會の議を經て大藏大臣之を當該寺院に讓與す』と規定した。これは從來衆議院に於て既に數回通過し國論の所在は定つてゐる、要するに維新當時政府の誤りたる處分に依り寺院の所有地が不當沒收されて今日に及んだものである。今や之を解決するに當り『其の境內地として必要なる部分を限り』としたことは、全く不合理である、既に國論の歸するところに依り不當沒收を還付する以上、必要なる部分と然らさるとを問はず、當然全部を還付すべきが合理的である、既に行政裁判所の判決に於て明かとなつてゐる、而して岡田文相は調査會の劈頭に於て一場の挨拶中特に之に言及して、從來の主張に依つたものでなく、特に之を規定したと、何だか恩惡的な口吻を漏らした、これは必ずしも物質的問題ではない、當然權利の主張である、佛教徒がかゝる不合理の規定に盲從するや否や、佛教の氣力を試みに見たいと思ふ。(完)

山道

中里介山

大正十何年の五月、甲斐の國の鹽山の驛から大菩薩峠に向つて馬を進めて行く一人の旅人がありました。

中折の帽子をかぶつて、脊廣の洋服に糸柄、草鞋脚半といふいでたちで頬かむりした馬子に馬の口を取らせて、鹽山から略、三里の大菩薩峠を目ざして行く時は前に云つた通り陽春の五月、日はまさしく端午の當日であります。沿道の谷々には桃李が笑つてゐる、村々には鯉幟がなびいてゐる。霞が村も山も谷も一たいに立てこめてゐる。行手にふさがる七千尺の大菩薩嶺そのものも春に目ざめて笑つてゐる。

大菩薩の山は温かい山でありました。

裂石の雲峰寺の石段の前に通りかゝつた時分、紳士もあれば商人も、學生もある一行が現はれて、いつか、その旅人の馬をからんで峠路を登りながら話なじみになる。

『あの中に、淸澄の茂太郎といふのがゐるのを御存知ですか……般若(はんにや)の面(めん)をかゝえて絶えず出鱈目の歌をうたつてゐる子供』

『さう／＼そんなのがありましたね』

勞働組合法の監督規定の如き、私はその無用の監督に過ぎ、勞働組合の助長を妨ぐると論じたが、この宗教法に至ては更により以上である、現岡田文相の性癖と思想とが、ありくと描寫される嫌がある。

◇

尙國有寺院境内地還付問題は、積年の懸案だが、この宗教法の附則に於て、『其の境内地として必要なる部分を限り各々寺院境内地處分審査會の議を經て大藏大臣之を當該寺院に讓與す』と規定した。これは從來衆議院に於て既に數回通過し國論の所在は定つてゐる、要するに維新當時政府の誤りたる處分に依り寺院の所有地が不當沒收されて今日に及んだものである。今や之を解決するに當り『其の境内地として必要なる部分を限り』としたことは、全く不合理である、既に國論の歸するところに依り不當沒收を還付する以上、必要なる部分と然らざるとを問はず、當然全部を還付すべきが合理的である、既に行政裁判所の判決に於て明かとなつてゐる、而して岡田文相は調査會の劈頭に於て一場の挨拶中特に之に言及して、從來の主張に依つたものでなく、特に之を規定したと、何だか恩惠的な口吻を漏らした、これは必ずしも物質的問題ではない、當然權利の主張である、佛教徒がかゝる不合理の規定に盲從するや否や、佛教の氣力を試みに見たいと思ふ。（完）

山道

中里介山

大正十何年の五月、甲斐の國の鹽山の驛から大菩薩峠に向つて馬を進めて行く一人の旅人がありました。中折の帽子をかぶつて、脊廣の洋服に糸柄、草鞋脚半といふいでたちで頰かむりした馬子に馬の口を取らせて、鹽山から略、三里の大菩薩峠を目ざして行く時は前に云つた通り陽春の五月、日はまさしく端午の當日であります。沿道の谷々には桃李が笑つてゐる、村々には鯉幟がなびいてゐる。霞が村も山も谷も一たいに立てこめてゐる。行手にふさがる七千尺の大菩薩嶺そのものも春に目ざめて笑つてゐる。

大菩薩の山は温かい山でありました。

裂石の雲峰寺の石段の前に通りかゝつた時分、紳士もあれば商人も、學生もある一行が現はれて、いつか、その旅人の馬をからんで峠路を登りながら話なじみになる。

『あの中に、淸澄の茂太郎といふのがゐるのを御存知ですか……般若の面をかゝえて絶えず出鱈目の歌をうたつてゐる子供』

『さう〳〵そんなのがありましたね』

勞働組合法の監督規定の如き、私はその無用の監督に過ぎ、勞働組合の助長を妨ぐると論じたが、この宗教法に至ては更により以上である、現岡田文相の性癖と思想とが、ありありと描寫される嫌がある。

◇

尙國有寺院境內地還付問題は、積年の懸案だが、この宗教法の附則に於て、『其の境內地として必要なる部分を限り各々寺院境內地處分審査會の議を經て大藏大臣之を當該寺院に讓與す』と規定した。これは從來衆議院に於て旣に數回通過し國論の所在は定つてゐる、要するに維新當時政府の誤りたる處分に依り寺院の所有地が不當沒收されて今日に及んだものである。今や之を解決するに當り『其の境內地として必要なる部分を限り』としたことは、全く不合理である、旣に國論の歸するところに依り不當沒收を還付する以上、必要なる部分と然らざるとを問はず、當然全部を還付すべきが合理的である、旣に行政裁判所の判決に於て明かとなつてゐる、而して岡田文相は調査會の劈頭に於て一場の挨拶中特に之に言及して、從來の主張に依つたものでなく、特に之を規定したと、何だか恩恵的な口吻を漏らした、これは必ずしも物質的問題ではない、當然權利の主張である、佛教徒がかゝる不合理の規定に盲從するや否や、佛教の氣力を試みに見たいと思ふ。（完）

山道

中里介山

大正十何年の五月、甲斐の國の鹽山の驛から大菩薩峠に向つて馬を進めて行く一人の旅人がありました。

中折の帽子をかぶつて、脊廣の洋服に糸柄、草鞋脚半といふいでたちで頬かむりした馬子に馬の口を取らせて、鹽山から略、三里の大菩薩峠を目ざして行く時は前に云つた通り陽春の五月、日はまさしく端午の當日であります。沿道の谷々には桃李が笑つてゐる、村々には鯉幟がなびいてゐる。霞が村も山も谷も一たいに立てこめてゐる。行手にふさがる七千尺の大菩薩嶺そのものも春に目ざめて笑つてゐる。

大菩薩の山は温かい山でありました。

裂石の雲峰寺の石段の前に通りかゝつた時分、紳士もあれば商人も、學生もある一行が現はれて、いつか、その旅人の馬をからんで峠路を登りながら話なじみになる。

『あの中に、清澄の茂太郎といふのがゐるのを御存知ですか……般若の面をかゝえて絶えず出鱈目の歌をうたつてゐる子供』

『さう〳〵そんなのがありましたね』

『あなたは、あの茂太郎の歌を面白いとお思ひになりませんか』
『さうですね、讀んだ時は變つた歌だと思ひましたが、よく覺えてはゐません』
『あの歌があれが大變なものですよ』
學生のうちの一人、特に思入れがあつて七分の感歎に三分の餘情を加へる。
『大變とは、どういう意味に……』
とBなる青年が振り返る。
『可けない、もう一度、君はあの歌を讀み返して見なくちや――――兎に角、あの歌が大變なものだといふことだけを頭に置いて、もう一ぺん讀み返して見給へ』
路は小流を幾つも越えて雜木林に入る。
『あの小説の著者は、あれで多少は科學の何者、藝術の何者であるかを知つてゐるでせうか』
『戲作、つまり昔の草双紙――草双紙に何があるものですか、たゞその時、その時を面白がらせて、つないで行けばいいだけの代物です、その技術に於てはあの著者も多少の手腕を持つてゐるやうですが、その他の事は問題になりませんよ』
『いや、それは酷だ、君はまだあの作物を通讀してゐないか、さうでなければ讀んでゐながら理解するだけの頭が無いのか、さうで無ければ相當にわかつてゐながらわざと誣うるものだ』
こゝで一行が意外にも、かりそめの論評の火花を散らす。
その時、最初の馬上の旅人が輕く仲裁の任に當りました。

『實は、僕もあの小説の著者を知つてゐるのですが、あれはわからずやの一種の變人で、決して諸君の問題になるやうな代物ではありません……今おつしやる通りの藝術家でも何でもない、云はゞ戯作者で當人も大凡下々の戯作者と稱して喜んでゐるやうな始末ですよ』

『え、あなたは、あの小説大菩薩峠の著者を御存知なんですか』

Cなる靑年が馬上の人を仰ぐ

『知つてゐますとも——現に此の峠を越した多摩川の岸で船頭か粉挽をやつてゐる筈です』

『さうですか——それはどうも意外でした』

そこで裂石の雲峰寺を出た紳士靑年商人學生取り交ぜの一行が改めて馬上の人に注意することになりました。

『戯作者——德川時代の通人、粋客、遊蕩兒といつたやうな半面を持つてゐる男ですか』

『さうでも無いのです、今もいつた通り多摩川の岸で船頭や粉挽をやつてゐる位の男ですから所謂通人といふ部類の男ではありますまい——遊戯思想といふことをもう少し嚴肅に考へてゐるかも知れません』

『處であの小説の中の Tsukue が主人公なのですか——よくあの男の性格をニヒリストだといふのを聞きますが、して見れば著者は一種のニヒリズムをあの小説の中で歌つてゐるのでせうか。』

とAなる靑年がいふ。馬上の旅人がそれに答へて

『ある讀者が著者に向つて斯ういつて來たさうです——若しも Tsukue に淺薄な改心の仕方をさせ、なまじいな善人とし、結末を佛門にでも歸せしめて大團圓といふやうな事にしたら、只では置かない——と。讀者はあれをあのまゝで興味に見てゐるのですね、善惡は超越してあの性格そのものを珍らしがつてゐるやうです——ニヒリストと云へる

か知らん、併し著者はあれで眞面目な宗教信者ですから一種のニヒリズムを鼓吹讃美する意味で、あんな性格を示してゐるのではないと思ひます Tsukue のみが決してあの小説の主人公ではないと著者もいつてゐました』

『Tsukueがあの小説の主人公でないとすれば誰が主人公なのですか』

馬上の旅人に向つて此の質問を提出すると旅人は迷惑さうに

『私は原著者ではありませんから誰がどう入り組んでゐるか知りません。たゞ、Tsukue だけが主人公ではないといふことを聞きました、多分、著者は個々の人物を主としないで全體の作意といふものを主としてゐるのでせう』

斯ういひながら馬から下り立つて一行と共に歩き出しました。

『實際、あの男の頭は少し變です――偶然の出來事にも何か必然の意味を持ちたがり、因果應報の存在を信じ輪廻轉生を信じ勸善懲惡が自然の理法なりとして疑はない位ですから、まあ、一種の迷信家でせうな、ごく頭の古い男です、されば大震災の時も淺草の觀音堂が燒け殘つたのを無意味に見ることが出來ない一人でした、近代學者の冷笑を買ふには申分のない資格に出來てゐるやうです』

と馬上から下り立つた旅人は、又しても小説の著者の棚下ろしにかゝりました。

『迷信も厄介だが、科學萬能の尊大ぶりにも困りますよ』

と一行のうちの一人がいふ。

『人間はある意味に於て迷信の動物といへるかも知れません――事實ドコまでが迷信でドコまでが正信だか人間の力でわかつたものではありますまい』

とまた一人がいふ。

『飛んでもない事、迷信は我々を無智と野蠻に送り返すが科學は我々をして今日の文明と未來の進歩を仰がしめる』

また一人が抗議をつゞける。

『だが併し、科學を押し立てゝ迷信を排斥すると人間はまた科學そのものへ迷信を結びつけなければ置かない、どっち道、人間は迷信の動物ですよ』

二人目のが取りすましていふ。

『科學へ迷信を結びつけるといふのは有り得べからざる事だ。有へ無を結びつけるやうに火と水とを混合せしめるやうに、これは成すべからざる事だ。』

『併し人間はその爲すべからざることを爲さずには居らないのがオカしいぢやありませんか……たとへば此處に醫學博士がある、その醫學博士の門に診療を乞うものは博士の有する科學と技術とを信じて求めるのではない、博士といふ學位に迷信を置いて來るのだ、だから廿分間で素人にも樂々と通讀の出來る論文を書いた博士でも博士その名前が迷信の的となり得るに充分である。この迷信が商賣の繁昌に有力な處から博士の粗製濫造大賣出しが行はれる――科學が迷信を助長するのではない人間の本能が迷信無くしては生きられないのではないか。』

『さればこそ――科學の必要と權威がいよ／＼主張されなければならぬ』

『科學の權威――といふが、その權威にもおのづから權限のあることを自覺しなければなりますまい、權限を知る科學者は自分の立場に忠實であると共に、その知られざる世界に對しては無限に謙遜でなければ居られますまい』

『ノー／＼、今に科學者がすべてを征服するの時が來ります、宗教の時代は過ぎました、有ゆる宗教は皆迷信を要素とするのに科學の勝利のみが着々と現實の文明を形成る。詩は空想の產物で迷信とは隣りづき合ひをしてゐる、科學は既に

完全に陸上を征服し今や空飛ぶ小鳥の力を奪ひ水を潜る魚の力を奪ひ、やがて有ゆるものを征服するの使命を持つ――』

この一行は今混亂狀態となつて栗の大木の下で、ごちやくと中休をしながら相手次第に火花を散して誰一人仲裁の任に當らうとする者もない。

『科學が完全に陸上を征服したと廣言するならば、聞いてみませう、地上僅か三萬呎のヒマラヤの頂はまだ科學の力で究められてはゐない筈。地球の海底の最も低い處も南北の兩端もまだ科學の力では開かれてはゐない筈、つまり科學の力はまだ天上地下僅々五哩の範圍にも達してはゐない、肺病も癩病もまだ科學の力では癒らない、我々は大震災の來ることを豫知することが出來ないのみか――その日、その日の天候でさへも科學の力を信頼するわけには行かないではないか。といつて僕は科學を否定する者でも輕蔑するものでもありませんがね』

會社員風の青年が云ひました。

『科學々々といふけれども由來、人生に對する偉大なる貢獻を遂げた發明家は所謂學者の中から出ないで無學者の中から出たのが不思議ではありませんか――ワットにしてもエヂソンにしても』

『併し彼等はプロフエサアで無かつただけで事實は偉大なる科學者です、そこで我々は科學の偉力を信じないわけには行かないが科學の傲慢を許すにはまだ早いやうです』

穩健なる紳士が斯う云ひながら立ち上ると一同も立ち上つて歩き出したが足よりも口の方が盛んである。

『ナポレオンが露西亞を敗走したのを單に寒氣の襲來と防寒具の不足とに歸するような頭で、萬象の葛藤を批判論斷されてはたまりません……』

『ですけれども淺草の觀音樣が大震災の時に燒け殘つたのは、紫の雲に乘つた觀世音菩薩の威神力がさうあらしめたの

ではなく、あの四方の空地と樹木と消防の盡力とがさうさせたものでせう』

『だから云はない事ちやありません……』

Cといふ膽汁質の脊廣服が昂然として乗り出して來ました。

『あの時に相當の空地と樹木と消防の盡力を有してゐたのがひとり淺草の觀音堂だけとは限りますまい――僕は一つその比較を本郷の帝國大學の圖書館に取つて見たいと思ひます、諸君、淺草の觀音堂はたしかに寛永時代の創建と聞きました、無論、東京の市中では古建築の部に屬する代表的の一つでせう、本郷の帝大の大學圖書館は、よくは知らないが、これは最近の建築に成り殊に其の建築が學術上、技術上の當代の精粹を盡したものと見て差つかへないと思ひます、それが脆くも燒け盡して木造の古建築觀音堂が瓦一枚も損せずに殘りました。なほ比較して御覽になると四方の空地は淺草の觀音より帝大の構內が廣くとも狹からう筈はありません、樹木も多からうと少ないとは覺えません、殊に土地はズツト下町を離れてゐるから消防の餘裕も多かつた筈です――若し空地と樹木と消防の力が保存最大の條件としたならば觀音堂が先に燃えつくして帝大の圖書館が殘らなければならない筈ではありませんか』

『アハヽヽヽ』

その時一行の中から遽かに哄笑が湧き上りました。それは嘲笑でも無ければ感笑（變な熟字だが）でもありません。一種異樣の笑ひ聲でありました。膽汁質の脊廣は、ちつとも騷がずに演說口調の雄辯をつゞけます

『聞く處によると、あの際、淺草の觀音堂の消防に當つた人々は此の觀音樣を燒いてはならぬ、どうしても觀音の御堂を我等の力で守り通して見せると、それは決死の勇氣を以て消防に當つたさうです、それとあのお堂の膝元に避難に來た人々は燒かれなば此のお堂と諸共に死なば觀音樣と御一諸に……そこで、彼等は他の避難をすゝめても動かずに

吾堂の周圍に殉死の覺悟をきめて、大火に圍まれながら動かなかつた信仰は物すごくもあり崇嚴の極でもあつたと聞きました——諸君、書物は學者の生命であります。殊に帝大の圖書館の如きは生命を以てしても購ひ難きほどの貴重な國寶があつたかも知れません、消防の設備はもとより完全であつたでせう、學者がそれを守り、それと運命を共にするの高尚な犠牲心が淺草の觀音を守る市民と同じやうに行かなかつたのは何故でせう、これは千秋の恨事ではありませんか……』

一行は默々として、此の膽汁質の脊廣の雄辯を聞き流してゐる。

『學者がその寶庫を尊重すること市民が觀音を信仰するほどの熱があつたなら、あの圖書館は亡びずして濟んだでせう……無論我々は此の一例を以て科學は亡び信仰は殘るなんぞと高言したがるものではありませんが、その信と熱と力とは、たとへそれが迷信であらうとも正信であらうとも、その出つて來る處を、ずんと奧深く考へて見る必要があると思ひます——』

一行はなほ默々として此の膽汁質のいふ處を聞き流して蟻のやうに上つて行くうち

『皆さん此處が萩原大菩薩の頂上ですよ、大菩薩峠には云はゞ二つの頂上があつて、これが甲州方面の一つであります』

眞先に群を離れて進んだ制服の學生が峠の頂に立つて叫びました。

『御覽の通りこゝが大菩薩の一つの頂上であります、これから見渡す處の長尾、榛の木坂、姫の井といつた處を通つて向うに見ゆるあれが熊澤大菩薩——さあ事實上、どちらが本當の大菩薩峠の頂上かといへば、あちらの熊澤大菩薩がそれでありますが、名分上の頂は此處であります、こゝに近代までの物々交換のあとがありました、妙見のお堂も近年まで此處にあつたさうです、また昔しは此處に長兵衛小屋といふのがありましたさうです』

此處へ來ると制服の學生が一行の東道となつてしまいました。

自然、今までの宗教、科學、藝術等の混亂が一時にやんで學生の謙抑な案內ぶりに一同が聽從する。

『長兵工小屋といふのは何ですか』

『それは、此處に小屋をこしらへて木こり山かつをやつて住んでゐた男ださうですが稼業には追剝と人殺しもやつたさうです』

『それは物騒だ』

『時に机龍之助が巡禮を斬つたのは何處ですか』

『誰か知つてゐる者はありませんか』

『それは無論此處でせう熊澤ではありますまい』

『猿が大木から上下して、いたづらをしたやうに書いてありましたな』

『左様』

一行が頭上を見上げると其の邊には水ナラ榛の木、栗、白樺、古カンバ等の大木があります。

『どうですこの邊で一ぱいやりませうか』

『いつそ、あの熊澤大菩薩までお出になつて、ゆつくりとお休みになつては、いかゞですあそこの方が展望が利きます、それにまた、あれまでの道中がなか〲見物でございますから』

『ではさういふ事に』

一行は開きかけた用意の行厨を荷つて、所謂荻原大菩薩峠の頂から熊澤大菩薩の間の尾根を歩き出す。

音堂の周圍に殉死の覺悟をきめて、大火に圍まれながら動かなかつた信仰は物すごくもあり崇嚴の極でもあつたと聞きました――諸君、書物は學者の生命であります。殊に帝大の圖書館の如きは生命を以てしても購ひ難きほどの貴重な國寶があつたかも知れません、消防の設備はもとより完全であつたでせう、學者がそれを守り、それと運命を共にするの高尚な犧牲心が淺草の觀音を守る市民と同じやうに行かなかつたのは何故でせう、これは千秋の恨事ではありませんか……』

一行は默々として、此の膽汁質の脊廣の雄辯を聞き流してゐる。

『學者がその寶庫を尊重することと市民が觀音を信仰するほどの熱があつたなら、あの圖書館は亡びずして濟んだでせう……無論我々は此の一例を以て科學は亡び信仰は殘るなんぞと高言したがるものではありませんが、その信と熱と力とは、たとへそれが迷信であらうとも正信であらうとも、その由つて來る處を、ずんと奥深く考へて見る必要があると思ひます――』

一行はなほ默々として此の膽汁質のいふ處を聞き流して蟻のやうに上つて行くうち

『皆さん此處が萩原大菩薩の頂上ですよ、大菩薩峠には云はゞ二つの頂上があつて、これが甲州方面の一つであります』

眞先に群を離れて進んだ制服の學生が峠の頂に立つて叫びました。

『御覽の通りこゝが大菩薩の一つの頂上であります、これから見渡す處の長尾、榛の木坂、姫の井といつた處を通つて向うに見ゆるあれが熊澤大菩薩――さあ事實上、どちらが本當の大菩薩峠の頂上かといへば、あちらの熊澤大菩薩がそれでありますが、名分上の頂は此處であります、こゝに近代までの物々交換のあとがありました、妙見のお堂も近年まで此處にあつたさうです、また昔しは此處に長兵衛小屋といふのがありましたさうです』

此處へ來ると制服の學生が一行の東道となつてしまいました。
自然、今までの宗教、科學、藝術等の混亂が一時にやんで學生の謙抑な案内ぶりに一同が聽從する。
『長兵工小屋といふのは何ですか』
『それは、此處に小屋をこしらへて木こり山かつをやつて住んでゐた男ださうですが兼業には追剝と人殺しもやつたさうです』
『それは物騷だ』
『時に机龍之助が巡禮を斬つたのは何處ですか』
『誰か知つてゐる者はありませんか』
『それは無論此處でせう熊澤ではありますまい』
『猿が大木から上下して、いたづらをしたやうに書いてありましたな』
『左樣』
一行が頭上を見上げると其の邊には水ナラ榛の木、栗、白樺、古カンバ等の大木があります。
『どうですこの邊で一ぱいやりませうか』
『いつそ、あの熊澤大菩薩までお出になつて、ゆつくりとお休みになつては、いかゞですあそこの方が展望が利きます、それにまた、あれまでの道中がなか〳〵見物でございますから』
『ではさういふ事に』
一行は開きかけた用意の行厨を荷つて、所謂萩原大菩薩峠の頂から熊澤大菩薩の間の尾根を歩き出す。

制服の學生がいつも謙抑の態度でその案内者です。

『こりやあ素敵だ』

この道は、さして骨の折れないカヤトですから一行は恰も遊散氣取りで悠々と歩んで周圍の山巒の只ならぬ情景に見惚れるの餘裕が出来ました。

『どうです此のなだらかなカヤトのスロープと、あのクラシツクな立木の模樣、さながら古土佐の繪卷物をひろげたやうなのんびりした趣を此の峠の上で見出さうとは思ひかけませんでしたよ』

『この大菩薩の嶺からあの天狗棚山までの間の西側のスロープは、その溫雅な美しいながめに於て大菩薩に來るほどの人を心醉せしめる處のものであります、この邊を俗に姫の井といふのは、どういふいはれか知りませんが御覽なさい富士櫻が咲いてゐます、こゝにこんな美しい清水が滾々と湧いて居りますよ』

斯くて此の一行は眞黑な熊澤山の下、左に高く大菩薩嶺を仰ぐ處、峠の頂きに來ました。

そこには大菩薩峠、海拔七千尺と記したペンキ塗の小さな木標と、くづれかけた石の地藏が並んでゐる。

『藥山では峠の上は雪だといつてゐたがほとんど雪はありませんね』

『數日前までは此處が一尺ほどの積雪でありました』

『さあ休んで一ぱいやりませう』

その都度、その都度、一ぱいやりたがる男が一人ゐる。

そこで一行が、その行厨を開くべき地點を選擇してゐると以前の學生は、やはり少しく群を離れて大菩薩嶺の方面へ進んで行き、

『皆さん、もう少し此處を上らうではありませんか、惜しい事です、春だもんですから南アルプスの展望が充分に利かないで殘念です』

眞にそれは惜しい事でありました。大菩薩嶺上の大パノラマ。

この七千尺の大屛風の上からながめた甲府盆地の大景。南アルプスの壯大なる連脈。期待したそれ等が生憎漠々たる春霞に包まれて些とも姿を見せない位だから富士も丹澤山塊も奧秩父も多摩相模の分水方面も模糊として眠るが如き夢の靄に包まれてゐる。併し、この七千尺の大屛風の中に描かれた典雅にして明媚なる大和繪の數々は一行の人の心を陶然として醉はしむるに充分でありました。よつて必らずしもこれより多きを望むこと無く展望は空氣の冴えた秋冬の候に再遊を期することに一行が、ほとんど同意し、そこで峠よりは少し右へ寄つてカヤトの中、待つて來て置いたやうな面白い巖石の間に適當の座を占めて、そこで初めて行厨を開きました。

制服の學生の山案内は珍しいものでありました。この靑年は大菩薩連嶺を中心としての地理は猪鹿の通る細道までも心得てゐる樣子であります。まさしく此の一行の爲に、自分も興味を以て東道の役に當つたもので、此處に來ると、談論風生の登山家連も一切沈默して此の靑年の謙抑な案内ぶりに聽從の外術なきもののやうに見えました。

靑年は大菩薩連嶺の南面と北面との景色が全然一變してゐること、南面もしくは西面は此の通りなだらかな美しい景色であるのに北側には怖るべき威壓と陰慘との面影があること、大菩薩峠の道に小菅大菩薩と丹波山大菩薩との二つがあること。大菩薩峠にも親知らずがある事、「雁ケ腹摺山」といふ名の如何にも古朴にして藝術味に富んだ事、いつぞや土室澤（つちむろざは）と小金澤（こがねざは）とを振分ける尾根を通つて行くと枯れ落ちた林の中で三十貫もある鹿が小金澤の中に馳けて行つたのを見てすつかり嚴肅な氣持になつたといふこと、そんなやうな話に一行を傾聽させて、さてこれから連嶺を南に縱走し態

澤の森林を分けて天狗棚山に登り、そこで再び展望の望蜀を晴らさうといふことに一決しました。
最初に鹽山から馬で出て來た中折帽の男は、そこで馬を鹽山方面へ返し、一行とは離れてこれから武州方面へ小菅を指して下るといつて一行に別れを告げました。
道のりを云うと鹽山から大菩薩峠の上までは四里。大菩薩峠の上より小菅まで三里强。小菅から小河内まで三里、小河内から氷川まで三里。氷川から靑梅鐵道の終點である二俣尾まで四里。
その晩、旅人は小河内の鶴の湯といふ溫泉へ泊つて翌日二俣尾から汽車で東京へ歸りました。
改造社より創作一篇を寄稿せよとの希望なりけるが、本來、農を本業とするやつがれ、小說戲作を以て世にうたはるゝこと恐縮の至りなり。さりながら頭命そむき難きまゝに此の隨筆を捧げて以て責をふさぐ（大正一五、六、二）

小露西亞旅行

和田軌一郎

(一)

一九二二年七月下旬のことであつた。僕はエロシエンコと共に、モスコウから小露西亞に向けて出發した。

モスコウを立つた翌日の午后三時頃、僕等二人は太陽のかん〳〵照つてゐる眞青の空の下にぽつねんと立つてゐる、小さな古びたエレツの停車場に降りた。停車場の周圍には、ライ麥の畑が野末まで續いて、熱が吹く風に波を打つてゐた。遙か左の岡の上には　教會の尖塔がいくつも黄金色にきらきらと輝いてゐた。其處は市街であつて、眞白な建物が立ちならんでもゐた。市街の近くをうね〳〵と流れてゐる銀色の河には、牛の群が腰までひたつて、のどかに呼び交はしてゐた。而も停車場の側の石造の倉庫の日陰には、浮浪人が垢によごれはてた眞黒な腕や額を露出して、豚のやうにごろ〳〵寢轉がつてゐた。そして見ると其の唇には蠅がぶん〳〵飛び廻つてゐる。

僕等はこのエレツで、一週間小露西亞行の汽車を待たなければならなかつた。丁度其の頃は、一週間に一回よりほか發車しなかつたのである。それで滞在する爲に宿を求めて、塵の立つ一直線の道を、二人とぼ〳〵と歩いて行つた。露西亞の停車場は、大概町から二三哩は離れてゐる。この町も停車場から六哩ほど離れてゐる。實に不便だ。僕はたまらなく思つたので、エロシエンコに相談を持ちかけた。

『君、こんな重い荷物を持つて、五哩も六哩も僕は歩けないよ。馬車をたのんで、其れに乘つて行かう』

すると其の時、大きな荷物を片手で樂々と持つて、片手の杖では道をさぐりながら歩いてゐたエロシエンコは、僕を振向きもせずに。

『和田さん、なんですか。こんな荷物を持つて、直ぐそこまで歩けないんですか。馬車など贅澤です』

と僕の提案を一蹴し去つた。

『君、しかし六哩はたしかにあるよ』
　と念を押すと、
『なんでもありませんよ』
　と彼は空うそぶいてゐた。
　僕は盲目のくせに生意氣なことを云ふ奴だと思つた。渾心の勇氣を出して、默つたまゝ彼れの後からついて行つた。しかしあまりに荷物が重いので、二三丁行くか行かぬに、もう汗が額から頰にかけて流れ出した。だん〳〵呼吸まで苦しくなつて來た。僕としてはこの上もない瘦せ我慢を出して、なんとかして歩き切つてしまいたいと考へた。が、塵つぽい一直線の六哩からある道といへば、其の遠さはちよつと眺めただけでうんざりしてしまふ。しまいには僕は、どうしてもやりきれなくなつたので、荷物を道路にずどんと投げ出して、ものをも云はず、路上にしやがんでしまつた。
『和田さん、いけません。其の中にはこわれ物があるんです』
　エロシエンコは額に皺を寄せて、怒つたやうに云つた。
『僕、もうだめだ。歩けない……』
　僕は胸苦しさを感じながらやつと答へた。
『あなたは實際意氣地ないですね』
　彼れは疲れた樣子もなく平氣なものであつた。
『僕は、だつて駄馬ぢやない。こんなものを運搬することは出來ないよ。君は露西亞人だから、駄馬と同じなんだ。僕と同格ぢやないよ。ぐず〳〵云はないで馬をたのみたまへ』
　僕が爆發すると、彼はいらだゝしさうに、けれど微笑にまぎらして云つた。
『あなたは赤坊みたいですよ……』
　彼れも仕方なく荷物を下したので、二人は道端の青草の上で休息した。彼れは色々なことを僕に話しかけたが、僕は返事もしなかつた。暫時くして彼れは、道を急ぐもののやうに立ち上つて、僕をうながしたので、仕方なく僕は無言のまゝまた彼れに續いた。けれど五六丁歩くと、僕はまた休息を求めた。少し休息すると、鞭をあてられるやうにうながされてまた歩き出した。休み且つ歩き、それでも遂に丘の下の河の橋の袂まで來た。
　河のほとりには先刻停車場から見えた牛の群れは去つて、赤いルパシカを着たお爺さんが一人ポツねんと釣りをしてゐた。そして側には六七寸の川魚が、泥まみれになつて、五六匹轉がつてゐた。彼は熱心に水面の浮きを見つめてゐたが、エロシエンコ君と僕との足音を聞くと、頭を向けて不思議さうに、この遠來の旅人を見た。そして人のよさゝうな微笑を浮べて挨拶し

た。

『ホーチヤア（支那人の意味）どこから』

『莫斯克から』

僕が答へると、無愛想に鼻であしらつて、また視線を水面に投げた。

（二）

僕等は其の晩にエレツの町に着き、マキシム・ゴールキイの『どん底』の舞臺面のやうな、町端れのきたない旅館に泊つた。

部屋には破れた寢臺が二個あつて、頑丈な机と二脚の腰かけがあつた。僕は早速く極度の疲勞と渇をいやす可く、サモアールをたのんだ。頭髮の毛の縮れた、醜い、けれど悪い人ではなささうな主婦さんが、ちん／＼沸いてゐる奴を持つて來て來れた。そこで二人はトランクから、お茶や腸詰めやマスロ（油）を出して、干乾びたパンをかじりながら、殺風景な晩食をすませた。二人は殆ど無言に對坐してゐた。僕は話す元氣もなかつたが、變なこじれた氣持ちが、相互の心に漂つてゐたので、エロシエンコ君も默つてゐた。

僕は面白くもないので、窓に腰かけて、廣い野原を見渡した。暮色蒼然としてさつき歩いて來た道は遠く薄くらがりの中に消え、百姓が家路を急ぐ馬車のちやら／＼いふ鈴の音が聞えてゐた。河の面には白い霧がかゝつて、對岸の柳の木は朦朧として煙むつてゐた。僕はなんとはなしに寂しい旅愁を感ぜずにはをられなかつた。振り返つてエロシエンコ君をのぞくと、坐つた石油洋燈の燭影に、端然と坐つてゐる樣が、彫刻物でもあるかのやうにくらがりの中に浮き出て見えた。滅入るやうな寂しさから、僕はたゞ徒らに口笛を吹き鳴らして思ひを空に走せた。

『和田さん、退屈だから芝居に行きませんか』

突然エロシエンコ君が言葉をかけた。元來芝居は好きな僕のことだから、一も二もなく贊成した。

『何がかゝつてゐるのですか、君？』

と僕が訊ねると、誰れに何時の間に訊ねたものか、彼は既によく知つてゐた。

『ゴオゴリの「五月の夜」です。行きませう』

『ゴオゴリはいゝ、ぢや行かう』

二人は身仕度くもせず、其のまゝ宿を出た。途中エロシエンコ君は、少年時代に父親に連れられて、始めて故郷のウクライナから莫斯克に出る時、この町に滯在して、矢張り芝居を見物したことなどを、感慨深げに話して聞かした。

『君、しかし六哩はたしかにあるよ』
と念を押すと、
『なんでもありませんよ』
と彼は空うそぶいてゐた。

僕は盲目のくせに生意氣なことを云ふ奴だと思つた。渾心の勇氣を出して、默つたまゝ彼れの後からついて行つた。しかしあまりに荷物が重いので、二三丁行くか行かぬに、もう汗が額から頬にかけて流れ出した。だん／＼呼吸まで苦しくなつて來た。僕としてはこの上もない痩せ我慢を出して、なんとかして歩き切つてしまいたいと考へた。が、埃つぽい一直線の六哩からある道といへば、其の遠さはちよつと眺めただけでうんざりしてしまふ。しまいには僕は、どうしてもやりきれなくなつたので、荷物を道路にずどんと投げ出して、ものをも云はず、路上にしやがんでしまつた。

『和田さん、いけません。其の中にはこわれ物があるんです』
エロシエンコは額に皺を寄せて、怒つたやうに云つた。
『僕、もうだめだ。歩けない……』
僕は胸苦しさを感じながらやつと答へた。
『あなたは實際意氣地ないですね』
彼れは疲れた樣子もなく平氣なものであつた。

『僕は、だつて駄馬ぢやない。こんなものを運搬することは出來ないよ。君は露西亞人だから、駄馬と同じなんだ。僕と同格ぢやないよ。ぐず／＼云はないで馬をたのみたまへ』

僕が爆發すると、彼はいらだゝしさうに、けれど微笑にまぎらして云つた。

『あなたは赤坊みたいですよ……』

彼れも仕方なく荷物を下したので、二人は道端の青草の上で休息した。彼れは色々なことを僕に話しかけたが、僕は返事もしなかつた。暫時くして彼れは、道を急ぐもののやうに立ち上つて、僕をうながしたので、仕方なく僕は無言のまゝまた彼れに續いた。けれど五六丁歩くと、僕はまた休息を求めた。少し休息すると、鞭をあてられるやうにうながされてまた歩き出した。休み且つ歩き、それでも遂に丘の下の河の橋の袂まで來た。

河のほとりには先刻停車場から見えた牛の群れは去つて、赤いルパシカを着たお爺さんが一人ポツねんと釣りをしてゐた。そして側には六七寸の川魚が、泥まみれになつて、五六匹轉がつてゐた。彼は熱心に水面の浮きを見つめてゐたが、エロシエンコ君と僕との足音を聞くと、頭を向けて不思議さうに、この遠來の旅人を見た。そして人のよさゝうな微笑を浮べて挨拶し

た。

『ホーチャア（支那人の意味）どこから』

『莫斯克から』

僕が答へると、無愛想に鼻であしらつて、また視線を水面に投げた。

（二）

僕等は其の晩にエレツの町に着き、マキシム・ゴールキイの『どん底』の舞臺面のやうな、町端れのきたない旅館に泊つた。部屋には破れた寢臺が二個あつて、頑丈な机と二脚の腰かけがあつた。僕は早速く極度の疲勞と渇をいやす可く、サモアールをたのんだ。頭髮の毛の縮れた、醜い、けれど惡い人ではなささうな主婦さんが、ちん／＼沸いてゐる奴を持つて來て來れた。そこで二人はトランクから、お茶や腸詰めやマスロ（油）を出して、干乾びたパンをかじりながら、殺風景な晩食をすませた。二人は殆ど無言に對坐してゐた。僕は話す元氣もなかつたが、變なこじれた氣持ちが、相互の心に漂つてゐたので、エロシエンコ君も默つてゐた。

僕は面白くもないので、窓に腰かけて、廣い野原を見渡した。暮色蒼然としてさつき歩いて來た道は遠く薄くらがりの中に消え、百姓が家路を急ぐ馬車のちやら／＼いふ鈴の音が聞えてゐた。河の面には白い靄がかゝつて、對岸の柳の木は朦朧として煙むつてゐた。僕はなんとはなしに寂しい旅愁を感ぜずにはをられなかつた。振り返つてエロシエンコ君をのぞくと、坐つた石油洋燈の燭影に、端然と坐つてゐる樣が、彫刻物でもあるかのやうにくらがりの中に浮き出て見えた。滅入るやうな寂しさから、僕はたゞ徒らに口笛を吹き鳴らして思ひを空に走せた。

「和田さん、退屈だから芝居に行きませんか」

突然エロシエンコ君が言葉をかけた。元來芝居は好きな僕のことだから、一も二もなく贊成した。

「何がかゝつてゐるのですか、君？」

と僕が訊ねると、誰れに何時の間に訊ねたものか、彼は旣によく知つてゐた。

『ゴオゴリの「五月の夜」です。行きませう』

『ゴオゴリはいゝ、ぢや行かう』

二人は身仕度くもせず、其のまゝ宿を出た。途中エロシエンコ君は、少年時代に父親に連れられて、始めて故郷のウクライナから莫斯克に出る時、この町に滯在して、矢張り芝居を見物したことなどを、感慨深げに話して聞かした。

劇場の前まで來ると、エロシエンコ君は自分の財布から金を出して、其れを僕に手渡した。僕は其れを受け取つて切符を買ひに入つた。

『僕に切符を二枚呉れたまへ』

僕が少し横柄に切符賣の女に云ふと、エロシエコ君が側に寄つて來て。

『あなた、婦人に對してそんな亂暴な言葉を使つてはいけません。私が買ひます』

と云つて、金を僕の手から取戻して自分で求めた。

『君、女だつて特別に叮嚀にする必要はない』

僕は自分の過失を認めないでもなかつたが、むつとしたので、投げつけるやうにさう云つてやつた。

『露西亞の習慣は違ひますよ』

エロシエンコ君はむきになつて、きめつけるやうに云つた。

『…………』

僕等は暗い階段を、三階の三等席に上つて行つた。場内には澤山の見物人がゐて、蒸暑い人いきれが感じられた。他の人の邪魔にならないやうに靜かに席に就いて、舞台面を眺めると、今ゴオゴリの『五月の夜』の二幕目をやつてゐるところであつた。

舞台にはウクライナの素樸な服裝をした若い一人の青年が、深い悩みにとざされたものの表情をして、バラライカを弾きながら、切な戀の歌を唄つてゐる。其の側には奇麗な娘が、もの悲しさうな様子をして、其の音を聞いてゐる。暫時くすると歌がやんで、青年は相手の娘をじいつと見入る。そしてお互に力なき微笑をもらす。娘は立ち上つて、青年に熱い接物をする。背影の木蔭には、其の青年の父親が、其れを驚き見詰めてゐる。彼れの嫉妬に燃える眼で見詰められてゐることを知り、娘は非常に恐怖し苦悩にたえかねて叫ぶ。

『あなたのお父さんも、妾を……妾を、愛してゐるのです。……あゝ！、妾はどうしたらよいのでせう』

青年は其れを聞き、愕然として立ち上り、長い頭髪の毛をかきむしり、身も世もあらぬ思ひにさいなまれ苦悶する。そして幕が靜かに下り、一面明るくなると、觀客の拍手が湧き起つた。エロシエンコ君は『ブラオ！』と時々調子はづれに叫んで、叱りつけられたり笑はれたりした。

(三)

翌朝十時頃に起きて朝飯を食ふと、二人して町端れの市場に行つた。近郊の百姓が、西瓜や林檎や桃やトマト等の果實を、

山積した大きな馬車を、何十台といふほど引いて來て、そこで盛に商賣をしてゐた。其のまた値段が馬鹿に安いので驚いた。林檎や桃やトマトが、大きなバケツに山盛り一杯十錢であつた。僕等は大きな籠を持つてゐたので、目ざとい百姓は、賣りつけようとうるさくすゝめた。それで生々とした赤いトマトを、バケツに一杯と馬の頭位ある西瓜を三つばかり買つた。籠に入れて持つて見ると、あまり重いので、其の邊にあつた棒を籠に通して、其の兩端を二人で擔つた。

『支那人と盲目……盲目と支那人……』

道端の子供等は、がやがや云つて、不思議さうに僕の後からついて來た。

『この邊は果實は安いんだね』

とエロシエンコ君に云ふと、彼は答へた

『私の方は、誰れも錢を出して買ふ者はありません』

旅館に歸つて早速く二人で西瓜を割つた。中は血のやうに赤くて、少し熟し過ぎてゐた。しかし其の汁には、砂糖のやうな甘味があつた。

午后七時頃に僕等はまた旅館を出て、町へ散步に行つた。町には比較的大商店が立ちならんでゐて、サモアールが飾窓の中に澤山陳列してあつた。僕がエロシエンコ君に聞いたところによると、この邊は露西亞で一番多くサモアールの製造される安價なところだといふことであつた。さうした町から河の方へ走つてゐる急傾斜な道を、僕等は降りて行つた。すると露西亞特有に、多くの散在してゐる教會の鐘樓から、鐘が一齊に鳴り出した。其の音樂的な而も神秘的な音が、靜かに默してゐる黃昏の空で交錯し融合して、一種異樣な感銘を與へた。

『和田さん、チエホフのやうな無神論者の小說家でも、この黃昏の鐘の莊嚴さには、自然と頭がさがつて、敬虔な宗教的な氣持になつたと告白してます』とエロシエンコ君が如何にもしんみりとした調子で云つた。そして續けた『そこにゆくと、日本の鐘はやかましくつて、なんの感じもありませんね』

僕は最初の言葉には共鳴したが、最後の日本の鐘は騷々しいばかりで、なんの感じも與へないといふことに對しては、大いに不滿があつた。第一この男が露西亞に歸つてから、非常に民族的になつて、お國自慢ばかりするのが氣に食はなかつた。それで僕はわざと冷笑的に云つてやつた。

『別に僕は、敬虔な感じなんかありませんよ』

『あなたのやうな鈍感な人は判らないんだ』

エロシエンコもむつとして云つた。

『君は詩人だから、凡人と異つて、銳敏な感覺を所有してゐる

と見える。それで色々センチメンタルな情緒に醉ふことが出來るのかも知れないが、僕なんかには教會の鐘よりは、工場で勞働者が鐵板をなぐる音の方が愉快に感ずるよ』

とひにくれて出たら。

『あなたは亂暴だ』

と云つて默つてしまつた。

然しながら僕は僕で考へさせられた。この男は露西亜に來てから、何故日本を罵倒するんだらう。盲目詩人だの世界人だのと云つて、日本の青年が歡迎して、講演會や演說會に招待して、つまらぬ講演を聞いたり、内容のない童話を雜誌に發表さしたりしたのに、一體何が不滿だつたのか。この男が五六年放浪したヨオロツパや印度の人達は、どうであつたか。この放浪者をどんなに遇したか。この男を世話した新宿の中村屋などは、二年間も食はして、なんの不自由もさせなかつたではないか。そんな親切な人が、どこに澤山あつただらうか。そりや最後の追放に就いては、官憲を憎むか知れないが、其れは吾々のやつたことではない………なぞと僕が考へてゐると。

『和田さん………』と彼れが寂しさうに云つた『傳統や習慣や自然が異るスラブ民族の私と、あなたはどうしても一致せない點がある人ぢやないでせうか』それから瞑想的な表情になつて續けた『私は日本ではかなり色々な人達から愛されました。しかし常に何か一つの溝がある氣がして、ぴつたりと觸れ合ふことが出來なかつたのです。だからどんなにか私は寂しかつたのですよ』

彼れの力を入れた寂しげな言葉に、僕はすつかり同情し共鳴した。

『僕も露西亜に來て、君と同じことを感じました。あんなに憧憬れてゐた國にも拘らず、だん〳〵幻滅の悲哀を感じてるんです』

僕が正直に話すと、彼は急に打ち解けて、僕のだらりとした手をとつて固く握つた。

『歸りませう。そしてまた芝居に行きませう』

（四）

太陽の强い光が直射してゐる眞晝であつた。彼等はあまりの暑氣に、河に出て砂の上に轉がつてゐた。エロシエンコ君は火のやうに焼けた砂を、愉快げにあびてゐた。

『和田さん、泳ぎませう。きつと氣持ちがよいですよ』

彼れは脱衣を躊躇してゐた僕を促した。見ると十幾人の子供等が、淺瀨でじやぶ〳〵泳いだり、水をかけ合つたりして、無

邪氣に騷いでゐる。三四丁先の對岸では、若い百姓娘の群れが、恥しげに周圍に目をくばりながら、着物を脱いで、白い肌を出してゐるのもあれば、勢ひよく河に飛び込んだのもあつた。また其の娘達から三四間河下には、うづくまつて洗濯をしてゐる婆さんも見えた。しかし元來僕は、信州の山國育ちでよくは泳ぎを知らない上に、露西亞に來てから心臟が弱つてゐるので、なんとなく不安であつたから、泳ぐ氣にはなれなかつた。さうした極めてのんきな景色を眺めながら、ポケツトから卷煙草を出して火をつけた。すると一人の男が近か寄つて來て、無遠慮に眞黑な手を突き出した。

『煙草を下さい』

河でさつきまで垢を洗ひ落してゐた浮浪人だ。一本呉れてやると、『有難たう』と云つて、のそ〳〵自分が着物を脱いた所の方へ歸つて行つた。

『僕は泳ぎますよ』

既に裸體になつてゐたエロシエンコ君は、元氣よく河の中にざぶんと音を立てゝ飛び込んだ。飛沫が僕の顏にかゝつて、着物が少し濡れた。僕が手巾を出して拭いてゐる內に、彼れは水面から顏を出してはあ〳〵笑つてゐた。そして河の中流に、どん〳〵泳いで行く。盲目のくせになんて冒險をやるんだ、どちらが岸で淺瀨だか判る筈がないのに、中流に出て疲勞したらどうするつもりなのだ、もし溺死でもしたら、眼開きの僕に全責任がある。全責任があるばかりではなく、彼れの財布のお蔭で旅してゐる僕は困つてしまふ。そこで僕は、あらん限りの大聲で怒鳴つた。

『君!、そんなに遠くまで行くと危險だから、もつと近くへ來たまへよ!!』

一度怒鳴り、二度怒鳴り、三度目位にやつと聞えた。聞えたけれど、ちつとも效能がなかつた。

『なに大丈夫ですよ』

彼れは大膽に平氣で、水をくゞつてゐる。さすが僕もあきれ返つて、友達の心配も知らぬ奴は、どうなと勝手にしろと度胸をきめて見物してゐた。

『盲目蛇におぢずつてことが、日本にあるが、全く君のことだね』

彼れが泳ぎ歸つて來たのは、それから暫時くしてからのことであつた。

『和田さん、心配しなくつても、私は子供の時から故鄉の河で泳いでゐたから上手なんですよ』

彼れはタオルで身體を拭きながら、自信ありげに而も誇らか

に云つて、氣持よささうに笑つた。

『さう。しかし今日はもうこれでやめて呉れたまへ』と僕は引きとめて、對岸の娘の群れに目を轉じた『君、向ふで若い娘が澤山泳いでゐるぜ。素的に豐滿な肉體だね』

『あなたは裸體の娘ばかり見てゐたんでせう』

と彼れは人の氣も知らずに云つた。

『いや、さうぢやないよ。しかし日本では見られないからさ』

こんなことを言つて笑つてゐる内に、彼れはすつかり着物を着、大切な杖を握つた。

『あゝ！ 咽喉が渇いた。歸つて西瓜を喰べませう』

共の日僕等二人は、常になく氣がよく合つて仲よく暮した。

(五)

僕等は晝間きたない旅館の一室にゐる時は、常に寢轉がつて議論をしてゐた。其の議論は主としてプロレタリア文學に就いての見解の相異から起つた。エロシエンコ君は興奮すると、顏を一面赤くして、房々した長い頭髮をしきりにかき上げながら論じた。

彼れの見解に從ふと、プロレタリア文學とは、必ずしもプロレタリア出の作家によつて書かれたものではなかつた。勞働者が自己の經て來た實生活をたゞ單に描寫しても、其れが直ちに藝術品ではあり得なかつた。天才的な藝術家は、階級を越へてどんな社會生活でも描くことが出來る。さうした靈感と異常な想像力とを有してゐる。それで日本に於て見られるがやうな流行非流行によつて生ずる收入の如何から、作家をブルだプロだときめることは正しいことではない。ましてプロレタリア作家が、たゞ革命だの反逆だのと云つて、作品に最上級の言葉を盛つて、其れでよいと思つてゐるならば、藝術は實に空虛なもので、一種の革命的遊戲に過ぎないといふのであつた。

僕は或る意味で彼れに贊成した。なるほど露西亞文壇のプウシキンにせよ、ゴオゴリにせよ、ツルゲーネフにせよ、トルストイにせよ、彼等は皆な貴族地主階級の出身であつたが、其の作品は自己の階級の擁護とか辯護とかは決してしてゐない。寧ろ亡び行かんとする自己の階級の廢頽し腐敗した生活を赤裸に描き出し、且つ一方に於ては農奴や其の他の貧しき者の生活者を描き、世間に訴へてゐる。これ等の作家の根本思想は、人道主義であつて、十九世紀中葉の露西亞資本主義經濟組織が生んだ他のプロレタリア作家、ドストエフスキイ、ネクラソフ、コロレンコ等と相異するところはない。共に勇ましく社會惡と戰つてゐる。かうしたことを互に興奮して、大きな聲で論じ合つ

てゐた。聲は恐らく戶外にもれたに相違ない。

議論が終ると直ぐ、入口の戶を强く打つものがあるので、僕が立つて開けると、赤い正帽をかぶつたT・M・Y（國家保安部）のお役人が、大きな帳づらをのつそり出した。

『同志、旅行劵を見せて吳れ』

と彼れは部屋に入つて來て、役人らしく橫柄に云つた。そこで僕は、コンミンテルの證明書を示した。すると如何にも不思議さうに、僕の顏と旅劵とを等分に見くらべながら、今度は打つて變つた叮嚀な態度で。

『あなたは日本のボルシビエキイですか』

『僕は日本のモナアリヒイスト（×××××）だ』

僕がからかつてやると。

『飮談はいけない』

と哄笑して、エロシエンコ君の方を向き、彼れの旅劵を檢べた。

『はあ、君は支那から來たのかね。では……』役人は指先で咽喉のところを二三度打つて見せながら續けた『これをもつてないか』

『酒はありませんよ』

とエロシエンコ君が答へると、彼は失望したやうに机の上の煙草を一本とつて火をつけ、そして云つた。

『君等はさつきツルゲーネフがどうのゴオゴリがどうのと云つてゐたが、小說を讀んだことがあるのかい』

『日本で露西亞の有名な作家の小說は、僕は大抵讀んでゐるよ』

僕は餘程前から、この役人が隣接の部屋に忍び寄つて、壁に耳をつけ、異樣な二人の議論を聞いてゐたのだなあといふことが考へられた。

『このエレツの町から三十哩行くと、ツルゲーネフの別莊が保存されてゐるから行つて見たまへ』

最後に彼れはさう云つて出て行つた。

（六）

『和田さん、明日の朝はこの宿を立つのですよ。エレツの名殘りに、今晚も芝居を見物に行きませう。なんでもゴオゴリの「檢閱官」をやつてゐるさうです。きつと面白いですよ』

『ゴオゴリの「檢閱官」と云へば、非常に有名なものぢやありませんか。僕は日本にゐた時にも讀んだことがありましたが、こつちへ來てからも、あんまり有名で評判なので、もう一度讀みましたよ。いゝものだと思ひます』

に云つて、氣持よささうに笑つた。

『さう。しかし今日はもうこれでやめて吳れたまへ』と僕は引きとめて、對岸の娘の群れに目を轉じた『君、向ふで若い娘が澤山泳いでゐるぜ。素的に豐滿な肉體だね』

『あなたは裸體の娘ばかり見てゐたんでせう』

と彼れは人の氣も知らずに云つた。

『いや、さうぢやないよ。しかし日本では見られないからさ』

こんなことを言つて笑つてゐる內に、彼れはすつかり着物を着、大切な杖を握つた。

『あゝ！　咽喉が渴いた。歸つて西瓜を喰べませう』

其の日僕等二人は、常になく氣がよく合つて仲よく暮した。

（五）

僕等は晝間きたない旅館の一室にゐる時は、常に寢轉がつて議論をしてゐた。其の議論は主としてプロレタリア文學に就いての見解の相異から起つた。エロシエンコ君は興奮すると、顏を一面赤くして、房々した長い頭髮をしきりにかき上げながら論じた。

彼れの見解に從ふと、プロレタリア文學とは、必ずしもプロレタリア出の作家によつて書かれたものではなかつた。勞働者が自己の經て來た實生活をたゞ單に描寫しても、其れが直ちに藝術品ではあり得なかつた。天才的な藝術家は、階級を越へてどんな社會生活でも描くことが出來る。さうした靈感と異常な想像力とを有してゐる。それで日本に於て見られるがやうな流行非流行によつて生ずる收入の如何から、作家をブルだプロだときめることは正しいことではない。ましてプロレタリア作家が、たゞ革命だの反逆だのと云つて、作品に最上級の言葉を盛つて、其れでよいと思つてゐるならば、藝術は實に空虛なもので、一種の革命的遊戲に過ぎないといふのであつた。

僕は或る意味で彼れに贊成した。なるほど露西亞文壇のプウシキンにせよ、ゴオゴリにせよ、ツルゲーネフにせよ、トルストイにせよ、彼等は皆な貴族地主階級の出身であつたが、其の作品は自己の階級の擁護とか辯護とかは決してしてゐない。寧ろ亡び行かんとする自己の階級の廢頹し腐敗した生活を赤裸に描き出し、且つ一方に於ては農奴や其の他の貧しき者の生活者を描き、世間に訴へてゐる。これ等の作家の根本思想は、人道主義であつて、十九世紀中葉の露西亞資本主義經濟組織が生んだ他のプロレタリア作家、ドストエフスキイ、ネクラソフ、コロレンコ等と相異するところはない。共に勇ましく社會惡と戰つてゐる。かうしたことを互に興奮して、大きな聲で論じ合つ

てゐた。聲は恐らく戶外にもれたに相違ない。

議論が終ると直ぐ、入口の戶を強く打つものがあるので、僕が立つて開けると、赤い正帽をかぶつたT・M・Y(國家保安部)のお役人が、大きな帳づらをのつそり出した。

『同志、旅行劵を見せて異れ』

と彼れは部屋に入つて來て、役人らしく横柄に云つた。そこで僕は、コンミンテルの證明書を示した。すると如何にも不思議さうに、僕の顏と旅劵とを等分に見くらべながら、今度は打つて變つた叮嚀な態度で。

『あなたは日本のボルシビエキイですか』

『僕は日本のモナアリヒイスト(××××)だ』

僕がからかつてやると。

『戲談はいけない』

と哄笑して、エロシエンコ君の方を向き、彼れの旅劵を檢べた。

『はあ、君は支那から來たのかね。では……』役人は指先で咽喉のところを二三度打つて見せながら續けた『これをもつてないか』

『酒はありませんよ』

とエロシエジコ君が答へると、彼は失望したやうに机の上の煙草を一本とつて火をつけ、そして云つた。

『君等はさつきツルゲーネフがどうのゴオゴリがどうのと云つてゐたが、小說を讀んだことがあるのかい』

『日本で露西亞の有名な作家の小說は、僕は大抵讀んでゐるよ』

僕は餘程前から、この役人が隣接の部屋に忍び寄つて、壁に耳をつけ、異樣な二人の議論を聞いてゐたのだなあといふことが考へられた。

『このエレツの町から三十哩行くと、ツルゲーネフの別莊が保存されてゐるから行つて見たまへ』

最後に彼れはさう云つて出て行つた。

(六)

『和田さん、明日の朝はこの宿を立つのですよ。エレツの名殘りに、今晩も芝居を見物に行きませう。なんでもゴオゴリの「檢閱官」をやつてゐるさうです。きつと面白いですよ』

『ゴオゴリの「檢閱官」と云へば、非常に有名なものぢやありませんか。僕は日本にゐた時にも讀んだことがありましたが、こつちへ來てからも、あんまり有名で評判なので、もう一度讀みましたよ。いゝものだと思ひます』

『それではこれから行つたら、丁度時間がよいから、直ぐ行きませう。そしてエレツの名殘りにしませうよ』

エロシエンコはさういくらかセンチメンタルに云つて、部屋の隅においてあつた杖を手さぐり求めた。

二人は其の晩も國民劇場の三階の三等席へ行つた。三等席と云へば、日本のものも露西亜のものも別に變りがない。飛行器の上からものを見たやうに、何も彼もが變つて見えて、役者の大切な表情なぞは殆んど全く判らない。實はエロシエンコ君が、三等切符を買ふ度びに、僕は少からず不平を感じてゐたのであるが、それでも僕の金ではないので、がらになくそれまでは遠慮して默つて見物してゐたのであつた。ところが今、僕が舞台面をのぞいて見るに、ゴオゴリの「検閲官」だといふに、而も何が何だかさつぱり判らない。第一台辭が聞き取れない。尚ほよく注意して見ると、判らないのも無理がない。俳優が小露西亜人で、ウクライナ語でやつてゐるのだ。しかし台辭が判らないでも、せめて役者の表情だけでも判れば、多少は慰められないものでもないが、たゞ役者の頭だけが見えてゐたのでは、僕としてはやりきれない苦痛である。エロシエンコ君はと云へば、自分の故郷の言葉だから判らないことはない、すつかり興に入つて、時に叫んでゐた。

『ブラオ!!……』

『君、僕にはちつとも面白くないから、もつとよい席に代らうぢやないかね』

僕が我慢しきれなくなつて云ふと、彼は大して耳もかさずに。

『そんな贅澤を云ふものではありませんよ』

と簡單にきめつけ、心玆にあらずと云つた程度に熱中しつゝ、耳を傾けてゐた。それでゐて『ぢや僕は歸るよ』と云ひ出すと、『まあ待ちなさい』とひきとめる。僕はすつかり怒つて云つた。露西亜語で云ふと、周圍の奴等に嘲笑される。心配があつたから、日本語で云つた。

『君は盲目で臺辭だけを聞けばいゝんだから、三等席でも一等席でも同じことかも知れないが、僕は三階から役者の頭ばかり見てゐたのでは、ちつとも面白くないよ』

『あなたは贅澤ばかりいふのでいけませんよ』

彼は同じやうなことを繰り返して、矢張り心玆にあらず。舞臺に耳傾けてゐた。

『そら君に金を出して貰ふんだから、文句ないがね……』

僕はおさまらない不平を口走りながらも、餘儀なく我慢してしまつた。しかしいよ〳〵芝居がはね、劇場を出て、銀をちり

ばめたやうに星の輝いてゐる空を仰ぎ、清々しい凉風に觸れると、多少滑稽になり不平を忘れて云つた。

『君と僕と二人でやつと一人前の人間なんだね。僕は目明きだが、言葉が判らなかつたし、君は盲目だから、ものは見えなかつたし、そして惡いことには利害が一致しなかつたのだよ』

（七）

翌朝僕等はエレツの町に別れを告げて、マキシム・ゴーリキイ（日本で云ふなら馬や牛を乘せる貨車、その列車を小說家ゴーリキイの名で呼ぶ）で、いよ〳〵目的地に向つて出發した。十時間ほどシベリヤにあるやうな殺風景な荒寥たる大平原を横斷すると、ウクライナの國境に入つた。景色は一變して美しく、小さな綠の山や川が繪のやうな情趣を添へてゐた。そして其の山や川の間の靜かな平地には、親しみのある農家が散在してゐるのが見え、なんとなく南國的な明るさがあつた。またオランダの其れのやうな風車が、そちこちにあつて、風に吹かれてのどかに回轉してゐた。而も廣い平原のはての地平線には、夏の入道雲が怪物のやうに徐々に動いてゐた。

『君もうウクライナに來たぜ。何時に君の村に着くのだね』

『明朝ですよ』

毛布をかぶつて寢てゐたエロシエンコ君は、さう云つて寢返りを打つた。

僕等の貨車には十五六人の百姓と其の家族の娘や子供が乘つてゐた。彼等はズツクの袋に、きたないシヤツやオシメなどを澤山入れ、尙ほ其の上に黑パンや豚肉を同居させ、其れを引き出してかぢつてゐた。動物のやうに見苦しく西瓜を喰べながら、パンを口に投げ込んでゐるのもあつた。娘等はもう珍しさうに異人と僕とエロシエンコ君とを、ぬすみ見ては隣りの娘と囁き合ひ、そしてくす〳〵笑つた。

『……支那人（キタイツ）!!……』

彼女等は地方語で囁くので、僕には聞き取れなかつたが、しかし其れだけは判つた。他に惡意からの批評でもしてゐるのではないかと、僕は少し氣になつた。

暫時くする内に汽車は、林檎や西瓜や玉子や豚肉など澤山賣つてゐる或る停車場に着いた。僕は汽車を降りて、もの賣りの側に行つた。一人の百姓の婆さんが、大きな籠に入れて、附近の自分の家から飛び出て來て、買ふことを頻りに僕にすゝめた。この邊の百姓は、汽車が着くと、自分の家でつくつたものを持ち出して商賣をする。中には野原から、様々な色の名も知れない花を花束にして、一錢二錢で賣つてゐる悧巧者もある。

其れを女や若い男女が買つて胸につける、互に手をとつて停車時間を散歩する。時々プラットホームを出て遠くに出かけ、樂しんでゐる内に、汽車がぼうつと煙を吐いて、氣の毒にも置き去りを喰はす。今まで元氣一杯にしてゐた女は、大きな涙をぼろ／＼流して泣き出す。けれど泣いても間に合はない。男が慰めて、乘せて行かれた荷物は次の停車場に降すやうに、電報を打つ。こんな悲喜劇は、よく各所の停車場で實演されるところのものであつた。

僕は婆さんから玉子を買ふと、直ぐ自分の列車に歸つた。そしてそれをエロシエンコ君と、汽車の疲れをいやす可く飲んだ。

僕等がエロシエンコ君の生れた村から、二里ほど離れた停車場のスタレヤスコウといふ小さな驛に着いたのは、其の晩であつた。僕等は驛の附近の木賃宿に泊つた。僕は寢ようとしたが、蚊の群れに攻めたてられて、どうしても寢つかれなかつた。側にエロシエンコ君を見ると、窓から射す月光をあびて、安らかに眠つてゐる。八年振りで故鄕の土を踏んで、明日はいよ／＼兩親や兄弟に會へるのだ。氣のせいかはち切れるやうな喜びが、彼れの顏に浮んでゐるやうに僕には思はれた。他人のことながら自分のことのやうに思はれて、僕も故鄕のことなどを思ひ浮べ、ます／＼寢られなかつた。僕は立ち上つて窓外を見渡した。寢る前に教へて與れたエロシエンコ君の村の家々の微かな焰影が、總てのものを埋めてゐる夜のくらがりの中に赤い點になつて、なつかしく見えてゐた。

(八)

スタレアスコウといふ驛から未明に立つて、午前八時頃にエロシエンコ君の生れたガラジユシユ村に着いた。戸數が四五十つきりない村で、裏手には松林の丘が續いてゐた。また岸に柳が澤山繁茂してゐる河が、村端れを流れてゐて、そこには、鵞鳥や牛が水にひたつてゐるのが見えた。河を越して向ふには、果てしないライ麥の畑が、地平線までひろがつてゐた。そして其の廣い畑には、まだ朦々と朝霧がかゝつてゐた。僕等が村端れまで來た時、一人の百姓が一台の牧草を推高く積んだ馬車をひいて來たのに會つた。

『お早う……』

と言葉をかけて僕等を珍らしげに見た。特に麥藁帽子をかぶり黑のルバシカを着た、そして杖をついたエロシエンコ君を注意深げに見た。そして彼れは二三間通り過ぎてから、大聲で呼びかけた。

『ワシリイでないか!』

『さうです。あなたは?』

『わしはイルマライフだよ』と云つて百姓は大急ぎで歩み寄り、如何にもなつかしげに手をとつて云つた『おゝ!。お前は不幸者だ。何年目に歸つて來た。村は昔と變つたぞ。……お前の家は燒けた………』

『お父さんやお母さんは丈夫ですか』

『あゝ、丈夫だ。安心さつしやい。だが年をとつたぞ。早く行きなさい。わしは晩に行くから』それから百姓は、可愛い裸足の十三四の子供を呼んで命じた『ワシリイが來た。貴樣案内してやれ』

この年老ひた百姓は、若い時分にはエロシエンコ君の家で下男をしてゐた正直な男で、妻君を持ち暇をとつて、今では獨立した百姓をしてゐるものであつた。案内役に立つた子供は、ちよこ〳〵駈つて行き、村の人達は不思議さうに、戸口に立つて僕等を迎へた。

三四丁先の小さなみすぼらしい家から、若い百姓娘が矢のやうに走つて來た。そしてエロシエンコ君に、ぶつかるやうにして抱きついた。

『おゝ!!、ワシリイ……』

『おゝ!!、ニイナア……丈夫で………』

二人はいつまでも時間を忘れたやうに、無言のまゝ接吻してゐた。

やがて妹さんに導かれて、家の門口まで行くと、そこには年老ひた母親が、感激にふるへながら立つてゐた。

『おゝ!!、ワシリイ………』

『お母さん!!………』

母と子は八年振りに會つて、無言の永い接吻をした。母親の眼からは、大きな涙の滴がぽろ〳〵こぼれて來た。側で見てゐた僕までが悲しかつた。八年の間旅から旅へと、盲目の身で世界を放浪して、今久振りになつかしい母の腕に抱かれてゐる赤坊のやうな我がエロシエンコ君の心持ちと、不具の子供だけに倍可愛がつたに違ひないこの男を旅に立たして、雨につけ風につけ心配してゐたのに、而も突然今健康で歸つて來たのを見た老母の喜びはどうか。僕は僕で急に自分の故郷のことなぞ思はれて、つくねんと立ちつくしてゐた。すると。

『よくこの盲目を面倒みて、連れて來て呉れました』

とお母さんに心からの感謝をされた。

外出してゐた父親も歸り、家族が全部晩餐の食卓に集つた。エロシエンコ君は獨逸、英國、印度、日本、支那などの八年間の放浪生活を、得意になつて物語つた。そして最後に北京大學の教授になつたことを語ると、父母を始め家族の者は皆な驚き喜んだ。そして『ほんとう？　ほんとう？』と、幾度も僕の證言を求めた。僕が尚ほ、日本に於て詩集を出したことゝそして多くの青年に愛されたことなどを、少し誇大に語ると、老年の夫婦は、目を見合し、相好をくづして、息子の出世を喜んだ。妹さんなぞは、喜びのあまりに飛び上つて、小さな本箱から古びて破けてゐる色の變つた雜誌を、引きずり出して來て僕に話しかけた。

『これはワシリイが、子供の時の莫斯克からとつてゐた文學雜誌で、アンドレエフやゴーリキイの小説が載つてゐるものです。妾が毎日讀んで聞かしたんです。今では幸福な思出になりました』

さうかうしてゐる内に、村の知人が一人集り二人集りして、小さな部屋は身動きすることも出來なかつた。暗い洋燈の焔影にそれ等の人々を見ると、皆な大事な相談會でもしてゐるやうに熱心に、エロシエンコ君の方を見つめてゐた。視線の中心になつたエロシエンコ君は少し上氣して、各國の風俗習慣などに就いて物語つた。善良なそして單純な百姓達は、まるで夢の中に誘はれたやうに、現をぬかして耳を傾けてゐた。そして時時、この村に始めて來た日本人だと云つて、僕の顏を穴のあくほど見入つた。僕はきまり惡くなつたので、弟のコリイヤ君と、無邪氣ないゝ青年と別な部屋に立つて、蠟燭を一本ともして話し始めた。

『君は何故學校に行かないんです』

『僕は學問が嫌ひで、百姓が好きです』

彼れは大きな毛ののびた頭をかきむしりながら率直に答へた。其れが野趣を帶びて、如何にもウクライナの自然人らしく見えた。コリイヤ君は村の小學校を出ると、ウクライナの首都キエフ醫科大學で勉強してゐる姉さんのところに行つて、中學校に入學したが、末子で我儘に育つたので、勉強が嫌ひで毎日喧嘩ばかりしてゐたので、姉さんもしまいに愛憎をつかし、兩親のもとに送り返した。性來彼れの健康は、百姓に適してゐた。若い農夫の中では、一段すぐれた力を持つてゐたので、村の娘達からはコリイヤ君は、非常に歡迎され、結局嫌ひな勉強をするよりは幸福であつた。彼れは近々戀してゐる娘と結婚することになつてゐると云つて喜んでゐた。現在の家では一間よりないので、嫁を貰へば小さな家を建てなければならないが、

貧乏で金がないなどと心配げに物語つた。

エロシエンコ君の家は、現在では藁ぶきで小屋のわびしい一間つきりの家で、馬と牛とがたつた一疋つきりしかゐないが、革命前まではこの地で一番の金持で、非常に廣大な土地と澤山の馬や牛とがあつて、商賈の居酒屋の方もかなり繁昌し、總てに不足なく暮してゐた。ところが革命になつて、其れ等のものは總て沒收されてしまつた。其の上不幸なことには、家は火災の爲めにすつかり燒けてしまつた。昔の物質的に裕福な生活を追憶して、年老のお母さんなぞは僕にまで時々愚痴をこぼして云つた。

『土地はとり上げられた……家は燒けた……あゝ、莫斯克には金持ちがありますかい……日本つてところはどうですかい……』

（十）

其の晩、コリイヤ君に伴はれて、僕は散歩に行つた。そして村に住んでゐる彼れの小學校の先生の家を訪ねた。彼れは僕を、日本から來た社會主義者だと紹介した。村夫子の感ある先生老夫婦は、喜んでサモアールを立てゝ僕を歡待して與れた。先生は日本風俗習慣などをもの珍らしげに僕に訊ね、それから現在の彼等の境遇に就いて話した。

この地方には一九一九年に、白軍のデニキンと赤軍との間斷なき交戰が行はれた。また大杉榮君が紹介された無政府主義將軍マールトフなどの馬賊が出沒して、盛に掠奪强盜强姦が行はれた。其の爲め土地はさん〲荒されたので、極度の饑えと荒廢に陷つてゐた、そしてやうやくボルシビエキイの威力が及ぶに至り、よくなつてから僅か一年半位にしかならないといふ事であつた。從つて人々がまだ少からず動搖してゐて、兒童が學校に來るので困るとこぼしてゐた。そして兒童に新しい國歌、インテルナチヨナルを教へても、どうしても宗教心の强い親達が、昔の國家より歌はせないので仕方ないと云つた。また月給を四ケ月分貰つてゐないので、實に食ふや食はずの生活であること、ソビエット露西亞は、是非第二國民の養成者であると小學校教師を充分好遇しなくては駄目だなぞと、不幸を遠慮なく云つた。僕は氣持よく隔意なく話して、夜更けに先生の宅を辭した。滯在中に是非もう一度遊びに來て下さいと、老夫婦は親切に云つて與れた。

僕等が家に歸ると、エロシエンコ君が、僕に氣の毒さうに云つた。

『和田さん、家に寢台が二つきりありません……』

エロシエンコ君は、思ひ切つて云ひ得ないで、怒つたやうに

音堂の周圍に殉死の覺悟をきめて、大火に圍まれながら動かなかつた信仰は物すごくもあり崇嚴の極でもあつたと聞きました——諸君、書物は學者の生命であります。殊に帝大の圖書館の如きは生命を以てしても購ひ難きほどの貴重な國寶があつたかも知れません、消防の設備はもとより完全であつたでせう、學者がそれを守り、それと運命を共にするの高尚な犧牲心が淺草の觀音を守る市民と同じやうに行かなかつたのは何故でせう、これは千秋の恨事ではありませんか……』

一行は默々として、此の膽汁質の脊廣の雄辯を聞き流してゐる。

『學者がその寶庫を尊重することと市民が觀音を信仰するほどの熱があつたなら、あの圖書館は亡びずして濟んだでせう……無論我々は此の一例を以て科學は亡び信仰は殘るなんぞと高言したがるものではありませんが、その信と熱と力とは、たとへそれが迷信であらうとも正信であらうとも、その由つて來る處を、ずんと奥深く考へて見る必要があると思ひます——』

一行はなほ默々として此の膽汁質のいふ處を聞き流して蟻のやうに上つて行くうち

『皆さん此處が萩原大菩薩の頂上ですよ、大菩薩峠には云はゞ二つの頂上があつて、これが甲州方面の一つであります』

眞先に群を離れて進んだ制服の學生が峠の頂に立つて叫びました。

『御覽の通りこゝが大菩薩の一つの頂上であります、これから見渡す處の長尾、榛の木坂、姫の井といつた處を通つて向うに見ゆるあれが熊澤大菩薩——さあ事實上、どちらが本當の大菩薩峠の頂上かといへば、あちらの熊澤大菩薩がそれであリますが、名分上の頂は此處であります、こゝに近代までの物々交換のあとがありました、妙見のお堂も近年まで此處にあつたさうです、また昔しは此處に長兵衛小屋といふのがありましたさうです』

此處へ來ると制服の學生が一行の東道となつてしまいました。

自然、今までの宗教、科學、藝術等の混亂が一時にやんで學生の謙抑な案内ぶりに一同が聽從する。

『長兵工小屋といふのは何ですか』

『それは、此處に小屋をこしらへて木こり山かつをやつて住んでゐた男ださうですが稼業には追剝と人殺しもやつたさうです』

『それは物騷だ』

『時に机龍之助が巡禮を斬つたのは何處ですか』

『誰か知つてゐる者はありませんか』

『それは無論此處でせう熊澤ではありますまい』

『猿が大木から上下して、いたづらをしたやうに書いてありましたな』

『左樣』

一行が頭上を見上げると其の邊には水ナラ榛の木、栗、白樺、古カンバ等の大木があります。

『どうですこの邊で一ぱいやりませうか』

『いつそ、あの熊澤大菩薩までお出になつて、ゆつくりとお休みになつては、いかゞですあそこの方が展望が利きます、それにまた、あれまでの道中がなか〳〵見物でございますから』

『ではさういふ事に』

一行は開きかけた用意の行厨を荷つて、所謂萩原大菩薩峠の頂から熊澤大菩薩の間の尾根を歩き出す。

制服の學生がいつも謙抑の態度でその案内者です。

『こりやあ素敵だ』

この道は、さして骨の折れないカヤトですから一行は恰も遊散氣取りで悠々と歩んで周圍の山巒の只ならぬ情景に見惚れるの餘裕が出ました。

『どうです此のなだらかなカヤトのスロープと、あのクラシツクな立木の模樣、さながら古土佐の繪卷物をひろげたやうなのんびりした趣を此の峠の上で見出さうとは思ひかけませんでしたよ』

『この大菩薩の嶺からあの天狗棚山までの間の西側のスロープは、その溫雅な美しいながめに於て大菩薩に來るほどの人を心酔せしめる處のものであります、この遊を俗に姫の井といふのは、どういふいはれか知りませんが御覽なさい富士櫻が咲いてゐます、こゝにこんな美しい淸水が滾々と湧いて居りますよ』

斯くて此の一行は眞黑な熊澤山の下、左に高く大菩薩嶺を仰ぐ處、峠の頂きに來ました。

そこには大菩薩峠、海拔七千尺と記したペンキ塗の小さな木標と、くづれかけた石の地藏が並んでゐる。

『蘇山では峠の上は雪だといつてゐたがほとんど雪はありませんね』

『數日前までは此處が一尺ほどの積雪でありました』

『さあ休んで一ぱいやりませう』

その都度、その都度、一ぱいやりたがる男が一人ゐる。

そこで一行が、その行厨を開くべき地點を選擇してゐると以前の學生は、やはり少しく群を離れて大菩薩嶺の方面へ進んで行き、

『皆さん、もう少し此處を上らうではありませんか、惜しい事です、春だもんですから南アルプスの展望が充分に利かないで殘念です』

眞にそれは惜しい事でありました。大菩薩嶺上の大パノラマ。

この七千尺の大屛風の上からながめた甲府盆地の大景。南アルプスの壯大なる連脈。期待したそれ等が生憎漠々たる春霞に包まれて些とも姿を見せない位だから富士も丹澤山塊も奥秩父も多摩相模の分水方面も模糊として眠るが如き夢の扉に包まれてゐる。併し、この七千尺の大屛風の中に描かれた典雅にして明媚なる大和繪の數々は一行の人の心を陶然として醉はしむるに充分でありました。よつて必らずしもこれより多きを望むこと無く展望は空氣の冴えた秋冬の候に再遊を期することに一行が、ほとんど同意し、そこで峠よりは少し右へ寄つてカヤトの中、待つて來て置いたやうな面白い巖石の間に適當の座を占めて、そこで初めて行厨を開きました。

制服の學生の山案内は香しいものでありました。この青年は大菩薩連嶺を中心としての地理は猪鹿の通る細道までも心得てゐる樣子であります。まさしく此の一行の爲に、自分も興味を以て東道の役に當つたもので、此處に來ると、談論風生の登山家連も一切沈默して此の青年の謙抑な案内ぶりに聽從の外術なきもののやうに見えました。

青年は大菩薩連嶺の南面と北面との景色が全然一變してゐること、南面もしくは西面は此の通りなだらかな美しい景色であるのに北側には怖るべき威厭と陰慘との面影があること、大菩薩峠の道に小菅大菩薩と丹波山大菩薩との二つがあること。大菩薩峠にも親知らずがある事、「雁ケ腹摺山」といふ名の如何にも古朴にして藝術味に富んだ事、いつぞや土室澤(つちむろざは)と小金澤(こがねざは)とを振分ける尾根を通つて行くと枯れ落ちた林の中で三十貫もある鹿が小金澤の中に駈けて行つたのを見てすつかり厳粛な氣持になつたといふこと、そんなやうな話に一行を傾聽させて、さてこれから連嶺を南に縦走し態

澤の森林を分けて天狗棚山に登り、そこで再び展望の望蜀を晴らさうといふことに一決しました。

最初に鹽山から馬で出て來た中折帽の男は、そこで馬を鹽山方面へ返し、一行とは離れてこれから武州方面へ小菅を指して下るといつて一行に別れを告げました。

道のりを云うと鹽山から大菩薩峠の上までは四里。大菩薩峠の上より小菅まで三里强。小菅から小河内まで三里、小河内から氷川まで三里。氷川から青梅鐵道の終點である二俣尾まで四里。

その晩、旅人は小河内の鶴の湯といふ温泉へ泊つて翌日二俣尾から汽車で東京へ歸りました。

改造社より創作一篇を寄稿せよとの希望なりけるが、本來、農を本業とするやつがれ、小說戯作を以て世にうたはるゝこと恐縮の至りなり。さりながら顧命そむき難きまゝに此の隨筆を捧げて以て責をふさぐ（大正一五、六、二）

小露西亜旅行

和田軌一郎

（一）

一九二二年七月下旬のことであつた。僕はエロシエンコと共に、モスコウから小露西亜に向けて出發した。

モスコウを立つた翌日の午后三時頃、僕等二人は太陽のかん／＼照つてゐる眞晝の空の下にぽつねんと立つてゐる、小さな古びたエレッツの停車場に降りた。停車場の周圍には、ライ麥の畑が野末まで續いて、穂が吹く風に波を打つてゐた。遙か左の岡の上には　教會の尖塔がいくつも黄金色にきらきらと輝いてゐた。其處は市街であつて、眞白な建物が立ちならんでもゐた。市街の近くをうね／＼と流れてゐる銀色の河には、牛の群が腰までひたつて、のどかに呼び交はしてゐた。而も停車場の側の石造の倉庫の日蔭には、浮浪人が垢によごれはてた眞黒な腕や顔を露出して、豚のやうにごろ／＼澤山寢轉がつてゐた。そして見ると其の唇には蠅がぶん／＼飛び廻つてゐる。

僕等はこのエレッツで、一週間小露西亜行の汽車を待たなければならなかつた。丁度其の頃は、一週間に一回よりほか發車しなかつたのである。それで滯在する爲に宿を求めて、驛の立つ一直線の道を、二人とぼ／＼と歩いて行つた。露西亜の停車場は、大概町から二三哩は離れてゐる。この町も停車場から六哩ほど離れてゐる。實に不便だ。僕はたまらなく思つたので、エロシエンコに相談を持ちかけた。

「君、こんな重い荷物を持つて、五哩も六哩も僕は歩けないよ。馬車をたのんで、其れに乘つて行かう」

すると其の時、大きな荷物を片手で樂々と持つて、片手の杖では道をさぐりながら歩いてゐたエロシエンコは、僕を振向きもせずに。

「和田さん、なんですか。こんな荷物を持つて、直ぐそこまで歩けないんですか。馬車など贅澤です」

と僕の提案を一蹴し去つた。

『君、しかし六哩はたしかにあるよ』

と念を押すと、

『なんでもありませんよ』

と彼は空うそぶいてゐた。

僕は盲目のくせに生意氣なことを云ふ奴だと思つた。渾心の勇氣を出して、默つたまゝ彼れの後からついて行つた。しかしあまりに荷物が重いので、二三丁行くか行かぬに、もう汗が額から頰にかけて流れ出した。だん〴〵呼吸まで苦しくなつて來た。僕としてはこの上もない痩せ我慢を出して、なんとかして歩き切つてしまいたいと考へた。が、塵つぽい一直線の六哩からある道といへば、其の遠さはちよつと眺めただけでうんざりしてしまふ。しまいには僕は、どうしてもやりきれなくなつたので、荷物を道路にずどんと投げ出して、ものをも云はず、路上にしやがんでしまつた。

『和田さん、いけません。其の中にはこわれ物があるんです』

エロシエンコは額に皺を寄せて、怒つたやうに云つた。

『僕、もうだめだ。歩けない……』

僕は胸苦しさを感じながらやつと答へた。

『あなたは實際意氣地ないですね』

彼れは疲れた樣子もなく平氣なものであつた。

『僕は、だつて駄馬ぢやない。こんなものを運搬することは出來ないよ。君は露西亞人だから、駄馬と同じなんだ。僕と同格ぢやないよ。ぐず〳〵云はないで馬をたのみたまへ』

僕が爆發すると、彼はいらだゝしさうに、けれど微笑にまぎらして云つた。

『あなたは赤坊みたいですよ……』

彼れも仕方なく荷物を下したので、二人は道端の青草の上で休息した。彼れは色々なことを僕に話しかけたが、僕は返事もしなかつた。暫時くして彼れは、道を急ぐもののやうに立ち上つて、僕をうながしたので、仕方なく僕は無言のまゝまた彼れに續いた。けれど五六丁歩くと、僕はまた休息を求めた。少し休息すると、鞭をあてられるやうにうながされてまた歩き出した。休み且つ歩き、それでも遂に丘の下の河の橋の袂まで來た。

河のほとりには先刻停車場から見えた牛の群れは去つて、赤いルパシカを着たお爺さんが一人ポツねんと釣りをしてゐた。そして側には六七寸の川魚が、五六匹塵まみれになつて、五六匹轉がつてゐた。彼は熱心に水面の浮きを見つめてゐたが、エロシエンコ君と僕との足音を聞くと、頭を向けて不思議さうに、この遠來の旅人を見た。そして人のよさゝうな微笑を浮べて挨拶し

た。

『ホーチャア（支那人の意味）どこから』

『莫斯克から』

僕が答へると、無愛想に鼻であしらつて、また視線を水面に投げた。

（二）

僕等は其の晩にエレツの町に着き、マキシム・ゴールキイの『どん底』の舞臺面のやうな、町端れのきたない旅館に泊つた。

部屋には破れた寢臺が二個あつて、頑丈な机と二脚の腰かけがあつた。僕は早速く極度の疲勞と渴をいやす可く、サモアールをたのんだ。頭髮の毛の縮れた、醜い、けれど悪い人ではなささうな主婦さんが、ちんちん沸いてゐる奴を持つて來て呉れた。そこで二人はトランクから、お茶や腸詰めやマスロ（油）を出して、干乾びたパンをかじりながら、殺風景な晩食をすませた。二人は殆ど無言に對坐してゐた。僕は話す元氣もなかつたが、變なこじれた氣持ちが、相互の心に漂つてゐたので、エロシエンコ君も默つてゐた。

僕は面白くもないので、窓に腰かけて、廣い野原を見渡した。暮色蒼然としてさつき歩いて來た道は遠く薄くらがりの中に消え、百姓が家路を急ぐ馬車のちやらちやらいふ鈴の音が聞えてゐた。河の面には白い霧がかゝつて、對岸の柳の木は朦朧として煙むつてゐた。僕はなんとはなしに寂しい旅愁を感ぜずにはをられなかつた。振り返つてエロシエンコ君をのぞくと、尖つた石油洋燈の灯影に、端然と坐つてゐる樣が、彫刻物でもあるかのやうにくらがりの中に浮き出て見えた。滅入るやうな寂しさから、僕はたゞ徒らに口笛を吹き鳴らして思ひを空に走せた。

「和田さん、退屈だから芝居に行きませんか」

突然エロシエンコ君が言葉をかけた。元來芝居は好きな僕のことだから、一も二もなく贊成した。

「何がかゝつてゐるのですか、君？」

と僕が訊ねると、誰れに何時の間に訊ねたものか、彼は既によく知つてゐた。

『ゴオゴリの「五月の夜」です。行きませう』

『ゴオゴリはいゝ、ぢや行かう』

二人は身仕度くもせず、其のまゝ宿を出た。途中エロシエンコ君は、少年時代に父親に連れられて、始めて故郷のウクライナから莫斯克に出る時、この町に滯在して、矢張り芝居を見物したことなどを、感概深げに話して聞かした。

劇場の前まで來ると、エロシエンコ君は自分の財布から金を出して、其れを僕に手渡した。僕は其れを受け取つて切符を買ひに入つた。

『僕に切符を二枚異れたまへ』

僕が少し橫柄に切符賣の女に云ふと、エロシエコ君が側に寄つて來て。

『あなた、婦人に對してそんな亂暴な言葉を使つてはいけません。私が買ひます』

と云つて、金を僕の手から取戾して自分で求めた。

『君、女だつて特別に叮嚀にする必要はない』

僕は自分の過失を認めないでもなかつたが、むつとしたので、投げつけるやうにさう云つてやつた。

『露西亞の習慣は違ひますよ』

エロシエンコ君はむきになつて、きめつけるやうに云つた。

『…………』

僕等は暗い階段を、三階の三等席に上つて行つた。場內には澤山の見物人がゐて、蒸暑い人いきれが感じられた。他の人の邪魔にならないやうに靜かに席に就いて、舞台面を眺めると、今ゴオゴリの『五月の夜』の二幕目をやつてゐるところであつた。

舞台にはウクライナの素撲な服裝をした若い一人の青年が、深い惱みにとざされたものの表情をして、バラライカを彈きながら、切な戀の歌を唄つてゐる。其の側には奇麗な娘が、もの悲しさうな樣子をして、其の音を聞いてゐる。暫時くすると歌がやんで、青年は相手の娘をじいつと見入る。そしてお互に力なき微笑をもらす。娘は立ち上つて、青年に熱い接物をする。背影の木蔭には、其の青年の父親が、其れを驚き見詰めてゐる。彼れの嫉妬に燃える眼で見詰められてゐることを知り、娘は非常に恐怖し苦惱にたえかねて叫ぶ。

『あなたのお父さんも、妾を……妾を、愛してゐるのです。……あゝ！、妾はどうしたらよいのでせう』

青年は其れを聞き、愕然として立ち上り、長い頭髮の毛をかきむしり、身も世もあらぬ思ひにさいなまれ苦悶する。そして幕が靜かに下り、一面明るくなると、觀客の拍手が湧き起つた。エロシエンコ君は『ブラオ！』と時々調子はづれに叫んで、叱りつけられたり笑はれたりした。

(三)

翌朝十時頃に起きて朝飯を食ふと、二人して町端れの市場に行つた。近郊の百姓が、西瓜や林檎や桃やトマト等の果實を、

山積した大きな馬車を、何十台といふほど引いて來て、そこで空に商賣をしてゐた。其のまた値段が馬鹿に安いので驚いた。林檎や桃やトマトが、大きなバケツに山盛り一杯十錢であつた。僕等は大きな籠を持つてゐたので、目ざとい百姓は、賣りつけようとうるさくすゝめた。それで生々とした赤いトマトを、バケツに一杯と馬の顏位ある西瓜を三つばかり買つた。籠に入れて持つて見ると、あまり重いので、其の邊にあつた棒を籠に通して、其の兩端を二人で擔つた。

『支那人と盲目……盲目と支那人……』

道端の子供等は、がやがや云つて、不思議さうに僕の後からついて來た。

『この邊は果實は安いんだね』

とエロシエンコ君に云ふと、彼は答へた

『私の方は、誰れも錢を出して買ふ者はありません』

旅館に歸つて早速く二人で西瓜を割つた。中は血のやうに赤くて、少し熟し過ぎてゐた。しかし其の汁には、砂糖のやうな甘味があつた。

午后七時頃に僕等はまた旅館を出て、町へ散歩に行つた。町には比較的大商店が立ちならんでゐて、サモアールが飾窓の中に澤山陳列してあつた。僕がエロシエンコ君に聞いたところによると、この邊は露西亞で一番多くサモアールの製造される安價なところだといふことであつた。さうした町から河の方へ走つてゐる急傾斜な道を、僕等は降りて行つた。すると露西亞特有に、多くの散在してゐる教會の鐘樓から、鐘が一齊に鳴り出した。其の音樂的な而も神秘的な音が、靜かに默してゐる黄昏の空で交錯し融合して、一種異樣な感銘を與へた。

『和田さん、チエホフのやうな無神論者の小說家でも、この黄昏の鐘の莊嚴さには、自然と頭がさがつて、敬虔な宗教的な氣持になつたと告白してます』とエロシエンコ君が如何にもしんみりとした調子で云つた。そして續けた『そこにゆくと、日本の鐘はやかましくつて、なんの感じもありませんね』

僕は最初の言葉には共鳴したが、最後の日本の鐘は騷々しいばかりで、なんの感じも與へないといふことに對しては、大いに不滿があつた。第一この男が露西亞に歸つてから、非常に民族的になつて、お國自慢ばかりするのが氣に食はなかつた。それで僕はわざと冷笑的に云つてやつた。

『別に僕は、敬虔な感じなんかありませんよ』

『あなたのやうな鈍感な人は判らないんだ』

エロシエンコもむつとして云つた。

『君は詩人だから、凡人と異つて、銳敏な感覺を所有してゐる

と見える。それで色々センチメンタルな情緒に醉ふことが出來るのかも知れないが、僕なんかには教會の鐘よりは、工場で勞働者が鐵板をなぐる音の方が愉快に感ずるよ』

　とひにくれて出たら。

『あなたは亂暴だ』

　と云つて默つてしまつた。

　然しながら僕は僕で考へさせられた。この男は露西亞に來てから、何故日本を罵倒するんだらう。盲目詩人だの世界人だのと云つて、日本の青年が歡迎して、講演會や演說會に招待して、つまらぬ講演を聞いたり、内容のない童話を雜誌に發表さしたりしたのに、一體何が不滿だつたのか。この男が五六年放浪したヨオロッパや印度の人達は、どうであつたか。この放浪者をどんなに遇したか。この男を世話した新宿の中村屋などは、二年間も食はして、なんの不自由もさせなかつたではないか。そんな親切な人が、どこに澤山あつただらうか。そりや最後の追放に就いては、官憲を恨むか知れないが、其れは吾々のやつたことではない……なぞと僕が考へてゐると。

『和田さん……』と彼れが寂しさうに云つた『傳統や習慣や自然が異るスラブ民族の私と、あなたはどうしても一致せない點がある人ぢやないでせうか』それから瞑想的な表情になつて續けた『私は日本ではかなり色々な人達から愛されました。しかし常に何か一つの溝がある氣がして、ぴつたりと觸れ合ふことが出來なかつたのです。だからどんなにか私は寂しかつたのですよ』

　彼れの力を入れた寂しげな言葉に、僕はすつかり同情し共鳴した。

『僕も露西亞に來て、君と同じことを感じました。あんなに憧憬れてゐた國にも拘らず、だん／＼幻滅の悲哀を感じてるんです』

　僕が正直に話すと、彼は急に打ち解けて、僕のだらりとした手をとつて固く握つた。

『歸りませう。そしてまた芝居に行きませう』

（四）

　太陽の强い光が直射してゐる眞晝であつた。彼等はあまりの暑氣に、河に出て砂の上に轉がつてゐた。エロシエンコ君は火のやうに焼けた砂を、愉快げにあびてゐた。

『和田さん、泳ぎませう。きつと氣持ちがよいですよ』

　彼れは脱衣を躊躇してゐた僕を促した。見ると十幾人の子供等が、淺瀨でじやぶ／＼泳いだり、水をかけ合つたりして、無

邪氣に騷いでゐる。三四丁先の對岸では、若い百姓娘の群れが、恥しげに周圍に目をくばりながら、着物を脫いで、白い肌を出してゐるのもあれば、勢ひよく河に飛び込んだのもあつた。また其の娘達から三四間河下には、うづくまつて洗濯をしてゐる婆さんも見えた。しかし元來僕は、信州の山國育ちでよくは泳ぎを知らない上に、露西亞に來てから心臟が弱つてゐるので、なんとなく不安であつたから、泳ぐ氣にはなれなかつた。さうした極めてのんきな景色を眺めながら、ポケットから卷煙草を出して火をつけた。すると一人の男が近か寄つて來て、無遠慮に眞黑な手を突き出した。

『煙草を下さい』

河でさつきまで垢を洗ひ落してゐた浮浪人だ。一本與れてやると、『有難たう』と云つて、のそ〳〵自分が着物を脫いだ所の方へ歸つて行つた。

『僕は泳ぎますよ』

既に裸體になつてゐたエロシエンコ君は、元氣よく河の中にざぶんと音を立てゝ飛び込んだ。飛沫が僕の顏にかゝつて、着物が少し濡れた。僕が手巾を出して拭いてゐる內に、彼れは水面から顏を出してはあ〳〵笑つてゐた。そして河の中流に、どん〳〵泳いで行く。盲目のくせになんて冒險をやるんだ、どちらが岸で淺瀨だか判る筈づがないのに、中流に出て疲勞したらどうするつもりなのだ。もし溺死でもしたら、眼開きの僕に全責任がある。全責任があるばかりではなく、彼れの財布のお蔭で旅してゐる僕は困つてしまふ。そこで僕は、あらん限りの大聲で怒鳴つた。

『君!、そんなに遠くまで行くと危險だから、もつと近くへ來たまへよ!』

一度怒鳴り、二度怒鳴り、三度目位にやつと聞えた。聞えたけれど、ちつとも效能がなかつた。

『なに大丈夫ですよ』

彼れは大膽に平氣で、水をくゞつてゐる。さすが僕もあきれ返つて、友達の心配も知らぬ奴は、どうなと勝手にしろと度胸をきめて見物してゐた。

『盲目蛇におぢずつてことが、日本にあるが、全く君のことだね』

彼れが泳ぎ歸つて來たのは、それから暫時くしてからのことであつた。

『和田さん、心配しなくつても、私は子供の時から故鄕の河で泳いでゐたから上手なんですよ』

彼れはタオルで身體を拭きながら、自信ありげに而も誇ら

に云つて、氣持よささうに笑つた。

『さう。しかし今日はもうこれでやめて吳れたまへ』と僕は引きとめて、對岸の娘の群れに目を轉じた『君、向ふで若い娘が澤山泳いでゐるぜ。素的に豐滿な肉體だね』

『あなたは裸體の娘ばかり見てゐたんでせう』

と彼れは人の氣も知らずに云つた。

『いや、さうぢやないよ。しかし日本では見られないからさ』

こんなことを言つて笑つてゐる内に、彼れはすつかり着物を着、大切な杖を握つた。

『あゝ！ 咽喉（かわ）が渇いた。歸つて西瓜を喰べませう』

其の日僕等二人は、常になく氣がよく合つて仲よく暮した。

（五）

僕等は實聞きたない旅館の一室にある時は、常に寢轉がつて議論をしてゐた。其の議論は主としてプロレタリア文學に就いての見解の相異から起つた。エロシエンコ君は興奮すると、顏を一面赤くして、房々した長い頭髮をしきりにかき上げながら論じた。

彼れの見解に從ふと、プロレタリア文學とは、必ずしもプロレタリア出の作家によつて書かれたものではなかつた。勞働者が自己の經て來た實生活をたゞ單に描寫しても、其れが直ちに藝術品ではあり得なかつた。天才的な藝術家は、階級を越へてどんな社會生活でも描くことが出來る。さうした靈感と異常な想像力とを有してゐる。それで日本に於て見られるがやうな流行非流行によつて生ずる收入の如何から、作家をブルだプロだときめることは正しいことではない。ましてプロレタリア作家が、たゞ革命だの反逆だのと云つて、作品に最上級の言葉を盛つて、其れでよいと思つてゐるならば、藝術は實に空虛なもので、一種の革命的遊戲に過ぎないといふのであつた。

僕は或る意味で彼れに贊成した。なるほど露西亞文壇のプウシキンにせよ、ゴオゴリにせよ、ツルゲーネフにせよ、トルストイにせよ、彼等は皆な貴族地主階級の出身であつたが、其の作品は自己の階級の擁護とか辯護とかは決してしてゐない。寧ろ亡び行かんとする自己の階級の廢頹し腐敗した生活を赤裸に描き出し、且つ一方に於ては農奴や其の他の貧しき者の生活者を描き、世間に訴へてゐる。これ等の作家の根本思想は、人道主義であつて、十九世紀中葉の露西亞資本主義經濟組織が生んだ他のプロレタリア作家、ドストエフスキイ、ネクラソフ、コロレンコ等と相異するところはない。共に勇ましく社會惡と戰つてゐる。かうしたことを互に興奮して、大きな聲で論じ合つ

てゐた。僕は恐らく戸外にもれたに相違ない。

議論が終ると直ぐ、入口の戸を強く打つものがあるので、僕が立つて開けると、赤い正帽をかぶつたT・M・Y(國家保安部)のお役人が、大きな帳づらをのつそり出した。

『同志、旅行券を見せて呉れ』

と彼れは部屋に入つて來て、役人らしく横柄に云つた。そこで僕は、コンミンテルの證明書を示した。すると如何にも不思議さうに、僕の顔と旅券とを等分に見くらべながら、今度は打つて變つた叮嚀な態度で。

『あなたは日本のボルシビエキイですか』

『僕は日本のモナアリヒイスト(×××××)だ』

僕がからかつてやると。

『戯談はいけない』

と哄笑して、エロシエンコ君の方を向き、彼れの旅券を檢べた。

『はあ、君は支那から來たのかね。では……』役人は指先で咽喉のところを二三度打つて見せながら續けた『これをもつてないか』

『酒はありませんよ』

とエロシエンコ君が答へると、彼は失望したやうに机の上の煙草を一本とつて火をつけ、そして云つた。

『君等はさつきツルゲーネフがどうのゴオゴリがどうのと云つてゐたが、小説を讀んだことがあるのかい』

『日本で露西亞の有名な作家の小説は、僕は大抵讀んでゐるよ』

僕は餘程前から、この役人が隣接の部屋に忍び寄つて、壁に耳をつけ、異樣な二人の議論を聞いてゐたのだなあといふことが考へられた。

『このエレツの町から三十哩行くと、ツルゲーネフの別莊が保存されてゐるから行つて見たまへ』

最後に彼れはさう云つて出て行つた。

(六)

『和田さん、明日の朝はこの宿を立つのですよ。エレツの名殘りに、今晩も芝居を見物に行きませう。なんでもゴオゴリの「檢閲官」をやつてゐるさうです。きつと面白いですよ』

『ゴオゴリの「檢閲官」と云へば、非常に有名なものぢやありませんか。僕は日本にゐた時にも讀んだことがありましたが、こつちへ來てからも、あんまり有名で評判なので、もう一度讀みましたよ。いゝものだと思ひます』

『それではこれから行つたら、丁度時間がよいから、直ぐ行きませう。そしてエレツの名残りにしませうよ』

エロシエンコはさういくらかセンチメンタルに云つて、部屋の隅においてあつた杖を手さぐり求めた。

二人は其の晩も國民劇場の三階の三等席へ行つた。三等席と云へば、日本のものも露西亞のものも別に變りがない。飛行器の上からものを見たやうに、何も彼もが變つて見えて、役者の大切な表情なぞは殆んど全く判らない。實はエロシエンコ君が、三等切符を買ふ度びに、僕は少からず不平を感じてゐたのであるが、それでも僕の金ではないので、がらになくそれまでは遠慮して默つて見物してゐたのであつた。ところが今、僕が舞台面をのぞいて見るに、ゴオゴリの「檢閲官」だといふに、而も何が何だかさつぱり判らない。第一台辭が聞き取れない。尙ほよく注意して見ると、判らないのも無理がない。俳優が小露西亞人で、ウクライナ語でやつてゐるのだ。しかし台辭が判らないでも、せめて役者の表情だけでも判れば、多少は慰められないもので もないが、たゞ役者の頭だけが見えてゐたのでは、僕としてはやりきれない苦痛である。エロシエンコ君はと云へば、自分の故鄉の言葉だから判らないことはない、すつかり興に入つて、時に叫んでゐた。

『ブラオ!!……』

『君、僕にはちつとも面白くないから、もつとよい席に代らうぢやないかね』

僕が我慢しきれなくなつて云ふと、彼は大して耳もかさずに。

『そんな贅澤を云ふものではありませんよ』

と簡單にきめつけ、心玆にあらずと云つた程度に熱中しつゝ、耳を傾けてゐた。それでゐて『ぢや僕は歸るよ』と云ひ出すと、『まあ待ちなさい』とひきとめる。僕はすつかり怒つて云つた。露西亞語で云ふと、周圍の奴等に嘲笑される。心配があつたから、日本語で云つた。

『君は盲目で臺辭だけを聞けばいゝんだから、三等席でも一等席でも同じことかも知れないが、僕は三階から役者の頭ばかり見てゐたのでは、ちつとも面白くないよ』

『あなたは贅澤ばかりいふのでいけませんよ』

彼は同じやうなことを繰り返して、矢張り心玆にあらず。舞臺に耳傾けてゐた。

『そら君に金を出して貰ふんだから、文句ないがね……』

僕はおさまらない不平を口走りながらも、餘儀なく我慢してしまつた。しかしいよ／＼芝居がはね、劇場を出て、銀をちり

ばめたやうに星の輝いてゐる空を仰ぎ、清々しい涼風に觸れると、多少滑稽になり不平を忘れて云つた。

『君と僕と二人でやつと一人前の人間なんだね。僕は目明きだが、言葉が判らなかつたし、君は盲目だから、ものは見えなかつたし、そして悪いことには利害が一致しなかつたのだよ』

（七）

翌朝僕等はエレツの町に別れを告げて、マキシム・ゴーリキイ（日本で云ふなら馬や牛を乗せる貨車、その列車を小說家ゴーリキイの名で呼ぶ）で、いよ／＼目的地に向つて出發した。十時間ほどシベリヤにあるやうな殺風景な荒寥たる大平原を横斷すると、ウクライナの國境に入つた。景色は一變して美しく、小さな緑の山や川が繪のやうな情趣を添へてゐた。そして其の山や川の間の靜かな平地には、親しみのある農家が散在してゐるのが見え、なんとなく南國的な明るさがあつた。またオランダの其れのやうな風車が、そちこちにあつて、風に吹かれてのどかに回轉してゐた。而も廣い平原のはての地平線には、夏の入道雲が怪物のやうに徐々に動いてゐた。

『君もうウクライナに來たぜ。何時に君の村に着くのだね』

『明朝ですよ』

毛布をかぶつて寝てゐたエロシエンコ君は、さう云つて寝返りを打つた。

僕等の貨車には十五六人の百姓と其の家族の娘や子供が乗つてゐた。彼等はズツクの袋に、きたないシヤツやオシメなどを澤山入れ、尚ほ其の上に黒パンや豚肉を同居させ、其れを引き出してかぢつてゐた。動物のやうに見苦しく西瓜を喰べながら、パンを口に投げ込んでゐるのもあつた。娘等はもう珍しさうに異人と僕とエロシエンコ君とを、ぬすみ見ては隣りの娘と囁き合ひ、そしてくす／＼笑つた。

『……支那人（キタイツ）！……』

彼女等は地方語で囁くので、僕には聞き取れなかつたが、しかし其れだけは判つた。他に悪意からの批評でもしてゐるのではないかと、僕は少し氣になつた。

暫時くする内に汽車は、林檎や西瓜や玉子や豚肉など澤山賣つてゐる或る停車場に着いた。僕は汽車を降りて、もの賣りの側に行つた。一人の百姓の婆さんが、大きな籠に入れて、附近の自分の家から飛び出て來て、買ふことを頻りに僕にすゝめた。この邊の百姓は、汽車が着くと、自分の家でつくつたものを持ち出して商賣をする。中には野原から、様々な色の名も知れない花を花束にして、一錢二錢で賣つてゐる悧巧者もある。

其れを女や若い男女が買つて胸につける、互に手をとつて停車時間を散歩する。時々プラットホームを出て遠くに出かけ、樂しんでゐる内に、汽車がぽうつと煙を吐いて、氣の毒にも置き去りを喰はす。今まで元氣一杯にしてゐた女は、大きな涙をぽろ〳〵流して泣き出す。けれど泣いても間に合はない。男が慰めて、乘せて行かれた荷物は次の停車場に降すやうに、電報を打つ。こんな悲喜劇は、よく各所の停車場で實演されるところのものであつた。

僕は婆さんから玉子を買ふと、直ぐ自分の列車に歸つた。そしてそれをエロシエンコ君と、汽車の疲れをいやす可く飲んだ。

僕等がエロシエンコ君の生れた村から、二里ほど離れた停車場のスタレヤスコウといふ小さな驛に着いたのは、其の晩であつた。僕等は驛の附近の木賃宿に泊つた。僕は寢ようとしたが、蚊の群れに攻めたてられて、どうしても寢つかれなかつた。側にエロシエンコ君を見ると、窓から射す月光をあびて、安らかに眠つてゐる。八年振りで故郷の土を踏んで、明日はいよ〳〵兩親や兄弟に會へるのだ。氣のせいかはち切れさうな喜びが、彼れの顏に浮んでゐるやうに僕には思はれた。他人のことながら自分のことのやうに思はれて、僕も故郷のことなどを思ひ浮べ、ます〳〵寢られなかつた。僕は立ち上つて窓外を見渡した。寢る前に教へて呉れたエロシエンコ君の村の家々の微かな焔影が、總てのものを埋めてゐる夜のくらがりの中に赤い點になつて、なつかしく見えてゐた。

（八）

スタレアスコウといふ驛から未明に立つて、午前八時頃にエロシエンコ君の生れたガラジユシユ村に着いた。戸數が四五十つきりない村で、裏手には松林の丘が續いてゐた。また岸に柳が澤山繁茂してゐる河が、村端れを流れてゐて、そこには、鵞鳥や牛が水にひたつてゐるのが見えた。河を越して向ふには、果てしないライ麥の畑が、地平線までひろがつてゐた。そして其の廣い畑には、まだ朦々と朝霧がかゝつてゐた。僕等が村端れまで來た時、一人の百姓が一台の牧草を推高く積んだ馬車をひいて來たのに會つた。

『お早う……』

と言葉をかけて僕等を珍らしげに見た。特に麥藁帽子をかぶり黑のルバシカを着た、そして杖をついたエロシエンコ君を注意深げに見た。そして彼れは二三間通り過ぎてから、大聲で呼びかけた。

『ワシリイでないか！』

『さうです。あなたは？』

『わしはイル マライフだよ』と云つて百姓は大急ぎで歩み寄り、如何にもなつかしげに手をとつて云つた『おゝ！。お前は不幸者だ。何年目に歸つて來た。村は昔と變つたぞ。……お前の家は燒けた………』

『お父さんやお母さんは丈夫ですか』

『あゝ、丈夫だ。安心さつしやい。だが年をとつたぞ。早く行きなさい。わしは晩に行くから』それから百姓は、可愛い裸足の十三四の子供を呼んで命じた『ワシリイが來た。貴樣案内してやれ』

　この年老ひた百姓は、若い時分にはエロシエンコ君の家で下男をしてゐた正直な男で、妻君を持ち暇をとつて、今では獨立した百姓をしてゐるものであつた。案内役に立つた子供は、ちよこ〳〵驅つて行き、村の人達は不思議さうに、戸口に立つて僕等を迎へた。

　三四丁先の小さなみすぼらしい家から、若い百姓娘が矢のやうに走つて來た。そしてエロシエンコ君に、ぶつかるやうにして抱きついた。

『おゝ!!、ワシリイ……』

『おゝ!!、ニイナア……丈夫で………』

二人はいつまでも時間を忘れたやうに、無言のまゝ接吻してゐた。

　やがて妹さんに導かれて、家の門口まで行くと、そこには年老ひた母親が、感激にふるへながら立つてゐた。

『おゝ!!、ワシリイ………』

『お母さん!!…………』

　母と子は八年振りに會つて、無言の永い接吻をした。母親の眼からは、大きな涙の滴がぼろ〳〵こぼれて來た。側で見てゐた僕までが悲しかつた。八年の間旅から旅へと、盲目の身で世界を放浪して、今久振りになつかしい母の腕に抱かれてゐる赤坊のやうな我がエロシエンコ君の心持ちと、不具の子供だけに倍可愛がつたに違ひないこの男を旅に立たして、雨につけ風につけ心配してゐたのに、而も突然今健康で歸つて來たのを見た老母の喜びはどうか。僕は僕で急に自分の故郷のことなぞ思はれて、つくねんと立ちつくしてゐた。すると。

『よくこの盲目を面倒みて、連れて來て呉れました』とお母さんに心からの感謝をされた。

其れを女や若い男女が買つて胸につける、互に手をとつて停車時間を散歩する。時々プラットホームを出て遠くに出かけ、樂しんでゐる内に、汽車がぼうつと煙を吐いて、氣の毒にも置き去りを喰はす。今まで元氣一杯にしてゐた女は、大きな涙をぼろ〳〵流して泣き出す。けれど泣いても間に合はない。男が慰めて、乘せて行かれた荷物は次の停車場に降すやうに、電報を打つ。こんな悲喜劇は、よく各所の停車場で實演されるところのものであつた。

僕は婆さんから玉子を買ふと、直ぐ自分の列車に歸つた。そしてそれをエロシエンコ君と、汽車の疲れをいやす可く飲んだ。

僕等がエロシエンコ君の生れた村から、二里ほど離れた停車場のスタレヤスコウといふ小さな驛に着いたのは、其の晩であつた。僕等は驛の附近の木賃宿に泊つた。僕は寢ようとしたが、蚊の群れに攻めたてられて、どうしても寢つかれなかつた。側にエロシエンコ君を見ると、窓から射す月光をあびて、安らかに眠つてゐる。八年振りで故郷の土を踏んで、明日はいよ〳〵兩親や兄弟に會へるのだ。氣のせいかはち切れるやうな喜びが、彼れの顏に浮んでゐるやうに僕には思はれた。他人のことながら自分のことのやうに思はれて、僕も故郷のことなどを思ひ浮べ、ます〳〵寢られなかつた。僕は立ち上つて窓外を見渡した。寢る前に敎へて呉れたエロシエンコ君の村の家々の微かな焔影が、總てのものを埋めてゐる夜のくらがりの中に赤い點になつて、なつかしく見えてゐた。

（八）

スタレアスコウといふ驛から未明に立つて、午前八時頃にエロシエンコ君の生れたガラジユシユ村に着いた。戸數が四五十つきりない村で、裏手には松林の丘が續いてゐた。また岸に柳が澤山繁茂してゐる河が、村端れを流れてゐて、そこには、鵞鳥や牛が水にひたつてゐるのが見えた。河を越して向ふには、果てしないライ麥の畑が、地平線までひろがつてゐた。そして其の廣い畑には、まだ朦々と朝霧がかゝつてゐた。僕等が村端れまで來た時、一人の百姓が一台の牧草を推高く積んだ馬車をひいて來たのに會つた。

『お早う……』

と言葉をかけて僕等を珍らしげに見た。特に麥藁帽子をかぶり黒のルパシカを着た、そして杖をついたエロシエンコ君を注意深げに見た。そして彼れは二三間通り過ぎてから、大聲で呼びかけた。

『ワシリイでないか！』
『さうです。あなたは？』
『わしはイル マライフだよ』と云つて百姓は大急ぎで歩み寄り、如何にもなつかしげに手をとつて云つた『おゝ！。お前は不幸者だ。何年目に歸つて來た。村は昔と變つたぞ。……お前の家は燒けた………』
『お父さんやお母さんは丈夫ですか』
『あゝ、丈夫だ。安心さつしやい。だが年をとつたぞ。早く行きなさい。わしは晩に行くから』それから百姓は、可愛い裸足の十三四の子供を呼んで命じた『ワシリイが來た。貴樣案內してやれ』
　この年老ひた百姓は、若い時分にはエロシエンコ君の家で下男をしてゐた正直な男で、妻君を持ち暇をとつて、今では獨立した百姓をしてゐるものであつた。案內役に立つた子供は、ちよこ〳〵驅つて行き、村の人達は不思議さうに、戶口に立つて僕等を迎へた。
　三四丁先の小さなみすぼらしい家から、若い百姓娘が矢のやうに走つて來た。そしてエロシエンコ君に、ぶつかるやうにして抱きついた。
『おゝ！！、ワシリイ……』
『おゝ！！、ニイナア……丈夫で……』
　二人はいつまでも時間を忘れたやうに、無言のまゝ接吻してゐた。
　やがて妹さんに導かれて、家の門口まで行くと、そこには年老ひた母親が、感激にふるへながら立つてゐた。
『おゝ！！、ワシリイ………』
『お母さん！！…………』
　母と子は八年振りに會つて、無言の永い接吻をした。母親の眼からは、大きな涙の滴がぽろ〳〵こぼれて來た。側で見てゐた僕までが悲しかつた。八年の間旅から旅へと、盲目の身で世界を放浪して、今久振りになつかしい母の腕に抱かれてゐる赤坊のやうな我がエロシエンコ君の心持ちと、不具の子供だけに倍可愛がつたに違ひないこの男を旅に立たして、雨につけ風につけ心配してゐたのに、而も突然今健康で歸つて來たのを見た老母の喜びはどうか。僕は僕で急に自分の故郷のことなぞ思はれて、つくねんと立ちつくしてゐた。すると。
『よくこの盲目を面倒みて、連れて來て呉れました』
とお母さんに心からの感謝をされた。

外出してゐた父親も歸り、家族が全部晩餐の食卓に集つた。エロシエンコ君は獨逸、英國、印度、日本、支那などの八年間の放浪生活を、得意になつて物語つた。そして最後に北京大學の教授になつたことを語ると、父母を始め家族の者は皆な驚き喜んだ。そして『ほんとう？　ほんとう？』と、幾度も僕の證言を求めた。僕が尚ほ、日本に於て詩集を出したことゝそして多くの青年に愛されたことなどを、少し誇大に語ると、老年の夫婦は、目を見合し、相好をくづして、息子の出世を喜んだ。妹さんなぞは、喜びのあまりに飛び上つて、小さな本箱から古びて破けてゐる色の變つた雜誌を、引きずり出して來て僕に話しかけた。

『これはワシリイが、子供の時の莫斯克からとつてゐた文學雜誌で、アンドレエフやゴーリキイの小説が載つてゐるものです。妾が毎日讀んで聞かしたんです。今では幸福な思出になりました』

さうかうしてゐる内に、村の知人が一人集り二人集りして、小さな部屋は身動きすることも出來なかつた。暗い洋燈の烟影にそれ等の人々を見ると、皆な大事な相談會でもしてゐるやうに熱心に、エロシエンコ君の方を見つめてゐた。視線の中心になつたエロシエンコ君は少し上氣して、各國の風俗習慣などに就いて物語つた。善良なそして單純な百姓達は、まるで夢の中に誘はれたやうに、現をぬかして耳を傾けてゐた。そして時時、この村に始めて來た日本人だと云つて、僕の顏を穴のあくほど見入つた。僕はきまり惡くなつたので、弟のコリイヤ君と、無邪氣ないゝ青年と別な部屋に立つて、蠟燭を一本ともして話し始めた。

『君は何故學校に行かないんです』

『僕は學問が嫌ひで、百姓が好きです』

彼れは大きな毛ののびた頭をかきむしりながら率直に答へた。其れが野趣を帶びて、如何にもウクライナの自然人らしく見えた。コリイヤ君は村の小學校を出ると、ウクライナの首都キエフ醫科大學で勉强してゐる姉さんのところに行つて、中學校に入學したが、末子で我儘に育つたので、勉强が嫌ひで毎日喧嘩ばかりしてゐたので、姉さんもしまいに愛憎をつかし、兩親のもとに送り返した。性來彼れの健康は、百姓に適してゐた。若い農夫の中では、一段すぐれた力を持つてゐたので、村の娘達からはコリイヤ君は、非常に歡迎され、結局嫌ひな勉强をするよりは幸福であつた。彼れは近々戀してゐる娘と結婚することになつてゐると云つて喜んでゐた。現在の家では一間よりないので、嫁を貰へば小さな家を建てなければならないが、

貧乏で金がないなどと心配げに物語つた。

エロシエンコ君の家は、現在では藁ぶきで小屋のわびしい一間つきりの家で、馬と牛とがたつた一疋つきりしかゐないが、革命前まではこの地で一番の金持で、非常に廣大な土地と澤山の馬や牛とがあつて、商賣の居酒屋の方もかなり繁昌し、總てに不足なく暮してゐた。ところが革命になつて、其れ等のものは總て沒收されてしまつた。其の上不幸なことには、家は火災の爲めにすつかり燒けてしまつた。昔の物質的に裕福な生活を追憶して、年老のお母さんなぞは僕にまで時々愚痴をこぼして云つた。

『土地はとり上げられた……家は燒けた……あゝ、莫斯克には金持ちがありますかい……日本つてところはどうですかい……』

（十）

其の晩、コリイヤ君に伴はれて、僕は散歩に行つた。そして村に住んでゐる彼れの小學校の先生の家を訪ねた。彼れは僕を、日本から來た社會主義者だと紹介した。村夫子の感ある先生老夫婦は、喜んでサモアールを立てゝ僕を歡待して呉れた。先生は日本風俗習慣などをもの珍らしげに僕に訊ね、それから現在の彼等の境遇に就いて話した。

この地方には一九一九年に、白軍のデニキンと赤軍との間斷なき交戰が行はれた。また大杉榮君が紹介された無政府主義將軍マールトフなどの馬賊が出沒して、盛に掠奪强盗强姦が行はれた。其の爲め土地はさんぐ〵荒されたので、極度の饑えと荒廢に陷つてゐた、そしてやうやくボルシビエキイの威力が及ぶに至り、よくなつてから僅か一年半位にしかならないといふ事であつた。從つて人々がまだ少からず動揺してゐて、兒童が學校に來るので困るとこぼしてゐた。そして兒童に新しい國歌、インテルナチョナルを敎へても、どうしても宗敎心の强い親達が、昔の國家より歌はせないので仕方ないと云つた。また月給を四ケ月分貰つてゐないので、實に食ふや食はずの生活であること、ソビエット露西亞は、是非第二國民の養成者であると小學校敎師を充分好遇しなくては駄目だなぞと、不幸を遠慮なく云つた。僕は氣持よく隔意なく話して、夜更けに先生の宅を辭した。滯在中に是非もう一度遊びに來て下さいと、老夫婦は親切に云つて呉れた。

僕等が家に歸ると、エロシエンコ君が、僕に氣の毒さうに云つた。

『和田さん、家に寢台が二つきりありません……』

エロシエンコ君は、思ひ切つて云ひ得ないで、怒つたやうに

口をもぐ〳〵さしてゐた。

『いや、どこでもいゝですよ』

　僕は僕で彼れが困つてゐるのが氣の毒になつて輕く云つた。

『ほんとうにすみませんね……其の……』

『いや……』

　何處で寢て呉れといふのかと思つてゐると。

『其の……そこで寢て下さいな。……ほんとうにすみませんね……』

　エロシエンコ君が指したのは、馬小屋であつた。さすがの僕もちよつと驚いたが、餘儀ないことである。馬小屋の馬車の上に、藁と乾草とを敷き其の上に外套をかぶつて僕は寢た。空を仰ぐと八月の月は皎々と冴えて、一點の雲もない。青い大きな空は、僕の額の上に高くひろがつてゐる。馬小屋とはいへ、夜露は額にかゝつて、決して惡い氣持ではない。夜中に誰れか、荒い息を吹きかける者があるので、ふと目を醒して見ると、飼馬が珍らしい同居者を得たので、馴々しく近寄つてゐたのであつた。

（十一）

　僕は、翌朝、エロシエンコ君の家が狹いので、村から四五哩ばかり離れてゐる、昔或る貴族が住んだといふ林檎園の別莊に送られることになつた。コリイヤ君が馬車を仕立てゝ一緒に乘つて出かけた。村の裏手の松林の恐しいほど人氣のない露にぬれた道を、ゆるやかに揺られながら行つた。

『この間こゝに狼が出て、遊んでゐた子供を一人食ひました。其の母親が可哀想に狂氣になつて、それから毎日こゝへ來て泣いてましたが、今日はゐないらしい』

　コリイヤ君はあたりを見廻して云つた。

『そんなに狼がゐるんですか』

　僕は少し恐しくなつて訊ね返した。

『毎年村の連中が狼狩りをやるので、澤山はをりませんが、時々出て來るのです。そして主に鷄をさらつて行くのですがね』

　一時間ほど行くと、松林はつきて平原になつた。そしてそこには、何里四方か知れない廣さに、黄色の向日葵が、朝日に向つて咲いてゐた。實に奇麗な土地だ。どうしてこんなに澤山植えてあるのか不思議にして、コリイヤ君に訊ねると、彼れは馬車から降りて、身丈よりも長い向日葵を一本手折つて來て、其の大きな花を二つに割り、僕に種を喰べて見ろと云つて出した。この種から油を製造するのださうだ。出されて僕は始めて氣がついた。これは露西亞人、特に女や子供の大好物で、どん

な所でも賣つてゐる。日本で云へば、南京豆のやうなものだ。

僕等は暫らく其の向日葵の畑を行つた。そして畑のやゝ中頃にまで行くと、小草が繁つて土が盛れ上つて何か埋めた跡のやうなところが目についた。

『あそこに三年前、村中の百姓が集つて虐殺した共産主義者の骨が埋めてあるんです。萬一暴露すると、皆なひつつかまつて處分されますからね』

とコリイヤ君が聲をひそめて指さし示しながら説明した。エロシエンコ君の家族ばかりではなく、この村の百姓は殆ど皆なアンチ・ボルシビエキイだ。たゞ一人或る百姓の息子で共産主義者がをつたが、其れが三年前の或る雨降りの晩に、こゝに引きずり出されて、殘酷にも虐殺されたのだといふ。僕は慄然として目を見張り、其の草の生えた盛られた土の上を見た。あゝ、無理解なる民衆よ、そして不幸なる若き人道主義者よ、露西亞には君のやうな人が何萬人ゐることか、僕は自然と頭がさがり、コリイヤ君に氣づかれぬやうに目禮した。沈默に落ちた二人を乘せて、馬車はがたりことりと進んだ。

『君は共産主義者は嫌ひかね』

僕はわざとコリイヤ君に云つた。

『俺れは大嫌ひだ』コリイヤ君は吐き出すやうに云つて得意に語り出した『今年の春であつたよ、ヘメコフから二人の共産黨員がやつて來て、村の教會の寶物を取らうとした。小露西亞の教會の寶物全部を集めて、外國に賣つて、ボルガの饑饉民を救ふんだと云つて、無理矢理に取らうとした。それで俺れは坊主と一緒になつて、鐘を鳴らしたので、村中の百姓が刀や棍棒を持つて澤山集つて來た。さすが共產黨員もびつくりして逃げて行つたよ……あいつらは猶太人と一緒になつて、惡いことばかりしてゐる大馬鹿者だ』

一九二二年の春に、ソビエット政府は、ボルガ救濟の最後の手段として、全露教會の財産の一部を沒收し賣り拂つて、其の資金をつくることにした。そして宣傳ビラ數千萬を地方に送つて、農民の了解を求めようとした。ところが宗教心の強い百姓は、強硬に反對し、各所に小さな騷動などが起つたのであつた。

『ボルシビエキイは神樣を信仰しない畜生だ、豚だ……』

コリイヤ君は極度に罵倒しつくして、やうやく口を結んだ。

僕はたゞ苦笑してゐた。露西亞が共產主義社會實現までに、かなりまだ困難な努力を要すること、特にこれ等九十パーセントの不平家文盲等を、撲滅するに今後何ケ年の月日を要するかといふことが、理窟としてゞはなく事實として深く考へられた。

僕がそんなことを内心考へて默つてゐる内に、コリイヤ君はいつの間にか向日葵畑の奥へかけ込んで行つて、大きな西瓜を三つばかり抱へて馬車に歸つて來た。

『西瓜がある。喰べませう』

この邊では誰れの畑のものを取つても、別に怒る人もないのださうだ。

（十二）

コリイヤ君と僕が、昔は貴族の別莊であつたといふ、けれど今は林檎園になつてゐる目的地に着いたのは、其の日の晩のことであつた。二人は枯葉や眞白に腐敗した林檎が落ちてゐる古池のほとりに出て、ベンチに腰かけた。ベンチの周圍には咲き亂れた月見草で、一面埋められてゐる。閑寂とした廢園の夜は早くも更けて、たゞ熟した林檎が落ちる微かな音だけがした。空に輝く月の光は、古池の上に白銀色のきらめきを流し、靜けさを甚しく神秘化してゐた。

『和田さん、この丘にある洋館に、貴族の奇麗な娘が二人をりますよ、明日遊びに行きませんか』とコリヤ君が語り出した『其の娘達は可哀相なんですよ。今から丁度三年前に、この地方がデニキン軍の爲めに占領された時に、酔拂ひの若い士官達の爲めに、無理矢理にダンスをさせられたり酒の相手をさせられたりしたのです。見てゐたお母さんやお父さんがたえかねて、恐る〳〵許して呉れと云ふと、其の士官達は亂暴にも、なんだ生意氣なとピストルで射殺してしまつたのです。そして其の上にさん〴〵娘達を弄んで逃げてしまつたのです。こんな不幸な目にあつたので、可哀相に二十一歳になる姉のマロシヤは、とう〳〵氣が狂つてしまひました。そして何度かこの池に身を投げて死なうとしたさうですが、忠實な老僕に助けられて、今では村の人と交際もせず、家にとじこもつて毎日姉妹二人で、寂しくピアノなぞを彈いて暮してますよ』

『へえ、そんなことがあつたのですか!!』と僕は意外な氣がして、古池の面を見つめながら、そしてまた丘の洋館の方を振り返つて見ながら訊ねた『しかし君、財産は革命の爲めに沒收された筈だのに、どうして食つてゆけるのかしら?』

『指環だとか寶物だとかを賣つてゐるのです。が、もう賣つくして困つてゐるやうですよ』

『こんな田舍で買手があるかしら』

『親類の叔父さんが、ハルコフに住んでゐるんです。そこに持つて行つて賣るのでせう』とコリイヤ君は云つて、尚ほ語り出した『この間面白いことがあつたんです。この郡のコンミサア

ールが、マロシヤを見て美しさにすつかり惚れてしまつたんです。それで先生、直接結婚を申込んだのださうです。さうするとマロシヤから、妾は共産黨員は大嫌ひですと云つて、きつばり言斷られたさうです。全くいゝ氣味でした。私は其のことを後で聞いたから、マロシヤさん、あなたは決して猶太人の共産主義者と結婚なさるな、と注意するとね、コリイヤさん、妾、修道院へ這入るんです。一生涯結婚なぞしませんと云つて、涙をぽろ／＼こぼしましたよ、氣の毒に』

『では、君が結婚を申込んで見たらどうだい？』

僕がからかふと、コリイヤ君は眞面目に目をむき出して、驚いたやうに云つた。

『あの人は貴族ですよ、身分がちがふ』

『君の家だつて、革命前までは村の金持だつたんだから、さしつかへないさ』

僕がさう云ふと、彼はしまひに怒つて云つた。

『しかしちがひます。戯談はいけません!!』

僕はプロレタリア獨裁のソビエツト露西亞になつても、尙ほかうした田舍には農民と領主貴族との昔からの深い關係が存續してゐること、而も其れがかうした青年の心にも、强い一種の階級觀念となつて殘つてゐることを思ひ、寧ろ不思議に思つた。二人はしばらく沈默に落ちてゐた。すると突然林檎の繁みを透うして、ピアノの妙音が聞えて來た。

あゝ、彼女等はこの夜更けの寂寒にたえかねて、一本の蠟燭を立て、ピアノの前に立つて、自らの運命を嘆いてゐるのだ。彼女等に昔の生活は再び歸る筈がない。亡び行く社會群の最後の嘆きを奏でる音樂である。僕等は寢る爲めに、林檎畑の番小屋に行つた。

小さな暗い小屋で、藁を重ねて外套をかぶつて橫になつたが、足先は小屋の外に突き出た。悪いことには蚊が烈しく襲來して、いくら追つても逃げようとはせず、僕にはどうしても寢つかれなかつた。コリイヤ君の鼾聲を聞き、また悲しげなピアノの音を聞きながら、僕は自分の流浪の身を思つた。

(十三)

翌日の晝頃コリイア君の伯父さんの家に遊びに行つた。其れは六十位の老人で、目と鼻を除いては、眞黑な髯だらけな顏で、丁度熊のやうな恰好である。コリイヤ君は、僕が兄のエロシエンコ君と一緒に、莫斯克から旅行に來たのだと紹介した。すると老人は大きな手で僕と握手し、大いに喜び裏の畑から西瓜を取つて來て、御馳走して吳れた。この老人の息子は、珍しく

共產黨員で現在莫斯克のＴＮＹ（國家保安部）に働いてゐるといふことで、老人までが大の共產主義好きで、村からは異端者扱ひを受けてゐる。コリイヤ君のお父さん、つまりエロシエンコ君のお父さんは、この老人の弟なのであるが、いつも會ふと議論になり、揚句がなぐり合ひの喧嘩をするさうだ。それで目下は殆ど行き來せないで暮してゐるといふことだ。非常に無邪氣な愉快な老人である。『お前はこの寫眞を知つてるか』と、僕に壁にかゝつてゐる肖像を指したから、『其れはレニンだ』と答へると、『お前は感心だ』と、僕は甚しく賞められた。

『俺れは毎朝、イコーニイ（基督の像）を拜まないで、レーニンを拜むんだ。それで村の教會の坊さんや家の婆さんが文句を云つて仕方がない。が、神樣なんか拜んだつて、パン一片呉れやしない。そこへゆくとレーニヤン（親しい呼び方）は、俺れ達農民に土地を平等に、二十ケ年も貸して呉れて、有難いから拜むんだ』

　と老人は口を大きく開いて、から／＼と笑つた。

『この村では、教會にゆかないと、坊さんが干渉しますか』

　と僕は訊ねて見た。

『いや、そんなことをすればＴＮＹに處分されるから秘密にこそ／＼やるんだよ。今までは毎土曜日に教會に集つて祈禱することと讃美歌を歌ふことを許るされてゐただけだ。坊主の說教許されてないんだ』と云つて老人は、最後に自嘲するやうに『百姓は馬鹿なんだ、教會に金なぞやつてよ』

　コリイヤ君は異論ありさうな不平げな顔をして、何も云はなかつた。僕はこの老人が革命前までは朝晩に十字架を切つたであらふこと、それから息子に說法されて、かうまで變つたに相違ないといふことを考へた。この種の老人は、共產黨員が農村に來てどんなに宣傳しても絕對に聞き入れないが、莫斯克に留學した息子が歸つて來て宣傳しようものなら、親子の情から直ぐ降參する。

　僕等は暫時くしてそこを辭し、小屋に歸つて晩飯の準備をした。コリイヤ君は新聞紙に包んであつた羊肉の一塊を出して、玉葱と一緒にナイフできざみ、池の水を入れた鍋に入れた。そして丸太を三本立てゝそれを吊し、枯草を焚いた。

　僕等が黑パンをかじりスープをすゝつてゐると、林檎の繁みから若い娘が二人やつて來た。二人共に靑い憂欝な表情で、おまけに白い着物をつけてゐた。彼女等の視線は僕に投げかけられた。

『マロシヤさん今日は』

　コリイヤ君が叮嚀な挨拶をした。すると。

『コリイヤさんご機嫌は』

と娘達は上品に答へた。

暫時くの間三人が何か語り合つてゐた。僕はきまりが悪いので、背を向けて一人でパンをかじつてゐた。するといつの間にか彼女達は、もとの林檎の繁みの中に消えた。

『和田さん、今晩遊びにいらつしやいと云ひましたよ』

とコリイヤ君が云つた。

『誰れがさ……』

と僕がとぼけると。

『マロシヤさんが』

と彼は眞面目に云つた。

(十四)

僕等は洋燈がつく頃、丘の上の荒れはてた白堊の家を訪れた。姉妹のコリイヤ君の話しから想像した様子やさつきちよつと見た時の憂鬱な印象などは、直接會つて見るとすつかり裏切られた。彼女等は矢張り愉快な無邪氣な生々した良家の娘達であつた。

僕等は心からの歡迎を受けヴェランダに案内された。彼女の美しさが、大きな悲劇を生じたやうに、マロシヤは非常に美しい。青い眼でじいつと見つめられると、魅惑的な力を感ぜずにはをられない。而も振舞にコケツトリなところがあつて、濃艶な感さへ與へた。一方妹は寧ろ清楚な高尚な印象を與へた。彼女等は日本の音樂や詩に就いて、色々僕に訊ねた。浮世繪のことなぞもかなり知つてゐた。比較的洗練された趣味を持つてゐたので、僕はすつかりよい氣になつて語つた。こんな婦人が田舍で寂しく暮してゐるのが氣の毒になつた。

『あなた方は何故莫斯克にお出でになりませんか、こゝは寂しいでせう』

『えゝ寂しい。莫斯克に出て音樂を研究したいのですけれど、お金がないのです』

『お金がなくても、學校には給費生があります』

『其のことはよく知つてをります。しかし妾達は、昔貴族であつたといふことの爲めに、今の政府が給費生などにはして呉れないのです。また働いて學校に行くつたつて、そんなことをもさせませんわ』

と彼女等は悲しげにそして寂しげに訴へるやうに語つた。

『しかし貴族であつたのはあなた方のお父さんでした。そして其のお父さんは亡くなられ、總ての財産や土地を政府に返してしまつたのですもの、今は誰れでもが勞働階級の人と同じやう

に扱はれてもいゝ筈です』

僕は其の間の實際のことはよく見聞してゐたが、さう訊ねて見た。

『いゝえ、さうゆかないのですよ。妾達は貴族に生れたのが不幸なのよ………もう總てをあきらめてをりますの。皆な運命なのだとね………』

其の言葉はふるへ、二人は目に涙を一杯浮べてゐた。

僕は慰めてやりたく思つたが、適當な言葉が見出せなかつたので默つた。

『姉さん、お客様に失禮だわよ』

妹がたしなめるやうに云つた。すると姉も氣を取り直したやうに。

『ごめんなさい。つい悲しくなるので………』

と云つて悲しげな微笑をつとめて浮べた。

『今によいことがありますよ』

と側に黒い腕を組んで聞いてゐた眞面目なコリイヤ君が力強く云つた。

『さうね、妾毎日神様にお祈りしてよ、どうぞ幸福にして下さるやうにと………』

僕等はそこで暫時くそんな調子のことを話して別れた。姉妹は人なつかしげに、玄關まで叮嚀に送つて出た。

『是非またいらつしやつて下さい。妾達はどんなにか退屈してをりますから、ご遠慮なくどうか』

と頻りに云つた。露西人として運命をのろつてゐる彼女等にとつて、日本人としての僕は何でも心おきなく話し且つ訴へることの出來るもののやうに思はれたに相違ない。舊知のやうな親しみを示してゐた。

しかし僕は、翌朝エロシエンコ君から使人を受けて、村を立つことになつて、ガラジコン村に歸つたので、再度會ふ機會がなかつた。僕等が村から去る時、二階の窓から二人がハンケチを振つて、別離の挨拶をして呉れてゐるが、今でも目の中に殘つてゐる。僕は五年間露西亞に來てゐるが、其の間に色々な女に接したが、其れは今でも深く心に生きてゐる。

其の晩はエロシエンコ君の家に宿り、翌朝僕一人でスタレヤスコウの停車場に行つた。エロシエンコ君のお父さんは、親切に僕の爲めに基督の像の前に出て十字を切つて、途中安全を祈つて呉れた。側にゐたエロシエンコ君は、其れを知り苦笑してゐた。

論語の講義

武者小路實篤

五の一

今度から公冶長第五になる。

最初に孔子が

「公冶長には娘をやつてもいゝ、獄中にゐるが、罪がないのだから、そして娘を公冶長にめあはした」

と云ふ言葉と事實がかいてある。之を見ても孔子は世間的な男でないことがわかる。

罰せられる元因なくして罰せられることは人間の耻づべきことではない。同時に罰せられないからと云つて耻づべきことは耻づべきことだ。自己の生命と他人の生命を尊重しないことは耻づべきことだ。だが罪なくして罰せられるものを罪あつて罰せられないものより輕蔑するものゝ當世に多いことは耻づべきことである。孔子は世間の裁きよりは、自分の判斷を信じてゐる。この孔子の言行は當然なことではあるが、孔子がお弟子根性の強い者とはちがつて、自分の感情、自分の判斷でことを行ひ、世間體をかまわない所がわかつて面白い。

次で孔子が南容に兄の娘をめあはしたことがかいてある。

「邦に道あれば廢せられず、邦に道なきも刑戮を免る」と云つて孔子は兄の子を南容の妻にした。

孔子は自分の子は獄に居るものにやる勇氣はあるが、兄の子をやる勇氣があつたかどうか。自分の子は本當に愛してゐるから自分の思ふ通りにしてまちがいもなく、他からも誤解もされない。自分に云ひわけせずに自然の通り行へる。

だが義理のなかはさうはゆかない。一番安全な道を撰びたくなる。女が夫によつて一生の運命がきまりすぎることを自分は本當だとは思つてゐない。いつか女の人も獨立人として自分の眞價で生き、自分の運命を自分で背負ふやうになると思ふ。夫によつて一生の運命がきめられすぎるのは不合理と思ふ。だが孔子時分は勿論、今でも女の運命は夫の運命に從屬しすぎる。さういふ時代に義理のある女の子の夫を撰ぶのには、その女が不幸にならないですめる相手をさがすのは溫い人情をもつものとして當然なことである。孔子の注意深さが見へる。

しかし南容のやうな人間が理想的な人間かどうかは別問題である。理想的人物なぞさがしてゐたら女は獨身でおはるより仕方がないであらう。そして女自身も理想的な場合が少ないのだから、相當した所でお互が滿足しなければならないし、又滿足出來るやう、人間はつくられてゐる。

この二組の夫婦が幸福であつたらうと自分は思ふものだが、本當のことはわからない。だが孔子の一言一句、自信があり、そして適格である處に感心していゝと思ふ。

五の二

孔子、子賤を評して曰く

「君子なるかな、かくの如き人、魯に君子者なくば、これ何ぞこれをとらん」

子賤は實に君子だ。しかし魯に君子がゐなかつたら子賤も君子になりたくもなれなかつたらう。魯には自分のやうな君子がゐるからと云ふ意味が何處かにふくまれてはゐないか。子賤は孔子よりも四十九歳若い人ださうだ。

この子賤については面白い話があるさうだ。

子賤が單父を治めるのに、琴を彈じて家から出たことがないのに單父は治まつた。又巫馬期が單父を治めた時星の出てゐる時から出かけて星の出てゐる時に歸つて來て、毎日毎日身を粉にして働いてやつと單父が治まつた。それで巫馬期がその理由を子賤に聞いたら、子賤は「私は人に任せたが、あなたは自力に任せた。自力に任せるものは勞が多いが人に任せるものは樂だ」

何んでも自分でしやうとするものは勞れが多い。子賤はよくその呼吸をのみこんでゐる。しかし獨立人同志の間では琴ばかり彈じてもゐられまい。自分のするだけのことはして、あとは他人に任せるが賢い。巫馬期はあまりに他人を信じなすぎる。他人に任せられるものは全部他人に任せるが賢い。他人の方が自分より優れることを他人に任せないことは愚かである。

五の三

この篇、孔子の人物評が主にあつめてある。子貢がある日孔子に聞いた。

「私はどうですか。」

「お前は器（役に立つ男）だ。」

「何の器です」

「瑚璉（宗廟に黍粟を盛る器で天下の政を行ふことの出來る男と云ふ意味ださうだ）だ」

之は子貢を評した言葉で、そのたとへが面白いのでこゝに出て來たのかと思ふが、別に我等教はるべきことはない。

或人云ふ、「雍は仁者ですが口はまづいですね」孔子はそれに答へて

「口のうまい必要はない。人と應待するのに口さきでもつてすると屢人に悄まれる。雍は仁者かどうか知らない亦、口のまづいのは少しもかまはない」

人に悄まれると云ふことは罪とはちがうと思ふ。だがつまらぬことで人に悄まれる必要はない。人とは平和につきあふにこしたことはない。だが人に悄まれることを恐れてはいけない時があるのは事實だ。だから孔子のこの言葉も權威があるとは云へない。或人にたいして孔子が少し言葉を下げて話したのだと思ふ。その他の言葉のつかい方は面白いと思ふ。歯ぎれがよく、そして仁者と云ふ言葉を中々許さない所も面白く、口のうまいことを認めないのも孔子らしく面白い。

次ぎに孔子が漆彫開にもうお前も仕官したらいゝだらうとすゝめた時、漆彫開は「私にはまだその自信がありません」と云つたので、孔子はよろこんだ。ことがかいてある。

もつと勉强したがつて世間へ出たがらないのをよろこんだと云ふだけのことで、別に大したことではない。しかし若い文士達がまだ力も出來ない内から自分の作を世間的に發表したがるものゝ多い内に、相當いゝものが出來たから發表したらいゝだらうと云はれても、自信がまだありませんからもつと勉强してからにしますと云ふ人があつたら自分も感心するかも知れない。

役人になることは　創作を發表することより時間を奪はれやすく　勉強が出來ない恐れがあるかも知れない、又責任の重い仕事かも知れない。とにかく漆彫開の心がけは今時でも奇特と云つていゝであらう。だが力こぶを入れてほめるべきこととは思はない。

自分の使命を果すのに輕はづみは元よりよくない。だが臆病なのもよくない。篤學はいゝことにはちがいないが、實際にぶつかることを恐れるのはよくない。

孔子がよろこんだと云ふのは、ごく氣輕な意味であらう。さもなければ漆彫開と云ふ人は更に大きな仕事をやり上げるためにもつと勉强する必要のあつた人であらう。

自分は役人が巾をきかす時代は急足にすぎさりつゝあることを感じる。孔子時分と今とは時代が隨分ちがつてゐることを感じる。今だつたら、孔子も總理大臣のやうなものになりたいとは思はないであらう。政黨の親玉なぞにはなりたがらないであらう。

次ぎに孔子が、かう云つたことが出てゐる。「道が行はれないから筏にのつて海に出やうか、その時俺に從ふものは由（子路）だらう」

子路はそれを聞いて喜んだ。孔子はそれを見て云つた。

「由は勇を好むことでは俺にまさるが、筏をつくる材をとることは出來まい」（無所取材）

このあとの言葉は少しあいまいだが、子路は夢想の國にゆく元氣はあつても、ゆく手段を知らない、また其處にゆける資格がないと云ふ意味であらう。

道の行はれないことを嘆じた言葉として面白いし、また子路と孔子が生きてゐるので面白いが、眞理が語られてゐる

「何の器です」

「瑚璉（宗廟に黍粟を盛る器で天下の政を行ふことの出來る男と云ふ意味ださうだ）だ」

之は子貢を評した言葉で、そのたとへが面白いのでこゝに出て來たのかと思ふが、別に我等敎はるべきことはない。

或人云ふ、「雍は仁者ですが口はまづいですね」孔子はそれに答へて

「口のうまい必要はない。人と應待するのに口さきでもつてすると屢人に憎まれる。雍は仁者かどうか知らないが、口のまづいのは少しもかまはない」

人に憎まれると云ふことは罪とはちがうと思ふ。だがつまらぬことで人に憎まれる必要はない。人とは平和につきあふにこしたことはない。だが人に憎まれることを恐れてはいけない時があるのは事實だ。だから孔子のこの言葉も權威があるとは云へない。或人にたいして孔子が少し言葉を下げて話したのだと思ふ。その他の言葉のつかい方は面白いと思ふ。歯ぎれがよく、そして仁者と云ふ言葉を中々許さない所も面白く、口のうまいことを認めないのも孔子らしく面白い。

次ぎに孔子が漆彫開にもうお前も仕官したらいゝだらうとすゝめた時、漆彫開は「私にはまだその自信がありません」と云つたので、孔子はよろこんだ。ことがかいてある。

もつと勉强したがつて世間へ出たがらないのをよろこんだと云ふだけのことで、別に大したことではない。しかし若い文士達がまだ力も出來ない内から自分の作を世間的に發表したがるものゝ多い内に、相當いゝものが出來たから發表したらいゝだらうと云はれても、自信がまだありませんからもつと勉强してからにしますと云ふ人があつたら自分も感心するかも知れない。

役人になることは　創作を發表することより時間を奪はれやすく　勉強が出來ない恐れがあるかも知れない、又責任の重い仕事かも知れない。とにかく漆彫開の心がけは今時でも奇特と云つてい丶であらう。だが力こぶを入れてほめるべきこととは思はない。

自分の使命を果すのに輕はづみは元よりよくない。だが臆病なのもよくない。篤學はい丶ことにはちがいないが、實際にぶつかることを恐れるのはよくない。

孔子がよろこんだと云ふのは、ごく氣輕な意味であらう。さもなければ漆彫開と云ふ人は更に大きな仕事をやり上げるためにもつと勉强する必要のあつた人であらう。

自分は役人が巾をきかす時代は急足にすぎさりつ丶あることを感じる。孔子時分と今とは時代が隨分ちがつてゐることを感じる。今だつたら、孔子も總理大臣のやうなものになりたいとは思はないであらう。政黨の親玉なぞにはなりたがらないであらう。

次ぎに孔子が、かう云つたことが出てゐる。「道が行はれないから筏にのつて海に出やうか、その時俺に從ふものは由(子路)だらう」

子路はそれを聞いて喜んだ。孔子はそれを見て云つた。

「由は勇を好むことでは俺にまさるが、筏をつくる材をとることは出來まい」(無所取材)

このあとの言葉は少しあいまいだが、子路は夢想の國にゆく元氣はあつても、ゆく手段を知らない、また其處にゆける資格がないと云ふ意味であらう。

道の行はれないことを嘆じた言葉として面白いし、また子路と孔子が生きてゐるので面白いが、眞理が語られてゐる

わけではない。徳孤ならずなぞと云つてすましてゐられない瞬間が孔子にもよくあつたことを知るのは當然である。道の行はれる世界を實につよく憧かれてゐたことを知ることが出來る。又多くの人間が道を行はないで不幸の種をまきつゝあることをはがゆく思つた氣持もわかつて孔子に同情も出來、尊敬も出來、愛することも出來る。

五の四

孟武伯がある時孔子に聞いた。

「子路は仁者ですか」

「知りません」

孟武が又問ひかへす。

「子路は千乘の國（諸侯の國）の税のことや兵のことを司さどることは出來ますが、仁者かどうかは知りません」

「求はどうですか」

「求は千戸の村、百乘の（大夫の）家の家老になることが出來ますが、仁者かどうか知りません」

「赤はどうですか」

「赤は束帶（盛服を着）して朝廷に立つて賓客と話をさせるによろしいが、仁者かどうかは知りません」

孔子の人を批評するのするどさはこの言葉でもわかる。人の價値を正確に見、適人を適所におくことを實によく心得てゐる。こんな人は支那の王さんにでもしたい人だと思はせる程だ。孟武伯は仁と云ふものがまるでわかつてゐない。孔子は仁をよく知つてゐる。つまり人類全體を正しく生かす呼吸をのみこんでゐるものが仁者である。千乘をおさめる

だけの力のないものは、仁者と云ふわけにはゆかない。

孔子のこの答へをきいて孟武伯に仁がわかつたか、恐らくわかりもしまい。よしわかつたにしても理窟だけでわかつたのでは何もならない。

孔子が子貢に云ふのに、「お前と回とどつちが優つてゐるか。」子貢は答へて、私はどうして回をのぞみません。回は一を聞いて、十を知りますが、私は一を聞いて二を知るだけです。孔子はそれをきいて云つた。それは叶ふまい、私もお前が叶はないと云ふのに贊成する」

（どうもこんな日本語を孔子は云ひさうもないが、意味においてはまちがつてゐないと思ふ。）

顏回はから孔子に云はれては子貢もぎやふんと參つたらうと思ふ。ともかく顏回をぬかすと子貢は賢かつたらしい。賢さを見せつけなかつたが、子貢は見せつける癖があつたさうだ。少し見て來たやうな話だが。

この子貢の答へは中々要領を得てゐる。頭のわるい人には云へない答へ方だ。たゞそれだけだが、子貢を發奮させるだけの力はこの會話にもあつたらうと思ふ。同時に孔子は中々痛快な食へない處のある、同時に存外、ユーモアを解する、自由な所のある男だと云ふことが感じられる。化石した心の持ち主でなく實に生々した心の持ち主な所が愉快である。

五の五

「宰我晝寢す、孔子云ふ朽木は彫刻することは出來ない、糞土は塗ることは出來ない。自分は何にも責める氣がしない。そして孔子は又云つた。始め私は人を見るのに始め其人の言葉を聞いて行ひを信じた、今後私は其人の言葉をきく

と同時に其人の行を觀る、私は考へなほさなければならない」

宰我が晝寢（寢室にゐる意味ださうだ）したことが大したことかどうか自分にはわからないが、この孔子のたとへは面白い、そして實にその時の孔子の感情が生々とあらはれてゐる。一言一句に全心をあらはす呼吸をのみこんでゐる。人間の素質の惡口として之以上の言葉は一寸出せないやうに思ふ。宰我は餘程口のうまい人間だつたにちがいない。そしてこの小言はいくらずぼらな宰我にも、きゝめがあつたであらう。そしてこの言葉は論語の内で最も思ひ切つた言葉であらう。孔子の心がいつも生々してゐたことはこの言葉にもうかがうことが出來る。眞理をといた言葉でも、人間に希望や、力を與へる言葉でもないかも知れないが、本當のことを云ひ、又反省さす力をもつてゐる。事實を理想化さずに見てゐる。宰我が晝寢したと云ふことについて云つた言葉としては誇張のやうにも思ふが、孔子がさう云はないではゐられない氣持には厚意が持て、云つてゐることは眞實である。たしかに朽ちた木には彫刻は出來ず、糞土はぬるべからずである。頭の粗雜すぎる者には學問は役にはたゝない。（しかし大概の頭は鍛えることによつて隨分よくなり得るものであるが。）言葉だけを信じてはいけないことも、同時に行ひも見なければならないことも悲しき（少し大げさだが、人間が嘘つくことは殘念なと云つていゝ）事實である。

行ひでも嘘はつけないものではないが。

「孔子が『私はまだ剛者を見たことがない。』と云つた。或人が答へて『申棖がゐます』と云つた。すると『棖には慾がある、どうして剛者たることが出來やう』と云つた」

剛者の一面をはつ切りさせてゐる。

慾がないと云ふことが剛者の特質をはつ切りさせてはゐないが、棖の場合は慾があるから剛者たり得ないと云ふのは、

實にはつ切りした批評である。欲のある人間は欲で動かされる。物欲も、肉欲も、名譽心も、その人を橫道にそらすことが出來ないものゝみよく剛者たり得る。恐怖は勿論剛者をおどかすわけにはゆくまい。しかし恐怖に動かされない者のみが剛者ではない。あらゆるものによつて自分の確信をまげられずにすゝみ得るものが剛者である。

眞の剛者は、眞の理想的な人があり得ない如くあり得ないものである。だから孔子が剛者を見ないと云ふのは、當然なことである。それで悲觀するのは愚である。だが眞の剛者がゐてくれたらと云ふ望みが強いものにとつては時にかう云ふ歎聲がもれることは人情として當然である。そして人間は剛者はどうせゐないものだとあきらめて安心する人間よりも、剛者のゐないことを歎じて多くの人に剛者となる決心を與へるものを尊敬するものである。

日本の多くの小つぽけ頭は自分より同等以下の人間許りで地上がうづまることに快感を感じるらしいが、それは生々した健全な人間の考へ方ではない。剛者がゐてくれることを望むものである。たよりになる信用の出來る人間がゐてくれることを望むのは當然なことである。だがゐなくつてもそれで失望許りはしない。なほしつかりしたいと思ふのが人間である。

五の六

「子貢曰く『我人の諸(これ)(非義、不合理のことださうだ)を我に加ふることを欲せざるは、吾も亦諸を人に加ふる無からんを欲す』孔子曰、賜や汝の及ぶ所に非る也」

子貢がある日皆ゐる所で氣焔をあげて「自分が人にしてもらいたくない不合理なことは自分も人にしたくないと思つてゐる」と云つた。其處で人のあまくない孔子は云つた。「賜、お前にそんなことが出來るか。」其處で子貢がぎやふん

參つたと云ふ話である。

之が正格に實行出來れば子貢は仁者である。そして孔子もそれを實行しやうと思つて難しとしてゐる處である。だから孔子が一寸皮肉に注意したのである。頭からやつけたと見る必要もないと思ふ。この子貢の言葉と同じやうな言葉を孔子も云つてゐたと思ふ。あとに出て來ると思ふ。子貢は才人なので孔子が子貢の上すべりの卒業で滿足するのを恐れて何氣なく適切な注意を與へたのだと思ふ。それと同時に自分に加へられることを好まないことは、又他人に加へないと云ふことの價値の大なることと、實行のむづかしいことを語つたと見ていゝと思ふ。

「子貢曰く、夫子の文章は聞くことが出來る、だが夫子が性と天道についての言葉は聞くことが出來ない」

「子路は聞いても之を行ふことが出來ないことは、唯聞くことを恐れる」

之等の言葉については自分は別に云はない。他の本で見てほしい。

「子貢『孔文子（行の惡い人ださうだ）となぜ文と云ふのですか』『それは敏にして學を好み、下の人に問ふことを耻ないので文と云つたのだ』と孔子答へる」

頭がよくつて勉強し、誰にもわからないことを人に問ふて自分の言行を正格にしやうとした人だから文と云ふのだ。孔文子がどんな人かわからないから、この孔子のほめ方もはつ切りわからないが、定評に反對してその人のいゝ處を正しく認めた言葉と思ふ。

あと三つ言葉をぬかすことにする。他の本で見てほしい。次ぎに子

「子張が問ふて云ふに、令尹の子文は三たびつかへて（最上級の位の）令尹になつたが、喜色なく、三たびやめられてもおこる色なく。舊令尹の政を新令尹につげました。どうですか」

「忠である」と孔子が答へる。

「仁ですか」

「まだ知らない、どうして仁たるを得やう」

「崔子齊君を殺す。陳文子馬十乘あり。すてゝ去つた。他の國に行けば則ち云ふ、こゝにもわが大夫崔子がゐると去つて又他の國に行き、又吾が大夫崔子がゐると去つた。これはどうですか」

「淸である」

「仁ですか」

「まだ知らず、どうして仁たるを得やう」

孔子は仁と云ふことを知つてゐるのだから、思はせぶりの答へをしないで、いきなり仁はかう云ふものだから二人ともまだ仁に達してゐないのだと云へばいゝのだと思ふが、孔子の性質のせいか、中々はつ切りは云はない。之では子張も要領を得なかつたらう。子張も亦つまらない聞き方をしたもので、仁をまるで知らない、少し知らなすぎるが、知らないのは孔子のせいでもあるやうだ。なぜ孔子がはつ切り仁を知らせなかつたのか、口では云へないと思つたのか、云つても始まらないと思つたのか。

子文はたしかに悟つた處のある人かと思ふが、たゞ總理大臣になつたからよろこんだとか、よろこばなかつたとかで、ほめられてもうれしくもないであらう。例のとり方もわるいが、しかし自分の仕事に忠であつて、自分の私の感情には負けない所はほめていゝと思ふ。自分の恩人が死んだから自分が總理大臣になれたのに、總理大臣になれたのがうれしいでは困るが、まあ其處らが普通の人情であらう。だから子文に子張が感心したのは無理がないが、忠と云はれた

ので滿足しないのは利口とは思へない。忠と云はれたので隨分よろこんでいゝはづだ。だが忠が最上のものではないことを子張も知つてゐた。それで仁だと云はれないのを不服に思つた。しかし仁は人類全體を生かす道を全心全身をもつて進んでゆく人にのみゆるされる言葉である。子分は其處まではゆけなかつた人にちがいない。陳文子に至つては話しにならない。逃げまわつたつて、自分を淸くすることは出來るかも知れないが、何人の生命に役立つことが出來るか。他人がわるいからと云つて逃げまわつて步いてあるくのは、不名譽になつても名譽にはならない。だが下には下があるから、慾と心中する人間の多い世界では陳文子は賢いとも云へるし、利に媚びる人から見れば淸いと云へる。だが淸いと云ふ言葉は最上のほめ方である。それ以上をゆるすことの出來ないのは當然である。

この次ぎの言葉も中々面白い。深かくはないが。

「季文子は三度思つて後に行ふ。孔子之をきいて曰く、二度で澤山」

あいつなら二度で澤山、と云ふ處である考へていゝ人とわるい人とある。今でもかう云ふ人はよくある。

孔子は何度も云ふが生た人間である。決してある主義や型でものを云ふ人ではない。自分の直感でものを云ふ。孔子は學問を重じるがそれは更に大きく正しく自由に生るためで、ある主義者のやうにいつもマルクスにきゝにゆくやうなことはしない。

孔子は又甯武子についてかう云つてゐる。之れなぞも孔子の生てゐる人間なことを示す。漢學者や、孔子を頭から型にはめて考へてゐる人には思ひつけない言葉である。だが孔子が生てゐる。同時に孔子が殺されずに一生を完ふし、遂に聖人になり切れるまで生きられた秘訣を知ることが出來る。同時に支那の國民の理想的人物がどんな處にあるかを、知ることが出來る。

「甯武子邦に道有れば即ち知なり、邦に道なければ即ち愚なり、其の知には及ぶべき也、その愚には及ぶ可からざる也」

中々孔子は愚になれない男だが、孔子でさへ時々愚になりたい所が面白い。

尤も孔子が愚になりたいわけではないのだと云はれゝば、別に反對しやうとは思はないが、臨機應變で天命を完ふし、使命を果すことを孔子は是認してゐたと見ていゝと思ふ。

一時の愚をしのび、更に生ることを人間らしいことゝ思ふ。元より義を見てなさゞるは勇なき也であり、朝に道を聞いて夕べに死すとも可なりではあるが、好んで死地に落入るのは馬鹿氣てゐる。自分の力不相應な理想に向つて直行して途中で無理してくたばるよりは、いそがば廻れがいゝ時もある。愚を尊敬する趣味は西洋にもあるかと思ふが、より東洋的なやうに思ふ。東洋の諺を見てもこのことはわかると思ふ。

五の七

孔子陳にありて曰く

「歸らんか、歸らんか、わが黨の小子、狂簡にして、斐然として章をなす、之を裁する所以を知らず」

「歸らんか、歸らんか
わが仲間の若者達
遠大の志をもてども
行ひは稍々粗なり

美しき錦の如く
かゞやけども
之をたち切つて
着物にしあげるものなし」
自分の歸るのを待つてゐる。自分は使命を果すために出歩いてゐたが、實は自分の使命は國にあることを自覺した言葉である。

よき人間がいつの間にか澤山頭をもたげて來たが、最後の鍛えをするには自分が歸らなければならない。立派な素材があらはれて來たよろこびと、その素材をものにする自己の使命を自覺した興奮が詩のやうな形をとつた言葉になつたのだと思ふ。

次ぎに孔子の
「伯夷叔齊は舊惡をおもはず、怨、是を用て稀なり。」
簡野氏の說に從ふと「怨是を用て稀なり」は人に怨まれることが稀だと云ふ意味ださうだが、「是を用て」は怨をつかふことと云ふ意味に自分にはとれさうに思ふが、漢文の素養がないからはつ切りしたことは云へない。どつちでも伯夷叔齊の私のない、さつぱりした、惡意のない性質が出てゐる。そして舊惡をおもい、人を怨んだり、怨まれたりすることのほめるべきことでないことをはつ切りさせてゐる。

子曰。
「誰か微生高を直なりと云ふ。或人醯を乞ふ、これを其隣に乞ひて之を與へたり」、

美しき錦の如く
かゞやけども
之をたち切つて
着物にしあげるものなし」

自分の歸るのを待つてゐる。自分は使命を果すために出歩いてゐたが、實は自分の使命は國にあることを目覚した言葉である。

よき人間がいつの間にか澤山頭をもたげて來たが、最後の鍛えをするには自分が歸らなければならない。立派な素材があらはれて來たよろこびと、その素材をものにする自己の使命を目覺した興奮が詩のやうな形をとつた言葉になつたのだと思ふ。

次ぎに孔子の
「伯夷叔齊は舊惡をおもはず、怨、是を用て稀なり。」

簡野氏の説に從ふと「怨是を用て稀なり」は人に怨まれることが稀だと云ふ意味ださうだが、「是を用て」は怨をつかふことと云ふ意味に自分にはとれさうに思ふが、漢文の素養がないからはつ切りしたことは云へない。どつちでも伯夷叔齊の私のない、さつぱりした、惡意のない性質が出てゐる。そして舊惡をおもい、人を怨んだり、怨まれたりすることのほめるべきことでないことをはつ切りさせてゐる。

子曰。
「誰か微生高を直なりと云ふ。或人醋を乞ふ、これを其隣に乞ひて之を與へたり」、

社會科學

我國現代及過去の經濟組織を知らんとする最好の文献、各大學、及智識階級唯一の參考書たるべし

明治六年筑前竹槍一揆……石濱知行

題　未　定……土方成美

日本資本主義の社會自己……福本和夫

創　作

□小說 酒後……（女流作家）凌叔華

□小說 巴黎的鱗爪……（北京大學）徐志摩

□戯曲 壓迫……（北京大學）丁西林

□戯曲 虎を搏る夜……田漢

□小說 佗蘭的母親……揚振聲

□小說 蒙古の太陽……ピリニヤック

□戯曲 王昭君……（廣東大學）郭沫若

□題未定……

研究

七月特輯

批判と日本經濟史研究

我國經濟文獻集錄……吉川秀造

……和

政治も、法律も藝術も、その他あらゆる社會の諸制度諸現象は、單に經濟的構成要素の上層建築に過ぎないとマルクスは說く、今この言の當否は問はない。併し乍ら史的發展のその行程の中に於いて、凡そ經濟的な事由に全く聯關なき社會現象は恐らく稀であらう。一部の權勢家と、それを圍る天降り的制度の研究にのみあつた我日本史を經濟的觀點にたつて考察しなほさうとする學界の潮勢は勿論今更ではない、けれ共此の狀勢は實に日と共に驚くべき程旺盛になりつつある。誠に當然にして、喜ぶべきことだ。本誌に執筆せる人達は各々の時代時代に就いての權威者で、殆んど漏れなく網羅したつもりである。勿論各時代に就いての其の個別的な研究は、本誌に於いて一貫され、體系化されて居る筈だ。編者はここに、自信を以つて學徒諸君に必讀すべきを薦め得ることを何よりとする。

定價壹圓五拾錢
送料四錢

東京芝區愛宕下町
振替東京八四〇二
改造社

之は微生高のつぶしのきかない男ではないことをほめたことにとれるし、微生高がけちな意味にもとれる、自分の處にあつても隣りのをもらつて來てやつととれないこともない。又ずるいととる人もあるらしい。隣りのもので恩を賣ると云ふ意味にも、しかし之は簡野氏の説通り、直と云ふのはほめた意味でなく、微生高の意を用ひたことをほめた言葉ととるのがすなほだと思ふ。しかし微生高と云ふ人を知らない自分には大した言葉とは思はない。「自分の處にはありませんが御隣りからもらつて來ませう」位い云つてもいゝと思ふ。しかし相手の人によるかも知れない。

子曰。

「巧言令色恭に過る、左丘明これを恥ぢる丘（自分）もそれを恥ぢる。怨をかくして其人を友とす、左丘明もそれを恥ぢる、丘もそれを恥ぢる」

誠意内になくして口さきや見かけで好意を見せたり、へつらつたりすることは左丘明も恥ぢたし、自分を恥ぢる、君達も恥ぢるべきだと、云ふ意味、同感である。

見かけだけでつとめて他人から酬ひられないことを不平に思ふこともついでに恥ぢていゝ。

顔淵と子路とが孔子のわきにゐた。

孔子は二人に聞いた。「君達の志（望）を云つて御らん。」子路はすぐ云つた。「出來たら車馬や上着や輕き皮衣を友達と一緒にしてやぶれてもうらみがないやうにしたく思ひます。」顔淵は云つた。「出來たら善をほこることなく、労を他人におはせないやうにしたく思ひます」

其處で子路が孔子に聞いた。

「どうぞあなたの志（望）をおつしやつて下さい」

孔子は云つた。

「老人は之を安ぜしめ、朋友は之を信じしめ、少者は之をなつかしめん」

三人がお互に望みを語りあつた美しい話である。

子路は友人と自分の喜びをわかつのに自分の大事な品物を例にとり、顔回は心のもちかたと他人にめいわくを與へないことを望みとした。共に自分の生命だけで滿足せず、隣人のためにつくさうとしてゐる。しかし自分の望みを云ひつくしてゐるとは云へない。皆自分の難しとする處、自分がかくありたいと望んでまだ實行し切れないで、心にいくらか恥てゐることにふれてゐる。それだけ二人の修養をつみつゝある人間だと云ふことがわかる。孔子の望みはさすがに至れりつくせりである。人間を年よりと同輩とより若きものに區別し、その三つのものにたいする自分のしたいと思ふことを語つてゐる。

老人には平和を、朋友には信を、若きものには親切な導を、與へたいと云ふのである。

まちがいのない考であるが、實行することは誰にも出來ると云ふわけにはゆかない。

自分の望みを云へば、自分はすべての人が天命を完ふするようにしたいと云ふより他にない。このことは人類全體に與へられた使命だと自分は思つてゐる。だが之を實行することは容易ではない。だが人々がこのことを本心でのぞむことを自分は要求したい。多くの人はこの人類の望みと緣のない生活をしすぎてゐる殘念なことである。

何よりも自他の生命とすべての生命が生きられる世界を求むべきである。

五の八

子曰

「やんぬるかな。吾はまだよくその過を見て内に自らせむる者を見ざる也」

もう望みがない。自分の過に氣がついてそれを自分でなほさうと本心からおもうものは一人もない。人間はたすかりやうがない。

孔子がかくなげくのは無理がない。だが孔子はなげいて許りはゐなかつた。樂觀許りもしないが、なげいて許りもゐない。絶望も何度もしたかも知れない。だが又希望はとりもどし自分の仕事をつゞけていつて、熱心は減じなかつた。だが人間の生命を愛すれば愛する程、人間のおろかさははがゆかつたにちがいない。

次ぎに孔子の左の言葉が出てゐる。

「十家の村には必ず忠信の點では丘のやうな人間がゐるだらうが、丘のやうには學を好まない」

つまり孔子は自分は過ちをよく知り、それを心の底からなほして行つたので自分のやうになれたのだが、他の人は素質はあつても自分のやうに自分を研くことをしないから駄目なのだと云ふことをはつ切りさせたのだ。

だが何處までも修業しないではおさまらない素質こそ尊敬すべき素質であると云へる。

しかし多くの人は自分の心を本當にみがき、自分の素質を根本的によくすると云ふことをしない人が多い。そして自分の肉體も精神もどの位い美しくなり得るものかと云ふことを知らずに一生を空費してゐる。孔子はたしかに自己を敎育し、鍛えてゆくことの名人である。

頭をよくすると云ふことは學說をよくのみこむと云ふことではない、理窟がうまくなると云ふことでもない。又文章がうまくなると云ふことでもない。生精神を生々させて、いざと云ふ時に全生命をあやまりなく生かせるやうにすること

孔子は云つた。

「老人は之を安ぜしめ、朋友は之を信じしめ、少者は之をなつかしめん」

三人がお互に望みを語りあつた美しい話である。

子路は友人と自分の喜びをわかつのに自分の大事な品物を例にとり、顔回は心のもちかたと他人にめいわくを與へないことを望みとした。共に自分の生命だけで滿足せず、隣人のためにつくさうとしてゐる。しかし自分の望みを云ひつくしてゐるとは云へない。皆自分の離しとする處、自分がかくありたいと望んでまだ實行し切れないで、心にいくらか恥てゐることにふれてゐる。それだけ二人の修養をつみつゝある人間だと云ふことがわかる。孔子の望みはさすがに至れりつくせりである。人間を年よりと同輩とより若きものに區別し、その三つのものにたいする自分のしたいと思ふことを語つてゐる。

老人には平和を、朋友には信を、若きものには親切な導を、與へたいと云ふのである。まちがいのない考であるが、實行することは誰にも出來ると云ふわけにはゆかない。

自分の望みを云へば、自分はすべての人が天命を完ふするようにしたいと云ふより他にない。このことは人類全體に與へられた使命だと自分は思つてゐる。だが之を實行することは容易ではない。だが人々がこのことを本心でのぞむことを自分は要求したい。多くの人はこの人類の望みと緣のない生活をしすぎてゐる殘念なことである。

何よりも自他の生命とすべての生命が生きられる世界を求むべきである。

五の八

子曰

「やんぬるかな。吾はまだよくその過を見て内に自らせざる者を見ざる也」

もう望みがない。自分の過に氣がついてそれを自分でなほさうと本心からおもうものは一人もない。人間はたすかりやうがない。

孔子がかくなげくのは無理がない。だが孔子はなげいて許りはゐなかつた。樂觀許りもしないが、なげいて許りもゐない。絶望も何度もしたかも知れない。だが又希望はとりもどし自分の仕事をつゞけていつて、熱心は減じなかつた。

だが人間の生命を愛すれば愛する程、人間のおろかさははがゆかつたにちがいない。

次ぎに孔子の左の言葉が出てゐる。

「十家の村には必ず忠信の點では丘のやうな人間がゐるだらうが、丘のやうには學を好まない」

つまり孔子は自分は過ちをよく知り、それを心の底からなほして行つたので自分のやうになれたのだが、他の人は素質はあつても自分のやうに自分を研くことをしないから駄目なのだと云ふことをはつ切りさせたのだ。

だが何處までも修業しないではおさまらない素質こそ尊敬すべき素質であると云へる。

しかし多くの人は自分の心を本當にみがき、自分の素質を根本的によくすると云ふことをしない人が多い。そして自分の肉體も精神もどの位い美しくなり得るものかと云ふことを知らずに一生を浪費してゐる。孔子はたしかに自己を教育し、鍛えてゆくことの名人である。

頭をよくすると云ふことは學説をよくのみこむと云ふことではない、理窟がうまくなると云ふことでもない。又文章がうまくなると云ふことでもない。生精神を生々させて、いざと云ふ時に全生命をあやまりなく生かせるやうにするこ

とである。

世間で頭がいゝと云ふ人間の多くは、つまらぬことに頭をつゝこんで、大事なことを忘れてゐる人だ。だから彼等の腦髓は自分の生命に役立たない他人の弱點や、短所許りを見つけることに發達して自分の生命に役立つものには無能者である。

かゝる人間は嫌學者と云ふべきである。血や肉になるものはすてゝ、糞にしてすてるべきものだけを大事がつてゐるから。

學を好むと云ふのはそんな人間をさすのではない。自分の生命を正しく生かしたい本願の强いものが、その本願に從つて自己を完全に最上に實際にぶつかつて築いてゆくことである。そして何事にぶつかつてもすぐ最上の生き方が出來るやうに用意しておくことである。僕が釋迦や耶蘇や孔子やソクラテスに感心するのは、その點である。彼等は如何なる時でも全精神をぬけめなく生かして、あぶなげなく生てゐる。決してしどろもどろにはならない。彼等は今時の人よりももの知りではない。だがいかなる時でも、全精神を實によく生かして生てゐる。

彼等は人生上の名人である。感心しないわけにはゆかない。自分がしどろもどろに生きて滿足する者、人生上の川合初段のヘボ講義には感心しても名人の生きた石には感心出來ない。人生上のヘボが感心しないからと云つて、少しも名響にはならないのである。

自分は彼等の眞似をするものでも、頭から無批判に感心するものでもない。たゞ自分を本當に生かしたいと云ふ要求を內にもつから彼等の云ふことがよくわかり、自分の生る上に敎はることが多いから感心するのである。

人間らしく生ないことに滿足に感じ、誇りを感じ、自分の足りない所に自信をもつもの、そんなものには彼等は絲の

ないものである。

六の一

子曰

「雍や、南面せしむべし」—

こんなことを日本でうつかり云つたら縛られるだらう。

雍はどんな人か僕は知らない。僕がたよつてゐる本には、「天質寛大。刻ならず、簡要にして煩ならず、重厚にして輕卒ならず」とかいてある。中斷を得た人であらう。角のない私の平和なおちついた人であらう。

キヤケゴールは君主に君主になるには何が大事かと聞かれた時、「容貌の美しくないこと、あまりに利口でないこと」なぞと云つたさうだが、孔子に云はすと、容貌も大きいおちついた處のあることを望むであらう。

次ぎに一つぬかして

哀公問子。弟子の内では誰が學問を好むかと。孔子對へて云つた。「顏回と申すものがあります、學を好んで怒りを（他の人に）うつさず過を二度としません。不幸短命で死にまして、今はをりません。他に學を好むものを聞いたことがありません」

學を好むと云ふ例に、怒りの八つ當りをしないこと、過を再びしないことをあげてゐるのを見ても、今の學問好きとはちがうことがわかる。學は生命を生かすものであつて、窒息させるものではない。そして本當に學を好むものは少ない。今の日本に誰が眞に學を好むものか。

それにしても顔回の死んだことは惜しいことだ。顔回は孔子にとつて、ソクラテスにとつてのプラトンのやうな位置に立つた人かと思ふ。元より形式は隨分ちがうだらうが。次ぎの話も孔子の觀察の凡でないことを示す。又孔子の考への深いことを示す。

「子華が齊に使した。其處で冉子が子華の母のために粟を請ふた、孔子は釜（五升七合餘り）を與へよと云つた。冉子はあまり少ないので少しましてくれと云つた。其處で孔子は庾（一斗四升）を與へようと云つた。しかし冉子は自分のはからいで粟を五秉（七石一斗）與へた。孔子はそれを知つて云つた。赤（子華）は齊に行く時肥へた馬にのり輕い皮衣をきて行つた。私はかう云ふことを聞いてゐる、「君子は急に周して富めるに繼がず」君子はさしせまつて入用のある人を救つて、富んでゐるものをなほ富すやうなことはしない）と。

富める者には禮儀のしるしとして與へるのはいゝが、多く與へる必要のないことは云ふまでもない。しかし實際の世界に於ては富めるものに多くの送りものをする。又多くのものをかへしてもらうからならまだわかるが、又へつらつて得しやうと云ふのも今の世では無理がないとも云へるが、孔子のこの言葉は孔子らしい思慮がふくまれて、床しい。

同じ處にかいてある次ぎの話も孔子らしい。「原思が孔子の司寇の時その采邑の代官になつた時、孔子が粟を九百やらうとしたのをことわつた。孔子はそれでお前の鄕黨隣里（國の人で困つてゐる人に）與へたらいゝではないか」とるものはとつて、それを君の助けをもとめてゐるさしせまつてゐる人のためにつかつたらいゝだらう。

孔子は幸福な人を不幸にはしたがらなかつたであらう。だが正しい道をふんで出來るなら困つた人を助けたがつてゐる。之は溫情主義ではない。正義であり、愛である。富めるものをなほ富ますことを孔子はのぞんでゐなかつた。

六の二

孔子が又仲間を評して

犂牛（まさり毛の牛）の子でも赤くして角（角のまわり正し）なれば、用ないでよさうと思つても、山川（の神）はそれをすてない」

何處に生れた人間でも人類に役立つものをもつてゐれば人類はすてない。仲間を評して眞價のいつかあらはれることをすべての人にあてはめていつた。譬へば古いがよき譬へである。今時に通用しないたとへであるが、精神はますます通用し、その精神を又ぴつたりといてゐる。その時社會が要求するものをもつものは必ず見出されると云つてもいゝが、それでは少しうがちすぎる。

子曰く。

「回はその心三月仁に違はず。」（そのあと少し不明）

僕は一日の中に仁を志ざす時間をすべて集めても一時間もあぶない、まるで考へない日も少ないが、しかし考へない人の方が多いであらう。僕がいくらかこの世に仕事が出來たら、それは瞬間的であつても、毎日仁を志してゐるからかと思ふ。仁を志ざさない時は運命に甘へてゐる時だ。仁に志ざす時は、運命の自分は主になる時だ。

そのあとの句は、「其餘は則ち日月に至るのみ」と云ふ句で、其の餘をその他の人と云ふ意味にも、その他のことといふ意味にもとれるのださうだ。

あとの意味にとる方が顔回のみを批評した言葉としても、又仁がすべての木であることを示した言葉としても面白い

と思ふ。

又二つぬかして次ぎに

癩病の伯牛を孔子が見舞にゆく話が出てゐる。之も孔子らしい思ひやりが出てゐる。

孔子は窓から其手をとつて歸つて來て云つた。

「死ぬであらう。この人にしてこの疾あるとは、この人にしてこの疾あるとは」

顔を見るのも見られるもお互にいやであつたらう其處で孔子は窓から伯牛の手をとつた。二人は何にも云へなかつたが、心はお互に通じあつたであらう。孔子は歸つて來て悲しみ嘆息して、この人にしてこの疾あるとはとくり返して云つた所に、孔子の氣持がよく出てくる。天を恨みるのではないが、天命を是認も出來ない悲しみの氣持が思ひやり深かく出てゐる。意味深長である。

子曰く

「賢なる哉、回や、一箪の食、一瓢の飲、陋巷にあり、人その憂へに堪へず、回やその樂を改めず、賢なる哉回や」

孔子は回の生活を見て感動して云つた言葉と思ふ。本當に回はいゝ處があつたやうに思ふ。隨分貧しい生活をしてゐたのだと思ふ。元よりそれを賣りものにはしなかつた。天命をたのしんでゐた。孔子自身がのぞんでゐてしかも自分では實現する機會の殆んどなかつた美徳を顔回は完全に體現してゐた。孔子は感心したわけだ。

「再求曰く、子の道をよろこばざるにあらず力足らざる也。子曰く、力足らざるものは中道にて廢す、今汝はかぎれり（自分の力に見切りをつけた）」

そんな意氣地がなくつてどうする。力が足りないのではない。自分で足りないと見切りをつけるだけだ。出來ると思

へば出來ることも、出來ないと思ふと出來ないものだ。

力を自分でかぎることはよくない。

何かやらうと思ふ時は、先づ出來ると云ふ信仰が大事である。本當にやらうと思へば出來ると云ふ信仰が大事である。

六の三

子、子夏にかう云つた。

「汝、君子の儒となれ、小人の儒となることなかれ」

自分の生命のために學び、他の生命のために敎へる之君子の儒である。金のため名譽のため、又物しりになるために勉强し、又ふくのは小人の儒である。今になつてますます小人の儒が多いと云つてもまちがいでもあるまい。だからこの言葉は今でも生てゐる。

子曰く

「孟之反はほこらず、敗れて殿りをする、まさに門に入らんとする時、其馬を策つて曰く、敢て殿りをしたのではない、馬が進まなかつたのだ」

面白い話と思ふ。功をほこらないのは奥ゆかしいものである。

次ぎの文句も一寸意味があいまいで、大した言葉とも思はないからぬかす。

解釋がいろいろにつく言葉は、どうも不たしかな感じがして困る。次ぎに

子曰く。

「誰かよく出づるに戸によらざらん。何ぞこの道によることなき」

道が何のためにあるかを本當に知らないものが多すぎる。孔子は人々の愚をはがゆく思つてこんな詩のやうな言葉を云はれたのだと思ふ。

子曰く

「質文に勝てば即ち野（野人）なり、文質に勝ては則ち史（野人の反對ならん）なり。文質彬彬（調和しきつてゐる）として然る後君子なり」

之を孔子らしい言葉で、本當である。質と外形とは一致するのが本當だが、中々さうはゆかないものである。こゝで質と云ふのは、忠信誠實をさし、文と云ふのは威儀文采を云ふのださうだ。

孔子は粗野を好まなかつたやうだ。粗野は元よりいゝものではない。だが天眞爛熳は時に威儀文采のとゝなふ以上のこともあり得る。さう云ふことは稀らしくはあるが、しかし完全な人間は、風采を意識的でなく、おちつき堂々としてゐると思ふ。

次ぎの文句を一寸した處がわからない。

「人の生くるや直し、之を强いてなくして生くるや、幸にしてまぬかる」

人は天性正直なものだがそれをなくして邪惡になるから、禍を免れることは珍らしい。不幸にならないことが僥倖だと云ふのださうだが、もしさうとしたらあまりまわりくどい云ひ方と思ふ。

又不幸になつてもいゝから正直にしろと云ふのなら、少しは權威がある。だが正直にしないと不幸になるぞと云ふのは、少し平凡な道學者の云ひさうな言葉である。ちと孔子の云ひさうな言葉ではない。又正直にしてゐれば禍からまぬかれると云ふのも事實とぴつたりしない。だからこの言葉は少し何かぬけた處があるか。孔子の言葉を弟子が覺えちがいをしたのではないかと思ふ。

子曰く

「之を知る者は、之を好むものにしかず、之を好むものは之を樂しむ者にしかず」

之は感じから云つて本當である。しかし知ると云ふことは、好み、また樂しむから本當に知るのだとも云へると思ふ。しかしつめ込み主義の學問でも人は知ることは出來るかも知れない。だが好むわけにはゆかない。好むと云ふのは内心の要求から出るので、職務から出るのではない。好きこそものゝ上手と云ふことがある。しかし、好きは行程であつて又堂に入つてゐない。樂しむで始めて堂に入つたことになる。

子曰く

「中人以上は以て上を語るべし、中人以下は以て上を語るべからず」

孔子はそれを實行してゐたらしい。相手によつて上を語つてゐない時があるやうだ。

實際、中人以下の人には上を語るのは、馬の耳に念佛であり、豕に眞珠である。この言葉は孔子のいろ〳〵の經驗した處を語つてゐる。だが我々筆をとるものは、出來るだけ上を語りたい。すれば又中人以上の人はそれを理解して、それを又中人以下の人にわかる言葉になほして語つてくれるであらう。

しかし二人さしむかいの時は、相手にわからない言葉をつかうのは賢いとは云へない。

孔子が相手により、殊に國王とか、家老とか云ふ人に話した言葉には、上を語つてゐない時がありさうだ。だがその言葉は上を暗示してゐる。わかる人が見れば、この人はそれ以上のことを知つてゐることがわかる。次ぎの言葉は矢張り相手を見て云つた言葉と思ふ。

樊遲が知について問ふた。

子曰く

「民の義をつとめ、鬼神を敬して之に遠ざかる、知と云ふべし。」

「之はつまり樊遲が人のつとめを怠つて、鬼神のことに夢中になつてゐたのに反省をうながすために云はれた言葉と思ふ。そして人のつとめと云ふのは、父としては慈、子としては孝、兄としては良、弟としては悌、夫としては義、妻としては聽、長としては惠、幼としては順、君としては仁、臣としては忠をさすのだらうで、君としては仁である處から次ぎの問ひが出たと見られる」

ついで樊遲が仁について聞いた。

子曰く

「仁者は難き事を先にし、得ることを後にす、仁と云ふべし」

（之も相手を見ての言葉と思ふ。仁とは利益本位でなく、自分にすることのむづかしいことを先にして、得することはあとにする。つまり自分の君としてしなければならないことの内で一番厄介なことをさきにする。得することはあとにする。しかし之だけでは仁の本當の説明にはなつてゐないと思ふ。相手の人を見て、說いたものと思ふ）

知とは自分のなすべきことをよく知り、又よく果すことであつて、いくら将へてもはつ切りしないことは、敬して

讀んでおくことだと云ふのは本當である。人間に生きてゐる間人間の務を忘れて、他のことに許り心をつかふのは誤ったことにちがいない。來世を考へるのはやむを得ないとしても、どうせ考へてもわからないことを考へ、そして信じられないことを一生懸命に信じやうとするのは、愚民の感じがする。又自分にわからないことをわかつた顏して輕蔑し、否定するのも賢いとは云へない。不可知なものに對しては謙み深かく尊敬すると云ふことはゲーテもすゝめてゐたやうに思ふ。迷信風のもの、あまり神にすがりついて人間のことを忘れるものはあさましい。

仁を得ることを考へるものでないことはわかつてゐる。仁は物質的に得するためのものでも、又名譽心を滿足させるために存在するものではない。他人の生命のために働くことを意味してゐる。自分のしたくないことに他人のためにつくすよりは、自分のしたいことで他人のためにつくす方がより他人の生命のためにもなり、人類の一員のつとめもつくすわけだが、孔子時代、君臣の關係の露骨な時代では、自分勝手なこともしやすいので、自分にすることを難しとすることを先づすることを奬勵したのだと思ふ。今でも自分の好きなこと許りしていゝとは云へないが、自分の務めを果すのは樂ばかりしては駄目だが、しかし自分より他の人の方が適當なことは他の人に任せて、自分のなすべきことをなすことが、仁に叶ふ時がやがて來さうに思ふ。獨立人同志の間では、人の務と云ふものが孔子の時代とは隨分形はちがつてくると思ふ。

しかし孔子はすべての人が自己のつとめを果すことを奬勵してゐる。皆反省して自分の立場に相當する人間のやうに振まうことをすゝめてゐる。「君君たらずも臣は臣たれ」とはすゝめない。「君は君たれ。」「臣は臣たれ。」「君君たらずも臣は臣たれ」が事實であれば、同時に、「臣、臣たらざるも、君は君たれ」も事實であることを孔子は認めてゐるやうに思ふ。

孔子はすべての人が自分の立場にたつて、自分の務を完全に果すことを奬勵してゐる。だから獨立人同志だつたら、

お互に尊敬しあふこと、自分の立場からはみ出ないこと、そしてより正しい教に從つて自分の務を果すことを奬勵するであらう。君主が臣下を愛するのと、獨立人同志がお互に愛するのとは形がちがふのは當然である。獨立人は君主よりも無力であらう。自分一人より他に自分の命令をきくものはないのだから。だから他人にたいする力も少ないであらう。それだけお互の助力と協力が必要になり、自分一人の務めを、完全に果す事が必要になる。奴隷人の存在はこの世からだんだん影をひそめ、獨立人のみの世界があらはれて來つゝある。獨立人の世界がくれば、獨立出來ない人は保護者を要する。そして獨立人になれる素質あるの人は、どん〳〵獨立人になれるやう教育され、奬勵され、又時には制裁されるであらう。

世界中の人すべてが獨立人となり、たゞ自分の眞價だけをたよつて悠々と生きられる世界が來たら、政府が如何にかはらうが、如何に亡國の民であらうと、獨立の國の民であらうとつまり同じである。征服した處が、征服された所が同じく獨立人は獨立人である。さうなつて始めて征服することは無意味になり、政府をとると云ふことも無意味になる。人類は今急足にその方を目ざしてゐる。

他人を奴隷人として平氣でゐることは勿論が許さない時が來つゝある。曉の鐘はなりひびきつゝある。

つい餘計なことを云つた。

六の四

子曰く

「知者は水を樂み、仁者は山を樂む。知者は動き、仁者は靜かなり。知者は樂み、仁者は壽なり」（壽は「いのちながし」とよむのださうだが、壽の方が感じがある）

知者は事物の理に通達して心の虚明の人を云ふのださうだ。仁者は義理に安んじ、重厚にして外物のために移されず、自然を樂み、天眞全くせんとする者ださうだ。しかしそんな説明は頭に入れてしまつて、この言葉だけをすら〳〵とよむと、感じがあり、美しい。兩者の區別とはつ切りしすぎてゐるが、本當である。對句のために對句ではない。メレヂコウスキーがトルストイとドストエウスキーを靈と肉の人にわけて批評したやうな無理がない。よく本當を見てゐる。

知者も美しい。自由自在で、透明で、胸がすく、だが仁者のおちつきは又格別であらう。それを水と山にたとへたのも面白い。之は詩であつて理窟ではない。水を愛するのが必ず知者で、仁者は必ず山のみを樂むわけではあるまい。だが共通する處があり、共感する處があるかと思ふ。

孔子は中々詩人である。

子曰く

「齊一變すれば、魯に至らん、魯一變すれば道に至らん」

中々孔子は國自慢である。何處まで本當か自分は知らないが、中々獨斷的な云ひ方に面白味がある。ユーモアがあると云つてはわるいかなー？

子曰く

「觚、觚ならず、觚ならんや、觚ならんや」

お互に尊敬しあふこと、自分の立場からはみ出ないこと、そしてより正しい教に從つて自分の務を果すことを奬勵するであらう。君主が臣下を愛するのと、獨立人同志がお互に愛するのとは形がちがふのは當然である。獨立人は君主よりも無力であらう。自分一人より他に自分の命令をきくものはないのだから。だから他人にたいする力も少ないであらう。それだけお互の助力と協力が必要になり、自分一人の務めを、完全に果す事が必要になる。奴隷人の存在はこの世からだんだん影をひそめ、獨立人のみの世界があらはれて來つゝある。獨立人の世界がくれば、獨立出來ない人に保護者を要する。そして獨立人になれる素質あるの人は、どん〳〵獨立人になれるやう教育され、奬勵され、又時には制裁されるであらう。

世界中の人すべてが獨立人となり、たゞ自分の眞價だけをたよつて悠々と生きられる世界が來たら、政府が如何にかはらうが、如何に亡國の民であらうと、獨立の國の民であらうとつまり同じである。征服した處が、征服された所が同じく獨立人は獨立人である。さうなつて始めて征服することは無意味になり、政府をとると云ふことも無意味になる。

人類は今急足にその方を目ざしてゐる。

他人を奴隷人として平氣でゐることは輿論が許さない時が來つゝある。

曉の鐘はなりひびきつゝある。

つい餘計なことを云つた。

六の四

子曰く

「知者は水を樂み、仁者は山を樂む。知者は動き、仁者は靜かなり。知者は樂み、仁者は壽なり」（壽は「いのちながし」とよむのださうだが、詩の方が感じがある）

知者は事物の理に通達して心の虛明の人を云ふのださうだ。仁者は義理に安んじ、重厚にして外物のために移されず、自然を樂み、天眞を全くせんとする者ださうだ。しかしそんな說明は頭に入れてしまつて、この言葉だけをすら〱とよむと、感じがあり、美しい。兩者の區別とはつ切りしすぎてゐるが、本當である。對句のために對句ではない。メレヂコウスキーがトルストイとドストエウスキーを靈と肉の人にわけて批評したやうな無理がない。よく本當を見てゐる。

知者も美しい。自由自在で、透明で、胸がすく、だが仁者のおちつきは又格別であらう。それを水と山にたとへたのも面白い。之は詩であつて理窟ではない。水を愛するのが必ず知者で、仁者は必ず山のみを樂むわけではあるまい。だが共通する處があり、共感する處があるかと思ふ。

孔子は中々詩人である。

子曰く

「齊一變すれば、魯に至らん、魯一變すれば道に至らん」

中々孔子は國自慢である。何處まで本當か自分は知らないが、中々獨斷的な云ひ方に面白味がある。ユーモアがあると云つてはわるいかな——？

子曰く

「觚、觚ならず、觚ならんや、觚ならんや」

觚は稜（かど）のある酒器ださうだ。それが古制を失なつて稜かなくなつたのを見て孔子が詩（？）をつくつたのである。

「先王の道すたれたり
人、人ならず
人ならんや、人ならんや」

だが過去が、過ぎ去るのは仕方がない。新に生れるものを祝福したい。

すでにすたれたものは、やむを得ない。孔子はやむを得ないことをなげいて、今を昔にしたがつてゐる。其處は孔子のまちがひではないか。先王の道のすたれたのは歎くのはいゝ。だが觚が觚になればそれでいゝとは云へない。新しく生れるものを

祝福したいものである。

人類はまだわかい。過ぎ去つたことを歎くにしては未來に希望がありすぎる。

孔子に後ろを見すぎるくせあるのは玉にキズであらう。先を見なかつたのではないが、過去をほめすぎた。それは質感であらうが、未來を見る時の廣々さは過去にはない。過去はなんとなく局部的だ。

新聞之將來

島谷亮輔

一　通信機關の改善

先進國と比較して見て、日本の通信機關位遲れて居るものはあるまい。軍事界、產業界、教育界、政治界、何れの方面を見ても、遲れて居ると云へば遲れて居るに相違ないが、此通信機關位甚だしく遲れて居るのも、一寸珍らしい。然し此結果として我新聞の發達を阻止して居ることも、また甚だしいものである。日本丈けに居て、現狀を當然視し、所謂『しかたがない』で我慢して居るものには何でもないやうに思はれるかも知れない。が、一度歐米の現狀に顧みて見ると、我新聞界は能くも、斯る事柄に辛棒し、餘計な無駄骨を折り、不經濟に金を費ひ、能率の舉らぬ仕事をして、默つて滿足して居られることと思ふ。

世界大戰の最中であつた。こう云ふ話が殘つて居る。東京を立つ前日に數百里を離れた目的地に電報をかけて歸國を報道して置いて、さて歸つて見ると豫期した出迎人は停車場に來て居ない。此人が到着した翌日に初めて電報は到着した。之れは戰時のことである。自分が特派員として平和會議の當時巴里から打つた新聞電報が二十日間を經て本社に到着した事實を記憶して居る。然し今日になつては、あれだけ戰後經營難に困しんで居る英國ですら、電報は短距離長距離ともに、四十五分乃至一時間を見込んで置けば到着する狀態である。ロンドンから東京、又は大阪間の電報は四五時間で遲くも到着するを例とするのであるが此中で面白いことは、ロンドンから歐露西伯利亞を經てウラジオストツクに至り、長崎の大北電信會社の支局までは大抵一時間で到着するのに反し、長崎大阪又は東京間が大概三四時間を要する事實である。此間に何等か大なる缺點があり、世界の進步より遙かに遲れた所が無ければ斯の如き事實は有り得

べきことではない筈である。

電報の遲着の苦情を持ち込むと、ロンドン大北電信會社の役員は何時も長崎までの到着時間を調査問合はして呉れ、それから先は日本政府の責任であるから、自分の知つてる所でないと答へるのが普通であつた。

東京長崎間の電信線は歐洲方面のみならず南洋印度、支那に至る幹線であるのに此電信線にして尙ほ且つ斯の如き狀態であるとすれば、他は推して知るべきのみである。郵便の狀態は別として此方面丈けの遞信省の仕事は英米より比較して遙かに十年乃至二十年は遲れてると云はねばならない。

問題を簡單にする爲めに第一に英國の現狀を概說して、此國の新聞が如何に此電信を利用して居るかを敍述して見る。

中央郵便局の電信部と云ふべき廣大な建物には約三千五百名の男女の電信技手が居て毎日二百萬通の電報を取扱つて居る。之れが外國、內國と分れて居ること勿論であるが、普通電信の發送受信は午後三時四時を最も繁忙な時期とし、それ以後電信線は遊んで居ると同じことである。そこで政府から見れば收入、新聞から見れば便宜と云ふ双方の利益の爲めに、午後四時から翌朝の午前十時の間を限り新聞社に其電線を貸し與へ、一定の料金を徵し、之れが使用を許して居る。之れは國內のみならず、ロンドン、外國都市間も同様である。其料金は極めて安い。例へばロンドンから五十哩の距離を每日三時間宛使用するとして、三十磅、九時間八十三磅、二百哩として三時間九十磅九時間二百四十八磅である。

東京名古屋間を二百哩と見て東京の支局から名古屋の新聞に送る直通の電報料が一年二千五百圓で事足りることは、頗る安直な編輯費と云はねばならない。尤も新聞社と電信局とを連絡する電線の架設費は此外に徵集されるがたいしたことはない。

二百哩以上は二十五哩を增す每に、三時間十磅、九時間二十七磅十志を增すことになるから、東京大阪間を假に四百哩と見て其電報料は三時間百七十磅であり、東京門司間を七百哩と見て其使用料は三時間三百磅、十二時間以內の最高使用料は三百五十磅を越えないことになる。如何に繁忙な大新聞社でも一本の電信線を專用すれば大抵の用事は足り、且つ綽々たる余裕がある。

現にデーリー・メール社及びデーリー・クロニクル社は此方法を利用して夫れ〳〵マンチエスターとリーヅで倫敦で發行するものと同樣な新聞を發行して居るが、孰れも一線を利用して居るに過ぎない。西班牙の國境に近い佛國のツールーズでの新聞も之れと同じ式を利用し、巴里から通信を送つて居る。

三年前から通信社は大阪東京間に[illegible]も高い架設費を徵收したのであるが、此一本の電話線丈けでは事足りず、此專用線をもつて居る新聞社、通信社とも更に至急電話の使用を余義なくされて居る。新聞經營上の甚だしき浪費と云はねばならない。

英米の新聞社や通信社が出來る丈け電信線を利用して、電話を使用しない理由は、前者を利用する方が經濟であり、且つ其最も主要とする正確を期し得る點にあるが、之れは後に詳述する。

以上は夜間電信線利用の場合であるが、別に晝夜二十四時間にわたる電信線の使用を特別の場合に限り許可して居る。之れは高い料金を徵して居るから、晝間は遞信省で使用し得るのを、貸すのであるから、高いのは當然であると云ふ見解である。之れによると距離二百哩として電信線が地下線なる場合、一年千八百五十磅地上線の場合千三百五十磅であるから、かなり高い。然し新聞社で之れを使用して居るものは無いと云つてよい。

新聞社にとつて更に大なる利益は同文電報の制度である。普通、同文電報と稱するものは、日本では同一の都市内に限られて居るが、英國では一電信線上にある各都市に適用される。例へば東京長崎間を一電信線と見て、東京から長崎に至る間の都[illegible]路、岡山、廣島、下關、門司、福岡、佐賀は此同文電報に均霑されることになる。そして新聞電報の料金は日本に於て普通料金の三分の一であるのに比して五分の一である。即ち英國内の電報料は十二語一志、新聞電報の場合は六十語一志である。同文電報の制度を適用した場合には一個所を加ふる每に二片の料金であるから、前記の十四個都市に配達されるものとして、此新聞電報に對する一個所の負擔額は一志に加ふるに二十八片即ち二志四片を以てするから、結局三片に足らないことになる。英國の新聞が此制度の恩典を蒙ること至大なることは想像以上であるかも知れない。此電報の發送方法は目下日本で行れてるやうな原始的な手打式發信機受信機では不可能であるから、此方法を實行するには先づ電信機關の改善を要すること勿論である。然し此方法の實行によつて如何に東京以外にある全國の新聞が莫大なる利益を受け得るかを、何人も諒解しないわけには行くまい。

それから普通の同文電報の場合であるが、英國では地方の通信員がロンドンの各新聞社と契約を結んで、同文電報を打つと、中央郵便局では、平生十枚から四十枚までの用紙の間にカーボン・ペーパーを挿んで用意して居て、受信と同時に之れ

をタイプライターで印刷し、宛名先に發送することになつて居る。之れも新聞社が編輯費を節約して居る一個の例である。

獨り新聞事業に携はるもののみの問題ではないが、日本の速記術と發信の符合位、日本の新聞の發達を妨げてゐるとはあるまい。電信や速記術なるものが輸入された時、氣のキイタ人たちが、羅馬字による符合からイロハの符合に工風して之れを實行せしめた。今日の困難は之れから來て居るのである。日本で使用されて居る發信機は一個しかない。即ち點と線との結合による符合を用ひて居るのである。羅馬字の場合だと數字を外にしては二十六字の組合せであるから、簡單であるが、日本字だと之れが四十八字即ち羅馬字の約二倍の組合せになるから、至極複雜になり。一個の符合と他の符合が殆んど似て居る場合が多いから、玆に間違の比例が多くなつて來る。日本の電信技手位苦しいものは無いとは、電信に關する專門の著書に明記してある程である。英國では二百戸三百戸の田舍でも郵便局のある所には必ず電信局がある。郵便局と云つても大抵荒物屋か食料品屋かの兼業であるが、玆の電信技手なるものは大抵婦人で、品物を賣る片手間にやつて居るのに過ぎない。日本だと電信技手は何年かの講習を要しないと一人前になれない。英國では二三個月の講習さへやればあまり教育を要しない婦人でもやれる。之れ丈けで難易の程度がわかる。

其次ぎは速記術であるが、之れも同樣で日本では速記と云へば非常に困難なもののやうになつてしまつて居る。事實其通りで新聞社の仕事を一人前にやつて行ける速記者は數年の熟練を要する上に、其技術の成熟した時期は極めて短かく、間もなく腕が鈍つてしまう。速記者以外の者で速記を學んだものは殆んど有るか無しかである。之れに反して英米では學生が大抵之れを習つて居る。辯護士で速記を知らぬのは無いと云つた位、又大抵の人も文章を速記で書き、之れをタイピストに渡し、時間の節約を計る位である。十二三年前ウイルソンが大統領の就任式に讀んだ演説の草稿はやはり此速記であつた。又普通の手紙一枚書くのに英米人のは大抵之れをタイピストに口授して、タイプライターにたゝかせ、出來たものを一見した上で署名する丈で大抵の用事は片づいてしまう。此タイピストなるものの半年許りも勉强すればタイプライチングも一人前になり、速記術も兎に角用が足りる次第である。新聞記者にしてもその通り、普通のレポーターで速記術を知らなくては飯が食へない。新聞記者兼速記者である。日本では速記は困難な技術である丈けに、大學敎育も受けず、中には中學教育も變則でやつたやうな人が、生活の方法として此速記をやる。從て新聞事業の如き社會百般、國

内のみならず外國の事情にも一般的に通じて居ないと用來ない職業で第一に速記者の困るのは、事實を知らないことから來る誤譯である。長距離電話で神經をトガラシた後に取つた速記がトンデも無い間違をして新聞に掲載されたことは、どの新聞社にも笑話として殘つて居ることと思はれるが、其缺點たるや、電話による通信の不完全であることと尙ほ一つは日本の速記術が極めて不完全で且つ困難である特有の事情から來て居る。

自分は何故に明治の初年に發信及び速記に外國から傳つたまゝの符合が其儘使用されなかつたかを疑ふものである。自分は決して羅馬字論者ではない。むしろ古典教育の維持者である。歐米で希臘羅馬の古典を知らなくては一人前の教養ある紳士と稱され得ないと同樣の意味で、支那の古典に通じない日本人はウスッペラな男だと思つて居る。然し文字を一個の符合として考へて見て、これを電信機の利用の實際を見ると、此羅馬字による發信機の使用の實行を主張しない譯には行かない。

ロンドンに於ける中央電信局の話に立ち戻るが、茲に三千五百人の男女の技手が日曜以外に働らいて居り、二百萬通の電報を取扱つて居ることは前に云つて置いた。斯る多數の電信が如何に迅速に取扱ひ得られるかは同局を一見して始めて諒解が出來る。そこには無論日本で使用されて居るやうな發信機受信機がある。之れに點と線とをテープの中央に描くことの符合によつて、その意味を表はすものであるが、此外に發明者の名をとり、ボードーと稱する發信受信機がある。之れによると一個の電信線によつて、同一の距離内に四個宛の發信と受信が出來る。つまり東京大阪間に一本の電信線があれば、同時に四個の電報が發送され、且つ四個の電報が受信されるわけであるから一本の電信線あれば、兩局の間に八人宛の技手が間斷なく仕事を繼續し居られるわけで、之れ丈け見ても電信線一本の能率は八倍昇ることになる。電線が足らないから、電信が遅れると云ふ口實は、此機械の實行によつて無くなるわけである。且つ之れに表はれた符合は前記のやうな點と線との結合で無く、羅馬字が其儘横に表はれるのであるから、讀むに面倒はない。

日本で用ひて居るやうな發信受信機は主として繁忙でない場所、田舍の郵便局だとか、ロンドン内でも三等局には据付けられて居るが、英文の一語を平均五字のアルハベットから成るものと見做し、普通一分間に十二語乃至三十語は打電され得るものとなつて居る。此機械は前に叙述した通り、線と點との符合で、點と線が五個集まつて一語をなす場合があるから從て遅い。前云つた通り日本の符合は點と線との集り方に似たものが多いから、從て誤電が多いと云ふことになる。所でボードー機

によると點と線ではない。ピアノのキー・ボールド見たいなものが有つて五個のキーがあり、普通の羅馬字は二個丈け數字の場合は三個丈け指先で其キーをたゝけば、一個の羅馬字が受信局のボードー機に表はれることになる。つまり普通の發信機では一個の指先しか使用が出來ないのに反して、此機械では三個の指先が使用されるから、從て動作が迅速になる。此機械によると、一語五字と見て一分間に五十語打電し得られることゝなり、同時に八個の電信が同時に發送されるから電線の使用を加算して十倍以上の能率增進と云ふことになる。ロンドンの中央電信局で、此機のみを使用して居る部屋ではマンチエスターとかリヴアープールだとか長い机の一端に掲示がしてあり電力のフリクエンシーを利用したボードー機の運轉して居るのを見受けられる。

ボードー機につゞいて使用されてゐるものにヒユーズ式なるものがある。是れはボードー式の發信受信が一本の電信線で八個宛出來るのに比し二個宛しか出來ない。然しボードー式の符合が二個乃至三個が出來て居るのに反して一個丈けで事足りる。機械はピアノ式で一個のキーをたゝけば向ふの局で羅馬字が表はれることになる。ボードー式も、ヒユーズ式も其寫が同時に發信機に表はれるから間違は直ちに訂正されるわけである。ロンドン巴里間の海底電信だとか長距離の電報には多く此式が用ひられて居るが新聞社でもそれを使用して居る。タイムス社はロンドン巴里間を使用して居たが、別の理由で今は使用するのをやめた。巴里のジユールナル社とロンドンの同社支局とにはそれを使用して居る。マンチエスタ・ガージアン社はロンドンに廣大な支局をもつて居ること、尚ほ大阪の新聞社が東京に重きを置いてゐるのと同樣であるが、此社は此式によつて兩者間の通信をなして居る。

ヒユーズ式の方が其取扱ひにボードー式よりも熟練を要する代りに幾分か迅速である。

此次きに來るものはクリード式である。此式の前二者と異る點は前二者にあつては技手が直接キーに其指先をたゝかせると同樣に受信局に羅馬字の表はれることにあるが、クリード式になると二回の手數を要する。其第一階梯はタイプライター式の機械でテープに文字を示す穴をあけること、其第二階梯は穴の穿たれたテープを廻轉して居る軸と台との間に挾むと驚くべき速力で、其テープを運び去ると同時に受信機にも同樣の穴の穿たれたテープが作り上げられることである。此テープを受信機の別の機械にかけると玆に羅馬字が出現することになつて居る。此機械では一分間二百語は容易に打電出來るが最高の速度

は四百語だとされて居る。世界の海底電信では悉く此樣式の機械が使用されて居るし、各電信會社とも此能率の促進に熱心努力して新式機械の製作に夢中だ。イースターン電信會社はロンドンから上海迄此方法によつて直通の電信を發して居るから、此間は新聞電報でも受付てから一時間以內で達することが近來稀では無くなつた。露國でも戰前と同樣に大北電信會社に西伯利を通過してウラジオに至る線の監理使用を一任しウラジオから長崎、上海長崎間は大北電信會社の手にあるが、此機械を使用してる結果でもあるが、電信は迅速に發送させる。所で日本內地では斯る便利な機械が使用されないのもたしかに有力な原因と思はれるが、電信の發送が遲々たること牛の如きことは何人も苦き實驗を味つてる所である。日本の電信の進步狀態は火繩銃に對して弓矢、村田銃に對し火繩銃、機關銃に對し村田銃の相違がある。

デーリー・メールがマンチエスターに、デーリー・クロニクルがリーヅに於てロンドンと同樣の新聞を發行し得るのは、此發信受信機の賜である。而も十六頁の新聞紙（一部分は廣告であるが）を發行するのに一本の電信線を十二時間使用して居るのに過ぎない。デーリー・メール社の技手の云ふ所によると同社も兆始めは速記を使用して居たが、此機械の發明されて後は速記は不經濟不正確であるのと、此方が迅速で便宜であるので、一切速記による通信を廢止した。速記者十五名を要する所を此機械を使用すれば三名で足りる。

大阪で發行して居る新聞社は東京大阪の兩地に此通信を發す目的のみで晝夜四十名の速記者を置いて居るが、日本の速記者は前述の如き困難な技術を要するが爲めに、普通の記者よりも高級者であると云つてよい。一個の新聞社が此聯絡の爲めに速記者丈けに拂ふ俸給は每月六千圓乃至八千圓に達する筈であるが、若し此機械の使用が日本に於ても許され得るものとすれば每月三千圓乃至四千圓の編輯費用の節約を見ることは困難のことではない。余事ではあるが、此機械の代價も高いものでは無く、發信機受信機ともに約一萬圓に過ぎない。大抵の新聞社は此機械を二三個月も使用すれば編輯費の節約の方でとりかへし得るわけである。

此機械が如何に便宜なものであるかは、デーリー・メール社は十四五丁あるか無きかの英國議會と同社との間の通信を此機によつて實行して居ることを以て見ても最も有力に證據立てられる。普通リヴアープールの綿花市場の相場が紐育に達する時間は二分間としてあるが、之れも此機械によつて始めてなし得ることであるかも知れない。

によると點と線ではないピアノのキー●ボールド見たいなものが有つて五個のキーがあり、普通の羅馬字は二個丈け數字の場合は三個丈け指先で其キーをたゝけば、一個の羅馬字が受信局のボードー機に表はれることになる。つまり普通の發信機では一個の指先しか使用が出來ないのに反して、此機械では三個の指先が使用されるから、從て動作が迅速になる。此機械によると、一語五字と見て一分間に五十語打電し得られることゝなり、同時に八個の電信が同時に發送されるから電線の使用を加算して十倍以上の能率增進と云ふことになる。ロンドンの中央電信局で、此機のみを使用して居る部屋ではマンチエスターと、かリヴアープールだとか長い机の一端に掲示がしてあり電力のフリクエンシーを利用したボードー機の運轉して居るのを見受けられる。

ボードー機につゞいて使用されてゐるものにヒユーズ式なるものがある。是れはボードー式の發信受信が一本の電信線で八個宛出來るのに比し二個宛しか出來ない。然しボードー式の符合が二個乃至三個が出來て居るのに反して一個丈けで事足りる。機械はピアノ式で一個のキーをたゝけば向ふの局で羅馬字が表はれることになる。ボードー式も、ヒユーズ式も其寫が同時に發信機に表はれるから間違は直ちに訂正されるわけである。ロンドン巴里間の海底電信だとか長距離の電報には多く此式が用ひられて居るが新聞社でもそれを使用して居る。タイムス社はロンドン巴里間を使用して居たが、別の理由で今は使用するのをやめた。巴里のジユールナル社とロンドンの同社支局とにはそれを使用して居る。マンチエスタ●ガージアン社はロンドンに廣大な支局をもつて居ること、尙ほ大阪の新聞社が東京に重きを置いてゐるのと同樣であるが、此社は此式によつて兩者間の通信をなして居る。

ヒユーズ式の方が其取扱ひにボードー式よりも熟練を要する代りに幾分か迅速である。

此次きに來るものはクリード式である。此式の前二者と異る點は前二者にあつては技手が直接キーに其指先をたゝかせると同樣に受信局に羅馬字の表はれることにあるが、クリード式になると二回の手數を要する。其第一階梯はタイプライター式の機械でテープに文字を示す穴をあけること、其第二階梯は穴の穿たれたテープを廻轉して居る軸と台との間に挾むと驚くべき速力で、其テープを運び去ると同時に受信機にも同樣の穴の穿たれたテープが作り上げられることである。此テープを受信機の別の機械にかけると玆に羅馬字が出現することになつて居る。此機械では一分間二百語は容易に打電出來るが最高の速度

は[illegible]話だとされて居る。世界の海底電信では悉く此種式の機械が使用されて居るし、各電信會社とも此能率の促進に熱心努力して新式機械の製作に夢中だ。イースターン電信會社はロンドンから上海迄此方法によつて直通の電信を發して居るから、此間は新聞電報でも受付てから一時間以内で達することが近來稀では無くなつた。露國でも戰前と同樣に大北電信會社に西伯利を通過してウラジオに至る線の監理使用を一任しウラジオから長崎、上海長崎間は大北電信會社の手にあるが、此機械を使用してる結果でもあるが、電信は迅速に發送させる。所で日本内地では斯る便利な機械が使用されないのもたしかに有力な原因と思はれるが、電信の發送が遲々たることと牛の如きことは何人も苦き實驗を味つてる所である。日本の電信の進歩狀態は火繩銃に對して弓矢、村田銃に對し火繩銃、機關銃に對し村田銃の相違がある。

デーリー・メールがマンチエスターに、デーリー・クロニクルがリーヅに於てロンドンと同樣の新聞を發行し得るのは、此發信受信機の賜である。而も十六頁の新聞紙（一部分は廣告であるが）を發行するのに一本の電信線を十二時間使用して居るのに過ぎない。デーリー・メール社の技手の云ふ所によると同社も其始めは速記を使用して居たが、此機械の發明されて後は速記は不經濟不正確であるのと、此方が迅速で便宜であるので一切速記による通信を廢止した。速記者十五名を要する所を此機械を使用すれば三名で足りる。

大阪で發行して居る新聞社は東京大阪の兩地に此通信を發す目的のみで晝夜四十名の速記者を置いて居るが、日本の速記者は前述の如き困難な技術を要するが爲めに、普通の記者よりも高級者であると云つてよい。一個の新聞社が此聯絡の爲めに速記者丈けに拂ふ俸給は每月六千圓乃至八千圓に達する筈であるが、若し此機械の使用が日本に於ても許され得るものとすれば每月三千圓乃至四千圓の編輯費用の節約を見ることは困難のことではない。余事ではあるが、此機械の代價も高いものでは無く、發信機受信機ともに約一萬圓に過ぎない。大抵の新聞社は此機械を二三個月も使用すれば編輯費の節約の方でとりかへし得るわけである。

此機械が如何に便宜なものであるかは、デーリー・メール社は十四五丁あるか無きかの英國議會と同社との間の通信を此機によつて實行して居ることを以て見ても最も有力に證據立てられる。普通リヴアープールの綿花市場の相場が紐育に達する時間は二分間としてあるが、之れも此機械によつて始めてなし得ることであるかも知れない。

によると點と線ではない。ピアノのキー・ボールド見たいなものが有つて五個のキーがあり、普通の羅馬字は二個丈け數字の場合は三個丈け指先で其キーをたゝけば、一個の羅馬字が受信局のボールド機に表はれることになる。つまり普通の發信機では一個の指先しか使用が出來ないのに反して、此機械では三個の指先が使用されるから、從て動作が迅速になる。此機械によると、一語五字と見て一分間に五十語打電し得られることゝなり、同時に八個の電信が同時に發送されるから電線の使用を加算して十倍以上の能率增進と云ふことになる。ロンドンの中央電信局で、此機のみを使用して居る部屋ではマンチエスターと、かリヴァープールだとか長い机の一端に掲示がしてあり電力のフリクエンシーを利用したボールド機の運轉して居るのを見受けられる。

ボールド機につゞいて使用されてゐるものにヒューズ式なるものがある。是れはボールド式の發信受信が一本の電信線で八個宛出來るのに比し二個宛しか出來ない。然しボールド式の符合が二個乃至三個が出來て居るのに反して一個丈けで事足りる。機械はピアノ式で一個のキーをたゝけば向ふの局で羅馬字が表はれることになる。ボールド式も、ヒューズ式も其寫が同時に發信機に表はれるから間違は直ちに訂正されるわけである。ロンドン巴里間の海底電信だとか長距離の電報には多く此式が用ゐられて居るが新聞社でもそれを使用して居る。タイムス社はロンドン巴里間を使用して居たが、別の理由で今は使用するのをやめた。巴里のジュールナル社とロンドンの同社支局とにはそれを使用して居る。マンチエスタ・ガージアン社はロンドンに廣大な支局をもつて居ること、恰ほ大阪の新聞社が東京に重きを置いてゐるのと同樣であるが、此社は此式によつて兩者間の通信をなして居る。

ヒューズ式の方が其取扱ひにボールド式よりも熟練を要する代りに幾分か迅速である。

此次きに來るものはクリード式である。此式の前二者と異る點は前二者にあつては技手が直接キーに其指先をたゝかせると同樣に受信局に羅馬字の表はれることにあるが、クリード式になると二回の手數を要する。其第一階梯はタイプライター式の機械でテープに文字を示す穴をあけること、其第二階梯は穴の穿たれたテープを廻轉して居る軸と台との間に挾むと驚くべき速力で、其テープを運び去ると同時に受信機にも同樣の穴の穿たれたテープが作り上げられることである。此テープを受信機の別の機械にかけると玆に羅馬字が出現することになつて居る。此機械では一分間二百語は容易に打電出來るが最高の速度

は同百語だとされて居る。世界の海底電信では悉く此様式の機械が使用されて居るし、各電信會社とも此能率の促進に熱心努力して新式機械の製作に夢中だ。イースターン電信會社はロンドンから上海迄此方法によつて直通の電信を發して居るから、此間は新聞電報でも受付てから一時間以内で達することが近來稀では無くなつた。露國でも戰前と同様に大北電信會社に西伯利を通過してウラジオに至る線の監理使用を一任しウラジオから長崎、上海長崎間は大北電信會社の手にあるが、此機械を使用してる結果でもあるが、電信は迅速に發送させる。所で日本内地では斯る便利な機械が使用されないのもたしかに有力な原因と思はれるが、電信の發送が遲々たること牛の如きことは何人も苦き實驗を味つてる所である。日本の電信の進歩狀態は火繩銃に對して弓矢、村田銃に對し火繩銃、機關銃に對し村田銃の相違がある。

デーリー・メールがマンチエスターに、デーリー・クロニクルがリーヅに於てロンドンと同様の新聞を發行し得るのは、此發信受信機の賜である。而も十六頁の新聞紙（一部分は廣告であるが）を發行するのに一本の電信線を十二時間使用して居るのに過ぎない。デーリー・メール社の技手の云ふ所によると同社も非始めは速記を使用して居たが、此機械の發明されて後は速記は不經濟不正確であるのと、此方が迅速で便宜であるので、一切速記による通信を廢止した。速記者十五名を要する所を此機械を使用すれば三名で足りる。

大阪で發行して居る新聞社は東京大阪の兩地に此通信を發す目的のみで晝夜四十名の速記者を置いて居るが、日本の速記者は前述の如き困難な技術を要するが爲めに、普通の記者よりも高級者であると云つてよい。一個の新聞社が此聯絡の爲めに速記者丈けに拂ふ俸給は毎月六千圓乃至八千圓に達する筈であるが、若し此機械の使用が日本に於ても許され得るものとすれば毎月三千圓乃至四千圓の編輯費用の節約を見ることは困難のことではない。余事ではあるが、此機械の代價も高いものでは無く、發信機受信機ともに約一萬圓に過ぎない。大抵の新聞社は此機械を二三個月も使用すれば編輯費の節約の方でとりかへし得るわけである。

此機械が如何に便宜なものであるかは、デーリー・メール社は十四五丁あるか無きかの英國議會と同社との間の通信を此機によつて實行して居ることを以て見ても最も有力に證據立てられる。普通リヴアープールの綿花市場の相場が紐育に達する時間は二分間としてあるが、之れも此機械によつて始めてなし得ることであるかも知れない。

外國で使用される場合と日本で使用される場合との唯一の相違は外國にあつては通信は羅馬字である。尤もofと云ふ字はO丈けで簡略にしtheはT丈けにし、CONSTITUTIONとかPARLIAMENTのやうな長い文字はCONSTN PRLMNTと云ふやうに簡略にされるが、新聞に出てるやうな體裁にするには書き改めること勿論である。日本の場合は羅馬字を日本字に正さねばならない面倒はある。然し之れは讀み惡いこと羅馬字にまさる片假名の電報を文字に正すこと、又は他人が見てはわからない速記の符合を改めて書き直すことを考へて見れば何でもないことである。

外國に特派員をもつてる新聞社は能く經驗してわかつてる事であるが、特派員の電報は普通此羅馬字で其翻譯は一寸熟練を要するが、別に困難なことではない。自分の經驗の示す所によると、ロンドンからの電報による通信は豫め原稿に書くやうな面倒をせず、タイプライターで打ち放して、然も繰返して見るやうな事もしないで、其儘電信局に渡したものであるが、之れが間違の多い點線式の日本の電信局の手を經た上に新聞社に到着し、結局新聞に掲載されるにも拘はらず、誤謬の掲載されたことは殆んど無かつたと云つて良かつた。無論一方に翻譯者の頭の良いことを示すが、確にそれ丈羅馬字使用の正確なることを證據立て得るのである。

朝日、毎日、時事、國際（最近聯合と改稱さる）、電報通信の諸社は東京大阪間に専用の電話線をもつて居る。之れが架設には高い金を遞信省に納めたのであるが、此線の使用に關しては、何も此線を電話に限り使用しなければならない理由はあるまい。何故此線を電信に用ひないか、而して各社ともこれによつて一個年四五萬圓の通信費の節約をなし得ないのか、吾人の諒解に苦しむ所である。元來電話に用ひられて居る電線の方が、普通電信に用ひられて居る電線よりも能率が高い。從て發信受信機の据付けと、技術者の養成丈けで事が足りるから、此改善の實行は易々たることであるのだ。

若し遞信省の許可規則に障害があれば、これを改正して同省に於ても秋毫も損失のない事柄である、

クリード式の特長で他の足下にもよりつけ得ない大なる點がある。それは此機關によれば、一人の電信技手のたゝく通信は同時に全國何個所の電信局の受信機にも達し得ることである。之れを完全に利用して偉大なる發達と能率を擧げて居るのが、米國の聯合通信社（A・P・）である。此通信社の設備は後章に詳述する。

二年前であつた。ロンドンの西北郊ウエンブレーに英帝國

大博覽會の開會式に皇帝が臨御され、開會の辭を述べられた。此開會式が行はれたことを知らす電報は、同博覽會内のイースタン電信會社の電信局を發し、ジブラルター・マルタ島、スエズ、印度各地、シンガポール、濠洲ニュー・ジーランド各地を經て更に加奈陀に達し、加奈陀の各地を通過し、ニューフウンドランドから英國に戻り、ウエンブレーの博覽會内の發信局に歸つて來た。其間電信局の手に渡ると百個所以上であつたが、要した所の時間は二分間に足りなかつたのである。最後の局に行く迄に途中の局には同文電報の方法で受信が出來るのである。米國の聯合通信社でやつてゐるやうな事は日本に急に出來ぬかも知れない。然し同じく國有である英國の遞信省のやつてるとは、日本に應用の出來ないと云ふ道理は一寸考へられないやうに思ふ。

此同文電報の制度と利益は前述の通りである。例として東京長崎間の例を引いて置いたが、同一の政見とか利害を持つた一電線上にある各新聞社が東京の通信社からなり聯合本部などから此方法によつて電報通信を受取ることはお互の利益であり、且つ新聞の最も要求する時間の迅速の目的を達し且つ極めて經濟的に實用出來る。以上は單に新聞社側から見た利益であるが、遞信省が此方法によつて受ける利益もまた莫大である。前記の場合一個の通信社が發した長崎に至る迄十五個所の新聞社に充てた同一の電報を中央郵便局が受付けたと假定する。現在の原始的な方法では、郵便局の技手は此の電報を發信するには、十五個の手續を經なければならない。然も其要する時間は如何に技倆拔群のものと雖も、クリード式の十分の一の動作しか出來ないから、一本の電信線を使用する時間はクリード式の百倍に相等する。從て能率の點ではお話にならない程の相違である。斯ることは新聞關係者には能くあることである。過去の例によつて見ても、原敬氏の暗殺されたのは午後七時半頃に起つた事件であつた。所謂號外ものであるので、地方の新聞も號外を發行したと假定する。此場合に中央にある支局なり、通信を委托された通信社は至急電報を打つなり、長距離電話をかけるなり大騷ぎをしたに相違ない。又一個の通信社で多數の通信を引受けて居るものの困難は斯る場合に想像に余りあることである。然しクリード式が採用されて居たとすれば斯る事件は極めて造作なく全國に亘つて同時に通信が出來る、無駄な勞力をなして遲速を爭ふ必要がなくなつて來る。

最近起つた加藤首相薨去の場合も之れと同樣である。事件が午前八時半頃に起つた丈け一層號外の發行された事と思はれる。政府當局者が國民一般に或る警告を迅速に發表したりする場合は今後益增加するものと見ねばならぬ。例へば議會解散の

如き全國殆んど同時に發表を要する事件があるが、此の場合に全國の地方官廳や選擧關係の機關に向つて中央から一々電報を繰返す必要はない。中央にあつて一人の電信技手の發信は直ちに全國の宛名先に向つて到達するのであるから之れ以上の便宜は他にあり得ない筈である。

斯る便宜で且つ此式の採用に當つての困難は極めて僅少であるにも拘らず、遞信省の當局が未だ之れを顧みんともしない態度は、自分には不可解と云ふの外はない。一個年以前であつた。遞信省の一技師がロンドンにやつて來たので此機械の效能を説明し、單に新聞通信と云ふ方の側から、此採用をすゝめた所、それでは行つて見やうと云ふで、中央電信局を訪問したり、クリード會社に行つたことがある。其技師の話では、此機械は羅馬字であるから、日本には適用し兼ねる。之れをイロハに直すことが出來るか否かを同會社と交渉したとの事であつたが、自分は其甚だしき愚見なるに驚ろいた。電信の符合は一種の符合である以上、それがイロハであると羅馬字であるとは深く問ふを要しない問題である。今日電報を使用する位の人で羅馬字を知らないものは殆んど無い。羅馬字で出來る機械をイロハに直すことは不可能ではないかも知れないが文字の數が約二倍になる丈け機械は複雜になり取扱惡くなる。イロハのタイプライターが出來ないと同様である。のみならず機械が工夫された處で、羅馬字の場合の如く世界的でないから、其製造費用は少くとも二倍以上になることを覺悟せねばならない

又此機械は全國の電信局に悉く採用するの必要があるわけでは無い。此機械を使用するには其爲めに技手を養成しなければならないから、最初は長崎東京間にある重要都市に開始すれば良い筈である。所謂一等郵便局二等郵便局では現在でも歐文電報を取扱つて居るが技手が不熟練で、現在點線式の符合を使用して居る結果、間違が非常に多い。ボードー式、ヒユーズ式、クリード式によると羅馬字が其まゝ表はれ且つ複寫がとれるから間違は直ちに修正される。自分がロンドンにあつて過去何年間に東京又は大阪から受取つた電報は大抵間違つて居た。何でもこれは長崎まで又は小笠原島迄の間に間違ふと云ふことである。それ以上外國の電信局の手に渡ると此クリード式になるから間違はないと云ふことである。外國貿易に從事して居る人は悉く同じ經驗をもつて居る筈だ。

元來クリード式の目的は手打式（點線式）のものより迅速と云ふことにあるから、英國でも幹線以外比較的閑散な線には他の式を使用して居る。更に第三等電信局程度になると依然手打式であること前述の通りである。我國でもそれでよいのでも

つて、電線を酷使して居る幹線に此式を採用し、必要に應じて漸次に他に擴張して行けばよい。此ボードー式一個の外にヒユーズ式クリード式の見本すら遞信省には備え付けて無い。ボードー式すら未だ實驗されずにしまい込んだ儘である。現に角世界の風潮に遲れることの甚だしきに驚かざるを得ない。

以上繰返して述べた所で我電信事務が英米に比較して甚だしく遲れて居ることを說明し得たと思ふ。玆にこんな話がある。五六年前のことであつた。大阪の遞信局長が吾人に勸告するに『どうも御承知の如く外國電信が遲れる。尤も外國から長崎迄は早く來るのであるから、外國電報は長崎に受け附けることにし、長崎大阪間を電話でとつたら如何です』と云ふことを以てした。現在この勸告通り國際通信社は實行して好成績を擧げて居るとのことである。（其の他の社も利用して居るかも知れぬか、自分は知らない。）然し電信の遲いと云ふことは變則であつて永く此儘で默つて居るべき問題ではない。出來る丈早く改良しなければならない問題であると思ふ。

我新聞界が進取的である事實は、毎日新聞社が率先して、大形の印刷機を据付けてから、各社とも之れに倣ひ、それを持たたければ、一流新聞でないと云ふ風に競爭してゐることで見ても明瞭である。此現象は第一は流行第二は看板と云ふ風にも受取れる。然しマリノ式からホウ式ゴス式印刷機に進んで行つた理由は、短時間に多數の新聞紙が印刷出來ると云ふことである。然し新聞紙の米の飯である所の通信材料を迅速且つ經濟的に受取ることは、前記の印刷能率の增進以上重要な問題である、而して朝日、毎日、時事、國際、電通の如き諸社は何時でも此改善の實行をなし得る電線を持つて居乍ら、此改善に手を下そうともして居ない。之れ程自分にとつて不可解千萬な事柄はない。

然し此便宜ある地位に居ない全國の新聞社にとつて此通信機關の改善は前記の諸社以上に重大な利害問題である。これには第一に協同團結の必要がある。寺内内閣の彈劾だとか普通選擧の促進だとか、是れ迄政治的運動と云ふやうな華美な方面には、全國の新聞記者は能く熱中したものだ。然し之れは新聞の經營と云ふ本來の道筋から云へば、一個の邪道であつて、新聞記者が政治家を兼業しての話である。甚だ地味であるかも知れない。然し新聞そのもの丶發達の爲めに、即ち通信の機敏を計ると云ふやうな協同の利益の爲めにも、全國の新聞社が、協同して、一個の運動を起し、遞信省の事業をして、歐米のそれに比較し、今日の如く甚だしく遲れた狀態から、少くとも、それに追ひつき得る狀態までに、こぎつかしめ、而して其改善によつて受け

得る大なる利益を均一に受け得るやうにしたいものである。全國の新聞がそれによつて得る利益は蓋し筆紙に盡し難い。

吾人の政黨に對する注文も同樣である。是れ迄鐵道の發達普及は黨勢擴張の目的も加はつて、政黨の主要な政綱の一つとなつて居たが、同一の範疇に屬すべき筈の通信の改善と云ふことは、殆んど棄てゝ、顧みられなかつたやうである。然し乍ら通信の改善によつて利益を受けるものは、獨り新聞ばかりで無く、一般民衆であることに着眼するを要する。殊に普通選擧の實行以後の政黨は輿論を指導し、之れに訴へるの必要が益々多くなつて來た。政黨は新聞を顧みずしては、今後生存し難い。のみならず、政黨としては中央の新聞よりも地方の新聞に重きを置かなければならぬ。今日中央の新聞は財力の豐富である爲めに政黨から獨立して居るものが多い。英國でも其の通りであるが、地方の新聞は政黨的色彩が濃厚である。地方の新聞が健全に發達することは、何の方面から見ても利益があるが、之れから最も利益を受けるものは政黨である。而して通信の改善發達によつて最大の利益を受けるものは此地方の新聞であつて見れば、各政黨とも其遠大の利益の爲めに、此際通信の改善の目的に努力して貰ひ度いものである。

最大の困難は或は經費の點にあるかも知れない。然し電信の改良費には大した金がかゝるわけでは無い。鐵道の建設改良費に政府が多大の金をかけて居ることに比較すれば、電信の改良費の如きは云ふに足らない額である。前者の改良の爲めに公債を募集することが豫算上認め得られることだとすれば、後者の改良の爲めにも毎年同樣の遣繰が出來ないことはない、要は政府及び輿論が此必要を認めるか否かと云ふことに歸着する。

二　英米通信社の現狀

數年來聯合通信社を設立すべしと云ふ議論が眞面目に起り來つたやうであるが、新聞界にとつて之れ程喜ぶべき傾向はあるまい。此傾向は各新聞社が記事の迅速を計り、編輯費の無駄を節すると云ふ目的から來て居ると思ふが、未だ實行には至らないやうである。そこで各新聞社とも各官廳、銀行、會社、商業會議所等に一々記者を派遣し、無駄な金を費つて居る。現在の狀態は知らないが、十年前記者の控室は一個の遊戯所で、半日を將棋か碁に暮すことが、新聞記者の役目であつた。青年新聞記者は大抵之れで懶惰な悪習慣をつけられてしまう。ノースクリツフ卿は日本に來た時の通信中に『日本人は能率のない國民だ』と斷言して居るが、同卿は長時間日本に滯在した譯では無く、其接近したものは主として新聞記者及び其關係のものであ

つたから、或は此感想を赤裸々に叙べたものかも知れない。現在の新聞の經營はノ獨ならずとも其能率に疑問を挾まずには居られないのである。

此聯合通信の實行如何は、若し大都會に英米に於て行はれて居るやうなテイツカーが行はれゝば、何でも無く體現し得られる事柄である。但し今日使用されて居るテイツカーは羅馬字であるから、羅馬字で我慢しないと、此實行は不可能である。聯合通信の實行を妨げた一個の理由は各新聞社で特派記者を置かないと、號外などを出す場合に、他より遲れる危險があると云ふことであつた。然しテツカーは電力で動作するものであるから、此機械さへあれば、現在取引所の相場が此テツカーで通信されて居る如くに此方法に依らなければ、迅速な通信は出來ないと云ふ結果になる。

一個の新聞社が普通ありふれた記事を集める爲めに使用して居る編輯費を毎月六百圓乃至千五百圓と推算して見ると、此テツカーの設備費位ひ何でも無く出て來る筈である。聯合通信者の設立は、此テツカーの据付から始まらなければならない。

ロンドンには此テイツカーを使用してる通信社にロイター社を筆頭とする。ロイター社は新聞社以外のものにはテイツカーを供給して居ない。其理由は其の記事が他の通信社や、新聞記者に盗まれることを防ぐ爲めである。且つ其料金は至つて高い。通常印刷による通信は大使館や其他の官廳等に供給して居る。

此外にセントラル・ニユース社がある。又一般に行はれ居るものはエキスチエンジ社で、此社の創立は相場が主なる目的であつたと思はれるが、現在では内外一般の記事を供給して居る。ロイター社は最近英國の聯合通信社たるプレツス・アソシエシヨンに合併された形となつた。ロイター社丈けでは經濟が立ち行かなかつた爲めである。尚ほ國際が八新聞社の共同經營に歸したやうなものである。

プレツス・アツソシエシヨン（P・A・）は米國のアツソシエテツド・プレツス（A・P・）に倣つたもので、近來其勢力を大にしつゝある。目的は米國のと同様であつて、組合加入の新聞社が毎月此社の經費を分擔して居る。社自身は損をしないし、利益もしないし、其經費さへ拂へれば良いことになつて居る。總選擧當時となれば、毎日何百と云ふ演說が全國に亘つて行はれる。それを一個の新聞社が如何に完備した組織を持つて居た所で、特派員から記事を受けることは、成し得べき事柄でない。且つ演說の報告の如きは誰れがやつても同一であるから、特別に記者を派遣する程の價値がない場合がある。又大阪の新聞

社の如くに、日本で通信社なるものが發達しない以前から發達した歷史を持つて居るものは、自己の通信網を張つて居て、之れに多大の經費をかけて居るが、英國の新聞社には、斯る無駄をしないから、前述の如き記事は此種の通信社に一任し、新聞社は各自の特長を發揮することに其勢力を集中して居る。

米國ではメルヴィール・ストーンと云ふ偉大な人物が居て、聯合通信社なるものを作り上げた。ストーンか實業家志望であつたならば、無論米國第一流の金滿家になり得たに相違ない。然し新聞記者を志したが爲めに、金は儲からなかつたかも知れないが、米國に無くてならないA・P・と云ふ一大記念物を作り上げた。其經歷は『新聞記者の五十年』と云ふ自著に出て居る。新聞記者が讀んで損をしない書物である。

此A・P・は一九〇〇年に紐育州の法律の下に組織されたもので、合衆國はもとより、中米、南米、加奈太ポート・リコ、フイリツピン群島等にある朝刊、夕刊、週刊新聞約千二百の新聞社を組合員とする社團法人である。組合員である新聞社は、一定の經費を拂へば、其要求する記事の供給をA・P・から受けることになつて居る。A・P・が如何なる大組織を有して居るかは、千七百人の記者役員の外に八萬人の通信員を有し、毎日の經費二萬弗に達して居ることを以て見て明白である。通信記事の蒐集及び供給が迅速に且つ正確に全米國及びフイリツピン群島迄に出來るかと云へば、一に電信の賜である。完備した電信の組織が無かつたなら、斯る大事業は不可能であるに相違ない。米國では誰も知つてる通り、電信電話の經營は私設會社の經營であるだけ、斯る場合に特種の便宜がある。A・P・の經費の主要なるものは、電信電話の會社から此電線を借りることにあるが、更に合衆國全體で約十一萬哩の電線を借りて居る。(晝間使用約五萬五千哩夜間五萬三千哩)

合衆國內は六個の通信區域即ち、東部(紐育)中部(シカゴ)西部(桑港)南西部(キヤンサス・シチー)ロツキー山脈部(デンヴア)南部(アトランタ)に分割され、各支部に編輯長が置かれてある。

各支部間には二重乃至三重の電線で連絡されて居て、通信を受取る方面と發送する方面とが間斷なく行はれることになつて居る。

外國方面の記事は新嘉坡以西の記事は一旦悉く、紐育に集つて來る。新嘉坡以東の記事は一旦悉く香港に集つて來る。ロンドン、巴里、伯林、モスコー、羅馬、ウイーン、マドリツト、ゼネヴアの各支局から紐育に發送される記事は平均毎日八千語に達すると云ふことである。

さて、紐育、桑港に到達した外國記事は、其支局長が眼をとうした上、之を他の支部に向け發送する。之れを受取つた各支部は夫れ〴〵其支部内の組合各新聞社に打電する。新聞社であつても、其發行部數の大小によつて、要求する記事の分量に差がある。そこでA・P・同一支部區域内にあつて、且つ同じ地位にある新聞社には、前述したクリード式發信機に於ける場合と同様方法で、同文電報を發送し得るのであるから、日本のやうに一々電報を打つ面倒があるわけではない。技手の打つ電報は同時に其支部から、此同じ地位にある各新聞社に同時に通信されることになる。尤もクリード式は英國のものであるので、A・P・が採用して居る發信受信機はシカゴのモークラム會社のものである。之れはタイプライターと全然同様であつて、一分間に六十語、即ちタイピストがたゝき得る速度と同様に動作をすることになつて居る。我中央電信局には十數台モークラムがあつて目下技術の練習中である

將來無線電信又は電話が有線による通信方法にとつて代る時代が來るか否かは面白い問題であると思はれるが、現在の發達程度では見込がないやうである。有線の場合だと、受信は完全に記録に殘るが、無線はそうは行かない。のみならず、空中の故障で一部が聞きとれない場合には繰り返す必要が起つてくる。聯合通信社は此使形方法を攻究して居るとの事であるが、斯の如き理由で實行するに至らないやうである。

各支部の編輯長は二重の役目をもつて居る。其一は支部の區域内の記事を集め、之れを區域内の組合新聞社に通信することであつて、其二は其區域内の記事を他の支部に通信することである。其の記事の輕重取捨撰擇に編輯長の手腕を要する所である。各支部には此編輯長の外に二人の副編輯長があつて、八時間宛で交代晝夜其機關の活動を繼續して居る。

各支部の成績を調査する爲めの一個の行政官として茲に監督なるものが置かれてある。

A・P・の活動に電信の必要不可缺のものなることは前述の通りであるが、A・P・は主として電話會社の線を借入れ、之れを電信に使用して居る。米國の電信線は多く鐵であるのに、電話線は銅であるので、此方が能率が高いからである。

さて組合新聞社の拂ふ經費の點如何と云ふに、第一に組合新聞社は OVERHEAD CHARGE と稱して均一に毎週十五弗宛拂はされる。之れが一個の新聞社の支拂ふ最低限の經費である。小都會の新聞社になると、大した語數の記事を要求しない。そこでA・P・の電線の通じて居る接近した支部區域中の支部から電話で記事を受取る方法をとつて居る。十五弗に加ふるに電話料と通信員に拂ふ俸給だけで地方の新聞はA・P・の記事の供給を受け得ることになつて居るから、比較的安直に新聞の編輯が出來ることになる。各小都市が兎も角も獨立の新聞を發行し得るのは、此A・P・の賜である

經費割宛の標準は其都市の人口によるものである。紐育や市俄古の如き大都市の新聞社は供給される記事の分量が多いと同時に、A・P・に拂ふ經費も亦大である。A・P・が毎日大新聞社に供給する語數は一日七萬五千語、普通新聞紙の六十段を滿たす分量である。

尤も紐育や其他の大都市の新聞社は自分の通信機關を完備して居るから、A・P・の供給する記事は、多量に掲載されて居ない。ハースト系の新聞の如きは全然A・P・に屬せず、獨立して居る程である。然し地方の新聞になるとA・P・の通信記事丈けで其紙面の重要な部分を占めて居るのが少くない。それ丈けA・P・の勢力は偉大である。尤もA・P・は國内の問題では政黨政派に超越し、無色透明であるから、記事に物足らない感を與へる場合がある。そこで餘裕のある新聞社は特派員を置いたり、特種の通信記事を要求することとなるのである。

但し無色透明を標榜して居る丈けに、中央政府の發表する聲明書は誰れよりも先きにA・P・の手を經ることになつて居る。大統領の教書の如きものは其發表の數日前にA・P・の手に渡る。何しろ長いものであるから、A・P・は豫め之れを郵送する。各新聞社では其必要とする部分を組んで置く。主筆は數日前から精讀して、思想を練つた上で論説を書いて之れまた印刷に附せられる。其發表すべき當日になるとA・P・の本社から『發表を許された』と云ふ電報を發すると、之れを受取つた各新聞の編輯の擔當者はよし來たと許り、工場に其旨を傳へる。工場の掛は直ちに輪轉機を廻轉させ、五分間ならずして政治上の大事件は世上に知れ亘ることになつて居る。

米國では未だ一回も此教書があらかじめ世上に洩れるやうな事は無かつたとストーンは云つて居る。之れ丈け新聞界の公徳心も進めば難有いものである

ストーン氏は日本贔屓であるので有名である。巴里の平和會議中、日本記者は能く其教を乞ふたものである。同氏は岩倉大使の一行が市俄古に來た時から伊藤公を知つて居た。ポーツマス平和會議の當時に裏面にあつて如何に日本の爲めに活動したかは其著書に書いてあるし、一九一七年に石井子が米國に來た時所謂石井ランシング協約なるものを日本に有利に成立させたのも此ストーン氏に負ふ所大である。

A・P・は前記の如く歐洲の各地に特派員を置いて居る外に各國の通信社と關係をつけて、其記事の交換をして居る。紐育のA・P・の本部には獨逸のウルフ、露西亞のロスタ佛蘭西のアヴアス、加奈陀のプレッス等が机をならべて居て、A・P・で集まつた記事を材料として其自國の本社に打電して居る。

A・P・のロンドンに於ける支社はロイター社内にある。歐洲に於ける記事は主としてロイター社から受取つた時代があつた。然しロイターの集めた記事は英國本位であるので、今では歐洲に居る特派員は直接紐育の本社に送ることになつてゐる。

各國の通信社は全然其國の政府の御用通信であること勿論である。日本に聯合通信社の成立することは、新聞の發達に貢獻する所至大なるべきは、何人も異存のない所であらう。それには二個の條件が必要である。其最大はストーンの如き偉大なる人物が其一身の利益を放棄して公平無私、全般の社會の爲めに貢獻すること是れである。第二の條件は文明の利器たる通信機關を自由に利用し得ることである。A・P・が電信を完全に利用し得ないならば、今日の如き活動は出來なかつたに相違ない。

A・P・の外に米國ではユナイテッド・プレッスなるものあり、此の社はロンドンにブリチッシュ・ユナイテッド・プレッスなるものを置いて、歐洲の通信では時にあなどり難い手柄をして居る。

此外にハースト系が持つてるインターナショナル通信社がある。此通信社がA・P・の記事を泥棒したので、裁判の問題になり、米國では記事は一個の財産であるから盜むことと相成らぬと云ふことになつて居る。日本に於ても新聞事業の名譽と利益の爲めに記事は一個の財産であることを確定させ度い。之れには法律の制定を必要とするかも知れない。然しハースト系が何時も小股を掬ふやうな記事許り出して居るのでは無い。レニンの死んだことをかぎ出したのは莫斯科に居た此特派員であつた。A・P・の特長は米國内に專賣的であるだけ機敏を缺ぐと云ふ事にある。そこで他の通信社は歐洲方面の記事に主力をそゝぎ時々A・P・をして顏色なからしめることがあると同時に誤報もまた少くない。此外に國內的の通信社は數へれない程きある。

英國のロイター社に對して、エキスチエンジ社、セントラル・ニュース社とも此手で奇功を奏することが少くないが、之れと同時に此通信には警戒を要する。早きを求めて正確を期しないからである。

英國は國の面積が米國の如く廣大で無いだけ、大抵の新聞社はロンドンに支局を置いて居る。新聞町であるフリート・ストリートを乘合自動車の階上に座つて通つて見ると、如何に支局の多いかゞ明白であるが、此理由もあり且つは電信線が國有であることの關係もあつて、米國の聯合通信社の如く一個の通信社が全國の電線を自由自在に使用する如き設備はない。追々にはそうなることと思はれるが、現在の處ではP・A・に來たものは政府筋其他のものも一旦P・A・に渡つたものをロデオ印刷機につけて、印刷し之れを加入した各新聞の本社及び支社に配布することになつて居る。地方新聞と雖も、其記事の大部分はロンドンで得るものであり、且つ重要なものであるから、ロンドン支局長は地方新聞の主筆に次いで重要な地位を占めて居るやうである。此支局がP・A・其の他から得た材料を取捨選擇し本社に通信する。大抵は本社支局間に特設の電信線をもつて居る。

（つゞく）

經費割宛の標準は其都市の人口によるものである。紐育や市俄古の如き大都市の新聞社は供給される記事の分量が多いと同時に、A・P・に拂ふ經費も亦大である。A・P・が毎日大新聞社に供給する語數は一日七萬五千語、普通新聞紙の六十段を滿たす分量である。

尤も紐育や其他の大都市の新聞社は自分の通信機關を完備して居るから、A・P・の供給する記事は、多量に掲載されて居ない。ハースト系の新聞の如きは全然A・P・に屬せず、獨立して居る程である。然し地方の新聞になるとA・P・の通信記事丈けで其紙面の重要な部分を占めて居るのが少くない。それ丈けA・P・の勢力は偉大である。尤もA・P・は國內の問題では政黨政派に超越し、無色透明であるから、記事に物足らない感を與へる場合がある。そこで餘裕のある新聞社は特派員を置いたり、特種の通信記事を要求することとなるのである。

但し無色透明を標榜して居る丈けに、中央政府の發表する聲明書は誰れよりも先きにA・P・の手を經ることになつて居る。大統領の教書の如きものは其發表の數日前にA・P・の手に渡る。何しろ長いものであるから、A・P・は豫め之れを郵送する。各新聞社では其必要とする部分を組んで置く。主筆は數日前から精讀して、思想を練つた上で論說を書いて之れまた印刷に附せられる。其發表すべき當日になるとA・P・の本社から『發表を許された』と云ふ電報を發すると、之れを受取つた各新聞の編輯の擔當者はよし來たと許り、工場に其旨を傳へる。工場の掛は直ちに輪轉機を廻轉させ、五分間ならずして政治上の大事件は街上に知れ亘ることになつて居る。

米國では未だ一回も此教書があらかじめ世上に洩れるやうな事は無かつたとストーンは云つて居る。之れ丈け新聞界の公徳心も進めば難有いものである。

ストーン氏は日本贔負であるので有名である。巴里の平和會議中、日本記者は能く其教を乞ふたものである。同氏は岩倉大使の一行が市俄古に來た時から伊藤公を知つて居た。ポーツマス平和會議の當時に裏面にあつて如何に日本の爲めに活動したかは其著書に書いてあるし、一九一七年に石井子が米國に來た時所謂石井ランシング協約なるものを日本に有利に成立させたのも此ストーン氏に負ふ所大である。

A・P・は前記の如く歐洲の各地に特派員を置いて居る外に各國の通信社と關係をつけて、其記事の交換をして居る。紐育のA・P・の本部には獨逸のウルフ、露西亞のロスタ佛蘭西のアヴアス、加奈陀のプレッス等が机をならべて居て、A・P・で集まつた記事を材料として其自國の本社に打電して居る。

A・P・のロンドンに於ける支社はロイター社內にある。歐洲に於ける記事は主としてロイター社から受取つた時代があつた。然しロイターの集めた記事は英國本位であるので、今では歐洲に居る特派員は直接紐育の本社に送ることになつてゐる。

各國の通信社は全然其國の政府の御用通信であること勿論である。日本に聯合通信社の成立することは、新聞の發達に貢獻する所至大なるべきは、何人も異存のない所であらう。それには二個の條件が必要である。其最大はストーンの如き偉大なる人物が其一身の利益を放棄して公平無私、全般の社會の爲めに貢獻することと是れである。第二の條件は文明の利器たる通信機關を自由に利用し得ることである。A・P・が電信を完全に利用し得ないならば、今日の如き活動は出來なかつたに相違ない。

A・P・の外に米國ではユナイテツド・プレツスなるものあり、此の社はロンドンにブリチツシユ・ユナイテツド・プレツスなるものを開いて、歐洲の通信では時にあなどり難い手柄をして居る。

此外にハースト系が持つてるインターナショナル通信社がある。此通信社がA・P・の記事を泥棒したので、裁判の問題になり、米國では記事は一個の財産であるから盗むことと相成らぬと云ふことになつて居る。日本に於ても新聞事業の名譽と利益の爲めに記事は一個の財産であることを確定させ度い。之れには法律の制定を必要とするかも知れない。然しハースト系が何時も小股を掬ふやうな記事許り出して居るのでは無い。レニンの死んだことをかぎ出したのは莫斯科に居た此特派員であつた。A・P・の特長は米國内に專實的である丈け機敏を缺くと云ふ事にある。そこで他の通信社は歐洲方面の記事に主力をそゝぎ時々A・P・をして顏色なからしめることがあると同時に誤報もまた少くない。此外に國内的の通信社は數へれない程をある。

英國のロイター社に對して、エキスチエンジ社、セントラル・ニユース社とも此手で奇功を奏することが少くないが、之れと同時に此通信には警戒を要する。早きを求めて正確を期しないからである。

英國は國の面積が米國の如く廣大で無い丈け、大抵の新聞社はロンドンに支局を置いて居る。新聞町であるフリート・ストリートを乘合自動車の階上に座つて通つて見ると、如何に支局の多いかゞ明白であるが、此理由もあり且つは電信線が國有であることの關係もあつて、米國の聯合通信社の如く一個の通信社が全國の電線を自由自在に使用する如き設備はない。追々にはそうなることと思はれるが、現在の處ではP・A・に來たものは政府筋其他のものも一旦P・A、に渡つたものをロデオ印刷機につけて、印刷し之れを加入した各新聞の本社及び支社に配布することになつて居る。地方新聞と雖も、其記事の大部分はロンドンで得るものであり、且つ重要なものであるから、ロンドン支局長は地方新聞の主筆に次いで重要な地位を占めて居るやうである。此支局がP・A・其の他から得た材料を取捨選擇し本社に通信する。大抵は本社支局間に特設の電信線をもつて居る。

（つゞく）

鎌倉と麹町の間

堺利彦
山川均

(一)

『夫れ天地は萬物の逆旅にして、光陰は百代の過客也、而も浮世夢の若く、歡を爲す幾許ぞや』(李太白)。フトこんな事を思ひだした。文人風の感傷が折々浮んで來る。これも年のセイか。

先日の銀ブラ、何といふ事なしに面白かつた。近來はちよい〳〵會へるので嬉しい。然し先日お話の、隱退前の小さんを一緒に聞かうと云ふことも、實現出來るかどうか分らず、松坂屋の犬の子を見ようとした計畫も『本日休業』で破れたし、實際『歡を爲す幾許ぞ』だ。

そこで一つ思ひついた。君と僕、鎌倉と麹町の間に、これから葉書の往復を繼續して見ようぢやないか。それだけの樂しみだつて、いつまで續けて出來る事か。年齢と、健康と、裁判とが、我々をにらんでゐる。

あの翌晩、寒村の入獄を送る意味で、二夫婦が天金で飯を食ひ、ついでに又犬の子を見に行つたが、今度は『終業』でヤハりだめだつた。(三月十四日、山川均様、堺利彦)

(二)

ひどく感傷的ですな。おひ先の短い老人はとかくそうした氣持に釣り込まれ易い。そこで老人の氣分を引立てるため銀ブラを行ひ、不二屋のコヒーをのむことが吾々若い者の主要任務の一つとなる。そのうちまた出掛けましよう。今度はぜひ犬の仔を見たいものです。

支那の情勢に暗いことは吾々の恥づべきことの一つと考へるが、今度(御承知でしようが)北京日々の東京支局から『支那事情』といふ日刊が出る由。これは恐らく支那における形勢の推移を知るために有益な資料であらうと思ふ。惜しい哉、一ケ

月謝議料金三圓（固より三圓位にへきえきするものではないが、）一つ共同で取つてはどうですか。

相變らず左の眼が碌に見へないので困ります。しかし反譯は一生懸命にやつてゐる。出來上つたところで『歡を爲す幾許ぞや』ではなく『刑を捺す幾許ぞや！』佐文君ではないが全く反譯地獄である。（三月十八日、K生）

（三）

今朝は雪だ。『老人』は猫を膝にして文債を果してゐるのだが、窓外を見ると雪がいよ〳〵降りしきる。仕事の合間に此の葉書を書かうといふ興味を生じた。

どうだ鎌倉の『若い者』は八幡宮まででも雪見に出かけるだけの勇氣があるか。それとも矢張り炬燵と褞袍で『反譯地獄』かな。『老人』は後刻、神田まで本買に行きたい氣がしてゐる。子供の時、雪を見ると、いつでも犬と一しよにハシヤギだした、その記憶が湧き起つて來た。

『支那事情』の事、如何にも御尤も。然し『吾々の恥づべきこと』が餘り多いので、一々手が出せない。志だけはロシヤ語から朝鮮語までも持つてゐるのだけれど。

『左の眼』について、×××××の事を問合せて君に報告してくれと寒村から頼まれてゐるが、ほんとに必要なのか。（二十日、堺）

（四）

鎌倉の『若い者』は二三日前から又々ストマックゴーダウンのため、蒲團の中で雪見をしました。なか〳〵の大雪で壯觀でした。丁度一と月ぶりに湯に這入つた時に垢がよれ出すやうに、鼠色の雪が天からよれ出してゐる。これが二階の窓のあたりまで舞ひ落ちると、姿を變へて白くなる。隣の竹籔の竹の葉にのつかるのがあるかと思ふと、松葉の先にぶらさがる奴がある。庭はもちろん一面まつ白。苺はすつかり雪に蔽はれ、スヰートピーと豌豆とが僅かに頭をのぞけてゐる。毎朝塵溜箱を顚覆してゆく近所の赤犬が生垣をくぐつて這入つて來て、足痕をのこして出てゆく、等々。

これはわざ〳〵蒲團の中から頭を出して見た譯ではなく、（この頃の片ちんばの眼で見たよりも、見ない方が幾らか確かである。）そこは四十七年來の經驗の歸納により、雪降りと名づける事象の先行繼起の關係は殆んど科學的の正確さで分つてゐるのです。もちろん八幡宮まで雪見に出かけようなどゝいふ取つておきの勇氣は輕々しく出しません。（ことに大概のものは見なくとも大抵分つてゐる。エレヴエーターの如きも、要するに上下に上つたり下がつたりするもので、大抵想像してゐたやうな

ものだ。活動の如きも然り。）尤も勇氣はあつても第一、下駄も傘もない。（最近三年間、足駄といふ輕業師の穿くやうな無益なものを買つたことがない。足駄なんかは雨降に外に出さへしなければ決して必要のないものだ。）

なほ『後刻……行きたい氣がしてゐる』といふ段になると、小生の如きは毎朝二階から降りがけに、北向きの窓から眞白な富士山を見るたびに、即刻、あのてつぺんから眞つ裸で麓までころげ落ちて見たい氣がしてゐるが、まあ〳〵と思ひ止まつてゐる。（三月二十一日、鎌倉の若い者）

（五）

今日着の二枚つゞき、大傑作。小生の雪中本買の『氣』は果して實現性を缺いでゐた。然し、その代り、昨日は同行七人の筑波登山といふ遠征的大壯圖を決行した。苟くもケーブルカア通を以て任ずる我輩としては、この壯圖は實に必然不可缺の行動であつた。

足下記するや否や、我輩は數年前、早く既に箱根强羅のケーブルに乘り、次いで一昨年のメーデーに、大阪から奈良に逐はれて、その途中、生駒山のケーブルに乘り、更に昨年春、足下を垂水に訪うての歸途、麻耶山のケーブルに乘り、更に又、今年の正月、足下と寒村とに從つて、新聞紙の謂ゆる『三巨頭會議』を寶塚歌劇場の三等席に開催しての歸途、又々能勢妙見のケーブルに乘つた程の者である。然るに其の我輩が、昨年秋から東京の近くに開通されてゐる筑波山のケーブルを、いつまで閑却して居らるべきや、是れ實に今回の擧ありし所以なり。只怨むらくば、關西に於ける今一つのケーブル――信貴山のそれ――に試乘するの機會を得ざる事を。

どうです足下。之を足下の如き、大正十四年（西暦一千九百廿五年）十二月に至つて、生れて初めてエレベーターに乘つたといふ者に比して、文化生活に於ける高低遲速の差異、それ果して如何ぢや。但し足下も、昨年秋、我輩の獨創的先縱を追うて、麻耶山へ模倣的登山を試みたと云ふのは、稍や孺子敎ふべしの感あり。今後數年の後、若し富士山に大ケーブルカーの開通される事があつたら、その時には我輩、斯道に於ける多年の經驗閱歷を以て先導となり、足下を率いて一遊を試みる事にしよう。先づそれまでは『眞つ裸でころげ落ちて見たい氣』でも續けておくのさ。（廿五日、堺）

（六）

追加、前便、諸山ケーブルカアの事を語つて比叡山のそれに及ばざりしは、大なる粗漏。昨日久しぶりで丹波の岩崎革也君と會し、談たま〳〵之に及び、遂に來月登山の約を結んだ。今

度は『二禿頭會議』として關西の新聞に報導されるか。」

小園雜事

毎年〳〵、
花のさかぬ、
水仙の芽の、
出るのがうれし。

(廿八日、とし彦)

(七)

小生の如きは、老人のあとからくつゝいて行きさへすれば萬事間違ひないものと心得へ、これを多年の信條にしてゐましたが、マヤ山のケーブルカーばかりはウツカリ老人に追隨してひどい目に遭ひました。(寒村、西君も恐らく同感と思ふ。)一度で懲りたと云ひたいが、實は動かぬさきに懲りた。

何が愚劣、俗惡、殺風景だといつて、ケーブルカーに至つては物質文明の愚劣、俗惡、殺風景そのもの、乃至は物質文明の愚劣、俗惡、殺風景を『エツセンスした』ものでしよう。貴族院あたりで物質文明非難の聲のあがるのは尤もで、斯ういふものがあるから共產主義や危險思想が出來る。小生なども今後三度もケーブルカーに乘せられたら、きつと次の世には『土に還れ』などゝそう〳〵しい聲を出して啼く蟬のような蟲に生まれ變るでしよう。(三月二十九日、山川)

(八)

孔子曰く『過つて改むるに憚ること勿れ。』レーニン曰く『賢者とは過ちを爲さざるの謂に非ず。そんな人間はない、又あり得ない。只だ些少の過ちをして、容易に且つ迅速にそれを改め得る者が賢者である。』

僕はこれら聖賢の教訓に從ひ、又『若い者』の云ふ事をきくのが老人の心得である事と思ひ、貴下のケーブルカー俗惡論に對し、無條件の降伏を爲し、この些少の過ちを、憚ることなく、容易に且つ迅速に改めることを、玆に宣明するの光榮を有する。

そして同時に、廣重の繪に依つて想像される昔しの東海道五十三次の光景を懷かしむの情に堪へず、汽車、鐵道などといふ、愚劣、俗惡、殺風景を『エツセンスした』樣な物質文明を極力呪咀する。

いつそお互に發心して、土に還り、カントに還り、建國の昔に還るか。(三十一日、堺)

(九)

そちらからの葉書が途切れたので少し案じてゐる。どんな樣子か。若しゴーダウンの連續どもではないか。

お玉夫人、寒村に面會して來た。英文『經濟思想史』『經濟學説史』を山川君から借りて差入れろとの事。心當りがあるか。(三十一日、堺)

(十)

めつきり暖くなつたので、近所の櫻の蕾(だか芽だか)急激にふくれて來ました。これから鎌倉は賑やかです。大佛様もなが〳〵の冬眠から目をさまし、半眼を開いて參詣人の頭數を勘定し、繪はがきの賣上高を胸算で算用し初めます。この好時節に(何とか……幾何ぞと云つたような理屈をつけ)老若男女を狩り集めて江の島へサゞエの壺燒でもたべに行つてはどうでしよう。

時に若い者近頃とかく腸の調子が悪るく、最近數日、絶對に何も出來ないで困つてゐます。(腸の調子が悪いと頭の調子が悪るく、頭の調子が悪るいと眼の調子が悪く、のみならずこの相互關係が全體的に發展するのだから溜らない。御本人は辨證法を知らないと云ふ宣告を下されましたが、腸だけは慥かに辨證法的に發展してゐるようです。)年を取ると氣ばかりせいて腸がこれに伴はぬといふことを聞きますが 小生のはまさにそれとと正反對で、腸ばかり先き〳〵へ進みたがり(墓の方へ)、精神は一向のん氣でそれに伴はぬので厄介です。(三十日、山川)

(十一)

寒村への書籍二冊、先刻留守宅の方へ郵送しておきました。先日の眼醫者(寒村推薦の)の件を忘れてゐました。あの後山崎伯爵に拜謁の節、あの眼醫者は山師だといふことを聞きました。眼醫者の必要は無論あるのです。しかし藪醫者ならば結構ですが山醫者では都合が悪るいので見合せたいと思ひます。寒村切角の心配を無にして濟みませんが。尤も寒村には内々ですが、平素から寒村には山醫者に趣味を持つ傾向のあることは爭はれぬ事實です。(四月一日、山川)

(十二)

今日は雨。春雨にしては少し寒い。然し海棠の赤い蕾に雨の滴のぶらさがつてゐる景色は仇めいて見える。

昨夜神樂坂に散歩に行つた。僕が初めて神樂坂に住んでゐた時から、モウ四十年になる。神樂坂は今でも僕に對して或る引力を持つてゐる。

鎌倉の『美男』には久しくお目にかゝらぬ。よろしく御傳言を願ふ。(四月三日、堺)

(十三ノ一)

老人の感慨一則

マルクスの死んだ翌日、エンゲルスが舊友ベツケルに次の如

く書を送つた。（僕はこのところ少し獨英和對照の飜事的興味を持つ。）

Wir zwei sind nun so ziemlich die Letzten der alter Garde von vor 1848. Nun gut, wir bleiben auf der Bresche. Die Kugeln pfeifen, die Freunde fallen, aber das sehen wir zwei nicht zum erstenmal. Und wenn einer von uns die Kugel trifft—'s ist auch gut so, wenn sie nur ordentlich sitzt, dass man nicht lange zappelt.

Dein alter kriegskamerad, Fr. E.

（十二ノ二、三）

Now we are almost the only ones left of the old 1848 guard. Well, then, we shall remain on the barricades. Let the bullets fly, friends fall, it will not surprise us. If a bullet will get one of us, let us hope that it will strike well, so one wouldn't have to linger long.

Your old fellow soldier, F. E.

モウ我々二人が一八四八年の舊衞兵の中の殆んど最後である。宜しい、我々は依然として城壁の前に立つ。彈丸をして飛ばしめよ、友をして仆れしめよ、我々二人は今さらそんな事に驚かない。若しその彈丸が我々の一人を打つたならば、願くは美事に當つて、永くピクピクさせないで呉れ。

君の舊友　F．E

× × × × ×

明日は又法廷で會はう。あの檢事は大變なペダンチストだといふ事だから、嘸かし博學振を發揮して我々をウンザリさせる事だらう。

今、僕の机の前の椽側には、サイネラリヤの鉢と、セツコクの鉢とが朝日に照らされてゐる。（八日、とし彦）

（十四）

すつかり御無沙汰をしてしまひました。せめて一日だけといふ積りで傍聽に出掛けましたが、とうとう三日間通ひました。それですつかり開きくたびれてゐるところへ、昨日まで毎日來訪者があつて、今度はしやべりくたびれました。そんなことで『老人の感慨』に對する感慨も、どこかへ飛んで往つてしまひました。

時に橋浦君から繪の展覽會をやるから書けと云つて、金線のへんてこな四角な紙を澤山送りつけられて當惑してゐます。人助けに一つ代作して貰へませんか。

それから二十八日には被告人は列席の必要があるのですか無いのですか。

トマト、胡瓜、玉ちしや、エンドウなど大分大きくなりました。來月末には試食會に招待します。(廿一日、山川)

(註。三日間の傍聽は勞働組合評議會大會の事。)

(十五)

橋浦君等の甘茶(amateur)展覽會は、さすが僕の處には出品を要求しない。貴兄はこの際宜しく、アマチヤ藥劑師、アマチヤ園藝師、アマチヤ寫眞師の外、アマチヤ畫家たるの特技を發揮すべきである。廿八日には、出席に及ばず。寒村はチツトも眠れないで困つてゐるよし。野菜料理の試食會に招待されるとすれば、是非ともそれまで入獄を延ばさねばなるまいと考へてゐる。銀座の或店でアメリカ産の猫を賣つてゐる。代價八十五圓!。(廿三日、堺)

(十六)

寒村からお玉夫人宛の第一信を見ると『今度は非常に成績が良く、飯はもうすつかり食へる』よし。そして僕がいつか『監獄に入るのは亭主には藥ですよ、妻君の有難味が判るから』とお玉夫人に話したのが『全くその通りだよ』とさ。それから『ふたたび自由の身となつた時に、銀座の松坂屋へ犬を見に行かうじやないか、あそこの小犬共に手をかませずに來たことが、今は何よりの心殘りで、こんな事なら、もう一日延すのだつたツケと思ふ位だ』と。そして最後に『それではこれで、惜しいが筆を措く』とさ。(廿一日朝、堺)

(十七)

豚の丸焼のうま味を知るためにも火事が必要なくらいだから、況んや女房のありがた味を知るためには色々手のかゝつた方法が必要と見えます。寒村もよいことを見つけました。

『甘茶』といふことがどうしても分らなかつたところ、おはがきによつて初めて判明。小生は五月にやるからおしやか様の甘茶かと思うてゐました。年が十ふえると人間もなか〳〵賢くなるとみえます。

二十八日には成るべく出頭するつもりです。そこから松坂屋の犬の仔を見に行つてはどうですか。(廿六日、山川)

(十八)

昨日の散歩は面白かつた。犬の殘物には寧ろ少し哀れを催したが、N家のライオン見物の約束には新たな希望が生じた。××の新設電話がオモチヤでなく、果して實用になるかどうか、今日にも一度實際にためした上、N夫人がライオンを洗濯して、嫁入仕度をととのへるだけの期間を置いて、確定の日を知

らせて貰ふ事にする。

スライチング・スケールは『經濟大辭書』に『滑尺率』『滑準法』『水準關稅率』などとある。大原のパンフレットには原語の儘で使つてある。僕は原語使用に賛成する。ゲシエーフト云々の方はまだ分らない。(廿九日、堺)

(十九)

昨日は大分疲れましたが、犬の仔は見るし、エレベーターにも二度乘つた上、陣幕などといふ生れて初めてのはつ物の御馳走になり、また〳〵多少の新知識を得ました。たゞ寒村のゐなかつたことは殘念です。今日あたりは隨分寒くて弱つてゐるでしよう。

いよ〳〵Nさんの犬を見にゆかなければならぬ立場になつてゐますが、見た以上、どうしても貰はなければならぬ形勢になつてゐるので(昨日御觀察の通り)この際よほど愼重な態度を取る必要があります。

今朝は大雨の中を、昨日買つて來た苗を植へ込みました。この道も謂ゆる『甘茶』のうちはいゝが、小生の如き域に達すると、これでなか〳〵らくではありますん。(廿九日、山川)

(二十)

陣幕！

これは又たしかに傑作の一つだ。昔し陣幕久五郎といふ力士があつたが、まさかそれを食つたわけではあるまいな。尤も、力士に『幕の內』といふ呼び方もあるのだから、萬さら緣のないわけでもないが。何しろ花見の『幕の內』といふ、やさしい聯想を排斥して、武張つた『陣幕』に持つて行つたところ、さすがに辨當を食ふ間も戰鬪の覺悟を忘れざる××の面目を發揮したものと敬服いたす。長谷の美男を新綠の間に想望しつつ。(五月一日、しづ六)

(廿一)

(山川菊榮樣)。先日御一緒に、Nさん夫婦の御馳走になつたアノ松坂屋の『幕の內』を、『陣幕』と武裝させたKin君の藝術的技倆に敬服しました。それにつきフト思ひだしてどうもハッキリしない歷史的事實をお尋ねします。これはKin君には內證です。

松前鐵之助に踏んづけられて、額を鐵扇で叩きわられた怪しい鼠の正體は、Kin君の說に依れば、誰だつたのですか。

モ一つ。石童丸の父親は、Kin君の說に依れば、小野九太夫でしたか、それとも工藤祐經でしたか。(一日、堺)

(廿二)

『最初のメーデー』として此あいだお話の、我々が大勢上野で

檢束された時の事、『前衛』を見ても分らない。或はそれの『號外』にあるかと思ふが、その『號外』が紛失してゐる。改めて大體、御知らせを願ふ。それにつき又一つ新らしい話を思ひだした。僕はスツカリ忘れてゐたのだが、服部濱次君が話してくれたので、思ひだした。

秋水の『基督抹殺論』の印税が百圓ばかり僕の手に殘つてゐた時、服部君からそれの使い道を提議して來た。それは信友會の水沼辰夫君等が、その前、總同盟の人達から御馳走になつてゐるので、その返禮をしたいと云ふのであつた。それはよかろうと云ふのでタシカ五十圓出した。すると、その金で招待會が催され、その席上はじめてメーデー擧行の相談が出來上つたといふ話。(メーデーの朝、堺)

(廿三)

例のメーデーのことは『前衛』の一七五頁にあるが、老兄の引用されてゐるものと同一の『文獻』なることが分りました。こんどの『無產者新聞』に引用してゐるのと同一のもので、老兄はその後半を引用されたのですが、四十一年のことは前半にちよつとある。『無產者新聞』にはこの部分が載つてゐる。

何でも相撲に關係した、幕の字のつくものと記憶してゐたので、陣幕だらうと速了した次第。何しろ二三度逢つた人の名でも忘れるのだから、初對面の御馳走の名を忘れるくらいは朝飯前である。(三日、山川)

(廿四)

貴兄の無罪いよ〳〵確定、賀すべし〳〵。僕は他の諸君と共に辯ゴ士上告になつてゐる。

××に電話をかけたら、不思議なもので、N君の聲が聞えた。イギリスでは總同盟罷工の大騷ぎをやつてるのに、こちらは悠々と犬見物の打合せだからエライものだ。但しN君の方はそれどころでないか、まだ何とも返事がない。

物忘れでは僕も大抵ヒケを取らぬ方で、此頃では毎日『×××××』を忘れてゐる。これは『夕飯前』とでもして置くか。(五日夜、とし彥)

(註・『國家と革命』を忘れるとは、レーニンの著書の反譯を忘る事。)

(廿五)

ゲシエフテマヘルツムの原文は斯うです。

"……die Korniloffs und Kerenskis, die Gotzs und Martoffs, diese Brüdershaft von Helden des bürgerlichen Geschäftemachertums oder bürgerlicher Skepsis……"

フランス譯はかうなつてゐます。

"……les Kornilow et les Kelenski, les Gotz et les Mar-

toy, toute cette clique des heros du brassage d'affaires bourgeous au du scepticisme bourgeous……トマスといふお弟子は復活したキリストに向ひ、磔の釘の穴のあとへ自分の指を突つこんで見なければ信じられぬと云ひました。實際受話機をこの耳にあてゝ見るまでは、××の電話は耳つばものです。（六日、山川）

（廿六）

本日不用の古本ビール函二個送りしました。兩三日中には着することゝ思ひます。數は大分ありますが反古同樣にしか賣れないものが大多數を占めてゐるので、幾らにも買ひますまい。よろしくお願ひします。なほその中に御返へしする本も入れておきました。また××へ寄附するのはいづれ向ふから取りに參りますからお預りおき願ひます。着の上はちよつと××へ電話をお掛け下さるなら（あの電話でかゝるなら）この上もありません。（六日、山川）

（廿七）

ゲシエーフテ・マハルツムは『才取業』でどうでせう。プルジヨアと取引してうまいモウケをする連中、即ち『プルジョアオ取業の諸勇士』といふ意味ぢやあるまいか。フランス譯のプラサージユが Seignorage と同意で、鑄貨料（國王の取る）といふ譯があるのを見ても、手數料取（即ち才取）の意味がある樣に思ふ。然しスケプシスの意味はどうも分らない。

『晝飯前』『耳つば』などには、いつもながら敬服。僕の小庭の、例の楓の鉢植が此ごろ若葉の美を發揮してゐる。君と二人、山王の林であの楓の芽生を拔いて來た時からモウ十年以上になる。（八日、堺）

（廿八）

英國をお手本にしたそこらあたりの組合主義者も、こんどは少々痛し痒ゆしでしよう。今后は定めし米國を手本にすることでしよう。それにしてもA・F・L・の徹底ぶりには感服の外ありません。この罷業は總退却から新陣形に移らうとする國際勞働軍の先頭が敵の主力と衝突したものと見做すべきです。吾々がこの罷業から色々のことを學んでゐるやうに、支配階級も重大なことを學びつゝあります。萬一この罷業が慘敗でもしたら大變なことになるでしよう。（八日、Kin）

（廿九）

彼等は、誤つてゐた理論を新らしい事實で訂正する事を知らないで、まだその理論に幾らか適合する殘存事實を尋ねて、それに取りすがらうとするだらう。

兎にかく『英國』が日本で不評判になるとすれば、實に

い現象だ。

罷業腰折の結果、首領連の地位がどうなるか。それでも兎にかく一片づきとして、安堵の息をつき流した連中が日本の諸方面に少なくないだらう。(十日、堺)

(三十)

ゲシエフテマヘルツムもその邊の意味でほぼ分るやうです。御手數多謝。

夙の鉢植に匹敵するものとして私のところには舞子の松の實生の鉢植があります。これは小生の唯一の盆栽で、移住の際わざ〱さげて來たのです。徑一尺足らずの鉢に八十本の小松が密生してゐます。いまにこれが老木となつたら枝の上を帆かけ船が走るやうになります。

トマト、サラダ、大分大きくなりました。草花もぼつ〱咲出しました。檢事上告の新聞記事を僅かに見たといふ怪しからぬ人があつたので調らべて貰ひましたところ、やはり間違の由。からなると何だか××××××してゐるかのやうな氣がするが。尤も眞つ直ぐに立つてゐるか、逆立してゐるかは別問題ながら。(十日、Kin)

(卅一)

(菊榮氏より。)先日はおはがきをありがたうございました。何か禪學の提案(?)のやうなむづかしいお便りで二人併せてよく拜見しましたが、一人足りないので文珠の智惠とまで參らず、そのうち總罷業といふ世界的大事件の突發のため、ツイ禪學問答をおるすにいたしまして申譯ありません。

そこで松前鐵之助と鼠の正體とかいふ第一の御課題ですが、何か前にそんな話があつたのか聞いてみましたが、どうも本人も心當りがないそうで、これは近頃流行の試驗問題の誤植又は試驗官の手落といふ種類のものではないかと思ひますが。試驗問題の再調査を願ひます。

第二の御課題の石童丸の父親は誰といつたか、これもそんな問題があるにはあつたやうですが、何しろ健忘症で、一體がどうしたのやら忘れてしまひました。が多分工藤スケツネだつたかと思ひます。が近頃智識の不足を大に痛感したと見えまして、いつぞや荒畑さんの置き忘れていらした講談雜誌を大切にとつておき、これ一冊みれば何でも分るだらうと喜んでゐましたから、いづれ松前鐵之助や石童丸の系圖が書いてあつたことと存じます。そのうち試驗をなさつて頂きます。(十一日、山川菊榮)

(卅二)

(菊榮氏へ。)御多忙中、二枚つゞきの御葉書恐縮しました。

當方試驗官も、葛飾顧問が不在では、『試補』の點がハッキリしません。

均君からの本箱二つ、昨日着。今日東條書店から人が來る筈です。××へも電話で通知しました。當方にある捕虜も近々送還します。『捕虜交換』は面白い言葉だし、好い習慣として流行させたいものです。（十五日、堺）

（註。捕虜交換とは、お互に借りてゐる本を返しあふ事。）

（其三）

驚く勿れ、古本代無慮六十三圓。その内配達賃一圓二十錢。差引六十一圓八十錢。郵便で送るか、どうするか。

寒村は眠れるようになつたよし。

昨今、嚴寒の候、如何御消光被成候哉、伺上候（十五日、堺）

（其四）

一、葉書を横にして書く方式を貴兄が採用されたのは大いに宜しい。教育の効果の現はれるのは嬉しいものだ。何しろ實物教育に限る。（×××××でもその通り。）

一、そこで此度は『左がき式』の實物教育を行ふ。これの第一の効能は、ペンを持つ右の手のひらの右下端が、インキでよごれる事の無くなる點にある。同時に、その手のひらの爲、紙面のよごれる事の無くなる點に在る。

一、今一つの効能は、文章を書きつゞける爲に、前の方を讀み返す時、右がきに比べてよほど便利である。

一、來年の年始狀には、これを印刷に應用して見たいと思つてゐる。

一、などと云ひながら、僕もこの左がき式を理論上だけに是認してゐて、實際にはトントやらない。今日は珍らしくやつて見たわけだ。（十五日、堺）（左がき式は、印刷上には實現不能）

（其五）

今一つの横がき式（歐文式）を試みる。新聞でチョイチョイ目なれるので、段々不自然な感じが無くなつて來た。今にこれが一般に行はれる事になるかも知れない。

×××の獨立を『かのような』などとはケシからん！殊に『逆立』などといふ諧謔を弄するに至つては、フラチ至極である！尤も、御先祖のマルクス、エンゲルスは、ヘーゲルのヂヤレクチークが逆立をしてゐるので、それを"umstülpen"したといふのだから、我々も一つ、×××逆立のヒツクリかへしでも試みるか。

この横がき式は横文字を挿入する場合に大へん便利だ。横文字を段々多く挿入する習慣になれば、この式にするより外はない事になるだらう。

Au revoir! チョイト横文字が書いて見たくなつた。(十五日・堺)

(卅六ノ一)

本が意外の高價に賣れました由、御手數を感謝します。六十餘圓の在外受取勘定の入報で急に强氣になり、この際紛失したフランスの辭書も買はう、多年の宿題たるセンチュリーも買はう、今度こそいよ〳〵活動寫眞を見物しよう(これはいづれ兩三年後のことでしよう)など、目下甚しく膽玉が大きくなつてゐます。これに味をしめ、今后は不用の本はどし〳〵賣るつもりです。いや必要の本も都合によつては賣り飛ばすつもりです。本も商品ですから貨幣に變形しようとしてもがきます。無理からぬことです。しかしこの節はマルクスの時代とちがひ、商品よりも人間の方が猛烈なフエチシズムに罹つてゐます。

横書きは外國字を挿入するには便利だが、日本の文字はどうしても上から下に書きおろすように出來てゐるらしく、横には大變書きにくいと思ひます。これに反して左から行を初めることは日本の文字の書き方から見ても好都合です。小生も老兄と同じ理由によつてちよい〳〵實行はしてゐますが、印刷やをまごつかせるのが氣の毒で原稿にはまだやりません。しかしこれは實行容易でしよう。(十六日、Kin)

(卅六ノ二)

おつと肝腎なこと——ではない、忘れることほどそれほど氣をおいてゐない、些々たるどうでもよい、かつて念頭においてゐない、どつちに間違つても決して痛痒を感じないこと——を忘れてゐました。古本の代金は御送金下さるには及びません。當方在外正貨として御保管を願ひます。(財政は鞏固なものです——いつでも月末までは)。

いづれ遠からず一度出京します。(奥山氏病氣のためしばらく出掛けないでゐます)。その節は幕の内でも横綱でもフンドシカツギでも御望み次第の御馳走をします。

(卅七)

序にもう一つ、これはどういふことでせうか。

Für sie sind die Hoffnungen, "ein Brotbaum im Resedentopf".

今日は西、上田、仲曾根の『婦人部』と『幼年部』が大學franc遊。私のところの『婦人部』『幼年部』と協同戰線にて江の島へ示威運動。

(五月十六日. Kin)

(卅八)

『捕虜交換』を『好い習慣』として、ことに『流行』させられた日には全くやり切れない。捕虜をとられてこそゐても、捕虜を取つてゐることは稀れである。捕虜交換を行ふから何月何

日。交換すべき捕虜をつれて出頭せよ、つれて來る捕虜がなければ賠償金を持参せよといふ通告が方々から來た日には實に厄介である。

　時にレーニン著作集の反譯はもちろん進行してゐるでしような。（十六日、Kin）

（卅九）

　在外正貨たしかにデポジットしておく。センチュリーの相場を聞いて見たが八十圓位との事。もすこし賣る事だ。

　仰せに從ひ、此次御上京の節、横綱とフンドシカツギと兩方おごつて貰いたい。フンドシカツギとは里芋を皮のまゝうでたのの事ぢやないか。

　貴兄の假名遣ひの中、先年『いる』であつたのが、此ころ『ゐる』になつてゐる。あれは昨今の天氣と同じく、面白くない逆轉だ。僕の方では、そろ〳〵『いる』に進轉しようかと考へている。

　Roseda の(小いさな)鉢に(大きな)Brotbaum を植えようと望むの實か、それとも Rosedentopf から Brotfrucht を得ようと望むの實か。どうもよくわからない。（十八日、とし彦）

（四十）

　在外正貨六十圓の處分については、毎日鳩首凝議を重ねてゐます。一應回收すべしといふ議論も出ましたが、この際通貨の膨張は消費を奨勵し、人心に好ましからざる影響を與へるであらうといふ見解有力にて否決。今日までに使途の確定した項目としては、松坂屋の五十圓のセッターなど〻いふ理想主義は弊履の如くに棄て、現實に立脚して近刊の犬の書物を購入し、挿繪で間に合せようといふことになりました。（二十日、山川）

（四十一）

　今日は某君來訪、とう〳〵江の島まで引張り出され、へと〳〵になつて歸りました。

『捕虜』の書籍五頭、今日着しました。

『いる』を『ゐる』にしたのは『逆轉』ではなく、『折衷主義』への進化です。

　近々、著作集についての相談會を召集する筈です。ついてはその節貴下の『ステート』が進行してゐなかつたら、うんとトッチメようといふ×××の陰謀がありますから、内密にお知らせしておきます。（二十日夜、Kin）

（四十二）

　在外正貨處分の問題について、昨夜徹宵（徹夜ではありません、宵の口だけです）協議をこらした結果、この際何とか不足額だけ財源を見附けてセンチュリーを買はうといふことに滿場一致可決確定いたしました。ついては東條書店の番地不明につ

き、御手數ながら同店へその山お傳へおきを願ひます。
犬の方は挿繪を見て我慢する位なら、一そのこと、そこらをうろついてゐる（品は下等ながら眞ものの）近所の犬を見て我慢しよう――それで足りなければ二本足の××犬も二三匹ゐますから――といふことになりました。
右よろしくお願ひします。（廿一日、Kin）

(四十三)

久しぶりの雨。しんみりと落ちついた氣持がする。何といふ鳥か知ぬらが、頻りに新綠の間に鳴いている。ロザが獄中で聞いたといふツイツイペー、ツイツイペー、ツイツイペーによく似てる
共產黨の陰謀はコワイ。治安維持法か何かで今の中に鎭壓する方法はないものかと熟考中。（廿三日、とし彦）

(四十四)

今日、上田君來訪。上田君と西君との密議の結果として、來月五日の三周忌に入獄する三角同盟を作らうといふ提議をして來たが、僕はまだ大いに自重して去就を決しない。
昨日、大杉マコと、そのオバさんのアヤメさんとに會うた。大杉の兄弟の中で、僕は一ばんこのアヤメさんが好きだつた。マコはウドンコちやん（近藤の逆讀らしい）と面白さうに遊んでいた。（廿四日夜、しぶ六）

(四十五)

折角のトマトと玉ちしやを御馳走してから往つて頂きたいのですが、トマトは本人の方でも大分急いでいるようですから、とうてい間に合ひません。玉ちしやはまだ玉にはなつてゐないが、特製の肥しをうんと浴せかけたので、したゝるばかりの色になつてゐます。是非一度御來遊下さい。（廿五日、Kin）

(四十六)

いよ／＼犬の見合ひの日が近づきました由、樂みでもあるし、さりとて見たが最後、どうでもかうでも貰はさるを得ざる窮地に陷いる危險充分にて、まさに Drohenden Katastroph です。何とかいゝ智慧はないものでしようか。 Wie soll man sie bekäpmfen? タクチツクを授けて下さい。（廿六日、Kin）

(四十七)

濱松の爭議、敵の挑戰的態度が、いよ／＼積極的の暴壓になつたらしいな。
信州では又しても國粹會と水平社との對抗。
新潟では『耕作權確立途上の一紀念標』として『無產階級小學校建設の計畫。』
僕等の如き、何もせずにゴロ／＼している者は、ほんとに恥かしい。（三十日、堺）

(四十八)

戰鬪のタクチックは犬を貰ふにある。カタストロフを恐れるは、避くべからざる必然の事態を强いて避けようとする事を意味する。昨今N夫人がさぞ念入に犬のセンタクをしている事だらう。嫁入前の娘を持つ親心で。

トマト、玉ぢしやの艶を雨中に想望す。(三十日、堺)

(四十九)

二日の白揚會には首をさしのべて出席する。執行猶豫などという事をしないで、一と思ひに打落してほしい。

その日の昼、拙宅に御立寄如何。さすれば清書の校正もして貰へる。それとも其の日、犬見物をやるか。

僕の入獄日はまだ極らない。外の諸君も兎かく延びがちの様子。橋浦君は先日はいつた。その途中、僕の宅で足助君とも着ちあつて暫く話した。ヤア今からカンゴクヅラをしてるぢやないかと、足助君は笑つた。橋浦君は手廻しよく、自分で五分刈になつていた。(三十日、堺)

(五十)

法は曲げられません。執行猶豫でしよう。うつかりすると、代りに反譯を引受けさせられる心配があるので、刑事政策の上からも酷刑に處することは考へものです。

二日には、多分早やめに出掛けてお待りします。(三十一日、Kin)

(五十一)

今日は山本懸藏、杉浦啓一の二君が入獄した。僕も散歩かた〲裁判所まで見送りに行つた。山ケン君、存外元氣に見えた。

夜は四谷大宗寺に篠田八十八君立候補演說會に行つた。篠田君の制服姿を演壇に見た時、思はずホロリとした。安部早大教授、三輪勞農書記長等が演說した。

丹野君の話に依れば、渡政君は巣鴨から中野に移されたよし。寒村は中野から巣鴨に移されたのに、どうした御都合やら。(六月一日、堺)

(五十二)

濱松もとう〲やつたようです。體裁も外聞も構はぬ、ずいぶん露骨なやり方です。日本ではどんな小さな爭議でも、純然たる資本家と勞働者との爭議は滅多にないようです。たま〲あれば必ず勞働者側が勝つのです。しかし今度のほど思ひ切つて露骨なのも少ないでしよう。デモクラチックな英國政府のやり口を見て膽玉が大きくなつたのでしよう。それにしても日本の勞働者は深刻なことを學ぶにちがいないと思ひます。(六月一日、Kin)

綠蔭の下にて口誦し居れば清涼の氣自ら生じて心神爽快を覺ゆ

日本現代代表自選短歌集

著者	書名	内容	價	送料
齋藤茂吉著	現代代表自選歌集 朝の螢	天才歌人茂吉の歌は全く子規・漱石と共に文壇の寶玉である。此歌集は現代歌壇の一大權威。	一・五〇	・一八
島木赤彥著	現代代表自選歌集 十年	赤彥が晩年に自らの作を發表した一粒選りの歌集。歌集にして全集を兼ねたるもの。故人唯一の紀念書	一・五〇	・一八
古泉千樫著	現代代表自選歌集 川のぽとり	未だ曾つて歌集を出さざりし氏の處女歌集にして併せて全集。左千夫を師として出藍の偉材。	一・八〇	・一八
中村憲吉著	現代代表自選歌集 松の芽	アララギ新進歌人の隨一、視野に一新境地を發見せり。茂吉、赤彥と併稱せられ潑剌新銳を以つて鳴る	一・八〇	・二〇
釋迢空著	現代代表自選歌集 海やまのあひだ	尤も幽寂な歌人。此人の歌を誦し居れば身はいつでも深山幽谷にあるの思ひがする。	一・八〇	・二二
木下利玄著	現代代表自選歌集 立春	白樺第一の歌人。信綱を師としその和歌は師の發見せざる一別境を行く此人の唯一の遺書歌集。	一・八〇	・二〇
與謝野晶子著	現代代表自選歌集 人間往來	北原氏と共に歌壇の雄にしてその功勞は枚擧に遑あらず。此人の自選歌集は歌壇の一重鎭だ。	一・八〇	・一八
前田夕暮著	現代代表自選歌集 原生林	歌集として見れば此人程以外に立派な歌が集まる人は又他に少ないと思はれる。總てこれ名玉。	一・八〇	・二〇
土岐哀果著	現代代表自選歌集 空を仰ぐ	啄木を知るものは哀果を擧げ、哀果を論ずるものは啄木を引合に出す、近時彼に一轉機あり。	一・八〇	・二〇
若山牧水著	現代代表自選歌集 野原の郭公	その恬淡の風格、その和歌共に脫俗して歌道以外の人々まで氏を仰ぎ見る氏が半生の各歌集。	一・八〇	・二〇
窪田空穗著	現代代表自選歌集 槻の木	この人の歌道に於ける境地は近時ますます展けて來た。此一書を讀みて近時に並べば一段の味あり。	一・八〇	・二〇

改造社發行

短歌は滅亡せざるか

氣運と多力者と

齋藤茂吉

一

短歌の將來はどうなるものであらうか。それは自分にも分からない。たゞ盛衰といふことがあるから、短歌もその運命から免れることが出來ないと先づ看做していゝ。

曾て、今から廿年も前のことであつただらうか。『短歌滅亡論』といふのが行はれたことがあつた。それは、短歌には形式上の拘束がある。目ざめた現代人はさういふ形式などに關らつてはゐられない。これが短歌の滅亡して行く一つの原因である。それから、短歌は口語では歌ひにくい。古語、つまり大和言葉で歌つてゐる。近代人はさういふことには關らつてはゐられない。これが短歌の滅亡してゆく二つの原因である。かう論じたのであつて、どうも卓見だと思つた者もゐたので、短歌の方では『破調』となり、俳句の方では、碧梧桐、井泉水等の作のやうなものになつて行つた。日本の自然主義の議論の盛であつた時分は、何でもつまらなさうな顔をすることが流行し、短歌の形式などもひどく輕蔑されて、さういふ論なども行はれたのであつた。

然るにあれから廿年も經つた今になつて見ると、短歌は滅びてゐない。滅びないばかりでなく、建國以來の盛大を示してゐる。さうして『けるかも』調の歌が、極めて普遍化されてしまつてゐる。それから、萬葉集のことを彼此いはなければ、短歌のことは談ずるに足りないといふ如き傾向を示してゐる。

外見では、さういふ萬葉集崇拜に對して、わざわざ新古今集

緑陰の下にて口誦し居れば淸凉の氣自ら生じて心神爽快を覺ゆ

日本現代表自選短歌集

著者	書名	紹介	價	送料
齋藤茂吉著	現代代表自選歌集 朝の螢	天才歌人茂吉の歌は全く子規・漱石と共に文壇の寳玉である。此歌集は現代歌壇の一大權威。	1.50	.18
島木赤彦著	現代代表自選歌集 十年	赤彦が晩年に自らの作を發表した一粒選りの歌集。歌集にして全集を兼ねたるもの。故人唯一の紀念書	1.50	.18
古泉千樫著	現代代表自選歌集 川のほとり	未だ曾つて歌集を出さざりし氏の處女歌集にして併せて全集。左千夫を師として出藍の偉材。	1.80	.18
中村憲吉著	現代代表自選歌集 松の芽	アララギ新進歌人の隨一、視野に一新境地を發見せり。茂吉、赤彦と併稱せられ潑溂新鋭を以つて鳴る	1.80	.20
釋迢空著	現代代表自選歌集 海やまのあひだ	尤も幽寂な歌人。此人の歌を誦し居れば身はいつでも深山幽谷にあるの思ひがする。	1.80	.22
木下利玄著	現代代表自選歌集 立春	白樺第一の歌人。信綱を師としその和歌は師の發見せざる一別境を行く此人の唯一の遺詠歌集。	1.80	.20
與謝野晶子著	現代代表自選歌集 人間往來	北原氏と共に歌壇の雄にしてその功勞は枚擧に遑あらず。此人の自選歌集は歌境の一高嶺だ。	1.80	.18
前田夕暮著	現代代表自選歌集 原生林	歌集として見れば此人程以外に立派な歌が集まる人は又他に少ないと思はれる。總てこれ名玉。	1.80	.20
土岐哀果著	現代代表自選歌集 空を仰ぐ	啄木を知るものは哀果を擧げ、哀果を論ずるものは啄木を引合に出す、近時彼に一轉機あり。	1.80	.20
若山牧水著	現代代表自選歌集 野原の郭公	その恬淡の風格、その和歌共に脫俗して歌道以外の人々まで氏を仰ぎ見る氏が半生の各歌集。	1.80	.20
窪田空穗著	現代代表自選歌集 槻の木	この人の藝道に於ける境地は近時ますます展けて來た。此一書を讀みて近時に追べば一段の味あり。	1.80	.20

改造社發行

短歌は滅亡せざるか

氣運と多力者と

齋藤茂吉

一

短歌の將來はどうなるものであらうか。それは自分にも分からない。たゞ盛衰といふことがあるから、短歌もその運命から免れることが出來ないと先づ看做していゝ。

嘗て、今から廿年も前のことであつただらうか。『短歌滅亡論』といふのが行はれたことがあつた。それは、短歌には形式上の拘束がある。目ざめた現代人はさういふ形式などに關らつてはゐられない。これが短歌の滅亡して行く一つの原因である。それから、短歌は口語では歌ひにくい。古語、つまり大和言葉で歌つてゐる。近代人はさういふことには關らつてはゐられない。これが短歌の滅亡してゆく二つの原因である。かう論じたのであつて、どうも卓見だと思つた者もゐたので、短歌の方では『破調』となり、俳句の方では、碧梧桐、井泉水等の作のやうなものになつて行つた。日本の自然主義の議論の盛であつた時分は、何でもつまらなさうな顔をすることが流行し、短歌の形式などもひどく輕蔑されて、さういふ論なども行はれたのであつた。

然るにあれから廿年も經つた今になつて見ると、短歌は滅びてゐない。滅びないばかりでなく、建國以來の盛大を示してゐる。さうして『けるかも』調の歌が、極めて普遍化されてしまつてゐる。それから、萬葉集のことを彼此いはなければ、短歌のことは談ずるに足りないといふ如き傾向を示してゐる。

外見では、さういふ萬葉集崇拜に對して、わざわざ新古今集

を持出すものもゐるけれども、いよいよ歌を作るとなると、やはり、『けるかも』で行つてゐる。良寛和尚の歌は旨いといふ者が出て、良寛和尚の歌が有名になり、模倣する者が輩出すると、それに對して、良寛は駄目だといふ者も出て來てゐる。併しいよいよ歌を作るとなると、やはり萬葉を模倣した良寛風の歌を作つてゐる。さういふのが現代歌壇の潮流である。

かかる現象は、當時の短歌滅亡論者から看れば一つの奇現象に相違ない。そしてかういふ奇現象に逢つて一つの解釋を試みようとした。それは『近代』に相對する『復古』の氣持である。それは文明開化の聲が餘りかまびすしいと今度は國學興隆を叫んだのと似てゐるといふのである。

けれども自分の說は幾らかちがふ。自分の說では、現代歌壇の源泉には、『醜力』があつた。それから『眞實』があつた。それが、たまたま萬葉びとの素朴渾厚の氣魄と相融合して、新派の歌の一つの體(たい)をなしたものである。これは『復古』などといふこと、それから、『自然に還れ』などといふ一つのモツトウそんな、安易なもののためではない。この『醜力』に向つて集つた精神のありさまは、恰も大陽光に向つて草木の延ぶるが如きものであつた。それであるから、如是『醜力』が歌人の心に充滿してゐる限りは、短歌は滅亡しない。のみならず、國の興る限り短歌も盛になるのである。その最も積極的な例は、『み民われいけるしるしあり天地(あめつち)の榮ゆる時に逢へらくおもへば』といふが如き、重厚雄大な歌調を殘した時代は、國家の興つた時である。それに相違は無い。

二

數學の方から勘定して、三十一文字の短歌にも限がある。そこで幾年かの後には、字句が皆重複してしまつて無くなつてしまふのであるが、これもそれには相違ない。俳句の方でも隨分似たやうな句があるし、今でも上(かみ)の句なり、下(しも)の句なりの全く同じなものが幾つもあるに相違ない。古歌にしても、試みに國歌大觀を引くならば、奈何に類似の句が多いかが分かるのである。

併し、このやうな事は學者の側の興味であつて、作者の側になつて見れば、さういふことを氣にしては歌は作れないのである。それからまたかういふことも考へられるのである。レンブラントの模倣者は、時にはレンブラントよりも註文者が多く、あのやうな晩年のレンブラントをして窮死せしめたとも考へられる。けれども今歐羅巴の美術館をまはつて歩いて見ると、奈何に本物(ほんもの)とまがひ物との差別があるかといふことが分かる。

實をいふと、一代に幾人かの歌人しか居ないのである。萬葉集にしても作者別にすればあれぐらゐに過ぎない。古今集にしろ、新古今集にしろ。やはりさうである。徳川以降の歌人でも、明治になつてからの歌人でもさうである。それゆゑ、短歌よりもつと短い形式の俳句で、月並俳人が幾萬人あつてもやはりかまはない如くに、短歌作者が幾ら殖えてもやはりかまはないのである。さういふ斷定のうへから推論して、作歌に手を付けない人がゐたら、それはあんまり氣の弱い人のやうに自分はおもふ。

さて、短歌が滅亡しないとしたら、將來はどうなるか。自分はただ想像することが出來る。人間には『飽く』といふ心理があり、日本人はそれに敏であるから、萬葉調を棄てて、何かほかの變つたものに就くであらう。自分は以前からそれを望んでゐる。なぜかといふに、歌壇の色合は餘りホモゲーンで面白くないからである。自分が口語歌に同情してゐるのはその點にもある。自分はいよいよとなれば自分の歩む道よりはほかに無い。けれども何もほかの人まで自分の後へを歩んで來ることを强ひようとは思はぬからである。嘗て石川啄木が出でて、幾らか新機軸を出した。その模倣をする者の一團があつたが、餘り隆盛にならない。あれなども惜しいことだが、かういつても啄木の道と自分の道とはちがふ。いつぞや評者が自分の歌をば啄木の模倣のやうに云つてゐたが、あれは自分の歌の發育史を知らぬものである。

そのやうに、歌壇はもつと色合は變るであらう。又さうある方がいい。但しそれにはやはり『多力者』の出現が要るのである。何かに飽和されたやうな氣運から多力者が出で、その多力者を中心として一つの新しい氣運が形成されるのであるから、短歌などといふ小さい形式の藝術でも、やはり容易に見くびらぬ方がいいとおもふ。

三

藝術本來の面目は、『多力者』の出現如何によつて極まるのであつて、これは動かすことは出來まい。併し、『藝術は孤獨ではない』といつたテエンヌの意味合から見れば、その『多力者』といふものも時代乃至國土の雰圍氣から取離すことが出來ない。

短歌は抒情の詩である。作歌の覺悟として『寫生』を强調するのは、背後に儼存してゐる個體主觀の『實相觀入』を說くのであつて、抒情詩としての短歌の典據はそこにあるのである。作歌の過程は、ひとつごころに對象に觀入して成るのであるか

を持出すものもゐるけれども、いよいよ歌を作るとなると、やはり、『けるかも』で行つてゐる。良寛和尚の歌は旨いといふ者が出て、良寛和尚の歌が有名になり、模倣する者が輩出すると、それに對して、良寛は駄目だといふ者も出て來てゐる。併しいよいよ歌を作るとなると、やはり萬葉を模倣した良寛風の歌を作つてゐる。さういふのが現代歌壇の潮流である。

かかる現象は、當時の短歌滅亡論者から看れば一つの奇現象に相違ない。そしてかういふ奇現象に逢つて一つの解釋を試みようとした。それは『近代』に相對する『復古』の氣持である。それは文明開化の聲が餘りかまびすしいと今度は國學興隆を叫んだのと似てゐるといふのである。

けれども自分の説は幾らかちがふ。自分の説では、現代歌壇の源泉には、『魄力』があつた。それから『眞實』があつた。それが、たまたま萬葉びとの素朴渾厚の氣魄と相融合して、新派の歌の一つの體をなしたものである。これは『復古』などといふこと、それから、『自然に還れ』などといふ一つのモツトウそんな、安易なもののためではない。この『魄力』に向つて集つた精神のありさまは、恰も大陽光に向つて草木の延ぶるが如きものであつた。それであるから、如是『魄力』が歌人の心に充滿してゐる限りは、短歌は滅亡しない。のみならず、國の興る限り短歌も盛になるのである。その最も積極的な例に、『み民われいけるしるしあり天地の榮ゆる時に逢へらく念へば』といふが如き、重厚雄大な歌調を殘した時代は、國家の興つた時である。それに相違は無い。

二

數學の方から勘定して、三十一文字の短歌にも限がある。そこで幾年かの後には、字句が皆重複してしまつて無くなつてしまふのであるが、これもそれには相違ない。俳句の方でも隨分似たやうな句があるし、今でも上の句なり、下の句なりの全く同じなものが幾つもあるに相違ない。古歌にしても、試みに國歌大觀を引くならば、奈何に類似の句が多いかが分かるのである。

併し、このやうな事は學者の側の興味であつて、作者の側になつて見れば、さういふことを氣にしては歌は作れないのである。それからまたかういふことも考へられるのである。レンブラントの模倣者は、時にはレンブラントよりも註文者が多く、あのやうな晩年のレンブラントをして窮死せしめたとも考へられる。けれども今歐羅巴の美術館をまはつて歩いて見ると、奈何に本物とまがひ物との差別があるかといふことが分かる。

賞をいふと、一代に幾人(いくたり)かの歌人しか居ないのである。萬葉集にしても作者別にすればあれぐらゐに過ぎない。古今集にしろ、新古今集にしろ。やはりさうである。徳川以降の歌人でも、明治になつてからの歌人でもさうである。それゆゑ、短歌よりももつと短い形式の俳句で、月並俳人が幾萬人あつてもやはりかまはない如くに、短歌作者が幾ら殖えてもやはりかまはないのである。さういふ斷定のうへから推論して、作歌に手を付けない人がゐたら、それはあんまり氣の弱い人のやうに自分はおもふ。

さて、短歌が滅亡しないとしたら、將來はどうなるか。自分はたゞ想像することが出來る。人間には『飽く』といふ心理があり、日本人はそれに敏であるから、萬葉調を棄てて、何かほかの變つたものに就くであらう。自分は以前からそれを望んでゐる。なぜかといふに、歌壇の色合は餘りホモゲーンで面白くないからである。自分が口語歌に同情してゐるのはその點にもある。自分はいよいよとなれば自分の歩む道よりはほかに無い。けれども何もほかの人まで自分の後へを歩んで來ることを強ひようとは思はぬからである。嘗て石川啄木が出でて、幾らか新機軸を出した。その模倣をする者の一團があつたが、餘り降盛にならない。あれなども惜しいことだが、かういつても啄木の道と自分の道とはちがふ。いつぞや評者が自分の歌をば啄木の模倣のやうに云つてゐたが、あれは自分の歌の發育史を知らぬものである。

そのやうに、歌壇はもつと色合は變るであらう。又さうある方がいゝ。但しそれにはやはり『多力者(たりきしや)』の出現が要るのである。何かに飽和されたやうな氣運から多力者が出で、その多力者を中心として一つの新しい氣運が形成されるのであるから、短歌などといふ小さい形式の藝術でも、やはり容易に見くびらぬ方がいゝとおもふ。

三

藝術本來の面目は、『多力者(たりきしや)』の出現奈何によつて極まるのであつて、これは動かすことは出來まい。併し、『藝術は孤獨ではない』といつたテエンヌの意味合から見れば、その『多力者』といふものも時代乃至國土の雰圍氣から取離すことが出來ない。

短歌は抒情の詩である。作歌の覺悟として『寫生』を強調するのは、背後に儼存してゐる個體主觀の『實相觀入』を說くのであつて、抒情詩としての短歌の奧儀はそこにあるのである。作歌の過程は、[illegible]に觀入して成るのであるか

ら、單純であり、直截であり、短い。

この特徴があるために、時代の相。階級。作者の思想。國土の風光、さういふものは、散文に於けるやうに鮮明にはあらはれない。或る意味から云へば、深遠な思想も短歌制作には役に立たぬとも云へる。或はバアブがその戯曲論で云つたやうに、『抒情詩は馬鹿でも出來る』ともなるのである。ここの道理を諦めないために、古の高僧などの短歌が駄目なのである。抒情詩本來の面目を知らずにたゞ智識を浮出させようとしたのであつたからである。そこに行くと良寛などは實に非凡であつた。良寛は『人物』『思想』などを浮出させなかつたところに、その非凡があるのであつた。

そんならば、短歌は時代、國土、乃至その他の藝術分野から全く孤立して存在し得るものか奈何といふ。いかにもその通りである。短歌はいよいよとなればその覺悟でなければならぬ。けれども、そこに芭蕉などの謂つた、不易と流行の言葉が浮んで來ねばならぬ。これは知らず識らずに、それから、意識してさうあらねばならぬのである。自分の短歌のことになると、テエンヌの結論も、それからヘルパッハあたりの環境心理學の結論も、その干渉をば最早要せないが、『多力者』出現の道程には、必ず時代、國土の要約が潜んでゐなければならぬとすると、凡夫の自分達の修業の方便としては、常に時代の相、國土の空氣を顧みなければならぬのではあるまいか。念々に意識して、他の藝術の分野にも心を向けねばならぬのであるまいか。イズムなどの問題が幾何輸來して來ても、歌の修行者はそれを呑吐してかまはない。

そんなら『歌つくり』はいつも受身かといふにさうばかりでもあるまい。短歌の上で悟入した驗證は、これを他の藝術分野に働掛けることが出來るであらう。長塚節の歌と小說とに於けるがごとき關係である。かう思ふと歌人は何も孤立的でなくともいゝ。

雋敏な芭蕉が『流行』といふことを云つたのはこゝである。

四

自分は、短歌の將來、短歌と爾餘の藝術との交渉を云ふに當つて、『氣運』といふことをいひ、『多力者』といふことを云つた。けれども所詮は作歌の源泉であるべき『人』に歸著するのである。寫生と謂ひ、實相觀入といふと雖、どどのつまりはその『人』があらはれるのである。

けれども、作歌道を論ずるに當つて、『歌人たらんよりは先づ人となれ』と云つたり、歌の技方を論ずるのに、武士道をい

ひ、摩訶不思議の法力、禪味なんぞを云々するのは、要するに道草くらひの說である。作歌を實行するものは、短歌道の修行をせねばならぬ。天爾遠波一つに沒頭せねばならぬ。一句の推敲に數ケ月を費さねばならぬ。この根本を土臺に据ゑて置いて、他の藝術に親しみ、旅をし、禪を組み、書物を讀むのはかまはない。その根本をおろそかにして、修身談の書を懷にし、旅籠に幾日の宿料を拂つても、つひに歌は成らないのである。芭蕉は山家集、杜甫を懷にし、旅から旅へ歩いた。けれどもそれは、俳諧の形式と俳諧の味ひとの根本に立つてゐての行動であつたのである。それであるから、芭蕉が、『しづかさや』といひ、『ありがたや』と云つても、その五文字をその儘、短歌のうちに据ゑられぬのである。自分も十數年前、このことで隨分苦しんだのであつたが、今ごろになつて、この迷から脱することの出來ぬ歌人などもゐるのである。俳諧と他の文藝との交涉、短歌と他文藝との關係に對する秘訣は這般に存するのである。露伴がいつぞや、『學者に苦あり』と云つて文を行つたことがある。歌人の『苦』は一つの天爾遠波の苦にある。これは決して末技ではない。

それが末技に墮してしまふのは、魄力によつて統御しない爲であつて、これは短歌の形式に限つたことではない。ほかの藝術の分野に於てもおなじ事である。その末技に墮してしまはない爲めに、他の藝術方面にも目を向ける必要はあるだらう。正岡子規が和歌革新の叫を擧げたとき、歌人ほど馬鹿者は無いといつたのは、歌人は和歌ほど好いものはなくて、ほかの文學の事、藝術のことは何も知らぬのを怒つたのであつた。自分は、歌人はやはり歌が一番好いものだといふ覺悟は大切だと思ふが、そればかりに凝り固まつて動きが取れなくなると、ただ末技に氣を向けるやうになつて來て、歌は沈滯するのである。この弊害は、短歌の技方を無視して、『人』の問題にばかり心を向ける弊害と等しい。

五

優秀な短歌は、他の分野に對つて指導藝術たり得る價打があるかといふに、それは無論さうだと自分は思ふ。たゞ短歌は形式が短かく、極めて單純化されてゐるものであるから、短歌を見拔く方の側で、あらかじめ準備が出來てゐなければならぬ。さもないと、『御食むかふ南淵山の巖には降れる斑雪か消えのこりたる』のやうな作に相對しても、素通りして行つてしまふのである。

それから、終に自分はいつも斯ういふことを思ふ。短歌、

極は一體どのへんまで行着けるものであらうか。和歌史のうへから看れば、時代の推移に應じていろいろの變化はあつた。けれども、いよいよとなると萬葉集の歌にはつひに及ばないのである。自分は出來るだけ大觀し、出來るだけ虚心になつてなほこの結論を明言していゝ。それは世間の批評眼は種々であるから、自分のやうな結論をしない人もゐる。また或る新派歌人は、萬葉集以上の歌を幾つも既に作つてゐると斷言したことさへある。たゞ自分は、自分等のものは到底萬葉集のものには及ばないと思ふし、萬葉集以外の集は萬葉に及ばないと思ふのである。

そんなら、『もののふの八十氏川のあじろ木にいさよふ波の行く方しらずも』といふ柿本人麿の作は短歌の極致かといふに、自分はこの歌は短歌の極致だとおもふ。嚴密な比較といふことは困難だが、審美的意識から看て、ほかの優秀な藝術の前に、毫も引を取らないものだとおもふ。おなじく言語を機縁とする藝術の、杜甫、李白、ホメロス、ゲーテの前に傲然として居られるものである。ミケランゼロ、デユーレル、レンブラントの前にも傲然として居られるものである。この自分の考は今後も恐らく變らないであらう。

かういふ歌は萬葉集には幾つかある。その中味も違ひ、調べも違つてゐるが、依然として歌の極致を示したものが幾つかある。

短歌も俳諧も單純で、飜譯される藝術ではないから、當分は西洋人には分からない。それだけ微妙で、深遠なのである。芭蕉あたりのものも飜譯してしまへばちつとも面白くなくなる。それは『深き』かためで、『小味』とか『意氣』とか『通』とかから來てゐるのではない。

短歌の體は小さいが、斯くの如きものである。短歌は滅びないものである。他の藝術分野に對立して引を取らぬものである。そんなら、自分のものはどうであらうか。けれどもこの問題に逢着する毎に、自分は黯然として眉間を蹙めざることを得ないのである。

自分は、短歌は滅亡しないものだといふ如くに幾らか豪語した。それならば、自分達の作に對して、何がそれを證據立てて呉れるかといふに、『時』が證據立てゝ呉れるだらう。併し劫運の流が或は自分達のものを皆洗ひ去つてしまふかも知れないが、それでもかまはない。多忙な自分はそれ程までには氣を病むことを欲しないのである。

三十一文字といふ形式の生命

佐藤春夫

1

もう十七八年も以前であると思ふ。我々がまだ少年のころである。尾上柴舟氏が短歌滅亡論――さう名づけるには少し斷片的なものであつたやうに思ふが、ともかくもさういふ題で、意見を當時の詩歌雜誌「新聲」に發表されたことがあつた。その時、我々の詩歌の師匠である與謝野寛大人は、次のやうな一首――覺えちがいがあるかも知れないが――を尾上氏に與へてゐた、

歌の友柴舟に告ぐ己がうたを歌の亡ぶる證とはすな

2

しかし、今日、僕はどちらかといふと寧ろ短歌滅亡論者に近い。

さうして僕も亦、「己が歌」をもて「歌の亡ぶる證」としてゐるらしい。

僕は十五歳の時から二十二三歳ごろまで、所謂歌なるものをつくらうと心掛けた事があつた。さうして、僕はつひにものにならずにしまつた。僕は今だに三十一文字のなかに自分の生命を盛る法を學び得ずにゐる。僕の無才に因ることは無論であるが、ともかくも僕の內部に於ては、三十一文字の形式は既に滅びてゐるやうに思へる。しかも僕が日本文學史上に於て最も愛好し尊重するところのものは、依然として萬葉集である。

即ち、僕一個に就て語ることを容されるならば、讀者として僕は歌を愛してゐる。作者として僕は歌を疎んじてゐる。

3

僕は平素から、萬葉集以後歌なしと思つてゐる。「萬葉人」(假りにかういふ言葉を使ふ)にとつては三十一文字が殆んど唯一の文學的形式であつた。この小さな匣のなかへ、彼等は彼等の

所持品をすつかり藏ひ込むことが出來た。彼等の精神的日用品は殘らずこの匣一つに納まつた。彼等の所有品が僅少だつたからである。尤も、その代りには、最も重要な財寶ばかりしか、萬葉人は所持してゐなかつた。

「萬葉人」のなかでも、傑出した人々は時に長歌をうたひ、また旋頭歌の試みがあり、また連作的制作があるのは注目すべき現象である。彼等は文學的富豪で、小さな匣一つでは收め切れない物を持つてゐたのではないか。

4

萬葉以後、强いて歌を求めれば、僅に古今集がある。しかし萬葉の歌と古今の歌とは同じく三十一文字であつて、しかもその精神は全く相似てゐない。

「萬葉人」にとつて三十一文字の小匣は、精神的日用品一切の倉庫であつたのに、「古今人」にとつて、三十一文字の匣は化粧品入れになつた。「古今人」は別に散文といふ日用品を納める倉庫を築き初めた。

同じ形の小匣ではあつたが、その收藏するところのものが異つた時、この小匣は既に同一のものではない。僕は三十一文字の形式は、「萬葉人」が發見すると同時に完成し――即ち、最も嚴密に言ふ時、この形式はただ萬葉集にだけ生きてゐる。とすれば萬葉集以後すでにもう疾つくに死んでゐる、滅びてゐると言ふことさへ出來ると思ふ。

5

「萬葉人」の童心（とだけでは言ひ足りないが）とも呼ぶべき古心が、ごく時たま我々の心を過ぎる時があるだらう。その古心を得た時には我々も自づと古語を發するであらう。しかし、我々現代人にとつてそれは極めて珍重を稀有な機會に於てである。

詩形とは結局、その生活の樣式に外ならない。「萬葉人」の生活を持ち得るもののみ「萬葉集」を後繼することが出來る。

我々現代人は澤山のガラクタ物を所藏してゐる。そのガラクタが、しかし撰り分けるとなかなかおいそれと捨ててしまへないものなのだから、だから「萬葉人」にたとひ我々は憧れることがあつても、すぐに「萬葉人」になり切ることは不可能である。

寧ろ、我々が現代人であるが故に「萬葉人」を慕ふのであるかもしれない。

6

だから人の問題だとも言へる。三十一文字の中に精神的全財寶を收藏しきれるやうな、さうしてその財寶は無類の、精神生活にも物的生活にも神仙的な人物が出現したならば、三十一文字の形式は生き得る。そこで、しかし、僕はさういふ人物は萬葉以後稀有或は絶無であらうといふのだ。或は三四の例外が今迄にもあつたらう。またこの後も一二の例外はあるかも知れない。例外は飽くまで例外であつて、それは到底、一つの時代にはなりはしないのだ。

それは決して我々の罪ではない。時は流れたのだ。川上は清冽な小な泉であつたが、中流下流はもつと別樣の水の姿を持つてゐる。時にはその川岸に源泉を思はせるやうな泉を別に持つこともあらう。がしかし、それはただそれだけの事だ。

7

抒情詩は文學のうちの一部門である。三十一文字はまた抒情詩のなかで、もう一つ區切られた一部分である。短歌なるものは、萬葉集の後には、全體の人間生活を寫す文學ではなく、文學の狹少な一部分となつてしまつた。しかも抒情詩に於てもさまざまな形式を我々は覺えてしまつた。短歌の領域は益々狹められるやうに僕には見える。

8

與謝野晶子女子は寫生的或は描寫的なものであつた短歌を、生きた圖案的なものに作りかへた。裝飾圖案家の眼で見た森羅萬象を三十一文字にした。この樣式とこの人間とはごく稀有な契合であつた。

齋藤茂吉君は抒情或は敍述式なものであつた短歌に、心理的な一面を與へた。ために、短歌はやや象徴的な詩形に近づいた。いや短歌としては最高の度合ひで、黄金律的にまで象徴風にした。この樣式とこの人間とも亦稀有な契合である。

この二人の現代歌人は、彼等は古來の形式を各別の方法で生かした。しかし、彼等とても、その生活の全面容を三十一文學の唯一の形式で表現し得るか。それともその心の一つに面にしかすぎないか。

齋藤氏はこのごろ散文を書くこともする。
晶子女史は時に論文を書く。

この二人の稀有なる天才にとつてさへ、短歌は或はその生活の一部分であるのかも知れない。我々のそれよりも甚だ廣大

あるがために、ともすると全部の生活のやうに見えはするが。

9

僕は「萬葉人」が歌のなかから沈思や瞑想や凝視を感ずるよりも、寧ろ率直な流露的感情乃至感想を見出す。さうして歌といふ形式がどちらかと言へば即興的な或は直情的なものに思へる。かういふ觀察を持つてゐる僕にとつて、今日の萬葉ぶりの多くの歌は、あまり窮屈に固くなりすぎてゐるやうに感ずる。流露的ではなくて凝結的でありすぎる。さうしてその眞實を認めることが出來ても天地に通ずるやうな潤然たる聲を聞き得ない。僕はこれが理由の一半を三十一文字の形式の現代人にとつての不便利に歸しようと思ふ。多く感じたものを少く言ふのは自然ではない。感じただけを過不足なく言ひ得てこそ、その形式が自由である。生れながらの歌人は、心臓に只三十一字だけに使用するタイプライタアを用意してゐるのであらう。

この意味に於て、吉井勇君の歌の或ものには極めて自由な過不足なき三十一字が時折あつた。その當時の彼にとつては彼の散文は不自然な畸形なものに見えたに反して、短歌には實に潤然たるものがあつた。さうして僕は彼の物語的で又人情的な歌の世界を必ずしも溺愛し得なかつたけれども、彼れを珍重すべき天成の歌人だと思つた。

現代人の使用文字はあまりに多すぎる。それを三十一文字に減するためには、我々は生活そのものがすべて三十一文字にまで改造されなければなるまい。その可否は別として、至難なことであるのは疑ひない。

10

前書きを要したり、或は連作を便利としたり、或は三行に書きわけてみたり、或は現代的口語で三十一文字を作らうとしたり、疑ふらくは、これ等の諸現象は、短歌なる形式の現代人にとつての不自由と不徹底とを意味してゐるのではないだらうか。

11

「かなし」といふ一語のなかに、時によつて幾十の意味を籠らせてそのなかから蛋白石（オパール）の光を發せしめることを忘れ、またその光輝を見出すことをも忘れたほど、我々と我々の祖先との語感は異なつてしまつてゐる。ここにも亦、考へてみるべき問題がある。

僕はさまざまな意味に於て三十一文字の歌は既に亡びつつあ

る形式だと信ずる。しかも古人或は今人の歌のなかには、永久に人間のある限り傳へられて滅しないものの存することをも疑はない。

短い詩形は甚だ屢々要求されるだらう――現代に於て、或は未來に於て。しかしこれは多分必ずしも三十一文字ではないだらう。

僕は明治大正が歌の最後の時期、夕榮の光ではないかと考へさへもする。

歌の圓寂する時

釋迢空

われさへや　竟に來さらむ　とし月の
　いやさかりゆく　おくつきどころ

ことしは、寂しい春であつた。日のせいか、櫻の花が殊に潤んで見えた。ひき續いては、出遲れた若葉が、長くかじけ色をしてゐた。畏友島木赤彦を、湖に臨む山墓に葬つたのは、さうした木々に掩はれた山際の空の、あかるく澄んだ日である。私は、それから下の諏訪へ下る途すがら、ふさぎの蟲のかゝつて來るのを、却けかねて居た。一段落だ。はなやかであつた萬葉復興の時勢が、こゝに來て向きを換へるのではなからうか。赤彦の死は、次の氣運の促しになるのではあるまいか。いや寧、其れの暗示の寂かな姿を示したものと見るべきなのだらう。

私は歩きながら、瞬間歌の行きついた涅槃那の姿を見た。永い未來を、遙かに豫ねて言はうは、知れきつた必滅を説くことである。唯近い將來に、歌がどうなつて行かうとして居るか。それを言うて見たい。

まづ歌壇の人達ちの中で、憚りなく言うてよいことは、歌はこの上伸びやうがないと言ふことである。更にも少し臆面ない私見を申し上げれば、歌はもう滅びかけて居ると言ふことである。

あるがために、ともすると全部の生活のやうに見えはするが。

9

僕は「萬葉人」が歌のなかから沈思や瞑想や凝視を感ずるよりも、寧ろ率直な流露的感情乃至感想を見出す。さうして歌といふ形式がどちらかと言へば即興的な或は直情的なものに思へる。かういふ觀察を持つてゐる僕にとつて、今日の萬葉ぶりの多くの歌は、あまり窮屈に固くなりすぎてゐるやうに感ずる。流露的ではなくて凝結的でありすぎる。さうしてその眞實を認めることが出來ても天地に通ずるやうな濶然たる聲を聞き得ない。僕はこれが理由の一半を三十一文字の形式の現代人にとつての不便利に歸しようと思ふ。多く感じたものを少く言ふのは自然ではない。感じただけを過不足なく言ひ得てこそ、その形式が自由である。生れながらの歌人は、心臟に只三十一字だけに使用するタイプライタアを用意してゐるのであらう。

この意味に於て、吉井勇君の歌の或ものには極めて自由な過不足なき三十一字が時折あつた。その當時の彼にとつては彼の散文は不自然な畸形なものに見えたに反して、短歌には實に濶然たるものがあつた。さうして僕は彼の物語的で又人情的な歌の世界を必ずしも溺愛し得なかつたけれども、彼れを珍重すべき大成の歌人だと思つた。

現代人の使用文字はあまりに多すぎる。それを三十一文字に減ずるためには、我々は生活そのものがすべて三十一文字にまで改造されなければなるまい。その可否は別として、至難なことであるのは疑ひない。

10

前書きを要したり、或は連作を便利としたり、或は三行に書きわけてみたり、或は現代的口語で三十一文字を作らうとしたり、疑ふらくは、これ等の諸現象は、短歌なる形式の現代人にとつての不自由と不徹底とを意味してゐるのではないだらうか。

11

「かなし」といふ一語のなかに、時によつて幾十の意味を籠らせてそのなかから蛋白石(オパール)の光を發せしめることを忘れ、またその光輝を見出すことをも忘れたほど、我々と我々の祖先との語感は異なつてしまつてゐる。ここにも亦、考へてみるべき問題がある。

僕はさまざまな意味に於て三十一文字の歌は既に亡びつつあ

る形式だと信ずる。しかも古人或は今人の歌のなかには、永久に人間のある限り傳へられて滅しないものの存することをも疑はない。

短い詩形は甚だ屢々要求されるだらう――現代に於て、或は未來に於て。しかしそれは多分必ずしも三十一文字ではないだらう。

僕は明治大正が歌の最後の時期、夕榮の光ではないかと考へさへもする。

歌の圓寂する時

釋迢空

われさへや　竟に來ざらむ　とし月の
　いやさかりゆく　おくつきどころ

ことしは、寂しい春であつた。日のせいか、櫻の花が殊に潤んで見えた。ひき續いては、出遲れた若葉が、長くかじけ色をしてゐた。長友島木赤彥を、湖に臨む山墓に葬つたのは、さうした木々に傷はれた山際の空の、あかるく澄んだ日である。私は、それから下の諏訪へ下る途すがら、ふさぎの蟲のかへつて來るのを、却けかねて居た。一段落だ。はなやかであつた萬葉復興の時勢が、こゝに來て向きを換へるのではなからうか。赤彥の死は、次の氣運の促しになるのではあるまいか。いや寧、其れの暗示の寂かな姿を示したものと見るべきなのだらう。

私は步きながら、瞬間歌の行きついた涅槃那の姿を見た。永い未來を、遙かに豫ねて言はうは、知れきつた必滅を說くことである。唯近い將來に、歌がどうなつて行かうとして居るか。それを言うて見たい。

まづ歌壇の人達の中で、憚りなく言うてよいことは、歌はこの上伸びやうがないと言ふことである。更にも少し臆面ない私見を申し上げれば、歌はもう滅びかけて居ると言ふことである。

あるがために、ともすると全部の生活のやうに見えはするが。

9

僕は「萬葉人」が歌のなかから沈思や瞑想や凝視を感ずるよりも、寧ろ卒直な流露的感情乃至感想を見出す。さうして歌といふ形式がどちらかと言へば即興的な或は直情的なものに思へる。かういふ觀察を持つてゐる僕にとつて、今日の萬葉ぶりの多くの歌は、あまり窮屈に固くなりすぎてゐるやうに感ずる。流露的ではなくて凝結的でありすぎる。さうしてその眞實を認めることが出來ても天地に通ずるやうな濶然たる聲を聞き得ない。僕はこれが理由の一半を三十一文字の形式の現代人にとつての不便利に歸しようと思ふ。多く感じたものを少く言ふのは自然ではない。感じただけを過不足なく言ひ得てこそ、その形式が自由である。生れながらの歌人は、心臟に只三十一字だけに使用するタイプライタアを用意してゐるのであらう。

この意味に於て、吉井勇君の歌の或ものには極めて自由な過不足なき三十一字が時折あつた。その當時の彼にとつては彼の散文は不自然な畸形なものに見えたに反して、短歌には實に濶然たるものがあつた。さうして僕は彼の物語的で又人情的な歌の世界を必ずしも溺愛し得なかつたけれども、彼れを珍重すべき大成の歌人だと思つた。

現代人の使用文字はあまりに多すぎる。それを三十一文字に減ずるためには、我々は生活そのものがすべて三十一文字にまで改造されなければなるまい。その可否は別として、至難なことであるのは疑ひない。

10

前書きを要したり、或は連作を便利としたり、或は三行に書きわけてみたり、或は現代的口語で三十一文字を作らうとしたり、疑ふらくは、これ等の諸現象は、短歌なる形式の現代人にとつての不自由と不徹底とを意味してゐるのではないだらうか。

11

「かなし」といふ一語のなかに、時によつて幾十の意味を籠らせてそのなかから蛋白石（オパール）の光を發せしめることを忘れ、またその光輝を見出すことをも忘れたほど、我々と我々の祖先との語感は異なつてしまつてゐる。ここにも亦、考へてみるべき問題がある。

僕はさまざまな意味に於て三十一文字の歌は既に亡びつつあ

る形式だと信ずる。しかも古人或は今人の歌のなかには、永久に人間のある限り傳へられて滅しないものの存することをも疑はない。

短い詩形は甚だ屢々要求されるだらう――現代に於て、或は未來に於て。しかしそれは多分必ずしも三十一文字ではないだらう。

僕は明治大正が歌の最後の時期、夕榮の光ではないかと考へさへもする。

歌の圓寂する時

釋迢空

われさへや　竟に來ざらむ　とし月の
　いやさかりゆく　おくつきどころ

ことしは、寂しい春であつた。目のせいか、櫻の花が殊に潤んで見えた。ひき續いては、出遅れた若葉が、長くかじけ色をしてゐた。畏友島木赤彦を、湖に臨む山墓に葬つたのは、さうした木々に傚はれた山際の空の、あかるく澄んだ日である。私は、それから下の諏訪へ下る途すがら、ふさぎの蟲のかゝつて來るのを、却けかねて居た。一段落だ。はなやかであつた萬葉復興の時勢が、こゝに來て向きを換へるのではなからうか。赤彦の死は、次の氣運の促しになるのではあるまいか。いや寧、其れの暗示の寂かな姿を示したものと見るべきなのだらう。

私は歩きながら、瞬間歌の行きついた涅槃那の姿を見た。永い未來を、遙かに豫ねて言はうは、知れきつた必滅を說くことである。唯近い將來に、歌がどうなつて行かうとして居るか。それを言うて見たい。

まづ歌壇の人達の中で、憚りなく言うてよいことは、歌はこの上伸びやうがないと言ふことである。更にも少し臆面ない私見を申し上げれば、歌はもう滅びかけて居ると言ふことである。

あるがために、ともすると全部の生活のやうに見えはするが。

9

僕は「萬葉人」が歌のなかから沈思や瞑想や凝視を感ずるよりも、寧ろ率直な流露的感情乃至感想を見出す。さうして歌といふ形式がどちらかと言へば即興的な或は直情的なものに思へる。かういふ觀察を持つてゐる僕にとつて、今日の萬葉ぶりの多くの歌は、あまり窮屈に固くなりすぎてゐるやうに感ずる。流露的ではなくて凝結的でありすぎる。さうしてその眞實を認めることが出來ても天地に通ずるやうな潤然たる聲を聞き得ない。僕はこれが理由の一半を三十一文字の形式の現代人にとつての不便利に歸しようと思ふ。多く感じたものを少く言ふのは自然ではない。感じただけを過不足なく言ひ得てこそ、その形式が自由である。生れながらの歌人は、心臓に只三十一字だけに使用するタイプライタアを用意してゐるのであらう。

この意味に於て、吉井勇君の歌の或ものには極めて自由な過不足なき三十一字が時折あつた。その當時の彼にとつては彼の散文は不自然な畸形なものに見えたに反して、短歌には實に潤然たるものがあつた。さうして僕は彼の物語的で又人情的な歌の世界を必ずしも溺愛し得なかつたけれども、彼れを珍重すべき大成の歌人だと思つた。

現代人の使用文字はあまりに多すぎる。それを三十一文字に減ずるためには、我々は生活そのものがすべて三十一文字にまで改造されなければなるまい。その可否は別として、至難なことであるのは疑ひない。

10

前書きを要したり、或は連作を便利としたり、或は三行に書きわけてみたり、或は現代的口語で三十一文字を作らうとしたり、疑ふらくは、これ等の諸現象は、短歌なる形式の現代人にとつての不自由と不徹底とを意味してゐるのではないだらうか。

11

「かなし」といふ一語のなかに、時によつて幾十の意味を籠らせてそのなかから蛋白石（オパール）の光を發せしめることを忘れ、またその光輝を見出すことをも忘れたほど、我々と我々の祖先との語感は異なつてしまつてゐる。ここにも亦、考へてみるべき問題がある。

僕はさまざまな意味に於て三十一文字の歌は既に亡びつつあ

る形式だと信ずる。しかも古人或は今人の歌のなかには、永久に人間のある限り傳へられて滅しないものの存することをも疑はない。

短い詩形は甚だ屢々要求されるだらう——現代に於て、或は未來に於て。しかしそれは多分必ずしも三十一文字ではないだらう。

僕は明治大正が歌の最後の時期、夕榮の光ではないかと考へさへもする。

歌の圓寂する時

釋迢空

われさへや　覓に來ざらむ　とし月の
　いやさかりゆく　おくつきどころ

ことしは、寂しい春であつた。日のせいか、櫻の花が殊に潤んで見えた。ひき續いては、出遲れた若葉が、長くかじけ色をしてゐた。畏友島木赤彥を、湖に臨む山墓に葬つたのは、さうした木々に掩はれた山際の空の、あかるく澄んだ日である。私は、それから下の諏訪へ下る途すがら、ふさぎの蟲のかゝつて來るのを、却けかねて居た。一段落だ。はなやかであつた萬葉復興の時勢が、こゝに來て向きを換へるのではなからうか。赤彥の死は、次の氣運の促しになるのではあるまいか。いや寧、其れの暗示の寂かな姿を示したものと見るべきなのだらう。

私は歩きながら、瞬間歌の行きついた涅槃那の姿を見た。永い未來を、遙かに豫ねて言はうは、知れきつた必滅を說くことである。唯近い將來に、歌がどうなつて行かうとして居るか。それを言うて見たい。

まづ歌壇の人達の中で、憚りなく言うてよいことは、歌はこの上伸びやうがないと言ふことである。更にも少し臆面ない私見を申し上げれば、歌はもう滅びかけて居ると言ふことである。

あるがために、ともすると全部の生活のやうに見えはするが。

9

僕は「萬葉人」が歌のなかから沈思や瞑想や凝視を感ずるよりも、寧ろ率直な流露的感情乃至感想を見出す。さうして歌といふ形式がどちらかと言へば即興的な或は直情的なものに思へる。かういふ觀察を持つてゐる僕にとつて、今日の萬葉ぶりの多くの歌は、あまり窮屈に固くなりすぎてゐるやうに感ずる。流露的ではなくて凝結的でありすぎる。さうしてその眞實を認めることが出來ても天地に通ずるやうな瀏然たる聲を聞き得ない。僕はこれが理由の一半を三十一文字の形式の現代人にとつての不便利に歸しようと思ふ。多く感じたものを少く言ふのは自然ではない。感じただけを過不足なく言ひ得てこそ、その形式が自由である。生れながらの歌人は、心臓に只三十一字だけに使用するタイプライタアを用意してゐるのであらう。

この意味に於て、吉井勇君の歌の或ものには極めて自由な過不足なき三十一字が時折あつた。その當時の彼にとつては彼の散文は不自然な畸形なものに見えたに反して、短歌には實に瀏然たるものがあつた。さうして僕は彼の物語的で又人情的な歌の世界を必ずしも溺愛し得なかつたけれども、彼れを珍重すべき大成の歌人だと思つた。

現代人の使用文字はあまりに多すぎる。それを三十一文字にまで減ずるためには、我々は生活そのものがすべて三十一文字にまで改造されなければなるまい。その可否は別として、至難なことであるのは疑ひない。

10

前書きを要したり、或は連作を便利としたり、或は三行に書きわけてみたり、或は現代的口語で三十一文字を作らうとしたり、疑ふらくは、これ等の諸現象は、短歌なる形式の現代人にとつての不自由と不徹底とを意味してゐるのではないだらうか。

11

「かなし」といふ一語のなかに、時によつて幾十の意味を籠らせてそのなかから蛋白石（オパール）の光を發せしめることを忘れ、またその光輝を見出すことをも忘れたほど、我々と我々の祖先との語感は異なつてしまつてゐる。ここにも亦、考へてみるべき問題がある。

僕はさまざまな意味に於て三十一文字の歌は既に亡びつつあ

る形式だと信ずる。しかも古人或は今人の歌のなかには、永久に人間のある限り傳へられて滅しないものの存することをも疑はない。

短い詩形は甚だ屢々要求されるだらう——現代に於て、或は未來に於て。しかしこれは多分必ずしも三十一文字ではないだらう。

僕は明治大正が歌の最後の時期、夕榮の光ではないかと考へさへもする。

歌の圓寂する時

釋迢空

われさへや　竟に來ざらむ　としの川の
　いやさかりゆく　おくつきどころ

ことしは、寂しい春であつた。日のせいか、櫻の花が殊に潤んで見えた。ひき續いては、出遲れた若葉が、長くかじけ色をしてゐた。畏友島木赤彥を、湖に臨む山墓に葬つたのは、さうした木々に掩はれた山際の空の、あかるく澄んだ日である。私は、それから下の諏訪へ下る途すがら、ふさぎの蟲のかゝつて來るのを、却けかねて居た。一段落だ。はなやかであつた萬葉復興の時勢が、こゝに來て向きを換へるのではなからうか。赤彥の死は、次の氣運の促しになるのではあるまいか。いや寧、其れの暗示の寂かな姿を示したものと見るべきなのだらう。

私は步きながら、瞬間歌の行きついた涅槃那の姿を見た。永い未來を、遙かに豫ねて言はうは、知れきつた必滅を說くことである。唯近い將來に、歌がどうなつて行かうとして居るか。それを言うて見たい。

まづ歌壇の人達の中で、憚りなく言うてよいことは、歌はこの上伸びやうがないと言ふことである。更にも少し臆面ない私見を申し上げれば、歌はもう滅びかけて居ると言ふことである。

批評のない歌壇

歌を望みない方へ誘ふ力は、私だけの考へでも、尠くとも三つある。一つは、歌の享けた命數に限りがあること。二つには、歌よみ――私自身も恥しながら其一人であり、かうした考へを有力に導いた反省の對象でもある――が人間の出來て居な過ぎる點。三つには、眞の意味の批評が一向出て來ないことである。まづ三番目の理由から、話の小口をほぐしてゆく。

歌壇に唯今專ら行はれて居る、あの分解的な微に入り、細に入り、作者の動揺を洞察――時としては邪推さへ――してまで丁寧心切を極めて居る批評は、批評と認めないのかといきまく人があらう。私は誠意を持つて申しあげる『さうです。そんな批評はおよしなさい。宗匠の添刪の態度から幾らも進まないそんな處に低同して居て、寂しいではありませんか。勿論私も、さびしくて爲方がないのです。』居たけ高だと思はれゝば恥しいが、此だけは私に言ふ權利がある。

實はあゝした最初の流行の価を作つたのは、私自身であつたのである。と言ふ自覺が、どうしても、今一度正しい批評を發生させねば申し譯のたい氣にならせるのである。海上胤平翁のした論難の態度が、はじめて「あらゝぎ」に、私の書いた物を載せて貰ふ様にたつた時分の、いきんだ、思ひあがつた心持ちの上に、極めて適當に現れて來たことを、今明日から反省する。歌は感傷家程度で挫折したが、批評の方ではさすがと思はせた中山雅吉君が、當時唯一人私の態度の誤りを指摘してくれて居る。なんの、そんな事云ふのが、既に概念論だ。これほど實證的なやり口があるものか、と其頃もつとわからずやであつた私は、かまはず、さうした啓蒙批評をいゝ氣になつて續けて居た。今世間に行はれて居る批評の經路を考へて見ると、申し譯ないが、私のやつた行きなり次第の分解批評が、大分煩ひをして居るのに、思ひ臻つて、冷汗を覺える。此が歌壇の進歩の助勢になることだつたら、どんなに自慢の出來ることかと思ふと殘念だ。その私が言ふ事だから、尠くとも、此方面に關してだけは、間違ひは言はない筈である。

難後拾遺集・難千載集以後歌集の論評は、既に師範家意識が起つて居て、對蹠地に在る作者や團體に向けての抹殺運動だつたのである。私にも、さうした師範家に似た氣持ちが、全然なかつたとは言へないのが恥しい。その如何にも批評らしい批評がいけないとすれば、どんな態度を採るのが正しいのであらう。

批評の本義を述べ立てるのは、こと〳〵しい様で、氣おくれ

を感じるが、他の文學にさへさうした種類の「月毎評判記」めいたものが行はれて居るから、少しは申してもさしつかへのない氣がする。

批評は作物の從屬でないと言ふ事は、議論ではきまつて居る樣でゐて、實際はなか／＼、昔ながらである。作家が批評家を見くだし無視しようとする氣位は、まづありうちの正しくない態度であるが、前に言つた「月毎評判記」の類では、評家自身作物の一附屬としての批評を綴つてゐるに過ぎないことになる。

ほんとうの批評は、作物の中から、作家の個性をとほしてにじみ出した主題を見つける處にある。この主題も、近代劇によく扱はれてゐる――而も我が菊池寛氏が其を極めてむき出しな方法で示してゐる――樣なのを言ふとする人々に同じたくない。主題を意識の上の事とするから、さう言つた作物となつて現れもし、讀者たちに、極めて單純にして賢明なるに似た印象を與へるのである。けれども主題と言ふものは人生及び個々の生命の事に絡んで、主として作家の氣分にのしかゝつて來た問題―と見る事すら作家の意識にはない事が多い――なのである。其をとり出して具體化する事が、批評家のほんとうの爲事である。さすれば主題と言ふものは、作物の上にたなびいてゐて、讀者をしてむせつぱく、息苦しく、時としては知られぬ浮れ心をさへ誘ふ雲氣の樣なものに譬へる事も出來る。さうした搖曳に氣のつく事も、批評家でなくては出來ぬ事が多い。更にその雲氣が胸を壓へるのは、どう言ふ暗示を受けたからであるかを洞察する事になると、作家及び讀者の爲事でなく、さうした人々の出來る事なら、たか／＼近代劇の主題程度のものである。批評家は此の點で、やはり哲學者でなければならぬ。當來の人生に對する暗示や、生命に絡んだ兆しが、作家の氣分に融け込んで、出て來るものが主題である。其を又、意識の上の事に移し、其主題を解説して、人間及び世界の次の「動き」を促すのが、ほんとうの文藝批評である。

だから狹い意味では、その將來の方角を見出して、作家の個性を充して行ける樣に導いて行くのが、批評家の爲事であり、も少し廣くすると、人間生命の裏打ちになつてゐる性格の發生を、更に自由に、速やかならしめるものでなくてはならぬ。外的に言へば人間生活の上の事情を、違つた方角へ導いて、新しい世の中を現じようとする目的を持つたものであることである。

小説、戲曲の類が、人生の新主題を齎して來る樣な向きには、詩歌は本質の上から行けない樣である。だからどうして

批評のない歌壇

歌を望みない方へ誘ふ力は、私だけの考へでも、尠くとも三つある。一つは、歌の享けた命數に限りがあること。二つには、歌よみ――私自身も恥しながら其一人であり、かうした考へを有力に導いた反省の對象でもある――が人間の出來て居な過ぎる點。三つには、眞の意味の批評が一向出て來ないことである。まづ三番目の理由から、話の小口をほぐしてゆく。

歌壇に唯今專ら行はれて居る、あの分解的な微に入り、細に入り、作者の動揺を洞察――時としては邪推さへ――してまで丁寧心切を極めて居る批評は、批評と認めないのかといきまく人があらう。私は誠意を持つて申しあげる。『さうです。そんな批評はおよしなさい。宗匠の添刪の態度から幾らも進まないそんな處に低囘して居て、寂しいではありませんか。勿論私も、さびしくて爲方がないのです。』居たけ高だと思はれゝば恥しいが、此だけは私に言ふ權利がある。

實はあゝした最初の流行の價を作つたのは、私自身であつたのである。と言ふ自覺が、どうしても、今一度正しい批評を發生させねば申し譯のない氣にならせるのである。海上胤平翁のした論難の態度が、はじめて「あらゝぎ」に、私の書いた物を載せて貰ふ樣になつた時分の、いきんだ、思ひあがつた心[illegible]の上に、極めて適當に現れて來たことを、今明日から反省する。歌は感傷家程度で挫折したが、批評の方ではさすがと思はせた中山雅吉君が、當時唯一人私の態度の誤りを指摘してくれて居る。なんの、そんな事云ふのが、旣に概念論だ。これほど實證的なやり口があるものか、と其頃もつとわからずやであつた私は、かまはず、さうした啓蒙批評をいゝ氣になつて續けて居た。今世間に行はれて居る批評の經路を考へて見ると、申し譯ないが、私のやつた行きなり次第の分解批評が、大分煩ひをして居るのに、思ひ臻つて、冷汗を覺える。此が歌壇の進歩の助勢になることだつたら、どんなに自慢の出來ることかと思ふと殘念だ。その私が言ふ事だから、尠くとも、此方面に關してだけは、間違ひは言はない筈である。

難後拾遺集・難千載集以後歌集の論評は、旣に師範家意識が起つて居て、對蹠地に在る作者や團體に向けての抹殺運動だつたのである。私にも、さうした師範家に似た氣持ちが、全然なかつたとは言へないのが恥しい。その如何にも批評らしい批評がいけないとすれば、どんな態度を採るのが正しいのであらう。

批評の本義を述べ立てるのは、こと〳〵しい樣で、氣おくれ

を感じるが、他の文學にさへさうした柄類の「月毎評判記」めいたものが行はれて居るから、少しは申してもさしつかへのない氣がする。

批評は作物の從屬でないと言ふ事は、議論ではきまつて居る樣でゐて、實際はなか〳〵、昔ながらである。作家が批評家を見くだし無視しようとする氣位は、まづありうちの正しくない態度であるが、前に言つた「月毎評判記」の類では、評家自身作物の一附屬としての批評を綴つてゐるに過ぎないことになる。

ほんとうの批評は、作物の中から、作家の個性をとほしてにじみ出した主題を見つける處にある。この主題も、近代劇によく扱はれてゐる――而も我が菊池寛氏が其を極めてむき出しな方法で示してゐる――樣なのを言ふとする人々に同じたくない主題を意識の上の事とするから、さう言つた作物となつて現れもし、讀者たちに、極めて單純にして賢明なるに似た印象を與へるのである。けれども主題と言ふものは人生及び個々の生命の事に絡んで、主として作家の氣分にのしかゝつて來た問題―と見る事すら作家の意識にはない事が多い――なのである。其をとり出して具體化する事が、批評家のほんとうの爲事である。さすれば主題と言ふものは、作物の上にたなびいてゐて、讀者をしてむせつぽく、息苦しく、時としては知られぬ浮れ心をさへ誘ふ雲氣の樣なものに譬へる事も出來る。さうした搖曳に氣のつく事も、批評家でなくては出來ぬ事が多い。更にその雲氣が胸を壓へるのは、どう言ふ暗示を受けたからであるかを洞察する事になると、作家及び讀者の爲事でなく、さうした人々の出來る事なら、たか〳〵近代劇の主題程度のものである。批評家は此の點で、やはり哲學者でなければならぬ。當來の人生に對する暗示や、生命に絡んだ兆しが、作家の氣分に融け込んで、出て來るものが主題である。其を又、意識の上の事に移し、其主題を解説して、人間及び世界の次の「動き」を促すのが、ほんとうの文藝批評である。

だから狹い意味では、その將來の方角を見出して、作家の個性を充して行ける樣に導いて行くのが、批評家の爲事であり、も少し廣くすると、人間生命の裏打ちになつてゐる性格の發生を、更に自由に、速やかならしめるものでなくてはならぬ。外的に言へば人間生活の上の事情を、違つた方角へ導いて、新しい世の中を現じようとする目的を持つたものであることである。

小説、戲曲の類が、人生の新主題を齎して來る樣な向きには、詩歌は本質の上から行けない樣である。だからどうし

も、多くは個々の生命の問題に絡んだ暗示を示す方角へ行く様である。狹くして深い生命の新しい兆しは、鼓鋭いまなざしで、自分の生命を見つめてゐる詩人の感得を、述べてるところに寓つて來る。どの家の井でも深ければ深い程、龍宮の水を吊り上げる事の出來る樣なものである。この水こそは、普遍化の期待に湧きたぎつてゐる新しい人間の生命なのである。

叙事の匂ひのつき纏つた長詩形から見れば、短詩形の作物は、生命に迫る事には、更に一層の得手を持つてゐる譯である。

短詩形の持つ主題

俳句と短歌とで見ると、俳句は遠心的であり、表現は織叙式である。作家の態度としては叙事的であつて、其が讀者の氣分による調和を目的としてゐるのが、普通である。

短歌の方に、求心的であり、集注式の表現を採つて居る。だから作物に出て來る拍子は、しなやかでゐて彈力がある。讀者が、自分の氣持を自由に持ち出すとは、正しい鑑賞態度ではない。ところが芭蕉の句は、まだ樣式的には短歌から分離しきつて居ない。それは、きれ字の効果の、まだ後の俳句程に行つて居ない點からも觀察せられる。芭蕉の句に。しをりの多いのも此から出て居る。併しながら元々、不即不離を理想にした蕉俳出の俳句が、本質の上に求心的な動きを缺いて居ることは爭へである。この點に於て、短歌は俳句よりも一層生命に迫つて行く適應性を持つて居ることは訣るであろう。唯、明治大正の新短歌以前にはその發生の因緣からして、かけあひ・頓才問答・あげ足とり、感情誇張・劇的表出を採る癖が離れきらないで居た。其爲に、萬葉集以後は、平安末、鎌倉初期に二三人、玉葉・風雅に二三人、江戸に入つて亦四五人、此位の纔かな人數が求心努力を短歌の上に試みたきりである。だから此點から見れば、短歌の匂ひを襲いで、而も釋教歌から展開して來たさびを凡人生活の上に移して基調とした芭蕉の出た所以も納得がゆく。同時に長い年月を空費した短歌から見ると、江戸の俳句の行きあしは遙かに進んで居る。

而も俳句がさびを藝の醍醐味とし、人生に「ほつとした」一味を寂しく哄笑して居る外なかつた間に、短歌は自覺して來て、謂ちうの多い作物を多く出した。が、批評家は思ふたやうには現れなかつた。個性の內の拍子に乘つて顯れる生命も、此を見出してくれる人がない間は、一種の技工として、意識せられ、常人の雷同一手法に安住することは勿論、追隨者によつて模倣せられる事になるのである。島木赤彥が苦しんで引き出した內律、さうして更に其に伴はれて出た生命は、一片の技工に化して了

つた様な場合が多かつたことを思ふ。茂吉の見出した新生命は、その知識を愛する——と言ふより、知識化しようと冀ふ——性癖からして、「赤光」時代には概念となり、谷崎潤一郎の前型と現れた。

正岡子規に戻つて見る。この野心に充ちた氣分からは、意識的に動きさうに見えながら、態度はその反對に、極めて關心のないものであつた。その平明な日常語を標準とした表現と、內容として多少の「とぼけ」趣味が、彼の歌を新詩社一流のあつい息ざしを思はせるものとは懸け離れた淡い境地を拓かしめたのである。

芭蕉には「さび」の意識があり過ぎて、概念に過ぎないものや、自分の心に動いた暗示を具體化し損じて、とんでもない見當違ひの發想をしたものさへ多い。「くたぶれて、宿かる頃や藤の花」などの「しをり」は俳句にはじまつたのではなく、短歌の引き繼ぎに過ぎない。でも「さび」に囚はれないで、ある生命——實は既に拓かれた境地だが——を見ようとして居る。

「山路來て何やら、ゆかし。菫ぐさ」。これなどは確かに新しい開拓であつた。「何やら」と概念的に言ふ外は表し方の發見せられなかつた處に、仄かな生命に動きが見える。これも「しをり」の領分である。歌は早くから「しをり」には長けて居た。

「さび」は、芭蕉が完成者でもあり、批評家でもあつたのだ。

子規の歌の暗示

子規は月並風の掃除に努めて來た者はしからともすれば、脚をとる泥沼なるさびに囚はれまいと努め〳〵して、とゞのつまりは安らかな言語情調の上に、しをりを持ち來しさうになつて居た。而もあれほど、「口まめ」であつたに拘らず、其が「何やらゆかし」の程度に止つて、說明を遂げるまでに批評家職能を伸べないうちに亡くなつて行つた。

ていぶるの　高脚づくゑとりかくみ。
緣の陰に、茶を吸る夏

平明な表現や、とぼけた顏のうちに、何かを見つけようとしてゐる。空虛な笑ひをねらつたばかりと見ることは出來ない。が、尻きれとんぼうのしをりの缺けた姿が、久良岐らの「へなぶり」の出發點のあることをうなずかせる。

霜ふせぐ　菜畠の葉竹　早立てぬ
筑波嶺おろし雁(ガン)を吹くころ

しをりは若干あるが、俳句うつしの配合と季題趣味とがあり剩つて居る。殊に岡麓氏の傳へられた子規自負の「がん」と言ふ訓み方なども、平明主義と共に、俳句式の修辭である（又思

も、多くは個々の生命の問題に絡んだ暗示を示す方角へ行く樣である。狭くして深い生命の新しい兆しは、最鋭いまなさしで、自分の生命を見つめてゐる詩人の感得を、述べてるところに寓つて來る。どの家の井でも深ければ深い程、龍宮の水を吊り上げる事の出來る樣なものである。この水こそは、普遍化の期待に湧きたぎつてゐる新しい人間の生命なのである。

敍事の匂ひのつき纏つた長詩形から見れば、短詩形の作物は、生命に迫る事には、更に一層の得手を持つてゐる譯である。

短詩形の持つ主題

俳句と短歌とで見ると、俳句は遠心的であり、表現は纖敍式である。作家の態度としては敍事的であつて、其が讀者の氣分による調和を目的としてゐるのが、普通である。

短歌の方に、求心的であり、集注式の表現を採つて居る。だから作物に出て來る拍子は、しなやかでゐて彈力がある。讀者が、自分の氣持を自由に持ち出すとは、正しい鑑賞態度ではない。ところが芭蕉の句は、まだ樣式的には短歌から分離しきつて居ない。それは、きれ字の効果の、まだ後の俳句程に行つて居ない點からも觀察せられる。芭蕉の句に。しをりの多いのも此から出て居る。併しながら元々、不即不離を理想にした連俳出の俳句が、本質の上に求心的な動きを缺いて居ることは確である。この點に於て、短歌は俳句よりも一層生命に迫つて行く適應性を持つて居ることは訣るであらう。唯、明治大正の新短歌以前にはその發生の因縁からして、かけあひ・頓才問答・あげ足とり、感情誇張・劇的表出を採る癖が離れきらないで居た。其爲に、萬葉集以後は、平安末、鎌倉初期に二三人、玉葉・風雅に二三人、江戸に入つて亦四五人、此位の纔かな人數が求心努力を短歌の上に試みたきりである。だから此點から見れば、短歌の匂ひを襲いで、而も釋敎歌から展開して來たさびを凡人生活の上に移して基調とした芭蕉の出た所以も納得がゆく。同時に長い年月を空費した短歌から見ると、江戸の俳句の行きあしは遙かに進んで居る。

而も俳句がさびを藝の醍醐味とし、人生に「ほつとした」味を寂しく哄笑して居る外なかつた間に、短歌は自覺して來て、珈ちうの多い作物を多く出した。が、批評家は思ふたやうには現れなかつた。個性の内の拍子に乘つて顯れる生命も、此を見出してくれる人がない間は、一種の技工として、意識せられ、當人の屢同一手法に安住することは勿論、追隨者によつて模倣せられる事になるのである。島木赤彥が苦しんで引き出した内律、さうして更に其に伴はれて出た生命は、一片の技工に化して了

つた様た場合が多かつたことを思ふ。茂吉の見出した新生命は、その知識を愛する――と言ふより、知識化しようと冀ふ――性癖からして、「赤光」時代には概念となり、谷崎潤一郎の前型と現れた。

正岡子規に戻つて見る。この野心に充ちた氣分からは、意識的に動きさうに見えながら、態度はその反對に、極めて關心のないものであつた。その平明な日常語を標準とした表現と、内容として多少の「とぼけ」趣味が、彼の歌を新詩社一流のあつい息ざしを思はせるものとは懸け離れた淡い境地を拓かしめたのである。

芭蕉には「さび」の意識があり過ぎて、概念に過ぎないものや、自分の心に動いた暗示を具體化し損じて、とんでもない見當違ひの發想をしたものさへ多い。「くたぶれて、宿かる頃や藤の花」などの「しをり」は俳句にはじまつたのではなく、短歌の引き繼ぎに過ぎない。でも「さび」に囚はれないで、ある生命――實は既に拓かれた境地だが――を見ようとして居る。

「山路來て何やら、ゆかし。菫ぐさ」。これなどは確かに新しい開拓であつた。「何やら」と概念的に言ふ外は表し方の發見せられなかつた處に、仄かな生命に動きが見える。これも「しをり」の領分である。歌は早くから「しをり」には長けて居た。「さび」は、芭蕉が完成者でもあり、批評家でもあつたのだ。

子規の歌の暗示

子規は月並風の掃除に努めて來た者はしからともすれば、脚をとる泥沼なるさびに囚はれまいと努め〱して、とどのつまりは安らかな言語情調の上に、しをりを持ち來しさうになつて居た。而もあれほど、「口まめ」であつたに拘らず、其が「何やらゆかし」の程度に止つて、説明を遂げるまでに批評家職能を伸べないうちに亡くなつて行つた。

ていぶるの　高脚づくゑとりかくみ。
緑の陰に、茶を啜る夏

平明な表現や、とぼけた顔のうちに、何かを見つけようとしてゐる。空虚な笑ひをねらつたばかりと見ることは出來ない。が、尻きれとんぼうのしをりの缺けた姿が、久良岐らの「へなぶり」の出發點のあることをうなずかせる。

霜ふせぐ　菜畠の葉竹　早立てぬ
筑波嶺おろし雁(ガン)を吹くころ

しをりは若干あるが、俳句うつしの配合と季題趣味とがあり剰つて居る。殊に岡麓氏の傳へられた子規自負の「がん」と言ふ訓み方なども、平明主義と共に、俳句式の修辭である（又思

ふに、かりと訓むと、一味の哀愁が漂ふやうな處のあるのを、氣にしたのかも知れない。)何にしても、此歌は字義どほりの寫生の出發點を見せてゐるので、生命の暗示などは、問題にもなつて居ないのだ。

若松の芽だちの翠黄(みどり) ながき日を 夕かたまけて、熱いでにけり

本質的に見た短歌としては、ある點まで完成に近づいたものと言へよう。平明派であり、日常語感を重んじる作家としての子規である、古語の使用は、一種の變つた味ひの爲の加藥に過ぎなかつた。用語の上の享樂態度が、はつきり見えて居るのだ。弟子の左千夫の使うた古語ほども、內的には生きて居ない。人生の「むせつぽさ」を紛らす爲の「ぽつとした」趣味なのである。此歌の如きは、主客觀融合の境に入つて居ながら、序歌は調和以上に利いて居る。頓才さへ頭を出して居るではないか。「夕かたまけて……」も內律と調和せぬ朗らかさと張りとがある。沒理想から來た弊であらう。

瓶にさす藤の花ぶさ 短かければ 疊のうへに とゞかざりけり

この歌まで來ると、新生命の兆しは、完全に紙の上に移されて居る。根岸派では、子規はじめ門流一同進むべき方向を見つけた氣のしたこと、正風に於ける「古池や」と一つ事情のあるものである。が、さて其を具體化すること は出來ないで了つた。その引き續きとして、此歌は漠然たる鑽仰のめどに立つて居る。此歌とは比較にもならぬ、とぼけ歌や英雄主義―子規の外生活に著しく見えた―を俤にしたたかくゝりの歌などの「はてなの茶碗」式な信仰を繋いで居る類と、一つごとに讃へられて居る。私にもまだ、よくは此歌の含むきざしは說明出來さうもないが、一つ言うてみよう。疊と藤の花ぶさの距離に注意が集つて、そこに瞬間の驚異に似て、もつと安らかな氣分に誘ふ發見感があつたのである。これを淡い哀愁など言ふ語で表す事は出來ない。常臥(トコブ)しの身の、臥しながら見る幽かな境地である。主觀排除せられて、虛心坦懷の氣分にぽつかり浮き出た「非人情」なのではなからうか。漱石の非人情論は、主旨はよくて說明のあくどい爲に、論理がはぐれこんで了ふた様である。結局藤の歌は、かうした高士の幽情とは違つた凡人の感得出來る「かそけさ」の味ひを讀んだものなのであらう。

最近の茂吉の歌に、良寛でもないある一つの境地が顯れはじめたのは、これの具象せられて來たのではないかと、心愉しんで見て居る。茂吉は用語に於いて、子規よりは內律を重んじる先師左千夫の氣質を承いで、更に古語によらなければ表されない程

の氣魄をを持つて居る。

赤彦の創めた「切火」の歌風は、創作家の新感覺派に八九年先んじて出てゐた、おなじ手法で進まうとする技工本位の運動であつた。其が赤彦の嗜む古典のがつしり調子と行きあつて、方向を轉じて了うたが、「氷魚」の末から「太虚集」へ亙る歌ロちなのだ。そのかみ「切火評論」を書いた私などは、此方角を赤彦の爲に示すだけの力のない、微々たるあげ脚とりに過ぎなかつたことを思ふと、假りにも批評のない歌壇を慨嘆する樣な顏も出來るところではないのだつたが。

文藝の批評は、單に作家の爲に方角を示すのみならず、我々の生命に深さと新しさとを抽き出して來ねばならぬ。その上に、我々の生活の上に、進んだ型と、普通の樣式とを示さねば、意義がない。

私は短詩形が、人生に與ることの少いことは言うたが、社會的には、さう言うても確かな樣である。併しその影響が深く個性に沁み入つて、變つた內生活を拓くことはある。芭蕉の爲事の大きいのは、正風に觸れると觸れぬとの論なく、「ぼつ」とした笑ひと、人から離れて人を懷しむゆとりとを、凡人生活の上に寄與したことである。

私は、歌壇の批評が實はあまりに原始の狀態に止つて居るのを恥ちる。もつと人間としての博さと、祈りと、さうして美しい好しみがあつてよいと思ふのである。

歌人の生活態度から來る歌の塞り

短歌の前途を絕望と思はせる第二の理由は、歌人が人間として苦しみをして居な過ぎることである。謂はゞ懷子或は、上田秋成の用語例に從へば、「ふところおやぢ」である人さへ多すぎる爲である。もつと言ひ換へるのもよいかも知れぬ。產みの苦しみをわりあひに平氣で過してゐる人が多いと。尤、おべんちやらでなしに、私の友人たちは勿論、未知の若い人々の間にも、私の心配とうらはらな立派な生活の生き證據としての歌を發表する人も、隨分とある。併し概して、作物の短い形であると言ふ事は、安易な態度を誘ひ易いものと見えて、口から出任せや、小技工に住しながら、あつぱれ辛苦の悶りと言つた安覺を持つて居る人が多い。口から出任せも、吉井勇の樣なのは、まだ惡人―失禮だが、譬へが―成佛に徹する望みは十分にある。ふところ子、ふところ爺の生述懷に到つては、しろうと本位である短歌の昔からの風習が呪しくさへ思はれるのである。

短歌は、成立の最初から、即興詩であつた。其が今におき、多くの作家の心を、わるい意味に支配して居る。

つまりは認識の熟せない、反省のゆき屆かないものをはふり出すところに、作家の日常の安易な生活態度がのり出して來るのである。この表現に苦しむことが、亡き赤彥の所謂鍛煉道の本義である。さうしてこそ、人間價値も技工過程に於いて高められて來るのである。然しながらそこまでのこらへじやうのないのが、今の世の歌人たちの心いきである。それは、鼻唄もどきの歌ばかり作つて居た私自身の姿を解剖しても、わかることである。

この表現の苦惱を積むほかに、唯一つの違つた方法が、技工の障壁を突破することが出來るだけだ。古代人に著しく現れた情熱である。その激しい律動が、表現の段階を一擧に飛躍せしめたのである。ところで、澆季藝術の上に、情熱の古代的迸出を望むことは出來ない。我々の內生活を突嗟に整理統一して、單純化してくれる感激を待ち望むことが出來ないとすれば、もつと深い反省、靜かな觀照から、ひそかな內律をひき出す樣にすることが、更に歌をよくし、人間としての深みを加へることになる。

けれどもこゝに、一つ考へねばならないことは、我々の祖先の殘した多くの歌謠が、果して眞の抒情詩であらうかどうかと言ふことになると、恐らくは唯一人、私だけは二の足を踏まないでは居られない。古典としての匂ひが光被して、臉や、脂粉を變じて人に迫る力としてゐることも、否まれない。

巖門(イハト)破る手力もがも。手弱(タワヤ)き女(ヲミナ)にしあれば、すべの知らなく
(手持ノ女王)

これは挽歌として、死靈を和める爲の誇張した愛情である。

稻つけば、皹(カ)る我が手を 今宵もか 殿の若子(ワクゴ)がとりてなげかむ(東歌)

これが、婢奴(メヤツコ)の獨語とすれば、果して誰が聞き傳へたのであらう。これは必、劇的誇張を以て、共通のやるせなさを喚らうとする敍事詩脈の斷篇に違ひない。かうした古代の歌から、我々が正しく見ることの出來るものは 結局生活力の根强さだけと言ふことになる。

萬葉集による文藝復興

赤彥が教職を棄てゝ上京して以來の辛苦は、誠に「十年」である。而も其間に、强いられ過ぎるほどに、世間は反應した。却て、世間が文藝復興に似た氣運に向いてゐた處だから「あららぎ」の働きが、有力にとりこまれたものと見る方が正しいのかも知れぬ。

子規以來の努力は、萬葉びとの氣魄を、今の心に生かさうと

することにあつた。さうした「あらゝぎ」歌風が――新詩社盛時には、我ひと共に思ひもかけなかつた程に、――世間にとり容れられ、もてはやされた。時勢が古代人の純な生命をとりこまうとし、又多少、さうした生活様式に近づいて來てゐたから、とも言ふことが出來よう。而も此を直に分解して、個々の人の上にもおなじ事情を見ようとすると、案外な事だらけである。なる程世間は張つて居る。可なり太く強く動いて居る。併しその影響から、萬葉の氣魄や、律動を適當に感じ、受け入れることの出來る様になつたとしても、短歌の作者が、必しも皆強く生きて居るものとはきめられない。事實、流行化した文藝復興熱にひきずられた盲動に過ぎなかつたことは、悲観する外はない。だから、一兩年此方、段々ある落ちつき場處を求め獲た様子を見ると、萬葉の外殼を被つて叙景詩に行き止まつたものは、まだしも、多少の生きた氣魄を感じることは出來るが、外々の者は、皆一列になまぬるい拍子を喜ぶ様になつて、甚しいのは、前にも言つた新古今あたりに泥み寄らうとして居る。

而もあらゝぎ自身すら、漸く拍子を替へて來たのに心のつかない人はないだらうと思ふ。が、世間には存外、「十年」一冊の初めとしまいとに見える韻律の變化に氣づかない人もある様である。此變化は、主として茂吉が主動になつて居る様である。

その洋行前、從來なるべく避けた所謂「捨てや」なる助辭を、子規左千夫の歌に對する親しみから、極めてすなほにとりこんでゐた。あらゝぎ派ではすべての人が、新らしい發想法を見出して貰つた程の喜びで、なぞつて行つた。茂吉歸朝後、作る歌にも〳〵、すべての人が不滿の意を示した。が、私は茂吉自身の心にちらつく暗示を、具體化しようとしてあせつてゐるのだと思ひ、時としては其が大分明らかに姿を見せかけて來るのを喜び眺めた。これが的をはずれて、從來の持て味及び、子規流の「とぼけ」からする變態趣味の外皮を破つて「家をいでてわが來し時に、澁谷川(丫・)卵の殼が流れ居にけり」の代表する一類の歌となつて現れた。其後、茂吉は長い萬葉調の論を書いた。畢竟するに、その主張は、以前の、氣魄強さに力點を置いたのから轉化して來たことを明かしてゐる。恐らく内容の單純化から、更に進んで氣分の齊正といふ處まで出て來たものと言はれやう。良寛から「才」をとりのけた様なものを築き上る課程にあるらしい。此を以て茂吉は尚、萬葉調と稱して居るが、實は既に茂吉調であつて、萬葉の八・十、或は十七・十八・十九・二十などゝも違つたよい意味の後世風であることは、疑ふことの出來ぬ事實である。私は、世間の萬葉調なるものが、かうした新し調子に逆して、陣痛期を脱しやうとするのかと考へてゐる。

尚他の「あらゝぎ」の人々で見ると、文明のあの歌を鷗外で行つたやうな態度から、更に違つた方角に向はうとして居るのに注意したい。あらゝぎ同人中、最形の論理的に整うて居た文明の作物が、「ふゆくさ」以後、自ら語の正確さを疑ひ出したものか、此までどほり明確、端正を保つて居ながら、ある點に達すると手を拔くと言ふ樣な手法を發見した樣である。よい計劃だと思ふが、私の疑念を抱く所は、近頃はじめた初期新傾向の俳句の流行句法であつた「……しが」と言ふ表現法は、萬葉の「……しかば」を逆に行つた樣でもあり、又堅固な言語情調を喜び過ぎて居る樣にも感ぜられる。ともかくも、この手を拔く手法、から來る散文に近い印象を、或は一種の兆しと誤認して居るのではあるまいかと案じてゐる。茂吉風、文明風が、今後あらゝぎの上で著しい遊び目を見せて來るであらうと思ふ。かうして懷しい萬葉ぶりの歌風は過ぎ去つて、竟に收るべき處にをさまることになるのであらう。が、萬葉調に追隨して來た人々には、又更に新しい調子の尻を追はうとして居る。

この以外にも、「日光」その他について述べたいが、今は流行の歌風について論じるのであるから、まだその中心たる地位を保つて居る「あらゝぎ」ばかりを、めどに据ゑたのである。思へば世間はおほよそは、旗ふる人の手のさばきのまゝである。歌の上に於いて我々を喜ばした文藝復興は、これで姑らくは、中入りになるのであらう。

歌人の享樂式學問

この樣に考へて來ると、信頼出來る樣に見えた古人の氣魄再現の努力も、一般の歌人には、不易性を具へぬ流行として過ぎ去りさうである。年少不良の徒の歌に、私は屢々、飛びあがる樣に新しくて、強い氣息を聽いて、祕かに羨み喜んだ事も擧げよとなら若干の例を示すことが出來る。不良のともがらも、其生命を寓するに適した強い拍子に値うて胸を張つてゐたのだ。其程感に堪へた萬葉風の過ぎ去るのは、返す〲も惜しまれる。歌壇に遊ぶかうした年少不良や、享樂黨の人々は、萬葉ぶりに依つてこそ正しい表現法を見出すことが出來たのだ。其が今後、段々氣魄の薄い歌風が行はれようとする時勢に、どう言ふ歩みをとることであらう。

私の今一つ思案にあぐねて居るのは、歌人の間に於ける學問ばやりの傾向である。此は一見頗結構な事に似て、實は困つた話なのである。文學の絶えざる源泉は古典である。だからどんな方法でゞも、古典に近づく事は文學者としては、いけない態度ではない。けれども、其も、斷片知識の衒燿しや、隨筆的な

品位の高い發表ばかりが多いのでは困る。唯の閑人の爲事なら、どうでもよい。文學に携る人々がこれでは、其作物が固定する。自狀すれば、私なども潜越ながら其發頭人の一人である。作物の上に長く煩ひした文學の囚れから、やゝ逃げ道を見出したと思つて、私のほつと息つく時に、若い人々の此態度を見るのである。けれども此方面に於ける私の責任などは、極々輕微なものである。がらが大きいだけに影響も大きかつた茂吉の負膽すべきものは、實に重い。童馬漫語類の與へた影響は、よい樣で居て極めてわるいのである。でも其はなぞる者がわるいので、茂吉のせいでは、ほんとうの處はないのである。

私は氣鋭の若人どもの間に行き亙つて居る一種の固定した氣持ち、語を換えて言へば、宗匠風な態度にぞつとさせられる。かうした人々の試みる短歌の批評が、分解批評や、統一のない啓蒙知識の誇示以上に出ないのは尤である。私はそんな中から、可なりほんきな正しい態度の批評を、近頃聽くことが出來て、久しぶりの喜びを感じた位である。

學、素朴な意味の藝術批評でも試みればよい。其態度を認識不熟のまゝに分解した上に、學問の見てくれが伴ふからいけないのだ。私は、此等の人々に、ある期間先輩の作風をなぞつた後、早く個性の方角を發見して、若きが故の貴なる鮮やかな感覺を、自由に進らさうとなぜ努めないのかと言ひたい。併し、此は無理かも知れない。短歌の大詩は早、涅槃をそこに控へて居る。

私は又、此等の人々から、印象批評でもよい。どうぞ分解しないで、其まゝ聞かして貰ひたいと思ふ。

何にしても、あまりに享樂者が多い。短詩國の日本に特有の、かうした「讀者のない文學」と言つた、狀態から脱せない間は、稍く嚴かに澄みきつた人々の氣息までも、窮ぐさい息吹きに濁され勝ちなのである。

短歌の宿命

何物も、生れ落ちると同時に、「ことほぎ」を浴びると共に、「のろひ」を負つて來ないことはない。短歌はほゞ飛鳥朝の末に發生した。其が完成せられたのは、藤原の都の事と思はれる。

一體、日本の歌謠は、出發點は享樂者の手からではなかつた。咒言・片歌・叙事詩の三系統の神言が、專門家の口頭に傳承せられゐたのが、國家以前からの狀態である。それが、各壽詞(ヨゴト)・歌垣(ウタガキ)の唱和(カケアヒ)・新叙事詩などを分化した。かけあひ歌が、乞食者(ホカヒヒト)の新叙事詩の影響をとり入れて行く中に、しろうとの口にも類形式の發想がくり返されることになつた。さうして其が民謠を生み、抒情詩と醇化して行つた。而も日本の古代文章の

發想法は、眼目する物を羅列して詞をつけて行く中に、思想に中心が出來て來るといつた風のものであつた爲、外界の事象が內界とが常に交渉して居た。其結果として、序歌が出來、枕詞が出來た。交渉の緊密なものは、象徵的な修辭法になつた合場もある。一方外界託言が叙景詩を分化したのであるが、かうした關係から、短歌には叙景抒情の融合した姿が榮えた。萬葉集は固より、以後益隆んになつて、短歌に於ける理想的な形をさへ考へられる樣になつた。（日本に於ける叙景詩の發生は、雜誌太陽七月臨時增刊號を書いたから、こゝには輪廓だけに止める。）

ところが一方、古く片哥、旋頭歌を標準の形とした歌垣の唱和が、一變して短歌を尊ぶ樣になつて、こゝに短歌は樣式が定まつたのである。だから發生的に、性欲戀愛の氣分を離れることが出來ない。奈良朝になつても、さうした意味の贈答を主として居た爲、兄妹・姉妹・姑姪の相聞往來にも、戀愛氣分の豐かな發想を含めた短歌が用ゐられてゐる。其引き續きとして、平安朝の始めに、律文學の基本形式として用ゐられる樣になり、民謠から段々緣遠くなつて來ても　やはり戀愛氣分は持ち續けられた。さう言ふ長い歷史が、短歌を宿命的に抒情詩とした。だから、　情詩として作られたものでなくとも、抒情氣分を脫却することが出來ないのである。此例からも叙景抒情融合の姿の說明はつく、性慾を寫すと言ふ處まで進んだあらゝぎの寫生說も、此短歌の本質的な主觀纏綿の事情に基くところが多いのである。

短歌と近代詩と

短歌は、萬葉を見ても、奈良の盛期の大伴旅人・山上憶良あたりにも、旣に古典としての待遇を受けてゐる。旅人の子家持の作物になると、一層古典復活の趣きが著しく見える。其點からも、短歌に於ける抒情分子の存在が、必須條件となつて居た理由を考へることが出來る。古典としての短歌は戀愛氣分が約束として含まれてゐなければならなかつたのである。

かう言ふ本質を持つた短歌は、叙事詩としては極めて不都合な條件を具へて居る譯だ。抒情に歸せなければならない短歌を、叙事詩に展開させうと試みて、私は非常に醜い作物を作りくした。さうしてとゞのつまり、短歌の宿命に思ひ臻つた。私は自分のあきらめを以て、人にも强いるのではない。石川啄木の改革も叙事の側に進んだものは、悉く失敗してゐるのである。

唯啄木のとは、自然主義の唱へた「平凡」に注意を集めた點にある。彼は平凡として見逃され勝ちの心の微動を、捉へて、

抒情詩の上に一領域を拓いたのであつた。併し其も窮極境になれば、萬葉人にも平安歌人にも、既に一致するものがあつたのである。唯、新樣式の生活をとり入れたものに、稍新鮮味が見えるばかりだ。其して、全體としての氣分に統一が失はれてゐる。此才人も、短歌の本質を變へることは出來なかつたのである。

古典なるが故に、稍變造せねば、新時代の生活はとり容れ難く宿命的に纏綿してゐる抒情の匂ひの爲に、敍事詩となることが出來ない。これでは短歌の壽命も知れて居る。

戯曲への歩みよりが、恐らく近代の詩の本筋であらう。敍事詩は當來の詩の本流となるべきものである。此點に持つ短所の、長所として現はれてゐる短歌が、果して眞の意味の生命を持ちつゞけるであらうか。

抒情詩である短歌の今一つの缺陷は理論を含む事が出來ない。三井甲之は既に久しく之を試みて、いまだに此點では、爲出かさないで居る。詩歌として概念を嫌はないものはないが、短歌は、亦病的である。概念的敍述のみか、概念をとりこんでも、歌の微妙な脈絡は、こはれ勝ちなのである。

近代生活も、短歌としての匂ひに燻して後、はじめて完全にとりこまれ、理論の絶對に避けられねばならぬ詩形が、更に幾許の生命をつぐ事が出來よう。

口語歌と自由小曲

青山霞村・鳴瀨うらはる其他の歌人の長い努力を、私は決して同情と、感謝なくは眺めて居ない。併し其が唯の同時代人としての好しみからに過ぎない程、此側の人々の努力は、詩の神から酬いられてるに値して居ない樣である。

私のこれまでの評論を讀んで下さつた人々には、自ら口語歌の試みが、恐らく何時までも試み以上に一歩も進めまいと言ふ事に納得がいくことゝ思ふ。短歌の本質に逆行した、單に形式が５７５７７の三十一字詩形であると言ふことばかりの一致點を持つただけの口語歌が、これ程すき嫌ひの激しい詩形の中に割りこまうとしてゐるのは、をか目の私共にとつては、あまりに前の見え透いた寂しい努力だと思はれる。

短歌が古典であると言ふ點から出て來る、今一つの論理は、口語歌の存在を論理的基礎のないものにして了ふであらう。其は、口語の音脚竝びに其の統合律が、５７を基本とする短歌とは調和しなくなつてゐることだ。どゝいつの樣な民謠の形式が、何の爲に派生したのであらうか。文學上の形式として固定のまま守られて來た短歌も、若し民謠として眞に口語律の推移

に任せて置いたとしたら、同系統の單詩形なる琉歌同様の形になつてしまうて居たであらう。

友人伊波普猷氏は、「おもろ草紙」の中に、短歌様式から琉歌様式に展開した痕を示すもの丶見えることを教へてくれた。どどいつの古い形とも見るべき江戸初期のなげぶしや室町時代の閑吟集の小唄類を見ても、口語律の變化が謠の様式を推移させて行く模様が知れる。言語を基礎とする詩歌が、言語・文章根本的の制約なる韻律を無視してはならない。

口語歌は、一つの刺戟である。けれども永遠に一つの様式として、存在の價値を主張することは出來ない。

私は、口語歌の進むべき道は、もつと外に在ると思ふ。自由な音律に任せて、小曲の形を採るのがほんとうだと思ふ。而も短歌の形を基準として置いて、自由に流れる拍子を把握するのが、肝腎だと考へる。將來の小曲が、短歌を則るべきだと言ふのは、琉歌、なげぶし等の形から見ても見當がつく。日本の歌謠は、古代には、偶數句竝列であつたものが、飛鳥・藤原に於いて、奇數句の排列となり、其が又平安朝に入つて、段々偶數句竝列になつて、後世に及んだ。私は民謠として口誦せられた短歌形式は、終に二句竝列の四行詩になつたこと丶思ふ。

それで試みに、音數も短歌に近く、唯自由を旨とした四行數を作つて見た。さうしてそこに、短歌の行くべき道があるのを見出した様に考へてゐる。

石原純は、更に開放的に、一行の語數の極めて不同な句の、四句、五句、時としては六句に及ぶ詩に於いて、短歌の次の形を發生させようと試みて居る。私はその點に於いて、臆病でもあり、古典に準據もしてゐる。

さて、純ならびに私の作に就いて感じ得たことは、口語律が、眞の生きた命のま丶に用ゐられる喜びである。其から更に、近代生活をも、論理をも、叙事味の勝つた氣分に乘せて出すことが出來ることである。

三十一字形の短歌は、おほよそは圓寂の時に來たしてゐる。祖先以來の久しい伴奏者を失ふ前に、我々は出來るだけ、味ひ盡して置きたいと思ふ。

或は殘るかも知れないと思はれるのは、藝術的の生命を失うた、舊派の短歌であらう。私どもにとつては忌むべき寂しい議論であつたけれども何としよう。是非がない。

又一説？

芥川龍之介

改造社の古木鐵太郎君の言ふには「短歌は將來の文藝からとり殘されるかどうか?」に就き、僕にも何か言へとのことである。僕は作歌上の素人たる故、再三古木君に斷つたところ、素人なればこそ尋ねに來たと言ふ。即ちやむ得ずペンを執り、原稿用紙に向つて見るに、とり殘されさうな氣もして來れば、とり殘されぬらしい氣もして來る。

まづ明治大正の間のやうに偉い歌よみが澤山ゐれば、とり殘したくもとり殘されぬであらう。そこで將來も偉い詩人が生まれ、その詩人の感情を盛るのに短歌の形式を用ふとすれば、やはりとり殘されぬのに相違ない。するととり殘されるかとり殘されぬかを決するものは未だ生まれざる大詩人が短歌の形式を用ふかどうかである。

偉い詩人が生まれるかどうかは誰も判然とは保證出來ぬ。しかしその又偉い詩人が短歌の形式を用ふるかどうかは幾分か見當のつかぬこともない。尤も僕等が何かの拍子に四つ這ひになつて見たいやうに、未だ生まれざる大詩人も何かの拍子に短歌の形式を用ひる氣もちになるかも知れぬ。しかしそれは例外とし、まづ一般に短歌の形式が將來の詩人の感情を盛るに足るかどうかは考へられる筈である。

然るに元來短歌なるものは格別他の抒情詩と變りはない。變りのあるのは三十一文字に限られてゐる形式ばかりである。若し三十一文字と云ふ形式に限られてゐる爲に、その又形式に纏綿した或短歌的情調の爲に盛ることは出來ぬと云ふならば、それは明治大正の間の歌よみの仕事を無視したものであらう。たとへば齋藤氏や北原氏の歌は前人の少しも盛らなかつた感情を盛つてゐる筈である。しかし更に懷疑的になれば、明治大正の間の歌よみの短歌も或は猪口でシロツプを嘗めてゐるとも言はれるかも知れぬ。かう云ふ問題になつて來ると、素人の僕には見當がつかない。唯僕に言はせれば、たとへば齋藤氏や北原氏の短歌に或は猪口でシロツプを嘗めてゐるものがあるとしても、その又猪口の中のシロツプも愛するに足ると思ふだけである。

尤も物盛なれば必ず衰ふるは天命なれば、余り明治大正の間に偉い歌よみが出過ぎた爲にそれ等の人々の模倣したり死んでしまつたりした後の短歌は月並みになつてしまふかも知れぬ。それを將來の文藝からとり殘されると云ふ意味に解釋すれば、或はとり殘されることもあるであらう。これは前にも書いやうに作歌上の素人談義たるのみならず、古木君を前にして書いたもの故、讀者も余り當てにせずに一讀過されんことを希望してゐる。(十五・五・二十四・鵠沼にて)

歌に對する信念

古泉千樫

一（短歌は滅亡せざるか）一

「短歌は滅亡すべきか」といふことが問題になつたのである。

これは、短歌は五七五七七といふ三十一音律の形式に依る詩である。短歌に用ゐられて居る言葉は現代口語ではなくていはゆる古語が多い。要するに短歌は既に完成したる藝術である。かういふやうの短歌に、吾々の純眞な生命のリズムを現はし得るかどうかといふことになると思ふ。

かういふ問題は、新しい歌は現代語を以て自由な形式で表現をせねばならぬと主張する人々には當然のことであるが、深く短歌に愛着を持つて居る人たちにも折々起ることであらうと思ふ。そればかりでなく、現に眞劍に短歌を作つて居る人の心にも時々起ることがあるであらう。ゲーテは「吾が身を大いなりとさながら又小さしと感ずる」といつたさうであるか、自分の心力を傾けてやつて居ることに對してもさういふ感がすると思ふ。短歌なども自分等の時だけで、次の時代には滅びはしないかといふやうな寂寥の感を起すこともあらうと思ふのである。

自分は自分が今持つところの、短歌についての信條をごく簡單に述べようと思ふ。

短歌は五音七音を基調とした三十一音律である。（五音七音の單位は二音と三音とになるが今さういふことを詳しく云はない）これは日本語の性質上、節奏を形作る上に最も適した詩形である。短歌はこの定められた詩形の中に一首々々おのおの別な調べを持つて居る。調べといふのは、その人の生命のリズムである。感情の波の動き方進み方である。ゆゑに三十一音律の形式でありながら、無數の調べを含んでゐるのである。格に入つて格を出るといふ言葉がある。格の中に無限の變化と無礙の自由とがあるのである。

さういふやうに思ふのは、既に歌に囚はれて居るので、内在的感激と外在的形式とが、知らず識らずの間に妥協して居る事

に氣付かずに居るのではないか、といふものがあるかも知れない。自分もさうした疑問をみづから起したこともある。然し今はさうでない。

短歌も俳句も又自由詩も無かつたと假定して、さういふ時に自分が詩を作るとしたらどうであらうか。かういふことを考へて見るのも全く無駄なことではない。

自分はそれだけの感激と信念とを以て歌に對ひたいと思ふ。

それから、今の短歌にいはゆる古語が多いといふことである。これも一般の人が凡そに思つて居るほどに、古語と現代語とは相違してはゐないのである。文部省流のいはゆる「標準語」といふ貧弱なものが最も正しい現代語であると思ふのはわるい考へである。それは兎に角、歌に於て現代語といふのは、歌を作る時に於けるわが言葉といふことである。いはゆる古語も、口語も、外國語も、新造語もすべて現代語である。歌は短い詩形であるゆゑに最も言葉を大切にする。けれども、あの言葉は古語だ口語だといつて差別をすることはしない。如何なる言葉でも詩人が一たび撰んで用ゐた以上は、その言葉は詩人の内から生れた言葉となる。さうして獨得の品質と生活力とを持つてくるのである。内から生れた言葉に概念的な時代の差別取捨を加へるのは誤謬である。それは内容と形式、表現と言葉を二元的に考へるからである。

短歌は古典的藝術である。ゆゑに近代文明の産物である飛行機とか發動機とか工場とか又は社會問題等を歌ふに適しないといふやうなことをいふものもあらう。さういふことはない。さういふものによつて感激した吾々の生命を歌で表現し得られないといふことはないのである。たゞ歌は抒情詩である。さうして、最も素朴な詩形である。大地に深く根ざした吾々の生命を表現するに最もふさはしいものである。

短歌は萬葉時代に完成した。同時に今もなほ生々の生命を帶びてゐる詩形である。即ち短歌は因襲や形式でなく、生命あるよい傳統であつて、吾々の生命を表現するに最も適當した詩形である。形式のなかにごく自由な素朴な正確さを持つて居るのである。

いふまでもなく自分は短歌萬能を信ずるものではない。いはゆる口語歌は口語歌として生命を持つて盛になるのであらう。殊に自由詩はます〳〵現代人の心に共鳴してよい發達をするであらうと信じてゐる。

歌に對する信念

古泉千樫

「短歌は滅亡すべきか」といふことが問題になつたのである。これは、短歌は五七五七七といふ三十一音律の形式に依る詩である。短歌に用ゐられて居る言葉は現代口語ではなくていはゆる古語が多い。要するに短歌は既に完成したる藝術である。かういふやうの短歌に、吾々の純眞な生命のリズムを現はし得るかどうかといふことになると思ふ。

かういふ問題は、新しい歌は現代語を以て自由な形式で表現をせねばならぬと主張する人々には當然のことであるが、深く短歌に愛着を持つて居る人たちにも折々起ることであらうと思ふ。そればかりでなく、現に眞劍に短歌を作つて居る人の心にも時々起ることがあるであらう。ゲーテは「吾が身を大いなりとさながら又小さしと感ずる」といつたさうであるが、自分の心力を傾けてやつて居ることに對してもさういふ感がすると思ふ。短歌なども自分等の時代だけで、次の時代には滅びはしないかといふやうな寂寥の感を起すこともあらうと思ふのである。

自分は自分が今持つところの、短歌についての信條をごく簡單に述べようと思ふ。

短歌は五音七音を基調とした三十一音律である。（五音七音の單位は二音と三音とになるが今さういふことを詳しく云はない）これは日本語の性質上、節奏を形作る上に最も適した詩形である。短歌はこの定められた詩形の中に一首々々おのおの別な調べを持つて居る。調べといふのは、その人の生命のリズムである。感情の波の動き方進み方である。ゆゑに三十一音律の形式でありながら、無數の調べを含んでゐるのである。格に入つて格を出るといふ言葉がある。格の中に無限の變化と無礙の自由とがあるのである。

さういふやうに思ふのは、既に歌に囚はれて居るので、內在的感激と外在的形式とが、知らず識らずの間に妥協して居る事

に氣付かずに居るのではないか、といふものがあるかも知れない。自分もさうした疑問をみづから起したこともある。然し今はさうでない。

短歌も俳句も又自由詩も無かつたと假定して、さういふ時に自分が詩を作るとしたらどうであらうか。かういふことを考へて見るのも全く無駄なことではない。

自分はそれだけの感激と信念とを以て歌に對ひたいと思ふ。

それから、今の短歌にいはゆる古語が多いといふことである。これも一般の人が凡そに思つて居るほどに、古語と現代語とは相違してはゐないのである。文部省流のいはゆる「標準語」といふ貧弱なものが最も正しい現代語であると思ふのはわるい考へである。それは兎に角、歌に於て現代語といふのは、歌を作る時に於けるわが言葉といふことである。いはゆる古語も、口語も、外國語も、新造語もすべて現代語である。歌は短い詩形であるゆゑに最も言葉を大切にする。けれども、あの言葉は古語だ口語だといつて差別をすることはしない。如何なる言葉でも詩人が一たび撰んで用ゐた以上は、その言葉は詩人の内から生れた言葉となる。さうして獨得の品質と生活力とを持つてくるのである。内から生れた言葉に概念的な時代の差別取捨を加へるのは誤謬である。それは内容と形式、表現と言葉を二元的に考へるからである。

短歌は古典的藝術である。ゆゑに近代文明の産物である飛行機とか發動機とか工場とか又は社會問題等を歌ふに適しないといふやうなことをいふものもあらう。さういふことはない。さういふものによつて感激した吾々の生命を歌で表現し得られないといふことはないのである。たゞ歌は抒情詩である。さうして、最も素朴な詩形である。大地に深く根ざした吾々の生命を表現するに最もふさはしいものである。

短歌は萬葉時代に完成した。同時に今もなほ生々の生命を帶びてゐる詩形である。即ち短歌は因襲や形式でなく、生命あるよい傳統であつて、吾々の生命を表現するに最も適當した詩形である。形式のなかにごく自由な素朴な正確さを持つて居るのである。

いふまでもなく自分は短歌萬能を信ずるものではない。いはゆる口語歌は口語歌として生命を持つて盛になるのであらう。殊に自由詩はます〳〵現代人の心に共鳴してよい發達をするであらうと信じてゐる。

これからである

北原白秋

藝術の永遠性といふものも畢竟は人類が生きてゐる限りのことである。この絶對的見地から云へば、世に一として滅びないものはあるまい。

日本短歌の滅亡論が時として行はれるのは決してこの意味ではあるまい。

限定された三十一音の形式が數理的に既にその歌としての數をも限定されてあると云ふやうなことであらう。このコンビネエションの型には如何にも限りがある。俳句の如きはその半數にも滿たぬであらう。で、滅亡すると云へば何時かは滅亡する。然しこれは安心していゝ。その組み合せの變化の甚深微妙なことは、容易にその數の盡きる時とて有らうと思へぬからである。またその殆どは散逸するからである。殘るものもあれば知られずして了ふものもある。よしまた同一の名歌が違つた作者によつて同じく創作された場合があつたとしても、その境涯、または感興、體系(連作等の相互關係)の如何によつて、決して同一には感じさせぬ藝術の妙といふものがありさうに思へる。藝道本來の樂しみが眞實の自己の遊びとなる以上、作者としての樂しみは何らの他より觸されないと思へるからである。殘る殘らぬは問題でない。功利的のものでないからである。

何千年經つても盡きさうにもない短歌の數のことなぞを徒に苦に病むよりは、作者としては自己の創作の質、或はその量が如何に微少なものかを省みたがいゝのである。整齊された一つの表現の型の中に眞に遊び恍れる樂みはまた格別では無からうかと思ふ。

で、數理上の滅亡論などには耳を傾けなくてもいい。

とすると、他に因由するところは何にあるか。

恐らくは時代と詩形との相互關係に於いてであらう。即ち短

歌は古來の定型で詩あるが故に時代の推移と伴ひ得ぬ、早晩行き詰まるべきものだ、未來があるものとも思へぬと云ふにあることと察せられる。

さう云へばさうだとも云へよう。であるから、一方に新様の詩風も興隆した。從つてまた定型と自由律と、雅語脈と口語體と、その交錯するところが複雑に、その範圍がまたいよいよに擴張せられて來たのである。で謂ふところの新時代の短歌としての口語歌にも提唱の理由はあり、俳句の定格を破つた新傾向の短唱短詩の類にも亦相當の開展を認められていい價値はあらう。童謠童詩民謠等の藝術運動も決して單なる一時の流行として見るべきではない。

それかと云つて、萬葉人の生活感情を表現するに最も適切であり、必然的に整齊された三十一音の短歌の定型が今日に於ては既に舊體であり、將來に何らの光明も見得ないものかと云ふに、これも亦容易にさうだとは思へぬものがある。考へるとかうした二重の藝術生活にある私たちこそ、この矛盾の中に自由に寛濶に生きてゐられる現在の私たちこそは祝福されていいとも思へる。詩與は變通自在であるが本然である。藝道はまた定型の中にあつてこそ眞の鍛練を得られようかと思ふ。徹して初めて通するものらしいからである。全然新様の詩體で無くても現代人の生活感情を現すに適しないとする人々は、それでもいいのである。然しながら現代の日本人の生活そのものからして和洋混淆ではなからうか。笙も聽けばオーケストラーも聽き、茶室にも坐れば文化式住宅にもシャンデリヤを飾る。所謂現代語なるものにしてからが、頗ぶる怪しいものである。判然とした限界といつてないのである。これを鍛冶し統一するには當然に傳統としての國語に、言靈（ことだま）に、その據つて來つた原始日本の感覺乃至精神にこそ、一先づ溯るべきが正しい。さうして古今を貫く日本の言語表現といふものの本流をこそ見定むべきであらうと思ふ。萬葉以來の短歌道に私たちが深く執着するものこの理由にある。

殊にまた、古い詩形としての短歌が何が故に今日に到るまで滅びないか、この五六五七七の定型律が何が故に、抒情詩として他の片歌旋頭歌長歌催馬樂今様等の衰微を等しい衰微としなかつたか。私たち日本人は思を潜めて　この根本の光明に繫かなくてはならぬ。

短歌は滅びようとも思へない。日本民族が滅びない限りは。その時代によつての盛衰はあつた。物盛んなれば衰へる。然しながら短歌はその一時の頽勢から幾度か自らを盛り返した。これは何によるか。本質に日本人の生活感情に適合した、實に

秀れた表現形式に因るからではないか。

また考へるに、時代の推移は往々にしてこのすぐれた定律をさへ危くしよう。然し一二人の天才者の出現は千年二千年の生命を延長するにさほどに至難ではあるまい。この形式そのものこそ本格の形式だからである。

*

私は短歌のみが專門でない。甚だ氣が多くて恥かしい次第であるが兎に角詩歌の諸體には出入してゐる。無論新様の詩の自由さも知らないことはない。然しながら、何が故にこの古い形式の短歌により一層の苦難を離さないか。この事は私自身にも驚かれるのである。私は嘗に云つたやうに詩興は變通自在でいいと思つてゐる。表現は文語口語何れを取るも詩興次第でいいと思つてゐる。詩歌の世界は廣大であつて誰にまだ之を窮めたと云ふ人を知らぬ。前人未踏の地がどれだけあるものか、思ふと武者ぶるひが出て來る。

各種の形式も本づく所は詩の一脈である。だから、之等の流通或は融合といふ事が、一つの運動として起りつつある此頃の現象は當然に起るべきものであつたと思ふ。然しながらまだまだ詩歌俳壇、或は童謡民謡の諸家はあまりにその專門を專門と爲過ぎてはゐないか。一人で之等の諸形式を體して初めて大觀し、またそれぞれの專門の美徳が本質的に諒解されるのではないかとも思ふ。あまりに專門臭の深い所には普遍性が無い。極度に限定された趣味と巧智とが益々象牙の塔を孤壘にする。偏狹と頑固と停滯とが來る。たとへば短歌のみに就いて考へても、その滅亡論さへ專門外の人々から、惹き起されてしまふ。殊に此の十年來の萬葉偏重、寫生萬能、自然主義風の歌壇の傾向は少くとも藝苑或は智識階級者から、歌人自身を現代離れの爲た隠者若くは凝固した風狂の徒と見られて了ひさうである。行ふところ自由に、幻想に富み、殊に主觀の強烈な新風の詩人たちには、あまりに詩の無い一律の模寫と敍述と舊手法とに、どうかすると、今日の短歌を嫌厭する者が少くないことと思へる。（無論詩人たちも自然靜觀と表現の技巧、道としての修業には歌人たちに學ぶべき多くはあるのである。これは疑へない。）何れにしてもこの頃の一般歌壇のやうに新興の藝術に對する諒解が淺く、若うして虚した枯淡閑寂の士の多い現狀では、時代とともに進むべき短歌の革新とか藝術上の冒險とかは思ひもよらない事のやうにさへ感じられる。他流を忌避するところに流通は無い。唯我と獨尊とは決して己れを潤く豐かにするものでも無からうと思ふ。私は心から遊び恍れるところに眞實の藝苑はあるで無

からうかと思ふ。眞の樂園はまた眞の道場であり寂光土であるやうに思へる。換言すれば眞の心の道場は眞の樂園では無からうか。私はかうした道場に於て、如何にも眞實者らしく謙抑らしき歌人を見た。然しその實何といふ倨傲の士かと思ふことが幾度かあつた。さうして彼等は云つた。心なき人と遊ばず。而もさうした人ほど遊んではゐさうにも無かつた。

私たち「日光」の同人が常に念とするところはさうしたものである筈はない。

短歌はまた革新されるであらう。

思ふに、短歌の革新はその形式と手法とに馴れ過ぎた歌人臭のあまりに深い人たちには却つて爲されないで、寧ろ詩人としての氣質者によつて、外界の強烈な刺戟が及んで初めて燿かしい動亂を捲き起すのでないかと思へる。

＊

かうは云ふものの、歌壇には年功境涯手腕の點に於、私の尊敬する歌人たちの數が詩壇に比して或は多くはないかと思へる。さうした高處に居る幾人かの個性は一々に異つたその光輝に於て他と自らとを別つてゐる。一律に見えるのは一般歌壇のことであつて、それらの追隨者から成る集團色に外ならぬ。その色調が鈍金の銷消であり、含むところの薄い單たる灰色の灰色であるから、その禍が短歌そのものの將來さへも疑はしめるのであらうか。それらがまた現今の主流と見られてゐる趨勢にある。だから此の後の革新が念じられるのである。

然しながら何れの派にしても精進者の短歌は確かに光つてゐる。仔細に見ればこの萬葉以來の形式の短歌が如何にその内容に於て表現に於て細緻にまた淸新に進むべくして進んで來たかに驚かれるであらう。明治から大正に到つては猶更のことである。動いて來てゐる。實に動いて來てゐるのである。ただ外部から漫然と傍觀して、ただに古い形式の短歌である故概念的に古しとし因習くさしと見做すのは謬つて甚しいものと思はれる。私自身にしても自身の詩と短歌とに就いて今さら私の境涯が二あるものとは思つて居ない。流通するところは一より無いのである。ただ詩と比較して、歌作時には何となき拮屈を覺えることがある。詩ほどは寬濶に感じ無い場合もある。然しこの不自由に自由を味ひ、定型の中に遊び恍れる氣持はまた格別である。苦しみも深い代りに完成の快感もすばらしい。全く短歌の魅惑力といふものは不思議なものだと思へる。ただ時として、その古形式が鼻につくとは僞りなく私にはある。世間の歌を見る時殊にさう思ふ。然しさうした時には外の詩形へ移つて、強ひて

秀れた表現形式に因るからではないか。

　また考へるに、時代の推移は往々にしてこのすぐれた定律をさへ危くしよう。然し一二人の天才者の出現は千年二千年の生命を延長するにさほどに至難ではあるまい。この形式そのものこそ本格の形式だからである。

＊

　私は短歌のみが専門でない。甚だ氣が多くて恥かしい次第であるが兎に角詩歌の諸體には出入してゐる。無論新様の詩の自由さも知らないことはない。然しながら、何が故にこの古い形式の短歌により一層の苦難を辭さないか。この事は私自身にも驚かれるのである。私は嚮に云つたやうに詩興は變通自在でいいと思つてゐる。表現は文語口語何れを取るも詩興次第でいいと思つてゐる。詩歌の世界は廣大であつて畢にまだ之を窮めたと云ふ人を知らぬ。前人未踏の地がどれだけあるものか、思ふと武者ぶるひが出て來る。

　各種の形式も本づく所は詩の一脈である。だから、之等の流通或は融合といふとが、一つの運動として起りつつある此頃の現象は當然に起るべきものであつたと思ふ。然しながらまだまだ詩歌俳壇、或は童謠民謠の諸家はあまりにその專門を專門と爲過ぎてはゐないか。一人で之等の諸形式を體して初めて大し、またそれぞれの專門の美徳が本質的に諒解されるのではないかとも思ふ。あまりに專門臭の深い所には普遍性が無い。極度に限定された趣味と巧智とが益々象牙の塔を孤壘にする。偏狹と頑固と停滯とが來る。たとへば短歌のみに就いて考へても、その滅亡論さへ專門外の人々から、惹き起されてしまふ。殊に此の十年來の萬葉偏重、寫生萬能、自然主義風の歌壇の傾向は少くとも藝苑或は智識階級者から、歌人自身を現代離れの爲た隠者若くは凝固した風狂の徒と見られて了ひさうである。行ふところ自由に、幻想に富み、殊に主觀の强烈な新風の詩人たちには、あまりに詩の無い一律の模寫と敍述と舊手法とに、どうかすると、今日の短歌を嫌厭する者が少くないことと思へる。(無論詩人たちも自然靜觀と表現の技巧、道としての修業には歌人たちに學ぶべき多くはあるのである。これは疑へない。)何れにしてもこの頃の一般歌壇のやうに新興の藝術に對する諒解が淺く、若うして虚した枯淡閑寂の士の多い現狀では、時代とともに進むべき短歌の革新とか藝術上の冒險とかは思ひもよらない事のやうにさへ感じられる。他流を忌避するところに流通は無い。唯我と獨尊とは決して己れを潤く豐かにするものでも無からうと思ふ。私は心から遊び恍れるところに眞實の藝苑はあるで無

からうかと思ふ。眞の樂園はまた眞の道場であり寂光土であるやうに思へる。換言すれば眞の心の道場は眞の樂園では無からうか。私はかうした道場に於て、如何にも眞實者らしく謙抑らしき歌人を見た。然しその實何といふ倨傲の士かと思ふことが幾度かあつた。さうして彼等は云つた。心なき人と遊ばず。而もさうした人ほど遊んではゐさうにも無かつた。

私たち「日光」の同人が常に念とするところはさうしたものである筈はない。

短歌はまた革新されるであらう。

思ふに、短歌の革新はその形式と手法とに馴れ過ぎた歌人臭のあまりに深い人たちには却つて爲されないで、寧ろ詩人としての氣質者によつて、外界の強烈な刺戟が及んで初めて騒かしい動亂を捲き起すのでないかと思へる。

＊

かうは云ふものの、歌壇には年功境涯手腕の點に於、私の尊敬する歌人たちの數が詩壇に比して或は多くはないかと思へる。さうした高處に居る幾人かの個性は一々に異つたその光輝に於て他と自らとを別つてゐる。一律に見えるのは一般歌壇のことであつて、それらの追隨者から成る集團色に外ならぬ。その色調が鍍金の艶消であり、含むところの薄い單たる灰色の灰色であるから、その禍が短歌そのものの將來さへも疑はしめるのであらうか。それらがまた現今の主流と見られてゐる趨勢にある。だから此の後の革新が念じられるのである。

然しながら何れの派にしても精進者の短歌は確かに光つてゐる。仔細に見ればこの萬葉以來の形式の短歌が如何にその內容に於て表現に於て細緻にまた清新に進むべくして進んで來たかに驚かれるであらう。明治から大正に到つては猶更のことである。動いてゐるのである。實に動いて來てゐるのである。ただ外部から漫然と傍觀して、ただに古い形式の短歌である故概念的に古しとし因習くさしと見做すのは謬つて甚しいものと思はれる。私自身にしても自身の詩と短歌とに就いて今さら私の境涯が二あるものとは思つて居ない。流通するところは一より無いのである。ただ詩と比較して、歌作時には何となき拘屈を覺えることがある。詩ほどは寛濶に感じ無い場合もある。然しこの不自由に自由を味ひ、定型の中に遊び恍れる氣持はまた格別である。苦しみも深い代りに完成の快感もすばらしい。全く短歌の魅惑力といふものは不思議なものだと思へる。ただ時として、その古形式が鼻につくとは僞りなく私にはある。世間の歌を見る時殊にさう思ふ。然しさうした時には外の詩形へ移つて、強ひて

短歌の美德を消さうとは思はぬ。それでいいものでないかと思ふ。

さて、短歌のみに就いて云はう。短歌は詩の心を以てすれば革新さるべき可能と開拓すべき餘地は充分にあるものと、私は見てゐる。いや、それどころではない。私は十五六の年少時代より四十二の今日までに、可なりに刻苦して來たつもりではあるがまだどうにも自分としては三分の進出も怪しい。芭蕉が俳諧は三分世に出でたりと云つて七分の未來を望んだことが同じく短歌の上にも痛感されるのである。何といふこの道の遙かさであらう。私のごとき分際では、歌がわかつたなどとはまだ云へるものではない。此の道が行きつまるものとはまたどうして思へよう。私は己を知つてゐるつもりである。だから短歌滅亡などとは豫想だもしてゐない。私にはさうした餘裕は無い。目前の懸崖を飛び越えることすらやつとやつとである。それ故に勇氣も湧く。

これからである。これからである。

*

私は詩に於ては「水墨集」の詩風をまた更に離脱してかかつた。歌に於ては「雀の卵」を棄てその後の歌風をもまた破壞してかかつた。畢竟は幼童の砂山遊びのやうなものであらうが、築いては崩し、崩しては築くより外私の樂しみは無い。

私は今後まだ五十年生きてゐられたところで、ほんたうの自分の詩歌として私自身に矜るべきものを大成爲得るかどうかわからぬ。ただ志だけは大きく持したく思ふ。

さうしてつくづく長生がしたいと思ふばかりである。

追想す

兼常清佐

○

話は抑も昨年の春、上野の音樂學校がベートーヴェンの『第九シムフオニー』を演奏した時から始まる。私が過去の日本の音樂家の事蹟に就て深く感興をひく様になつたのは、全くその時からの事である。

私は獨逸から歸つてまだ間もない頃であつた。日本で始めてベートーヴェンのこの偉大なシムフオニーが演奏されるといふので、當時の樂界は異常に亢奮してゐた。たちまちのうちに切符は賣り切れた。仙台や九州などの遠い地方の人々も當日の出席を期してそれを買つた。多くの東京の新聞には度々ベートーヴェンの記事が載せられた。私の一友人はこの名曲に就て尨大な解説書を著した。その事は獨逸の樂界からも大に好感を以つて迎へられた。とにかく音樂を好む人々の心にはこの時は日本の社會に何となく一重大事件が起りつゝある様な物々しい、由々しい印象を與へた。この亢奮と緊張の裡に演奏の當日は來た。演樂堂は立錐の餘地なく人を以つて埋められた。

私にもこの演奏は多少の興味はあつた。それは歸朝以來始めて聞く管絃樂の演奏である。そして演奏者は實に國費を以つて作り上げた日本最良の管絃樂團である。私も勿論よろこんで聽衆の一人となつた。

私の期待は甚しく裏切られた。長い間、やるとかやらぬとか言つて、散々私共をぢらし、勿體ぶりに勿體ぶつた演奏は、要するにこんなものであつたかと思ふと、まづ情なくなつた。そして滿たされぬ心を抱いた私と、始めてこの曲を聞いて、歡喜に溢れた私の友人とは鶯谷の驛まで若葉の闇を、とぼ〳〵と歩いた。私は遠慮なくさう言つた。――

『譜を間違へた位は勘辨するとしても、私にはあの管絃の音そのものが氣に入らぬ。全體（ゲザムト・アインドルク）の印象が甚だ惡るい。ベルリンのベートーヴェンは決してこんなわけのものでなかつた。』

友人の答にもまた十分の理由があつた。

『これが日本國立の音樂學校の正に一生懸命の處である。そしてそれは僅に四十年來の努力の結果である。二百年の長い傳統のある獨逸の音樂と同日に談じられてはかなはない。』

演奏も或る意味では創作である。然しベートーヴェンのこの偉大な音樂を產み出す事と、それを單に輸入し、模倣し、演出する事とには、其處に多少の難易の差別がある。四十年は殆ど人の一生涯の長さである。この一夕の演奏に對する準備としては、四十年は短いとも言へるかも知れぬ。然し或は長すぎたとも言へるかも知れぬ。これで、あと四十年待つて私共は果して何を得られるであらう。

悠久な、そして曖昧な未來を期待する事は私には退屈千萬である。それよりも寧ろこの手近な過去の四十年の回顧の方が面白い。過去は確實である。過去には期待がない代りに、それを裏切られる恐れもない。日本の樂界はこの過去の四十年に抑も誰がどんな事をしたのであらう。――私はそれを探索して見よう。

私の心には、この鶯谷の夕から過去の人と、その殘した仕事に對する感興が湧然として起つて來た。

私自身の記憶は如何に遡つても日清戰爭時代以上には出でない。その頃には日本にも已にかなり澤山の唱歌軍歌の類があつた。小學校では風琴で唱歌を教へてゐた。私の記憶に殘つてゐる時代は、些くも洋樂渡來といふ時代ではない。日本の津々浦々の小學校までも風琴や唱歌の普及した時代である。

私の少年時代には音樂を惡み、音樂をいやしむといふ考には曾て一度も觸れた事はなかつた。この考は學校生活が高等になつて行くと共に、愈々其色彩も濃くなつて行くものの樣に見えた。近年まで大學には音曲禁止の規則があつた。音曲は大學の神聖を汚し延ては手習ひの邪魔になるものとされてゐた。それで大學の境内で、例へばシューベルトの美しい歌を一ツ唄ふ事は、友達の懐中物を盜む事と同じく、規則が禁止する罪惡であつた。然し私の子供の時には歌を唄ふ事は何の罪惡でもなかつた。私は小學の校庭でも、家の座敷の中でも誰に遠慮もなく、聲を張上げて、知る限りの歌を唄つた。

私の父は山口藩の士族で、藩の學校の教師であつた。恐らく漢學がこの知識の全體であつたであらう。この老漢學者はまづその娘に音曲を教へた。私の姉は子供の時には箏や胡弓には相當に堪能であつた。その稽古のためには、父は町藝者をも家に呼んだ。おゆりといふ町藝者の聲と三味線は私は今でもはつきり覺えてゐる。父は全く普通の人の樣におゆりと應對した。私のためには小學校の女教師も町藝者のおゆりも區別はなかつた。また父は歌の文句の意味を勿論多少は婉曲に、然し、わかるだけには姉に說明してゐた。『黑髮のむすぼれとけぬ思をば』といふ樣な文句は、私の古い、古い聞き覺えの記憶に殘つてゐる。

私の期待は甚しく裏切られた。長い間、やるとかやらぬとか言つて、散々私共をじらし、勿體ぶりに勿體ぶつた演奏は、要するにこんなものであつたかと思ふと、まづ情なくなつた。そして満たされぬ心を抱いた私と、始めてこの曲を聞いて、歡喜に溢れた私の友人とは鶯谷の驛まで若葉の闇を、とぼ〳〵と歩いた。私は遠慮なくさう言つた。——

『譜を間違へた位は勘辨するとしても、私にはあの管絃の音そのものが氣に入らぬ。全體(ゲザムト・アインドルク)の印象が甚だ悪るい。ベルリンのベートーヴエンは決してこんなわけのものでなかつた。』

友人の答にもまた十分の理由があつた。

『これが日本國立の音樂學校の正に一生懸命の處である。そしてそれは僅に四十年來の努力の結果である。二百年の長い傳統のある獨逸の音樂と同日に談じられてはかなはない。』

演奏も或る意味では創作である。然しベートーヴエンのこの偉大な音樂を産み出す事と、それを單に輸入し、模倣し、演出する事とには、其處に多少の難易の差別がある。四十年は殆ど人の一生涯の長さである。この一夕の演奏に對する準備としては、四十年は短いとも言へるかも知れぬ。然し或は長すぎたとも言へるかも知れぬ。これで、あと四十年待つて私共は果して何を得られるであらう。

悠久な、そして曖昧な未來を期待する事は私には退屈千萬である。それよりも寧ろこの手近な過去の四十年の回顧の方が面白い。過去は確實である。過去には期待がない代りに、それを裏切られる恐れもない。日本の樂界はこの過去の四十年に抑も誰がどんな事をしたのであらう。——私はそれを探索して見よう。

私の心には、この鶯谷の夕から過去の人と、その残した仕事に對する感興が湧然として起つて來た。

私自身の記憶は如何に遡つても日清戰爭時代以上には出でない。その頃には日本にも已にかなり澤山の唱歌軍歌の類があつた。小學校では風琴で唱歌を教へてゐた。私の記憶に殘つてゐる時代は、些くも洋樂渡來といふ時代ではない。日本の津々浦々の小學校までも風琴や唱歌の普及した時代である。

○

私の少年時代には音樂を惡み、音樂をいやしむといふ考には曾て一度も觸れた事はなかつた。この考は學校生活が高等になつて行くと共に、愈々其色彩も濃くなつて行くものの樣に見えた。近年まで大學には音曲禁止の規則があつた。音曲は大學の神聖を汚し兼ては手習ひの邪魔になるものとされてゐた。それで大學の境内で、例へばシューベルトの美しい歌を一ツ唄ふ事は、友達の懷中物を盜む事と同じく、規則が禁止する罪惡であつた。然し私の子供の時には歌を唄ふ事は何の罪惡でもなかつた。私は小學の校庭でも、家の座敷の中でも誰に遠慮もなく、聲を張上げて、知る限りの歌を唄つた。

私の父は山口藩の士族で、藩の學校の教師であつた。恐らく漢學がその知識の全體であつたであらう。この老漢學者はまづその娘に音曲を教へた。私の姉は子供の時には箏や胡弓には相當に堪能であつた。その稽古のためには、父は町藝者をも家に呼んだ。おゆりといふ町藝者の聲と三味線は私は今でもはつきり覺えてゐる。父は全く普通の人の樣におゆりと應對した。私のためには小學校の女教師も町藝者のおゆりも區別はなかつた。また父は歌の文句の意味を勿論多少は婉曲に、然し、わかるだけには姉に說明してゐた。『黑髮のむすぼれとけぬ思をば』といふ樣な文句は、私の古い、古い聞き覺えの記憶に殘つてゐる。

私の期待は甚しく裏切られた。長い間、やるとかやらぬとか言つて、散々私共をぢらし、勿體ぶりに勿體ぶつた演奏は、要するにこんなものであつたかと思ふと、まづ情なくなつた。そして滿たされぬ心を抱いた私と、始めてこの曲を聞いて、歡喜に溢れた私の友人とは鶯谷の驛まで若葉の闇を、とぼ〳〵と歩いた。私は遠慮なくさう言つた。——

『譜を間違へた位は勘辨するとしても、私にはあの管絃の音そのものが氣に入らぬ。全體の印象（ゲザムト・アインドルク）が甚だ惡るい。ベルリンのベートーヴェンは決してこんなわけのものでなかつた。』

友人の答にもまた十分の理由があつた。

『これが日本國立の音樂學校の正に一生懸命の處である。そしてそれは僅に四十年來の努力の結果である。二百年の長い傳統のある獨逸の音樂と同日に談じられてはかなはない。』

演奏も或る意味では創作である。然しベートーヴェンのこの偉大な音樂を產み出す事と、それを單に輸入し、模倣し、演出する事とには、其處に多少の難易の差別がある。四十年は殆ど人の一生涯の長さである。この一夕の演奏に對する準備としては、四十年は短いとも言へるかも知れぬ。然し或は長すぎたとも言へるかも知れぬ。これで、あと四十年待つて私共は果して何を得られるであらう。

悠久な、そして曖昧な未來を期待する事は私には退屈千萬である。それよりも寧ろこの手近な過去の四十年の回顧の方が面白い。過去は確實である。過去には期待がない代りに、それを裏切られる恐れもない。日本の樂界はこの過去の四十年に抑も誰がどんな事をしたのであらう。——私はそれを探索して見よう。

私の心には、この鶯谷の夕から過去の人と、その殘した仕事に對する感興が湧然として起つて來た。

私自身の記憶は如何に遡つても日清戰爭時代以上には出でない。その頃には日本にも已にかなり澤山の唱歌軍歌の類があつた。小學校では風琴で唱歌を教へてゐた。私の記憶に殘つてゐる時代は、些くも洋樂渡來といふ時代ではない。日本の津々浦々の小學校までも風琴や唱歌の普及した時代である。

○

私の少年時代には音樂を惡み、音樂をいやしむといふ考には曾て一度も觸れた事はなかつた。この考は學校生活が高等になつて行くと共に、愈々其色彩も濃くなつて行くものの樣に見えた。近年まで大學には音曲禁止の規則があつた。音曲は大學の神聖を汚し兼ては手習ひの邪魔になるものとされてゐた。それで大學の境内で、例へばシューベルトの美しい歌を一ツ唄ふ事は、友達の懷中物を盜む事と同じく、規則が禁止する罪惡であつた。然し私の子供の時には歌を唄ふ事は何の罪惡でもなかつた。私は小學の校庭でも、家の座敷の中でも誰に遠慮もなく、聲を張上げて、知る限りの歌を唄つた。

私の父は山口藩の士族で、藩の學校の教師であつた。恐らく漢學がその知識の全體であつたであらう。この老漢學者はまづその娘に音曲を教へた。私の姉は子供の時には箏や胡弓には相當に堪能であつた。その稽古のためには、父は町藝者をも家に呼んだ。おゆりといふ町藝者の箏と三味線は私は今でもはつきり覺えてゐる。父は全く普通の人の樣におゆりと應對した。私のためには小學校の女教師も町藝者のおゆりも區別はなかつた。また父は歌の文句の意味を勿論多少は婉曲に、然し、わかる丈けには姉に說明してゐた。『黑髮のむすぼれとけぬ思をば』といふ樣な文句は、私の古い、古い聞き覺えの記憶に殘つてゐる。

私の期待は甚しく裏切られた。長い間、やるとかやらぬとか言つて、散々私共をぢらし、勿體ぶりに勿體ぶつた演奏は、要するにこんなものであつたかと思ふと、まづ情なくなつた。そして滿たされぬ心を抱いた私と、始めてこの曲を聞いて、歡喜に溢れた私の友人とは鶯谷の驛まで若葉の闇を、とぼとぼと歩いた。私は遠慮なくさう言つた。――

『譜を間違へた位は勘辨するとしても、私にはあの管絃の音そのものが氣に入らぬ。全體（ゲザムト・アインドルク）の印象が甚だ惡るい。ベルリンのベートーヴエンは決してこんなわけのものでなかつた。』

友人の答にもまた十分の理由があつた。

『これが日本國立の音樂學校の正に一生懸命の處である。そしてそれは僅に四十年來の努力の結果である。二百年の長い傳統のある獨逸の音樂と同日に談じられてはかなはない。』

演奏も或る意味では創作である。然しベートーヴエンのこの偉大な音樂を產み出す事と、それを單に輸入し、模倣し、演出する事とには、其處に多少の難易の差別がある。四十年は殆ど人の一生涯の長さである。この一夕の演奏に對する準備としては、四十年は短いとも言へるかも知れぬ。然し或は長すぎたとも言へるかも知れぬ。これで、あと四十年待つて私共は果して何を得られるであらう。

悠久な、そして曖昧な未來を期待する事は私には退屈千萬である。それよりも寧ろこの手近な過去の四十年の回顧の方が面白い。過去は確實である。過去には期待がない代りに、それを裏切られる恐れもない。日本の樂界はこの過去の四十年に抑も誰がどんな事をしたのであらう。――私はそれを探索して見よう。

私の心には、この鶯谷の夕から過去の人と、その殘した仕事に對する感興が湧然として起つて來た。

私自身の記憶は如何に遡つても日清戰爭時代以上には出でない。その頃には日本にも已にかなり澤山の唱歌軍歌の類があつた。小學校では風琴で唱歌を教へてゐた。私の記憶に殘つてゐる時代は、些くも洋樂渡來といふ時代ではない。日本の津々浦々の小學校までも風琴や唱歌の普及した時代である。

私の少年時代には音樂を惡み、音樂をいやしむといふ考には曾て一度も觸れた事はなかつた。この考は學校生活が高等になつて行くと共に、愈々其色彩も濃くなつて行くものの樣に見えた。近年まで大學には音曲禁止の規則があつた。音曲は大學の神聖を汚し兼ては手習ひの邪魔になるものとされてゐた。それで大學の境内で、例へばシューベルトの美しい歌を一ツ唄ふ事は、友達の懷中物を盜む事と同じく、規則が禁止する罪惡であつた。然し私の子供の時には歌を唄ふ事は何の罪惡でもなかつた。私は小學の校庭でも、家の座敷の中でも誰に遠慮もなく、聲を張上げて、知る限りの歌を唄つた。

私の父は山口藩の士族で、藩の學校の教師であつた。恐らく漢學がその知識の全體であつたであらう。この老漢學者はまづその娘に音曲を教へた。私の姉は子供の時には箏や胡弓には相當に堪能であつた。その稽古のためには、父は町藝者をも家に呼んだ。おゆりといふ町藝者の聲と三味線は私は今でもはつきり覺えてゐる。父は全く普通の人の樣におゆりと應對した。私のためには小學校の女教師も町藝者のおゆりも區別はなかつた。また父は歌の文句の意味を勿論多少は婉曲に、然し、わかるだけには姉に說明してゐた。「黑髮のむすぼれとけぬ思をば」といふ樣な文句は、私の古い、古い聞き覺えの記憶に殘つてゐる。

私の期待は甚しく裏切られた。長い間、やるとかやらぬとか言つて、散々私共をぢらし、勿體ぶりに勿體ぶつた演奏は、要するにこんなものであつたかと思ふと、まづ情なくなつた。そして満たされぬ心を抱いた私と、始めてこの曲を聞いて、歡喜に溢れた私の友人とは鶯谷の驛まで若葉の闇を、とぼ〳〵と歩いた。私は遠慮なく、さう言つた。——

『譜を間違へた位は勘辨するとしても、私にはあの管絃の音そのものが氣に入らぬ。全體の印象（ゲザムトアインドルク）が甚だ悪るい。ベルリンのベートーヴェンは決してこんなわけのものでなかつた。』

友人の答にもまた十分の理由があつた。

『これが日本國立の音樂學校の正に一生懸命の處である。そしてそれは僅に四十年來の努力の結果である。二百年の長い傳統のある獨逸の音樂と同日に談じられてはかなはない。』

演奏も或る意味では創作である。然しベートーヴェンのこの偉大な音樂を產み出す事と、それを單に輸入し、模倣し、演出する事とには、其處に多少の難易の差別がある。四十年は殆ど人の一生涯の長さである。この一夕の演奏に對する準備としては、四十年は短いとも言へるかも知れぬ。然し或は長すぎたとも言へるかも知れぬ。これで、あと四十年待つて私共は果して何を得られるであらう。

悠久な、そして曖昧な未來を期待する事は私には退屈千萬である。それよりも寧ろこの手近な過去の四十年の回顧の方が面白い。過去は確實である。過去には期待がない代りに、それを裏切られる恐れもない。日本の樂界はこの過去の四十年に抑も誰がどんな事をしたのであらう。——私はそれを探索して見よう。

私の心には、この鶯谷の夕から過去の人と、その殘した仕事に對する感興が湧然として起つて來た。

○

私自身の記臆は如何に遡つても日淸戰爭時代以上には出でない。その頃には日本にも已にかなり澤山の唱歌軍歌の類があつた。小學校では風琴で唱歌を教へてゐた。私の記臆に殘つてゐる時代は、些くも洋樂渡來といふ時代ではない。日本の津々浦々の小學校までも風琴や唱歌の普及した時代である。

私の少年時代には音樂を惡み、音樂をいやしむといふ考には曾て一度も觸れた事はなかつた。この考は學校生活が高等になつて行くと共に、愈々其色彩も濃くなつて行くものの樣に見えた。近年まで大學には音曲禁止の規則があつた。音曲は大學の神聖を汚し總ては手習ひの邪魔になるものとされてゐた。それで大學の境内で、例へばシューベルトの美しい歌を一ツ唄ふ事は、友達の懷中物を盜む事と同じく、規則が禁止する罪惡であつた。然し私の子供の時には歌を唄ふ事は何の罪惡でもなかつた。私は小學の校庭でも、家の座敷の中でも誰に遠慮もなく、聲を張上げて、知る限りの歌を唄つた。

私の父は山口藩の士族で、藩の學校の敎師であつた。恐らく漢學がその知識の全體であつてであらう。この老漢學者はまづその娘に音曲を敎へた。私の姉は子供の時には箏や胡弓には相當に堪能であつた。その稽古のためには、父は町藝者をも家に呼んだ。おゆりといふ町藝者の聲と三味線は私は今でもはつきり覺えてゐる。父は全く普通の人の樣におゆりと應對した。私のためには小學校の女歌師も町藝者のおゆりも區別はなかつた。また父は歌の文句の意味を勿論多少は婉曲に、然し、わかるだけには姉に說明してゐた。『黑髮のむすぼれとけぬ思をば』といふ樣な文句は、私の古い、古い聞き覺えの記臆に殘つてゐる。

もう一人の姉も三味線にはすぐれた腕前を持つてゐた。そしてこの姉は、甚だしく三味線を好んでゐた。私は或る夏の夜遅くこの姉の嫁してゐる家を訪ねた事がある。その時は姉は近處隣を憚つてわざ〳〵蒸す様な暑い物置場の中に入つてくら闇の中で、たゞ一人三味線を彈いてゐた。

この様な家に私は育つて來た。父は日本の音樂に對して、全く子供を解放した。何の禁止も試みなかつた。それは恐らく私の町では極めて普通な事であつたであらう。私の父はその事に就て別に誰からも非難はされなかつた。盜むことや、僞る事や、その様な事は父は嚴しく制めたが、歌を唄ふ事には何の制裁も加へなかつた。然し私の家庭が音曲の爲めに神聖を犯されたといふ様なことは曾て無い。私の姉が音曲の爲めに品性を損つたといふ様な事も未だ曾て覺えがない。私の二人の姉は箏や三味線を樂しみながら極めて平和な、安穩な主婦としての生涯を終つた。

近頃大學にも管絃樂團が出來た。從つて大學の音曲禁止の規則は甚だ影のうすいものになつた。この管絃樂團がまた何時か禁止されるか、或はこれから先き存分な發展を遂げ得るか、それはもとより私の知る處でない。然し日本の大學が時勢に引摺られて全く音曲禁止の規則を撤廢したとしても、それは私には珍らしい事でも何でもない。それは四十年前已に私の父が私の家庭に對して取つた態度である。

音曲禁制當時の大學の先生達も、謠曲だけは大びらに唄つてゐた。謠曲は三味線と違つて上品な、高等なものとされてゐた。私も子供の時、屢々、能を見せられた。

私の町から八里の山路を隔てゝ、山口縣廳のある町がある。そこで年に一回、神社に奉納の能があつた。能役者は九州から來た。他の乘物もあるのに、父はわざ〳〵山駕籠をあつらへて、それで私共姉弟とその能の見物に出かけた。新

緑したたる山路の一日を、その駕籠の中で、父は私共に大和田建樹の『謠曲通解』を讀んできかせた。私より六つ年上の姉は多少それを理解したらしかつた。そしてその樣な旅は幾年も繰り返へされた。この能役者のうちの一人は、この能のあとで、父を訪ねて私の町に來て、私の家で一夏を過した事もある。この能役者は私の家で有志のものに謠曲を敎へた。が、私共姉弟のうちでは、誰一人として、謠曲などを唄つて見ようとしたものはなかつた。

能や謠曲は老人や、大學の先生のためには、實に高等な音樂であらうが、私の印象にはその樣な物は更に殘つてゐない。恐らく能見物の一日は、退屈なのと馬鹿〳〵しいのとで、姉の膝を枕にして寢て過したものらしい。私の子供の時の能の印象は三味線や胡弓の印象に比べると殆ど語るに足らない位薄い。

私共は音樂に對して完全に解放されてゐた。もし私が箏や三味線を彈かう思つたならば、父は恐らく姉と共に師匠につけてくれたであらう。然し私は何故か知らないが、その箏も三味線も決して彈かうとは思はなかつた。私を最も動かしたものは唱歌であつた。

姉が小學校で習つて來たいろ〳〵な唱歌のうちで、特に私を感動させたのは『今樣』であつた。私は極力その美しいふしを覺えようとした。三味線にも箏にも、當時の私をこれほど熱中させたふしは決してない。唄のふしの美しさといふ事は私はこの『今樣』で始めて經驗した。

この『今樣』と殆ど同時に私はまた『み寺の鐘の音』の輪唱をきいた。それも私には誠に驚くべき事件であつた。違つた高さの聲と文句とを同時に唄つて、それが何となくよく耳に調和して聞えるといふ事は、私には實に不思議に堪えないものであつた。姉の友達が歸つた後で私は百方姉に懇願してそれを敎えて貰はうとしたが、姉はたゞ意地惡く笑

もう一人の姉も三味線にはすぐれた腕前を持つてゐた。そしてこの姉は、甚だしく三味線を好んでゐた。私は或る夏の夜遲くこの姉の嫁してゐる家を訪ねた事がある。その時は姉は近處隣を憚つてわざ〳〵蒸す樣な暑い物置場の中に入つてくら闇の中で、たゞ一人三味線を彈いてゐた。

この樣な家に私は育つて來た。父は日本の音樂に對して、全く子供を解放した。何の禁止も試みなかつた。それは恐らく私の町では極めて普通な事であつたであらう。私の父はその事に就て別に誰からも非難はされなかつた。盜むことや、僞る事や、その樣な事は父は嚴しく制めたが、歌を唄ふ事には何の制裁も加へなかつた。然し私の家庭が音曲の爲めに神聖を犯されたといふ樣なことは曾て無い。私の姉が音曲の爲めに品性を損つたといふ樣な事も未だ曾て覺えがない。私の二人の姉は箏や三味線を樂しみながら極めて平和な、安穩な主婦としての生涯を終つた。

近頃大學にも管絃樂團が出來た。從つて大學の音曲禁止の規則は甚だ影のうすいものになつた。この管絃樂團がまた何時か禁止されるか、或はこれから先き存分な發展を遂げ得るか、それはもとより私の知る處でない。然し日本の大學が時勢に引摺られて全く音曲禁止の規則を撤廢したとしても、それは私には珍らしい事でも何でもない。それは四十年前已に私の父が私の家庭に對して取つた態度である。

音曲禁制當時の大學の先生達も、謠曲だけは大びらに唄つてゐた。謠曲は三味線と違つて上品な、高等なものとされてゐた。私も子供の時、屢々、能を見せられた。

私の町から八里の山路を隔てゝ、山口縣廳のある町がある。そこで年に一回、神社に奉納の能があつた。能役者は九州から來た。他の乘物もあるのに、父はわざ〳〵山駕籠をあつらへて、それで私共姉弟とその能の見物に出かけた。新

餘したる山路の一日を、その謡曲の中で、父は私共に大和田建樹の『謡曲通解』を読んできかせた。私より六つ年上の姉は多少それを理解したらしかつた。そしてその様な旅は幾年も繰り返へされた。この能役者のうちの一人は、この能のあとで、父を訪ねて私の町に來て、私の家で一夏を過した事もある。この能役者は私の家で有志のものに謡曲を教へた。が、私共姉弟のうちでは、誰一人として、謡曲などを唄つて見ようとしたものはなかつた。

能や謡曲は老人や、大學の先生のためには、實に高等な音樂であらうが、私の印象にはその様な物は更に殘つてゐない。恐らく能見物の一日は、退屈なのと馬鹿〳〵しいのとで、姉の膝を枕にして寢て過したものらしい。私の子供の時の能の印象は三味線や胡弓の印象に比べると殆ど語るに足らない位薄い。

私共は音樂に對して完全に解放されてゐた。もし私が箏や三味線を彈かうと思つたならば、父は恐らく姉と共に師匠につけてくれたであらう。然し私は何故か知らないが、その箏も三味線も決して彈かうとは思はなかつた。私を最も動かしたものは唱歌であつた。

姉が小學校で習つて來たいろ〳〵な唱歌のうちで、特に私を感動させたのは『今樣』であつた。私は極力その美しいふしを覺えようとした。三味線にも箏にも、當時の私をこれほど熱中させたふしは決してない。唄のふしの美しさといふ事は私はこの『今樣』で始めて經驗した。

この『今樣』と殆ど同時に私はまた『み寺の鐘の音』の輪唱をきいた。それも私には誠に驚くべき事件であつた。違つた高さの聲と文句とを同時に唄つて、それが何となくよく耳に調和して聞えるといふ事は、私には實に不思議に堪えないものであつた。姉の友達が歸つた後で私は百方姉に懇願してそれを教えて貰らはうとしたが、姉はたゞ意地惡く笑

もう一人の姉も三味線にはすぐれた腕前を持つてゐた。そしてこの姉は、甚だしく三味線を好んでゐた。私は或る夏の夜遅くこの姉の嫁してゐる家を訪ねた事がある。その時は姉は近處隣を憚つてわざ〳〵蒸す様な暑い物置場の中に入つてくら闇の中で、たゞ一人三味線を彈いてゐた。

この様な家に私は育つて來た。父は日本の音樂に對して、全く子供を解放した。何の禁止も試みなかつた。それは恐らく私の町では極めて普通な事であつたであらう。私の父はその事に就て別に誰からも非難はされなかつた。盗むことや、僞る事や、その様な事は父は嚴しく制めたが、歌を唄ふ事には何の制裁も加へなかつた。然し私の家庭が音曲の爲めに神聖を犯されたといふ様なことは曾て無い。私の姉が音曲の爲めに品性を損つたといふ様な事も未だ曾て覺えがない。私の二人の姉は箏や三味線を樂しみながら極めて平和な、安穩な主婦としての生涯を終つた。

近頃大學にも管絃樂團が出來た。從つて大學の音曲禁止の規則は甚だ影のうすいものになつた。この管絃樂團がまた何時か禁止されるか、或はこれから先き存分な發展を遂げ得るか、それはもとより私の知る處でない。然し日本の大學が時勢に引摺られて全く音曲禁止の規則を撤廢したとしても、それは私には珍らしい事でも何でもない。それは四十年前已に私の父が私の家庭に對して取つた態度である。

音曲禁制當時の大學の先生達も、謡曲だけは大びらに唄つてゐた。謡曲は三味線と違つて上品な、高等なものとされてゐた。私も子供の時、屢々、能を見せられた。

私の町から八里の山路を隔てゝ、山口縣廳のある町がある。そこで年に一回、神社に奉納の能があつた。能役者は九州から來た。他の乘物もあるのに、父はわざ〳〵山駕籠をあつらへて、それで私共姉弟とその能の見物に出かけた。新

餘したる山路の一日を、その駕籠の中で、父は私共に大和田建樹の『謠曲通解』を讀んできかせた。私より六つ年上の姉は多少それを理解したらしかつた。そしてその樣な旅は幾年も繰り返へされた。この能役者のうちの一人は、この能のあとで、父を訪ねて私の町に來て、私の家で一夏を過した事もある。この能役者は私の家で有志のものに謠曲を敎へた。が、私共姉弟のうちでは、誰一人として、謠曲などを唄つて見ようとしたものはなかつた。

能や謠曲は老人や、大學の先生のためには、實に高等な音樂であらうが、私の印象にはその樣な物は更に殘つてゐない。恐らく能見物の一日は、退屈なのと馬鹿〳〵しいのとで、姉の膝を枕にして寢て過したものらしい。私の子供の時の能の印象は三味線や胡弓の印象に比べると殆ど語るに足らない位薄い。

私共は音樂に對して完全に解放されてゐた。もし私が箏や三味線を彈から思つたならば、父は恐らく姉と共に師匠につけてくれたであらう。然し私は何故か知らないが、その箏も三味線も決して彈かうとは思はなかつた。私を最も動かしたものは唱歌であつた。

姉が小學校で習つて來たいろ〳〵な唱歌のうちで、特に私を感動させたのは『今樣』であつた。私は極力その美しいふしを覺えようとした。三味線にも箏にも、當時の私をこれほど熱中させたふしは決してない。唄のふしの美しさといふ事は私はこの『今樣』で始めて經驗した。

この『今樣』と殆ど同時に私はまた『み寺の鐘の音』の輪唱をきいた。それも私には誠に驚くべき事件であつた。違つた高さの聲と文句とを同時に唄つて、それが何となくよく耳に調和して聞えるといふ事は、私には實に不思議に堪えないものであつた。姉の友達が歸つた後で私は百方姉に懇願してそれを敎えて貰らはうとしたが、姉はたゞ意地惡く笑

もう一人の姉も三味線にはすぐれた腕前を持つてゐた。そしてこの姉は、甚だしく三味線を好んでゐた。私は或る夏の夜遅くこの姉の嫁してゐる家を訪ねた事がある。その時は姉は近處隣を憚つてわざ／＼蒸す樣な暑い物置場の中に入つてくら闇の中で、たゞ一人三味線を彈いてゐた。

この樣な家に私は育つて來た。父は日本の音樂に對して、全く子供を解放した。何の禁止も試みなかつた。それは恐らく私の町では極めて普通な事であつたであらう。私の父はその事に就て別に誰からも非難はされなかつた。盜むことや、僞る事や、その樣な事は父は嚴しく制めたが、歌を唄ふ事には何の制裁も加へなかつた。然し私の家庭が音曲の爲めに神聖を犯されたといふ樣なことは曾て無い。私の姉が音曲の爲めに品性を損つたといふ樣な事も未だ曾て覺えがない。私の二人の姉は箏や三味線を樂しみながら極めて平和な、安穩な主婦としての生涯を終つた。

近頃大學にも管絃樂團が出來た。從つて大學の音曲禁止の規則は甚だ影のうすいものになつた。この管絃樂團がまた何時か禁止されるか、或はこれから先き存分な發展を遂げ得るか、それはもとより私の知る處でない。然し日本の大學が時勢に引摺られて全く音曲禁止の規則を撤廢したとしても、それは私には珍らしい事でも何でもない。それは四十年前已に私の父が私の家庭に對して取つた態度である。

音曲禁制當時の大學の先生達も、謠曲だけは大びらに唄つてゐた。謠曲は三味線と違つて上品な、高等なものとされてゐた。私も子供の時、屢々、能を見せられた。

私の町から八里の山路を隔てゝ、山口縣廳のある町がある。そこで年に一回、神社に奉納の能があつた。能役者は九州から來た。他の乘物もあるのに、父はわざ／＼山駕籠をあつらへて、それで私共姉弟とその能の見物に出かけた。新

綠したたる山路の一日を、その[illegible]の中で、父は私共に大和田建樹の『謡曲通解』を読んできかせた。私より六つ年上の姉は多少それを理解したらしかつた。そしてその樣な旅は幾年も繰り返へされた。この能役者のうちの一人は、この能のあとで、父を訪ねて私の町に來て、私の家で一夏を過した事もある。この能役者は私の家で有志のものに謡曲を敎へた。が、私共姉弟のうちでは、誰一人として、謡曲などを唄つて見ようとしたものはなかつた。

能や謡曲は老人や、大學の先生のためには、實に高等な音樂であらうが、私の印象にはその樣な物は更に殘つてゐない。恐らく能見物の一日は、退屈なのと馬鹿〳〵しいのとで、姉の膝を枕にして寢て過したものらしい。私の子供の時の能の印象は三味線や胡弓の印象に比べると殆ど語るに足らない位薄い。

私共は音樂に對して完全に解放されてゐた。もし私が箏や三味線を彈から思つたならば、父は恐らく姉と共に師匠につけてくれたであらう。然し私は何故か知らないが、その箏も三味線も決して彈かうとは思はなかつた。私を最も動かしたものは唱歌であつた。

姉が小學校で習つて來たいろ〳〵な唱歌のうちで、特に私を感動させたのは『今樣』であつた。私は極力その美しいふしを覺えようとした。三味線にも箏にも、當時の私をこれほど熱中させたふしは決してない。唄のふしの美しさといふ事は私はこの『今樣』で始めて經驗した。

この『今樣』と殆ど同時に私はまた『み寺の鐘の音』の輪唱をきいた。それも私には誠に驚くべき事件であつた。透つた高さの聲と文句とを同時に唄つて、それが何となくよく耳に調和して聞えるといふ事は、私には實に不思議に堪へないものであつた。姉の友達が歸つた後で私は百方姉に懇願してそれを敎へて貰らはうとしたが、姉はたゞ意地惡く笑

つてゐるだけであつた。私はいつになつたら、あれが自分にも唄へるだらうかと考へた。そしてこの輪唱は長い間私の羨望の的であつた。然し私が小學校に入つた頃には、もうその様な唱歌は教へて居なかつた。

私が小學校に入つた當時には、日本にも已に尨大な唱歌集が出來てゐた。譜は１２３といふ様な略譜であつたが、頁數は恐らく三百頁以上もあつたであらう。また日清戰爭の影響をうけて勇ましい軍歌集の様なものも澤山出來てゐた。私はまだ小學校に行かない時であつたと思ふが能見物の代りに、そのみやげとして手風琴と、唱歌集軍歌集の類を十冊以上も買つて貰つた事がある。それは能見物の幾百倍も私を喜ばせた。私は殆ど狂喜した。忽ちのうちに譜も手風琴の彈き方も會得した。そして私の小學校の生活が始まつた後までも、それは私の殆ど唯一の慰めであり、誇であつた。私に始めて手風琴のひき方を教へてくれた女教師の面影は今でもなほ決して私の腦裡を去らぬ。

あの頃の私の子供心が、何故に箏や三味線を撰ばずに、唱歌や軍歌の類を撰んだかといふ事は自分ながら明瞭にはわからない。まづ手風琴は箏よりも三味線よりも持ち運びよくて、玩弄物として便利である事にもよるであらう。それが箏よりも三味線よりもたやすく彈かれるといふ事にもよるであらう。また手風琴といふ舶來の樂器が深く私の好奇心を唆つたにもよるであらう。それが一般に普及してゐないから、如何にも高尚らしく見える事も、子供の優越心を動かしたであらう。また歌の文句が、『黒髪』や『春雨』は子供には寧ろ難解で、それよりも勇ましい軍歌などの方がその好みに投じたといふ事もあるであらう。或はまた、その頃已に、誰からともなく藝妓などのいやしむべきものである事を教へられ、それが、知らず〳〵三味線をもいやしむべきものであると考へさせたかもしれぬ。これは疑もなく大學の音曲禁制の思想である。たゞこの考を私は決して私の父からは學ばなかつた。父は三味線をも藝妓をも特に甚だしくいやし

むべきものとも、忌むべきものとも思つてはゐなかつた。もし私がこの考を持つてゐたとしたならば、それは恐らく小學校教師や私の周圍の人や或は私の遊び友達などから敎へられたものであらう。

然しこの樣な外面的な理由だけからでは、到底あの當時の子供心は說明出來ない。やはりそれは音樂その物の性質のうちに理由を求めなければならぬ。私の買つて貰つた手風琴の譜には、『黑髮』も『春雨』も『十日ゑびす』もあつた。それにもかゝはらず、私は手風琴に合せて唄つたものは、この耳に熟した日本のふしでなくて、當時新作の生硬な軍歌唱歌の類であつた。それはやはりこの種の歌は、一般に拍子が明瞭で、曲の進行が速くて、そしてふしに曲折が多くて子供の耳に面白いといふ樣な音樂的な條件を考に入れないといふわけには行かないらしい。問題はやはり音樂の問題に歸着する。

十年前西洋音樂が日本の社會一般に紹介され、露西亞から逃れて來た演奏家が續々日本で演奏會を開いた時、私共の間で、果して西洋音樂が日本人に理解され、享樂されるか、といふ問題が多少論じられた事がある。その議論はたゞ議論に止まるか、私は私の音樂の經驗の最初に當つて、自らまづこの問題を解決した。『黑髮』や『春雨』よりも、寧ろ西洋風なふしの軍歌唱歌を撰んだ。

私一人の經驗は勿論言ふに足らぬ。この反對の場合も多いであらう。然し私と經驗を同じくする諸君もまた決して些くないと私はかたく信じてゐる。

私の音樂の思ひ出は、此處で長い闇の裡に消えてしまふ。私の學校生活が進むに從つて音樂は段々私の生活には縁の遠いものとなつた。品行方正にして學問勤勉な學生は、めつたに歌などは唄はなかつた。

音楽が再び私の生活と交渉を開いたのは、もはや思ひ出といふ様な遠い時ではない。現今である。私は思ひ出としては、これ以上に音楽に就て語る事はない。

○

私の生活は、これまでに前後二度音楽に觸れた。子供の時と現在とである。そして私は、二度とも、私の音楽として西洋の音楽を撰んだ。日本の音楽は到底私の生活とは合はない。

父は音楽に就て特に何等かの意見を持つてゐたとは思はれない。たゞそれを面白いものとして樂しんでゐたらしい。そして面白いためには何でもかまはない、三味線であらうと、手風琴であらうとそれは問ふ處ではなかつたらしい。また單純で人の好かつた父は、その面白い音楽の中に何の罪惡もあらうとは考へなかつた。自分が面白い音楽を享樂する様に、子供にも面白い音楽を享樂させたまでゝある。たゞそれだけである。

私共姉弟が子供の時の極めて自由な音楽の經驗は、全く父の人の好さと、單純さと、そして感覺の上の快樂と美とを豐かに味はうとする性質とのたまものである。

○

日本の樂界に最も紀念すべき仕事を殘した人は、言ふまでも伊澤修二翁である。もし現代の日本の音楽史を書かうとするものがあるならば、伊澤修二の名をまづ劈頭第一に擧げなければならぬ。

私は不幸にして伊澤翁を見た事はない。彼は大正六年に東京で歿した。彼の晩年には私は同じこの東京に住んでゐた

わけである。然しその頃には私の念頭に伊澤翁の名などは全然なかつた。私は彼の傳記と著書とで彼を知つてゐるだけである。

伊澤翁こそ正に日本の地に音樂學校を作つた人である。そして音樂を理解し、音樂を常に念頭に置きながら、その音樂學校を監理した人も今日に至るまで、この伊澤翁一人きりである。

今から四十年以前の日本に、音樂學校を作るといふ事は確に大きな事業である。そしてその當時のまだ開けない文教監理者の間にこの音樂學校の存在を續けさせて行つたといふ事は更に大な事業である。この音樂學校こそ翁の美を愛する心が作り出した一大ジムフォニーである。勿論音樂學校の制度は彼がアメリカで見聞したことを日本の土地に移したといふに過ぎぬ。然し彼の心の中に美を愛し音樂を愛する要素がなかつたならば、彼は決して外國で音樂などに氣に止めなかつたであらう。今から四十年の昔にこの様な優れた心を持つてゐた人が一人あつた事は誠に日本の幸福である。

伊澤翁のこの美を愛する心は果して、どうして、どこで養はれ、育てられたのであらう。私は切にそれが知りたい。然しそれこそ全く人間社會の神祕である。恐らく偶然といふより外にはあるまい。

西洋では音樂の素質は遺傳するといはれてゐる。バッハの家やリープランの家はその代表的なものである。それでなくとも、大抵な作家や演奏家は必ずその幼年時代にまづその家庭で音樂を學んだものである。音樂を業としてゐない家庭から、突然大音樂家が產れたといふ様な例は甚だ稀である。然し日本では事情は全く逆つてゐる。宮中の伶人をのぞいて代々必ず音樂を業としてゐる家庭は民間ではあまり例がない。音樂の素質の遺傳といふ様なことは日本では考へられない事である。

音楽が再び私の生活と交渉を開いたのは、もはや思ひ出といふ様な遠い時ではない。現今である。私は思ひ出としては、これ以上に音楽に就て語る事はない。

○

私の生活は、これまでに前後二度音楽に觸れた。子供の時と現在とである。そして私は、二度とも、私の音楽として西洋の音楽を撰んだ。日本の音楽は到底私の生活とは合はない。

父は音楽に就て特に何等かの意見を持つてゐたとは思はれない。たゞそれを面白いものとして楽しんでゐたらしい。そして面白いためには何でもかまはない、三味線であらうと、手風琴であらうとそれは問ふ處ではなかつたらしい。また單純で人の好かつた父は、その面白い音楽の中に何の罪悪もあらうとは考へなかつた。自分が面白い音楽を享楽する様に、子供にも面白い音楽を享楽させたまでゝある。たゞそれだけである。

私共姉弟が子供の時の極めて自由な音楽の經驗は、全く父の人の好さと、單純さと、そして感覺の上の快楽と美とを豐かに味はうとする性質とのたまものである。

○

日本の楽界に最も紀念すべき仕事を殘した人は、言ふまでも伊澤修二翁である。もし現代の日本の音楽史を書かうとするものがあるならば、伊澤修二の名をまづ劈頭第一に舉げなければならぬ。

私は不幸にして伊澤翁を見た事はない。彼は大正六年に東京で歿した。彼の晩年には私は同じこの東京に住んでゐた

わけである。然しその頃には私の念頭に伊澤翁の名などは全然なかつた。私は彼の傳記と著書とで彼を知つてゐるだけである。

伊澤翁こそ正に日本の地に音樂學校を作つた人である。そして音樂を理解し、音樂を常に念頭に置きながら、その音樂學校を監理した人も今日に至るまで、この伊澤翁一人きりである。

今から四十年以前の日本に、音樂學校を作るといふ事は確に大きな事業である。そしてその當時のまだ開けない文教監理者の間にこの音樂學校の存在を續けさせて行つたといふ事は更に大な事業である。この音樂學校こそ翁の美を愛する心が作り出した一大ジムフォニーである。勿論音樂學校の制度は彼がアメリカで見聞したことを日本の土地に移したといふに過ぎぬ。然し彼の心の中に美を愛し音樂を愛する要素がなかつたならば、彼は決して外國で音樂などに氣に止めなかつたであらう。今から四十年の昔にこの様な優れた心を持つてゐた人が一人あつた事は誠に日本の幸福である。

伊澤翁のこの美を愛する心は果して、どうして、どこで養はれ、育てられたのであらう。私は切にそれが知りたい。然しそれこそ全く人間社會の神秘である。恐らく偶然といふより外にはあるまい。

、西洋では音樂の素質は遺傳するといはれてゐる。バッハの家やリープランの家はその代表的なものである。それでなくとも、大抵な作家や演奏家は必ずその幼年時代にまづその家庭で音樂を學んだものである。音樂を業としてゐない家庭から、突然大音樂家が産れたといふ様な例は甚だ稀である。然し日本では事情は全く違つてゐる。宮中の伶人をのぞいて代々必ず音樂を業としてゐる家庭は民間ではあまり例がない。音樂の素質の遺傳といふ様なことは日本では考へられない事である。

傳記によれば、伊澤翁はその少年の頃鄕里の高遠藩で軍隊で鼓手を勤めた事がある。しかも彼はこの役を異常な熱心を以て勤めたさうである。その熱心さは食事の時でも箸で茶碗を叩きまはした程である。そして後にはこの鼓手の指南役として彼は木曾福島の代官山村甚兵衛に招聘されてゐる。これが傳記にあらはれてゐる限り彼が多少音樂に關係ある仕事に指を染めた始めである。

この一事こそ後年の彼の心の發展に大なる影響を與へたものではあるまいか。この樣な極めて偶然な機會が彼の優れた心の中に、音樂の種子の貴重な一粒を落して行つたのではあるまいか。彼れの優れた心であつたればこそ、この種子は芽を出した。そして後年までよく培はれ、育て上げられた。

明治七年、まだ彼の洋行以前に彼は愛知師範學校の幼稚園で、已に彼は唱歌を試みた『蝶々蝶々菜の花にとまれ』はその時のものださうである。私の記臆が過らないならば、このふしはローエル・メーソンの撰んだもので、亞米利加ではボートの歌である。この愉快な、奇麗なふしを撰び、それに蝶々と菜の花の文句を配してこの子供の歌を、私は甚だ面白いと思つてゐる。確にいゝ歌である。

彼はまた明治九年フイラデルフイアの米國獨立紀念博覽會にホツイチング・メーソンと共に日本の民謠『一つとや』の譜を出陳して銅牌を得た、それは米國留學中の一挿話である。この樣に彼の心の中には常に何等かの音樂的なものがあつた。

日本の音樂史は、明治十二年に音樂取調掛が設けられた時に、確にその一時期を劃したといはれるであらう。そしてそれこそ伊澤翁の優れたる心の最も力強い表現である。彼は滯米の時からの知人ホツイチンク・メーソンを招聘した。

取調掛は、メーソンに二百九十圓の月俸を給したらしい。當時にあつては恐らく高給であらう。そしてこの時に今日の音樂學校の基礎は置かれたのである。この當時の音樂取調掛の仕事は西洋音樂の技巧を學ぶ事と共に、その歷史や或は物理上の構造を研究する事でもあつた。音樂學校のする事と、大學の研究室のする事とを兼ねてゐた。そのうちで音樂學校の方はどうにか今日まで傳つて來た。研究室の方は間もなく全く跡を絕つてしまつた。

明治十七年には伊澤翁は『音樂取調成績申報要略』を作つた。そして時の文部卿大木喬任にそれを提出した。八年の後にこの書は音樂學校から出版された。今日では稀覯の文獻である。然しとにかくこの書を出版した事は確に時の音樂學校の一功績である。この樣な書を文部省の役人の誰が讀み、誰が理解する事が出來るであらう。もしそれが出版されなかつたら伊澤翁の大な仕事の一つは永遠に文部省の屑籠に葬られてしまつたに違いない。この書はたゞ骨董的な興味があるばかりでなく日本で書かれた甚だ特徴のある音樂書の一つである。

伊澤翁はこの研究的な音樂書をかいたばかりでなく、自ら筆を取つて作曲を試みた。私は今までにはまだ彼の作曲の全體の目錄を手に入れる事は出來なかつた。然し高崎正風の歌に彼が譜を置いたものでは『紀元節』と『天長節』の唱歌がある。その他にもまだ數曲の唱歌があるらしい。

『小學唱歌集』の編纂はまた伊澤翁の大なる業績の一つである。この三篇の唱歌集が明治時代の若い日本の各方面に與へた影響は決して少いものでない。これこそ日本に於ける音樂の曙光であつたかもしれぬ。その第一篇第二篇は一年あまりの間に六千部を發賣したと言はれてゐる。この當時に六千部といふ發賣高は眞に非常な數である。如何に世に歡迎されたかは察するに難くない。

傳記によれば、伊澤翁はその少年の頃郷里の高遠藩で軍隊で鼓手を勤めた事がある。しかも彼はこの役を異常な熱心を以て勤めたさうである。この熱心さは食事の時でも箸で茶碗を叩きまはした程である。そして後にはこの鼓手の指南役として彼は木曾福島の代官山村甚兵衛に招聘されてゐる。これが傳記にあらはれてゐる限り彼が多少音樂に關係ある仕事に指を染めた始めである。

この一事こそ後年の彼の心の發展に大なる影響を與へたものではあるまいか。この樣な極めて偶然な機會が彼の優れた心の中に、音樂の種子の貴重な一粒を落して行つたのではあるまいか。彼れの優れた心であつたればこそ、この種子は芽を出した。そして後年までよく培はれ、育て上げられた。

明治七年、まだ彼の洋行以前に彼は愛知師範學校の幼稚園で、已に彼は唱歌を試みた。『蝶々蝶々菜の花にとまれ』はその時のものださうである。私の記憶が過らないならば、このふしはローエル・メーソンの撰んだもので、亞米利加ではボートの歌である。この愉快な、奇麗なふしを撰び、それに蝶々と菜の花の文句を配してこの子供の歌を、私は甚だ面白いと思つてゐる。確にいゝ歌である。

彼はまた明治九年フイラデルフイアの米國獨立紀念博覽會にホワイチング・メーソンと共に日本の民謡『一つとや』の譜を出陳して銅牌を得た、それは米國留學中の一挿話である。この樣に彼の心の中には常に何等かの音樂的なものがあつた。

日本の音樂史は、明治十二年に音樂取調掛が設けられた時に、確にその一時期を劃したといはれるであらう。そしてそれこそ伊澤翁の優れたる心の最も力強い表現である。彼は滯米の時からの知人ホワイチンク・メーソンを招聘した。

取調掛は、メーソンに二百九十圓の月俸を給したらしい。當時にあつては恐らく高給であらう。たしかにこの時に今日の音樂學校の基礎は置かれたのである。この當時の音樂取調掛の仕事は西洋音樂の技巧を學ぶ事と共に、その歷史や或は物理上の構造を研究する事でもあつた。音樂學校のする事と、大學の研究室のする事とを兼ねてゐた。そのうちで音樂學校の方はどうにか今日まで傳つて來た。研究室の方は間もなく全く跡を絕つてしまつた。

明治十七年には伊澤翁は『音樂取調成績申報要略』を作つた。そして時の文部卿大木喬任にそれを提出した。八年の後にこの書は音樂學校から出版された。今日では稀覯の文獻である。然しとにかくこの書を出版した事は確に時の音樂學校の一功績である。この樣な書を文部省の役人の誰が讀み、誰が理解する事が出來るであらう。もしそれが出版されなかつたら伊澤翁の大な仕事の一つは永遠に文部省の屑籠に葬られてしまつたに違いない。この書はたゞ骨董的な興味があるばかりでなく日本で書かれた甚だ特徴のある音樂書の一つである。

伊澤翁はこの研究的な音樂書をかいたばかりでなく、自ら筆を取つて作曲を試みた。私は今までにはまだ彼の作曲の全體の目錄を手に入れる事は出來なかつた。然し高崎正風の歌に彼が譜を置いたものでは『紀元節』と『天長節』の唱歌がある。その他にもまだ數曲の唱歌があるらしい。

『小學唱歌集』の編纂はまた伊澤翁の大なる業蹟の一つである。この三篇の唱歌集が明治時代の若い日本の各方面に與へた影響は決して輕いものでない。これこそ日本に於ける音樂の曙光であつたかもしれぬ。その第一篇第二篇は一年あまりの間に六千部を發賣したと言はれてゐる。この當時に六千部といふ發賣高は眞に異常な數である。如何に世に歡迎されたかは察するに難くない。

この『小學唱歌集』は誠に美しい歌の本である。好い趣味の歌の本である。ふしは或はモツアルトやシューベルの様な獨逸の作家のメロディの斷片もある。或はスコットランドやアイルランドの民謡もある。或は日本の箏歌もある。そして私はすべて好い趣味の撰集であると言ふを憚らない。この集の與へる印象はすべて上品である。高尚である。そして日本人の手に成つたものゝうちでも、『鏡なす』などは相當に面白いふしである。

たゞ歌詞は必ずしも原歌に忠實とは言へない。戀を歌つたものは、如何に美しい文句でもみなその他の題目に取りかへられてゐる。然しそれは小學唱歌の性質上誠に止むを得ない事である。それでもなほ、その歌詞には、微に原詩の香を止めてゐるものも尠くない。ロバート・バーンスの詩『„John Anderson, my Jo.“』は『頭の雪』となつてゐる。『„Auld lang syne.“』は『螢の光』となつてゐる。或は『„Ye Banks and Braes o' Bonnie Doon“』は『思ひ出づれば』となつてゐる。その他『菊』にしても、『美しき我兒』にしても、これ等は小學唱歌といふ條件の下では、甚だ原詩に忠實であるとも言へない事はない。それに比べれば„Anne Laurie“が『才女』になつたのなどは、可なりひどい變化である。然しそれ以後の日本の歌謠には、これよりも出鱈目な文句はいくらもある。

當時この仕事で伊澤翁を助けたメーゾンと日本の樂人との力も勿論認めなければならぬ。然し『小學唱歌集』といふ日本の近代の文化史の上にも甚だ意義の深いこの仕事の全體は、やはり伊澤修二の名で長く謳はれていゝ。全く彼の優れたる心の一表現である。

彼はその外にも『音樂問答』や『音樂指南』や『樂典』の樣なものを出版させた。唱歌を教へるには掛圖を用ゐる事にして、その掛圖をも出版した。それと同時に幼稚ながらも、屢々音樂會を開いて、音樂の實際をも試みた。

その一つに希臘の古樂『アポロの讃歌』を雅樂の樂器に飜譯して演奏したものがある。それは日本の音階を研究した

結果それが西洋のものと甚だしく違つてゐないといふ事から出發した實驗な試みであつた。彼はチヤペルの『音樂史』の中のこの譜を雅樂の琵琶と箏と笙と篳篥と笛とに移して全然雅樂の音樂上の約束の下で演奏した。當時の宮中の雅樂部長芝葛鎭翁はその實際の仕事に當つた。私はもとよりそれを聞いた事はないが、譜からその一般を十分推測する事は出來る。

すべて、ものゝ興る初めには、大膽で、突飛で、後から考へると甚だ稚氣のある仕事がいつでも歴史の頁を賑はしてゐるものである。この伊澤翁の突飛な、そして大膽至極な企も、たゞ笑草としてのみならず私は非常に愉快な面白い事に思つてゐる。伊澤翁の心の中にあつた獨創的なものの一半は、よくこの譜の上に躍如としてあらはれてゐる。私は彼を強て音樂家とはいはぬ。然し今から四十年以前の日本の土地で、これだけの音樂的な仕事をした人の心を私は甚だ優れたものに思つてゐる。

伊澤翁のこの仕事に、もし、何かの不滿な點を求めるならば、それは專門的な深さと大さとを缺く事である。彼の音樂的な仕事は、要するに通俗な、教育的な唱歌以上に出なかつた。彼はベートーヴェンのシムフォニーを知らなかつた。モツァルトのコンツェルトを知らなかつた。ワグネルの歌劇を知らなかつた。彼の音樂は音樂の甚だ小い範圍だけに限られてゐた。彼には、更に廣大な音樂の領域に一歩を踏み込むだけの用意も餘裕もなかつたらしい。

次に彼の音樂には何等の藝術的な意義がない。音樂そのもの、本當の意味は彼にはまだ十分理解されてゐなかつた。殆どたゞ唱歌だけを以つて音樂を代表させようとした彼には、勿論ベートーヴェンの惱みはわからなかつた。ワグネルの爭ひもわからなかつた。音樂と我々の生活との交渉は唱歌が我々の生活にふれ得るだけの範圍であつた。

强て音樂と我々の生活との關係を伊澤翁が考へたとするならば、それはまづ健康との關係である。歌を唄へばからだが丈夫になるといふ事である。つまり體操の様なものである。今でも謡曲をやる人々の間にはさう考へる人もゐるらしい。謡曲は扇子が一本と水が一杯あれば唄はれる。そして腹がへる。甚だ手がるな、そして高尚らしく見える運動である、といふのである。

然し四十年前の人も音樂を全然體操やヂァスターゼの様なものとばかりは考へなかつた。伊澤翁のためには音樂はその上にまた修身の一補助課であつた。それは全く『禮樂不可以斯須去身』といふ支那の考のまゝである。彼もこの語を引用してゐる。そしてそれは彼が『小學唱歌集』を作つた根本思想である。ともかくも彼のためには音樂は體操より一層我々の感情と關係のあるものであつた。

彼はそれをも少し明瞭に音樂の構造に就ても考へた。それは長音階と短音階の性質である。そして獨斷的に長音階を快濶なるものとし、短音階を悲哀なるものとした。それはもとより古い傳統的な考である。彼はそれに十分信頼した。そしてインゲルの『萬國音樂論』から各國の音樂の長短の音階の曲の統計をあげて、音樂を修身の目的に使ふためには、その健全な、快活な調子を撰ばなければならぬと論じた。これが彼の音樂論の殆ど全體である。要するに彼のためには音樂は體操の一種で、修身の一補助であるといふに止まつてゐる。

音樂を修身の一補助課と見る事は、やがて音曲禁制といふ結論に到着し易い。然し實際に於ては、誰も音樂を修身の助けになぞするものはない。誰も三味線を彈いて倫理道德を說くものはない。支那の空虛な禮樂の考を實際の場合にもあてはめようとする事は、さうする事自身が已に間違つてゐる。不幸にして伊澤翁もこの誤謬に陷つた。そして俗樂禁止或は俗樂改良といふ様な論をも吐いた。

然し彼の音樂を愛する心は、その俗樂をもなほ出來るだけは修身の具に用ゐようとした。彼は小學唱歌の伴奏に箏を用ゐる事を考へた。胡弓を用ゐる事も考へた。尺八さへもどうにかして用ゐられないかと考へた。彼が小學唱歌のために最後まで採用しなかつたものはたゞ三味線だけである。然し彼は今一歩の事で或は三味線をも採用したかもしれぬ。彼の豐富な感情と、獨創的な、そして大膽不敵な精神が、たゞ僅な障害のために、阿古屋琴責めの樂器の全體を小學校で使ふ事に躊躇したといふのは、私は如何にも遺憾に堪えないものである。

私の國でも當時は小學校で箏も胡弓も使つてゐた事は、私は父の話に聞いてゐた。私の中學校の頃に、私はこの話にひどく興を催して、姉と共に小學唱歌集を箏と胡弓で彈いて見た事がある。そしてそれはひどく父の喝采を博した。

もし音樂の性質上それが可能であるならば、私共は阿古屋琴責めの樂器をみな小學校の唱歌の伴奏に用ゐるに少しも異存はない。日本人が日本の樂器を用ゐるのはあたり前の話である。もし三味線の聯想が惡いといふならば、小學校でそれを使ふ事によつて、その古い惡い聯想を一變させるがいゝ。樂器に罪はない筈である。

日本の音樂に對しては伊澤翁の考は少多混亂してゐる。すくなくもまだ再考の餘地はある。新しく渡來した外國の音樂に對して、まだ日本の音樂の位置が確定してゐなかつた。今日と雖も、それが確定したとはまだ言はれない。

最後に伊澤翁の功蹟として、必ず此處に逸してならぬものは音樂の研究である。彼は西洋音樂の構造を叙述するに止まらず、日本の音樂の性質をも研究した。彼の明治十七年の『音樂取調成績申報要略』には日本の近代の音樂の音階に就て可なり詳しい學問的な叙述をしてゐる。そして日本三千年間の音樂變遷の歴史をも書いてゐる。今日から見ても、この樣な研究に或る程度の學問上の正確さのある事は到底拒まれない。そこが恐らくこの書の最も價値のある部分であら

強て音樂と我々の生活との關係を伊澤翁が考へたとするならば、それはまづ健康との關係である。歌を唄へばからだが丈夫になるといふ事である。つまり體操の樣なものである。今でも謡曲をやる人々の間にはさう考へる人もゐるらしい。謡曲は扇子が一本と水が一杯あれば唄はれる。そして腹がへる。甚だ手がるな、そして高尚らしく見える運動である、といふのである。

然し四十年前の人も音樂を全然體操やヂァスターゼの樣なものとばかりは考へなかつた。伊澤翁のためには音樂はその上にまた修身の一補助課であつた。それは全く『禮樂不可以斯須去身』といふ支那の考のまゝである。彼もこの語を引用してゐる。そしてそれは彼が『小學唱歌集』を作つた根本思想である。ともかくも彼のためには音樂は體操より一層我々の感情と關係のあるものであつた。

彼はそれをも少し明瞭に音樂の構造に就ても考へた。それは長音階と短音階の性質である。そして獨斷的に長音階を快濶なるものとし、短音階を悲哀なるものとした。それはもとより古い傳統的な考である。彼はそれに十分信頼した。そしてインゲルの『萬國音樂論』から各國の音樂の長短の音階の曲の統計をあげて、音樂を修身の目的に使ふためには、その健全な、快活な調子を撰ばなければならぬと論じた。これが彼の音樂論の殆ど全體である。要するに彼のためには音樂は體操の一種で、修身の一補助であるといふに止まつてゐる。

音樂を修身の一補助課と見る事は、やがて音曲禁制といふ結論に到着し易い。然し實際に於ては、誰も音樂を修身の助けになぞするものはない。誰も三味線を彈いて倫理道徳を説くものはない。支那の空虚な禮樂の考を實際の場合にもあてはめようとする事は、さうする事自身が已に間違つてゐる。不幸にして伊澤翁もこの誤謬に陷つた。そして俗樂禁止或は俗樂改良といふ樣な論をも吐いた。

然し彼の音樂を愛する心は、その俗樂をもなほ出來るだけは修身の具に用ゐようとした。彼は小學唱歌の伴奏に箏を用ゐる事を考へた。胡弓を用ゐる事も考へた。尺八さへもどうにかして用ゐられないかと考へた。彼が小學唱歌のために最後まで採用しなかつたものはたゞ三味線だけである。然し彼は今一歩の事で或は三味線をも採用したかもしれぬ。彼の豐富な感情と、獨創的な、そして大膽不敵な精神が、たゞ僅な障碍のために、阿古屋琴責めの樂器の全體を小學校で使ふ事に躊躇したといふのは、私は如何にも遺憾に堪えないものである。

私の國でも當時は小學校で箏も胡弓も使つてゐた事は、私は父の話に聞いてゐた。私の中學校の頃に、私はこの話にひどく興を催して、姉と共に小學唱歌集を箏と胡弓で彈いて見た事がある。そしてそれはひどく父の喝采を博した。

もし音樂の性質上それが可能であるならば、私共は阿古屋琴責めの樂器をみな小學校の唱歌の伴奏に用ゐるに少しも異存はない。日本人が日本の樂器を用ゐるのはあたり前の話である。もし三味線の聯想が惡いといふならば、小學校でそれを使ふ事によつて、その古い惡い聯想を一變させるがいゝ。樂器に罪はない筈である。

日本の音樂に對しては伊澤翁の考は少々混亂してゐる。すくなくもまだ再考の餘地はある。新しく渡來した外國の音樂に對して、まだ日本の音樂の位置が確定してゐなかつた。今日と雖も、それが確定したとはまだ言はれない。

最後に伊澤翁の功蹟として、必ず此處に逸してならぬものは音樂の研究である。彼は西洋音樂の構造を叙述するに止まらず、日本の音樂の性質をも研究した。彼の明治十七年の『音樂取調成績申報要略』には日本の近代の音樂の音階に就て可なり詳しい學問的な叙述をしてゐる。そして日本三千年間の音樂變遷の歴史をも書いてゐる。今日から見ても、この樣な研究に或る程度の學問上の正確さのある事は到底拒まれない。そこが恐らくこの書の最も價値のある部分であら

う。この樣な研究は最近まで日本にはあまり試みられた事はない。

四十年以前に、日本で日本の音樂が研究されたといふ事は、現今の狀態に比較して私には可なり珍らしい事の樣に思はれる。

日本の土地に始めて音樂學校を作り、音樂を日本の國民の生活の中に織り込まうとした人の仕事はまづこの樣なものであつた。伊澤翁は或る時機にこの仕事を後輩に托して、自らは吃音矯正或は支那語音の研究といふ樣な他の文化的な仕事の裡にその晩年を送つた。

殘された音樂學校は全く事務化した。文教を司る忙しい人々は日本での音樂の發達などいふ事は全くその念頭に置かなくなつた。音樂學校を監理するものは、たゞ文部省の上役に順從で、教師の俸給を公平に分配しさへすればそれでいゝ事になつた。伊澤翁は自分の能ふ限りは音樂を理解し、研究した。そしてともかくも自分の理想とする處を持つてゐた。今日の狀態はそれよりも確に劣つてゐる。音樂は何等音樂を理解しない人によつて、何の理想もなく、何の主張なく監理されてゐる。盲人が舞踊を監督し、聾啞者が議會の議長となるのと何の撰ぶ處はない。もし音樂を愛する社會の强い要求がなかつたならば、音樂學校の監理者はその樂隊に常に最も手輕な活動寫眞館の音樂を演奏させて置いたであらう。この樣なものゝ將來に多くを期待するものがあるとするならば、それは明に期待する方が間違つてゐる。

伊澤翁の追想は、やゝもすれば、現代の若い人をも過去崇拜の陰欝な空氣に導かうとする。

○

過去は私共を裏切らぬ。過去の追想は極めて平和である。然しそれからは何の滿足も得られない。

私共は遂に現代を離れる事は出來ない。すべてのものはこの現在の私共を基礎にして考へるからこそ意味がある。今私はこの獨逸製のピアノに倚つて考へるからこそ昔の姉の三味線もなつかしい。父と能見物の山路八里の駕籠の旅もなつかしい。日清戰爭の軍歌を思ひ出して見る氣にもなる。平和に過去を追想する事の出來るのはそれに比べて現在の有樣が優れてゐるからである、私はその樣な氣もちで常に父や姉の思ひ出を樂しんでゐる。父や姉の追想は決して私の今の心を痛ましめない。

伊澤翁の傳記とその著作を、恐らく私はやはりこの樣な氣もちで讀んだのであらう。ともかくも日本の土地でベートーヴェンの『第九ジムフオニー』を聞いたからこそ、私は樂しんで過去の人々の事蹟を探索する事が出來るのであらう。實際に音樂學校の管絃樂團がたゞ安逸をむさぼるために、ヨハン・シュトラウスの小さい舞踏曲ばかりを繰返へしてゐたならば、伊澤翁の『アポロの讃歌』の演奏は、私には殆ど痛心に堪えない追想であつたであらう。この小隨筆で述べた樣に、平和に、安樂に述べる事は到底、私には出來なかつたであらう。

私に安んじて過去を思ひ、過去を語らせたものは、それよりもなほ好ましい現在の有樣である。追想は要するに希望の半面である。私はも少し過去を探索して見たい。誰がこの四十年間に、ともかくも、あの上野公園の音樂學校で、世界最美のジムフオニーの一ツが聞かれる樣にしたかを順次に探索して見たい。それは私には決して辛い、苦しい事でない。追想は要するに希望である。

う。この樣な研究は最近まで日本にはあまり試みられた事はない。

四十年以前に、日本で日本の音樂が研究されたといふ事は、現今の狀態に比較して私には可なり珍らしい事の樣に思はれる。

日本の土地に始めて音樂學校を作り、音樂を日本の國民の生活の中に織り込まうとした人の仕事はまづこの樣なものであつた。伊澤翁は或る時機にこの仕事を後輩に托して、自らは吃音矯正或は支那語音の研究といふ樣な他の文化的な仕事の裡にその晩年を送つた。

殘された音樂學校は全く事務化した。文教を司る忙しい人々は日本での音樂の發達などいふ事は全くその念頭に置かなくなつた。音樂學校を監理するものは、たゞ文部省の上役に順從で、教師の俸給を公平に分配しさへすればそれでいゝ事になつた。伊澤翁は自分の能ふ限りは音樂を理解し、研究した。そしてともかくも自分の理想とする處を持つてゐた。今日の狀態はそれよりも確に劣つてゐる。音樂は何等音樂を理解しない人によつて、何の理想もなく、何の主張なく監理されてゐる。盲人が舞蹈を監督し、聾啞者が議會の議長となるのと何の撰ぶ處はない。もし音樂を愛する社會の强い要求がなかつたならば、音樂學校の監理者はその樂隊に常に最も手輕な活動寫眞館の音樂を演奏させて置いたであらう。この樣なものゝ將來に多くを期待するものがあるとするならば、それは明に期待する方が間違つてゐる。

伊澤翁の追想は、やゝもすれば、現代の若い人をも過去崇拜の陰鬱な空氣に導かうとする。

○

過去は私共を裏切らぬ。過去の追想は極めて平和である。然しそれからは何の滿足も得られない。

私共は遂に現代を離れる事は出來ない。すべてのものはこの現在の私共を基礎にして考へるからこそ意味がある。今私はこの獨逸製のピアノに倚つて考へるからこそ昔の姉の三味線もなつかしい。父と能見物の山路八里の駕籠の旅もなつかしい。日清戰爭の軍歌を思ひ出して見る氣にもなる。平和に過去を追想する事の出來るのはそれに比べて現在の有樣が優れてゐるからである、私はその樣な氣もちで常に父や姉の思ひ出を樂しんでゐる。父や姉の追想は決して私の今の心を痛ましめない。

伊澤翁の傳記とその著作を、恐らく私はやはりその樣な氣もちで讀んだのであらう。ともかくも日本の土地でベートーヴエンの『第九ジムフオニー』を聞いたからこそ、私は樂しんで過去の人々の事蹟を探索する事が出來るのであらう。實際に音樂學校の管絃樂團がたゞ安逸をむさぼるために、ヨハン・シユトラウスの小さい舞踏曲ばかりを繰返へしてゐたならば、伊澤翁の『アポロの讃歌』の演奏は、私には殆ど痛心に堪えない追想であつたであらう。この小隨筆で述べた樣に、平和に、安樂に述べる事は到底、私には出來なかつたであらう。

私に安んじて過去を思ひ、過去を語らせたものは、それよりもなほ好ましい現在の有樣である。追想は要するに希望の半面である。私はも少し過去を探索して見たい。誰がこの四十年間に、ともかくも、あの上野公園の音樂學校で、世界最美のジムフオニーの一ツが聞かれる樣にしたかを順次に探索して見たい。それは私には決して辛い、苦しい事でない。追想は要するに希望である。

う。この樣な研究は最近まで日本にはあまり試みられた事はない。

四十年以前に、日本で日本の音樂が研究されたといふ事は、現今の狀態に比較して私には可なり珍らしい事の樣に思はれる。

日本の土地に始めて音樂學校を作り、音樂を日本の國民の生活の中に織り込まうとした人の仕事はまづこの樣なものであつた。伊澤翁は或る時機にこの仕事を後輩に托して、自らは吃音矯正或は支那語音の研究といふ樣な他の文化的な仕事の裡にその晩年を送つた。

殘された音樂學校は全く事務化した。文教を司る忙しい人々は日本での音樂の發達などいふ事は全くその念頭に置かなくなつた。音樂學校を監理するものは、たゞ文部省の上役に順從で、教師の俸給を公平に分配しさへすればそれでいゝ事になつた。伊澤翁は自分の能ふ限りは音樂を理解し、研究した。そしてともかくも自分の理想とする處を持つてゐた。今日の狀態はそれよりも確に劣つてゐる。音樂は何等音樂を理解しない人によつて、何の理想もなく、何の主張なく監理されてゐる。盲人が聾啞を監督し、聾啞者が議會の議長となるのと何の撰ぶ處はない。もし音樂を愛する社會の强い要求がなかつたならば、音樂學校の監理者はその樂隊に常に最も手輕な活動寫眞館の音樂を演奏させて置いたであらう。この樣なものゝ將來に多くを期待するものがあるとするならば、それは明に期待する方が間違つてゐる。

伊澤翁の追想は、やゝもすれば、現代の若い人をも過去崇拜の陰欝な空氣に導かうとする。

○

過去は私共を裏切らぬ。過去の追想は極めて平和である。然しそれからは何の満足も得られない。

私共は遂に現代を離れる事は出來ない。すべてのものはこの現在の私共を基礎にして考へるからこそ意味がある。今私はこの獨逸製のピアノに倚つて考へるからこそ昔の姉の三味線もなつかしい。父と能見物の山路八里の駕籠の旅もなつかしい。日清戰爭の軍歌を思ひ出して見る氣にもなる。平和に過去を追想する事の出來るのはそれに比べて現在の有樣が優れてゐるからである、私はその樣な氣もちで常に父や姉の思ひ出を樂しんでゐる。父や姉の追想は決して私の今の心を痛ましめない。

伊澤翁の傳記とその著作を、恐らく私はやはりこの樣な氣もちで讀んだのであらう。ともかくも日本の土地でベートーヴエンの『第九ジムフオニー』を聞いたからこそ、私は樂しんで過去の人々の事蹟を探索する事が出來るのであらう。實際に音樂學校の管絃樂團がたゞ安逸をむさぼるために、ヨハン・シユトラウスの小さい舞踏曲ばかりを繰返へしてゐたならば、伊澤翁の『アポロの讃歌』の演奏は、私には殆ど痛心に堪えない追想であつたであらう。この小隨筆で述べた樣に、平和に、安樂に述べる事は到底、私には出來なかつたであらう。

私に安んじて過去を思ひ、過去を語らせたものは、それよりもなほ好ましい現在の有樣である。追想は要するに希望の半面である。私はも少し過去を探索して見たい。誰がこの四十年間に、ともかくも、あの上野公園の音樂學校で、世界最美のジムフオニーの一ツが開かれる樣にしたかを順次に探索して見たい。それは私には決して辛い、苦しい事でない。追想は要するに希望である。

う。この樣な研究は最近まで日本にはあまり試みられた事はない。

四十年以前に、日本で日本の音樂が研究されたといふ事は、現今の狀態に比較して私には可なり珍らしい事の樣に思はれる。

日本の土地に始めて音樂學校を作り、音樂を日本の國民の生活の中に織り込まうとした人の仕事はまづこの樣なものであつた。伊澤翁は或る時機にこの仕事を後輩に托して、自らは吃音矯正或は支那語音の研究といふ樣な他の文化的な仕事の裡にその晩年を送つた。

殘された音樂學校は全く事務化した。文教を司る忙しい人々は日本での音樂の發達などいふ事は全くその念頭に置かなくなつた。音樂學校を監理するものは、たゞ文部省の上役に順從で、教師の俸給を公平に分配しさへすればそれでいゝ事になつた。伊澤翁は自分の能ふ限りは音樂を理解し、研究した。そしてともかくも自分の理想とする處を持つてゐた。今日の狀態はそれよりも確に劣つてゐる。音樂は何等音樂を理解しない人によつて、何の理想もなく、何の主張なく監理されてゐる。盲人が舞踊を監督し、聾啞者が議會の議長となるのと何の撰ぶ處はない。もし音樂を愛する社會の强い要求がなかつたならば、音樂學校の監理者はその樂隊に常に最も手輕な活動寫眞館の音樂を演奏させて置いたであらう。この樣なものゝ將來に多くを期待するものがあるとするならば、それは明に期待する方が間違つてゐる。

伊澤翁の追想は、やゝもすれば、現代の若い人をも過去崇拜の陰鬱な空氣に導かうとする。

○

過去は私共を裏切らぬ。過去の追想は極めて平和である。然しこれからは何の滿足も得られない。

私共は遂に現代を離れる事は出來ない。すべてのものはこの現在の私共を基礎にして考へるからこそ意味がある。今私はこの獨逸製のピアノに倚つて考へるからこそ昔の姉の三味線もなつかしい。父と能見物の山路八里の駕籠の旅もなつかしい。日清戰爭の軍歌を思ひ出して見る氣にもなる。平和に過去を追想する事の出來るのはそれに比べて現在の有樣が優れてゐるからである、私はその樣な氣もちで常に父や姉の思ひ出を樂しんでゐる。父や姉の追想は決して私の今の心を痛ましめない。

伊澤翁の傳記とその著作を、恐らく私はやはりその樣な氣もちで讀んだのであらう。ともかくも日本の土地でベートーヴエンの『第九ジムフオニー』を聞いたからこそ、私は樂しんで過去の人々の事蹟を探索する事が出來るのであらう。實際に音樂學校の管絃樂團がたゞ安逸をむさぼるために、ヨハン・シユトラウスの小さい舞踏曲ばかりを繰返へしてゐたならば、伊澤翁の『アポロの讃歌』の演奏は、私には殆ど痛心に堪えない追想であつたであらう。この小隨筆で述べた樣に、平和に、安樂に述べる事は到底、私には出來なかつたであらう。

私に安んじて過去を思ひ、過去を語らせたものは、それよりもなほ好ましい現在の有樣である。追想は要するに希望の半面である。私はも少し過去を探索して見たい。誰がこの四十年間に、ともかくも、あの上野公園の音樂學校で、世界最美のジムフオニーの一ツが開かれる樣にしたかを順次に探索して見たい。それは私には決して辛い、苦しい事でない。追想は要するに希望である。

正宗白鳥著

歡迎されぬ男

四六判二六〇頁
定價壹圓五十錢
送料二十錢

新刊

本書は白鳥氏の近業を蒐めたものである。曩きに戯曲『人生の幸福』を發表して、或は天才の名に依つて讃仰され、或はストリンドベリィに比肩されたる氏は、此の集に於て、實に瞭に氏の藝術の最高最深の境地を展開して見せた。病的心理の取扱ひ方、深い冷い人生の觀方、全篇に漂ふ無氣味な妖氣——それらは常識人の正視するを得ざる力强さと明晰さを以て描き出され、常闇の如き威壓を讀者の頭上に投げ掛けてゐる。氏に於て藝術は明に人生の道草ではないのだ。

（內容）歡迎されぬ男、光秀と紹巴、わしが死んでも、さま〴〵な不安、溺死者の靴

正宗白鳥著　戯曲集　**安土の春**（五版）
定價壹圓參拾錢　送料十七錢

正宗白鳥著　戯曲集　**或る心の影**（五版）
定價壹圓六拾錢　送料十八錢

發行所　東京市芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二番

最新刊

みつけもの

シャルル・ヴィルドラック著
鈴木斐子譯
（有島生馬装幀）

定價壹圓八十錢
郵送料十七錢

『彼は新しい感じ方で世界を感じてゐる』と晩年のヴェルハアレンをしていたく感嘆せしめた我がシャルル・ヴィルドラックは、まことにその評語の如く、どんな題材を捕へても、緻密で、緊張し切つた、併し優しい心を以て事物を觀、且つ感動してゐる。短か過ぎる位短い句の中にも、活々とした意味と幻とが一抔に盛られてゐる。それは全く氏獨特の新しさである。而して此の『みつけもの』一卷は、十六篇の小品を蒐めた氏唯一の散文集で、いろ〳〵の物ごとの中から人生の眞實を發見して之を集めたが故に斯く名付けられた。譯文は流麗明澄。氏の在朝中に此の書を上梓し得たるは我社の欣びとする所である。

發行所
東京市芝區愛宕下町
振替東京八四〇二一番
改造社

故アルフレッド・マーシアル著　大塚金之助譯

經濟學原理

（全四册）　菊判上製　定價各册參圓五拾錢　送料廿六錢

マーシャル經濟學の全體的理論體系は、建設的進化的であつて、實に近代經濟學の精華である。深き理論的思索に沈潜しながら、數學的分拆に陷らず、富膽なる史的考察を試みながら、統計的羅列に終らない。美しい調和と完き綜合とは、韻律を奏でながらマーシャルに盛られてある。昨年飜譯「分册三」と「分册四」の上梓を見、今茲にまた「分册一」を出版して、更に「分册二」の出版近きに在るを告ぐ。

分册一　本日　發賣

分册三　第五編　需要・供給・價値の一般關係
分册四　第六編　國民所得の分配
分册一　第一篇　序論　第二篇　基本概念　第三篇　慾望と滿足

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二二番　改造社

東北大學教授 村岡典嗣著

切支丹文學抄

定價參圓 送料十八錢

新刊

今より凡そ三百年以前、當時東海に屹立して絕えて外國文化の惠澤に浴する機會を得ざりし我が民人が、西歐文明の象徵たる切支丹宗に接して、如何に直截に如何に素朴に、驚異と崇敬の念を捧げたか。それは單たる興趣なるのみならず、實に現代文明の淵源を探究する上に必要の事である。而かも當時の文獻は今既に悉く散佚して、之を求むるに由もない。著者は之を聚集するに於て非常なる苦辛を拂ひ、或る篇の如きは倫敦博物館に珍藏せる世界に唯一冊しかないといふ文獻より筆寫されてある。題して『抄』と謂ふが、切支丹文學も斯くまで廣汎に集大成せられたものは他に一冊もなきのみならず、後日何人に依るとも之れ以上の集成は至難と云ひ得る。實に完成せられたる切支丹文學の精華にして最も系統的なる文獻である。

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社

賀川豐彥著 （新刊）

雲水遍路

定價参圓
送料貳拾六錢

感激の旅！ナザレの國へ！失明を賭しての世界行脚土産！

彼は順禮者の如く經札を胸にかけ新しきエルサレムへの旅へ！世界は彼の新しき四國八十八ケ所である。「また會ふ日まで……。」の聲を後へ……彼が横濱を發つてから布、米、英、佛、獨、丁、瑞、伊、埃、エルサレム等への感激の多い旅行記である。此一卷で尤も光彩を放つたのは彼にふさわしい聖地巡禮のあることだ。彼が永年憧憬したイエスの國の山河は如何なる感激を彼に投げた！へブロン、ガリラヤ、ナザレ、ユダヤの名が著者といかに深く長く因緣づけられていたか！本書を手にするものが喜びと、親みとをもて一氣に讀過するであろう好頁である。勿論各國の組合事業、勞働運動、農民運動、宗教運動の社會運動戰士との會見記に於て著者が燃犀の筆致、詩の如き情緒もて是に對し、祖國の社會運動を遙に望見して嗟嘆し、悲痛したる談片の我々に好き刺戟と、反省とを與へたことも一つの喜びである。

發行所 東京芝區愛宕下町 振替東京八四〇二 改造社

基督青年會館新築基金募集

四十年の歴史を有する

東京基督教青年會の復興會館計畫

——(明治十三年の創立)——

■震災で燒失した東京神田美士代町の基督教青年會館は今回復興立案が成り、工費百六十萬圓で八百余坪地階とも七階の會館が出來ることになつた。目下之れに要する資金中六十萬圓の募集運動中である。

■同青年會は明治十三年の創立で當時基教界のぱりぱり小崎弘道、植村正久、田村直道などが産み出した。其后米國からスウキフト、フイツシヤーなどが來、島田三郎、三好退藏、横井時雄、片岡健吉、江原素六、丹羽清次郎、山本邦之助の諸氏が中心となつて活動し今日に到つた。

■同青年會は各國に發達しゐるＹＭＣＡの一つで其土地青年の生活の基督教化を目的としてゐるものであるが又一面國家的、國際的な奉仕事業にも貢献してゐる。日露戰爭當時は滿州へ、歐洲大戰には佛國戰線、及サイベリアへ大規模な慰問事業を起した。又歐洲及支那の飢饉水害の救濟事業等にも相當な働きをしてゐる。

■燒失した舊館は市内唯一の公會堂とも云ふ可きものであつて所謂新しい思想文化の策源地たるの觀があり、市民には極めて親みの深いものであつた。

■復興さる可き會館は面目を全く一新し教育、宗教、體育、社交、其他青年を對照にした社會事業的施設及市民教化的施設が充分に考慮されてゐる。落成は明年の末であらう。

河合榮治郎著

在歐通信

（新刊）

定價貳圓　送料二十錢

本書で刻下の英國を見よ！

著者は太洋の彼岸から話しかけてゐる、だから本書は教壇上や、書齋裡で激しい陣痛後に生れた澁面作つた學的研究書ではなくて、總ての階級の學生にも、一般にも面白く讀める處に價値がある。楡の林に雛菊水仙匂ふ外國の大學、其處に集ひて四海同胞愛（ユニバーサルフラタニティー）に生く愉快な學生々活、教授や學者の風丰等を詩趣豐かに描き、亦社會運動、勞働運動、學界に於けるマルクスの位置等、全歐洲がパノラマ的に指導書參考書と共に紹介され、其間に多くの詩人文豪が點綴され、宗教が語られて學的研究以上に思想の糧となり感情の美味となる。

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

文學博士 高野辰之著

（新刊）

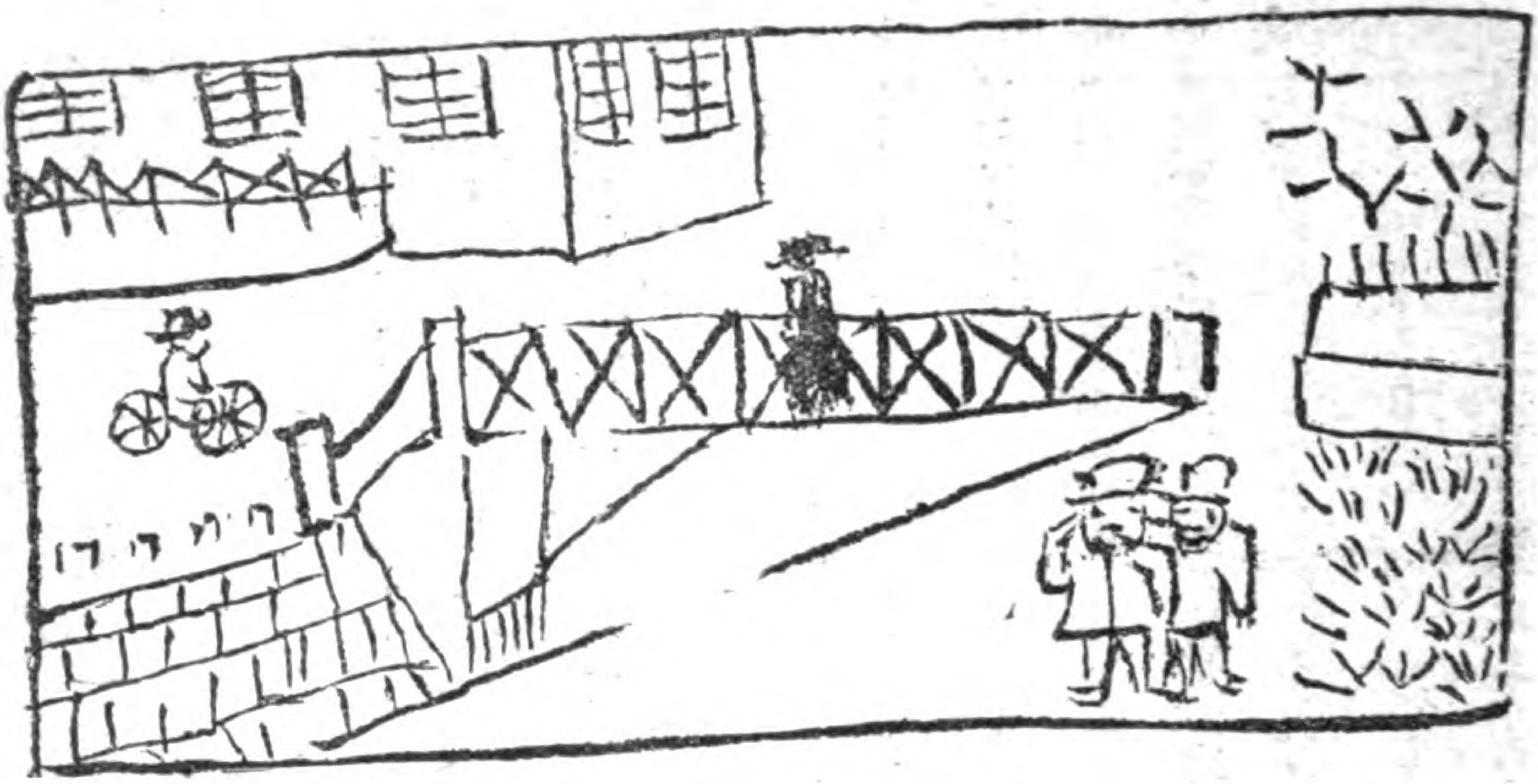
日本演劇研究

定價貳圓八拾錢
送料二拾三錢

最新刊

演劇と歌謠の蘊蓄に於て當代第一の稱ある博士が、日本の演劇に關する多年の研究を集大成されたもので、第一部演劇舞踊篇には、古代東洋劇、日本劇、木偶劇、近松劇、郷土舞踊他數篇を、第二部歌謠篇には、弱者の歌謠、民謠の背景、歳旦物、邦樂他數篇を收めて、それ〴〵博士ならではよく爲し得ざる業績を示されて居る、演劇研究の旺んなる折柄、日本演劇に關する斯くの如き權威ある著書を得たるは、我が文運のため慶賀に堪へない。大方の繙讀を待つ。

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二番　改造社



映畫脚本

ゼンマイの戯れ（五巻）

岸田國士

主なる人物

笠原平造　四十六才
妻たけ子　四十二才
長男政一　二十三才
娘富子　二十才
次男圭次　八才
北野頁作　四十五才
安田某　二十六才

此の「物語」は、特別の指定以外、どの部分を畫面で表はし、どの部分を字幕で、また、どの部分を「説明」で補はうとも、それは監督の自由である。ただ、各場面々々の印象を、映畫的に活かして貰へばいゝ。

文學博士 高野辰之著

(新刊)

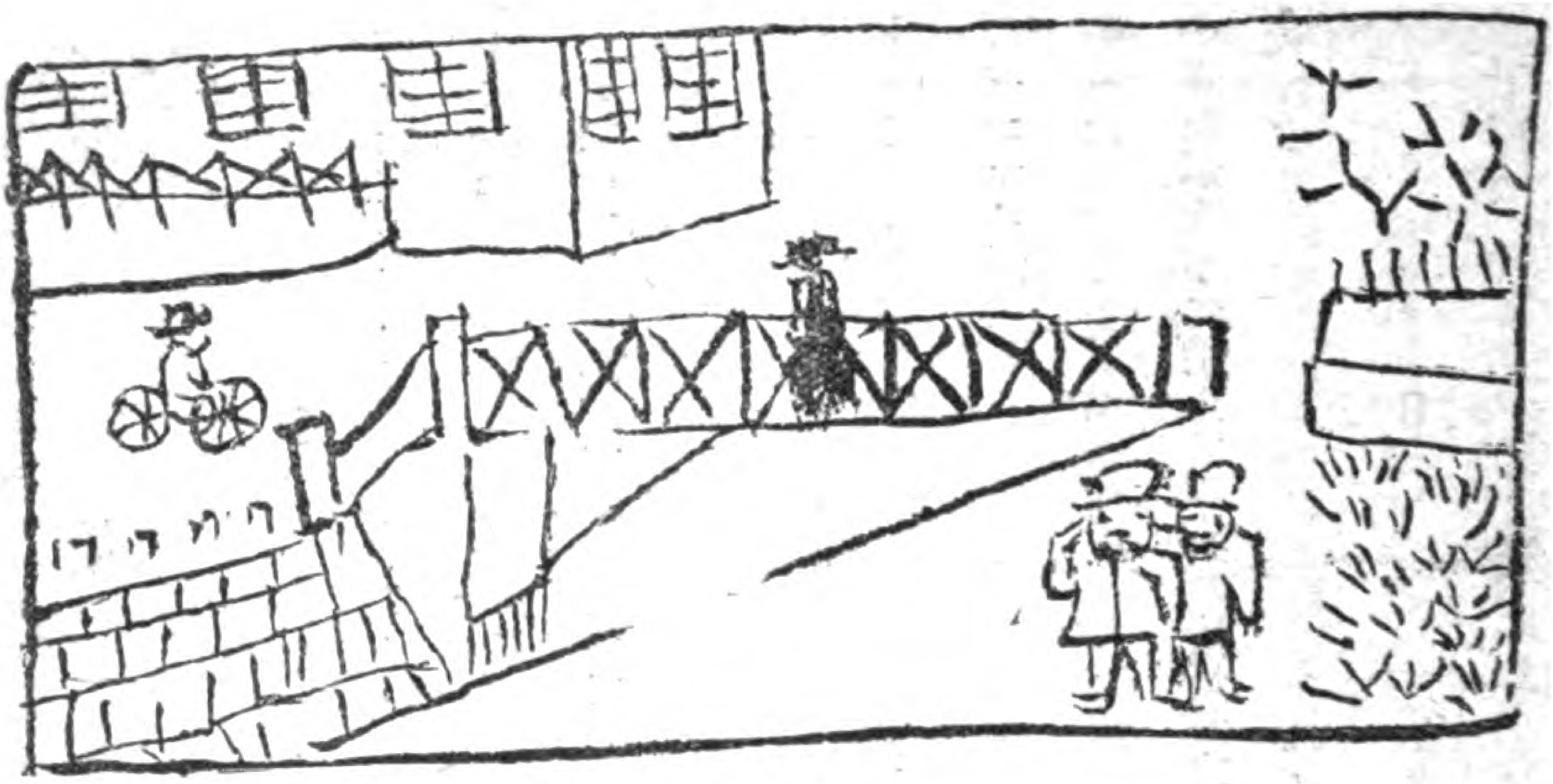
日本演劇研究

定價貳圓八拾錢
送料二十三錢

最新刊

演劇と歌謡の蘊蓄に於て當代第一の稱ある博士が、日本の演劇に關する多年の研究を集大成されたもので、第一部演劇舞踊篇には、古代東洋劇、日本劇、木偶劇、近松劇、鄕土舞踊他數篇を、第二部歌謡篇には、弱者の歌謡、民謡の背景、歳旦物、邦樂他數篇を收めて、それ〳〵博士ならではよく爲し得ざる業績を示されて居る、演劇研究の旺んなる折柄、日本演劇に關する斯くの如き權威ある著書を得たるは、我が文運のため慶賀に堪へない。大方の繙讀を待つ。

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社



映畫脚本

ゼンマイの戯れ（五卷）

岸田國士

主なる人物

笠原平造　四十六才
妻たけ子　四十二才
長男政一　二十三才
娘富子　二十才
次男圭次　八才
北野亘作　四十五才
安田某　二十六才

此の「物語」は、特別の指定以外、どの部分を畫面で表はし、どの部分を字幕で、また、どの部分を「説明」で補はうとも、それは監督の自由である。たゞ、各場面々々の印象を、映畫的に活かして貰へばいゝ。

第一巻

1

古ぼけた柱時計が大きく映る。針が十二時十五分を指してゐる。
振子を持つた男の右手が現はれる。時計を捲き始める。針を九時に直す。
振子を振つて見るが、すぐ止まつてしまふ。

2

時計の内部が映る。ゼンマイが外れる。
そのゼンマイが、畫一杯に大きく映る。そして、今度は、それが急速度で廻轉し始める。すると、その中心から、白い華車な女の右手が現はれる。人差指を出して、何かを指し示してゐる。
此の畫面が次第に消えて、次の情景が寫し出される。

3

笠原平造は、日當りのいゝ椽先にあぐらをかいて、一心に小刀を動かしてゐる。見ると、玩具の船が出來かけてゐる。
傍らに、圭次が、おとなしくそれを見てゐる。もう、帆をかけるばかりである。

妻のたけ子は庭の一隅で張物をしてゐる。

船が出來上つたので、平造は盥に水を入れて、それを浮かして見る。圭次がよく遊んでゐるのを見て、平造は鶏小屋に近づく。金網の破れたところを繕ふ。

富子は母に何かせがんでゐる様子である。

——お父さん、富子が、お友達のとこへ行きたいつて云ひますよ。

平造の慈愛と威厳とを無器用に交へた表情。

——今日はやめとけ。後でお客さんがあるから………。

富子の不服らしい顔附。

母親の富子をたしなめてゐる様子。

平造は、娘の氣を惹くやうに、

——安田が、また、トランプをしに來るつて云つとつた。

富子、相變らず不機嫌である。しかし、どうにもならないことを知ると、急に、何もなかつたやうな顔をして、奥に姿を消す。

平造は、鶏小屋を離れると、今度は、花壇の方に歩を運ぶ。草花の新芽がのびてゐる。それに、輕く指をふれながら、誰に云ふともなく、

——今年は芍薬がよく出た。

4

ある官廳の事務室。――六七人の男が事務を取つてゐる。平造は頻りに帳簿の整理をしてゐる。

上役らしい男が現はれる。平造の傍に來て、平造の差出す書類に眼を通す。大きくうなづく。ふと、卓子の上に立てかけてある、寫眞立のやうなものに眼をつけ、それを取り上げて見る。それは、カレンダアであるが、そのカレンダアを右に開くと、その裏が汽車の時間表になつてゐる。そして、左から疊み込んである別の紙に住所錄がついてゐる。それをまためくると、裏に、必要な電話番號が書き込んであり、中央の仕切りには、一枚の寫眞が張りつけてある。

――はゝあ、なるほど、これは便利なもんだね。君の考案かい。

平造一寸恐縮する。

――此の寫眞は、大連汽船にゐるつていふ息子さんだね。

――はあ

上役は、なほ、その組立てを檢めながら、

――しかし、なかなか器用だね。どうだい、一つ新案特許を取つちや……。立派な發明だよ、こりや、君……。ねえ、安田君。

安田君と呼ばれた隣席の男は、どつちともつかぬ笑ひ方をしてゐる。上役は、上機嫌で、

――暇があつたら、僕にもこれと同じやつを一つ、こしらへて呉れないか。

平造は、大に面目を施して、上役に一禮する。

隣席の青年は、更めて、そのカレンダアを取り上げる。

——さう云や、さうですね。新案特許なんてものは、すぐ取れるらしいですよ。

向ひ側の男が手を出す。隣席の男の手からカレンダアを受け取る。それをつくづく見ながら、

——笠原式……何んとつけたらいゝかね。

5

平造は、隣席の安田と共に役所の門を出て來る。

青年が頻りに話しかけるのを、上の空で聞いてゐる平造——彼は時々、自分の空想に向つて笑ひかけてゐるらしい。

平造の頭の中をかすめる幻影——

汽罐車——自動車——飛行機——電線——電話——ラヂオのアンテナ——電車——工場に於ける歯車の廻轉——化學實驗室——學者が試驗管を振つてゐる——圖書館の木棚——歐文の書籍——その頁が順々にめくれて行く。

6

平造は、何時の間にか一人になつてゐる。氣がつくと、自分が今、何處にゐるのかわからない。一つ時、きよろきよろ、あたりを見廻す。やつと、方角がわかつたらしく、急いで歩き出す。撒水夫が通る。平造は慌てゝ飛び退く。

7

——畜生！　あんなものは、なんでもない。水の壓力を利用しただけだ！

家の門口である。平造は元氣よく玄關の格子を開ける。

茶の間で服を着かへる。食事の用意が出來てゐる。食卓に着く。

たけ子の話

——お向うのお孃さんは、いよいよ十日に式なんですつて……。今日、奥さんが見えて、仕度を一度見てやつてくれつておつしやるんでせう。見て來たの。大したものよ、そりや……。總桐の簞笥が二棹……それに……。

平造は默つて此の話を聽いてゐる。聽いてゐるふりをしてゐるのかも知れない。その眼は、しかし、それとなく娘の上に注がれてゐる。

つつましく箸を運んでゐる娘の姿が、華やかな婚禮姿になつて眼の前に浮ぶ。そして、その傍に並んで座つてゐる新郎の姿、これはまた、役所の同僚、安田なのである。

すると、何時の間にか、平造の眼の前には、今日、上役がカレンダアを見て、發明の才があると褒めた、あの時の光景がありありと浮んで來る。

平造は、はつと、我に歸る。誇らしげに、一同を眺めまはす。

——おれが、今に、どんなえらいことをしでかすか、まあ、見とれ。

妻と娘とは、あつけに取られて、平造の顏を見る。

夕食後——

平造は、夕刊を讀んでゐる。

妻と娘は、針仕事をしてゐる。

圭次は、腹這ひになつて、繪を描いてゐる。

平造は、次の新聞記事に目をとめてゐる――

遠山半造氏の世界的發明

――飛行機垂直離陸の實驗成功――

▲航空史上の一大記錄▲

平造は、新聞を下に置いて、眼をつぶる。すると、次のやうな活字が表はれる――

笠原平造氏の世界的發明

平造は、思ひ出したやうに、起ち上つて、座敷へ行く。薄板、ボール紙などを取り出す。

スクリーン一杯にゼンマイ仕掛がうつる。そこへ白い華車な手が現はれて、ゼンマイのネヂを捲く。

第二巻

1

平造の考へ込んでゐる顔――

役所で。

町を歩きながら。

食事をしながら。

風呂の中で。

寝床の中で。

電車の停留所で。

2

平造は、いろいろな書物を讀みはじめる。

通俗科學講話

機械工學

3

印刷工場を見學してゐる平造。――彼は實に「感心屋」である。

4

自轉車屋の店先で、オートバイの說明を聽いてゐる平造。――彼は少し强情なところがある。そのくせ、臆病である。

5

憲兵曹長の知人から、ピストルの構造並に各部の機能について、講釋をして貰つてゐる平造。――彼は、あまり理解力の强い方ではない。それでゐて、早合點をする癖がある。

6

平造は夕食が終ると、すぐに座敷に引込んでしまふ。その後ろ姿を見送る一同の淋しい顏。

7

平造は、座敷で、何か圖面を引いてゐる。たけ子がはひつて來て話をしかけるが、返事をしない。しまひに、

――五月蠅い！　おれが何をしてゐるか、それがわからんか。

たけ子は諦めて部屋を出る。

8

茶の間である。電燈がついてゐる。時計が止つたまゝ九時を指してゐる。圭次が額に濡れ手拭を當てゝ寢てゐる。たけ子と富子とが、その枕元に不安らしい顏を並べてゐる。平造が襖を開ける。此の樣子を見て、一寸、驚く。

――どうしたんだ。

――少し熱があるらしいんです。

と、たけ子が答へる。

平造は、病人の顏をのぞき込む。

――どこが痛い？

病人は何か云つてゐるやうであるが、平造の耳にはいらない。

――富子、醫者を呼んで來い。

――お待ち、あたしが行くから……。

たけ子は、かう云つて起ち上る。

此の時、三人の眼は、云ひ合したやうに、止まつた時計の上に注がれる。

9

役所の卓子の前で考へ込んでゐる平造。

給仕が何か云つて來る。平造は慌てゝ書類を探す。探し出した書類を見ながら、別の紙に何か書きつける。急ぐので思ふやうに捗らない――さういふ焦立たしさが見える。

給仕がまた呼びに來る。平造、何度もうなづく。しばらくして、やうやく仕事の形がついたらしく、書類を持つて出て行く。

10

上役の部屋。――平造が恐縮しながらはいつて來る。上役の不機嫌さうな顔。

――君は近頃、どうかしてるね。

平造は、やゝ窮屈な笑ひ方をする。が、だんだん反抗的な態度を示して來る。

11

ある小さなカフエー。――平造と安田とが卓子に向ひ合つてゐる。

――新案特許は駄目でしたか。

――うん、あれや、どうだつてかまはんさ。處が、今度こそは大丈夫だ。

――何んです、今度のは？

——五月蠅い！　おれが何をしてゐるか、それがわからんか。

たけ子は諦めて部屋を出る。

8

茶の間である。電燈がついてゐる。時計が止つたまゝ九時を指してゐる。圭次が額に濡れ手拭を當てゝ寢てゐる。たけ子と富子とが、その枕元に不安らしい顏を並べてゐる。平造が襖を開ける。此の樣子を見て、一寸、驚く。

——どうしたんだ。

——少し熱があるらしいんです。

と、たけ子が答へる。

平造は、病人の顏をのぞき込む。

——どこが痛い？

病人は何か云つてゐるやうであるが、平造の耳にははいらない。

——富子、醫者を呼んで來い。

——お待ち、あたしが行くから……。

たけ子は、かう云つて起ち上る。

此の時、三人の眼は、云ひ合したやうに、止まつた時計の上に注がれる。

9

役所の卓子の前で考へ込んでゐる平造。

給仕が何か云つて來る。平造は慌てゝ書類を探す。探し出した書類を見ながら、別の紙に何か書きつける。急ぐので思ふやうに捗らない――さういふ焦立たしさが見える。

給仕がまた呼びに來る。平造、何度もうなづく。しばらくして、やうやく仕事の形がついたらしく、書類を持つて出て行く。

10

上役の部屋。――平造が恐縮しながらはいつて來る。上役の不機嫌さうな顔。

――君は近頃、どうかしてるね。

平造は、やゝ窮屈な笑ひ方をする。が、だんだん反抗的な態度を示して來る。

11

ある小さなカフェー。――平造と安田とが卓子に向ひ合つてゐる。

――新案特許は駄目でしたか。

――うん、あれや、どうだつてかまはんさ。處が、今度こそは大丈夫だ。

――何んです、今度のは？

――何んだと思ふね？

――さあ……？　鉛筆削りですか？

――馬鹿云つちやいかん。

これから、平造は、手眞似身振を交へて、新發明品の說明をする。

これは、つまり、箱車に取りつける日覆である。炎天に重い車を曳いて歩く小僧達の慘めさから說き起して、人道上から見ても、その考案の價値が如何に大であるかを述べる。

――ねえ、安田君、さう思はないかね、

――そいつは、たしかに、いゝですな。

――第一資本を手に入れる必要があるんだ……。

――何時か聞いた、あの人はどうです、辯護士で會社の社長をしてるつていふ人は……。幼友達だつていふぢやありませんか。資本ぐらゐ出してくれるでせう。

――いやだ。あいつの力は借りたくない。

――からだを動かすことなら、僕を使つて下さい。

――あゝ、君には、いろいろ相談するつもりだ。君は文章がうまいから廣告文を書いて貰ふかな。

――ビラ撒きだつてやりますよ。

――はゝゝゝ。

兩人は愉快さうに笑ふ。

12

圭次の病床。——

醫者が脈を看てゐる。そこへ平造が歸つて來る。

13

座敷。——平造と醫者とが對座してゐる。

——どうも、私では少し不安ですから、どなたか專門醫にお見せ下さいませんでせうか。

——餘程重態でせうか。

——可なり重態だと思ひます。どうですか、いつそ病院へお入れになつては……。

平造は默つて考へ込む。

14

茶の間。——

たけ子が獨り、圭次の枕元に坐つてゐる。

襖越しに醫者の云ふことを聽き取らうとしてゐる。

15

平造とたけ子とは、醫者を送り出して、座敷に歸つて來る。二人はなるべく口を利くまいとしてゐる。しかし、云ふだけのことは云はなければならない。

——北野に相談して見ようか。

——およしなさいね、それだけは………。

——ぢや、どうする。

——政二のところへ云つてやつて見ませうか。

——あいつにか………。

——でも、ほかの場合と違ひますからね………。

16

炎天下の路上を、寢台車が通る。その後から、平造が、扇子を使ひながら歩いて行く。時々、幌の間から中をのぞく。

平造は車を挽いてゐる男に聲をかける。

——此の車は、これで、いくらぐらゐかゝるね、造らせるとすると………。

17

平造が、座敷の机の前に坐り、兩手で頭を抱へてゐる。左の手に繃帶をしてゐる。突然、机の曳出から、一葉の證書を

取り出し、それを眺める。その證書は、「自轉車用笠原式日覆」の新案特許證書である。何か決心したらしい面持で起ち上る。服を着替へはじめる。

18

北野法律事務所といふ表札のかゝつた建物の前を、さつきから、行きつ戻りつしてゐる平造。

19

應接室。——平造が北野良作と對坐してゐる。彼は風呂敷包をほどいて、特許證書を取り出す。そして、それを良作の方に差出す。良作は、その證書と平造の顔とを見比べてゐる。平造の顔には、ありありと得意の色が浮ぶ。

——實は、このことについて、御相談に上つたのですが……。

良作の怪訝な顔。

——へえ、君にかういふ才のあることは、ちつとも知りませんでしたね。さあ、しかし、わたしは、かう云ふ方面には丸で素人だが……。

平造は、こゝぞとばかり、

——なに、少し資本さへあれば、きつと成功するだらうと思ふんです。

良作は苦笑しながら、

——わたしも、自分の關係してゐる仕事に、もつと資本が欲しいくらゐなので……。

平造は、默つて對手の顏を見てゐる。明かに失望の色が見える。

良作はそれを慰めるやうに、

——だが、心掛けては置きませう。事業家といふものは、どんなことに興味を持たないものとも限らない。機會があつたら、さういふ方面の人に話して見ませう。

平造は、頭を下げる。そして、逃げるやうに外に出る。

20

平造は人通りの多い町を歩いてゐる。ある四ツ辻で、老人が自動車に轢き倒される。人だかり。巡査。擔架。

平造はそこで、自動車に轢かれても怪我をしない護身裝置を考案しようと思つてゐる。それは網鐵製の鎧のやうなものか、或は魚を燒く金網のやうなものでなければならないと考へる。既に、さういふ護身裝置をつけた人間が、眼の前に浮ぶ。そして、その人間が實際自動車に轢かれながら、平氣で起き上つて歩いて行く有樣が眼に見えるのである。處が、さういふ奇妙な格好をした人間が、右往左往する大通りを想像して見ると、一寸、變な氣がする、こいつは、もう少し考へ直して見なければなるまい。

21

ゼンマイのネヂを捲いてゐる大きな白い手。

第三巻

1

港に碇泊してゐる汽船の舷梯。

三等運轉士笠原政一は、今、一通の長い手紙を讀み了つたところである。唇がかすかに顫える。

手紙の一端が顫る。

政一どの　母より

といふ字がはツきり讀める。

政一の顔はだんだん悲痛な色を帶びて來る。彼は今、眼の前に一つの情景を描き出してゐる。

其處には、圭次が寢てゐる。勿論、病人であることだけはわかる。その傍に、母が泣き伏してゐる。

次ぎに、父が頻りに小刀で木を削つてゐる。やがてその手をやめて、考へ込む。髮の毛を搔きむしる。癇癪を起して立上る。富子とたけ子が兩方からその手に取り縋る。それを拂ひ退けて、狂氣のやうに笑ふ。

政一は、溜息を吐く。手紙を靜かにしまふと、何か思ひ出したやうに、急いで其處を立去る。

2

政一の船室。──机の上に、家族一同の寫眞が飾つてあるのがすぐ眼につく。政一は、船室にはいると、いきなり、手紙を書きはじめる。

3

平造の役所の事務室。
平造の席だけが空いてゐる。隣席の安田は　向ひ側の同僚と笑ひながら話をしてゐる。
──笠原君には　近頃會ふかい。先生よりも、娘さんにやどうだい。
安田は案外眞面目である。
──えゝ。
──箱車の日傭は　やつぱり駄目かい。
──雇主に理解がないんで、どうにもならないつて云つてきました。しかし、今度考案したものが當れば大したものでせう。
──何だ　今度のは？
──當てゝ御覽なさい。
──鼠取りだらう。
──あ、どうして知つてるんです。
──それ位のこたア、わからあね。二三日前に新宿で奴さんに會つたんだよ。鼠取りなんか、今時、誰が買ふもんか。そ

れはさうと、急に役所をやめられちや、先生も、困るだらうな。
――結局、氣樂だつて云つてましたよ。
――あれで、なかなか、負惜みが强いから………。

4

病院。圭次の病室。
看護婦が忙しさうに出たり入つたりしてゐる。たけ子は圭次の顔をのぞき込んでゐる。醫者が來て注射をする。

5

平造の家。――小使風の男が玄關を開ける。
――佐竹病院から參りました。すぐ皆さん、病院へおいで下さい、坊ちやんの御容態が少しお惡いやうですから……。
富子が飛んで出て來る。すぐに奥にはいる。
富子は座敷と茶の間との間を行つたり來たりする。そして、おろおろ聲で、
――お父さんはどうしたらいゝだらう。

6

病院。

主次の枕元には　たけ子と看護婦と醫師とが附ききつてゐる。そこへ、富子が、息せき切つてはひつて來る。
――お父さんは、何處へいらしつたか、わからないの。
醫師は脈を取りながら、
――まだ大丈夫です。
一同は氣が氣でないといふ風に、絶えず戸口の方に眼をやる。富子だけが、眼にハンケチを當てゝゐる。

7

荒物屋の店先で、新案蠅取器を手に取つて仔細に見てゐる平造の姿。

8

夕方である。繁華な大通り。動物の玩具を賣つてゐる大道商人。莚席を敷いて、その上に、色々な動物が並べてある。殊に、兎、蛙、龜、蛇などが眼につく。可なりの人だかり。それは、たゞ、その玩具が珍しいばかりではない。何よりも、それを商ふ男の、人を喰つた口上が暇な散歩者の足を止めるらしい。
――如何です、本物よりよく出來てゐるでせう。それもその筈、こいつらには、人間の魂が吹き込んでありやす、へゝゝゝゝ。
男は、かう云ひながら、それらの動物を動かして見せる。
――これは兎です。はい、こちらが龜さん……。この通り、のそのそと這ひ出します。何が可笑しいんです。君だつ

て此の龜と大して違やしないよ。(笑ふ)こんどは蛙です。さあ、飛んだ。おや、人間が笑つてるぞ、玩具の人間が……
……。さ、これは何んです、お孃さん（と云つて、若い二人連れの女の鼻先へ、蛇の玩具をつきつける。おれッと大業に叫んで、女たちは顏をそむける）はゝゝゝ。なにも、怖いことはない。さういふ風に、あなた方の頭は單純に出來てる。ね、あなた方が嬉しいと思ふ事は、ほんとうにうれしい事ぢやない。悲しいと思ふことも、ほんとに悲しいことぢやない。あなたがたが、たゞ、さう思ふだけですよ。わかりましたか。わかつた人は、手を擧げて！、さあさあ、皆さん、ゼンマイ仕掛の頭で何を考へてゐるんです。早く買はないと日が暮れる。兎はこれで二十錢、龜と蛙が十五錢、蛇は特別で五十錢………。さあさあ、買つた買つた。

かう云ひながら、手早く、玩具のゼンマイを捲き直す。

それを、いろいろな氣持で見てゐるいくつもの顏。――あるものは無邪氣に感心し、あるものは、わざと馬鹿々々しいと云ふ薄笑ひを浮べながら、その實なかなか心を惹かれてゐる。また或る者は、人が見てゐるから見てゐると云ふ張合のない表情。その他、不健康な文明が生むさまざまな不健康な顏が、此の小さな生命の假感によつて、いろいろな程度に刺激され、興奮させられてゐる有様が、氣味惡るく、また、やゝ滑稽に現はされる。

そして、それらの顏の中に、いつの間にか、一つの新しい顏が加はる。それは平造の愚直そのものゝ如き顏である。その顏は、次第に他の顏の前に出て來る。つまり、他のものを押分けて、動く龜の方に近づいて來るのである。

――どうです、一つ、旦那、お土産に龜の子は如何です。

かう、云ひかけられて、平造は、一寸、きまり惡るげに顏を引込める。

此の頃から、買手が盛んに現れる。銀貨や白銅をつまんだ手が、あつちからもこつちからも出る。

——兎をくれ給へ。
——おい、亀の子。
——蛇を二匹くれ、二匹。
——蛇と蛙を交ぜてくんな。
みんなの笑ひ顔。
忽ち商人の膝の前には白銅と銀貨の山が築かれる。
平造は、もうそこに文字通り腰を据えてゐる。そして、手に取つてこそ見ないが、玩具の動く仕掛を、前後左右から見究めようと努めてゐる。それがためには、殆んど地べたに頬を擦りつけなければならない。彼は衆人環座の中にゐることを忘れてゐるやうである。彼が何氣なく顔を近づけた刹那、一匹の蛙がピョンとその鼻の頭に飛びついた。可笑しいのは、本人ではない。が、他のものは、そんなことには氣がつかない。たゞ此の熱心さには、誰もが興味を感じてゐる。勿論かういふ場合の常として、中には、此の憐むべき研究狂を鼻で嗤ふ氣障な紳士も交つてゐる。
平造は、とうとう我慢ができずに、蛙を一匹手に取り上げる。裏返して見る爲めである。その時、商人は、無意識か故意か、代金を受け取る手を、その方に差出す。すると、小供が何か悪戯をして、それを見つけられた時のやうに、惶てゝ、蛙を下に置く。左右を見返る。多くの眼が自分の方に注がれてゐる。彼は、此の時こそ、自分の滑稽な立場をはつきりと意識する。逃げる様にそこから立ち去る。

平造の右手。――掌の上に、銅貨が二枚。

10

病院。

圭次の傍に、たけ子と看護婦とが、靜かに話をしてゐる。たけ子は、額のあたりに、いくらかまだ暗い影を殘してゐるが、看護婦の方は、殆ど、今朝の緊張した光景を忘れさせるほどの明るい微笑を以て之に對してゐる。圭次は兩眼をはつきりと見開いて、何か物を云つてゐるらしい。たけ子が、匙で牛乳を飲ませる。

戸が開く。平造が悄然と、疲れ切つた姿を現す。たけ子の險しい眼付。平造は圭次の枕元に近づく。圭次の手を取る。

その間、一言も發しないたけ子は、遂にゐたゝまらないやうに座を立つ。よろけながら戸口に近づく。戸を開ける。

と同時に、袖を眼に押し當てる。姿が消える。

11

病院の長い廊下。――薄暗い電燈の光り。

たけ子、窓から外を見てゐる。努めて氣持を落付けやうとしてゐるらしい。何度も病室の戸口に眼をやる。廊下を往き來する看護婦、輕症患者、面會人など。

平造が出て來る。すぐにたけ子のそばに近づく、たけ子はその方を振り向かうとしない。

――ちつとも知らなかつたよ。

——あなたは、まだ、御自分のしてらつしやることがわからないんですか。
——わるいことはしてやしない。
——結果は同じことですわ。あたしは、もう決心をしました。
——どういふ決心………？
そこで平造は、たけ子の顔をのぞき込む。たけ子は、汚らはしいものを避けるやうに、顔をそむける。
——おれの仕事を、もう少し理解してくれなくちや困る。おれの才能を何處までも伸ばさせてはくれないのか。
——それよりも、あなたはあなただけの仕事をしてゐて下さい。その方がみんなのためですわ。
——おれに、どれだけのことが出來るか、お前に解るか。ね、さうだらう、もう少し見てゐてくれ。
——それが解る前に、あたしたちは世間から見放されてしまふでせう。
此の時、病室の戸があいて、看護婦が手招きをする。たけ子、急いで病室に入る。平造之に從ふ。但し、看護婦の様子は、決して、彼等に危險を豫感させる程度であつてはならない。

12

病室の內部。——圭次、父親に何か云ふ。平造大きくうなづく。
——ようし、あした來る時持つて來よう。
平造は、一瞬間、何か考へてゐる様子である。が、すぐに、圭次の傍を離れ、たけ子に向ひ、小聲で、
——もう少し辛棒してくれ。今度こそは物にして見せる。

13

病院の門を出る平造の、淋しい影のやうな姿。

14

動き止んだゼンマイ。——大きな白い手が現はれる。ネヂを捲き初める。

第四巻

1

平造の家。

先づ茶の間である。長火鉢も見えない。その代り、安物らしい瀬戸火鉢と、食器を並べたまゝのチヤブ臺が一隅に片付けられてある。

2

庭の花壇には雑草が生ひ茂つてゐる。庭の一隅に、日覆を取附けた箱車が、しよんぼり置去りにされてある。鷄小屋に

――あなたは、まだ、御自分のしてらつしやることがわからないんですか。

――わるいことはしてやしない。

――結果は同じことですわ。あたしは、もう決心をしました。

――どういふ決心………？

そこで平造は、たけ子の顔をのぞき込む。たけ子は、汚らはしいものを避けるやうに、顔をそむける。

――おれの仕事を、もう少し理解してくれなくちや困る。おれの才能を何處までも伸ばさせてはくれないのか。

――それよりも、あなたはあなただけの仕事をしてゐて下さい。その方がみんなのためですわ。

――おれに、どれだけのことが出來るか、お前に解るか。ね、さうだらう、もう少し見てゐてくれ。

――それが解る前に、あたしたちは世間から見放されてしまふでせう。

此の時、病室の戸があいて、看護婦が手招きをする。たけ子、急いで病室に入る。平造之に從ふ。但し、看護婦の様子は、決して、彼等に危險を豫感させる程度であつてはならない。

12

病室の内部。――圭次、父親に何か云ふ。平造大きくうなづく。

――ようし、あした來る時持つて來よう。

平造は、一瞬間、何か考へてゐる様子である。が、すぐに、圭次の傍を離れ、たけ子に向ひ、小聲で、

――もう少し辛棒してくれ。今度こそは物にして見せる。

13 病院の門を出る平造の、淋しい影のやうな姿。

14 動き止んだゼンマイ。――大きな白い手が現はれる。ネヂを捲き初める。

第四卷

1 平造の家。

先づ茶の間である。長火鉢も見えない。その代り、安物らしい瀬戸火鉢と、食器を並べたまゝのチャブ臺が一隅に片付けられてある。

2 庭の花壇には雜草が生ひ茂つてゐる。庭の一隅に、日覆を取附けた箱車が、しよんぼり置去りにされてある。雞小屋に

は鶏が一羽もゐない。富子が洗濯物を干してゐる。

3

平造は、座敷で、相變らず何か考へ込んでゐる。あたりには、ゼンマイ仕掛けの玩具が三ツ四ツ散らかつてゐる。時々、それ等の玩具を動かして見る。先づ、拳鬪の玩具である。その次は、ノンキナトオサンである。トオサンが歩くたんびに、自分も首を振る。最後に、輪を描いて飛ぶ飛行機である。これは最も平造の意に叶つたものであるらしい。彼は子供のやうに打ち興じる。

4

玩具屋の店先。
平造が切りに玩具をいぢつてゐる。

5

また別の玩具屋。——平造の顔が飾窓に映つてゐる。

6

最後に、ある玩具屋の店の奥。——玩具屋の主人は、あれこれと變つた玩具を平造に見せてゐる。入れ代り立ち代り新

しい客が來て、買物をしては出て行く。平造は　もう餘程長くゐるらしい。主人は、此の不思議な客を五月蠅く思ひ出す。もう相手にしなくなる。が、油斷なく一擧一動を監視してゐる。高い處に載せてある箱入の高價らしい玩具を、平造が一寸見せてくれと云つても、主人は、

——あれですか、あれやお手に合ひますまい。

と云つて取り合はない。

平造は、主人の不機嫌を見て取り、何か買はなければ惡いと思ふが、生憎、懐は淋しいし、手頃な欲しいものがない。止むを得ず、おしやぶりを一つ買ふ。そして店を出る。

7

公園である。子供達が大勢遊んでゐる。縄飛びをするもの、ブランコに乘るもの、スベリ臺を滑るもの、それから、獨樂を廻すもの、小さな自動車を運轉するもの。其の自動車が平造の眼にとまる。平造は、その側に近づいて行く。乘つてゐる子供には頓着なく、機械の點檢を始める。スケートに乘つた子供が來る。その子供からスケートを取り上げて、自分で乘つて見る。勿論、その構造を研究することを忘れない。スケートを取られた子供は、泣き出しさうな顔をして平造の後ろ姿を見送つてゐる。遊動圓木をやつてゐたその姉らしい少女が、弟のそばに來て、「どうしたの」と聞いてゐる。弟は、恨めしさうに、平造の方を指さして、何か訴へてゐる。「まあ、ひどい小父さんね」と言つてゐる少女の眼つき。

しばらくスケートは調子よく滑走を續けてゐたが、忽ち、車が廻らなくなる。平造は、前にのめる。急いで、修繕に取

りかゝる。子供がたかつて來る。平造は、汗だくだくで、大人の面目を立てようとあせつてゐる。

8

病院。

圭次の枕元で、たけ子が居眠りをしてゐる。——靜かな病室の朝の日ざし。

醫者が回診に來る。

——もう一と息です。今が一番大事な時ですよ。

——お蔭樣で命拾ひを致しました。

9

北野法律事務所の應接室。

良作と平造とが向ひ合つてゐる。

——どうです、一つわたしの會社で働いて見ませんか

——家内から、さういふことをお願ひしたのではありませんか。

——いゝえ、わたしの一存です。わたしは舊友として、君達を見殺しにすることは出來ない。さうかと云つて、君達の窮境を救ふといふ名で、君達を、つまらぬ恩義で縛るやうな結果になることは絶對に避けたいと思ふのです。なにしろ、かう云つてはなんだが、君のやつてゐることは、どうも、わたしたちには見當がつかんよ。

――あゝ、さうですか……………。信用できないと云はれゝばそれまでゞす。

――笠原君……………。

平造は默つて立ち上る。明らかに憤懣の情を抑へてゐる。

良作は沈痛な面持で平造を見上げる。

10

公園。――薄暮。

運動場には、子供は一人もゐない。それは何となく空虚な感じである。平造は、默つてベンチに腰を下ろす。そこへ、同じく仕事にあぶれたらしい勞働者風の男が來かゝる。これも、ベンチに腰をおろす。全く別々な、しかし、同じく孤獨な二つの魂が、何時からか、そこに置き忘れられたやうに見える。風が立つ。落葉が舞ふ。長い沈默。

平造は、起ち上つて、歩き出すが、何を思つたか、また元の所に腰をおろす。

野良犬が一匹、尻を垂れて通る。

11

電車の中。――

平造は吊革にぶら下つて、人が讀んでゐる新聞の盜み讀みをしてゐる。その男が新聞をしまふ。手持沙汰な顔をする。

殊に眼のやり場に困る。その隣りに、子供を抱いた婦人が腰掛けてゐる――その子供の持つてゐる玩具に、ふと眼を

つける。その玩具は、猿の木登りの玩具である。母親は子供をあやしながら猿を上げたり下げたりしてゐる。平造は、子供の顔をのぞき込んで「ばア」をする。さういふ時の、多くの若い母親がする會釋。平造は悶々しくなつて、子供の玩具に手をかける。子供が泣き出す。母親は、見知らぬ男の無作法なお愛想に、やゝ反感を抱いたらしく、ぷいと席を立つ。すると、平造は、にやにや笑ひながら、その空席を占領する。

電車の中に並んでゐる無表情ないくつもの顔。

12

夜店。

ダンス人形を賣る男。――人形は、あらはな兩腕を細い腰に當てゝ、足拍子面白く、華やかなトーダンスを踊つてゐる。アセチリン瓦斯の光が、踊り子の冷たい、白い肩先を照してゐる。

平造の顔が、大きく笑ふ。

――何と、うまいものを考へ出す奴がゐることよ！　だが、おれは一體、何をどう工夫すればいゝのだ？

13

平造は富子の給仕で、形ばかりの夕食の膳に向つてゐる。

――あたし、今夜は、病院へ泊つて來ようかと思つたの。母さんは、あれから、幾晩も眠てないのよ。でも圭ちゃんが歸つて來るならうれしいわ。――あたしがついてるから、一度家へ歸つてお休みなさいつて云ふのに、母さんは、

どうしても圭ちゃんをほうつて歸るのはいやだつて云ふんですもの。

平造は、食事を終ると、仰向けにごろりと寢ころがる。富子が枕を持つて來る。そして食事の後片附けをする。

14

平造の頭の中では、今、いろいろな玩具が次ぎ次ぎに、現はれては消え、現はれては消えするのである。殊に、ダンス人形は、平造の貧しい空想を嘲りながら、幾度も、その魅力ある活潑な運動を繰返す。

其處へ、ノンキナトウサンがノコノコ歩いて來る。

すると、ダンス人形が、いつの間にか、娘富子そつくりに見えて來る。こつちを向いて笑つてゐる。ノンキナトウサンの顏は、何時の間にか、平造の顏に變る。

そこへ、今度は同じやうな踊り子が、もう一人出て來る。二人は手をつないで廻り始める。ぐるぐる絶え間なく廻る。

それが大きな獨樂に見える。

と、今度は、踊り子が、一人一人爪先で廻り出す。それは、見てゐると、二つの獨樂が並んで廻つてゐるやうである。

それが、また、一つの獨樂になる。その獨樂が踊り子になる。その踊り子が娘の富子になる。

ノンキナトウサンは、いきなり踊り子の手を取らうとする。

踊り子は驚いて、その手を振り放す。逃げる。追ふ。

踊り子は、ある波止場に追ひつめられる。が、ノンキナトウサンはもう足が動かなくなる。その時は平造である。兩手

を差出して、娘の名を呼ぶ。

踊り子は岸に浮んでゐるボートの中に飛び込む。ボートの上には、白い服を着た青年が乘つてゐる。ボートが岸を離れる。青年と踊り子とは顔を見合はして驚く。青年は政一である。二人は抱き合つて悦ぶ。

平造は、がばと跳ね起きる。眠つてゐたらしい。が、その眼は、何か見失つたものを探してゐるやうである。

富子は氣味惡るさうに父の視線を追ふ。はたと二人の視線が合ふ。平造は、しげしげと娘の顔を見守る。と、急に、平造の顔は輝いて來る。

――あれだ！

かう云つて、膝を打つ。富子は、何のことかわからないが、此の言葉の調子に惹き入れられて、我れ知らず大きく息を吸ひ込む。

――ようし、占めた！

平造は更にかう叫んで、富子の兩手を取る。

15

大きな白い手が、ゼンマイのネヂを捲き終つたところである。

第五卷

出帆しようとしてゐる汽船。盛に貨物を積み込んでゐる。監督の任に當つてゐる三等運轉士笠原政一――彼は、ボーイから、今、二三通の手紙を受け取つたところである。そのうちの一通を、手早く開封する。　1

次の文面が讀まれる。

――秋冷相催し候處、其許には相變らず頑健にて勤務の由安堵致し候。扨、前便の趣、其許の考、一應尤に候も、決して當軌を逸したる次第には無之、たとへ一度失敗するも再び起つ勇氣と自信とを失はず。一家のものには多少苦勞ありたらんも、そは成功の曉十分に償ひ得るものなり。母上よりは如何やうなる便りありたるやは知らざれども、そはみな取越苦勞乃至は針小棒大的報告に過ぎずと存ぜられ候。なるほど今日までは、世の發明家と云はるるものが、何れも遭遇する困難と障害とを小生も免かるる能はざりしが、いよいよ、此度は、三ケ月の苦心報いられて、成功疑ひなき新案物を發明いたすことに相成、近々特許出願の運びに御座候。目下秘密裡に見本製作中なれど、此の前の箱車用日覆などと違ひ、一般向なる上に、各家庭に備へて以て一家團欒の樂しみを增ずべく、行く行くは外國へ輸出さるるやうにでもなれば、販路は無盡藏ならんと存じ候。來春御歸省の砌りは、當方も多少面目を改めをるに相違無之候。なほ、圭次の病氣は、追々輕快に相向ひ二三日中には退院の予定に御座候。いろいろ御話し致したきこともあれど、目下研究に忙殺され居り候間、之れにて擱筆いたし候。時候不順の折柄御自愛專一に祈居候。家のことはくれぐれも心配御無用に候。

十月二十一日　　　　　　　　　　　　父

政一殿

政一は、手紙をちつと見つめてゐる。その時、起重機が廻り過ぎて、大きな箱が、政一の頭にぶつからうとする。

――危い!

と、誰かゞ叫ぶ。政一は、無意識に飛び退く。ちつと胸騒ぎを鎭めようとする。

母と妹の淋しく笑ふ顔が、その瞬間、政一の眼の前に浮ぶ。

白い服を着た支那の女が、手を叩いて笑つてゐる。

政一は苦笑する。

2

平造の家の茶の間。――夜である。圭次が寢床の上に坐つて、背中を、高くした掛蒲團にもたせかけてゐる。富子が本を讀んで聞かせてゐる。

長い間。

襖が開いて平造が首を出す。

――お母さんは?

富子は答へる。

――まだ。

平造は首をひつ込める。

長い間。

平造再び顔を出す。今度はすぐひつ込める。

3

暗い淋しい通り。角に交番がある。空車が一臺通る。間。やがて、風呂敷包みを抱えた女が通る。うつむいて歩く。が、一寸、後ろを振り返る。それはたけ子である。姿が消える。――長い間。

男が一人反對の方向から來る。それは平造である。二人は何處かで、擦れちがつてゐる――お互に氣がつかずに。

4

平造の家の茶の間。

たけ子は風呂敷包をほどいて、着物を出す。富子がそれを檢めてゐる。

――やつぱりお前にや地味だね。

そこへ、出し抜けに平造が歸つて來る。二人の方にちらと視線を投げ、默つて奥にはひる。

富子とたけ子とは、何といふことなしに顔を見合せる。たけ子は、あはてゝ、眼をそらす。そして、口の中で、

――少し地味だね。

5

政一は、手紙をぢつと見つめてゐる。その時、起重機が廻り過ぎて、大きな箱が、政一の頭にぶつからうとする。

——危い！

と、誰かゞ叫ぶ。政一は・無意識に飛び退く。ぢつと胸騒ぎを鎮めようとする。

母と妹の淋しく笑ふ顔が、その瞬間、政一の眼の前に浮ぶ。

白い服を着た支那の女が、手を叩いて笑つてゐる。

政一は苦笑する。

2

平造の家の茶の間。——夜である。圭次が寝床の上に坐つて、背中を、高くした掛蒲團にもたせかけてゐる。富子が本を讀んで聞かせてゐる。

長い間。

襖が開いて平造が首を出す。

——お母さんは？

富子は答へる。

——まだ。

平造は首をひつ込める。

長い間。

平造再び顔を出す。今度はすぐひつ込める。

3

暗い淋しい通り。角に交番がある。空車が一臺通る。間。やがて、風呂敷包みを抱えた女が通る。うつむいて歩く。が、一寸、後ろを振り返る。それはたけ子である。姿が消える。——長い間。

男が一人反對の方向から來る。それは平造である。二人は何處かで、擦れちがつてゐる——お互に氣がつかずに。

4

平造の家の茶の間。

たけ子は風呂敷包をほどいて、着物を出す。富子がそれを檢めてゐる。

——やつぱりお前にや地味だね。

そこへ、出し抜けに平造が歸つて來る。二人の方にちらと視線を投げ、默つて奥にはひる。

富子とたけ子とは、何といふことなしに顔を見合せる。たけ子は、あはてゝ、眼をそらす。そして、口の中で、

——少し地味だね。

5

小さな木の獨樂が二つ、皿の上で廻つてゐる。かち合つては離れ、またかち合つては離れする。一方は、急に勢がなくなつて、ぐらぐらしはじめる。それを、別のが小づく。ばつたり倒れる。

そこへ人間の手が出て、兩方の獨樂を廻し直す。

今度はその人間の全身が現はれる。云ふまでもなく笠原平造である。彼は、滿足げにこの獨樂を眺めてゐる。それは丁度、相撲狂が勝負を夢中で見てゐる時と同じ樣子である。と云ふよりも寧ろ、行司に近い格好である。

——はつけよい、のこツた。

勝負が終る毎に、その勝負相應の笑ひ方で、盛んに景氣をつけてゐる。

6

茶の間では富子とたけ子とが、時々、あきれて、顔を見合はせる。こちらの空氣は、その度毎に、憂鬱さを増して行くやうである。たけ子は、しまひに、たまり兼ねて、眉を深く寄せ、兩手で耳を塞ぐ。

7

富子は心配さうに、たけ子の耳元に何事か囁く。そして、襖の隙間から座敷の中をそつと覗く。しかし、平造が、一體、何をしてゐるのかわからない。母の方を顧みて、それと、首を振つて見せる。

8

平造が、朝早く、包みを抱えて家を出る。いつになく晴れやかな、のんびりした樣子である。

茶の間では、たけ子が火鉢に火を起してゐる。富子がはひつて來る。長い間。

――お前はすぐにお父さんの肩を持つけれど、お父さんは、あたしたちのことを、ちつとも考へてやしないんだよ。

――そんなことはないわ。今だつて、出がけに、かう仰しやつたわ、いよいよ、お前たちに樂がさせられるつて……。

――その「いよいよ」……を、何度聽かされたことやら……。それよりお前、あの返事を聞きに行かなくつてもいいのかい。

――えゝ行くわ。だけど、お父さんもお可哀さうよ。あゝして、一人で悦んだり、落膽したりしてらつしやるのを見ると、あたし、うそでもいゝから、信じてあげたくなるわ。でも、今度は大丈夫らしいわ。なんだか知らないけれど……

9

或る玩具屋。――主人が店を掃除してゐる。平造がはひつて來る。

――いつか話した玩具ね、やつと出來上つたんですがね、一つ、見てくれませんか。

平造は、包みをほどく。獨樂を取り出して、それを廻して見せる。

――誰れでも出來る遊びなんです。

――なるほどね。

――特許出願中ですが、むろん、おりると思ふんです……。

――面白いですな。

小さな木の獨樂が二つ、皿の上で廻つてゐる。かち合つては離れ、またかち合つては離れする。一方は、急に勢がなくなつて、ぐらぐらしはじめる。それを、別のが小づく。ばつたり倒れる。

そこへ人間の手が出て、兩方の獨樂を廻し直す。

今度はその人間の全身が現はれる。云ふまでもなく笹原平造である。彼は、滿足げにこの獨樂を眺めてゐる。それは丁度、相撲狂が勝負を夢中で見てゐる時と同じ様子である。と云ふよりも寧ろ、行司に近い格好である。

――はつけよい、のこツた。

勝負が終る毎に、その勝負相應の笑ひ方で、盛んに景氣をつけてゐる。

6

茶の間では富子とたけ子とが、時々、あきれて、顔を見合はせる。こちらの空氣は、その度毎に、憂欝さを増して行くやうである。たけ子は、しまひに、たまり兼ねて、眉を深く寄せ、兩手で耳を塞ぐ。

7

富子は心配さうに、たけ子の耳元に何事か囁く。そして、襖の隙間から座敷の中をそつと覗く。しかし、平造が、**一體、何をしてゐるのかわからない。母の方を顧みて、それと、首を振つて見せる。**

8

平造が、朝早く、包みを抱えて家を出る。いつになく晴れやかな、のんびりした様子である。

茶の間では、たけ子が火鉢に火を起してゐる。富子がはひつて來る。長い間。
――お前はすぐにお父さんの肩を持つけれど、お父さんは、あたしたちのことを、ちつとも考へてやしないんだよ。
――そんなことはないわ。今だつて、出がけに、かう仰しやつたわ、いよいよ、お前たちに樂がさせられるつて……。
――その「いよいよ」……を、何度聽かされたことやら……。それよりお前、あの返事を聞きに行かなくつてもいいのかい。
――えゝ、行くわ。だけど、お父さんもお可哀さうよ。あゝして、一人で悦んだり、落膽したりしてらつしやるのを見ると、あたし、うそでもいゝから、信じてあげたくなるわ。でも、今度は大丈夫らしいわ。なんだか知らないけれど……

9

或る玩具屋。――主人が店を掃除してゐる。平造がはひつて來る。
――いつか話した玩具ね、やつと出來上つたんですがね、一つ、見てくれませんか。
平造は、包みをほどく。獨樂を取り出して、それを廻して見せる。
――誰れでも出來る遊びなんです。
――なるほどね。
――特許出願中ですが、むろん、おりると思ふんです……。
――面白いですな。

――面白いでせう。

――しかし、よつぽど廣告をしないと賣れませんな。

――それやもう、廣告はするつもりです。

――どうです、玩具を作る會社へ相談なすつて見たら………。

――はゝあ、さうですな。しかし、權利を手放したくないんです。

――それもそうですね。

――千や二千の端た金でね。

――それなら一つ、御自分で工場でもお建てになるんですな。

――それには、やはり、なんでしてね。

――さやう。

主人は、興味がなさゝうに、店の掃除を始める。平造は、所在なさゝうに、玩具をしまひかける。

――どうでせう、一つ、共同でやつて見る氣はありませんか。

――共同と云ひますと………。

――いや、資本を少し出して下されば、わたしが萬事仕事の方は引受けますから……。

――資本をね………。

主人は皮肉な微笑を浮べる。

10

別の玩具屋の店にはひつて行く平造の後ろ姿。

11

また別の玩具屋の店を、悄然と出て來る平造の姿。——相變らず包みを抱えてゐる。

12

北野法律事務所の入口。

平造がその前を往つたり來たりする。

13

平造の家である。

圭次が、寢床の上に座つてゐる。その傍らで安田が、退屈さうに新聞を讀んでゐる。圭次がその新聞をひつたくる。安田は、怒つた眞似をして、それを奪ひ返す。圭次、面白がつて、またそれを取る。新聞が破れる。

——僕、立つて見ようか。

——駄目だよ、そんなことしちや……。

——もう、立てるよ、きつと……。

──駄目、駄目………。おつ母さんに云ひつけるよ。

そこへ、たけ子が現はれる。

──どうもお世話様………。宮はどうしました。

──知りません。どつかへ出て行きましたよ。僕が來ると、どつかへ出て行くんだから………。

──まさか………。

安田はさう云つたものゝ、相手の返事が、ぴたりと來ないので、てれかくしに、

──遲いなあ、大將は………。

──どうせ、何時のことだかわかりませんよ。

14

北野法律事務所の應接室。

平造は、例の獨樂を機械的に廻しながら、努めて對手の顏を見まいとしてゐる。

北野良作は、極めて冷やかな態度で之に對してゐる。それは決して、第三者の反感を唆るやうなものではないが、ある場合には、石のやうに無感覺な印象を與へ得る人物であることがわかる。

──いや、これ以上、どう云ふ名義にしろ、物質上の御援助は出來ません。どうか惡しからず。では、今日は急ぎますから、これで………。

呼鈴を押す。給仕が現はれる。

——あ、此の方を御案内して………。それから、すぐに出掛けるから車の用意………。

平造は、しかたなしに獨樂をしまふ。

15

再び平造の家。安田が歸るところである。

——ぢや、今日の結果はあしたの朝聞きに來ます。どうかよろしく。

安田が歸ると、入れ變りに、富子が、何處からか姿を現はす。

——お前何處へ行つてたの。

返事をしない。

たけ子は馬鹿らしくつてたまらないといふやうな顏をして臺所に行く。

富子は、圭次の傍にすわる。

——もう一軒、頼んで來とかうかしら……。カフエーだつていゝぢやないの………。

返事がない。

——圭ちやん、もう横におなり。あんまりさうしてるとくたびれてよ。

——うゝん、もうさつき寢たんだよ。姉ちやん、こら………。

と云ひながら、圭次は、そつと、からだを起す。腰を据えてはゐるが、なるほど、立派に立ち上つた。半年ぶりで立ち上つた。富子は、此の意外な光景に、それを制することも忘れて、たゞ悦びに胸を躍らせる。弟の方に手を差し出

――駄目、駄目………。おつ母さんに云ひつけるよ。
そこへ、たけ子が現はれる。
――どうもお世話樣………。富はどうしました。
――知りません。どつかへ出て行きましたよ。僕が來ると、どつかへ出て行くんだから………。
――まさか………。
安田はさう云つたものゝ、相手の返事が、ぴたりと來ないので、てれかくしに、
――遲いなあ、大將は………。
――どうせ、何時のことだかわかりませんよ。

14

北野法律事務所の應接室。
平造は、例の獨樂を機械的に廻しながら、努めて對手の顏を見まいとしてゐる。
北野良作は、極めて冷やかな態度で之に對してゐる。それは決して、第三者の反感を唆るやうなものではないが、ある場合には、石のやうに無感覺な印象を與へ得る人物であることがわかる。
――いや、これ以上、どう云ふ名義にしろ、物質上の御援助は出來ません。どうか惡しからず。では、今日は急ぎますから、これで………。
呼鈴を押す。給仕が現はれる。

――あ、此の方を御案内して…………。それから、すぐに出掛けるから車の用意…………。

平造は、しかたなしに獨樂をしまふ。

15

再び平造の家。安田が歸るところである。

――ぢや、今日の結果はあしたの朝聞きに來ます。どうかよろしく。

安田が歸ると、入れ變りに、富子が、何處からか姿を現はす。

――お前何處へ行つてたの。

返事をしない。

たけ子は馬鹿らしくつてたまらないといふやうな顔をして臺所に行く。

富子は、圭次の傍にすわる。

――もう一軒、賴んで來とかうかしら……。カフエーだつていゝぢやないの…………。

返事がない。

――圭ちやん、もう横におなり。あんまりさうしてるとくたびれてよ。

――うゝん、もうさつき寢たんだよ。姉ちやん、こら…………。

と云ひながら、圭次は、そつと、からだを起す。腰を据えてはゐるが、なるほど、立派に立ち上つた。半年ぶりで立ち上つた。富子は、此の意外な光景に、それを制することも忘れて、たゞ悦びに胸を躍らせる。弟の方に手を差し出

し、轉んだらばと身構える。が、圭次は、轉ばない。自分でも、たしかに立てるとは思はなかつたらしい。うれしさに、思はず、大きな聲で、

——おつ母ちやん。

富子も、之れに和して、

——母さん、早く來て御覽なさい。圭ちやんが、立てるわよ。

此の聲に、母は、台所から姿を現はす。

——あら………

と云つて、そこに立ちすくむ。が、忽ち、がくりと膝を折る。

——圭坊………。

遠くから兩手を前に差出す。兩眼が涙で光る。

16

日東玩具製造會社といふ表札のかゝつた門。

平造が、がつかりした樣子で門を出て來る。自轉車が擦れすれに通る。風を喰つて、二三歩よろめく。帽子が落ちる。力がなささうにそれを拾ふ。しばらく、立ち止つて考へる。

平造の頭の中に、不圖浮ぶ幻影——それは先づ、白く續いた鐵道線路である。黑い底知れぬ流れである。嵐模樣の空にくつきりと太く、横に描かれた松の木の枝である。

17 平造は、ある玩具屋の飾窓をのぞいてゐる。その中に、「新案特許相撲獨樂」といふ札のついた箱入の玩具が陳列してある。

——一寸、そいつを見せて呉れないか。

玩具屋の主人が出て來て、奥から別の箱を出す。

——これは、何處で作つてゐるんですか。

——えゝと、裏に書いてありませう。

——これは何時頃から賣り出したんですか。

——さあ、最近は最近ですが……。

——他處では、あんまり賣つてませんね。

——左樣ですか。

——賣つてませんよ。實は、わたしも、これと同じ玩具を考へてゐたんです。こゝに、この通り持つてゐますがね。

かう云つて、平造は、包みを解く。主人は訝しげに平造のすることを見てゐる。

——ねえ、この通り。自分で作つたんですから、體裁は惡いが、それ、この通り、相撲を取る。はつけよい、のこつた、そら。こつちが勝つた。どうです。

——なるほど。

——こりや、たしかに、わたしの方が先に考へついたことなんですが、ひどい奴もあるものだ。なに、出るとこへ出れ

ばわかる。駄目かな。特許まで取つてあるんぢや……。それにしても、どうして、こいつを知つたかです……。

——さうですな。

18

平造は、我家の門口を、どうして潜らうかと、一瞬間、躊躇する。いや、そこまで來る間に、迷ひ拔いたことであらう。

19

大きな白い手が、一生懸命にゼンマイのネヂを捲いてゐる。

20

茶の間では、富子とたけ子とが夕食の膳ごしらへをしてゐる。二人は、默つて柱時計を見上げる。相變らず時計は止まつてゐる。

玄關の格子が開く。二人は同時に耳を欹てる。

玄關では、平造が、今迄見たこともないやうなはしやぎ方で、

——萬歲、萬歲！

を連呼してゐる。どうしたと云ふのだらう。女どもは、我を忘れて起ち上る。富子が走り出る。

平造は、茶の間の眞中に、どつかと腰を卸ろす。そして、如何にも重大な吉報を齎した人のやうに、徐ろに口を開く。

富子は、もう父の云はうとすることを察してゐるらしい。頻りに、うなづいて見せる。たけ子は、わざと冷靜を裝つてゐるが、内心、若しやといふ期待を失はずにゐたことを發露する。

平造は、徐ろに口を開く。

――さあ、いよいよ、おれも本望を遂した。

これは、そばにゐる富子に向つて云ふ如く裝つてゐるが、實はチャブ台の上を、必要以上に長く拭いてゐる妻のたけ子に、それとなく聞かせるつもりらしい。

――今度は大成功だ。

――なに、どんなもの？　ね、お父さん。

――まあ、待て。第一に、工場を建てる。職工は、始めは先づ五十人ぐらゐでよからう。

――なにを作るのよ、お父さん。

――今にわかる。何しろ、外國に輸出する約束をして來たんだ。一と月に四五百圓の利益はすぐに上るんだから大したものだらう。

かういふと、其處には、工場で職工が働いてゐる光景が映る。平造は、社長らしい威厳を作つて、その間を巡視してゐる。外では、荷をいくつも積んだ荷馬車が、次ぎ次ぎと出て行く。

するとまた、立派な自動車に、盛裝したたけ子と富子が乘り込んでゐる。その自動車は劇場の車寄に駐る。二人は、し

し、轉んだらばと身構へる。が、圭次は、轉ばない。自分でも、たしかに立てるとは思はなかつたらしい。うれしさに、思はず、大きな聲で、

――おつ母ちやん。

富子も、之れに和して、

――母さん、早く來て御覽なさい。圭ちやんが、立てるわよ。

此の聲に、母は、台所から姿を現はす。

――あら……

と云つて、そこに立ちすくむ。が、忽ち、がくりと膝を折る。

――圭坊……。

遠くから兩手を前に差出す。兩眼が涙で光る。

16

日東玩具製造會社といふ表札のかゝつた門。

平造が、がつかりした様子で門を出て來る。自轉車が擦れすれに通る。風を喰つて、二三歩よろめく。帽子が落ちる。力がなささうにそれを拾ふ。しばらく、立ち止つて考へる。

平造の頭の中に、不圖浮ぶ幻影――それは先づ、白く續いた鐵道線路である。黑い底知れぬ流れである。嵐模様の空にくつきりと太く、横に描かれた松の木の枝である。

平造は、ある玩具屋の飾窓をのぞいてゐる。その中に、「新案特許相撲獨樂」といふ札のついた箱入の玩具が陳列してある。

——一寸、そいつを見せて呉れないか。

玩具屋の主人が出て來て、奥から別の箱を出す。

——これは、何處で作つてゐるんですか。

——えゝと、裏に書いてありませう。

——これは何時頃から賣り出したんですか。

——さあ、最近は最近ですが……。

——他處では、あんまり賣つてませんね。

——左樣ですか。

——賣つてませんよ。實は、わたしも、これと同じ玩具を考へてゐたんです。こゝに、この通り持つてゐますがね。

かう云つて、平造は、包みを解く。主人は訝しげに平造のすることを見てゐる。

——ねえ、この通り。自分で作つたんですから、體裁は惡いが、それ、この通り、相撲を取る。はつけよい、のこつた、そら。こつちが勝つた。どうです。

——なるほど。

——こりや、たしかに、わたしの方が先に考へついたことなんですがね。ひどい奴もあるものだ。なに、出るとこへ出れ

ばわかる。駄目かな。特許まで取つてあるんぢや……。これにしても、どうして、こいつを知つたかです……。

――さうですな。

18

平造は、我家の門口を、どうして潜らうかと、一瞬間、躊躇する。いや、そこまで來る間に、迷ひ拔いたことであらう。

19

大きな白い手が、一生懸命にゼンマイのネヂを捲いてゐる。

20

茶の間では、富子とたけ子とが夕食の膳ごしらへをしてゐる。二人は、默つて柱時計を見上げる。相變らず時計は止まつてゐる。

玄關の格子が開く。二人は同時に耳を澄てる。

玄關では、平造が、今迄見たこともないやうなはしやぎ方で、

――萬歳、萬歳！

を連呼してゐる。どうしたと云ふのだらう。女どもは、我を忘れて起ち上る。富子が走り出る。

平造は、茶の間の眞中に、どつかと腰を卸ろす。そして、如何にも重大な吉報を齎した人のやうに、徐ろに口を開く。

富子は、もう父の云はうとすることを察してゐるらしい。頻りに、うなづいて見せる。たけ子は、わざと冷靜を裝つてゐるが、内心、若しやといふ期待を失はずにゐたことを發露する。

平造は、徐ろに口を開く。

——さあ、いよいよ、おれも本望を達した。

これは、そばにゐる富子に向つて云ふ如く裝つてゐるが、實はチヤブ台の上を、必要以上に長く拭いてゐる妻のたけ子に、それとなく聞かせるつもりらしい。

——今度は大成功だ。

——なに、どんなもの？ ね、お父さん。

——まあ、待て。第一に、工場を建てる。職工は、始めは先づ五十人ぐらゐでよからう。

——なにを作るのよ、お父さん。

——今にわかる。何しろ、外國に輸出する約束をして來たんだ。一と月に四五百圓の利益はすぐに上るんだから大したものだらう。

かういふと、其處には、工場で職工が働いてゐる光景が映る。平造は、社長らしい威厳を作つて、その間を巡視してゐる。外では、箱をいくつも積んだ荷馬車が、次ぎ次ぎと出て行く。

するとまた、立派な自動車に、盛裝したたけ子と富子が乘り込んでゐる。その自動車は劇場の車寄に駐る。二人は、

づしづと車から降りる。

平造は、今や、包みを解かうとしてゐる。富子は、膝を乗り出す。たけ子は横目でその方を見てゐる。何といふ用心深さだ！　しかし、平造は、それに頓着なく、例の代物を、彼女等の前に、出來るだけ派手にひろげて見せるのである。

そして滿身の熱を煽り立てながら、

——これだ。ね、最新式拳闘獨樂つて云ふんだ。

二つの獨樂は、皿のやうな台の上で廻る。

——そら、ね、相撲ぢやない、拳闘だ。はつけよい、のこつた。面白いだらう。

圭次は勿論、女共に、これが面白くない筈はない。もう占めたものだ。彼女達は面白がつてゐる。平造は、一心に獨樂を廻はす。

——そうら、こつちが勝つた。ノック・アウトと云ふ手だ。もう一度。さ、しつかり。あぶないぞ。どつこい。面白いだらう、どうだ。

「面白いだらう」を繰り返しつゝ、次ぎ次ぎと絶え間なく獨樂を廻してゐるが、彼自身は、困つたことに、だんだん面白くなくなつて來るのである。唇は自由に動かなくなる。眼は曇つて來る。鼻がつまつて來る。指がきかなくなつて來る。どうして顔を上げることができよう。

圭次は、まだ面白さうに見てゐる。しかし、女共は、平造のこのたゞならぬ樣子を見て、實際それが面白いのかどうかわからなくなつて來る。面白くなければならないのだ。さうだ、面白くなければ大變だ——さう思ひながら、一生懸命に面白くあらうと努めるのである。

平造は、今、獨樂が廻らなくなることを恐れるばかりである。獨樂が廻り止んだ瞬間は、彼に取つて、總てが終る瞬間である。が、もう、これ以上、「面白いだらう」と云ふ力はない。たゞ無暗に獨樂を廻し續ける。

圭次は、まだ、無心に獨樂を見つめてゐる。

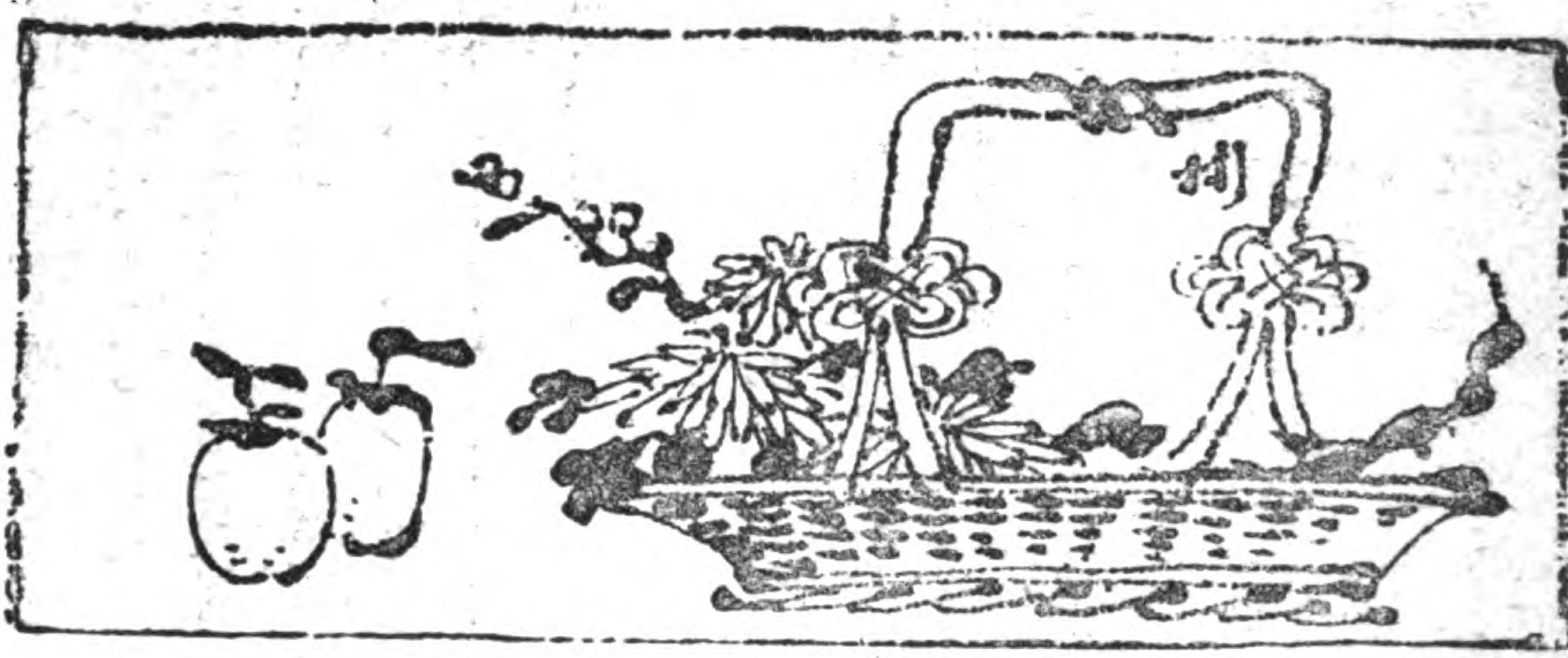
富子の眼が、先づ曇りはじめる。

たけ子は、流石に、失望を通り越して、ある新しい危機を豫感してゐる。しかし、その豫感は、平造の、あまりにも打ち萎れた姿の前で、寧ろ、一種の深い喜びに似た感動に變つて來る。彼女は、はじめて、何かしら、熱いものを胸の奥に感じてゐるらしい。

22

此の光景が次第に消えると、それにつれて、全く動き止んだ大きなゼンマイが、徐々に、はつきりと霧の上に浮んで來る

(終り)



犧牲

藤森成吉

第三幕

人物

片山正信　四十二歳位

片山千代子

女中

時

六月三日、午后六時半頃から夕方

所

正信の居間

舞台

數寄を凝らした、茶室がかつた日本間。右手には、砂壁の一間の床の

間。それに並んで、同じく一間のちがひ棚、地袋。床の間には掛軸、活花。ちがひ棚にはしやれた和綴の書册等。「無酒庵」と風流な草書で書いた横額が、正面長押へかゝつてゐる。その下の壁の右寄りに圓い窓が一つ開き、磨硝子の障子をとほして、庭の手を盡した植ゑ樹の影が風雅に夕日に映し出されてゐる。郊外の住宅らしく、枝へ小鳥が一二羽とまつて鳴き聲が聞える。

幕あくと、しばらく小鳥の靜かな聲だけ。やがて玄關のベルの音がして、洋服姿の正信が入つて來る。金縁の鼻眼鏡。美貌。あとから、女中が着換への和服と郵便を持つて來る。

正信。（振り向いて）奥さんはまだ歸つて來ないかね。

　鳥飛び去る。

女中。まだお戻りになりません。

正信。（複雜な氣もちをこめた表情で）ふむ。――ほかに誰も來なかつたかね。

女中。はい、どなたも。――郵便がこれだけまゐりました。

正信。そうか。

　女中去る。正信服を脱いで、瀟洒たる和服に着換へる。その時又ベルの音が聞える。正信ちよツと聽き耳を立てる。

女中。（又入つて來て）唯今お歸りになりました。

正信。そう？――すぐ來るやうに云つて下さい。

女中。かしこまりました。（去る。）

正信、床の間の前の座蒲團へドカリと坐り、何か考へるやうに長押のあたりを見つめたが、すぐ郵便を手に取つて、一二通手早くよむ。そこへ襖をあけて千代子が現れる。同じく和服姿。そと出らしい様子のまま。

千代子。（疊へ膝をついて）お歸りなさい。

正信。（何氣ない調子で眼をやりながら）うむ。……それはこツちから云ひたいとこだ。

千代子。（わざと平氣に）ゆふべは、つい留められてお友達のとこへ泊つて了つて、……濟みません。わたし電話に出やうと思つたんですけれど、千葉さんが、女中にかけさせるからいい、いいツて仰るもんですから。

正信。電話のことはりは聞いた。（見抜くやうな眼ざしをして）だが、ほんとに千葉さんへ泊つたのかね。

千代子。え丶。どうして？

正信。どうしてツて事もないが、あそこにはあんな聲の女中がゐるのかい。

千代子。變な事を仰つてね。——だつて、あなたは一遍もいらしツた事はないぢやありませんか。

正信。ないが、聲の調子がそんな感じを起させたんだ。（微笑して）第六感て云ふ奴かね。

千代子。もしお疑りになるなら、千葉さんへ聞き合せて下さい。

正信。そんな必要はない。又聞き合はせたとこで、お前がそんなに云ふやうなら、どうせ千葉さんがありのままを云ひツこはない。

千代子。（わざと元氣に）……それより、お腹がお空きになつたでせう。一緒に御飯を食べませう。（立つて 行かうとする。）

正信。（呼びとめる）待つた。——御飯もだが、それより先決問題がある。ま、御座り。

千代子。(嬌態な調子で) 御飯を濟ませてツからでもよかありません?
正信。、(皮肉に) 珍しくやさしい主婦振りだね。御志はありがたいが、ちよつと夕飯前に片づけやう。夕飯ぢやあ、朝飯前の仕事ッてわけにも行かないか知れんが。
千代子。(仕方なく叉腰をおろして) 何の御用?
正信。用は胸に聴いて貰ひたい
千代子。(やや堪えられなくなつたやうに) 相變らず皮肉な仰りかたね。もつと、氣もちよく眞ッ直に云つて頂戴。
正信。云へと仰るなら云はう。(ひどく狎れ〻〻しい調子に變つて) ほんとに、どこへ泊つたんだい?
千代子。ほんともうそもありません。(嬌艶に) いやなかたね。どうして同じ事をおききになるの?
正信。腑に落ちないうちは仕方ない。お前こそ、ぐづぐづ同じ事を云つてないで、早く泥を吐いて了つた方がいいだらう。
千代子。泥?——――下等な事を仰るもんぢやなくッてよ。
正信。どうせ下等な人間だから仕樣ない。餘計な事を云はずと、お前の文句ぢやアないが、氣もちよく眞ッ直に云つてお了ひ。
千代子。さつきッから、わたし云つてるぢやありませんか。
正信。(一語高く) 駄目だ。——へん、普通のあまい亭主なら知らず、おれに、そんな見えすいた事を云つたッて役に立つもんか。(空うそぶく)
千代子。(樣子を凝視して) 何てまア疑り深いかたでせう。一晩位うちを空けたツて、そんなに氣がかりですか?い



犠牲

藤森成吉

第三幕

人物

片山正信　四十二歳位

片山千代子

女中

時

六月三日、午后六時半頃から夕方

所

正信の居間

舞台

数寄を凝らした、茶室がかつた日本間。右手には、砂壁の一間の床の

間。それに並んで、同じく一間のちがひ棚、地袋。床の間には掛軸、活花。ちがひ棚にはしやれた和綴の書冊等。「無爲庵」と風流な草書で書いた横額が、正面長押へかゝつてゐる。その下の壁の右寄りに圓い窓が一つ開き、磨硝子の障子をとほして、庭の手を盡した植ゑ樹の影が風雅に夕日に映し出されてゐる。郊外の住宅らしく、枝へ小鳥が一二羽とまつて鳴き聲が聞える。

幕あくと、しばらく小鳥の靜かな聲だけ。やがて玄關のベルの音がして、洋服姿の正信が入つて來る。金緣の鼻眼鏡。美貌。あとから、女中が着換への和服と郵便を持つて來る。

正信。（振り向いて）奥さんはまだ歸つて來ないかね。

鳥飛び去る。

女中。まだお戻りになりません。

正信。（複雜な氣もちをこめた表情で）ふむ。――ほかに誰も來なかつたかね。

女中。はい、どなたも。――郵便がこれだけまゐりました。

正信。そうか。

女中去る。正信服を脫いで、瀟洒たる和服に着換へる。その時又ベルの音が聞える。正信ちよツと聽き耳を立てる。

女中。（又入つて來て）唯今お歸りになりました。

正信。そう？――すぐ來るやうに云つて下さい。

女中。かしこまりました。（去る。）

正信、床の間の前の座蒲團へドカリと坐り、何か考へるやうに長押のあたりを見つめたが、すぐ郵便を手に取つて、一二通手早くよむ。そこへ襖をあけて千代子が現れる。同じく和服姿。そと出らしい様子のまま。

千代子。（疊へ膝をついて）お歸りなさい。

正信。（何氣ない調子で眼をやりながら）うむ。……それはこッちから云ひたいとこだ。

千代子。（わざと平氣に）ゆふべは、つい留められてお友達のとこへ泊つて了つて、……濟みません。わたし電話に出やうと思つたんですけれど、千葉さんが、女中にかけさせるからいい、いいッて仰るもんですから。

正信。電話のことはりは聞いた。（見拔くやうな眼ざしをして）だが、ほんとに千葉さんへ泊つたのかね。

千代子。えゝ。どうして？

正信。どうしてッて事もないが、あそこにはあんな聲の女中がゐるのかい。

千代子。變な事を仰つてね。——だつて、あなたは一遍もいらしッた事はないぢやありませんか。

正信。ないが、聲の調子がそんな感じを起させたんだ。（微笑して）第六感て云ふ奴かね。

千代子。もしお疑りになるなら、千葉さんへ聞き合せて下さい。

正信。そんな必要はない。又聞き合はせたとこで、お前がそんなに云ふやうなら、どうせ千葉さんがありのままを云ひッこはない。

千代子。（わざと元氣に）……それより、お腹がお空きになつたでせう。一緒に御飯を食べませう。（立つて行かうとする。）

正信。（呼びとめる）待つた。——御飯もだが、それより先決問題がある。ま、御座り。

千代子。(媚態な調子で)御飯を濟ませてツからでもよかありません?

正信。(皮肉に)珍しくやさしい主婦振りだね。御志はありがたいが、ちよつと夕飯前に片づけやう。夕飯ぢやあ、朝飯前の仕事ツてわけにも行かないか知れんが。

千代子。(仕方なく又腰をおろして)何の御用?

正信。用は胸に聽いて貰ひたい

千代子。(やや堪えられなくなつたやうに)相變らず皮肉な仰りかたね。もつと、氣もちよく眞ツ直に云つて頂戴。

正信。云へと仰るなら云はう。(ひどく狎れ〳〵しい調子に變つて)ほんとに、どこへ泊つたんだい?

千代子。ほんともうそもありません。(嬌艶に)いやなかたね。どうして同じ事をおききになるの?

正信。腑に落ちないうちは仕方ない。お前こそ、ぐづぐづ同じ事を云つてないで、早く泥を吐いて了つた方がいいだらう。

千代子。泥?——下等な事を仰るもんぢやなくツてよ。

正信。どうせ下等な人間だから仕樣ない。餘計な事を云はずと、お前の文句ぢやアないが、氣もちよく眞ツ直に云つてお了ひ。

千代子。さつきツから、わたし云つてるぢやありませんか。

正信。(一語高く)駄目だ。——へん、普通のあまい亭主なら知らず、おれに、そんな見えすいた事を云つたツて役に立つもんか。(空うそぶく)

千代子。(様子を凝視して)何てまア疑り深いかたでせう。一晩位うちを空けたツて、そんなに氣がかりですか?い

正信、床の間の座浦團へドカりと坐り、何か考へるやうに長押のあたりを見つめたが、すぐ郵便を手に取つて、一二通手早くよむ。そこへ襖をあけて千代子が現れる。同じく和服姿。そと出らしい様子のまま。

千代子。（疊へ膝をついて）お歸りなさい。

正信。（何氣ない調子で眼をやりながら）うむ。……それはこッちから云ひたいとこだ。

千代子。（わざと平氣に）ゆふべは、つい留められてお友達のとこへ泊つて了つて、……濟みません。わたし電話に出やうと思つたんですけれど、千葉さんが、女中にかけさせるからいい、いいッて仰るもんですから。

正信。電話のことはりは聞いた。（見抜くやうな眼ざしをして）だが、ほんとに千葉さんへ泊つたのかね。

千代子。えゝ。どうして？

正信。どうしてッて事もないが、あそこにはあんな聲の女中がゐるのかい。

千代子。變な事を仰つてね。──だつて、あなたは一遍もいらしッた事はないぢやありませんか。

正信。ないが、聲の調子がそんな感じを起させたんだ。（微笑して）第六感て云ふ奴かね。

千代子。もしお疑りになるなら、千葉さんへ聞き合せて下さい。

正信。そんな必要はない。又聞き合はせたとこで、お前がそんなに云ふやうなら、どうせ千葉さんがありのままを云ひッこはない。

千代子。（わざと元氣に）……それより、お腹がお空きになつたでせう。一緒に御飯を食べませう。（立つて行かうとする。）

正信。（呼びとめる）待つた。──御飯もだが、それより先決問題がある。ま、御座り。

千代子。（嬌態な調子で）御飯を濟ませてツからでもよかありません？

正信。（皮肉に）珍しくやさしい主婦振りだね。御志はありがたいが、ちよつと夕飯前に片づけやう。夕飯ぢやあ、朝飯前の仕事ッてわけにも行かないか知れんが。

千代子。（仕方なく又腰をおろして）何の御用？

正信。用は胸に聽いて貰ひたい

千代子。（やや堪えられなくなつたやうに）相變らず皮肉な仰りかたね。もつと、氣もちよく眞ッ直に云つて頂戴。

正信。云へと仰るなら云はう。（ひどく狎れ々々しい調子に變つて）ほんとに、どこへ泊つたんだい？

千代子。ほんともうそもありません。（嬌艶に）いやなかたね。どうして同じ事をおききになるの？

正信。腑に落ちないうちは仕方ない。お前こそ、ぐづぐづ同じ事を云つてないで、早く泥を吐いて了つた方がいいだらう。

千代子。泥？——下等な事を仰るもんぢやなくツてよ。

正信。どうせ下等な人間だから仕樣ない。餘計な事を云はずと、お前の文句ぢやアないが、氣もちよく眞ッ直に云つてお了ひ。

千代子。さつきツから、わたし云つてるぢやありませんか。

正信。（一語高く）駄目だ。——へん、普通のあまい亭主なら知らず、おれに、そんな見えすいた事を云つたツて役に立つもんか。（空うそぶく）

千代子。（樣子を凝視して）何てまア疑り深いかたでせう。一晩位うちを空けたツて、そんなに氣がかりですか？い

い薬ね。これで、初めてわかつたでせう。あなたのやうだつたら、わたしなんか夙の昔死んでゐなくツちやいけないわ。

正信。べつに妹くわけぢやァない。ただ事實を知りたいんだ。そんなにシラを切つて見せりやあ見せるほど、いよいよ知りたくなるんさ。

千代子。そんなあなたの興味には、わたし責任を持てないつもりよ。

正信。これは御挨拶だな。そう云はれちやあ一言もないツてとこだが、然しこのまゝ引き退れもしない。――ぢやア、ゆふべたしかに千葉さんへ泊つたんだね。

千代子。（きつぱりと）えゝ。

正信。千葉さんの本宅だね。

千代子。そうですわ。

正信。ふむ。本宅は稲毛にあるのか？

千代子びつくりして、キツと視る。

正信。（意地悪く見返しながら）その前ちよツと稲毛へ行つた、とでも云ひたいとこだね。が、生憎、それにしちやあ電話の時間が物を云ふ。

千代子默つて頭垂れる。

正信。（いよいよ意地悪く）お前、何か考へちがひしてるんぢやないか。それとも、云ひちがへたんぢやないかね。ゆふべよく眠らなかつたせいで。

千代子。（顔をあげる。眼は上氣して、美しくやや血走つてゐる）それを誰からお聞きになつた？

正信。誰からでもいい。
千代子。いゝえ、云つて下さい。
正信。そんな請求は、ちツと我がまま過ぎやしないか。おれにきく前、お前の方から返事をしたらどうだ？
千代子。返事したら云つて下さる？
正信。うん、交換條件にしやう。
千代子。（思はず吐き出すやうに）あなたらしい云ひかたね。――――ぢや仕方ありません。如何にも、ゆふべ稻毛に泊りました。
正信。それから？
千代子。それから？――――それは、どうせわかつてらツしやるでせう。
正信。石川と今朝までゐたつて云ふのか。
千代子。石川なんて、呼び來てにしないで下さい。そんな權利はあなたにありません。
正信。お前にはあるツて云ふのかい。
千代子。（反抗的に）あるかも知れないわ。
正信。かも知れないは心細いな。ハツキリ、あるツてつたらどうだ
千代子。くだらない事を云つて、この上わたしを苦しめないで下さい。
正信。これがくだらん事か。お前のあたまは、ゆふベツからよつぽどどうかしてるね。ぢやお前は、まだ石川と……
これは失敬……石川先生と、なんにも實際關係がないツて云ふつもりか。

千代子。（やや默然としてゐてから、振りしぼるやうに）一緒に泊つただけぢや、そんなことは定められないでせう。

正信。（突然哄笑に爆發して）はッはッはッは……こいつアおどろいた。そこまで出て來やうとは思ひがけなかつたよ。いや、それほど空想の豐富な童話作家だとは、ついぞ今まで思はなかつたよ。實際敬意を表するに足る閨秀大詩人だ。だが、おれは生憎子供ぢやアない。眞面目にお伽噺を信じるにやあ、少し年を取りすぎてるな。それとも、最後のドタン場へ行つて振られた、とでも云ふつもりかね。

　千代子唇を噛みしめて俯く。

正信。で、お前は、報告終り！かい。そんな眞似をしておいて、べつに挨拶一つしやうと思ひつかないのか。

千代子。（疊へ手を突いて）濟みません。

正信。催促されてからの詫びぢやあ、あんまりゾッとしないな。

千代子。許して下さい。

正信。許す許せないは別問題だ。殊に、かうまで圖々しくシラを切られちや。

千代子。（しほらしさを見せて）それも、わたしあなたに濟まないと思つたからですわ。

正信。まアそう云つて貰つただけでも、我慢しなけりやならないかね。

千代子。もうかうなつたからにや、あなたに合はす顏はありません。御ねがひですから、離婚して下さい。

正信。して下さい、も凄いな。させて下さいッてとこだらう。

千代子。（おとなしく）ぢや、させて下さい。

正信。それは今一口には云へない。よく考へて見なければならない重大問題だ。

千代子。でも、わたしもうあなたには何の愛も持つてゐませんわ。あなたに愛のない事はわかり切つてます。そしたら、別れて頂くのが當然ぢやありませんか。

正信。お前は戀人をつかまへたから、離縁もして貰ひたからうが、おれの方はそうは行かない。まだ充分未練があるんだ。

千代子。(思はず聲高く)うそ吐き!――あなたこそ、今迄も、今でも、いくらでも戀人を持つてるくせに、

正信。戀人(ラヴァ)か、單なる情人(いろ)か、それはわからない。

千代子。まあ何てシラジラしいでせう。そう云ふあなたの行状を考へれば、わたし今度の事だつて、決して詫びなければならない氣はしません。あなたにこそ、詫びて頂きたいの。あなたは、ほんとに詫びて下さツた事は今迄一度だつてないぢやありませんか。

正信。逆襲はおどろくな。……だが、と、お前はただおれへの面當てに石川を誘惑したのか。

千代子。そうです、と云ひたいとこですがね。初めはそんな氣もちでもゐたけれど、だんだん親しくして頂けば頂くほど、そんな不純な了見はなくなつて了つたんです。

正信。そんな口をききながら、實はさんざんおれの惡口を云つて、淋しさを訴へて、とうと動かしたんだらう?

千代子。あなたらしくもない、いや、やつぱりあなたらしい想像ね。ところが正反對よ。自分の淋しいとこなんか出來るなけ見せないやうにして、――ツて云つても、藝術家だけ先生はすぐ見拔いていらつしたけれど、あなたの事もよくばかり云つて來ましたわ。わたしは、同情されて人の愛を獲るのもいやなら、餘計な事を云つて先生の氣もちを濁すのもいやだつたの。實際のあなたを知らないから、今でもやつぱり先生は、あなたを立派な人とばかり思つてらツ

しやるわ。それ一つが、わたしのあのかたへのうそなの。そのうそが、どれだけ今重石になつてるか。(急に哀願するやうに)ね。その切角の幻影をこはさい爲めにも、どうか氣もちよく離緣させて下さい。一生のおねがひですから。(頭をさげる。)

正信。亭主の前で惚氣られりやあ世話アねえ。おれが惡魔で、石川は天使で、あはれな美人のお前はマンマと天使さまに救ひあげられて、チヨンチヨンて譯かね。いよいよ出でて、いよいよえらい童謡詩人だな。

千代子。(一心になつて)ひやかしたり茶化したりしてゐないで、ほん氣で聞いて下さい。この願ひさへ聞いて下されば、今までのあなたの仕打はみんな忘れますわ。そして一生涯、先生にも誰にも決してあなたの惡口を云はないどこか、恩人に思ひますわ。

正信。けなされたり、賞められたり、いやはや忙しいや。

その時、女中襖をあけて、

あの、まだ御飯は……………?

正信。食べやう。(立つて行かうとする。)

千代子。(前手から抑し止める。)も少し待つて下さい。(女中へ向つて)さきへ食べて下さい。私たちはあとで行くから。

正信。だが、おれは腹が減つてるんだ。

千代子。わたしだツて減つてます。わたしがさつき云つた時は、あなたは引留めたぢやありませんか。(又女中へ向つて。)じき行くから、それまで來ないで下さい。

女中。(様子を窺つて)かしこまりました。(去る。)

正信。（苦笑しながら）で、今度はおれが留められる番かね。（漸々もとの座蒲團へ胡座を搔く。）
千代子。（すがつて）あなた、今度こそ別れさして下さいませんか。その爲めになら、わたしどんな事でもします。
正信。そうまで云ふなら、きいてやらなくもないがね……まあ石川に會つてからの事さ。
千代子。（びつくりして）それだけは、どうかよして頂戴。
正信。（見つめてゆツくり）なぜ？
千代子。だやあ、わたし先生に對して立ツ瀬がなくなります。ゆふべの事は決して打ち明けないツて、わたし固いお約束をしたの。
正信。ふむ、石川がそう云ふ約束をさせたのか。
千代子。いゝえ、わたしの方から。――先生は、是非ともあなたに會ふ、ツて仰るんです。それを、わたし一生懸命押しとめたの。もう少し待つて下さいツて。
正信。なぜとめたんだ？
千代子。それは、あなたこそ御わかりでせう。――もし二人で會ひでもしたら、それこそ滅茶々々になるに定つてるんですもの。それればかりか、わたし先生を欺した事になるぢやありませんか。
正信。（吐き出すやうに）から信用がなくちやあ、ザマアねえや。
千代子。（一心に）ですから、どうか會見だけは思ひとまつて下さい。今約束して下さい。あなた。（右手を出して、正信の手を求めて握りしめる。）
正信。（苦笑しながら）女ツて實に蟲のいいものだ。何でも人に要求する事ツきり知らねえんだから。

しやるわ。それ一つが、わたしのあのかたへのうそなの。そのうそが、どれだけ今重石になつてるか。（急に哀願するやうに）ね。その切角の幻影をこはさい爲めにも、どうか氣もちよく離縁させて下さい。一生のおねがひですから。

（頭をさげる。）

正信。亭主の前で惚氣られりやあ世話アねえ。おれが惡魔で、石川は天使で、あはれな美人のお前はマンマと天使さまに救ひあげられて、チヨンチヨンて譯かね。いよいよ出でて、いよいよえらい童謠詩人だな。

千代子。（一心になつて）ひやかしたり茶化したりしてゐないで、ほん氣で聞いて下さい。この願ひさへ聞いて下されば、今までのあなたの仕打はみんな忘れますわ。そして一生涯、先生にも誰にも決してあなたの惡口を云はないどこか、恩人に思ひますわ。

正信。けなされたり、賞められたり、いやはや忙しいや。

その時、女中襖をあけて、

あの、まだ御飯は…………？

正信。食べやう。（立つて行かうとする。）

千代子。（前手から抑し止める。）も少し待つて下さい。（女中へ向つて）さきへ食べて下さい。私たちはあとで行くから。

正信。だが、おれは腹が減つてるんだ。

千代子。わたしだツて減つてます。わたしがさつき云つた時は、あなたは引留めたぢやありませんか。（又女中へ向つて。）じき行くから、それまで來ないで下さい。

女中。（様子を窺つて）かしこまりました。（去る。）

正信。（苦笑しながら）で、今度はおれが留められる番かね。（漸々もとの座蒲團へ胡座を搔く。）

千代子。（すがつて）あなた、今度こそ別れさして下さいませんか。その爲めになら、わたしどんな事でもします。

正信。そうまで云ふなら、きいてやらなくもないがね……まあ石川に會つてからの事さ。

千代子。（びつくりして）それだけは、どうかよして頂戴。

正信。（見つめてゆツくり）なぜ？

千代子。ぢやあ、わたし先生に對して立ツ瀬がなくなります。ゆふべの事は決して打ち明けないツて、わたし固いお約束をしたの。

正信。ふむ、石川がそう云ふ約束をさせたのか。

千代子。いゝえ、わたしの方から。──先生は、是非ともあなたに會ふ、ツて仰るんです。それを、わたし一生懸命押しとめたの。もう少し待つて下さいツて。

正信。なぜとめたんだ？

千代子。それは、あなたこそ御わかりでせう。──もし二人で會ひでもしたら、それこそ滅茶々々になるに定つてるんですもの。そればかりか、わたし先生を欺した事になるぢやありませんか。

正信。（吐き出すやうに）かう信用がなくちやあ、ザマアねえや。

千代子。（一心に）ですから、どうか會見だけは思ひとまつて下さい。今約束して下さい。あなた。（右手を出して、正信の手を求めて握りしめる。）

正信。（苦笑しながら）女ツて實に蟲のいいものだ。何でも人に要求する事ツきり知らねえんだから。

千代子。ね、約束して下さい。いいでせう。
正信。そんな約束をする理由が、おれにあるか。
千代子。あります。あなたの名聲の爲めにだツてあつてよ。
正信。名聲はよかつたな。
千代子。(强く)少しは恥を知つて下さい。
正信。(折れて)ぢや約束しやう。
千代子。(感謝に滿ちて)ありがとう。……ああ、これでやつと安心したわ。(手を放す。)
正信。(眺めて皮肉に)離婚問題の方は、ぢやいいかね。
千代子。よかないわ。承知して下さる?
正信。まあ、矢繼ぎ早やの注文には應じられないね。
千代子。ぢや、切れろツて仰るの?
正信。(叱りつけて)そんな事を、夫へ聞く奴がどこにある?
千代子。(キツとして)そんなら、姦通罪でお訴えになる?
正信。訴えるかも知れない。——訴えないかも知れない。……そいつアお前達の態度一つさ。
千代子。わたし達より、あなたの氣もち一つです。
正信。その氣もちを定めるのが、お前達の出かた一つだツてツんだ。
千代子。ぢや、わたし達は——どうしたらいいんですか?

正信。（突然笑ひ出して）はははは、まア、「私達」で相談して見ろ。――それより、おれが離婚をきかなかつたら、お前達はどうするつて云ふんだ？
千代子。その時の覺悟なら出來てます。
正信。（好奇的に）ほう、そいつあ是非承りたいな。
千代子。（低く聲調に笑ひ出しながら）それは、わたしも取ツときにしませうよ。（調子を變へて）それより、さツきの條件を聞かせて下さい。
正信。條件？
千代子。忘れツぽいかたね、――わたし達が稻毛へ行つた事を、誰からお聞きになつたんです？
正信。會社の仲間から聞いた。
千代子。どうして、その人が知つたんです？
正信。お前達がきのふ夕方稻毛へ降りるとこを、ちやアんと見たツて云ふんだ。お前の顏は無論前ツから知つてたが、石川の顏も、新聞や雜誌へよく出るからすぐわかつたんだ。
千代子。どうしてそんな時分、あんなほうへ出かけなさつたんでせう。
正信。それツ位な用は、人間誰にだツてあるさ。
千代子。（目抜くやうに）いい加減な事ばツかり。――ほんとは、この頃わたししげしげ先生のところへ出入りするんで、私立探偵でも賴んでらしツたんでせう？
正信。（不敵にせせら笑つて）探偵はよかつたな。お前見たいな眞似をしてゐれば、世間の人間の顏がみんな探偵に見

千代子。ね、約束して下さい。いいでせう。
正信。そんな約束をする理由が、おれにあるか。
千代子。あります。あなたの名譽の爲めにだツてあつてよ。
正信。名譽はよかつたな。
千代子。（强く）少しは恥を知つて下さい。
正信。（折れて）ぢや約束しやう。
千代子。（感謝に滿ちて）ありがとう。……ああ、これでやつと安心したわ。（手を放す。）
正信。（眺めて皮肉に）離婚問題の方は、ぢやいいかね。
千代子。よかないわ。承知して下さる？
正信。まあ、矢繼ぎ早やの注文には應じられないね。
千代子。ぢや、切れろツて仰るの？
正信。（叱りつけて）そんな事を、夫へ聞く奴がどこにある？
千代子。（キツとして）そんなら、姦通罪でお訴えになる？
正信。訴えるかも知れない。——訴えないかも知れない。……そいつアお前達の態度一つさ。
千代子。わたし達より、あなたの氣もち一つです。
正信。その氣もちを定めるのが、お前達の出かた一つだツてツんだ。
千代子。ぢや、わたし達は——どうしたらいいんですか？

正信。（突然笑ひ出して）はははは、まア、「私達」で相談して見ろ。——それより、おれが離婚をきかなかつたら、お前達はどうするつて云ふんだ？

千代子。その時の覺悟なら出來てます。

正信。（好奇的に）ほう、そいつあ是非承りたいな。

千代子。（低く嘲調に笑ひ出しながら）それは、わたしも取ツときにしませうよ。（調子を變へて）それより、さツきの條件を聞かせて下さい。

正信。條件？

千代子。忘れツぽいかたね、——わたし達が稻毛へ行つた事を、誰からお聞きになつたんです？

正信。會社の仲間から聞いた。

千代子。どうして、その人が知つたんです？

正信。お前達がきのふ夕方稻毛へ降りるとこを、ちやアんと見たツて云ふんだ。お前の顏は無論前ツから知つてたが、石川の顏も、新聞や雜誌へよく出るからすぐわかつたんだ。

千代子。どうしてそんな時分、あんなほうへ出かけなさつたんでせう。

正信。それツ位な用は、人間誰にだツてあるさ。

千代子。（目拔くやうに）いい加減な事ばツかり。——ほんとは、この頃わたししげしげ先生のところへ出入りするんで、私立探偵でも頼んでらしツたんでせう？

正信。（不敵にせせら笑つて）探偵はよかつたな。お前見たいな眞似をしてゐれば、世間の人間の顏がみんな探偵に見

えるんだらう。

千代子。あなたこそ。——あなたなら、そんな眞似はなさりかねないわね。

正信。盗人猛々しいたアこいつだ。……お蔭で、すつかり腹を減らした。どれ飯にしやう。（立つて、ひとり出て行く。）

千代子、あとに默然として坐つてゐる。圓窓に、さツきから十三夜位の月光が、ほのかに螢光色に當つてゐる。

——靜かに幕

第四幕

人物

石川謙造
片山正信
片山千代子
給仕

時

翌日（六月四日）、午前十時半頃

所

會社の應接室

舞台

高層なアメリカ式ビルデイング内の、片山の勤めてゐる船舶保險會社の應接室。眞ツ白い高い壁。ところどころに、大きな汽船の寫眞額がかかつてゐたり、彩色刷りの汽船のポスタアが貼つてあつたりする。正面に高い窓があき、その向ふに、いろんな色のビルデイングの一部や、眞ツ赤に塗つた、煙を吐いてゐる大煙突が聳えてゐる。眞ん中にテエブル、周圍に椅子。左手にドア。そのこツち側に、帽子掛けやステツキ入れ等。

幕があいた時は誰もゐない。都會の中心らしく、遠く電車の軋る音や、汽車の轟音や汽笛などが、錯綜して窓から聞える。やがてドアあき、女給仕に案内されて石川が入つて來る。

給仕。（左手取ツつきの椅子をさして）どうぞ。

石川會釋し、パナマを帽子掛けへかけ、靜かに腰をおろす。

給仕。じきお見えになりますから。（腰をかがめて去る。）

石川、やや落ちつかない樣子で、室を眺めたり、窓のそとを見たりする。そのうち立ちあがり、片手で椅子の背をつかみながら、額やポスタアを見入る。强ゐて心を落ちつけやうとする調子。暫時してドアあき、五分も隙かさない洋服姿の正信が現れる。半ばあいたままのドアの把手を握りながら、石川の顏を疑視する。石川も眼を合はす。

正信。石川さんですか。

石川。さうです。

正信。僕、片山です。（云ひながら、カチリとドアを閉める。）

石川。（頭をさげて）初めてお目にかかります。………少し時間がおくれて濟みません。

正信。かなりお待ちしましたよ。——今朝、ここへ來てすぐ電話を御掛けしたですから。（多忙な事務家らしく、わざ

と小型の金側懐中時計を胸衣嚢から取り出して見て、又収める。）

石川。今の家には電話がないので、前の家から使ひが來たりして、つい手間取れました。

正信。いや、お忙しいとこを來て頂けて、大へん結構でした。（敏捷且つ悠揚とした脚取りでテエブルの右手へ進み、椅子へ腰をおろしてから、立つてゐる石川へ向つて片手を出して）どうぞ。

石川默禮して腰をかける。

正信。（打ちとけた氣さくな調子で）初めてお目にかかるわけですが、ちつともそんな氣がしません。（ちよツと鋭い眼つきをして）始終妻からいろいろ御噂を聞いてゐますし、（轉換するやうに）寫眞でもお目にかかつてますし、又お書きになつた物もよんでおりますから。

石川。（氣をくれした風に）私も、お噂は始終——奥さんから伺つてました。

正信。（快活な笑ひ聲を立てて）ははは、そうでしたか。いや、丁度妻が御懇意にあづかつてますし、かねがね、一度是非お話を承はりたいと思つてました。今日思ひがけなくかうして御話が出來るのを、大へん愉快に思ひます。

石川俯く。

正信。（追ツかけて）これで、僕はなかなかあなたの愛讀者なんですよ。妻の熱度にはとてもかなはないかも知れませんが。はははは……僕も、昔は云はば文學青年でしてな。おぼつかないながら、小説や詩も幾つか書いて見ました。もう御聞き下さつたか知れませんが、僕の父が一體風雅な歌人で、まアその血を引いたわけでせうか。今住んでゐる小さな家なぞも、粗末ながら、僕としては出來るだけ雅びな氣もちをこめて作つたつもりです。もし御序でもありましたら、どうか御立ち寄り下さい。抹茶の一服位は、手づから立てゝ差し上げます。

石川。（仕方なく）ありがたう御座います。

ドアをあけて、給仕が茶を運んで來、二人の前に置いて去る。

正信。どうぞ。（すすめて）――ヨオロツパやアメリカの方へも、いらつしやツたそうですな。

石川。はあ、……隨分前ですが。

正信。勞働の經驗を獲るお爲めですか、一時皿洗ひなぞもなさツたツて御話ですな。

石川。（次第に苦しくなつて來たやうに）いや、ただ遊んで來ただけでした。

正信。（ますます落ちついて）ヨオロツパは知りませんが、アメリカへは僕も暫く行つて來ました。それがもとで、云はばこんながらにもない勤めの身分にもなつたわけです。

石川。それも伺つてました。

正信。（快活さうに微笑して）そうですか。――いや、あれと一緒になつたのも、やつぱりそれがキツカケです。歸つた當座、べつに定つた職もなし、ぶらぶらしくてゐる暇潰しに英語を敎へたりして、とうと結婚するやうな事になつたんです。まあ、極めて有りふれた戀愛結婚です。（笑ふ）ははは ツ……。

石川默つてうなだれる。

正信。（樣子を見て）然し、世の中ツてものは妙なもんですな。その僕が、今日あれの事であなたと御話しなければならなくなるなんて――。

石川。（立ちあがつて）、何と御詫びしていいかわかりません。僕は、心からそれについての責任を感じます。實は、かうして御呼び出しにあづかる前、僕の方から御面會を願ふつもりでした。

正信。いや、その御氣もちも妻から聞きました。潔癖な眞ツ直な御氣質としては、きツとそうだつたらうと思ひます。

す。

石川。あなたが立派なかたな事は、かねて、奥さんから伺つてゐました。それに安心してこんな事をしたわけでは、決してありません。反つて、そう云ふあなたと思ふだけ、どんなに苦しい氣がしてるか知れません。

正信。僕の心もちをわかつて下すつて、ありがたう御座んす。相手が普通の人だつたら、僕も非常にあきらめにくいとこかも知れません。が、あなたのやうなかただと、又腹を立てるわけにも行かなくて困ります。あなたとしても、重々無理ないところが御ありだツたらうと思ひますし、妻の氣もちもよくわかりますから。……ゆふべ、御約束だとかツて、初めはあれも實をかくしてましたが、あとは繰り返して詫びてくれました。そう兩方から詫びて頂くと、今更咎めるわけにも行かず、實際途方にくれます。

石川。そうですか。あなたに眞實を持つてゐられれば、默つてゐられなかつたのは當然です。

正信。それが、女の複雜な氣もちですね。いや、人間の、と云つた方がいいか知れません。あれは、まだ充分僕に未練を持つててくれてるんです。無論、あなたに對して深い尊敬と愛を持つてる事は事實ですが。——ところが、更にいけないのは、かう云ふ立場に置かれながら、僕がやつぱり愛せなくなつてゐない事です。女々しい奴だと御思ひか知れませんが、僕はそんな弱い生れつきの人間です。戀の三角關係だの何だのツて、よく小説や芝居では見ますが、いざ、自分が局面に立たせられては全くやり切れません。(笑ひにまぎらそうとしながら笑へないやうに、兩手で頭を押へて俯く。)

石川。(苦痛に滿ちて)そう云つて頂くと、どう云つていいかわかりません。この事については、僕は萬事あなたの御意志に任せます。もしあなたに千代子さんが返せるものなら、……と云ふ意味は、もとどほりあのかたを愛したいと仰

るなら、僕は無論思ひ切ります。そして、仰るかぎりの償ひはします――。

正信、(意外さうに) 待つて下さい。と、あなたは是非あれを譲つてくれ、とは仰らないんですか。

石川。決して云ひません。

正信。それは、僕への御遠慮からですか。それとも、――不躾けな言葉ですが――あれの誘惑に一時的に負かされたから、又は、負けたから、と仰るんですか。

石川。正直なところ、いろんな氣もちです。奥さんを、一時の遊戯心から玩んだの何のツて氣もちでない事は、はツきり申せます。奥さんの美しいところも、よく知つてゐるつもりです。が、僕があのかたを頂くとして、あなたよりいい同棲者であり得るかどうかについては、尠からぬ疑ひを持つてます。いや、信じられないツて云ふ方が適切です。奥さんを幸福にすると云ふ點でも、これからの僕には全く自信がありません。

正信。ひどく懐疑的ですな。がそりやアわかり切つてます。いくら僕が愛してゐたとこで、人間又は夫ツて點から云へば、僕なぞより數等うへでいらツしやる事は自明です。であればこそ、僕を可愛がつてくれながら、あれの心はあなたの方へ傾いて行つたんです。あなたがたの行爲が一時のあやまりでない限り。――さうぢやありませんか。

石川、いよいよ苦痛が募つて來たやうに默然。

正信。僕は、無論まだ充分妻を愛してます。あれから離れるとすると、僕は一時どうなるか見當もつかない位です。或は、もう此の會社なぞもやめて、どこかの田舎へでも引ツ込んで、此の世の生活から全くかくれるかも知れません。然し、いくらどうなる事がわかつてゐても、その爲めにあなたがたの幸福を犠牲にしやうとは決して思ひません。それだけの意地と辨へは、不肖ながら持つてます。――そんな點で遠慮して頂くなら、失禮ながら全く御無用

す。

石川。あなたが立派なかたな事は、かねて、奥さんから伺つてゐました。それに安心してこんな事をしたわけでは、決してありません。反つて、そう云ふあなたと思ふだけ、どんなに苦しい氣がしてるか知れません。

正信。僕の心もちをわかつて下すつて、ありがたう御座んす。相手が普通の人だつたら、僕も非常にあきらめにくいとこかも知れません。が、あなたのやうなかただと、又腹を立てるわけにも行かなくて困ります。あなたとしても、重々無理ないところが御ありだツたらうと思ひますし、妻の氣もちもよくわかりますから。……ゆふべ、御約束だとかツて、初めはあれも實をかくしてましたが、あとは繰り返して詫びてくれました。そう兩方から詫びて頂くと、今更咎めるわけにも行かず、實際途方にくれます。

石川。そうですか。あなたに眞實を持つてゐられれば、默つてゐられなかつたのは當然です。

正信。それが、女の複雜な氣もちですね。いや、人間の、と云つた方がいいか知れません。あれは、まだ充分僕に未練を持つててくれてるんです。無論、あなたに對して深い尊敬と愛を持つてる事は事實ですが。——ところが、更にいけないのは、かう云ふ立場に置かれながら、僕がやつぱり愛せなくなつてゐない事です。女々しい奴だと御思ひか知れませんが、僕はそんな弱い生れつきの人間です。戀の三角關係だの何だのツて、よく小説や芝居では見ますが、いそ、自分が局面に立たせられては全くやり切れません。(笑ひにまぎらそうとしながら笑へないやうに、兩手で頭を抑へて俯く。)

石川。(苦痛に滿ちて)そう云つて頂くと、どう云つていいかわかりません。この事については、僕は萬事あなたの御意志に任せます。もしあなたに千代子さんが返せるものなら、……と云ふ意味は、もとどほりあのかたを愛したいと仰

るなら、僕は無論思ひ切ります。そして、仰るかぎりの償ひはします――。

正信、（意外そうに）待つて下さい。と、あなたは是非あれを譲つてくれ、とは仰らないんですか。

石川。決して云ひません。

正信。それは、僕への御遠慮からですか。それとも、――不躾けな言葉ですが――あれの誘惑に一時的に負かされたから、又は、負けたから、と仰るんですか。

石川。正直なところ、いろんな氣もちです。奥さんを、一時の遊戯心から玩んだの何のツて氣もちでない事は、はツきり申せます。奥さんの美しいところも、よく知つてゐるつもりです。が、僕があのかたを頂くとして、あなたよりいい同棲者であり得るかどうかについては、尠からぬ疑ひを持つてます。いや、信じられないツて云ふ方が適切です。奥さんを幸福にすると云ふ點でも、これからの僕には全く自信がありません。

正信。ひどく懐疑的ですな。がそりやアわかり切つてます。いくら僕が愛してゐたところで、人間又は夫ツて點から云へば、僕なぞより數等うへでいらツしやる事は自明です。であればこそ、僕を可愛がつてくれながら、あれの心はあなたの方へ傾いて行つたんです。あなたがたの行爲が一時のあやまりでない限り。――そうぢやありませんか。

石川、いよいよ苦痛が募つて來たやうに默然。

正信。僕は、無論まだ充分妻を愛してます。あれから離れるとすると、僕は一時どうなるか見當もつかない位です。或は、もう此の會社なぞもやめて、どこかの田舍へでも引ツ込んで、此の世の生活から全くかくれるかも知れません。然し、いくらどうなる事がわかつてゐても、その爲めにあなたがたの幸福を犠牲にしやうとは決して思ひません。それだけの意地と辨へは、不肖ながら持つてます。――そんな點で遠慮して頂くなら、失禮ながら全く御無用

です。

石川、相變らず默つてゐる。

正信。（樣子を見ながら、しばらくして）で、端的ですが、御決心次第で千代子は差しあげます。――いかがです。受け取つて下さいますか。

石川。（顏をあげて、憂鬱と決心との混淆した表情で）どう云つていいかわかりません。然し、讓つて下さると仰るなら、責任を以て頂きます。

正信。そうですか。ぢや僕は一切を犧牲にして、あれはあなたに差しあげます。

石川。ありがとう御座います。（重く頭をさげる。）

正信。然し、急に表向きに定めては、反つて世間の手前も面白くないでせう。あなたも、社會的に充分立派な方ですし、姦通――結婚ツて云つた形式が露骨になつては、いろいろ御迷惑が多いと思ひます。しばらく、今迄どほりで置いて下さい。そのうち、妻に對して急にいや氣がさしたやうにして、僕は體よく離緣します。そこで、又少し經つてから結婚して下されば、世間でも誰も何とも云ふ筈はありません。

石川。そうですか。何から何まで氣をつけて下さつて、御禮の言葉もありません。

正信。いや、あなたがたとちがつて、僕はかう云ふ世間的な仕事に携はつてる人間ですから、こんな事にも餘計な氣を使ふんです。（喉をうるほすやうに、一口茶を喫む。）

双方默る。

石川。（沈默に堪えられなくなつたやうに、）では、今日は失禮させて頂きます。いづれ、あと千代子さんともよく相

謝しまして改めて御噂に伺ひます。（立つて頭をさげる）

正信。（遮つて）ちよツと御待ち下さい。まだ少し御話したい事があります。（手で、腰をおろすやうに指圖する。）

石川。（不審そうに）何か――？

正信。（落ちついた調子で）、外でもありませんが、少し千代子を辨償して頂きたいんです。

石川。（重ねて不審そうに）と仰ると？

正信。なに、べつに精神的にどうかうと、面倒な條件など持ち出すわけぢやありません。又、肉體的、乃至法律的の賠償、――つまり、或る期間的刑務所生活をして頂きたい、なぞと申し出るわけでもありません。

石川、ややびツくりしたやうに正信の顔を見る。

正信。（見返して笑ひ出す。）はははは、いや、これは戯談です。どうか本氣になさらないで下さい。

石川。御戯談にしても、僕としては考へなくちやアならない問題です。いや、考へなくもありませんでした。あなたが普通のかただつたら、そう云ふ手段を取つて下さつても仕方ないつもりでした。

正信。まさか。――僕としても、もしあなたのやうなかたでなかつたら、犬儒的にそんな事をしなかつたとも云へませんかね。はははは……。

石川。（促すやうに）、辨償ツて仰るのは？

正信。極めて簡單なことです

石川、うなづいて注視する。

正信、御わかりになりませんか？

です。

石川、相變らず默つてゐる。

正信。（樣子を見ながら、しばらくして）で、端的ですが、御決心次第で千代子は差しあげます。——いかがです。受け取つて下さいますか。

石川。（顔をあげて、憂欝と決心との混淆した表情で）どう云つていいかわかりません。然し、讓つて下さると仰るなら、責任を以て頂きます。

正信。そうですか。ぢや僕は一切を犧牲にして、あれはあなたに差しあげます。

石川。ありがとう御座います。（重く頭をさげる。）

正信。然し、急に表向きに定めては、反つて世間の手前も面白くないでせう。あなたも、社會的に充分立派な方ですし、姦通——結婚ツて云つた形式が露骨になつては、いろいろ御迷惑が多いと思ひます。しばらく、今迄どほりで置いて下さい。そのうち、妻に對して急にいや氣がさしたやうにして、僕は體よく離縁します。そこで、又少し經つてから結婚して下されば、世間でも誰も何とも云ふ筈はありません。

石川。そうですか。何から何まで氣をつけて下さつて、御禮の言葉もありません。

正信。いや、あなたがたとちがつて、僕はかう云ふ世間的な仕事に携はつてる人間ですから、こんな事にも餘計な氣を使ふんです。（喉をうるほすやうに、一口茶を喫む。）

双方默る。

石川。（沈默に堪えられなくなつたやうに、）では、今日は失禮させて頂きます。いづれ、あと千代子さんともよく相

議しまして改めて御願に伺ひます。（立つて頭をさげる）

正信。（遮つて）ちよツと御待ち下さい。まだ少し御話したい事があります。（手で、腰をおろすやうに指圖する。）

石川。（不審さうに）何か——？

正信。（落ちついた調子で）、外でもありませんが、少し千代子を賠償して頂きたいんです。

石川。（重ねて不審さうに）と仰ると？

正信。なに、べつに精神的にどうかうと、面倒な條件なぞ持ち出すわけぢやありません。又、肉體的、乃至法律的の賠償、——つまり、或る期間的刑務所生活をして頂きたい、なぞと申し出るわけでもありません。

石川、やゝびツくりしたやうに正信の顔を見る。

正信。（見返して笑ひ出す。）はははは、いや、これは戯談です。どうか不氣にならないで下さい。

石川。御戯談にしても、僕としては考へなくちやアならない問題です。いや、考へなくもありませんでした。あなたが普通のかただつたら、さう云ふ手段を取つて下さつても仕方ないつもりでした。

正信。まさか。——僕としても、もしあなたのやうなかたでなかつたら、犬儒的にそんな事をしなかつたとも云へませんかね。はははは……。

石川。（促すやうに）、賠償ツて仰るのは？

正信。極めて簡單なことです

石川、うなづいて注視する。

正信。御わかりになりませんか？

石川。（辨せないやうに）どうぞ仰つて頂きたい。
正信。（半ば戯談らしく笑つて）少し金を頂きたいんです。
石川。おどろかされたやうに彼を見る。
正信。いや、こんな事を云へば、如何にも會社員らしい奴だと御思ひかも知れませんが、下級社員ではなし、僕の氣持は決してそうぢやありません。千代子を失ふ事は、僕に取つては無論金に換算する事の出來ない損失です。僕の傷手は、とても金で癒り切るもんぢやありません。それは、今までの言葉でよくわかつて下さつたでせうな。……然し。世の中の事にはみんな償ひがあります。自然でも人事でも、どこを見ても賠償の法則がおこなはれております。手近な、この僕の勤めてる保險會社の仕事でもそうです。それがなくては、たとへ所謂宗教と雖も、根本に於いて成り立たないツてのが僕の信條です。勿論道德的な人間の場合には、その賠償も出來るだけ道德的で、又簡單容易なものでなければなりません。その代表的な形式は金です。失禮ながら、立派な紳士のあなたが、人間の何より大事な物を取りながら、相手に何の賠償もせずにゐらッしやるとすれば、それこそ大きな苦痛だらうと思ひます。僕は、前云つたやうに、決して心の問題を金で勘定するつもりはありません。ただ、あなたの良心のホンの氣休めと、更に實際的な事は、この後僕が世間から退くやうな場合、靜かに衣食に窮しないだけの用意が欲しい、その爲めに、遠慮なく申しあげるわけです。
石川。（時々彼を凝視して聽いてゐたが）そうですか。わかりました。……が、その問題はしばらく考へさせて頂けませんでせうか。
正信（頗る意外そうに）どうしてですか？何も、あなたとして御考へになるほどの事ぢやないと思ひますが。——それに、さつきあなたは、この問題については僕の云ふとほりにするツて、明言して下すつたぢやありませんか。

石川。それは云ひました。――。

正信。（おッかぶせるやうに）ははア、あなたは、何か僕が大へんな金でも請求するんだと思ひちがへてらッしやるんですな。いや、そんな御心配は要りません。率直なところ、たッた一萬圓ばかりで結構です。

石川、彼を凝視する。

正信。（つづけて）それッぱかりの金は、失禮ながらあなたに取つちや何でもないでせう。

石川。（苦痛な調子で）如何にも今のところまだそれ位な金には事を缺きません。然し……御話を伺つて、どうも少し腑に落ちない點があります。と云ふのは、いろいろ理由を伺ひながら、何だかやつぱり金で――失禮ですが――千代子さんを賣つて頂くやうな氣がしてなりません。その點を、も少し考へさせて下さいませんか。

正信。（急に粗野な語調に變つて）ふむ。そんなふうに思へるんですか。それは、即ちあなたが金にきたないつて證據だ。

石川思はず彼を眺める。

正信。（口調を變へて）そうでなかつたら、奇麗さつぱり御出しになつたがいいでせう。僕の方は、少し都合があつて、そういつ迄も考へて頂いては困るんです。出來るなら、今日のうちにでも渡して頂きたいんです。――なほ、念の爲め附け加へますが、この話は、千代子にはどうかしやべらずにゐて頂きたい。

石川。（いよいよ意外そうに）それは又なぜ？

正信。なぜつて事もありませんが、同じく僕の主義です。かう云ふ問題に女を入れると、ただ面倒を増すばかりです。男同志のあいだで適當に諒解し解決して、あと、女は何も知らなくてもいい、ただ彼女の一番幸福なやうに處理してやるのが、こんな場合男性の義務だと信じてます。

石川。然し、問題は直接千代子さんに關係してゐますし……。

その時、コツコツとドアを叩く音がする。

正信。いや、そんな事は、この際考へに入れなくつていい事です。

又ノツクの音

正信。（焦立つやうにそつちへ向いて）誰だ？入つてもよろしい。

ドア開き、さつぱりした洋裝の千代子が現れる。正信も石川も、思はず恐愕する。千代子一人に默禮して進み、石川の斜め横、舞臺正面の椅子へ片手をかけて、正信を見る。

正信。（鋭く詰問的に）なぜ今頃、こんな所へやつて來たんだ？

千代子。わたしの社はすぐ傍ですもの。それにあなたの妻でせう。伺ひたくなれば、いつ伺つたつて構はないでせう。

正信。（怒りを抑へられないやうに）何て口のききやうだ！

千代子。（キツとして）それより、何故わたしとの約束を守つて下さらなかつたんです？

正信。お前の戀人（ラヴァ）を呼び出したのが惡いつて云ふのかね。

千代子。それが御返事？

正信。うそを云ふなら、お前だつてあんまり負けない方だらう。

千代子。ぢや、あの時ッから、わたしをペテンに掛けるつもりでらしつたのね？

正信。なに、おれはただ、無理强ゐの約束を守る義務を認めなくなつただけの事さ。

千代子。金の爲めにはね。（吐き出すやうに）あなたは、一度に二重の破廉恥を犯してらッしやるんだわ。

正信。（憤激を抑へつけて）そこらの鍵穴から、ひとの話を盗み聽きするのは、果して破廉恥ではたいかね。

その時、又コッコッとノックの音。

正信。（ギョッとして）誰だ？

女給仕が入つて來る。

今、社長さんが御呼びでいらつしやいます。

正信。（穩かな調子で）そうか。よし、今すぐまゐりますつて。

給仕。はい。（輕く頭をさげて去る。）

正信。（立つて石川へ向つて）ぢや石川さん。賠償の方は、出來るだけ早く御返答ねがひませう。いや、全く簡單きはまる事です。――（一寸言葉を切つて）まさかあなたに御異存はあるまひと思ひますが、もしそれ位の謝罪の印しさへ見せて下されないとすれば僕の方でも考へを變へます。男の復讐心で或はどんな手段を取らないとも限りません。

千代子。脅迫なんぞ御よしなさいッ。

正信。（キッとして）これがただの脅迫のつもりでゐたら、臍を噛むぞ。――（石川へ向つて）あなたは、かねがねケチン坊だつて噂を聞いてますが、そう云ふ不名譽な評判を、この際一つ立派に拭き取つて頂きたい。……よう御座んすか？

石川。（やつぱり立つて、怒りを抑へながら）よ御座んす。

正信。ぢや失禮。（輕く一揖して、千代子の横を通り拔けながら、眼と眼を合はせて瞬時對峙する。）

正信。いいランデブッの場所だ。切角話をするがいい。（皺撓な調子で去る。）

千代子。（見送つて、いきなり）先生、許して下さい！（叫びながら石川の胸へ縋りつく。）

石川默つて彼女を片手にかかへる。

千代子。(顔をあげて) 許して下さい。こんな目に先生を會はせて、——さぞうそ吐き女だと御思ひでせう。(胸で、聲を立てずに泣き出す。)

石川。(静かな調子で) あなたは、どうして僕がここへ來た事を知つたんです?

千代子。(手早くハンケチで涙を拭きながら) ゆふべ、決して先生に會はないやうにツて片山に頼んだんですけれど、むの人の事ですから、もしこんな事もあらうかと氣がかりで、——それに、あれほどわたしから御願ひしておきながら、とうとゆうべ稲毛の事をしやべらされて了ひましたから、その御詫びやら御話やら、是非お目にかかりたいと思つて、今朝社へ出て來る前、牛込の御宅の方へ廻りましたの。と、案の定丸の内から電話がかかつて御出かけになつたつて、お母さまの御話でせう、いそいで飛びつけて來ましたの。

石川。ふむ。片山さんの手にかかつちやあとてもあなたには隠し終せなかつたでせう。いや、反つてよかつたんです。然し、なぜあなたは、今日僕をここへ來させたくなかつたんです?

千代子。どうせかうなる事がわかり過ぎてましたもの。——わたし今まで先生を騙つて、片山をいい人のやうにばかり云ひつくろつて來たのも、一つはその爲めです。勝氣と一緒に、そう云ふいやな事を先生に知つて頂きたくなかつたんです。片山に知られれば、もう駄目だと思ふ傍で、わたし達の事が先生にわかれば、もうお了ひだと思ひましたの。……決して、わたし先生を陥れやうと思つたわけぢやありません。そのうそのお蔭で、——これが先生へのただ一つのうそです。——どれだけ苦しんで來たかわかりません。どうか勘忍して下さい。

石川。その御言葉にはうそのない事を信じます。然し、ぢや初めつから、あなたは結婚の事は考へてらツしやらなかつ

たつたんですか？

千代子。出來る事なら、どんなに願つたでせう。でも、とてもかなはない望だつて氣が、だんだん強くなつて來ました。片山がゐるばかりぢやありません。先生は、わたしに取つてはあんまり立派すぎます。そのうへ心の持ちかたがちがつてらツしやいます。さう思ひながら、でもどうしても思ひ切れないんです。先生無しでは、わたしもうどうする事も——生きる事も死ぬ事も出來なくなつて了つたんです。重役の妾の子なぞに生れて、身寄りもない冷たい世間で散々苦勞させられて、物心がついた時分には、又うまうま片山に欺されて、もう此の世に何の望みもなくなつて了つてゐたわたしです。その、生きた死屍のわたしの心を、先生は初めて生かして下さつたんです。殊に一昨日の晩。……もういつ死んでも、わたし構ひません。でも、先生をこんなハメに落したかと思へば、死んでも死に切れません。

石川。(じツと見て) あなたは、今まで死をお考へになつた事がありますか？

千代子。考へましたとも。……考へるばかりか、何度思ひ立つたか知れません。先生と親しくさせて頂いてからも、わたしきつと自分の心を適へやう、もし適へられなかつたら死なう、と決心してゐましたわ。でも、とうとかなひましたわね。いいえ、先生がかなへさせて下さつたんですわ。わたし、先生の御やさしさにはどんなに感謝していいかわかりません。——(突然笑ひ出して) ほほほほ、わたし、一體隨分複雜な氣もちを持つた女ですの。人を人とも思はない不敵なところも、人に云はれるまでもなくよく知つてゐます。ほかの人には、誰に對してもその氣もちから離れる事は出來ません。それなのに、先生に向つてはこんなに、まるで處女のやうな純粹な氣もちになれるなんて、ほんとにうそのやうですわ。わたしの心の中に、まだこんな無垢な物が殘つてたかと思ふと、泌々自分

石川默つて彼女を片手にかかへる。

千代子。（顔をあげて）許して下さい。こんな日に先生を會はせて、――さぞうそ吐き女だと御思ひでせう。（胸で、聲を立てずに泣き出す。）

石川。（靜かな調子で）あなたは、どうして僕がここへ來た事を知つたんです？

千代子。（手早くハンケチで涙を拭きながら）ゆふべ、決して先生に會はないやうにツて片山に頼んだんですけれど、あの人の事ですから、もしこんな事もあらうかと氣がかりで、――それに、あれほどわたしから御願ひしておきながら、とうとゆうべ稻毛の事をしやべらされて了ひましたから、その御詫びやら御話やら、是非お目にかかりたいと思つて、今朝社へ出て來る前、牛込の御宅の方へ廻りましたの。と、案の定丸の内から電話がかかつて御出かけになつたつて、お母さまの御話でせう、いそいで飛びつけて來ましたの。

石川。ふむ。片山さんの手にかかつちやあ　とてもあなたには隱し終せなかつたでせう。いや、反つてよかつたんです。然し、なぜあなたは、今日僕をここへ來させたくなかつたんです？

千代子。どうせかうなる事がわかり過ぎてましたもの。――わたし今まで先生を騙つて、片山をいい人のやうにばかり云ひつくろつて來たのも、一つはその爲めです。勝氣と一緒に、さう云ふいやな事を先生に知つて頂きたくなかつたんです。片山に知られれば、もう駄目だと思ふ傍で、わたし達の事が先生にわかれば、もうお了ひだと思ひましたの。……決して、わたし先生を陥れやうと思つたわけぢやありません。そのうそのお陰で、――これが先生へのただ一つのうそです。――どれだけ苦しんで來たかわかりません。どうか勘忍して下さい。

石川。その御言葉にはうそのない事を信じます。然し、ぢや初めつから、あなたは結婚の事は考へてらツしやらなかつ

たつたんですか？

千代子。出來る事なら、どんなに願つたでせう。でも、とてもかなはない望だつて氣が、だんだん强くなつて來ました。片山がゐるばかりぢやありません。先生は、わたしに取つてはあんまり立派すぎます。そのうへ心の持ちかたがちがつてらツしやいます。さう思ひながら、でもどうしても思ひ切れないんです。先生無しでは、わたしもうどうする事も――生きる事も死ぬ事も出來なくなつて了つたんです。重役の妾の子なぞに生れて、身寄りもない冷たい世間で散々苦勞させられて、物心がついた時分には、又うまうま片山に欺されて、もう此の世に何の望みもなくなつて了つてゐたわたしです。その、生きた死屍のわたしの心を、先生は初めて生かして下さつたんです。殊に一昨日の晩。………もういつ死んでも、わたし構ひません。でも、先生をこんなハメに落したかと思へば、死んでも死に切れません。

石川。（じツと見て）あなたは、今まで死をお考へになつた事がありますか？

千代子。考へましたとも。………考へるばかりか、何度思ひ立つたか知れません。先生と親しくさせて頂いてからも、わたしきつと自分の心を適へやう、もし適へられなかつたら死なう、と決心してゐましたわ。でも、とうとかなひましたわね。いいえ、先生がかなへさせて下さつたんですわ。わたし、先生の御やさしさにはどんなに感謝していいかわかりません。――――（突然笑ひ出して）ほほほほ、わたし、一體隨分複雜な氣もちを持つた女ですの。人を人とも思はない不敵なところも、人に云はれるまでもなくよく知つてゐます。ほかの人には、誰に對してもその氣もちから離れる事は出來ません。それなのに、先生に向つてはこんなに、まるで處女のやうな純粹な氣もちになれるなんて、ほんとにうそのやうですわ。わたしの心の中に、まだこんな無垢な物が殘つてたかと思ふと、泌々自分

を抱きしめたくなります。それも、やつぱり先生の純潔さのせいですわ。それが、わたしにこんな美しい芽を育てて下さつたんですわ。

石川。（感動させられて、彼女を片腕で抱きながら）僕に何の力があるもんですか。みんなあなたの美しさからです。

千代子。（頭を振つて）いゝえ、先生無しに、どうしてこんなしほらしい泣きたい氣もちになれませう？わたし、もうこれで立派に生きました。結婚なんぞ、決して目的ぢやありません。出來さへしたら、……でも、よしほかの事情が許しても、わたしに缺陷があり過ぎます。結婚より、わたしには死の方が近しいんです。心が適つてもどうせ死だ、ツて氣が、始終心の底ではしてゐました。でも、少しでも此のうれしい日を長く、又先生に御迷惑のかからないやうに、ツて云ふ氣もちが、今日の破滅を恐れたんです。

石川。（決心した調子で）それだけの御心があるなら、死ぬ事なぞは要りません。どんなにでもして、僕達は生きて行けそうです。片山さんが金で離縁するツて仰るなら、よし、いくらでも出しませう。そんな潔癖には換へられません。

千代子。（見あげて）さう云つて頂くのはうれしいんですけれど、……まだ、先生は片山を御存じないんです。

石川。勿論充分には知りませんが、そんなに惡いかたとも思ひません。始終金の仕事に頭を使つてゐれば、あれ位な言葉は當然でせう。むしろ、割合物のわかつた、さツぱりしたかただとさへ思ひます。それに、こんな場合には、假りに位地を顚倒した氣もちも考へてあげなくちやいけません。

千代子。（やや躍氣になつて）だから、まだ御わかりにならないつて云ふんです。片山は一度や二度で正體を露すやうな、そんな容易（たやす）い人間ぢやありません。もツともツと、底の深い惡黨です。——さツき、一萬圓よこせ、とか何とか云つておりましたわね。

石川。そうです。
千代子。丁度その時わたし來合せましたの。……先生は、そのとほり御思ひになつて？
石川。信じられませんか？
千代子。られませんとも、それは、最初先生から捲きあげる御金ですわ。あと、まだ幾らでも云ひがかりをつけて取らうとするんです。
石川。そんなに、一體片山さんは金ばかり欲しいだらうか。
千代子。まだ十年にもならない前、ほんとに一文なしでキユツキユツ云つてた人が、今隨分な金を作つて、大金持ちの別莊見たいな家まで建ててるのは、みんなその凄腕の爲めです。あの美貌を種にして、わたしの前にもあとにも、女だけでもどれ位引ツかけてるかわかりません。それがみんな一つは金の爲めです。
石川。ふむ。とすると、僕は意地にもやれないな。
千代子。うるさいだけでも、先生のやうなかたに我慢出來つこありませんわ。
石川。出さなけりあ、僕達を訴へるでせうか。
千代子。駄目だと見たらやりかねません。
石川。（重ねて決心した樣子で）その方が、僕達の心もちもハツキリします。あなたさへよければ、僕はいくらでも刑を受けます。
千代子。（荒く遮つて）家長權本位の、男本位の、××××××××××、先生は尊重なさるんですか？
石川。決して。――でも、どうしても受けなければいけないものなら……

千代子。（きツぱりと）いやです。いやです。わたしは受けません。このうへ男の社會の侮辱を受けることなんぞ、とても忍べません。片山が先きに牢へ入るなら格別……。

石川。でも、今の場合では……。

千代子。わたしばかりぢやありません。先生を刑務所へなんぞ、どうして入れられます？ いゝえ、そんな目に先生を會はす位なら、わたし死んでしまひます。

石川。だが、僕達さへ信じ合へれば、そして一緒に生きて行けるなら、そんな事どうだツていいぢやありませんか。××を無視してゐるあなたにも似合はない。

千代子。いゝえ、わたしの世間的な見榮位はもう何ともありません。けれども、わたしの爲めに何の罪もない先生まで、……いけません。それに、そんな事をしていらしツたら、切角の新しい生活はどうなります？ それが先生の新生活の一歩ですか？

石川。（たぢろいで）その點は、無論僕にも隨分苦痛です。でも、なるものはならせるより仕方ありません。あせツたところで仕樣ありません。僕が刑務所の門から出て來た時、初めてほんとに新しい生活がひらけないとも——。

千代子。（やや早口に）先生は羨ましいわ。……でも、わたしにはもうそんな力は殘つてません。（石川の胸へ頭を押しつける。）

その時、ドンの音。つづいて汽笛の鋭ふやうな遠音。窓外に噴き出す白煙、バタバタと、そとの廊下を驅け出して行く物音なぞ、都會的騷音のうちに幕。

第五幕

人物

石川謙造
謙造の母
子供（雪子、欣二）
野口新作
女中
片山千代子

時

六月六日午后

所

石川の牛込の借家二階

舞台

如何にも借家建てらしい、一寸見せかけだけつくろつた安普請の二階。正面奥に障子が閉め切られ、（その蔭は手摺り附きの小さな椽側になつてゐる。）右手の書院風の壁の前に、質素な低い書き物机が一つ。上に本や文房具類が置いてある。

舞臺右は奧に、本を積んだ床の間、前手は押し入れ。左手に襖。しみのついた天井の眞ん中に電燈を取りつけ、その紐を机の上まで引つ張つてある。かなり古い室。

幕あくと、石川が机へ向つて何か書いてゐる。女中が襖をあける。（初幕と同じ女中ながら、着物なぞすつかり質素になつてゐる。）

女中。あの、野口さんがいらつしやいました。

石川。野口？（びつくりしたやうに振り向く。）

女中。はい。

石川。（思はず呟く。）そりや困つたな。（當惑した様子。）

もう階子段をギシギシあがつて來る足音が聞える。

石川。（決心したやうに）よし。（立つて、押し入から座蒲團を出し、左寄り恰好な場所へ敷く。）

女中手傳はうとする。

石川。いや、結構。

そこへ野口が現はれる。同じく和服姿。

野口。やあ、昨日は失敬。

石川。僕こそ失敬した。（机の前の座蒲團を取つて、野口と對ひ合ふ。）

野口。（去らうとする女中に向つて）お茶なぞは要らんから、しばらく來ないでくれ給へ。少し話があるから。

女中。はい。(去る。)
野口。(石川へ向つて)脚の工合が悪いから、相變らずゆつくりさせて貰ふ。(胡坐をかく。)
石川。無論だ。
野口。(石川の顔を見て)昨日君が歸つてから、いろいろ考へて見た。
石川。(氣の毒さうに)飛んだ心配をかけて濟まなかつたね。
野口。べつに賴まれもしないが、何とか友達甲斐に智慧が出ないもんかと思つてね。
石川。ありがとう。
野口。が、やつぱり名案も浮ばなかつた。——(一寸語氣を變へて)あの問題については一切話してくれたんだらうな。
石川。一切?
野口。細かにつて愁を云へばキリあないが、勘くもかくしてゐる事はあるまいな。
石川。(ややたぢろいで)何もかくしちやアゐないよ。
野口。さうか。でないと、切角考へて見たとこが、何の足しにもならんからな。
石川。どうか、考へを云つてくれ給へ。
野口。考へつてほどの事もないが、君!片山の云ふとほり一萬圓拂つてやれ。
石川。うむ……。
野口。たしかに片山はそう云つたんだらう?もしそれ以上出せの何のつて云つたら、僕が相手になる。何なら、その受け渡しの時も立會はう。

石川。君の志は感謝する。が、……。

野口。(おつかぶせるやうに)くだらん潔癖は云ふな。向ふが常習犯なら、常習犯として輕蔑してゐりやアいい。何も、その爲めに、君がけがされるわけでも何でもないぢやないか。そりやあ氣もちが惡いか知れないが、一方からは、奴の言葉どほりこんな簡單な事アない。金さへ取りやあ構はないつて相手の腹を、逆に利用してやるがいい。向ふを圖に乘らせるが口惜しいの何のツて、そんなお坊ちやんらしい潔癖や正義感は、この機會にサラリと棄てちまへ。君は一方無暗に呑氣で、金にダラシなさすぎるくせに、一方變に肩肱張つたところがあツていかん。

石川。君の云ふとほりだ。が——。

野口。(つゞけて)それとも、そんな俗惡な形式はどうしてもいやか? いやなら、刑務所へ入るより仕方あるまい。君に、どこ迄も生き抜いて行く勇猛心さへありやあ、それも決して反對はしない。いや、勇猛心より身體だ。身體さへ持ちこたへられりやあ、……だが、君の身體はあんまり丈夫な方ぢやアないからな。萬一刑務所の中で死にでもしたら、君は兎に角、僕達友人があきらめられん。

石川默つて俯く。しばらく。

野口。(樣子を窺つて)何だ、泣いてるのか?

石川。(手で眼を拭つて)あんまり心をかけてくれるんで、涙が出た。

野口。(强く)僕に感謝するより、君の心もちを定めたまへ。

石川。僕のやうなつまらん人間が、そうまで君達に心を寄せられるのは勿體なさすぎる。

野口。そんな事アどうでもいい。それより——。

石川。（決心したやうに）ぢやあ、もう少し氣もちを聞いて貰はなくちやアいけない。聞いてくれるか？

野口。云つてくれ。

石川。心の底を云へば、千代子と結婚したとこで希望はないんだ。」

野口。ぢや、君は結婚を希望してゐないのか。

石川。希望してゐない事はない。が、それが二人の幸福になれるかどうかには、一向自信が持てないんだ。

野口。――とすると、つまり彼女が君にふさはしくないと考へてるのか。

石川。僕も彼女にふさはしいとは云ひ切れない。

野口。（追窮的に）ぢやあ君は、まちがつて千代子さんと關係を結んだと思つてるんだな。

石川。まちがつたかも知れないね。が、まちがつたとも云ひ切れない。

野口。いよいよ出でて、いよいよ晦澁を極めるな。と、君アあの人に對してまだ態度が定まつてないのか。

石川。それは定つてる。定つてればこそ、はツきり云ひ切れないんだ。

野口。僕だけにやあ、も少し腑に落ちるやうに云へないもんか。

石川。（思ひ切つたやうに）そんなら云はう。僕あ、無論あの人を一時の慰みにしたわけぢやない。だが、僕がほんとに強かつたら、あの人に許すべきぢやアなかつたんだ。許してもよかつたなら、今こんな苦悶はない筈だ。自分の將來の爲めには、決して僕は許しちやアいけなかつたんだ。なぜなら、二人が一緒になつたツて、その生活には將來の希望が懸けられないから……。

野口。（頗る意を得たやうに）そうだ。此の前初めて彼女に應接間で會つた時ッから、僕はそう思つてたんだ。なぜあ

んな、君の細君として、いや、一般的にも細君として不適當な女と、そんな面倒な事を惹き起したかと思つて、實は昨日君から話を聞いた時ッから、口惜しくて口惜しくて仕方なかつたんだ。平たく云へば、君はうま〱引ッ掛けられたんだ。だが、馬鹿に君が庇つた云ひかたをするし。おまけにもう出來た事で、今更君を責めて氣もちを悪くさせたとこで仕方ない、責任感の強い君の事だから、いきなり僕の氣もちをぶッつけたら反つてブチ毀しになるだらう、と思つて、今まで控えてたんだ。

石川。（力なく）さうか。

野口。だが、あの女に負かされた君もわかるつもりだ。何てッても、長いあいだの寡夫生活だッたからなあ。そこへ持つて來て、かなりフエミニストの、殉情的な君のこッた。あの三十女の美貌と手管で、ネチネチ蛇のやうに執ッこく卷きつかれちやあ、とてもかなはないなあ當り前さ。今更こんな愚痴を云つたッて始まらんが、君がいつまでも前の細君や子供に惹かされて、いくら僕達がすすめても後添ひを貰はずにゐさへしなかつたら、今こんな馬鹿々々しいまちがひも起らなかつたんさ。

石川。（遮つて）いや、さう云つちやあ千代子さんが氣の毒だ。

野口。（叱りつけて）すぐそんな事を云ひたがるのが君のくせだ。そこが、矢鱈に女に好かれるとこかも知れんが、よせ！――だから、實のとこを云やあ、金を出すの訴えられるのッて君が嚇かされてゐるのが、僕あ癪にさはッて仕方ないんだ。こッちからこそ、誘惑罪の賠償をさせたい位だ。だが今更仕方ない。かう云ふ怪我は、出來るだけ輕く濟ませるが何よりだ。もし君が糞眞面目に、やれ刑務所へ入るの出るのッて騒ぐなら、それこそ滑稽至極だ。それより、手ッ取りばやく金で濟ましちまへ。そして女を引き取つたら、何とかしていいやうに別れ給へ。それもどうでも

氣が濟まないなら、一緒に棲まうと勝手だが、そんな事ア、又あとで考へなほしたッて晩かアない。差し當り、片山のカをキツパリ片づける

石川。（苦惱に滿ちて）君の好意はありがたい。が、それぢやあ千代子さんに對して不當だ。

野口。（腹を立てて）又千代子さんか。どうして、君はさう人に對して思ひ切りが悪いんだらう。そこが君の美點かも知れんが、美點もあんまり度が强くなりすぎると、腹が立つ。もう少し、そんな方面の決斷力を養つたらどうだ？

石川。忠告は感謝するが、ぢやあ全く僕がいい子になりすぎる。喧嘩兩成敗と同じに、戀愛關係も兩責任だ。千代子さんが悪けりや僕だッて悪い。僕がよけりやあ千代子さんだッていい。

野口。（堪へられないやうに）何を又くだらん對句を始めるんだッ！

石川。（きりッとして）いや、ほんとだ、君が千代さんをそう考へるのは無理ない。僕だッて初めはさうばかり考へてたんだ。今だッて、君の言葉に或る眞理を認める。多分千代子さんも認めるだらう。あの人の過去の境遇が、そんな性質にし、又その性質が今のやうな立場を作つてるんだ。それから脱け出やうとしても、もうちよッと不可抗力だッて云つた形だ。が、その外に、底に千代子さんはかくれた眞珠を持つてゐる。それは、此の世で僕だけが知つてるものかも知れない。そして男と女の關係の中で、さう云ふ事は一番深い基礎になるものだらう。

野口。ぢや、君も彼女を戀してるッて云ふのか。

石川。そうかも知れない。いや、そう云つていいやうだ。

野口。僕に云はせりやあ、それも君の殉情の云はせるタワ言さ。

石川。すくなくとも、僕はあの人の美と眞實には强く惹きつけられてゐる。その爲めには、甘んじて生命を棄てても構

はない。

野口。（ギョッとして）生命？――（石川のうなだれた様子を見て）君は、まさか死なうなぞたア思つてまいな。

石川。（顔をあげて）もしどうしても生きられなくなれば、二人で死んでもいいよ。

野口。（吐き出すやうに）馬鹿なッ――きッと、そんな事をあの女に云はれてるんだらう。

石川再び頭を垂れる。

野口。當つたらう？……實際おそるべき女だ。だから、君は金を出す事にも身が入らないんだな。

石川。（顔をあげて）君の云ふとほりだ。だが、僕はまだ決して死にはしないから、安心してくれ。僕には、まだしなくッちやならない仕事がどッさりある。

野口。（强く）そうとも。君にやアまだウンと仕事がある。やッと今その緒につきかかッたとこだ。何もかもこれからだ。その事を夢にも忘れるな。

石川。忘れない。（悄然として）が、その大事な門出に、どうも僕は蹉跌したらしい。

野口。（鋭く）蹉跌？

石川。うん、切角生活革命まで漕ぎつけて來ながら、第一歩で、いや、まだ踏み出しもしないうちに、もう致命傷を負つた形だ。

野口。それは、あのブルジョア風な女に引ッかかつたッて事か？

石川。（苦痛に滿ちて）まづそうだ。

野口。君がさッき、まちがつて關係を結んだッてッたのは、その意味か？

石川。(沈痛に) そうだ。
野口。僕もさう思ふ。チエッ、相手もあらうに、あんな女に引ッかかるなんて!――だが、あながち君ばかりも責められん。外の女だつたら君も負けはしなかつたらう。今まで七八年間も、平氣でくらして來た位だからな。まつたく、あいつは變な魅力を持つてやがる。
石川。決して自己の辯護をするわけぢやアないが、今度の事は、まつたく免れられない運命だッた氣がする。自分で出來ない事がわかッてるくせに、生活革命なんぞ企てた當然の結果かも知れない。(自嘲的に)僕のブルジョア階級崩壞の信念を、何より美事に自分で證明したわけさ。
野口。理想は、時たま事實を引ッ張り出す。君があんな知識階級論を持つてゐたから、こんなことになつたとも云へる。考へ方によつて、一つは人間の運命が定るんだ。――だが、これッ位の失敗で、君はまだ亡びる必要はないぞ。そんな弱音を吹くなあ、平生生活派の君にも似合はん。初めッから、どんな困難が來たッて凌いで行く決心だッたぢやないか。
石川。(悄然として) そうだが、こんな打撃にぶッつからうたあ、まるで思ひがけなかつたよ。
野口。思ひがけた打撃ばかり來るたア、世の中は定つてない。元氣を振ひおこせ。そして、もう一度新しく踏み出せ。
石川。(沈んで) ありがたう。……だが、今度は僕は少し自分に絶望したよ。何より大事な自信を。もうどこかへなくなした氣がする。
野口。馬鹿を云へ!――それは、君があんまり眞面目に、刻命に、ムキに物を考へる例のくせだ。もう少し氣をユツクり持て。……(思ひついたやうに) 何なら、ここ二三日、どこかへ小さな旅行でもして來たらどうだ! べつに片山

の方はいそぐ事もあるまいし、もし用が出來たら僕が引き受ける。——そうして氣もちを換へりやあ、きツと又ちがつた考へも新しい力も附く。

石川。（急に快活になつて）ありがたう。なるほどそりやあいい。

野口。いいだらう。——都合さへ附きやあ、すぐでも出かけ給へ。……だが、千代子氏には、決して行く先きを知らしちやアいかんぞ。安珍淸姫ぢやないが、あとから追ツかけてでも來られたら、それこそ滅茶苦茶だからな。

石川。無論だ。

野口。氣もちさへ變はりやあ、なアに、適當な解決法はいくらでも見つかる。たとへば、そうまで君達が好いてるなら、君の力で、この後あの女の心の持ちかたを變へさせて行けないとも限らない。女に取つちあ、何より戀した男の力だからな。

石川。（苦笑して）そいつはあぶない。反つて、僕の方が壓倒される位が關の山だ。

野口。弱氣を云ふな。そう云ふ消極癖も、すツぱり洗ひ流して、元氣のいい顔を又ぶらさげて歸れ。ついでに、原稿も書いて來てくれ。

石川。（强ゐて快活に）出來るだけ書いて見やう。いや、これはよかツた。君に云はれる迄もなかつたのに、あんまり屈托しすぎて、つい今までそれに氣づかずにゐたよ。ははは。

野口。（やつと安心したやうに）ぢや、僕はまだ少し店に用があるから、これで失敬する。くれぐれも氣もちを大きく持て。（立ちあがる）

石川。（殘り惜しそうに）そうか。だが、下で茶でも一杯……。

野口。いや、今欲しくない。（襖の方へ行く）

石川。忙しいところを、そりやお濟まなかつたな。（立つて、あとから送つてゆく。）

しばらく舞臺空虚。——やがて、石川を先きに母親が現れる。

母。（立つたまま）すぐ出かけなさる？

石川。えゝ、ちよツとその前手紙を濟ませて——。

母。又せんだつての晩のとこ？

石川。（ギクリとして）いゝえ、まだどことも定めてません。何なら東京驛へ行つてから、時間の都合で定めやうと思ひます。

母。野口さんは、そんなに原稿を催促なさるの？

石川。えゝ、發行者ですから無理もありません。……原稿の方もですが、少し頭を休めて來たいんです。

母。（うなづいて）それがいいでせう。何だか、この頃妙に沈んでゐなさるから。——あんまり顏色もよくありませんよ。何だつたら、出かける前お醫者さんに診て貰つたらどう？

石川。いや、大丈夫です。決して御心配にや及びません。それより——（云ひ澱んで）お母さんこそ、馴れない生活やらいろいろで、さぞ御疲れでせう。僕が歸つて來たら、どうかゆつくりどこへでも休みにいらしつて下さい。

母。ありがたう。わたしは疲れなぞしませんよ。

その時階下で、女中の呼ぶ聲。「御隱居さま！」

母。え？

女中の聲。あの、ちよつと、水道の方の人がきゐりましたから――。

母。さうですか。……（又石川の方へ向いて）同じ山の手でも、この邊は不便ですね。（去つて行く。）

石川。（あとを見送つてから）濟みません。最後までうそをついてる僕を、どうか赦して下さい。（うなだれる）野口に對しても云ひわけがない。勘辨してくれ！（ツと障子の方へ行つて、あけて緣側へ出て、野口の去つた方を見る。）

瓦屋根やトタン屋根の起伏が觀客の眼に映る。空は銀灰色に薄曇つて、遠く屋上のマストの赤い旗が風に飜つてゐる。その上で、懶く鳶らしい鳥が輪を描いてゐる。その時、下の方の路で欣一と雪子の聲がする。

お父さん！

お父さん！

石川。ああ。――遊んで來たの？

欣一。えゝ。今ね、馬があばれて大騷ぎしたんですよ。

雪子。あがつてお話しませう。

欣一。そうしやう。

からがらと格子戶のあく音がする。石川、靜かに障子をしめて、もとの座へ戾る。間もなく、雪子を先きに欣一が驅けあがつて來る。

石川。（微笑しながら）どうしてあばれたの？――自動車にでもおどろいた？

欣一。（横ツちりに坐りながら）ううん、そうぢやないの。皮を積んだの。

石川。（不審そうに）皮を？

雪子。（引き取つて）馬の皮をどつさり積んで曳かせたんで、氣がちがツておばれたんですツて。

石川。（惹きつけられて）ほう。それが馬にわかつたの？

欣一。傍のどこかのおぢさんが、さう云つてましたよ。あんな事をすりやあ、馬はあばれるに定まつてるツて。

雪子。（涙ぐんで）人間だツたらいやに定つてるのに、どうしてあんな事をさせるんでせうね。

石川。（感動して）ほんとだね。人間て、實に亂暴をするもんだ。

欣一。馬方が、蹴られたり食いつかれたりして、病院へかつがれて行きましたよ。

石川。さうかい。

欣一。馬方も可愛さうだね、お父さん。

石川。ああ、その人だツて、やつぱりくらして行くためにそんな事もしなけりやア いけなかつたんだらう。（憮然とする。）

雪子。でも、大丈夫あの人助かりますよ。ほかの人がさう云つてました。

石川。さう？それはよかつたね。――（獨語のやうに）死を積む死か？われ蒼ざめたる馬を見たり、だ。

欣一。赤馬だつたんですよ。お父さん。

石川。さうかい。

雪子。（欣一に向つて）こわかツたね。

欣一うなづく。

石川。（父親の愛に滿ちて）そんな時、傍へ寄つて怪我をしないやうに、よく氣をつけなくちやいけませんよ。

欣一。（又うなづいて）えゝ。――（急に思ひついたやうに）お父さん。僕に斧を一つ買つて頂戴。

石川。斧？

欣一。僕、植木なんぞ伐りませんよ。その代り、何か要らない木を伐つて見たくツて仕方ないの。

雪子。木より手を伐つてよ、欣ちやん。

石川。どうして、又そんな物を欲しくなツたの？

欣一。今日學校で、ワシントンの御話をきいたの。

石川。（笑ひ出して）ああ、櫻の木の話かい。

欣一。そう。いつかお父さんによんで頂いた、あの正直なワシントンの話です。

石川。（やや暗い顔をして）それはよかつたね。――だが、斧なんか御よし。ここはワシントンの田舎の御家とちがツて、切つていい木なんか一本も無いんだから。……この夏どこかへ行つたら――（不意に口をつぐむ。）

欣一。（父親の顔を見て、殘念そうに）そう？

雪子。お父さん、ワシントンは、そんなに正直な人？

石川。（動かされて）あなたがたから見れば、正直でも何でもないね。あなたがたは、ワシントンと同じ位正直なんだから。……（苦しそうな顔色になつて）いつ迄もそうでなくツちやいけませんよ。お父さん見たいなうそつきになツちやア……。

　子供達眼をみはる。

欣一。お父さんうそつき？

石川。(狼狽して)ああ、お父さんはとてもかなはない。(何かに詫びるやうに)お父さんの眞似なんかしちやァいけないよ。――だが、うそつきの嫌ひな事は、お父さんだつて決して負けないよ。

欣一。(頑として)うそだい。お父さんは正直です。

石川。今まではかなり正直だツたがね。……だが、どんな正直な人でも、どうかするとうそをつく事がある。一番おそろしいのは、一度うそをつくと、あとからあとから幾らでもうそをつかなけりやァいけなくなる事だよ。そう云ふ達を見たら、あなたがたは憎むより、氣の毒だと思つてやらなくちやいけません。だが、うそをつかずに濟ませる人はほんとに幸福だ。

欣一。(無邪氣に)うその子供が出來るんだね。

石川。(微笑して)そうだよ。うそは澤山子を生むんだ。いやだね。

雪子。(父親の樣子を氣づかはしそうに眺めてゐたが)お父さん。何か心配な事でも御ありになつて?

石川。(ギクリとして、さりげなく)いゝや、何もありません。――(思ひ返したやうに)正直だの何だのツて、つまらない事を云つて惡かつたね。あなたがたには、そんな事を云ふ必要はちツともなかつたんだ。

その時、又下の方で格子戸のあく音がする。同時に、柱時計の打つ音がボンボン……と六ツ聞えて來る。

石川。(氣づいたやうに)ぢや、みんな又下へ行つて御遊び。お父さんは、これから少し手紙を書いて、旅行に出かけるから。

雪子。(見あげて)旅行?

石川。ああ。

雪子。おひとりで？

石川。そうだよ。書き物やらいろんな用でね。

雪子。(氣づかはしさうに)どの位泊つて？

石川。なアに、明後日位にや歸つて來ます。

欣一。なりたけ早く歸つてね。

石川。ああ、……何かいい物があつたら買つて來てあげやうよ。

　その時、女中が顔を出す。

女中。片山さんがいらつしやいました。

石川。どうぞ……。

　女中頭をさげて行かうとする。

石川。(追ツかけるやうに)お茶は要らないよ。今出かけるから。

女中。はい。(去る)

欣一。(これを見て)姉ちやん。ぢや行かう。(雪子の手を取つて行かうとする。)

雪子。(立つたままモヂモヂして)お父さん。わたしも連れてツて下さらない？

石川。(びツくりして)――だツて、あなたがたは學校があるぢやありませんか。

雪子。(淋しさうにおとなしく)さう？(何か心殘りの様子で、弟に連れられて行かうとする。襖のところで千代子に出會す。)

千代子。あゝ、ここにいらしッたんですか。――どうぞこれ召しあがつて。(片手のオペラバックの中から、透きとほつた長い袋入りの、あざやかな色の取り合はせの菓子を出して渡す。)

欣一。ありがとう。(一寸頭をさげて石川の方を向いて)お父さん。(見せる。)

石川。よかつたね。

雪子。ありがとう。(菓子袋を見、千代子の顏や姿を見、又父親の方を見返して、心もとなさうに去る。)

見送つて、千代子改めて石川の方を向いて、立つたまま頭をさげる。彼女の服装は、茶色の縮緬の單衣に、藤色の單衣羽織。黄味がかッた帶をしめてゐる。黒いオペラバックには、赤い大きな花の刺繍がしてある。

石川、默つて禮を返す。

千代子。(進んで、まへ野口の坐つた座蒲團へ坐つて)何て悧巧さうなかたでせう。――あのかた達から、たッた一人の、いいお父さんを奪ふんですわね。

石川。(淋しく笑つて)どうせ、いつかは奪はれるんですから――。

千代子。こんな立派なお父さんを、と、わたし自分の親に引較べて、今迄どんなにあのかた達が羨ましかッたか知れなかつたんですのに、……それだけ、心から申しわけない氣がしますわ。

石川。僕はやくざな父親ですが、あれ達は人一倍淋しがりやだから可愛そうです。僕がゐなくなつてからじッと堪えて行く樣子が、眼に見えます。――今でも、ほかの子供とちがッて、二人で碌に喧嘩もしない樣子を見てゐると、いぢらしくてやり切れません。

千代子。可愛そうに。………もしわたしに見てあげる事が出來たら、まアどんなにうれしいでせう。でも、そんな力は、

生れ返つても來ない限りありません――。

石川。そんな話はよしませう。

千代子。（重ねて）先生に一緒に死んで頂くのは、ほんとに大勢の人の胸から掛け換へのない、取りかへしのつかない物を奪ふことですわね。それを思ふと、空おそろしくなりますわ。わたしと來たら、誰にも何の損にもならず、反つて此の世の中がせいせいしていい位ですのに。

石川。（戯談らしく）仲々の惡戯なんですね。

千代子。（眞面目に）ほんとにさうかも知れませんわ。

石川。美と眞實を持つてられるだけ、餘計おそろしい惡戯でせう。

千代子。（氣づかはしさうに）先生は、わたしを憐んでらッしやいませんか?。

石川。どうして?――死ぬ事なら、むしろよろこんでさへゐます。昔ッから、僕は死を決して恐れません。一體樂天的な、生活好きな奴ですが、今迄いろんな事で何度死なうと思つたか知れません。殊に邦子を見送つた時から、それが何か馬鹿にスウーッとした、魅力のある物に思へてならなくなりました。どんなに苦しんでも、悲しんでも、最後に一切を片づけてくれる物が待つてゐるかと思ふと、ほんとに氣安い、感謝したい氣になります。

千代子。（感動して）どうして、先生がそんな氣もちを持つてらッしやるでせう。わたしこそ、昔ッからさうでした。死ぬのを考へられるばかりに、今まで生きて來たやうなもんですわ。先生を知らないうちは、わたしには死が此の世で一番の誘惑でした。でも、その取ッときの物が先生と一緒に獲られるなんて、ほんとに夢のやうですわ。

石川。（凝視して）その點ぢや、なるほど、僕の方がまだずッと此の世に惑かされてゐるかも知れません。生きられさへす

れば、僕はまだ生きたい氣です。行きづまツても藝術の仕事もあり、傷だらけになつても、生活革命の方も仕かけです。農場のこと一つ考へても、も少し行末を見たい。——が、今となつては　もうみんなおしまいです。

千代子。ほかに、まだいろんなかたへの愛が御ありになるぢやありませんか。

石川。それはもう思ひ切つてます。そんな方面は、あんまり鬪つて疲れてるせいか、むしろ負擔に感じられます。……が、ほかに一つ心殘りがあります。

千代子。何でして？

石川。（ゆつくり）自然。——これだけは思ひ切れません。殊に、秋が未練です。もう一遍日本の秋を、秋の姿を見て死にたい。

千代子。（ねたましそうに）そんなに、先生は秋がお好き？

石川。好きですとも。——（戯談にまぎらすやうに）あなたが、せめて此の秋まで待つて下さればどんなにいいか。（惹かされたやうに、思はず立ちあがつて、障子の方へ進み、あけて所々緑の木の覗いた外景を眺める。）

千代子。（じツとその後姿を眺めて）ほんとに先生は詩人ですわね。（立つて石川の傍へ寄る。）

石川。札幌の農科へ入つたのも、おもな動機は自然の愛だツたんです。それがもとで、クロポトキンや社會思想へも入るやうになつたんです。

千代子。そうですか。——（急に思ひついたやうに）そう云へば、わたしゆふべウツラウツラしてゐるあいだに、とても變な夢を見ましたわ。

石川。（振り向いて）どんな？

千代子。わたし大きな汽船へ乗つてますの。そら、せんだツて會社の應接間に貼つてあつた、あのポスタアのやうな眞ッ赤な汽船へ。――それが、アメリカ行きの船らしいんです。こんな船へ乗るんぢやなかツた、乗りまちがへた、と思つて、地團太踏んで口惜しがつてると、片山がニヤニヤ笑つて傍に立つてるんです。それが、どうも船長らしいんです。わたし怒つて、一言二言責めると、いつの間にかその顔が先生の顔に變つてるんです。びつくりして、先生どうなすツて？　ツて取りすがらうとすると、不思議さうな顔をなさツて、あなたはどなたです？　ツて御きゝになるでせう。わたし切なくなつて、何を仰るんです、御忘れになツたんですの？　ツて泣き出すと、どこか遠くの方で、千代子さん、千代子さん、て頻りに先生の御聲が聞えるんです。ハッと思つたら、眼がさめましたわ。

石川。（微笑して）ほう。妙な夢を見ましたね。（思ひ出したやうに）少し待つて下さい。あとになつて僕も名を呼ばないやうに、ちよツと書きかけの手紙を片づけますから。

千代子。どうぞ。

石川机の前へ戻つて書き初める。

千代子、もとの坐蒲團を一寸見て坐り　バツタの中から小さな懷中鏡を出して、髮を掻きあげたりする。その時、階下で蓄音機の音が始まる。曲は、シヨパンのフユネラルマーチ。千代子耳を澄まし、ギヨッとした表情をする。鏡を持つたまゝ聞き入る。不安動搖と、惹き込まれる氣もちとの交錯。曲半ばに石川手紙を濟ませ、立つて押入れから風呂敷を出し、手紙や用箋や封筒の殘りなぞを包み込む。そして一寸考へてから、立つて千代子の方を振り向いて、

石川。お待ち遠。――ぢや出かけませうか。

千代子。（彼の顔を見つめながら立つて）先生。あの音を御聞きになつて？
石川。子供達が掛けてるんでせう。
千代子。（重ねて）レコオドが御わかりになつて？
石川。（耳を澄ませて）ショパンのフユネラルマーチぢやありませんか。
千代子。（緊張して）さうです。――お母さんがたは、もうわたし達の事を御存じぢやありません？。
石川。（一寸不安さうになつたが、すぐ）いや、そんな筈はありません。
　その時蓄音機の音やむ。
千代子。先生、今日出かける事を、何て皆さんに御話になつて？
石川。原稿を書いたり、頭を休めたりして來るツて云ツたんです。初めは、いツそ何も云はずに出るつもりでしたが。
千代子。わたしの來る前、ここに（座敷團を指して）野口さんがいらしツて？
石川。（びツくりして）どうして御わかりです？途中で會つたんですか。
千代子。（微笑して）いゝえ。――。わたしさツきからそんな氣がしてなりませんでしたの？。
石川。（凝視して）ほんとなら、あなたはおどろくべき敏感者ですね。
千代子。（再び微笑して）だツて、あのかたはわたしを憎んでらツしやるんですもの。わたし、この頃殊に、ひとがどう思つてるかが、自分でも不思議な位わかりますわ。そして、わたしに對して强い感情を持つてる人だツたら、その人がさツきここにゐたかゐないか位な事は、大抵見當がつきますわ。
石川。さうですか。

千代子。先生は、今までも時々そうやつて原稿を書きにいらッしやいましたわね。

石川。さうです。だから、母達はもうすつかり馴れてます。

千代子。(安心して)ぢや大丈夫ですわね。(又不安さうに)ただお嬢さんが、——でも、まだ御小さいから。

石川彼女の顔を凝視する。

千代子。ほんとに、あのレコオドにはびツくりしました。どうして又、あんなの御かけになつたんでせう。

石川。(打たれたように)やツぱり何か心の底で感じてゐるのかも知れません。然し、僕達には丁度ふさはしい盤ですね。

千代子うなづく。

石川。出かけませう。

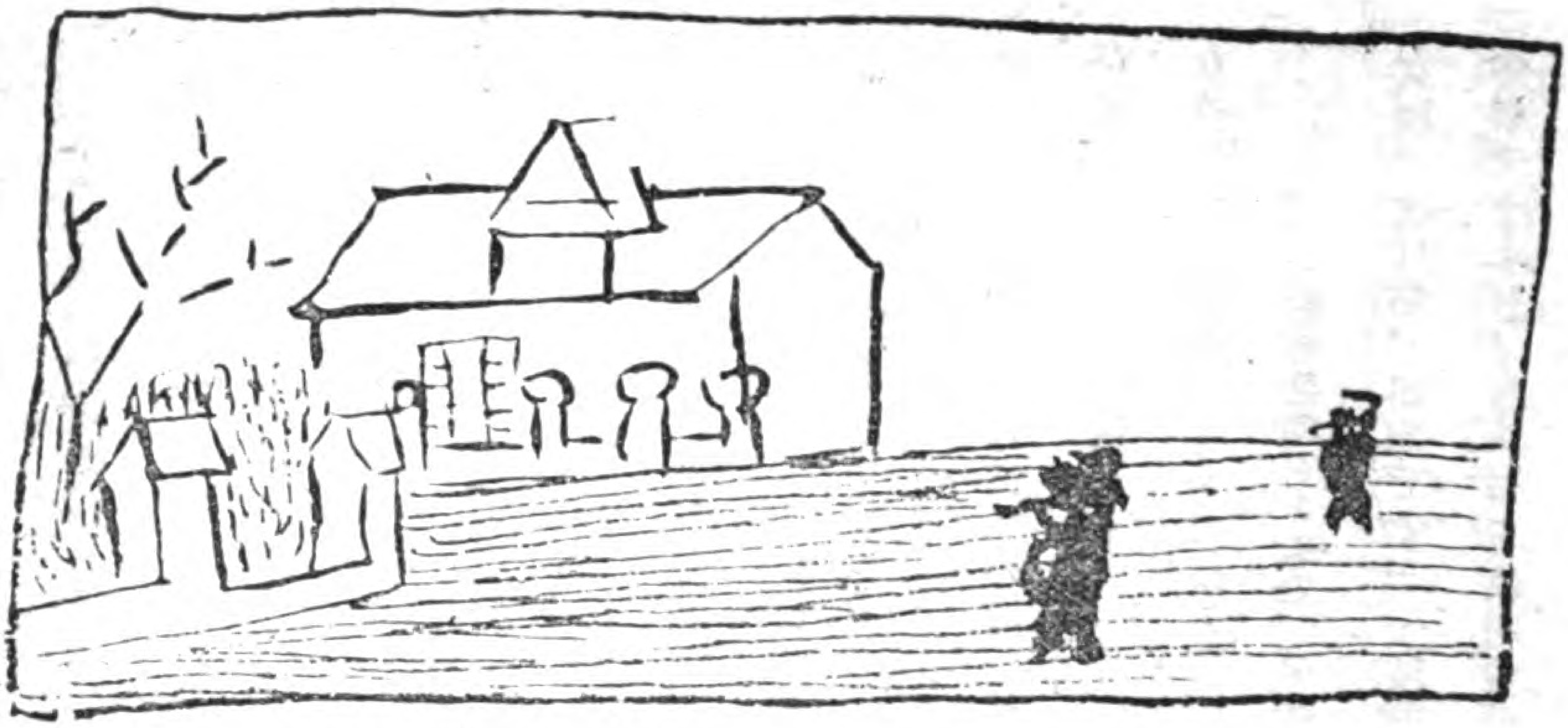
千代子。まゐりませう。(石川の頬に唇を押しつけて、片手でシツかり彼の手を握り、襖の方へ行きかける。)

その時、正面遠景に飜る旗のマストの頭に、ぽツと赤く圓い燈が點る。

——幕

附言

作者は、この曲を書くに、創作に當然の自由な取り扱ひと解釋を以てした。(事實と如何にちがつてゐるかこそ、むしろ作者の認めて貰ひたい點だ。)ただ・何分事實が近接してゐる。僕の戯曲的解釋に依つて、もし現實の人々に些少でも迷惑の及ぶやうな事があるなら、こんな遺憾はない。嚴正な創作的立場から、敢てこの理解を讀者にねがふ。



赤い靈魂

倉田百三

第四場

（金澤の別莊。F市の郊外。海邊の松林のかげ。廣い庭。木も石も凝つて選ばれてゐる。墻を越して一帶の松林と蒼い海とが見える。墻の一部に裏門。テーブルを圍んで金澤女將と藝者とを相手にしてビールを飲んでゐる。金澤は一部の時よりずつとふけて見える。）

女將。ご冗談でせう。そんな事、旦那……

金澤。いや本當なんだ。全く覺えてゐる事が出來ないんだ。

藝者。（顏をしかめ乍ら）おや、おや、それぢや慘めなもんだわ。

金澤。お前の顏は忘れはしないから安心しろ。（ビールを飲む）若い時にはこんな事はなかつた。この間橘家の女將と芝居に行つたんだ。すると向ふの棧敷にお客に連れられて來てゐる妓がゐて、こちらを向いてお辭儀したんだ。女將が旦那なんとか子ですと言ふのだけれど、どうもはつきり思ひ出せないんだ。

女將。だつて御自分が兎も角一度××××××を……

千代子。先生は、今までも時々さうやつて原稿を書きにいらツしやいましたわね。
石川。さうです。だから、母達はもうすつかり馴れてます。
千代子。(安心して)ぢや大丈夫ですわね。(又不安さうに)ただお孃さんが、——でも、まだ御小さいから。

石川彼女の顔を凝視する。

千代子。ほんとに、あのレコオドにはびツくりしました。どうして又、あんなの御かけになつたんでせう。
石川。(打たれたように)やツぱり何か心の底で感じてるのかも知れません。然し、僕達には丁度ふさはしい盤ですね。

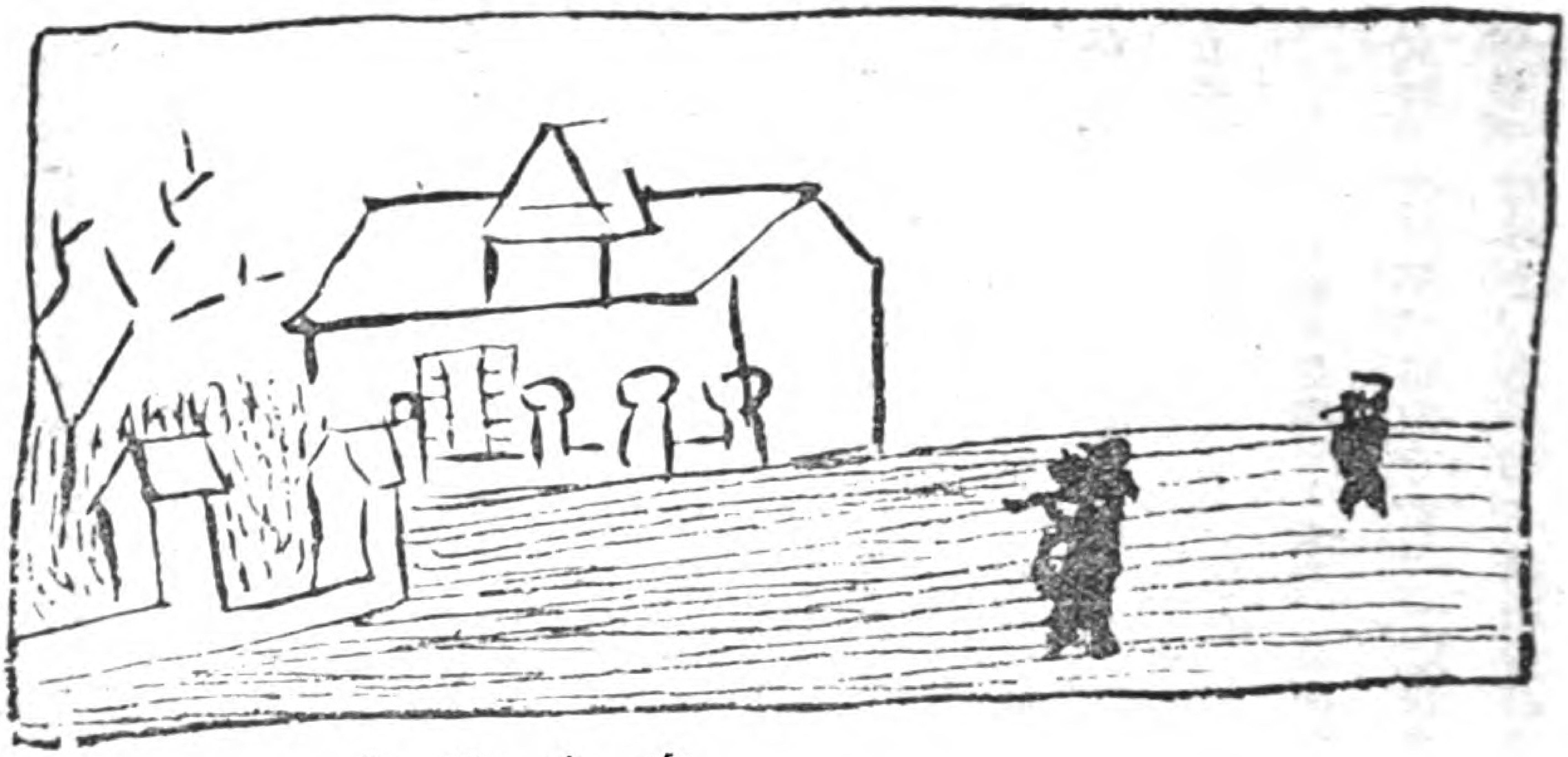
千代子うなづく。

石川。出かけませう。
千代子。まゐりませう。(石川の頬に唇を押しつけて、片手でシツかり彼の手を握り、襖の方へ行きかける。)
その時、正面遠景に翻る旗のマストの頭に、ぽツと赤く圓い燈(ひ)が點る。

——幕

附言

作者は、この曲を書くに、創作に當然の自由な取り扱ひと解釋を以てした。(事實と如何にちがつてゐるかこそ、むしろ作者の認めて貰ひたい點だ。)ただ、何分事實が近接してゐる。僕の戯曲的解釋に依つて、もし現實の人々に些少でも迷惑の及ぶやうな事があるなら、こんな遺憾はない。嚴正な創作的立場から、敢てこの理解を讀者にねがふ。



赤い靈魂

倉田百三

第四場

(金澤の別莊。F市の郊外。海邊の松林のかげ。廣い庭。木も石も凝つて選ばれてゐる。墻を越して一帶の松林と蒼い海とが見える。墻の一部に裏門。テーブルを圍んで金澤女將と藝者とを相手にしてビールを飲んでゐる。金澤は一部の時よりずつとふけて見える。)

女將。ご冗談でせう。そんな事、旦那……

金澤。いや本當なんだ。全く覺えてゐる事が出來ないんだ。

藝者。(顏をしかめ乍ら)おや、おや、それぢや慘めなもんだわ。

金澤。お前の顏は忘れはしないから安心しろ。(ビールを飲む)若い時にはこんな事はなかつた。この間橘家の女將と芝居に行つたんだ。すると向ふの棧敷にお客に連れられて來てゐる妓がゐて、こちらを向いてお辭儀したんだ。女將が旦那なんとか子ですと言ふのだけれど、どうもはつきり思ひ出せないんだ。

女將。だつて御自分が兎も角一度××××××を……

金澤。なんだか覺えがあるやうにも思ふのだが、どこでどんな事をしたもんだか、その女がどんな事を言つたものだか
まるで思ひ出せないんだ。

女將。それは數だからどの分だか混線するんでせう。

藝者。いやだこと。

金澤。それもある。だがそれだけではない。（半ば訴へるやうに）どうも段々感じが薄くなるんだね。

女將。それは氣を打ち込むやうな相手がないからぢや御座いませんの。

藝者。あんまり浮氣をなさるからですわ。

金澤。向ふだつて同じだからな。實は俺はしつこい方が好きな質なんだが。はゝゝゝ。

女將。ねえ旦那實は一人お目にかけたい妓がゐるんですが。今度襟がへするんで。

金澤。……

女將。それはこゝろ持ちの深い妓で。

藝者。（立ち上る）馬鹿にしてるよ。（廊下を通りかゝつた自動車の運轉手に）さつき撮つて貰つた寫眞の現像して下さいな。

女將。ちよいとあちらで遊んでおいで。

（藝者運轉手と去る。金澤その方を一寸鋭く見る）

女將。え旦那、如何です。一度御覽になつては。

金澤。はゝあ、あいつらは暗室の中で（いらいらし乍ら）俺はもうそんなに大した興味があつてやつてる譯ぢやないんだ。
と言つてやめる氣にもなれないし、他に何もいゝ事が無いからな。……實はお前に注文があるんだ。あのこの間俺

がお前の家の帳場をのぞいた時に子供をあやしてゐた小娘が居たね。髮の毛の少し赤い、口元のむくんだやうな。

女將。あゝ、あれで御座いますか。

金澤。うん。あれだ。×××××××××。

女將。(顏をしかめる)あれは子守で御座いますよ、旦那。田舍から出たばかりの。

金澤。×××××××××。

女將。旦那のお顏にかゝりますよ。

金澤。××××××××××××。

女將。(一瞬間輕蔑の表情を浮べる。直ぐにかくす)お目にとまりましたらどうにか致しますが、何しろ玄人とは違つてめんどうですから、×××××××××——

金澤。(遮る)解つてるさ。(急に投げだすやうに)××××××××××。(溜息をつく)

女將。お約束しました。(瓶を取る)如何です。おいけになりませんね。

金澤。酒もうまくない。

女將。馬鹿に不景氣な事をおつしやいますのね。

金澤。いや、景氣は素敵なんだ。今は鐵も石炭も外から這入らない。俺の商賣だけは世間と反對だ。(變に興奮する)不景氣知らずだ。

(運轉手登場)

運轉手。只今御本宅から御電話で。奧樣がお見えになりますさうで。

金澤。さうか。（暗い顔をする）

藝者。（出て來る。運轉手に）あなたお迎ひでせう。ぢやあたし途中迄のせてつて貰はう。

金澤。自働車の××××××××××。

運轉手。御冗談を。

藝者。（赤くなる）あらお女將さんも一緒ですよ。（女將に）歸りませう。旦那は奧さんには頭が上らないんだから。

金澤。知らないと思つてるのか。だがそれもいゝだらう。

金澤。あれはお前などとは違ふよ。

女將。では今日は失禮致します。

（三人退場）

金澤。（沈默。軈て立ち上る）つまらない。

（鑛務課長登場）

課長。〇〇鑛山の坑夫聯盟が又ストライキを初めました。

金澤。さうか。

課長。今度は範圍が廣く。それに可成り强硬です。

金澤。君に全權を委任する。よろしく處置してくれ給へ。

課長。（不安をかくす）今度は少し惡化するかも知れません。實は例の煽動者達が澤山入り込んでゐますので。

金澤。よろしい。俺は覺悟してゐる。强硬にやつてくれ給へ。

課長。全力を盡しませう、何れ又報告致します。（退場）

金澤。（不安さうに部屋をあちこち歩き、軈てぐつたりと椅子に腰掛け、氣を落着けやうとつとめるものゝ如く、煙草を吸ふ。）

（N子の弟考へに沈み乍ら登場）

弟。お父さん。僕は今日最後にお願ひに來たのです。

金澤。……

弟。どうか僕の勸めを容れて生活を根本的にやりかへて下さい。この儘ではあなたの生活は屹度破綻します。

金澤。（いら／＼しながら）さう簡單に行くものではない。度々言つた通りだ。お前たちは恐ろしく單純な考へ方をするのだ。だが俺は容易ならぬ努力と、歩みとを以て、今日迄やつて來たのだぞ。

弟。大事な事を簡單に考へて下さい。さうなさらないのが總ての間違ひのもとなんです。本當に要るものは唯一つです。

金澤。さうではないのだ。それだから俺はこんなに澤山な富をお前の爲に積んだのだ。

弟。僕はお父さんから何も貰ふ氣はありません。わたし達を不幸にしたこんな財産なんか僕は一文だつて欲しいとは思ひません。

金澤。……

弟。一体お父さんは幸福なんですか。

金澤。幸福ではないやうだ。だが一体幸福つて、そんなものがあるのかね。

弟。あります。お父さんがそれを得やうとなさりさへすれば得られるのです。

金澤。何處に幸福がある？　そんなものはない。わしはそれをこれ迄探して來たが、遂になかつた。然し不幸はある。苦痛は到る處にある。俺たちはそれを避け、それをまぎらす事が出來るだけだ。苦痛と不幸は恐ろしい。俺たちはそれを防がなければならぬ。その爲には金が要るのだ。

弟。幸福は金では買へません。お父さんの富を捨てゝ下さい。それがお父さんを不幸にするのです。わたし達みんなを不幸にするのです。

金澤。……

弟。お母さんが不幸なのもその爲ぢやありませんか。富さへなかつたらお父さんはあんな事をなさらなかつたでせう。生活の爲に働かなければならないから他の傲つた欲望が起らなくなるのです。それに衣食の爲めの勞働と心配とが氣持をひきしめて、つゝましくさせます。お父さんにはそれがない。欲望がつのる計りで、ちつとも生活は身についてゐないやうです。野菊の花をつみとつて百本集めたからと言つて、花の美が百倍になりますか。お父さんは生命のない死骸を積み重ねていらつしやるのです。

金澤。お前は力と所有との強い喜びを知らないのだ。

弟。それは僕から言ひたい事です。僕は內から湧く力の喜びを感じます。內面的勝利を。それはお父さんが一度もこれ迄お感じになつた事のないものです。お父さんこそ何物も本當に所有していらつしやらない破產者ではないでせうか。ごめんなさい。例へば女の事にしてもお父さんは一人の女の魂をでも所有していらつしやいますか。蕩兒は實にその點慘めな浪費者です。お父さんはそれで淋しくはないのですか。

金澤。淋しいさ。だがどうにもならない事だ。

弟。今です。お父さんが大決心なさるべき時は今です――お父さん恐しい事になりますぞ。社會は今にも爆發しさうな危險な狀態です。金貨の音がみんなの呪咀の聲をお父さんの耳に聞えなくするのです。本當に紙一枚のやうにあぶない平和です。今日も僕は恐しい事を聞きました。今の中にすべての富を捨てゝ平和な、自由な身になつて下さい。

金澤。總ての富を捨てる――俺の六十年の努力――俺の人生を捨てるのか。馬鹿な！それで後に何が殘るのだ。

弟。魂の平和が。お父さんの六十年の生涯は全く失敗でした。これから本當の生活を初めて下さい。

金澤。此の年寄りの俺が。今から初めるのか。

弟。さうです。遲くはありません。たとひ一日でも本當の生活が出來さへすれば――

金澤。（頭を振る）いや、いや、もう遲い。俺の生涯が若しも慘めな失敗だつたのなら、俺が六十年努力して空しい死骸を集めたのに過ぎないなら――さうだ。俺はその死骸の推積を俺の最後の砦のやうにして、その中で死ぬるんだ。

弟。それがいけないのです。どうか堅意地な心を捨てゝハンプルになつて下さい。さうすれば屹度世界が違つて見えるのです。平和な晩年が來るのです。お母さんはどんなにお喜びになるでせう。僕はそれだけで僕の生涯の目的が達したやうにさへ思ふのです。それにあの姉さんだつて――

金澤。（いら〱する）あいつの事はもう言つてくれるな。俺はむか〱する。俺は心からあれにすまないと思つてゐたんだ。俺はあれさへ俺を赦してくれたら、惡い遊びもやめやうと思つたんだ。俺はお前に勸められて、あいつの所にお詫びに行つたんぢやないか。ところがどうだつた。あいつは俺を赦してくれなかつた。あいつは俺を何處迄も憎んで、叛いて、俺に復讐せねば止むまいとするのだ。あいつと俺との間には和解の道はない。それをあいつが絕つた

のだ。俺が悔ひ改める事をあいつ等は喜ばないのだ。あいつらには唯俺を倒さうとする意志があるだけだ。俺を變な呪ひの的にして、憎みと罰とをにしぐり付けやうとするんだ。

弟。………

金澤。あいつは俺を審判しやうとするのだ。ふん。あいつらにその權利があるか。成程俺は罪を犯した。だがあいつらに裁かれはせんぞ――あいつらに。あいつらに……

弟。あの日の事は、お父さんに對して僕はなんとも申しやうがありません。實に悲しむべき出來事でした。

金澤。俺は心が輕くなつた。行くときはすまない心で一ぱいになつてゐたのだが、歸りには恥と反抗心とで掻き亂されて――そんなにすまないと思はなくてもいゝ氣がしだした。お前が言ふやうに、あれは俺の手をとつて喜こんでくれでもしたか。俺は衆人の前で辱しめられた。冷めたい嘲りと、憎惡と呪ひ――決して和解の出來ない殺氣に打たれた俺の心は凍るやうだつた。

弟。お父さん、赦して下さい。僕が不用意だつたのです。

金澤。家へ戻つてから俺はつくづく思つた。やつぱり俺の經驗の方が確かなんだ。お前達の思つてゐる事は消い空想なんだ。俺は元の道に歸らう。俺は前よりも荒い心で女と遊ぶやうになつた。絶望と反抗心とが俺の心を輕くしてくれたから。俺は確かに幾分償つたと言つていゝだらう。善い行ひによつてゞはないが、あいつらからの憎みと呪ひとが俺の罪を棒引きしてゐる譯だからな。

弟。あの人達は間違つてゐます。でもそれだからと言つてお父さんも間違へねばならないでせうか。あの日は失敗でした。僕の力の足りない事を恥ぢます。でも眞理は强いのです。何時かは屹度お父さんと姉さんとの間に本當の和解

が來ねばならぬ――それは僕の一生の願ひです。

金澤。(吐息をつく)俺の罪がお前を苦しめるのだ。意地の惡い運命が――

(金澤夫人青ざめた、やつれた顔をして、然し靜かに登場)

(三人沈默)

夫人。わたしは今日決心してお願ひに參りました。私が申し上げるのはこれきりで御座います。どうかあなたの御生活をお改めになつて下さい。

金澤。……

夫人。私は心を盡してこれ迄申し上げました積りで御座います。この上何を申す事が御座いませう。私は緣あつてあなたと結び付かつたもので御座います。それがどう言ふ譯であるかは存じません。私は惠まれた天分とも存じません。唯誠だけは捧げやうと心懸けて參つた積りで御座います。でも私はまだ妻としての務めを果してゐないやうに思ふのです。それがわたしをしつこくさせますのです。自分を恃むからでは御座いません。

金澤。お前はやくさな者に嫁いだ。俺はお前を氣の毒に思ふ。

夫人。そんな積りでは御座いません。私は――

金澤。(遮る)いやお前は裁きはしなかつた。それどころかお前は恥を忍んで來た。俺はそれを知つてゐる。俺はお前に對しては何の反感も持つてはゐない。俺がお前を遠ざかるやうにする所があるとすれば、お前に對する尊敬の爲めなのだ。

夫人。(悲しさうに)私はあなたを幸福にお感じさせる力がなかつたやうに思ひます。私は淋しう御座いました。私は持ち

前の性分から、あなたを窮屈にお感じさせる事を恐れて參りました。それがあなたの爲めに、わたし達の爲めにもよろしかつたかどうか。或ひは私はもつと嫉妬すべきだつたのでせうか。私の悲しみをもつとおさへずにあらはに出してもよかつたので御座いませうか。私には今も解りません。唯私はおこがましいと思はれたくない許りに、大事な事も申し上げずに置く事だけは本當ではないと思ひました。今になつてわたしは殊にそれを强く感じるのです。あなたを、私達を取返しのつかない事から救ふのは今をおいて御座いません。本宅には今日も荒々しい人達が詰めかけてゐました。わたしの車は途で度々石を投げられたのです。

金澤。馬鹿が！　彼等は恩知らずだ。彼等を唯虐げられたものとしてだけ考へるのはとんでもない甘いことだ。事實に當らない片手落ちだ。彼等程感謝する事を知らない、おしつけがましい、蟲のいゝものはゐない。確かにさうだ。俺は彼等と度々折衝した。禮儀と親切とを以て對した。だがそのたんびに裏切られた。彼等が若し俺と同じ境遇に生れたならば、果して俺程勤勉に、溫和にあつたか。俺よりも有德であり得たか。俺は決してそれを信じない。彼等と接觸して見よ。彼等は人間的に低卑なのだ。彼等が若しブルジョアであつたとしたら、俺よりももつと慘酷に、その上譎詐を以て貧者を搾取したに相違ない

夫人。あの人達がどれだけ惡いかを考へずに、唯わたしたちが出來るだけ善くならうとしたらよろしいでは御座いませんか。

金澤。（いら／＼する）それが人間的感情をちつとも交へないお前達の考へ方なんだ。だが生きた現實にはそれとは違つた法則が支配する。わしは寧ろお前たちに彼等に對してもつと敵愾心を起して貰ひたいのだ。

夫人。あの人達は氣の毒な人達——兎も角もわたしたちより幸福ではない人達——少くともわたしたちが不幸なやうに

不幸な人達では御座いませんか。

金澤。彼等はわたし達が不幸だと言ふ事を知らないのだ。それを考へて見やうともしないのだ。

夫人。あの人達は他人の身の上の事を考へるだけの餘裕がないので御座いませう。それをあの人達に求めるよりも私達は自分で自分の事を考へませう。私達が幸福でない事を感じてゐるのなら本當の幸福を求めませう。何が私達を不幸にしてゐるのでせう。私たちの身邊に呪ひをまつはらせるものを捨てませう。

弟。名譽を、金を捨てませう。

金澤。……

夫人。私達の人生にこの上何がのこつて居りませう。あなたは既に味はうべき程のものを味はひ盡しておしまひになつたのです。それであなたが幸福でないとすればあなたの人生にはもう何もないのです。私達は順禮に出ませう。本當の幸福を求めて別の世界に出てゆきませう。もう何もない世界に、空しい紙幣の束の中にうづまつてゐて何になりませう。わたしとあなたと倅と――三人が幸福でありさへすればそれでよろしいでは御座いませんか。

金澤。金は幸福を與へない――俺はそれを知つてゐる。だが幸福と言ふものが果してあるだらうか。金はせめて苦痛を防いでくれる。幸福でないのは人生がさう言ふものなので金の勢ではない。金が與へる幸福はあり得るもの丶中では最良のものだ。人生にないものは爲方がない。俺は厭世家だ。人生はたいしたものではない。幸福とは消極的なもの――單に苦痛のなるべく少くないと言ふ事に過ぎない。わしは美しい空想の世界を持つてゐるお前たちを俺よりも幸福だと思ふ。皆は俺を快樂を漁るものだと思つてゐる。だが俺は人生に絶望してゐるのだ。

弟。人生を一擲して下さい。一度そのどうせ駄目な人生を捨て去つて下さい。そこで私達はこの世から解放されるでせ

う。

金澤。そしてさてそこに何があるのだ。單なるぜろが。それなら未だいゝ。今よりももつと苦痛が、然かも無意味な物質的な苦痛があるだけぢやないか。

弟。さうでないのです。そこに本當の人生が始まるのです。光明の生活が――

金澤。お前にそれが證し出來るか。

弟。（沈默）わたしは謙遜して置きませう。ですが强い證人が居ります。

金澤。あの「供へた男」のことか。あの勞働と無抵抗の。俺が今から紡ぎ車を廻はすのか。蟲のいゝ、粗暴な坑夫達の言ひなりになるのか。

夫人。旣に幸福を約束しない金はあの人達にやつて了ひませう。「繭車妻としひけばおのづから暗む心の我れにわき來も」現に生きてゐるみちのくの貧しい農夫は歌ひました。わたし達はさう言ふ幸福を、貧しい愛を一度でも味はつたことがあるでせうか。（眼をしばたゝく）わたしは喜ろこんであなたと車を廻はします。わたしの參つてから三十年の生涯はその農夫の一日よりも勝つてはゐませんでした。

弟。わたしは耕やす。わたしは手の仕事をする。そしてわたしたちは誰からも責められない。誰をも傷けない。わたし達は淸らかで幸福だ……

金澤。俺は重たい。力强い惰性が俺の體を後ろにしばりつけてゐる。俺は前へ進む根氣がない。

弟。その鎖を引きちぎつて下さい！

金澤。打ち勝つ力が要る。長い年月積み重ねて來た塵塚が俺にのしかゝつてゐる。千鈞の重さを以つて！何か偉大なも

のが來て俺の手を取つて、引きづり出してくれない限り、俺は立ち上る事は出來ない――

弟。お父さんわたしの手をしつかりと握つて下さい。わたしがあなたを引つぱつて行きます。

金澤。(太息をする)倅お前の手は小さくて未だ弱い。

弟。あの人が助けに來ます。大きな强い手をもつて……あの人がお父さんに靈氣を吹き込みます。満身の勇氣を出して立ち上つて下さい。

金澤。やつてみやう。いや、いや俺は駄目だ。俺には出來ぬ。俺にはそれがわかる。

弟。呻と腹に力を入れて、頑張つて下さい。

金澤。俺はさうする。だが俺が負つてゐる重過ぎる奋が俺の腰を逆いて、後ろに引き倒すのだ。

(この時門前に自動車の止る音。軈て顔色を變へた支配人と四、五名の事務員とが不安に滿ちた表情にて登場)

支配人。爭議は深刻です。形勢は益々悪化してゐます。彼等の要求は一通りではありません。背後に何か重大なものが潜んでゐるに相違ありません。

金澤。彼等の要求は?

支配人。(眉を顰はす)××××です。一切の鑛山と冶金精錬その他のあらゆる工場の×××です。

金澤。(眞青になる)拒絶だ。斷乎として拒絶だ。

支配人。勿論拒絕しました。彼等は激昂して直接にあなたと談判すると言つてこちらに押しかけて來る形勢です。で取敢へず、先廻りして駈けつけました。今にこゝにやつて來るでせう。

金澤。よし。俺ははねつける。馬鹿な!

支配人。（青ざめて）彼等の決心は强固です。何か恐るべき背後の力が――
金澤。俺は拒絶する。死を以て拒絶する。
事務員甲。交通勞働組合が同情罷業を宣言しました。それと共にこの地方の殆んど總ての勞働組合のストライキがみるみる蔓延して行きさうです。ゼネラルストライキは避ける事が出來ない形勢です。
金澤。俺はもう覺悟してゐる。俺は最後迄拒絶する。
夫人。あなた、決心なさつて下さい。今こそ總ての富を捨てる時です。この機をはづせば恐ろしい事になります。
金澤。いや俺は恐れん。
支配人。あなたの身邊が危險になりますぞ。
金澤。（青ざめ乍ら冷めたく）俺は戰はう！
事務員乙。ピストルを用意して下さい。あなたはお命ひにならぬ力がよろしい。
金澤。いや俺は命ふ。俺は立派に拒絶してみせる！
夫人。捨てゝ下さい。あなたと私達とを救つて下さい。あなたは何故その勇氣を以て私達の爲めに新しい生涯をお始めになつて下さらないのです。
金澤。俺の六十年の生涯が、刻苦經營が俺の後ろに橫たはつてゐる。俺と彼等との間には憎みがある。敵意がある。事の善惡に關はらず、俺は彼等に屈從することは出來ない。俺達の間にはもう和解の道はない。も早やどちらが眞理であるかの問題ではない。事柄は憎惡と敵意の感情の噴火口の上で動くのだ。
夫人。わたし達は落込んで了ふのですか。いゝえわたし達は此處を去りませう。廣い自由なところへ行きませう。未だ

間があります。今なら未だ出來ます。

弟。そんな下らない感情は破れ靴のやうに捨てゝ下さい。總ての富を鼻紙のやうに彼等にくれてやつて、笑つてこゝを去りませう。

金澤。あゝ。俺は淋しい。俺の淋しさは賴りにならない味方と籠城してゐる者の淋しさだ。お前達は何故もつと彼等に敵愾心をもつてくれないのだ。（吐息をつく）俺の妻も息子も俺の味方ではない。

（門前に騒がしい人聲が起る。總て六七名の坑夫の服裝をした勞働者が凄まじい權幕で室内に闖入する）

金澤。無禮だ！

委員甲。我々は返事さへ聞けばいゝ。

金澤。……

委員乙。我々××××を要求する。

金澤。そんな權利はない。

委員丙。××××××我々にある。

委員甲。我々が生產したのだ。

金澤。その考へが根本的に誤謬だ。我々は一つの社會組織の中で生產する。今日の社會は未だ資本家なくして生產する手段を持つてゐない。我々はその必要に奉仕するのだ。若し資本家を非難するならば社會組織を非難すべきだ。その組織を要求する今の人類の生活欲そのものを呪ふべきだ。我々は人類の必要に貢獻こそすれ非難を受ける理由はない。

委員乙。××××××××××××××××××××××の障害だ。君の經濟學は君に隱退を要求する。

委員丙。隱退し給へ。それが君の唯一の安全の策だ。

金澤。俺は斷じて隱退せぬ。君達には未だ生產の大任を任かす事は出來ぬ。君達にはその實力がない。俺は人類の生產の爲めにその管理權を握つてゐる事を義務と感ずる。

委員甲。默れ！　君は俺達の實力を知らないな。多分君は婦人部屋で惰眠を貪つて居て、社會の下層にどんな變化が起つてゐるか知らないと見える。

委員丙。長い封鎖と我々の飢餓の間に君は獨占的事業の暴利を貪つてゐた。その間に我々の實力は必然的に太つて來たのだ。「必要」の壓力がいやでも我々を團結させた。總同盟罷業はもう避けられぬ。それは全國的に蔓延する。もう時機が來た。

金澤。俺は飽く迄も戰かう。罷業は君達に餓死を約束する。

委員甲。(嘲るやうに)そして君達に何を約束するのだ。

委員乙。×××××××××××つてゐる。

委員丙。答へ給へ。然りか――否か。

金澤。……

支配人。君達が若しもつと讓歩する意志があるなら我々は考慮するが――

委員甲。(冷笑する)この交涉は拒諾何れにもせよ死に値する。妥協の餘地はない。君達が死ぬるか、我々が死ぬるか――

弟。お父さん總てを放棄して下さい。死を賭する値のあるものではありません！

金澤。金は死を賭するに足りぬかも知れぬ。然し怡みは、意地は死よりも强い。俺は拒絶する！

委員甲。よし。君達が拒絶するなら我々は××する。××××、××××××××。××××××××××××××する。

委員乙。川意するがいゝ。戰ひは今始まつたのだ。

金澤。よろしい。俺は俺の手にある一切の權力を行使する。あらゆる機關を武器として——

委員乙。（冷笑する）君の一切の機關はもう動かないぞ。汽車も電話も役に立たぬ！誰も釜に石炭をつがぬ。配電板の側には一人の技師も立たぬ！

委員丙。我々が此處を去つて合圖をする時君達の死は定まるのだ。さようなら。

（勞働者一同席を蹴つて退場）

（沈默）

金澤。皆ピストルを川意しろ。警察に電話を掛けろ。女は皆隱れろ。男は皆武器を取れ。

（支配人と事務員達急ぎ退場）

夫人。あゝ。あなたはとう〳〵身をほろぼしてお了ひになるのです。

金澤。運命の必至だ。

（夫人と弟と抱き合ふ）

金澤。許してくれ。俺の白由にもならなかつたのだ。

（沈默）

金澤。お前達は逃げろ。お前達は自分の思ふやうな生活をするがいゝ。だが俺の生活は此處にある。俺は俺の生活と共に沒落する。（夫人に）俺はお前に許す。お前は俺を離れて宗教的な生活に入るがいゝ。

夫人。わたしはもう行きませぬ。

金澤。何故だ。お前の長い間の願ひだつたのだ。

夫人。私達の日がまいりました。私はやはりあなたに結び付けられてゐたものだつたのです。

金澤。（沈默）

夫人。さつき迄私は出家する事を願つてゐました。でもそれは許されない事だつたのです。（しみ〴〵と夫を見る）私の心は靜かになりました。

金澤。俺はお前と二人ゐる。こゝにかうして死を前にして坐つてゐる。俺は今二人は一つだつたやうに思ふ……

夫人。二人は一つです。唯の死ぬ前の十分間でも……二人が本當に一つのものとなる事さへ出來ましたら――

金澤。お前の忍受は最後の日迄續いた。

夫人。（ほゝえむ）私はあなたをわたしのものにしました。私の願ひはかなひました……あの松林と海の色とがわたしには變つて見える……何と言ふ靜かな。淨らかな色だらう。………死が來る迄あれを見てゐませう。

（この時突然激しい銃聲と共に騷がしい人聲が起る。軈て松林の後ろから一團の群衆が現はれ、鬨の聲を擧げて押寄せて來る）

支配人。（あはてゝ登場）電話は掛かりません。

金澤。みんなピストルを取つてこゝに集まれ。

（事務員達ピストルを取つて集る）

（再び群衆の鬨の聲。事務員達庭の墻を障壁にして應戰する。やがてばた〳〵と倒れる。遂に群集裏門を押し破つて庭に闖入する）

金澤。（ピストルを連發してたゝかふ）

聲。あいつだ。社長だ。やつつけろ。

（群衆の一部夫人の方に向つて突進する）

弟。（兩手をひろげてこれを遮る）諸君止し給へ。諸君は××××××へ。××××××給へ。××××××つてゐる。徴々たる人間を殺して何になるのだ！

聲々。默れ！敵の端つくれだ。復讐だ。罰だ！

（群衆弟を突き飛ばして夫人をとらへる）

（この時一彈飛び來つて金澤に中り金澤倒れる）

聲。やつつけた。社長は倒れた。

夫人。（目をつむる）

弟。（父の方に飛んで行かうとするが、群衆に押へられる）人殺し……兄弟殺し……必要のない殺戮……諸君は獸だ。畜生だ。………血が狂つたのだ。

（群集夫人にピストルを擬する）

弟。待て！無抵抗の婦人を殺してどうするのだ。よしてくれ。お願ひだ。それは諸君の恥だ。

聲。やつつけろ。彼××××。

他の聲々。×××。×××。

（この時群集の間を押しわけて同志の女躍り出る）

同志の女。みなさんおよしなさい。いけません。殺ろしてはいけません！手向はない婦人を何の爲めに殺ろすのです。それは私達の恥です。

聲。我々の呪ひだ。虐げられたものゝ復讐だ。

同志の女。私たちの目的は人殺しではない。私たちは人間を救うのです。解放するのです。正義の爲めにたゝかふ私たちが無益な殺戮を――

聲。敵を倒せ。ふみにぢれ。一切の敵に屬ったものをぶち毀はせ。

同志の女。手向はないものを殺すのか。弱い女を殺すのか。

聲。×××××。××××××。家畜も殺ろせ。我々が敵の名に結びつけて考へるものは總て×××。××××××××××。この家の中に一つの生きたものもゐてはならぬ。

同志の女。我々は生かす爲めに鬪ふ。一つのものも生かし得るものを殺ろしてはならぬ。

聲。×××××。××××××××。總ての器物を××××。××××。

同志の女。生きた命を敬禮せよ。人間の汗が作り出した器物を尙べ。我々は解放と建設との美しい精神の爲めに鬪ふのだ。掠奪者の鬪ひではない。破壞と殺戮とは卑しい獸欲だ。それは我々の鬪ひを瀆すものだ。

聲。今は××と××との精神の火が一切だ。その火を燃やすものは何でも×××。先づ呪咀と死とが支配せねばなら

ぬ。脅と復讐とが×××××だ。明日の事は明日に任せろ。

他の聲。恐怖を與へよ。先づ彼等を恐怖せしめよ。」

群衆。（一齊に叫ぶ）恐怖だ。恐怖だ。

同志の女。（一生懸命に叫ぶ）待て。我々の鬪ひを瀆すな。手向はないものを殺ろすな。女を殺ろすな。

聲。×××××。×××××。×××××。そして地を耡け。明日そこから新しいものが生え出るだらう。

聲々。××せ。××せ。

（遂に群衆の一人發射する。夫人倒れる）

同志の女。（兩手を絞ぼりぶる〳〵と慄へる。）あゝこれが正義の鬪ひか。これがわれわれの………

（彼の女は土の上に膝をつく。弟この時突然捕らへてゐた群衆の手を振り離し、夫人を射殺した男の手からピストルを奪ひ取り、その男に向つて發射する。男倒れる）

聲々、やつたな。太い野郎だ。ぶち殺せ。

（群衆弟を取圍み、將に射殺ろさうとする。がこの時遲れて馳せつけて來たN子が前に躍り出る）

N子。待つて下さい。これはわたしの弟です。

聲。こいつは抵抗したのだ。我々の同志を殺ろしたのだ。」

弟。僕は殺ろした。僕は人を殺ろした。

聲。やつつけろ。同志のかたきだ。

N子。待つて下さい。わたしの爲めに……わたしの可愛いものを……

聲。金澤は死んだぞ。あなたの父はたふれたのだ。

N子。（一瞬間靑ざめる。やがて聲をふりしぼつて言ふ）わたしは父を悄んでゐる。でも弟を愛してゐる。弟は生きねばならぬ。

聲。同志の仇を赦すのか。

N子。わたしは赦してはならぬ。赦してはならぬ。でもわたしは願はれぬだらうか。闘ひのために今日まで捧げた總ての苦痛と犧牲とにかけて、……わたしの可愛い一つのいのちを命乞ひする事が許されぬだらうか。

（沈默）

N子。皆さん許して下さい。わたしの矛盾を許して下さい。わたしの爲にこの敵の命を惜しんで下さい。我々の同志を射ち殺ろした、誰よりも先に殺さねばならないこの敵を……わたしはわたしの犧牲でこの一つの小さな命を購ひます。皆さんわたしの矛盾を笑つて下さい。

弟。僕の矛盾を嗤つてくれ。無抵抗を誓ひ、最後迄守つて來た僕は人間を殺ろしたのだ。僕はもう兄弟殺ろしだ。僕は失敗者だ。（ピストルを自分の胸に發射する。倒れる）

N子。（馳せよつて弟を抱き起す）お前……お前。

弟。（苦しい息の間から）僕の生涯は失はれた。僕は僕が一番憎み一生涯非難して來た行ひを自分でやつたのだ。長い間の忍耐と精進とを最後の瞬間にくずして了つたのだ。僕はほろびるのだ。ほろびるのだ。

N子。しつかりして下さい。あなたは亡びるのではありません。生きるのです。未だ生きるのです。

弟。僕は死ぬのだ。暗黑で死ぬのだ。姉さんうつちやつて下さい。僕にさはらないで下さい。僕はもうあなたを愛してゐません。

N子。（青ざめる）

弟。僕の一生の願ひはなんだつた。お父さんと姉さんとを和らがせる事……それが出來なければ僕の生涯は失敗なのだ。お父さんはもう死んで了つた。僕の願ひはもうお了ひだ。

N子。でもあたたは……あなたは輕はずみをな事をしてくれて……どんなにでもしてあなたを助けずには置かなかつたのに……

弟。何で僕が助かりたい。姉さん、お父さんとお母さんは殺されました。僕は人殺しをした。そして僕が助かりたいと思ふのですか。僕は言ふ。僕を亡ぼしたのは決してお父さんのせい許りではありませんぞ。姉さんの、實にあなたの荒い頑な心が僕を亡ぼしたのですぞ。

N子。（ぶる／＼震へて、顏を覆ふ）

弟。（群衆を睨んで言ふ）僕は今死ぬる。僕は君達に言ふ。君達が戰ひに勝つた時假初にもそれを正義の戰ひだなどと言ふな。君達の計畫が成功した時夢にもそれを理想的社會だなどと言ふな！飛んでもない事だ。諸君の所謂理想的社會の下積みには無辜のものの血が流れてゐるのだぞ。羊のやうな女の骨が埋まつてゐるのだぞ。君達の理想的社會に呪ひあれ。獸物と盜人と人殺しとの汚れた手を以て諸君が築いた理想的社會を僕は憎み、輕蔑して今死ぬる！

（ぐつたりとくづれる）

N子。（弟を抱く）赦して下さい。わたしを赦して下さい。

弟。（かすかに）さはつていりません。さはつていりません。僕はあなたを愛しません。呪ひあれ。呪ひあれ。（死ぬる）

N子。（弟の死骸にすがりつき、顏を押し當てる）

（沈默）

（向ふの市街の方で銃聲と鬨の聲とが起る）

N子。（顔を上げる）×××始まつたのだ。（沈默）弟は死んだ。××××××××上つた日に――わたしが長い間待つてゐ××××××××けにわたしの愛するものは死んだのだ。（再び死骸を抱きしめる）わたしはあなたを愛してゐた。愛してゐた。わたしはあなたを失はうとは思はなかつた。さうだ。わたしはあなたの愛さへ失つたのだ。あなたはわたしを恨んで死んだ。わたしは惡るかつたのか。わたしはしてはならない事をしたのか。わたしの生活の喜び、樂しいもの、愛するもの、總てを生贄にして努力した事は惡い事だつたのか。（沈默）いやさうではない。決してさうではない。わたしはかうするより爲方はなかつたのだ。では他にどうすればよかつたのだ。わたしは悔ひない。わたしは正しかつたのだ

聲。我々は×××つたのだ。我々は××××事をしたのだ。

N子。（まはりに散らばつてゐる父、夫人その他の血にまみれた死骸を見る。やがて自分の膝の上の弟の、銃丸の貫いた額を今更の如く見る。再びみだれる。）これがわたしの爲すべき事だつたのか。わたしを恨んで……わたしを憎んで……

（此の時山川が群衆を押し分けて驅けつけて來る）

山川。×××が始まつた。我々の××××を×××。さあ我々も行かう。

N子。（まだ夢中で）弟は死んだ。愛するものは死んだ。

山川。（あたりの樣子を眺める）―些事だ。×××××異だ。××××××××××××！

N子。わたしはブルジョアの×××××××××してゐた。でもわたしが最初に見たのはわたしの父と弟の血だつた。

山川。××××。×××××××だ。我々が百度も決心した事ではなかつたのか。我々は×××れてはならぬ。卑なる權力の爭ひの爲でさへも、我々の祖先は父子夫婦殺ろしあふ事を恐れなかつた。我々××××××××××××××××××××××××。（ガイスト）それ故に我々の×××××がけに、×××××手本を示す名譽を與へられたのだ。我々の×××どんなに決心を要するか。あなたはそれを群集の前に見せねばならないのだ。

N子。（立ち上る）さうだ。わたしのいのちは苦しみに初まつて苦しみに終る——わたしは苦痛と結婚したのだつた。わたしは甘い愛に迷うてはならぬ。

山川。立ち上れ。同志の中の同志——我が終生の戰ひの伴侶。何物にも代へ難いこの×××きつさきをあなたの涙で弛ませてくれるな。

N子。（齒をくひしばる）わたしは泣かぬ。御覽なさい。わたしは笑ひます。わたしの涙を嗤ひます。

山川。さうだ。あなたは×××。我々は××××へやう。そして勇ましくあの××××××××××う。

N子。みなさん、何でもなかつたやうに此處を去つて下さい。此處にはもう用事はありません。みなさん。みなさんの×××××××。〇〇や〇〇や×××××して下さい。〇〇を××して下さい。

聲々。××へ行け。×××だ。〇〇を××。

N子。さうです。そしてわたしが笑つて父や弟の血を見たやうに、みなさんは同じやうに笑つて×××××××××下さい。×××××のを見て下さい。

（再び激しき銃聲と叫喚の聲市街の方に起る）

山川。やつてゐるぞ。さあみな行かう。××××××××はう。

聲々。××へ。×××へ。×××××。××××××××××！

（山川、N子先頭に立ち、群衆一同一齊に鬨の聲を上げて馳せ去る。同志の女一人のこる。急にしんとする。彼女は土の上に跪き、庭石の上に頭を置いて、失神せるものゝ如く、瞑目した儘沈默してゐる）

（間）

（供へた男四、五名の兄弟達と共に現はれる。あたりの樣子を見て驚駭する）

供へた男。おそかつた。（沈默）

兄弟甲。みなやられてゐます。

兄弟乙。（死骸をあらため乍ら）金澤さんが倒れてゐます。

兄弟丙。此處に夫人の死骸が……

兄弟甲。あゝ。此處に息子さんが倒れてゐる。我々の兄弟が。

供へた男。（瞑目する）

兄弟乙。おくれたのは殘念だつた。今日變があらうとは思はなかつた。我々は早く立つた。だが途中で群衆にさまたげられて……

兄弟甲。（驚きの叫びを上げる）あゝ兄弟は手にピストルを握つてゐる！

供へた男。（微かにふるへる。やがて合掌して靜かに弟の死骸の側に行く。凝つと顏を眺める。弟の手からピストルを離させ兩手を合はせてやる）

兄弟乙。兄弟は抵抗したのだらうか。柔和そのものゝやうなこの人が。（溜息を吐く）あゝ最後の瞬間をなぜ支へてくれな

かつたか。

同志の女。（詠へかねたやうに前へ出る）弟さんは命のきは迄それを歎いて死にました。わたしは總てを見てゐました。わたしは同志の一人です。

供へた男。あなたか。（沈默）わたし達はこれで二度會ふ。あなたの魂は安らかですか。

同志の女。（沈默）

供へた男。あなた達のした事を御覽なさい。これはあなた達の作つた犧牲です。この氣高い夫人は一生を忍受して暮らしました。そして日ならずわたし達の所に來る筈だつたのです。わたしは言ふ。神かけてこの婦人の魂は富に汚れてはゐなかつた。だがあなた方はこの柔和な魂を殺して了つた。清貧の中に神に捧げた晩年をあなた方は何故この脆い夫人に吝まねばならなかつたのか。

同志の女。（頭を垂れる）

供へた男。（弟の死骸を指ざして）これは世にも氣の毒なたましひの犧牲でした。總ての青年らしい野心を捨てゝその一生を唯父と姉とを和らがせるために捧げたこの可憐なものは、あなた方の粗暴のために打ちくだかれて死にました。これがあなた方の正義です。

同志の女。わたしは止めました。力の限り止めました。が仲間の人達はきゝませんでした。

供へた男。（鋭く）あなた方の仲間から離れなさい。そしてわたし達の所へいらつしやい！

同志の女。（沈默）

供へた男。それがあなたの魂の命ずる聲です。

同志の女。わたしは不幸な人々のがはに立つた。わたしはそのためにわたしの生涯を捨てゝ全力を捧げて働いて來た。

供へた男。一つのものが缺けてゐる。それが萬事を惡くする。傲慢を捨てなさい。如何なる運命を受けてもつぶやく事の出來ない我々が裁き主に對して抗辯する――誰がブルジョアの罪を裁くことが出來るか？ 神が裁く。人間ではない。わけてこのやうな過ちを犯すあなた方の仲間ではない。

同志の女。（ふるへ乍ら沈默）

供へた男。（兄弟達に）みなの死骸に敬禮しませう。これは尊い犧牲者達です。法界の運行の爲めの供へ物です。（頭を垂れる）

（兄弟達みな頭を垂れる）

（沈默）

同志の女。言つて下さい。裁きはあるのですか？

供へた男。あります。

同志の。この人達は無駄に死んだのではないのですか？

供へた男。法界の藏の中に鄕里に納められてゐる。

同志の女。救ひはあるのですか？魂の平和は人間に得られるのですか。

供へた男。救ひはあるかつて？（微笑する）我々は既に救はれてゐるのだ。

同志の女。わたしも救はれてゐるのですか？

供へた男。（うなづく）唯歸命すればいゝ。救ひは初めにある。これからではない。

同志の女。わたしは本當に救はれてゐるだらうか。

供へた男。救はれてゐる。唯あなたがそれを信じないのだ。我々に生命を與へたものに歸命せよ。そのものが自分を生かす通りに生きよ。その結果がどうならうとも、我々はそれでいゝのだ。

同志の女。あなたの救ひとはそれですか。

供へた男。然り。この他に救ひはない。わたしについていらつしやい！

同志の女。プロレタリアは救はれてゐるだらうか。あの生活苦のどん底にうめいてゐる貧しい人々が……

供へた男。小供の儘で死んでいつた何億と言ふ人間の魂に訊け。土から生れ、霜に凍てて死んだ何千億と言ふ虫に問へ。三日しか生きてゐない蟬に問へ。大海に生れ、鯨に喰はれて死んで行つた無數の魚屑に訊け。彼等の魂は救はれたのか。

同志の女。（沈默）

供へた男。若し最初に光明がないならば、與へられたものがいゝものでないならば、救ひは何處にもない。身の程知らずの人間が！

（再び街の方に激しき銃聲と叫喚起る）

同志の女。（沈默）

供へた男。わたし達は行かう。街頭へ。群衆の中へ。そこで我々の××を盡さう。我々の供へた命が何かの役に立つかも知れぬ。

（兄弟達うなづき合ふ）

供へた男。（跪き、死骸に向つて合掌する）

（兄弟達同じやうにする）

（沈默）

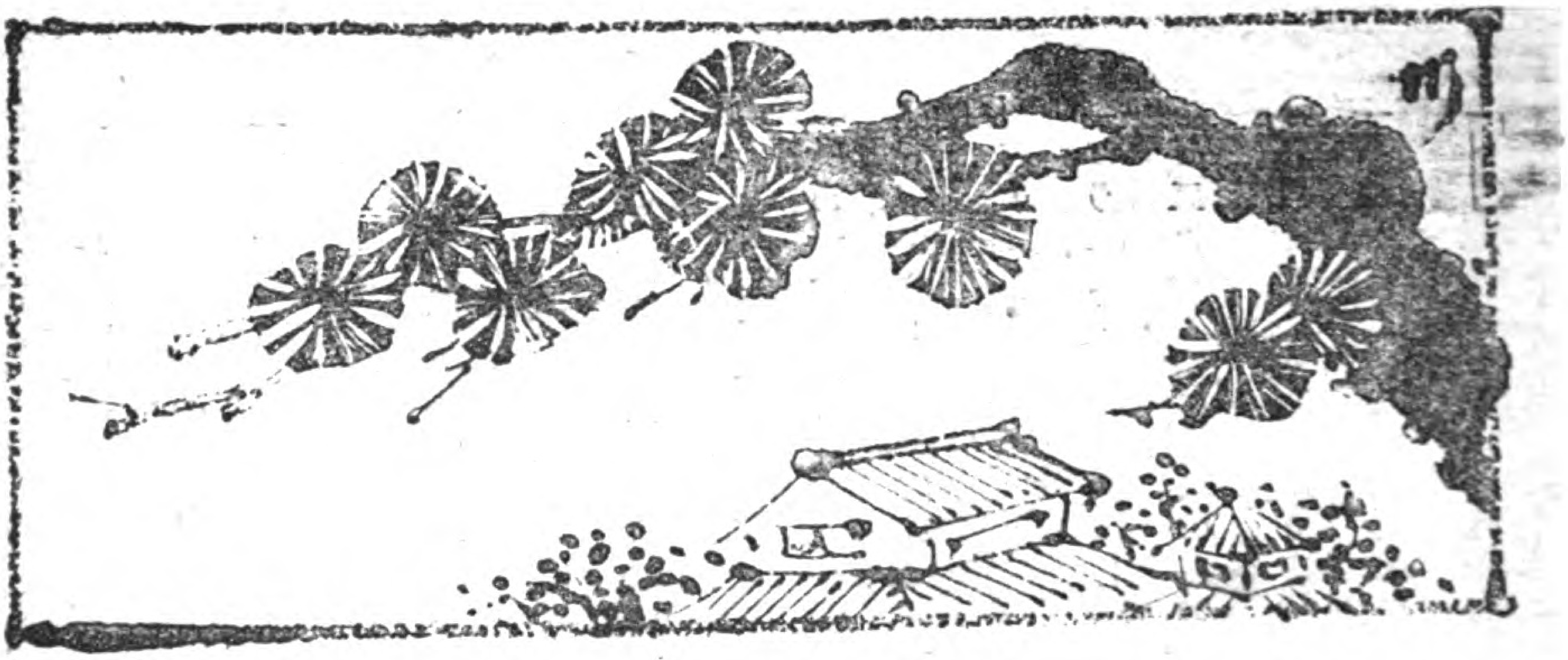
供へた男。（立ち上り靜かに去る）

（兄弟達これに從がう）

（沈默）

同志の女。（ふら〳〵とついて行きかける。又立ち止まる）救ひとは何だ。わたしは何を求めてゐるのだ？わたしの魂は何をわたしに命じるのだ。わたしは同志と共に戰はうか。わたしは劍をとつて人を殺ろす勇氣があるか。いや、それよりも共の權利があるか。（沈默）でもわたしは何をするのだ。今日迄何に捧げて來たのだ。わたし達の待つた日が來た。わたしは同志を裏切つてあの人に從がうのか。プロレタリアは救はれねばならぬ。だが救ふとは何を與へる事なのだ。わたしの魂は滿ちてゐるか。わたしには歡喜があるのか。さうではない、さうではない。わたしの存在がその爲めに底から滿ち溢れ、その爲めに命を捨てゝ悔いない程の法悅をわたしは感じてゐるのか？魂の後から何ものかゞ囁いてゐる。（沈默）わたしは引きづられて來た。だが有頂天ではない。わたしが欲しいのは有頂天に生きる事、戀するものゝ心……歸命するものゝこゝろ（一瞬間夢見るやうに立つ）わたしはついて行かうか。（頭を振る）おもひがわたしを誘ふのではないか？引くのは道だらうか？道は何處にある。道は何處にある。（ふら〳〵と供へた男の後を追ふて行く）

（つゞく）



この三つのもの

佐藤春夫

一

「それがです、………」

お八重の顏を見入つて　赤木は何とか早く返事をしなければと焦りながら、ともかくも、つなぎの一句だけは言つたけれども、さて續いて言ふべき適切な言葉を見出せなかつた。お八重が北村と別れることがこの際、――北村の心持があのとほりである以上、最も當を得た處致であることを赤木は疑はなかつた。それはお八重や北村やお雪やすべての人々にとつて適當であるのだとは思ふけれども、赤木がさう考へるのは、彼自身がそれを希望してゐるといふ事實がそれの根底をなしていないとは斷言出來なかつた。赤木はそこに氣がつくと、北村と別れるやうにお八重に勸めることは、間違つた意見ではないと信じながらも、それを輕々しくすることは出來なかつた。さうしてこの話のなかに彼自身が加はつてゐることの不自然、彼自身の立場の窮屈な矛盾にはたと突當るのを感じた。赤木は、己の感情がいつの間にか

それほどお八重に默つてゐたことを、はつきりと自ら意識するのであつた。

「——それがです、僕にもよくわからないのです。何しろ、あなた自身がはつきりよく考へることが第一です」

赤木はさう答へるより外に仕方がなかつた。

「でも、わたしにはとてもひとりでは考へられませんわ」

お八重は伏せてゐた瞼を上げて言つた。彼女の瞳は赤木が今まで考へてゐたものよりも、大きくまたくつきりと耀いてゐた。みづ〳〵しかつた。それは涙でうるんでゐたせゐかも知れない。

「それや、誰が考へたつてもわからない。——まづ神さまにお任せするより外はないでせうな」赤木は半は本氣で半は常談で氣輕るげにさう言つたが、ふと思ひ出して眞顏になつた「どうでせう、いづれ一度は言はなければならない事ではあり、一つ何もかも榮二君に相談をしてみちや」

「駄目」お八重は言下に答へた「駄目ですわ。わたし榮二さんとはよく話が出來ないのですもの。北村も榮二さんは嫌ひですよ。——わたしも、さう言つちや何ですけど、あの人は好ないのです。わたし榮二さんよりは、北村の方がまだしも好きですわ」

「どうして？　榮二君はしつかりした眞面目な人なのだがな、北村が氣に入らないのは自然なことだが……」

榮二といふのは北村の弟のことであつた。

「それや惡い人ぢやありませんよ。よくわかつてゐるのです。でも話がしにくいのです。——氣が合はないのでせう」

「ハ、ハ、ハ、まるであなたの事を北村が言ふやうなことを言つてゐら」

「叶——ほんとうね」お八重も自然な調子で笑ひ出した。

榮二を好まなくつて、赤木を信頼するといふのは、要するに　お八重が無意識に北村の心持を反映してゐるのであつた。ただそれだけの事である。

「實際困りますね。竹中には相談しない、榮二君はいけない。さう言つてあなた方はふたりとも僕にばかり相談するのだから」

「本當にお氣の毒です。飛んだうるさい事に捉つてしまつたと思ふでせう。でも、どうぞ相談相手になつて下さい。わたしには外に誰ひとりも相談する人はないのです」

「いや〳〵、僕は迷惑だの厄介だのとは言はないのです」

お八重の眞劍な懇願の口調と表情とに、赤木も思はず力を籠めて答へた。お八重の口調と表情とは、赤木に一昨夜のお八重のあの發作的な苦悶の狀態を思ひ浮ばせた。それはその程度は極めて低いものではあつたけれども、同じ種類に屬する緊張だつたからである。――お八重の爲めに相談相手になることは迷惑だの厄介だのではないばかりでなく、却つて彼の喜びであることを、赤木はお八重に告げたかつた。さうしてそれを半分言葉に出して、あとは己の肚のなかで言つたのである。

「ほんとうに誰ひとり相談になる人はないのです。……田舍で藥屋をしてゐる兄がゐるのです。――まあその兄ひとりぐらゐなものですけれど。それもわざ〳〵田舍から呼出すほどのこともないのです」お八重はひとり言らしく、考へながら言ひつゞけてゐたが聲を改めて呼びかけた。

「赤木さん」

「……」

「何とか考へて下さい。わからないと言へばそれや誰にだつて判らないでせうけれども、どうしたらいいぐらゐのことはお思ひになるでせう」

それは正しくさうだ。何も思つてゐないどころではない。實はあまりに深く思ひすぎてゐるのである。きのふ北村とお八重に就て相談した時に、赤木が北村が拾てるお八重を己の妻にしようと決心した事、それを北村もすでに知つてゐる事。それらを殘らず有の儘に今、お八重に明さうかと赤木は考へてみた。それは前途に迷つてゐるお八重がその行末を考へる材料として知る必要のある事實である。またこの場合、決して不自然な話のつなぎ合せでない。またこの三四日の間に著るしく接近して親密なものになつた彼とお八重との感情から言つて、この話題にまで達することは必ずしも無理な飛躍ではなかつた。わけても端的にものを言ふお八重にむかつて、赤木も亦、もつと端的な己の心持を明す方が本當だと思つた。しかし赤木はそれをとうとう言はなかつた。もつと自然でもつと適切な必然的に言はなければならない時機が自づとあることを赤木は考へたからだ。また一つには、それは赤木のはにかみ性から出てゐた。

沈默を守つて終に答へない赤木に、お八重は再び話かけた――

「もう一度、北村に賴んで見たらどうでせう。ねえ、赤木さん。」

「さ」と赤木は言つた「結局はやはり駄目かも知れないけれども……」

「駄目でせうか。駄目だと思ひますか」

「どうもさう思ふのです」

「それではもう仕方がないのですねえ」

「まづさうは思ふのだが、しかし、あなたがもう一度、自分で直接さう言つてみるのも無駄ではないでせう」

「でも、無駄なことなら、あなたがさうお思ひになるなら、わたしももう何も言ひませんわ。――未練がましい事ですもの。」

「さういふ思ひきりも時にとつては必要ですね」

「……どうしてあなたは駄目だとお思ひなさるの」

お八重のこの言葉は明らかに、彼女が自分の未練と戰はうとしてゐる心であつた。赤木はそれを知つた。そうして無理もない事だと思つた。しかし、お八重が假りに今までの生活に非常に執着するにしても、それはもうかうなつた以上、決して北村の受入れないものだといふ事を赤木は疑はなかつた。北村は赤木の前でそれを斷言してゐた。赤木はお八重の執着は、お八重にとつて更に失望を加へるだけであり、北村にとつては徒らに煩はしい感情のやうに思へた。それにつけても赤木はお八重の北村に對する執着と未練との程度を知つて置きたいと思つた。

「あなたは、奥さん」と赤木は言つた。さうして暫く考へてから

「どういふわけで北村との今までのやうな生活をつづけたいと思ふのです」

「どういふわけと言つて、わたし、百合子のことやなど。――それにあの子は弱い子なのですよ。」

「もし百合子ちやんが無かつたとしたら？」

「それや、わたし、今までにも別れた方がずつといいと思つた事もよくあるのですわ。自分ひとりなればねえ」

「それぢや、もし百合子ちやんがゐても今日よりももつと幸福な生活があるとしたら？」

「わたしのやうな馬鹿は、どこへ行つたところで幸福な生活などはありやしません」

「そんな事を言つてはいけない。誰だつてさう自分を自分から投げ出して考へてはいけないのです。不幸な人ほどどこ

あとには幸福が來ると思つた方がいいのです。さういふ風に考へるやうにしないと、ヤケのやうな暮し方になつてしまふ。それにあなたはよく自分で馬鹿だといふが、それは嘘だ。もしほんとうに自分でさう思つてゐるなら、今日からそれはおやめなさい。僕が、あなたは馬鹿でないといふ證人になつて上げるから」

「それぢや、あなたはわたし見たやうな者でも、北村のところでなくつて、どこかにもつと仕合せなところがあるとお思ですか」

「え！」赤木は力を籠めて答へた「それも序に僕が證人になつて上げてもいい！――まあ考へてごらんなさい。たとひ北村と別れてどこへ行つたところが、北村との今までのやうな生活よりはきつともつと幸福でせうよ。今までのやうではあまり、あなたは不幸すぎたのです」

「本當に！何も知らなければこそ、わたしも過せて來たのですわ。本當に何も知らないで！――今になつて思ひ當るんです、山瀬さんでは皆さんで、わたしの事を女の手本だなんてわたしの目の前で讃めて下さるんでせう。わたしは何の事だらうと思つてきまり悪かつたのに、解つてみればなほの事きまりが悪いわ。ね。知らぬは女房ばかりなりでせう？――何も氣のつかない馬鹿が女の手本だなんて」お八重は歎きながら笑つた。彼女は兩方の瞳を各兩方から目頭に集めて、瞬間的に斜視のやうに眼を動かす癖があつた。それが笑ふ時によく現はれた。それが一種飄輕で、そのために彼女の笑ひはいつも快活げであつた。さうしてこの場合、それは五月雨の晴れ間に日が射すやうな美しいものがあつた。――「皆さんは、わたしが何もかも知つてゐて我慢してゐるものと思つてゐらつしやるのでせう。それが何も知らないなんて、恥しいわ、ほんとうにどうしませう」

「知つてゐて我慢をするより、いつそ氣がつかない方が偉えらいかも知れないですよ……」

「知らぬが佛、ですか」

「へ、へ、へ。山瀬さんですつて、誰です山瀬さんといふのは」

「わたしが御針を習ひに行つてゐるうちですの。御存知ありません――旦那は何でも大へん芝居の事に詳しい人ですつて。以前はやつぱり新聞に芝居の評など書いた方ですつて」

「知りませんね。」

「北村は知つてゐましたよ」

「さうですか」

ふつと話が途ぎれてしまつて、彼と彼女とは沈默に陷ちた。

「何時だらう――もう北村が來てもいゝ時刻なのだが。――汽車おくれて來るとすれば」

赤木が言ふと、お八重が答へた。――

「もう來ないでもいゝんです」

「さうはいきません。何にしてもよく話を聞きもし、あなたも言ふのです――さつきから言ふとほりね」

「え。でも、わたしもうどうでもいゝのです。別れた方が、一そさつぱりすると思へて來ましたわ」

「それもさうです。何しろ、北村はあなたのいいところを知らないわけぢやない。それでゐて、却つてそれが氣にならないらしい。おとなしい好い細君ではないかといふと、それや犬や猫が主人に對して音無しいやうなものだ――なんて言ひ出すんだから。さうして自分の我儘も知らないのぢやない。知つてゐて自分の事は仕方がない。惡いのだとすぐに認めるのだから、全く手のつけようもない」

赤木はなるべくお八重をあきらめさせたいと思つた。しかしお八重が北村に決して敵意を持たないやうにといふことも赤木の希望であつた。さうしてお八重の北村に對する未練は、未練といふよりは寧ろ、新らしく起らうとしてゐる變化に對する不安の方が主であるやうに赤木には思へた。さうしてそれが赤木にとつても亦他のすべての人々にとつても好都合に感ぜられた。何故かとならば、彼女がもし新らし生活のなかに必ずしも不安でないものを見つけたならばお八重は早く幸福になることが出來るだらう。見向かうともしない北村に對して、この場合お八重が深い執着を示したとしたならばそれは餘りに氣の毒すぎる。

「よく〳〵氣が合はないのでせう。さう言へばわたしも、北村とは氣が合はないとは思ひますよ。――わたしは北村のところへ來て、仕合せだと思つた日は一日もないのです。安心したと思ふ間もなく、わたしは直ぐに心配しだしたのです、わたしはこんなえらい有名な人のところなどへ來てしまつて間違つたことをしたと氣がついたのです」

「あなたは來る時には、それぢや、北村のところが氣に入つたのではなかつたのですか」

「氣に入るも、入らないもなかつたのですよ。ただもう有難いと思つてゐたのですわ。北村からもお聞きでせうけれど、わたしは前に田舍で藝者に出てゐたことがあつて、世話をしてくれる人が出來てわたしは引かされたのです。間もなくその人が死んでしまつて、わたしは向島にゐる姉に引きとられたのですけれど、さうして姉は自分と一緒にわたしを、もう一度そこから出すつもりでゐたのですよ。わたしは、けれどどうしてももう二度とそんな商賣をする氣はなかつたのです。困つてゐる矢さきに姉が、北村を見つけてくれて嫁に行けといふので、自分のやうなものでも貰つてくれる人があるのかと思つて、相手は誰だつてよかつたのです――二度と藝者に出たりなんかするよりは」

お八重は北村が自分の姉の情人であつた事も氣づいてはゐないらしい。

「北村も、あなたをまるで見もしないで結婚したのは最初から間違ひだつたと言つてゐましたつけ。とにかくあなたにしろ、北村にしろ、見もしないで結婚するなんて、今時にない事ですよ」
「いいえ。さうではありませんわ。北村もわたしも顏だけならよく知つてゐたんです。北村はよく遊びに來たんですよ」
「あなたのところへ？」
「え！　姉のところへです——わたしも、その時分三月か四月ぐらゐ前から姉のところに來てゐたのです」
赤木はちよつと不審に思つた「へえ？　さうか。北村は、顏もまるで見ずに結婚したと言つたやうに思ふが」
「嘘です。わたしにお世辭などもよく言つたのですわ」
「さうか。それぢや僕の聞きちがひかな」
「わたしは顏を見て、北村を別に好きでも嫌ひでもなかつたのです。またえらい人のところへ行きたいとも何とも思ひはしなかつたのです。二度と藝者をする位なら、どこへでも片づきたいと思つたのです」
「あなたは、初めつからそんなに藝者が嫌ひでしたか」
「いいえ。初めはわたし好きでしたわ。面白いと思ひましたよ。でも少し年を取つてわかつて見ると、わたしもう嫌だと思ひましたわ」
「どうして？　急に性に合はなつたの？」
「どうしてでせうね。わたし悄氣てしまつたからでせうよ。その年にはわたしはひどいチブスにかかつてやつと癒つたと思つたら、今度はその人が死んでしまつたのです。北村のところへ來たのは十九で厄年だからと言つたのですけれど、もう前厄で厄おとしをしてゐるから大丈夫だらうと言つたのに、やつぱり厄年だつたのですわ……」

話しながらお八重はだんだんと默つてしまつた。きつとその頃のことを思ひおこしてゐるのであらう。赤木も亦その頃のことを思ひ出してた。

「さう〳〵。あなたが丸髷に結つて、北村が桐の胴丸の火鉢によりかかつてゐる寫眞が、たしか『新文藝』に出たことがありましたね」

「え」お八重は氣のない返事をした。

しかし赤木は、その寫眞をあり〳〵と思ひ出すことが出來た。そのころ突然目ざましい勢で世の中に出現して、文壇の彗星だとはやされまた自ら世に出ようとあせつてゐる文學青年たる赤木の目にも心憎い出現者だと見ざるを得なかつた北村莊一郎の花婿姿を、赤木はつくづくと見たものであつた。未だ世に知られない鬼才をもつて自任した赤木は、既に世に出た北村なる少壯人物の第一人を、心私に競爭者にして、この珍らしい寫眞に對しても彼の面魂を見ることに急なために、その美しい花嫁をも別にさう注意したわけではなかつた。しかし今、その時の北村夫婦の新婚の寫眞が赤木の頭に鮮やかに思ひ浮ぶと、不思議と現實に於ては少しもさういふ感情がないのに、その幻影に對して赤木は妬みに似たものを始めて感ずると同時に、記憶のなかにおぼろに蘇るその寫眞の花嫁が、その當の人が今現に彼の目の前に坐つてゐて彼にかういふ心を起させてゐる事實を、一種奇異に感ずるのであつた。。――さては北村との友情をも。……

「わたし、その頃の事で」お八重が妙に沈んで重々しい口調で言ひ出した「思ひ出すと、わたし、今でも口惜しい事があるのです」

相手の聲の調子のために、赤木は、彼女の語り出さうとしてゐる事を期待する氣持があつた。しかしお八重はそのまま口を閉ぢるらしく見えた。

「……」

赤木は目を上げてお八重を促さうとした。しかし彼の目は彼女の視線には入らかつた。お八重は顔を意外にむけて庭木の梢のあたりを凝乎と、それでゐてさも眩しさうに瞼を皺めてゐた。それは心の焦點のなかで過去を見つめてゐる人の顔であつた。さうして彼女は赤木がこれを促した事には氣づかなかつたけれども、しかし自然と話し出した――やはりあらぬ方を見つめたままで。

「わたしが北村のところへ來てほんの二三日してからの事ですよ。北村がお友達と話をしてゐるのがふと、私の耳へ這つたのですわ――それがわたしの事を言つてゐたのです。をかしい事なのだけれど。……北村はそのお友達に言つてゐるです――世話をした者も當人も、一度業に行つた外には客などをとつた事はないと言つてゐるんだけれど、どうせさういふ商買をしてゐた人間だからね。そんな事は何だかわかるものではないし、第一、こつちにしたつてもともとそんな事を問題にしやしないんだのにつて、北村がそんなことを言ふのを聞いた時、わたしほんとうに嚇となつたほどでしたわ。そんな事を誰が嘘なんど云ふもんですか。ねえ、外の事とは違ふのでせう。身の上を言ふのに、何もかくす事は無いでせう。それでも貰はうと言つてくれればこそこちらからも嫁に行く氣になつたのです。それがどんな身持の女だかわかつたものぢやないなどと言はれて。わたしは口惜しいからよつぽど北村に何とか言つてやらうかとも思つたのですが、もともと立聞きで知つたことではあるし、それにさういはれれば藝者のやうな商賣をしてゐたのですもの、言ひわけをしたつてむかうでさう思ひ込んでしまつてゐるものなら仕方がないと、自分であきらめてはしまいましたけれど。腹の底でそんなことを思はれてゐるかと思ふと、わたしいつまでも口惜しかつたものです」

お八重は視線をかへずに、また表情をかへずに、さう言ひつづけた。思ふことが充分に言へないもどかしさを感じて

ゐるらしい言葉つきであつたが、彼女の一本氣な氣質とそれに世間の狹いうぶな感じとがその盡くされない言葉の間によく現はれてゐるのを、赤木は見た。赤木は了解した。

「それは」と赤木は言つた「あなたとしてはきつと氣持がわるかつたでせう。男といふものは、しかし、時をりには相手の言葉の勢で、心にないことも言ふものですよ。――それに、北村はことにさういふ點が大にありますからね。でも、北村はその時はどうだか知れないけれど、今ではあなたのさういふ點はよくわかつてゐる筈ですよ。――全く、北村は妙な注文をしてゐるんですからね、あなたの擦れてゐないところがつまらないやうなことを言ふのだ。なるほどかうなると、とても誰だつてお雪ちやんにはかなはないからな。ハヽハヽハ」

お八重は笑はうともしなかつた。さうして赤木とお八重とは永い沈默に陷入りさうに見えた時、玄關に人聲がして、それは車夫の聲らしかつた。

「北村が歸つたようですね」

「さうですか」

お八重はやつと今までの視線から瞳をそらした。

北村はもうどつしりした足どりで二階へ上つてきてゐた。

「やあ」

北村はいつもに變らぬ元氣のいい聲をかけながら、いつものやうににつこりと笑つてゐた。いつもより唯少し顏色が蒼かつた。

「お歸りなさいまし」

お八重がさう挨拶をすると、北村はやはり、
「やあ」
と輕くうなづいた。これはいつもとは大變ちがつた動作であつた。いつもならばまるで見向きもしないのである。
お八重は挨拶をするやいなや、すぐに二階から下りて行つた。お八重もいつものとほりとは大して違はなかつたけれどやはりいくらか顏色が蒼ざめてゐたやうであつた。
「どうだ。もうよく話してくれたかね」
北村は少し聲を低くして、赤木に言ひかけた。
「君の意志だけは取ついだつもりだが……」
赤木は言ひながら立つた、――北村が座らうとはせずに立つてゐるからである。
「で結局はどうだ？」
背の低い北村は赤木を見上げて、それから廊下のガラス戸を一枚明け放すと、そこの欄干によりかかつた。赤木もやはり北村と並んでそれに凭りかかつて、
「別れるなら、それも仕方がないぐらゐな氣持になつてゐるやうだがね」
「有難い」と北村が言つた。
「――しかし、僕は何も面倒なことはあまり言ひもしないし、聞きもしないよ。いづれ今に君が來るから君と直接よく話したがいいと言つて置いたからね。そのつもりでよく納得するやうに話すんだね」
「いや、僕は出來るだけ簡單に、結論だけ、ビジネスライクにやるよ。――ほんの二三十分……」

階段へ足音がした。北村はふりかへつて見た。それは女中が着代へるために北村のふだん着を持つて上つて來たのであつた。

「好し、そこらへ置いておけ」

北村は顔を動して女中にさう命じた。女中は座敷の片わきへそれを置いて下りて行つた。赤木は言つた――

「まあ着かへたへたまへ。立つてゐたのでは落ちつかない」

「いや、着換へるのはよさう」北村は言つた「このままで一つ、倚子によりかかりながらテーブルをへだてて、――談判の形式でいかう。うつかり座つて話したりなどしてゐるうちに、泣きくどかれたり取縋られたりしたんぢや、うるさくて仕方がない」

眉をしかめながら北村は笑つてゐた。

「そんなことを言つて君、………」

赤木が言ひかけたところへ、お八重が階段から出て來た。

「あの、御夕飯の用意を………」

「奥さん、僕のはいりませんよ」赤木は言つた「僕はもうすぐ歸りますから」

「あら、どうしてです」

「僕は東京で今晩用があるんです。あまりおそくならないうちに、夕方には行つてゐなけや。――さうだ、君」と赤木は北村に言つた「この次の汽車は何時だい」

「着くのと出るのとは三十分ほど間があるから、もう二十分もすれば出るよ」

「さうか。それぢや僕はそれで行く」
「あら。そんなにお急ぎですか。それぢや、車を呼ばしませうか」
「え〻。どうぞ」
「君」と北村は言つた「いいぢやないか。さう急がなくても。この次のにしたまへ。さうすると、僕も君と一緒に行つてもいいんだから」
「僕は急ぐんだ。それに君はゆつくりして行つたらいいだらう。奥さん、どうぞ車を急いで頼んで下さい」
お八重は默つておりて行つた。
「君」赤木は改めて北村を呼びかけた「さうビジネスライクなどと言はないで、少しは落着いて話すがいい。それが必要だよ、——君はそれでうるさくなくつていいかも知れない。でも、お八重の氣持にもなつてやりたまへ、言ひたい事も一晩ぐらゐはあるだらうよ。今晩は一つとまつて行くんだね」
「フ、フ、」北村は煙草の煙をはき出す序に無意味に笑つてから「それこそ眞平だよ。——で、君は今夜どこへ行くんいだ。美代子のところかい」
「うん。」
「まだ行かないのか」
「いいや、ゆうべはただ當人とだけしか話さないのだ。今晩は行つて家族たちによく言ふ筈だ。大儀なのだよ——それか」
「それでは明日また、君はここへ來てくれるかね」

「用があるかい」
「いや、僕には用もないが、お八重がきつと君と何か相談したいだらうよ」
「さうして君も來るかい」
「僕は、……來られたら來る。來ないかも知れない。――君ひとりではいやかい。いやなことはないだらう」
北村はさう言つてにやく〳〵と笑ひ出した。赤木はしかし眞面目な顏つきで言つた。
「それや厭ではない。それに僕は今のところどこと行つて自分のゐどころもないのだし。――それぢや、ともかくも明日またここへ來る。さうして今ごろ東京へ歸るとしよう。――麻布へ行つて弟たちにも、久しぶりで逢ふつもりだ。さうして、國へも一度早くかへらなけや……」
赤木は直ぐにおりて行つてお八重を搜した。お八重は茶の間にゐた。ぼんやり火鉢のそばにゐた。赤木を見ると彼女は立つて來た。赤木は言つた。
「では、僕はまた明日も來て見ます。ともかくも今日は、よく北村君と相談をすることです。」
「え。――でも、それが出來るかどうか心細いんです」
お八重は訴へるがごとく赤木を見上げた。赤木はそれを見棄てて玄關へ出た。北村も二階から見おくりに來た。
「ぢや、明日、なるべく君も來たまへ。何ならなるべくこのまま明日までここにゐるにするんだね」
「……」北村は笑つて答へなかつたが「ともかくも、明日會はうよ。都合では僕が麻布へ君に會ひに行から」

（以下次號）

編輯後記

◇編輯局でも上衣や靴下までが邪魔ものになるこの頃の蒸しあつさではトタン工場下の連中のあえぎが一入であらう。

◇内閣改造に於ける若槻は鈍刀無比、床次にはふられ、辛ふじて研究會の雑魚一尾を獲たり。結局彼は事務家にして政治家に非ずの金箔をつけたゝの、待合と、藝妓の好きなことは歴代宰相中桂と伯仲の間にある、此人が綱紀肅正の張本人もすさまじい、

◇現内閣の一枚看板は濱口の大藏であつた。普選と並んで人氣もので緊縮政策であつた。そして必要品であつたものを——若槻がこの看板の重要さ有價値さを省察せずして内務を重要視するあたり舊式政治家であるとの估券をいよいよ確實にした。

◇仙石の退却は狡猾至極、加藤が死んで、三菱が選擧費を出さぬのを見越して遁出すなぞは卑怯千萬。

◇社會科學研究に對する岡田文相の猛烈なる壓迫に對する全國學生の憤怒はたいしたもの、一文相と全學生との取組なかなか興趣深し、憲政會内閣は一岡田を有することによつて全國青年の正敵化するに至つた。かうなつては折角の普選も臺なしである。

◇本月より實施さるるであらう「青少年訓練」はへたをやると我國の產業界に重大なる影響を齎すであらうことを恐れる。先覺者、當局の最關心事。

◇鳩山時代より三木時代へ——三木も案外深みのない男だから槿花一朝の夢が待ちかまへておるだらう、是公の退却振りのみが久かたぶりに名を成した。

◇七月五日愈々「現代支那號」を出す。清朝以前の軍閥支那、帝國主義的支那は我國人も一通り知悉しているが、民國支那に就ては毫も知識がない。その思想といひ、戯曲といひ、小說といひ、時文といひ、勞働運動、現代支那の哲學、文學といひ全然の無知識といつてよい日支は脣齒輔車とか何とかいひながら支那大衆の有する總ての生活、思想に知識もなく、理解もなく空世辭ばかりでどうして日支の融合が出來やう。外務省には對支文化事業があり、民間にもそれ相應表面だけ儀禮振る幾多の會がある、數へるに煩はしいほどいくつかの團體が存在している、しかしこれ等の機關でどんな働きをしている。

◇張作霖吳佩孚が提携したとか、段祺瑞が下野したとか——そんなかげろう見たやうな武者人形がどうする。我々は文化支那の擡頭に注視し、ヤング支那の正當に進むべき大處に着想しなければならない。「現代支那號」はその要求に應じたものである。

◇この一册の通讀によりて現代支那を相當に理解することの出來るやうに意義深く編輯した。論壇、文壇、總てに亙つて彼國の一流を拉致している。全く他雜誌の斷じて追隨を許さぬ所である。加之、在支外人記者の執筆は支那の新形勢を偶らず看取できるであらう有意義の文獻である。

◇また附錄として我一流の創作を集めた。幸田、直谷氏等の如き第一流の我支那學者がその專門的知識を傾けられたものと兩々相俟つて近時雜誌界の驚異でなければならぬ。

◇殊にピリニアヤーク氏が本邦で執筆した唯一の政治小說『蒙古の太陽』は規模雄大な近來稀に見るの小說で、支那號中で尤も太きく光つておる。

◇『改造』の『現代支那號』に對抗して相對峙して相下らさる好企劃は『社會科學』の『日本經濟史硏究』である。本書は各時代を專門に硏究せる斯界の權威に囑して、そして尤も新らしい見方の出來る學者に囑しての硏究であるがために、經濟史を硏究する學徒は勿論、日本歷史を硏究する人々も、一本を必ず備ふべきであらうと思はれる。古くさい黴の生えた經濟史を淘汰するであらうこの一書を誰が輕蔑できる。

◇鑛山君の英國罷業通信は七月號締切迄に未到着であつた。八月號には當然登載が出來るだらう。

◇今後優れた映畫脚本を創作欄に入れることになつた。本誌は此方面に新しく開拓し、貢獻したい考へを有つておる。岸田國士君が第一回の選に這入つた譯である。此種物が從來の戲曲、小說に對し、將來いかなる地位に居るかは刮目す可きである。

◇我國の勞働記錄として世界的である「女工哀史」「工場」「奴隷」の著者細井君は一面勞働詩人であり、眞のプロレタリア作家であつた。今回氏が遺稿として館氏に藏せられていた創作、戲曲、隨筆集「無限の鐘」が本社より出版される。

◇約一年に近く其筋の檢閲に引つかかつていた「唯物史觀」は愈々發賣を許されました。世界的名著として世界を震駭せし一書だけに、此書の發賣により我思想界にも劃期的反響を喚起するであらう。この書のことで長い間讀者諸君に御迷惑をかけたことを陳謝する。

◇本社は六月十五日再び從前の通り芝愛宕下一ノ一に移轉す。(電話銀座四五五八番)

七月五日に夏期臨時號『現代支那號』を發刊します。(定價壹圓五拾錢送料四錢)

改造定價

册數	定價	郵稅
壹册	八拾錢	貳錢
半ヶ年	五圓六拾錢	當分大連片郵稅不用
壹ヶ年	拾壹圓廿錢	當分大連片郵稅不用

大正拾五年六月十八日 印刷納本
大正拾五年七月一日 發行

(價九拾錢)

編輯兼發行兼印刷人 東京市芝區愛宕下町一ノ一 山本三生
印刷所 東京市芝區愛宕下町一ノ一(?) 秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下一ノ一 改造社
振替東京八四〇二
電話銀座四五五八

『現代支那號』附錄創作

見よ！支那號の偉觀！

本誌の七月五日發行する臨時增刊「現代支那號」が堂々たる偉觀を以つて讀者に相見ゆることは本誌の折込附錄に示す如くである。尙ほ創作欄には特別附錄として左の六篇を登載することとなりたれば錦上更に巨花を添へたものである。

谷崎潤一郎
武林無想庵
長與善郎
里見弴
犬養健
佐藤春夫
久米正雄
菊池寛

◇また附錄として我一流の創作を集めた。幸田、澀谷氏等の如き第一流の我支那學者がその專門的知識を傾けられたものと兩々相俟つて近時雜誌界の驚異でなければならぬ。

◇殊にピリニアヤーク氏が本邦で執筆した唯一の政治小說『蒙古の太陽』は規模雄大な近來稀に見るの小說で、支那號中で尤も太きく光つてゐる。

◇『改造』の『現代支那號』に對抗して相對峙して相下らさる好余剰は『社會科學』の『日本經濟史研究』である。本書は各時代を專門に研究せる斯界の權威に囑して、そして尤も新らしい見方の出來る學者に囑しての研究であるがために、經濟史を研究する學徒は勿論、日本經濟史を研究する人々も、一本を必ず備ふべきであらうと思はれる。古くさい黴の生えた經濟史を淘汰するであらうこの一書を誰が輕蔑できる。

◇細山君の英國罷業通信は七月號締切迄に未到着であつた。八月號には當然登載が出來るだらう。

◇今後優れた戯曲脚本を創作欄に入れることになつた。本誌は此方面に新しく開拓し、貢獻したい考へを有つてゐる。岸田國士君が第一回の選に這入つた譯である。此傾向が從來の戯曲、小說に對し、將來いかなる地位に居るかは刮目すべきである。

◇我國の勞働記錄として世界的である「女工哀史」「工場」「奴隷」の著者細井君は一面勞働詩人であり、眞のプロレタリア作家であつた。今回氏が遺稿として篋底に藏せられていた創作、戯曲、隨筆集「無限の鐘」が本社より出版される。

◇約一年に近く當局の檢閲に引つかかつていた「唯物史觀」は愈發賣を許されました。世界的名著として世界を震駭せし一書だけに、此書の發賣によりて我思想界にも劃期的反響を喚起するであろう。この書のことで長い間讀者諸君に御迷惑をかけたことを謹謝する。

◇本社は六月十五日再び從前の通り芝愛宕下一ノ一に移轉す。(電話銀座四五五八番)

冊數	定價	郵稅
壹冊	八拾錢	貳錢
半ヶ年	五圓六拾錢	當分大震災中郵稅不用
壹ヶ年	拾壹圓廿錢	當分大震災中郵稅不用

改造定價

七月五日に夏期臨時號『現代支那號』を發刊します。(定價壹圓五拾錢送料四錢)

大正拾五年六月十八日印刷納本
大正拾五年七月一日發行
(價九拾錢)
東京市芝區愛宕下町一ノ一
編輯兼發行人　山本三生
東京牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舍
東京芝區愛宕下一ノ一
發行所　改造社
振替東京八四〇二
電話銀座四五五八

現代支那號附錄創作

見よ！支那號の偉觀！

本誌の七月五日發行する臨時增刊「現代支那號」が堂々たる偉觀を以つて讀者に相見ゆることは本誌の折込附錄に示す如くである。尙ほ創作欄には特別附錄として左の六篇を登載することとなりたれば錦上更に巨花を添へたものである。

谷崎潤一郎
武林無想庵
長與善郎
里見弴
犬養健
佐藤春夫
久米正雄
菊池寛

自然科學

第二號出來

第二號

（定價壹圓送料十二錢）

創刊號

（定價壹圓三十錢送料十二錢）

改造社發行

末弘嚴太郎著

法窓閑話

（四六判）

定價貳圓五拾錢
送料二十二錢

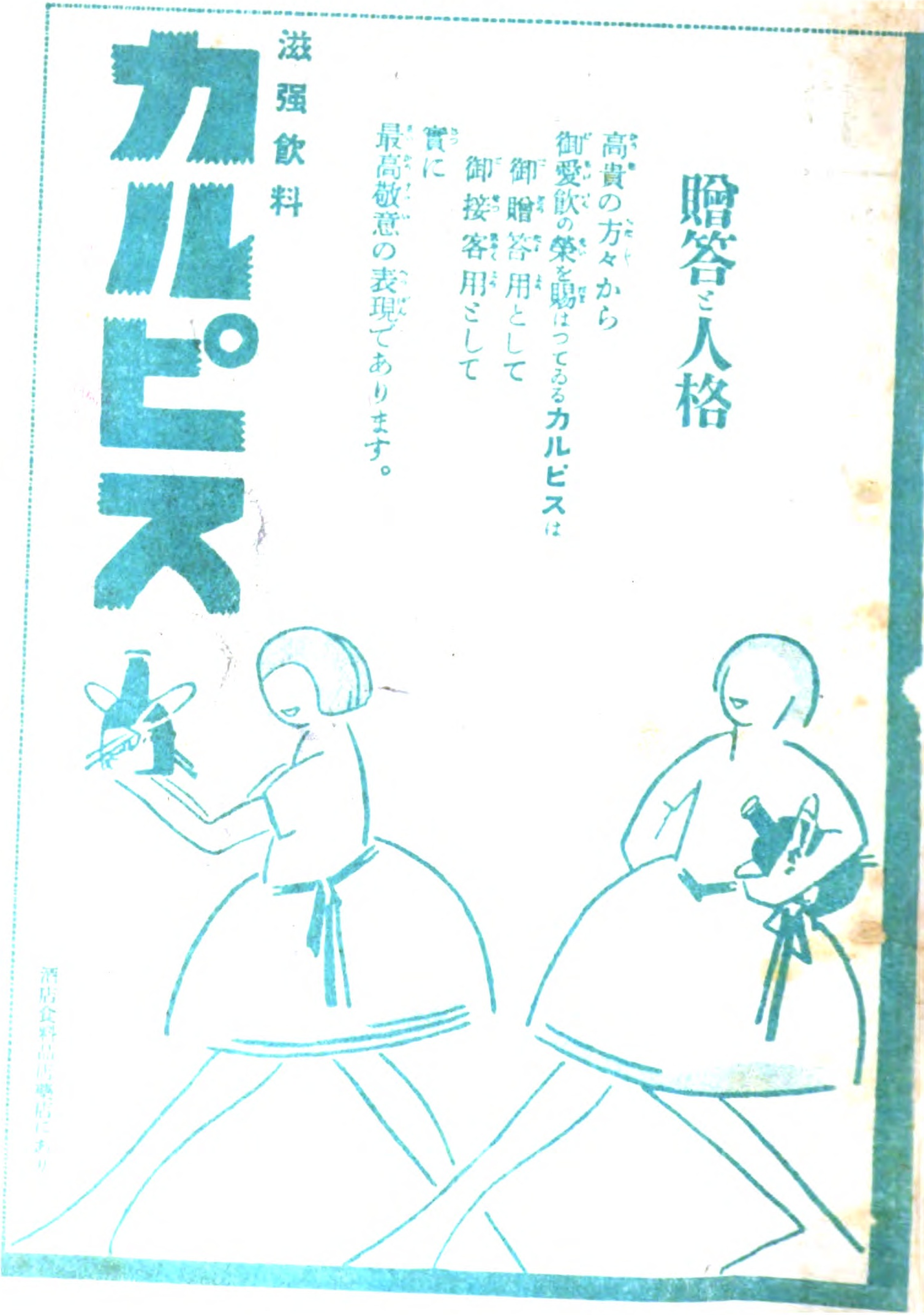
廿二版

新らしき法學の權威末弘氏の快著。「法律は民衆自らのものである」との基本思想の下に、自由法論法律社會化論の立場に據つて該博な蘊蓄を傾けたもの。法律に對し民衆がいかなる態度であらねばならぬか、法の前には平等であらねばならぬ筈の民衆が果して、そうであるかを考察して、我等が國家として、社會人として、生存して行くに必要である法律思想の原則、形式、運用に對し誰にも解かるやうに說いたもの。「普選」が實施されて法律思想に向つても革新的の刺戟を要求して居る時、本書の公刊は時宜を得たものである。本書は著者の獨創的法律思想に成る、理は深遠に及んでいるが語の平易なるため萬人均しく理解し得べく、そして著者の氣魄と、行文の流暢には多大の趣味を覺ゆ。法治國民の必讀すべき國民讀本である。

末弘嚴太郎著
噓の効用
四十二版
定價二圓六十錢
送料二十二錢

末弘嚴太郎著
農村法律問題
二十一版
定價二圓五十錢
送料二十二錢

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二


贈答と人格
高貴の方々から
御愛飲の榮を賜はつてゐるカルピスは
御贈答用として
御接客用として
實に
最高敬意の表現であります。
滋強飲料
カルピス
酒店食料品店藥店にあり

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY, TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO.



株式會社秀英舍印刷